

茨城県教育財団文化財調査報告 XVI

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 4

宮部遺跡  
鹿の子A遺跡  
砂川遺跡

昭和 57 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告 XVI

# 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 4

財団法人 茨城県教育財団

## 序

茨城県の大動脈として大きな役割を果たすことが期待される常磐自動車道の建設は、日本道路公団により進められておりますが、その予定地内に存在する埋蔵文化財については、昭和53年度より財団法人茨城県教育財団が日本道路公団より委託をうけて発掘調査を実施しております。本年度までに、22か所の遺跡について発掘調査を終了し、すでにその調査結果の一部は報告書の刊行がなされております。

この度、昭和54年度に実施しました石岡市の宮部遺跡・鹿の子A遺跡、昭和55年度に実施しました水戸市の砂川遺跡の調査結果に関する報告書を刊行するはこびになりました。これらの資料は、郷土の原始文化を究明するにあたって貴重な資料であると考えます。その意味からも、本書がより多くの方々にご活用いただけるよう希望いたします。

なお、調査・整理にあたりまして、茨城県教育委員会、石岡市教育委員会、水戸市教育委員会をはじめ関係機関および関係者各位の御協力と御指導に対し、心から感謝を申し上げます。

昭和57年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 大 金 新 一

# 例 言

1. 本書は、日本道路公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和54・55年度に実施した石岡市の宮部・鹿の子A遺跡、水戸市の砂川遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、当教育財団調査課が実施したもので、昭和54年度は調査第3班が、昭和55年度は企画管理班が担当した。3遺跡の調査に関する組織は次のとおりである。

理事長	竹内 藤男(茨城県知事 昭和52.4～56.11) 大金 新一(昭和56.12～)
副理事長	古橋 靖(茨城県教育長 昭和54.6～)
常務理事	川野辺四郎(昭和52.4～)
事務局長	入内 秀夫(昭和52.4～55.3) 小林 義久(昭和55.4～)
調査課長	川俣吉之助(昭和52.4～55.3) 大塚 博(昭和55.4～56.3) 寺内 寛(昭和56.4～)
企画管理班	坪 秀雄(昭和54.4～企画管理班長、昭和55.4～常磐道班長兼任) 鈴木 三郎(昭和52.4～) 海野 孝志(昭和53.4～56.3) 綿引 良人(昭和56.4～)
調査及び整理	高根 信和(昭和54年度調査第3班班長 宮部・鹿の子A遺跡調査) 中村 幸雄(昭和54年度 宮部・鹿の子A遺跡調査) 山本 静男(昭和54年度 宮部・鹿の子A遺跡調査) 佐藤 正好(昭和54年度 宮部・鹿の子A遺跡調査、昭和56年度 宮部遺跡整理執筆) 倉本富美男(昭和55年度 砂川遺跡調査) 渡辺 俊夫(昭和55年度 砂川遺跡調査、昭和56年度 鹿の子A・砂川遺跡整理執筆)
補助員	仙波 亨(昭和54年度 宮部・鹿の子A遺跡調査)

3. 出土遺物(石器)の石材の鑑定は、茨城県立教育研修センター蜂須紀夫先生の御指導を得た。
4. 本文中および挿図に使用した記号は、下記の通りである。  
SI-住居跡, SK-土壇, SD-溝状遺構, SE-井戸状遺構, SX-埋設土器
5. 本書における土層は、「新版標準土色帖」(農林省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修)を用いて色相を表した。
6. 本書は、発掘担当者の協力を得て、宮部遺跡を佐藤正好、鹿の子A・砂川遺跡を渡辺俊夫が執筆・編集を担当した。
7. 発掘調査、出土遺物の整理等に際して御指導・御協力を賜った関係諸機関に対し、感謝の意を表したい。

# 目 次

序	
例 言	
目 次	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	3
1 宮部遺跡	3
2 鹿の子A遺跡	3
3 砂川遺跡	4
第2章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
1 宮部遺跡・鹿の子A遺跡	6
2 砂川遺跡	6
第2節 歴史的環境	7
1 宮部遺跡・鹿の子A遺跡	7
2 砂川遺跡	9
第3章 宮部遺跡	12
第1節 遺構と遺物	12
1 遺 構	12
(1) 竪穴住居跡	14
(2) 土 壙	15
(3) 土壙のまとめ	22
2 出土遺物	23
(1) 縄文土器	24
(2) 土師質土器	24

(3) 石    器 .....	25
(4) ま    と    め .....	32
第4章 鹿の子A遺跡 .....	34
第1節 遺構と遺物 .....	34
1   竪穴住居跡 .....	34
第2節 ま    と    め .....	110
第5章 砂川遺跡 .....	113
第1節 遺構と遺物 .....	113
1   縄文時代 .....	115
(1) 竪穴住居跡 .....	115
(2) 土    壙 .....	164
(3) 埋設土器 .....	291
2   歴史時代 .....	312
(1) 竪穴住居跡 .....	312
(2) 井戸状遺構 .....	357
(3) 溝状遺構 .....	360
第2節 ま    と    め .....	363
1   縄文時代 .....	363
(1) 竪穴住居跡 .....	363
(2) 土    壙 .....	365
(3) 埋設土器 .....	368
2   歴史時代 .....	370
(1) 竪穴住居跡 .....	370

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経過

日本経済の発展に伴い、都心と東北地方を結ぶ常磐自動車道路の建設が昭和40年代に計画され、同時に埋蔵文化財の分布調査が茨城県教育委員会及び日本道路公団によって実施された。

昭和52年度に入り、茨城県教育委員会は文化財保護の立場から、埋蔵文化財の取り扱いについて日本道路公団と協議を重ねた結果、現状保存が困難なので記録保存の措置を講ずることに決定した。

茨城県教育財団は、昭和53年4月1日付けで日本道路公団と埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同年5月筑波郡谷和原村東櫛戸古墳の発掘調査を開始し、新治郡桜村・千代田村・石岡市・西茨城郡岩間町・東茨城郡内原町・水戸市へとルートを北上し、本年度までに22遺跡の発掘調査を終了し、3冊の報告書(常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)が刊行されている。

宮部・鹿の子A遺跡は昭和55年1月10日から3月31日、砂川遺跡は昭和55年9月1日から昭和56年3月31日までの期間で発掘調査を実施した。昭和53年以降に調査した遺跡は下記の通りである。

整理No	遺跡名	種類	時代	発掘年度	整理No	遺跡名	種類	時代	発掘年度
1	東櫛戸古墳	古墳	古墳	昭和53年	12	松延古墳群(2基)	古墳	古墳	昭和54年
2	下広岡遺跡	集落跡	縄文・古墳	昭和53・54年	13	志筑遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳	昭和53・54年
3	上稲吉西原古墳	古墳	古墳	昭和53年	14	宮部遺跡	集落跡	縄文・中世	昭和54年
4	上稲吉西原A	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	15	鹿の子A遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54年
5	上稲吉西原B	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	16	鹿の子C遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54・55・56年
6	上稲吉西原C	包蔵地	歴史	昭和53年	17	塚原古墳群(2基)	古墳	古墳	昭和54年
7	中佐谷十百遺跡	包蔵地	歴史	昭和53年	18	湿気遺跡	集落跡	古墳・近世	昭和54年
8	中佐谷殿内遺跡	包蔵地	歴史	昭和55年	19	大塚新地遺跡	集落跡	弥生・古墳・歴史	昭和54・55年
9	中佐谷A遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	20	松原遺跡	集落跡	弥生・古墳・歴史	昭和54年
10	中佐谷B遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	21	南原古墳群(2基)	塚・集落跡	奈良・平安・中世以降	昭和54年
11	大塚古墳群(15基)	古墳	古墳	昭和53・54年	22	砂川遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	昭和55年





## 第2節 調査の経過

### 1. 宮部遺跡

宮部遺跡は、昭和55年1月10日から3月21日迄発掘調査を実施した。調査面積は、1200 m<sup>2</sup>である。

遺跡の調査区設定については、調査対象区域内の日本道路公団杭(STA-22)を基準として定め、磁北線上にX軸、東西にY軸の40m四方の大調査区を設定し、さらに、大調査区内を4m四方の小調査区に分割した。40m四方の大調査区内に100個の小調査区が分割されるわけである。グリッドの名称は、大調査区において、北から南へ大文字のアルファベットで、A・B・C……、西から東へ数字で、1・2・3……と表現し、小調査区は、北から南へa・b……i・jまでの小文字のアルファベット、西から東へ1・2……9・0の数字で表現する。したがって、小調査区の固有名称は、A1a1・B1b1のように表される。

以下宮部遺跡の調査経過を月毎に記載する。

1 月 調査対称面積、1200 m<sup>2</sup>内に調査区を設定し、A2区より調査を進めるが、本遺跡は、地形的な状況・耕作等により、土層の堆積状況が顕著に認められず、腐植土の堆積も認められない。表土下20～30cmでハードローム層になる。しかし遺跡西側傾斜地においては、若干、堆積が認められる。

2 月 遺構確認調査により、A2・B2区において、竪穴住居・土壇等が確認され、遺構調査・遺構精査を実施する。調査区西側、B2区のa1・b1・c1・d1・a2・b2・c2・d2区調査により、石器・剥片等の出土が確認され、さらに、B2区のa3・b3・c3・d3・a4・b4・c4・d4区を拡張し、精査を実施し、遺物出土範囲の確認をする。B2区のa8区において、地層堆積状況確認をする。

3 月 遺構(竪穴住居跡・土壇等)の実測・写真撮影を実施し、石器出土に伴って、さらにB2区のb7・c7・b8・c8・d8区を拡張し、調査を進める。

6・7日、小田静夫氏(東京都教育庁文化課)を招聘し、現地指導を受ける。

石器・剥片類は、3種類の石質からなるもの数百点が検出され、遺物出土状況の実測・写真撮影を実施し、全体測量・写真撮影を並行して進め、3月21日をもって終了した。

### 2. 鹿の子A遺跡

鹿の子A遺跡の調査対象面積は3,980 m<sup>2</sup>で、現況は畑地及び梨畑である。遺跡の周囲は、新しい家屋が建ち並び、新興住宅地として発展している。

地区設定基準杭は常磐自動車道のセンター杭(30+80)を起点に調査区を磁北線にそって設定

する。また、大調査区、小調査区の設定方法は宮部遺跡と同様である。

以下、各調査員の日記によって調査経過を記述する。

昭和55年1月10日～2月10日 1月10日より現場作業を開始し、遺跡内の清掃作業及び小調査区設定のための杭打ち作業を行うと共に、遺構確認のための表土除去作業を同時並行して実施する。その結果、遺構は遺跡全区域に分布し、特にB2区に集中していることが確認された。また、出土遺物は土師式土器・須恵器が多いことが確認された。遺構確認調査終了後、ただちに、遺跡の北側A2・B2区より拡張作業を実施し、住居跡状遺構を36軒検出し、特にB2区の遺構は重複関係がはげしく、また、いずれの住居跡状遺構も小規模なものであることが判明した。

1月20日より第1～10号住居跡の精査を開始する。いずれの住居跡も歴史時代のものであることを確認し、規模は6号住居跡を除いて、3m前後の小規模な住居跡であり、深さ40～50cmであった。また、遺構調査と併せて、実測図作成、写真撮影などを実施する。

2月11日～3月1日 C2・C3区より検出されている住居跡26軒の精査を実施し、構築された時期は前述した住居跡とほぼ同時期の遺構であるが、竈を付設しない遺構が4軒ほど確認された。また、出土遺物は土師器及び須恵器が主である。

3月2日～3月20日 精査を終了した住居跡の実測図、及び写真撮影などと並行して、住居跡に付設されている竈の精査を実施する。

3月20日に調査器材等の整備を行い、鹿の子A遺跡の発掘調査を終了する。

### 3. 砂川遺跡

砂川遺跡の発掘調査は、昭和55年9月1日から翌年3月31日までの予定で現場作業を開始し、調査対象面積は9,000m<sup>2</sup>である。調査区設定基準杭は地図上の真北座標軸、X軸(南北)47,944km・Y軸(東西)55,550kmの交点を起点として設定する。また調査区設定方法は宮部遺跡と同様である。

以下、各調査員の日記によって、調査経過を記していきたい。

昭和56年9月1日～10月22日 9月1日より砂川遺跡現場において、砂川遺跡発掘調査開所式を実施した後、器材、プレハブ等の搬入、整備などを行う。また、本遺跡は当教育財団で重機導入による発掘調査を最初に試みる遺跡であるため、遺構確認調査以前に、トレンチ法による遺物包含層および遺構確認面までの深さの測定、遺物・遺構の密度の状態などを調査する。試掘の結果、遺物包含層及び、遺構確認面までの深さは60～70cmの深さで、遺物・遺構の分布が濃い地区は、A3・A4・B2・B3・B4・C3区に集中していることが確認された。

10月6日より重機による表土排除作業を開始し、22日をもって全調査区内の表土排除作業を終了する。また、作業員による遺構確認調査を並行して実施し、縄文時代の住居跡及び、土壌が多数、その他、歴史時代の遺構も確認された。出土遺物は縄文土器が大半を占め、その他、土師

器・須恵器などが出土している。

10月23日～12月24日 23日より遺構精査を開始する。精査は遺構分布のうすい遺跡の西B2・C1・C2・C3区の住居跡1～25号及び、土壌1～105号までの精査を実施した結果、縄文時代中期末から後期初頭にかけての住居跡・土壌と、歴史時代の住居跡であることが判明した。縄文時代の住居跡の平面形は、円形及び楕円形状を呈し、炉跡の種類は2種類ある事が明らかになった。また土壌の断面形は円筒状のものが多く、一部袋状を呈する土壌もある。いずれの遺構も精査終了後、同時並行して実測図作成及び、写真撮影などを行う。12月下旬より現場作業を一時中断するため、器材等の点検、整備などを実施する。

昭和57年1月7日～2月10日 1月7日より器材等の諸準備を行い、発掘調査を再開したが、厳寒期に入り、降雪や霜柱等の影響が大きく、調査の進行にかなりの支障をきたした。発掘調査は前月に引き続き、第18・22・24・25号住居跡の石組炉の精査及び、実測図作成、写真撮影の作業と、新たに第26～34号住居跡、第106～168号土壌の遺構内精査を進める。また並行して第1～16号埋設土器の調査を実施し、1基を除いて全て斜めに埋設され、3号埋設土器は2個の土器を利用して埋められている。

2月12日～3月27日 本遺跡の発掘調査も残すところ約1か月になったため、確認されている遺構の全面調査を目標に全員精力的に働く。この期間はA3・A4・B3・B4区に確認されている住居跡9軒・土壌76基・溝2条・井戸1基の精査及び、実測図作成・写真撮影を実施する。また、同時並行して歴史時代の住居跡に付設されていた竈の調査を行う。

3月27日をもって、本遺跡の発掘調査を終了する。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

#### 1. 宮部遺跡・鹿の子A遺跡

宮部遺跡は、石岡市宮部7751の4番地他に所在する。調査以前の地目は、畑地、山林であり、一部は農道として削平された所もある。

本遺跡は、石岡市の西部に位置し、筑波山の東側に広がる新治台地を南下する恋瀬川、園部川にはさまれた沖積低地の北側、石岡台地上に位置する。

宮部遺跡は、南下して霞ヶ浦に注ぐ恋瀬川の東、標高29mを測る痩せ尾根上に位置し、尾根上は平坦面が少なく馬背状を呈す。このため、尾根上には、腐植土の堆積は認められない。

本遺跡の台地を形成している地層は、耕作土(30cm)、ソフトローム層(尾根上で部分的に10数cm程の堆積がみられるが、大部分は耕作等により認められない)、ハードローム層(ハードローム層も全体に粘性がなくごろごろしている)であるが、ハードローム層内に認められる黒色バンドは、宮部遺跡を形成する台地には認められず、若干、鹿沼パミス層が認められる程度であり、確認された鹿沼パミス層も、遺跡の形成されている台地斜面に、若干みられる程度である。

鹿の子A遺跡は、石岡市鹿ノ子1丁目9309番地ほかに所在し、調査以前の地目は畑地(梨畑)であり、調査対象面積は、3980 $\text{m}^2$ である。

本遺跡は、宮部遺跡の東700m、県道石岡・下館線の西側に位置し、標高25～26mの平坦部に形成されている。

鹿の子A遺跡の所在する石岡台地は、宮部遺跡周辺の複雑な地形とは違い比較的単純な汀線を示し、樹枝状谷の発達も少なく、なだらかな傾斜を持って沖積地へ移行している。

本遺跡の台地を形成している地層は、黒色土が厚く、ソフトローム層の堆積は若干認められる程度であり、ハードローム層へと移行する。

#### 2. 砂川遺跡

砂川遺跡は、茨城県水戸市田谷町山王上2185番地外16筆に所在する。

本遺跡の所在する水戸市は、県庁所在地であり、県の政治、経済、文化の中心をなし、関東平野の北東部、茨城県の中央部より北東側に位置している。水戸市の地形は、市の北西部の鶏足山塊の外縁部をなす丘陵地区、久慈川と那珂川の下流に挟まれた那珂台地の一部、東茨城台地の北東部をなす水戸台地と呼ばれる洪積台地地区、水戸市の北西から南東へ流れる那珂川とその支流の桜川の支谷によって形成される沖積低地地区の三つの地域に区分される。また、水戸市街地は

那珂川と桜川に囲まれた標高 40 m の上市台地と、那珂川の氾濫原、標高 10 m 内外の下水低地に細長く形成されている。

砂川遺跡の調査対象区域は、9,000m<sup>2</sup>の面積を有し、那珂川の左岸、標高 33～34 m の平坦な那珂川台地南西側縁部に位置し、沖積低地との比高は約 20 m を測る。

遺跡の西側には那珂川が流れ、両岸とも那珂川の氾濫によって形成された標高 14 m 程の沖積低地が幅 1～2 km にわたって広がり、沖積低地の多くは水田地帯となり、県道水戸・下江戸線に沿って田谷町の集落が形成され、また対岸には標高 37 m ほどのやや平坦な水戸台地がみられる。東側には溝程度の小川である小さな砂川が流れ、この川を境にして那珂町に接している。また、砂川遺跡周辺の台地上は黒色土の肥沃な土が 70～80 cm ほど堆積し、畑地として土地利用がなされている。

## 第2節 歴史的環境

### 1. 宮部遺跡・鹿の子A遺跡

宮部遺跡・鹿の子A遺跡の所在する石岡市は、恋瀬川・山王川・園部川を中心として、先土器縄文・弥生・古墳時代の遺跡が数多くみられる。奈良時代以降は、常陸国の国府として栄え、国衙跡・国分僧寺跡・国分尼寺跡が所在する。また、貝地・田島には、茨城郡衙跡と推定される古館、茨城郡の郡寺として推定される茨城廃寺跡も存在し、昭和 55・56 年度に調査が実施され全貌が明らかになりつつある。

現在、石岡市内で確認されている遺跡数は 171 遺跡であり、調査を実施した宮部・鹿の子A遺跡の周辺遺跡を述べてみたい。

先土器時代の遺跡は、宮平遺跡(6)、正月平遺跡が確認されているが、いずれもまとまった資料とはなっていないが、今後本格的な遺跡調査・研究が押し進められるものと思われる。

縄文時代の遺跡は、石岡市内で、39 遺跡が確認されており、草創期より後期にわたっての遺跡が存在するが、晩期の遺跡は、確認されていない。

草創期の遺跡は、本遺跡(宮部遺跡)より検出されたにすぎない。

早期の資料は、破片が多く、明確な遺構に伴う例は、きわめて少なく、該期の資料を出土する遺跡は、染谷遺跡(9)、高根貝塚(11)、餓鬼塚遺跡(12)、三村地藏窪遺跡(40)から土器が出土しており、これらの遺跡は、いずれも丘陵・台地の先端部に形成されている。

前期の遺跡は、宮部遺跡から黒浜期の住居跡が検出されているだけである。他の該期の遺跡は 8 か所で確認されているに過ぎず、調査は実施されていない。

中期の遺跡は、遺跡数が急増し、阿玉台式期、加曾利E式期を中心としてかなりみられ、東大



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	碁石沢遺跡	縄文(中)	16	北ノ谷遺跡	縄文(前)・土師・須恵	31	兵崎遺跡	縄文(前)・歴史
2	村上遺跡	土師・須恵	17	常陸国分尼寺跡	歴史	32	茨城廃寺跡	歴史
3	根当西遺跡	縄文(前)	18	常陸国分僧寺跡	歴史	33	舟塚山古墳	古墳
4	正上内遺跡	縄文(前)	19	元真地遺跡	縄文(中)	34	愛宕山古墳	古墳
5	柏原西遺跡	縄文	20	国府跡	歴史	35	外山遺跡	縄文(前)・弥生・古墳
6	宮平遺跡	先土器・縄文(中・後)	21	泉台遺跡	土師・須恵	36	ぜんぶ塚古墳	古墳
7	波付岩遺跡	縄文(中)	22	行里川遺跡	縄文(前)	37	東田中貝塚	縄文
8	染谷古墳群	古墳	23	根小屋遺跡	縄文(中)	38	関戸遺跡	縄文・弥生
9	染谷遺跡	縄文(早)	24	上人塚遺跡	縄文(前)	39	地蔵平遺跡	縄文
10	狐塚遺跡	縄文(前)・土師・須恵	25	東大橋原遺跡	縄文(中)	40	三村地藏窪貝塚	縄文(早)
11	高根貝塚	縄文(早)	26	下坪遺跡	土師・須恵	41	正月平遺跡	先土器・縄文(中・後)
12	飯鬼塚遺跡	縄文(早)	27	新池台遺跡	縄文(前)	42	下宮遺跡	縄文(後)
13	宮部遺跡	縄文(草創・早・前)	28	大谷津A遺跡	縄文(前)	43	御前山遺跡	縄文(中・後)
14	鹿の子A遺跡	歴史	29	大谷津B遺跡	縄文(前)	44	海老坪遺跡	縄文(中・後)
15	鹿の子C遺跡	歴史	30	対馬塚遺跡	縄文(前)	45	富士台遺跡	縄文・弥生・土師
						46	古館遺跡	歴史

第2図 石岡市内遺跡位置図および遺跡名一覧表

橋原遺跡(25)からは、集落跡が調査され、良好な資料が検出された。

後期の資料は、市内で5か所確認されているだけで未調査である。晩期にいたっては、いまだ遺跡は検出されていない。

弥生時代に入ると遺跡数は減少し、確認されている遺跡は、3か所であり、外山遺跡(35)は調査において良好な資料が検出された。今後、さらに遺跡が確認される可能性が強く期待される。

古墳時代の遺跡はかなり多く、台地に密集して確認されている。

染谷古墳群(8)、舟塚山古墳群(33)があり、舟塚山古塚にいたっては、24基の倍塚が確認調査され、石岡市周辺古墳群の中でも際立つ存在である。

該期の集落は、古墳群の位置する台地上に大部分が占地し、すでに五領期～鬼高期の遺跡が検出されているが、大部分は未調査のものが多い。

奈良時代以降、石岡市は常陸国の中心であったため、国衙跡・国分僧寺跡・国分尼寺跡・茨城廃寺跡が所在し、国分僧寺跡・国分尼寺跡は国の特別史跡として指定されている。これらは、数次にわたる発掘調査により、規模・性格等が解明されつつあり、現在、整備事業が実施され、公園化が進められている。

## 2. 砂川遺跡

水戸市内の遺跡は、那珂川及びその支流の桜川、藤井川、田野川が流れる台地縁辺部に各時代の遺跡が点在し、これまでの発掘調査及び分布調査などによって、遺跡が210か所も確認されている。これらの中には、那珂川西岸の河岸段丘上に立地する大型前方後円墳の愛宕山古墳および石室の奥壁に陰刻の図文を残す吉田古墳の2件が国指定史跡に指定され、昭和14年以降、高井悌三郎氏の研究調査により那珂郡の郡衙・郡寺跡と確認された渡里町の台渡廃寺遺跡・長者山政庁跡があり、台渡廃寺跡の一部は県指定史跡に指定されている。

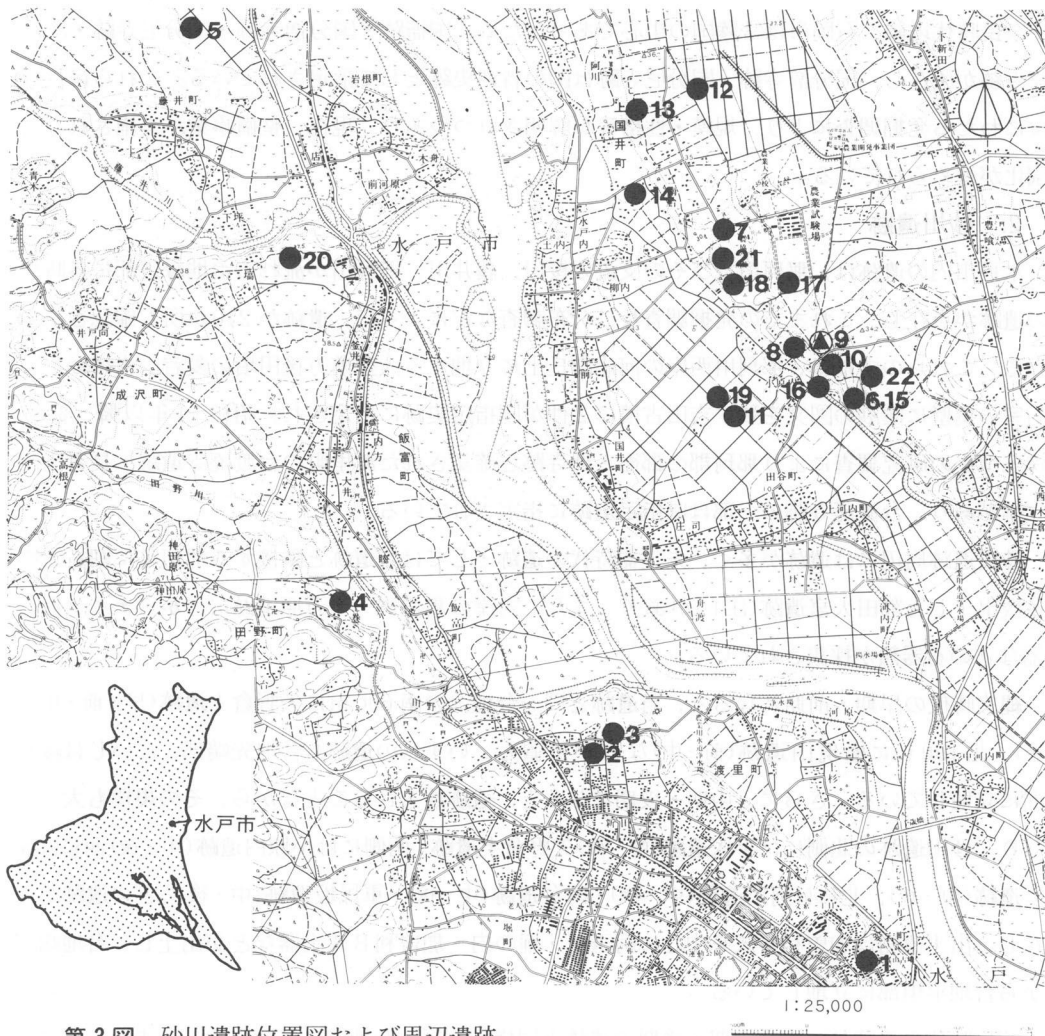
砂川遺跡周辺には遺跡が多く、先土器時代の遺跡としては当遺跡と隣接する那珂町に細石刃を多数出土した額田大宮遺跡(注1)があり、また、対岸の馬場尻・十万原遺跡などからナイフ形石器などの石器類が採集されている。

縄文時代の早期・前期になると、当遺跡と同一台地上の南600mに矢野倉上遺跡(早・前・中・後)、北100mに権現山遺跡(前・中)などが位置し、いずれの遺跡も台地先端部、ないしは緩斜面に立地している。さらに、中期・後期になると、遺跡数もさることながら、その規模も大きくなり、砂川遺跡の北側には平塚遺跡(中・後)矢野倉上遺跡、南側には小原内遺跡(中・後)西には塚宮遺跡(中・後)、北には阿川遺跡(中・後)・南台遺跡(中・後)・軍民坂遺跡(中・後)などの遺跡が点在し、出土遺物は加曾利E式を中心に阿玉台・堀の内・加曾利B式土器などが出土し、台地端部から台地平坦部に立地している。

弥生時代の遺跡は、縄文中期・後期の遺跡と同様に、同一台地上に多数立地し、また、縄文時

代の遺跡と複合する機会が多い。砂川遺跡と隣接する小原内・平塚遺跡、北には権現山遺跡・軍民坂遺跡・阿川遺跡・南台遺跡、南には矢野倉遺跡、西には塚宮遺跡などがあり、いずれの遺跡からも後期十王台式土器が確認されている。

古墳時代の遺跡は、前述した縄文時代・弥生時代の遺跡と複合する機会が多く、古墳時代全般にわたって分布し、土師器・須恵器・石製模造品などが出土している。また、古墳群も台地縁辺部に多数存在し、6基の円墳と1基の前方後円墳から成り、直刀一振を出土している小原内古墳群、9基の円墳から成り、3基を調査した結果、円筒埴輪・埴輪馬・堅魚木を乗せた埴輪家などが検出された富士山古墳群、陰刻の壁画が発見されている権現山横穴群、その他、塚宮古墳群・西木の倉原の内古墳群・権現山古墳群等多数の古墳群がみられる。また、当遺跡の南東500mに田谷廃寺跡が存在し、凝灰岩の礎石・布目瓦・鏡瓦などが出土し、また、当寺で使用された瓦と



第3図 砂川遺跡位置図および周辺遺跡



同種の瓦が原の寺瓦窯跡群(勝田市)から検出されているため、当時の瓦は原の寺瓦窯跡から供給されたものと思われる。

以上、当地域における歴史的景観について概観してきたが、那珂台地上には各時代の遺跡が多数分布しており、当地方の古代文化の繁栄を物語っている。

#### 砂川遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺 跡 名	種 類	時 代	番号	遺 跡 名	種 類	時 代
1	愛宕山古墳	古墳群	古 墳	12	阿 川 遺 跡	包蔵地	縄文・弥生・古墳
2	台渡廃寺遺跡	寺院跡	奈良・平安	13	南 台 遺 跡	包蔵地	縄文・弥生・古墳
3	長者山政庁跡	官衙跡	奈良・平安	14	軍民坂遺跡	包蔵地	弥 生
4	馬場尻遺跡	包蔵地	縄 文	15	矢野倉遺跡	包蔵地	弥 生
5	十万原遺跡	包蔵地	縄文・弥生・古墳	16	小原内古墳群	包蔵地	弥 生
6	矢野倉上遺跡	包蔵地	縄 文	17	富士山古墳群	古墳群	古 墳
7	権現山遺跡	包蔵地	縄 文	18	権現山横穴群	横穴群	古 墳
8	平塚遺跡	包蔵地	縄 文	19	塚宮古墳群	古 墳	縄文・弥生・古墳
9	砂川遺跡	集落跡	縄文・歴史	20	西木の倉原の内古墳群	古墳群	古 墳
10	小原内遺跡	包蔵地	弥生・古墳	21	権現山古墳群	古墳群	古 墳
11	塚宮遺跡	包蔵地	縄文・弥生・古墳	22	田谷廃寺跡	寺院跡	奈良・平安

注1) 川崎純徳・渡辺 明・星山芳樹「額田大宮遺跡」那珂町史編纂委員会 昭和53年3月

# 第3章 宮部遺跡

## 第1節 遺構と遺物

### 1. 遺 構

宮部遺跡の調査区から、竪穴住居跡1軒・土壇25基が検出されている。

遺構の大半は、調査区北側部分に集中して分布している。

住居跡の形態は、重複関係がみられるが、隅丸方形を呈し、土壇はそれぞれ円形・方形・楕円形を呈す。

各遺構の検出は、表土・耕作面から地山ローム面までの堆積土が浅いため、地山ローム面で認められた。

尚、各遺構内の堆積土については、図版には記号だけを記し、次の様に区分し表した。

#### 竪穴住居跡

1	Hue 7.5YR 4/4 褐色	5	Hue 7.5 YR 3/4 暗褐色	a	炭化粒子, ロームブロック混り, 粒性締りあり
2	" " "	6	" 4/4 褐色	b	炭化粒子, 焼土粒子, ロームブロック混り
3	" " "	7	" 3/4 暗褐色	c	焼土ブロック, 炭化粒子, ロームブロック混り
4	" " "	8	" 4/4 褐色		

#### 土 壇

1	Hue 7.5 YR 4/4 褐色	7	Hue 7.5 YR 4/4 褐色	a	炭化粒子, ロームブロック混り
2	" 4/6 "	8	" 4/6 "	b	炭化粒子, 焼土粒子, ロームブロック混り
3	" 4/6 "	9	" 4/4 "	c	焼土ブロック, 炭化粒子, ロームブロック混り
4	" 4/4 "	10	" 4/6 "		
5	" 4/6 "	11	" 4/4 "		
6	" 4/6 "	12	" 4/4 "		



第1図 宮部遺跡地形図

# (1) 竪穴住居跡

## 第1号竪穴住居跡(第2図)

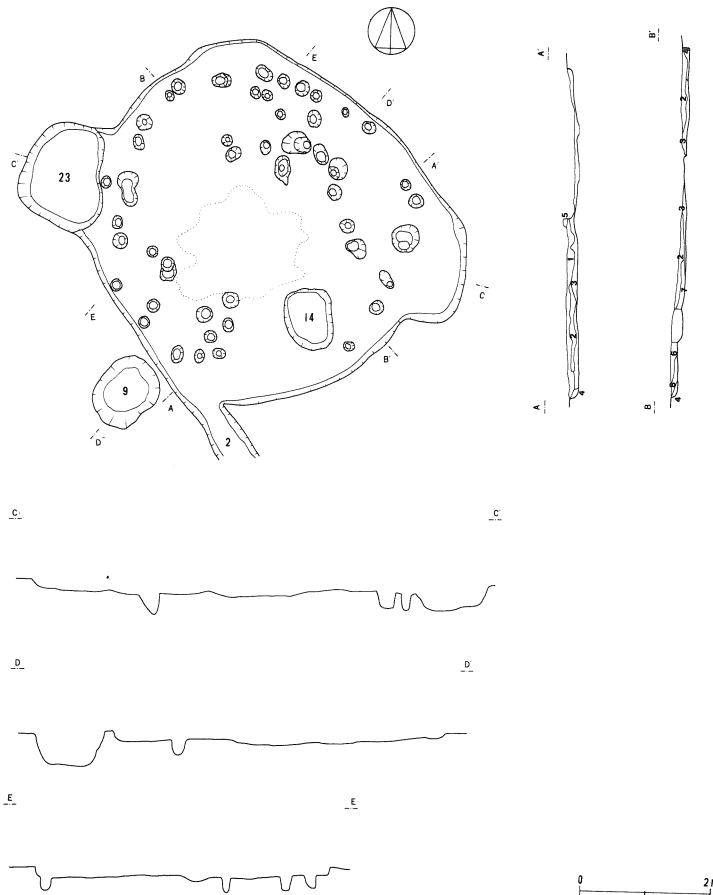
調査区B2 a3・b3・a4・b4・a5・b5区より検出され、竪穴住居跡は、5×5.5mの方形プランを呈し、主軸方向は、N-34°-Wである。

本住居跡は、第14号土壙・第23号土壙・溝状遺構との重複関係を呈し、遺構の残存状況は良好であり、壁は全体に15～18cmを測り、垂直に立ち上がっている。

床面は、全体に平坦であるが、硬い面は部分的にみられる程度である。精査の結果炉跡は、住居跡中央部よりやや南側に位置し、焼土・炭化物が多く検出されており、焼土・炭化物は、1.5×1.8mの範囲に、約10cmの厚さで平坦に堆積が認められている。

柱穴は、全体に20～30cmと比較的浅く、49本の柱穴状Pitが検出された。

覆土は、全体に黒褐色の堆積がみられ、覆土中から出土した遺物は、ごく僅かであり、Pit内より検出された遺物等と照らし合わせ、本遺構は、縄文前期、黒浜期に属するものと考えられる。



第2図 第1号竪穴住居跡

(2) 土 壙

第1号土壙(第3図)

調査区B2 d6・e6・d7・e7区において確認された土壙である。

土壙形態は長軸1.5m、短軸1.3m、底面1.3×0.8mの隅丸方形に近い形状を呈し、主軸方向N-5°Eを測る。

深さは、約48cmで壁面は、比較的緩やかに傾斜をもちながら立ち上がり、壙底は平坦部が若干認められる。

覆土は、4層に分けたうち、上部では、壁面崩落によると思われる堆積状況がみられる。

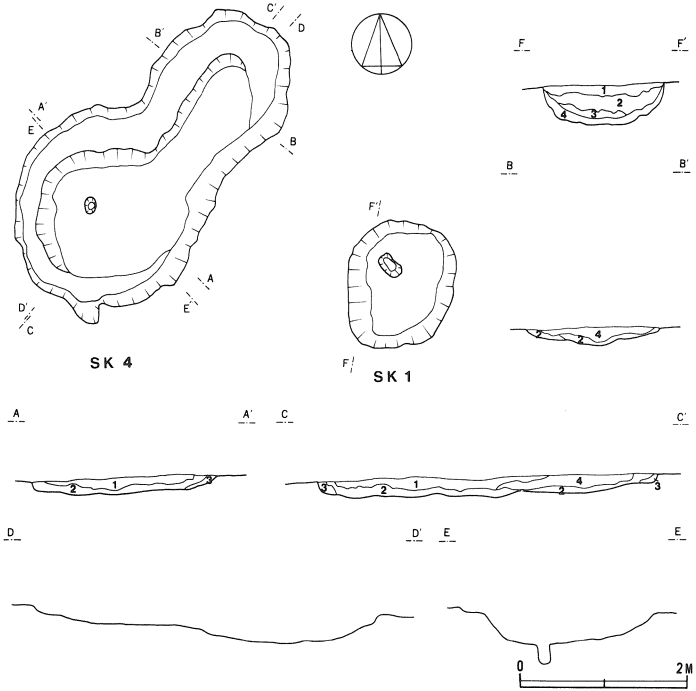
覆土中からの出土遺物はなし。

第2号土壙(第4図)

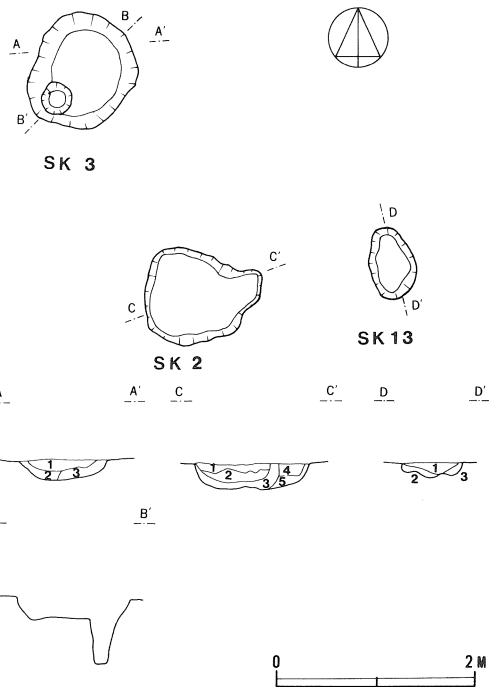
調査区B2 c6区で確認された土壙である。

土壙形態は、長軸1.2m、短軸0.9m、底面1.0×0.7mの不整形を呈し、深さ22cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。主軸方向N-80°E。

壙底は、比較的平坦であるが、中央部がやや高くなっている。出土遺物なし。



第3図 第1号・4号土壙



第4図 第2号・3号・13号土壙

### 第3号土壙(第4図)

調査区B2区のb<sub>5</sub>・b<sub>6</sub>区で確認された土壙である。

土壙形態は1.2×1.0m、底面は、0.9×0.7m、深さ20cmを測り、形状は、隅丸方形である。主軸方向、N-42°-Eを測る。

土壙内南側に、0.3×0.3mのPitが認められ、深さは65cmを測るが、本土壙に伴うものであるかは不明である。壁面は、緩やかな傾斜をもち立ち上がりを示している。伴出遺物なし。

### 第4号土壙(第1図)

調査区、B2区のd<sub>5</sub>・e<sub>5</sub>・d<sub>6</sub>・e<sub>6</sub>区で確認された土壙である。

土壙形態は長軸4.1m、短軸1.5m、底面3.2×0.5mを測り、不整隅丸方形を呈し、主軸方向、N-44°-Eを測り、若干の段差をもち深さ、20～35cmを測る。壙底は、北側部が若干深く、40cmを測り南側部においては浅く、20cmを測る。

壁面は、緩やかな傾斜をもち、立ち上がりを示しておる。伴出遺物なし。

### 第5号土壙(第5図)

調査区 B2区のe<sub>5</sub>・e<sub>6</sub>区で確認され、第6号土壙と重複関係を呈し、土壙形態は、長軸1.4m、短軸1.0m、底面0.65×0.6mの隅丸方形である。

主軸方向、N-52°-Eを測り、深さは、35cmで垂直に立ち上がりを示している。

覆土は、土壙周囲の崩落の堆積がみられ、第6号土壙より先に土壌流入がおこなわれ、次いで5号土壙の埋没がみられる。伴出遺物なし。

### 第6号土壙(第5図)

調査区、B2区のe<sub>5</sub>・e<sub>6</sub>区で確認され、第5号土壙の北側に位置し、重複関係を呈する土壙である。

土壙形態は長軸1.0m、短軸1.0m、底面0.9×0.65mを測り、不整形を呈し、主軸方向、N-49°-Eを測る。深さは、55～35cmを測り、立ち上がりは、北側において、開口部まで緩やかな傾きをもち立ち上がりを示している。伴出遺物なし。

### 第7号土壙(第6図)

調査区B2区のb<sub>4</sub>・b<sub>5</sub>・c<sub>5</sub>で確認され、第1号竪穴住居跡、南側に位置する土壙である。

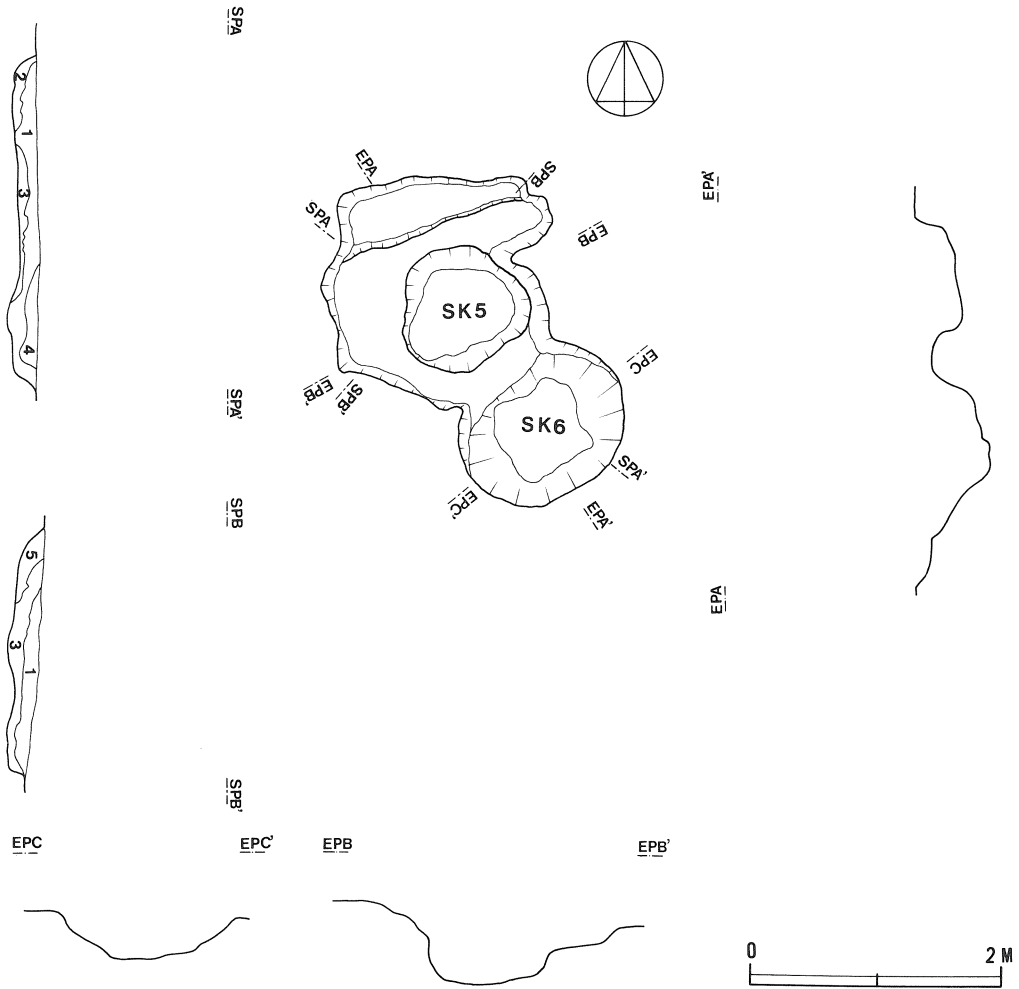
土壙形態は長軸1.5m、短軸1.3m、底面は1.0×1.0mの不整楕円形を呈し、主軸方向、N-43°-Eを測る。深さは26cmを測り、やや傾斜をもち立ち上がる。

本土壙に伴う遺物はなし。

### 第8号土壙(第8図)

調査区、B2b<sub>5</sub>区で確認され、第7号土壙東側に位置する土壙である。

土壙形態は長軸1.6m、短軸0.8m、壙底1.35×0.3mを測り、隅丸長方形を呈する。



第5図 第5号・6号土壌

本土壌は、主軸方向 $N-43^{\circ}-E$ を呈し、深さは、 $15\sim 25\text{ cm}$ と浅く、土壌、北側部分が若干深く南側は浅い。本土壌に伴う遺物はなし。

第9号土壌(第6図)

調査区 $B2b_4$ 区で確認され、第1号竪穴住居跡西側に位置する。

土壌形態は長軸 $1.1\text{ m}$ 、短軸 $1.0\text{ m}$ 、壙底 $0.6\times 0.7\text{ m}$ を測り、隅丸方形を呈し、主軸方向、 $N-38^{\circ}-E$ である。深さは、 $55\text{ cm}$ を測るが、壁は垂直に立ち上がる。

本土壌からは、土壌中央よりやや北側から、人骨(頭骨と若干骨片)が出土しており、中世の土壌墓と考えられる。

第10号土壌(第6図)

調査区 $B2a_3$ 区で確認され、第1号竪穴住居跡の北西側に位置する。

土壙形態は長軸 1.15 m，短軸 1.0 m，壙底 1.0 × 0.8 m の隅丸方形を呈し，主軸方向，N - 26° - W を測る。深さは，35 cm を測り，壁は，垂直に立ち上がりを示しているが，比較的浅い土壙である。

第 11 号土壙(第 7 図)

調査区 B2 区の a<sub>2</sub>・a<sub>3</sub> 区で確認され，第 10 号土壙西側に位置する。

土壙形態は長軸 1.4 m，短軸 0.75 m，壙底 1.2 × 0.55 m を測り，隅丸方形を呈し，主軸方向，N - 21° - W である。深さは，60 cm を測り，壁はやや垂直に立ち上がりを示している。

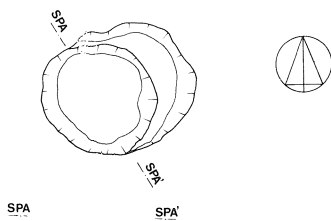
覆土は，土壙周囲の崩落の堆積がみられる。伴出遺物なし。

第 12 号土壙(第 7 図)

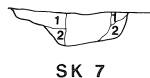
調査区，B2 a<sub>2</sub> 区で確認され，第 11 号土壙西側に位置する。

土壙形態は長軸 1.15 m，短軸 1.0 m，壙底 0.65 × 0.7 m を測り，隅丸方形を呈し，主軸方向は N - 11° - E である。深さは約 60 cm を測り，壁はやや垂直に立ち上がりを示している。

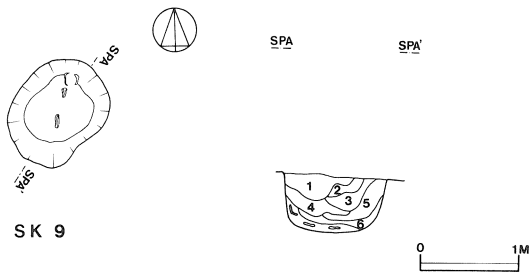
伴出遺物なし。



SPA SPA'

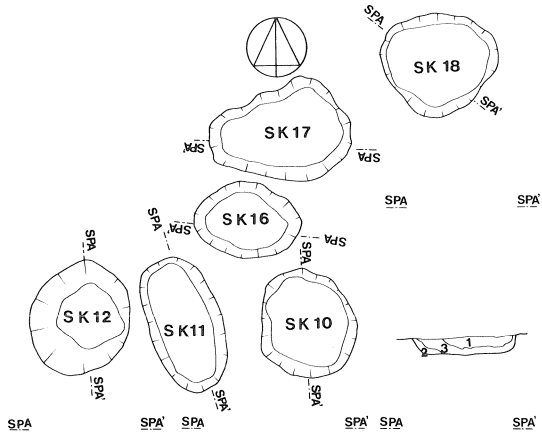


SK 7



SK 9

第 6 図 第 7 号・9 号土壙



SPA

SPA'

SPA

SPA'

SPA

SPA'

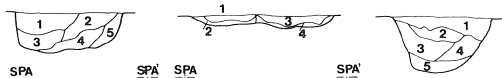
SPA

SPA'

SPA

SPA'

SPA'



SPA

SPA'

SPA

SPA'

SPA

SPA'

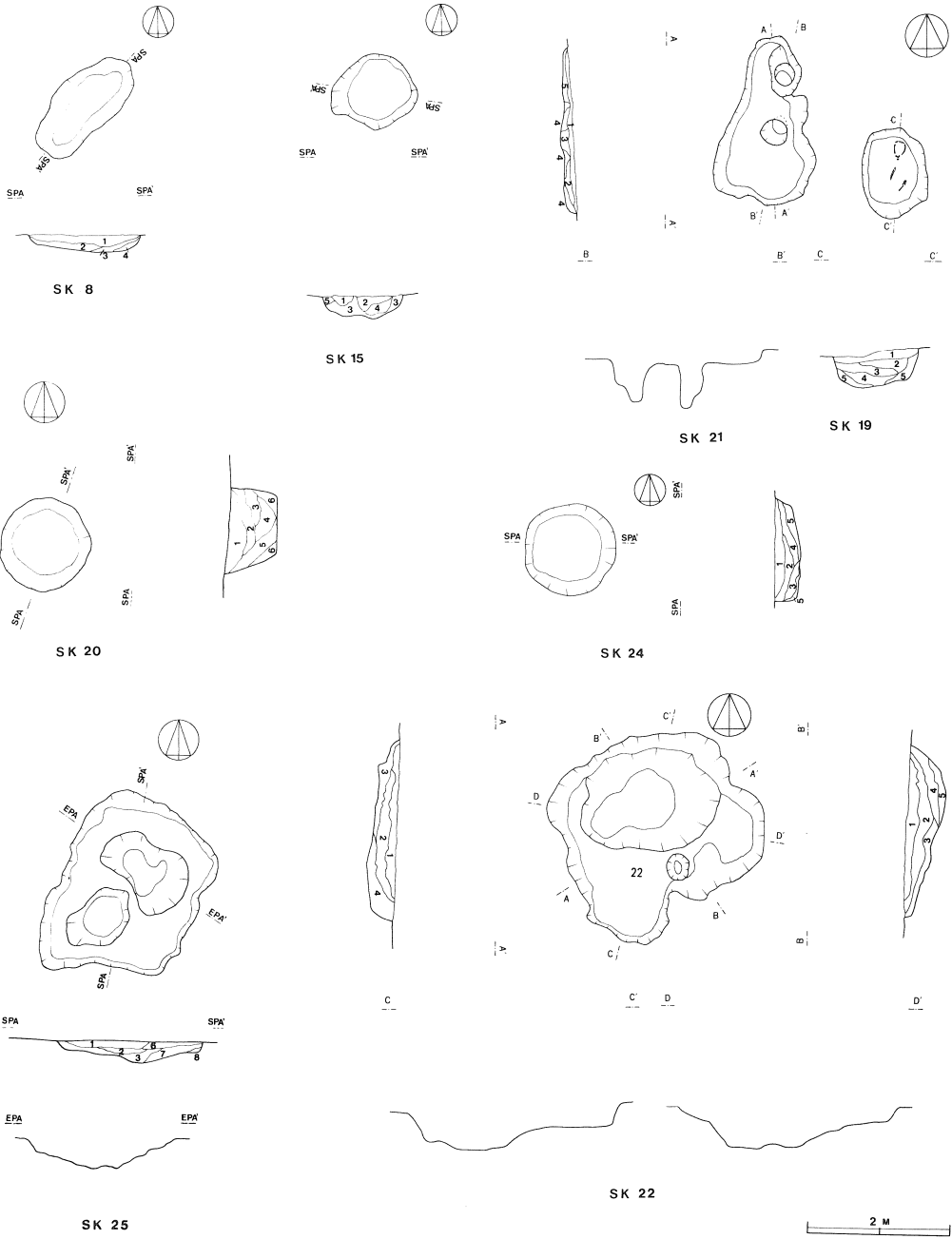
SPA

SPA'



第 7 図 第 10 号・11 号・12 号・16 号・17 号・18 号土壙





第8図 第8号・15号・19号・20号・21号・24号・25号・26号土壇

第13号土壙(第4図)

調査区B2c6区で確認され、第2土壙東側に位置する。

土壙形態は長軸0.85m、短軸0.45m、壙底 $0.6 \times 0.3$ mを測り、不整形を呈し、主軸方向、N-15°-Wである。土壙の深さは、15cmを測るが、本土壙は、土壙としては若干、疑問が生じる遺構である。伴出遺物なし。

第14号土壙(第2図)

調査区B2b4区で確認され、第1号竪穴住居跡内南側に位置する。

土壙形態は長軸0.95m、短軸0.7m、壙底 $0.8 \times 0.55$ mの隅丸方形を呈し、主軸方向、N-9°-Eである。

伴出遺物なし。

第15号土壙(第8図)

調査区B2a1区で確認され、土壙形態は長軸1.0m、短軸1.0m、壙底 $0.85 \times 0.8$ m、深さ30cmを測り、不整形を呈し、主軸方向、N-51°-Eである。

本土壙は、東側は浅く、西側が深くなり、覆土堆積状況は、東から西に流れ込んでいる。伴出遺物なし。

第16号土壙(第7図)

調査区B2a3区で確認され、第10号土壙北側に位置する。

土壙形態は長軸1.1m、短軸0.75m、壙底 $0.85 \times 0.5$ m、深さ9cmを測り、隅丸楕円形を呈し主軸方向、N-70°-E。

伴出遺物なし。

第17号土壙(第7図)

調査区A2のj3・B2a3区で確認され、第16号土壙北側に位置する。

土壙形態は長軸1.45m、短軸0.9m、壙底 $1.25 \times 0.65$ m、深さ17cmを測り、隅丸方形を呈し主軸方向、N-87°-E。伴出遺物なし。

第18号土壙(第7図)

調査区A2j3区に位置し、第17号土壙東側に位置する。

土壙形態は、長軸1.2m、短軸1.05m、壙底 $1.0 \times 0.85$ m、深さ18cmを測り、不整形を呈する。

主軸方向、N-85°-E。

第19号土壙(第8図)

調査区A2区のj4・B2a4区に位置し、第1号竪穴住居跡の北側に位置する。

土壙形態は長軸1.25m、短軸0.9m、壙底 $0.95 \times 0.7$ m、深さ50cmを測り、隅丸方形を

呈する。

主軸方向， $N-5^{\circ}-E$ 。本土壙は，北側に傾斜をもち，覆土堆積状況は，ロームブロックが若干みられ，自然堆積ではない。

出土遺物は，人骨が出土し，第9号土壙同様に，北側に頭骨が置かれ，少量の骨片がみられた。  
第20号土壙(第8図)

調査区B2区の $a_5 \cdot a_6$ 区に位置し，第1号住居跡東側に位置する。

土壙形態は長軸1.3m，短軸1.25m，壙底 $0.95 \times 0.9$ mを測り，円形を呈する。

主軸方向， $N-14^{\circ}-E$ 。覆土堆積状況は，壙壁の崩落がみられ，自然堆積の様相を呈している。

第21号土壙(第8図)

調査区A2区の $j_4 \cdot B2a_4$ 区に位置し，第1号竪穴住居跡北側に位置する。

土壙形態は長軸2.35m，短軸1.15m，壙底 $2.1 \times 0.85$ m，深さ20cmを測り，不整形を呈する。

主軸方向 $N-10^{\circ}-E$ 。本土壙は，北側部分に崩落が若干認められ，土壙内に2か所のPitがみられるが，本土壙に伴うものではない。伴出遺物なし。

第22号土壙(第8図)

調査区B2b7区に位置し，第1号竪穴住居跡西側壁と重複している。

土壙形態は長軸1.5m，短軸1.25m，壙底 $1.4 \times 0.95$ m，深さ35cmを測り，隅丸方形を呈する。

主軸方向 $N-19^{\circ}-E$ 。本土壙は，壁が垂直に立ち上がり，壙底より，若干の人骨を検出した。

第1号竪穴住居跡を切って構築している。伴出物なし。

第23号土壙(第2図)

調査区域南端に位置し，B2a4区より検出された。

土壙形態は長軸1.3m，短軸1.3m，壙底 $0.95 \times 0.9$ m，深さ35cmを測り，円形を呈す。

主軸方向 $N-40^{\circ}-E$ 。本土壙は，壁が垂直に立ち上がり，壙底より，若干の人骨を検出した。

第24号土壙(第8図)

調査区域東端に位置し，B2f5区より検出された。

土壙形態は長軸2.8m，短軸1.95m，壙底 $2.15 \times 1.75$ mを測り，不整形を呈す。

主軸方向， $N-39^{\circ}-E$ 。

本土壙は，中央部に2か所のPit状の落ち込みが検出されており，土壙機能は不明である。

第25号土壙(第8図)

調査区，B2c7・8区に位置する。

土壙形態は長軸3.0m，短軸2.85m，壙底 $2.65 \times 2.35$ mを測り，不整形を呈する。

主軸方向 $N-31^{\circ}-E$ 。

本土壙は、複雑な形態を呈し、北側より南側にかけて2段に落ち込みがみられる。

伴出遺物なし。

### (3) 土壙のまとめ

宮部遺跡より検出された土壙は、計25基である。

土壙が検出された区域は、遺跡の立地する尾根の北側部に集中してみられ、また密度にも若干の差が認められ、調査区B2区のa3・b3・c3・a4・b4・c4・a5・b5・c5区において集中して検出された。

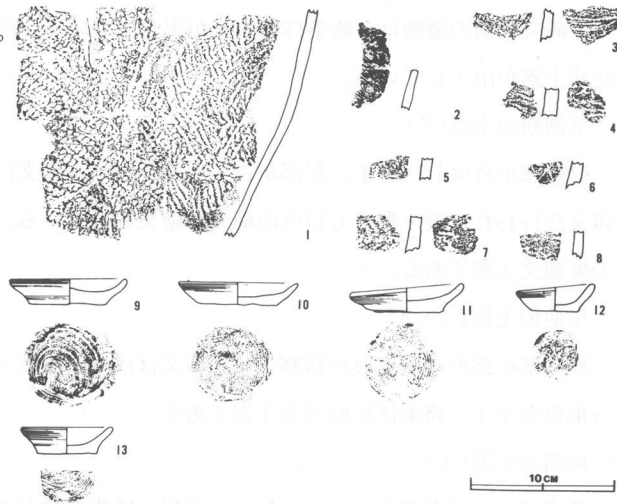
調査された土壙形態は、円形・方形・長方形・不整形を呈し、断面形態をみると、基本的に垂直壁で平坦な底面をもつものが多く、いずれも径2m以下で、深さ1m弱を測るものが大部分である。これらは規模・形態等で類似点もみられる。

第9・19・24号土壙は、検出された人骨等から考え、墓壙として使用されたものであろう。これらの土壙と類似がみられる他の土壙も、おそらく墓壙として使用されたものであり、中世以降～江戸時代のもと考えられる。

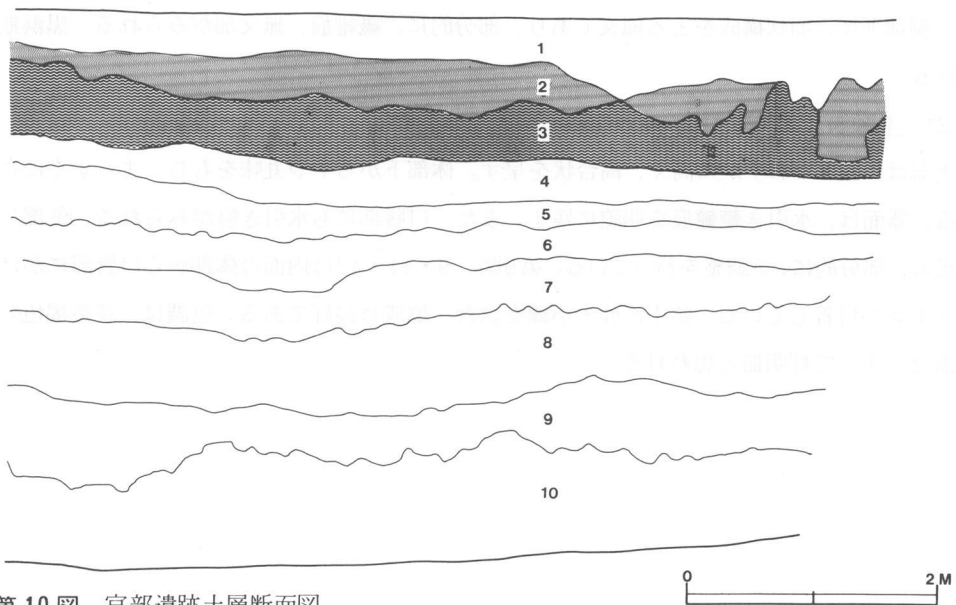
2. 出土遺物

宮部遺跡が形成されている尾根上の層序は、堆積状況を観察すると、耕作土・ソフトローム層・ハードローム層にわかれ、第1層、耕作土は、10～30 cmの堆積がみられ、第2層、ソフトローム層は、部分的にハードローム層が混入しており、第1層とは明確に区分できる。堆積は、20 cm程であるが、斜面部になると厚くなる。遺物の出土は、ほとんどが本層中からである。第3層はハードローム層であり、ブロック状の塊が本層上部にみられる。部分的に本層上部に若干の遺物の包含が認められた。第4・5層はハードローム層に粒の細かい礫が含まれ、褐色を呈す。第VI層はハードローム層に、鹿沼層の混在がみられ、鹿沼軽石層の堆積は顕著にみられず、ごくわずかにブロック状で検出されている。

(第10図)



第9図 宮部遺跡出土土器



第10図 宮部遺跡土層断面図

### (1) 縄文土器(第9図, 1～8)

宮部遺跡調査の結果、遺物の散布は、遺跡南緩斜面から尾根中央部にかけてみられる。表土下部で直ちに包含層にあたり、遺物は、縄文時代草創期から、早期・前期にかけての石器・土器が主体をなし、同レベルで土師器小片も混在している。また、遺跡は、畑地として耕作していた状況を考え、土層の状態からしても全ての遺物が、原位置を保っているとは断じ難い。

調査を実施し、遺物の主体をなす時期に伴う遺構の検出はされなかったが、遺跡の立地からして本尾根上に営なまれたものと思われる。

本遺跡から出土した縄文草創期の遺物は、表裏縄文土器片がみられ、石器群の中から検出された。縄文早期の遺物は、絡条体圧痕文が出土している。前期の遺物は、第1号住居跡に伴い、黒浜式土器が出土している。

#### 草創期の土器(2)

口縁部が外反し、若干、胴部がふくらみをもつ。施文は不規則な縄文であり、外反する口唇に縄文が行われ、表・裏とも斜位の縄文が施文されている。焼成は良、胎土は、砂粒を若干含む。表裏縄文土器である。

#### 早期の土器(4～8)

無文部に整形時の擦痕が観察され、施文は浅く、原体の条間があく。胎土に砂粒、小石を含み茶褐色を呈す。絡条体圧痕文系土器である。

#### 前期の土器(1)

縄文のみの胴部であり、胎土には、多量の繊維を含むが、内面の整形は概して良く、焼成が良い。胴部下に、羽状構成をとる縄文であり、部分的に、繊維痕、無文部がみられる。黒浜期と思われる。

### (2) 土師質土器(第9図, 9～13)

土器は、底部がわずかに高く、高台状を呈す。体部下からやや丸味をもち、まっすぐに立ち上がる。器面は、水引き轆轤痕を明瞭に残す。また、口唇部にも水引き痕がみられる。底部は糸切り後の、部分的にナデ調整を行っている。第9図, 9・11・12は内面の体部から口唇部にかけて、カーボンが付着している。胎土に砂・小礫を含む。焼成は良好である。色調は、淡茶褐色を呈す。土器は、すべて灯明皿と思われる。

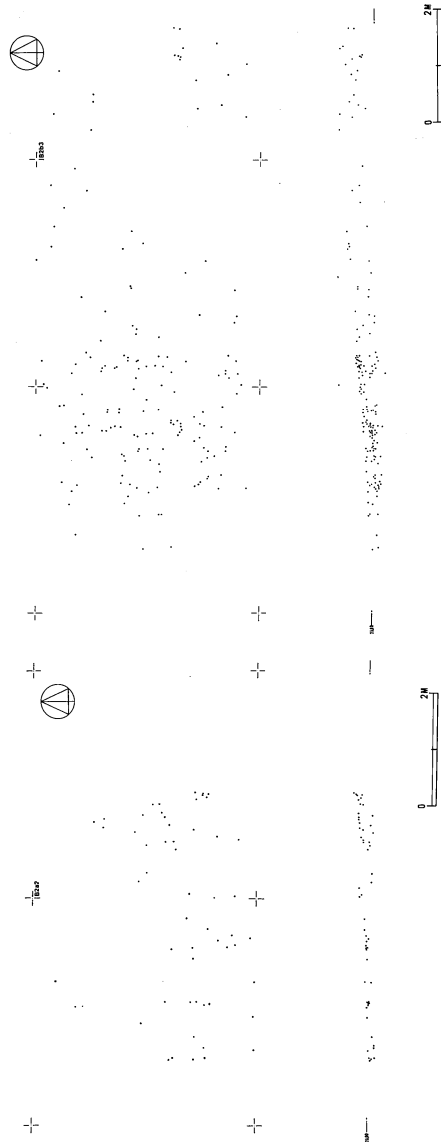
(3) 石 器 (第11図～第13図)

宮部遺跡から出土した石器の数は、474点に達する。それら以外にも、破片・チップ類がみられた。これらの遺物を分類すると、大部分は剥片であり、石器として取扱うものは、数十点であると思われる。また、剥片として分類したものの中には、二次調整がおこなわれたものや使用痕と思われる痕跡を残すものも若干みられる。

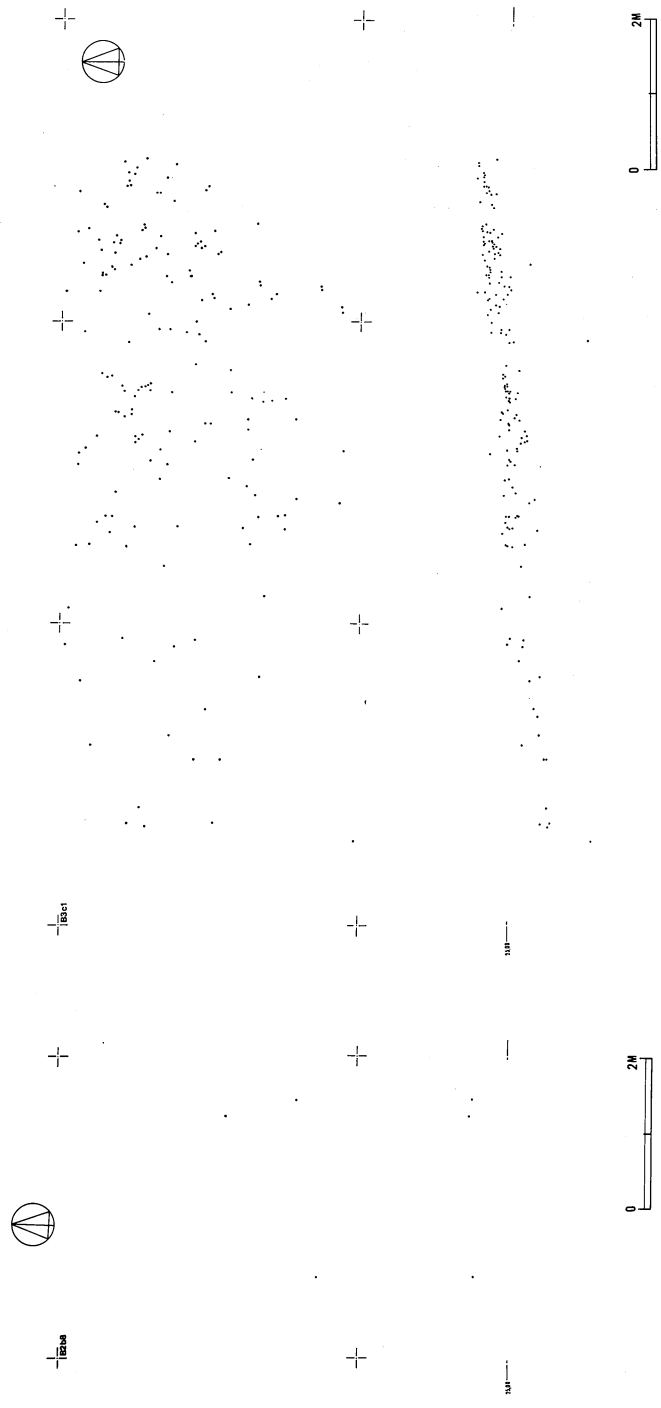
尚、石器・剥片類については、全てを掲載することが出来ず、使用痕等のある剥片を中心に掲載した。

本遺跡出土の石器類は、石材から、2種類に大別できる。

(ア) ホルンヘルツ類 (イ) 瑪瑙・チャート類

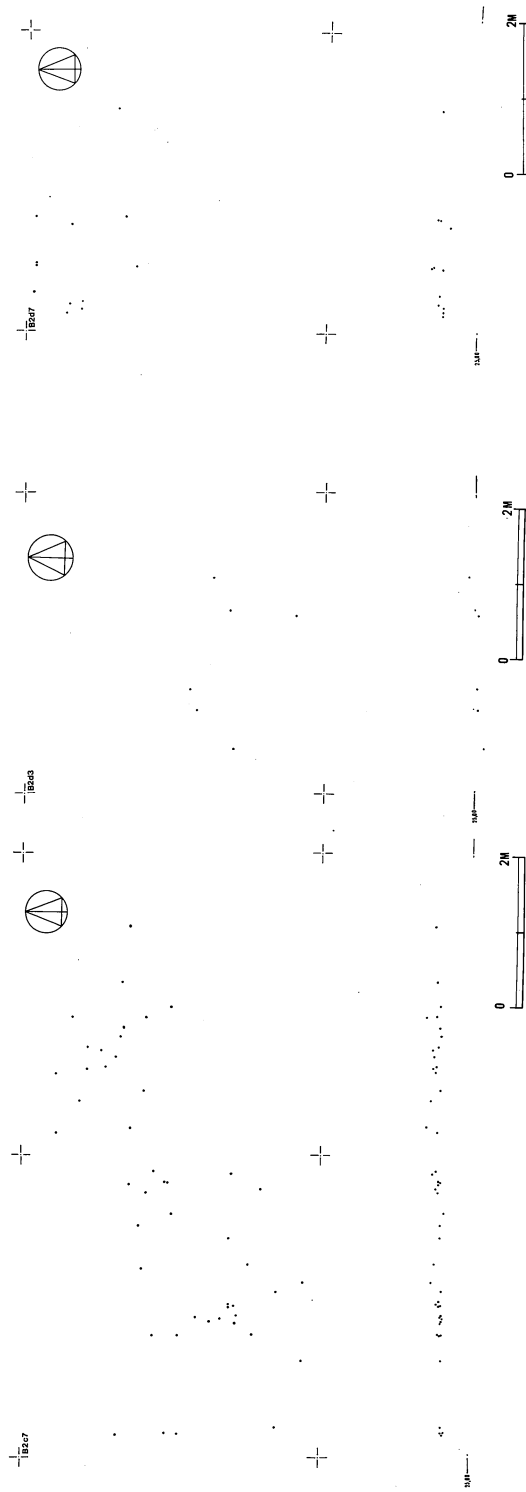


第11図 石器分布図



第12图 石器分布图





第13図 石器分布図

(ア) ホルンヘルツ類石器群

石斧類(第14図1・2)

1は、丸ノミであり、やや縦長の礫を素材としている。周辺から中央部に向かって階段状の成形剥離が施され、その結果、中央部に、枝が走り、断面は山形を呈する。刃部及び側辺には、細かな調整加工を施している。一端は、厚さ調整のため、大きな剥離痕を残し片面は、若干、自然面を残している。石材は、ホルンヘルツである。

2は、スタンプ状石斧である。

扁平で縦長の礫を素材としている。礫の一端に、数回の打撃を加え石器に仕上げている。使用面は、打ち欠いたままで、やや凹みがある。使用面の作出以外には、加工痕はない。

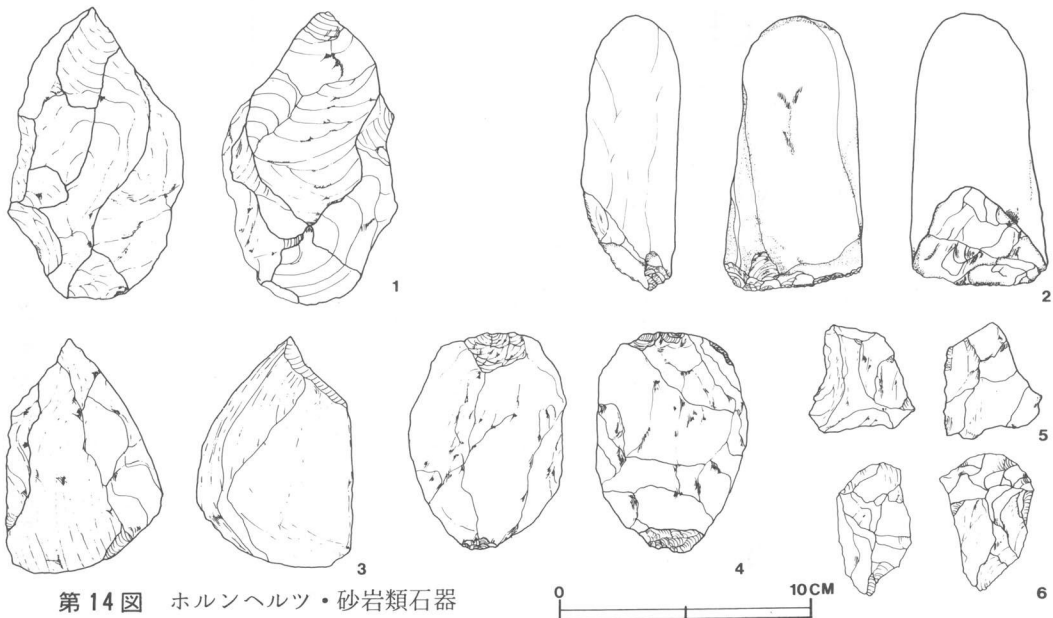
礫器(第14図3～6)

3は、厚手の円礫を用いている。1回の大きな剥離で刃部を作出し、さらに部分的に調整剥離が施されている。調整剥離がほどこされた部分は、若干刃味をおびている。刃部以外は、ほとんどが自然面で、加工痕は認められない。

4は、厚手の円礫を使用し、礫は斜めに割れており、数回の調整剥離が実施され、使用痕も認められる。過度の使用により、エッジの部分は、摩耗している。

5は、両面からの粗い打撃によって礫を割り、剥離面は大きく、打撃の方向も不規則であり、石核の一種かもしれない。

6は、厚手の円礫を素材とし、剥片剥離面は、周辺からの粗い成形剥離で形を整えている。石核と考えられる。



第14図 ホルンヘルツ・砂岩類石器

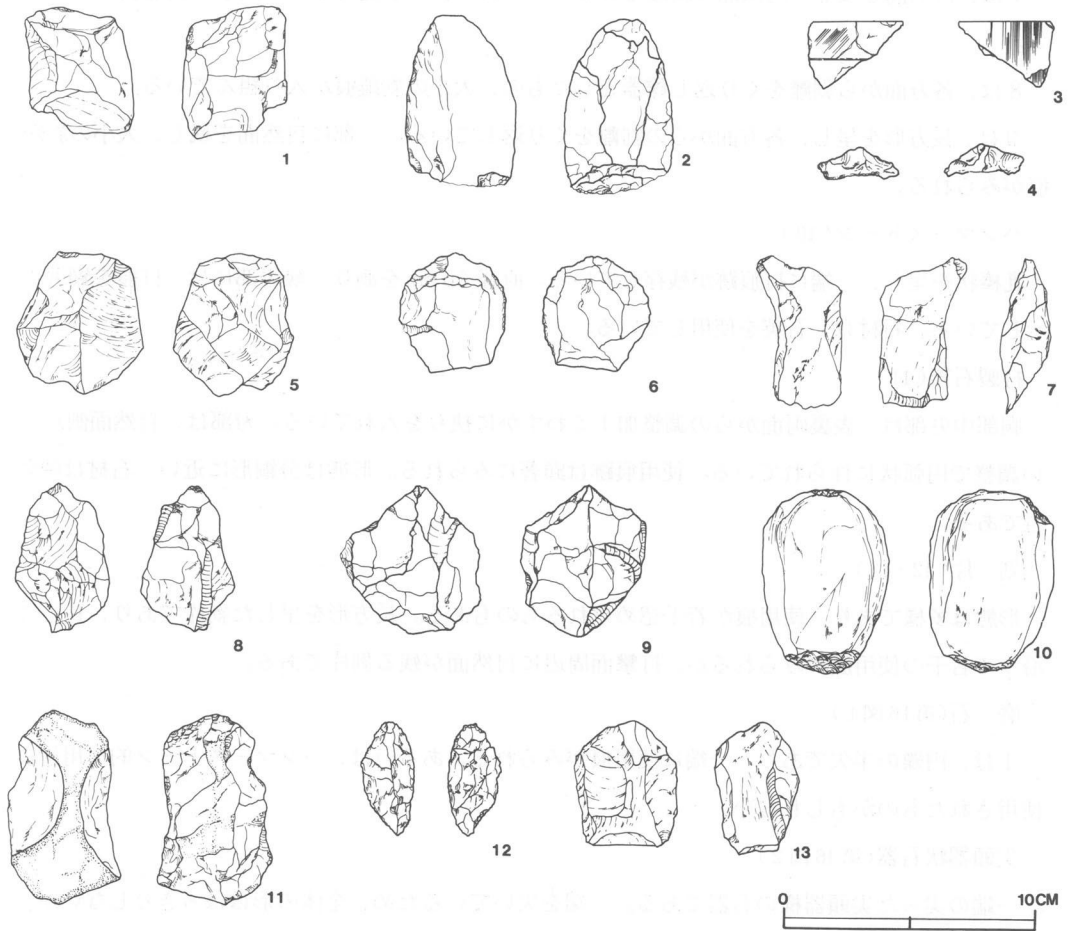
(イ) 瑪瑙・チャート類(第15図1～13)

礫器(第15図1)

厚手の礫器を素材としたもので、両面からの粗い打撃によって礫を割っている。剝離面も大きく打撃は一方向から行われている。石核の一種かもしれない。

石斧(第15図2)

片刃の打製石斧である。周辺から中央部に向かって階段状の成形剝離が施され、刃部及び側辺は細かな調整加工を施している。片面は、若干の剝離痕がみられるが自然面を残している。刃部には、使用痕が認められる。



第15図 瑪瑙・チャート類石器

#### 剥片(第15図3)

各方面から剥離をくり返している。細かな調整加工が施され、若干の剥離痕がみられる。

#### 剥片(第15図4)

中央に稜が走る縦長の剥片である。中心部に向かって各方向から数回の剥離が行われている。使用痕は認められない。

#### 礫器(第15図5～9)

5は、上面観が長方形を呈し、各方向から剥離をくり返している。自然面が若干残り、剥離面を打撃面とし、大小の剥離痕がみられる。石核とも考えられる。

6は、5同様各方向から剥離をくり返して、最初に大きな成形剥離を施した後で、若干細かい剥離をしている。

7は、自然面を残し、両側面の剥離をおこなっており、打撃面として、大小の剥離痕がみられる。

8は、各方面から剥離をくり返し礫器としたもの、大小の剥離痕が入り組んでいる。

9は、長方形を呈し、各方面からの剥離をくり返している。一部に自然面を残し、大小の剥離痕がみられる。

#### ハンマーストーン(10)

乳棒状を呈し、一端に打痕跡が残存している。直径50cmを測り、縁辺部には、打痕を顕著に示している。石材は、石英を使用している。

#### 打製石斧(11)

胴部中央部は、表裏両面からの調整加工でわずかに抉りを入れている。刃部は、自然面側からの調整で円弧状に作られている。使用痕跡は顕著にみられる。形態は分銅形に近い。石材は硬砂岩である。

#### 剥片(12・13)

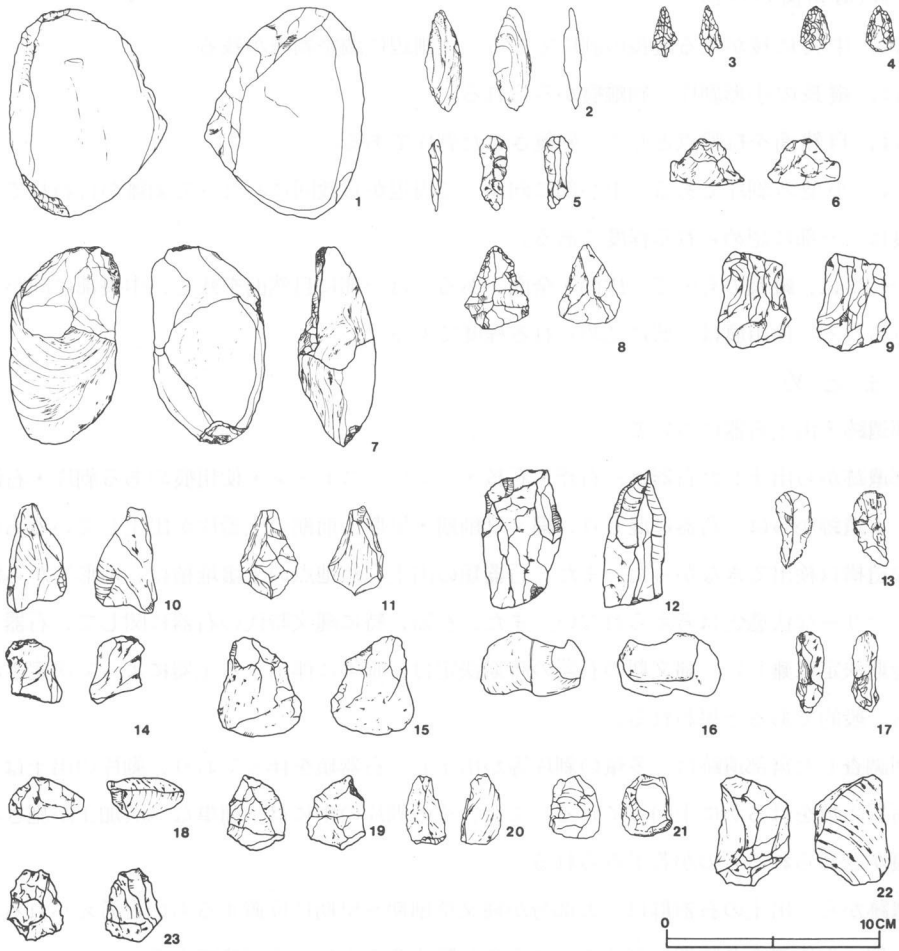
形態は多様であり、使用痕が若干認められるものもある。長方形を呈した剥片であり、長辺に沿って若干の使用痕がみられるが、打撃面周辺に自然面が残る剥片である。

#### 磨石(第16図1)

1は、円礫の半欠であり、一端に使用痕がみられる。あるいは、ハンマーストーン的な用途に使用されたものかもしれない。

#### 尖頭器状石器(第16図2)

一端の尖った尖頭器様の石器である。一端を欠いているため、全体の形ははっきりしないが、木葉状の形態を示し、均整がとれている。摩耗が激しく、調整剥離面が若干確認できる。



第16図 宮部遺跡出土石器

石 鏃(第16図3・4・5)

3は、三角形を呈し、有茎の石鏃である。脚部を欠損する。調整加工は両面にみられ、側辺は細かい鋸歯状を呈する。石材はチャートである。

4は、隅の丸い正三角形を呈するものと思われるが、先端部が欠けている。調整加工は、両面にみられ、側辺は細かい鋸歯状を呈する。石材はチャートである。

5は、右脚部を欠損する無柄の石鏃で、茎部は湾入する。両側縁は直線であり、全面に調整加工が施されている。石材は、頁岩である。

礫 器(第16図6～12)

6～12は、厚手の礫を素材としたもので、両面からの粗い打撃によって礫を半割に近い状態にしたものであり、剝離面は大きく、打撃の方向も不規則である。石核の一種かもしれない。

剥片(第16図13～23)

13は、中央に稜が走る縦長の剥片である。片側辺に調整剥離が残る。

14は、縦長の小形剥片、剥離痕がみられる。

15は、自然面を打撃点として、剥離された剥片である。

16は、小型の剥片である。中心部に向かって周辺から数回にわたって剥離が行われている。使用痕は、一部に認められる程度である。

17～23は、縦長のもので、片面・全面、あるいは一部に自然面を残し、中央部に向かって剥離がみられる。使用痕は一部に認められる程度である。

#### (4) まとめ

##### 宮部遺跡・出土石器について

宮部遺跡から出土した石器は、石斧・石核・ハンマーストーン・使用痕のある剥片・石鏃等である。本遺跡からは、石器に混じり、縄文草創期・早期・前期の土器片が出土しているものの、該期の遺構は検出できなかった。また、石器類の出土した地点の土壌堆積は、地形等から鑑み、プライマリーな状態とは考えられない。また、石器、特に縄文時代の石器に関して、石器自体では、時期決定は難しい。縄文期の石器の時期決定は、確実に伴出する土器によって決定される。が最も一般的であると思われる。

今回調査した宮部遺跡は、多量の剥片等が出土し、石器類を伴っており、剥片の出土は、定形的な石器の数をはるかに上回っている。また、その剥片の中には、簡単な二次加工が施されたり使用痕が認められるものが若干みられる。

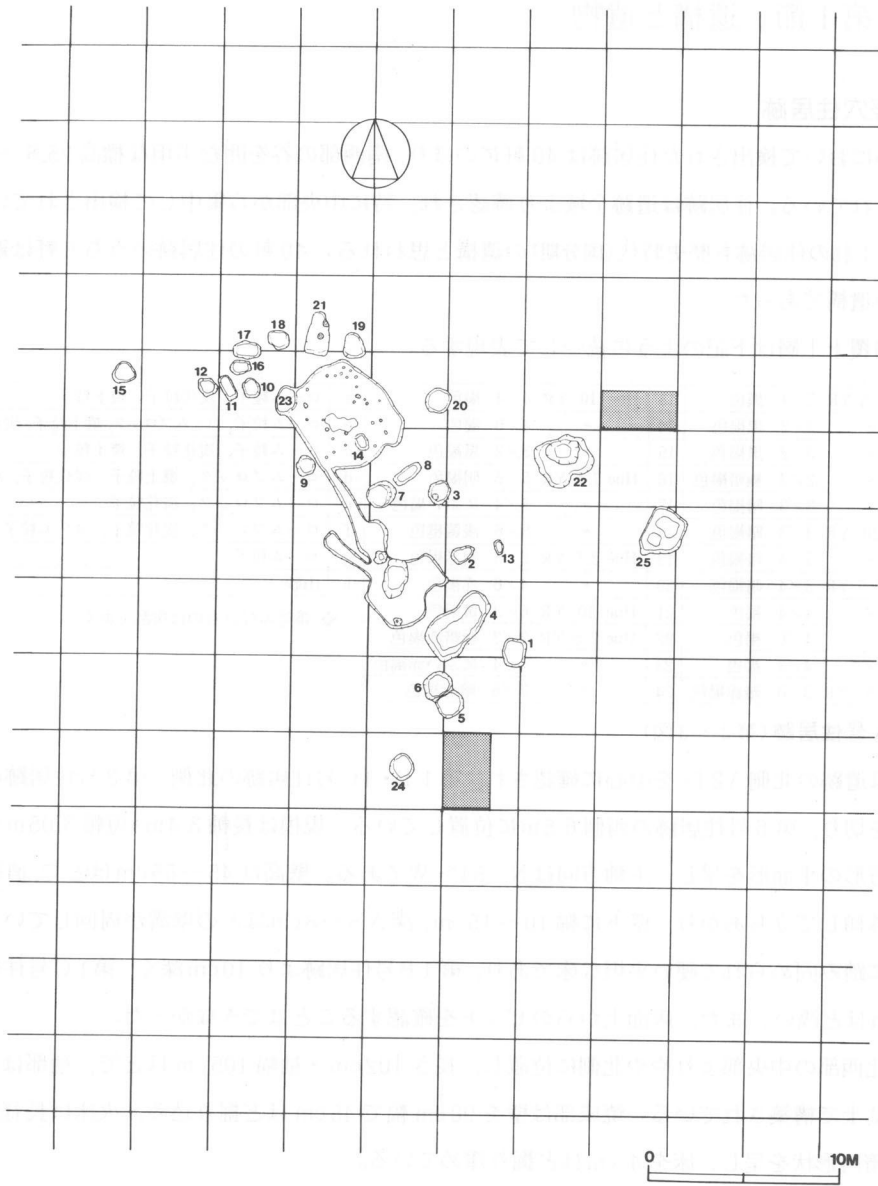
本遺跡から、出土の石器群は、大部分が縄文草創期～早期に位置するものと考えられるが、該期の石器、剥片等を各時期、形式ごとに全て分類することは、不可能である。

また、本遺跡における、土壌堆積状況を観察した結果、プライマリーな状態でない地区もあり、包含層も浅く、遺物の出土状況から層位を把握することは困難である。

数点出土した石器の中で、尖頭器状石器・石鏃(大形のものは、草創期の時期に伴うものであり、また、石斧の中でみられるスタンプ状石斧は、早期にしばしばみられるものである。

また、石核・礫器は、石器の素材として用いられたものであり、他の石器と同一時期としてとらえられる。

本遺跡の場合は、石器・土器ともに調査区域内にまとまって出土しており、縄文草創期、早期以外の時期の土器片は検出しないことなどから、本石器群は、草創期、早期の時期に位置づけられるものと考えられるが、今後、石岡地区における先土器時代以降、石器の組成、石材等の分類分析が必要と思われる。



第17図 宮部遺跡・遺構配置図

# 第4章 鹿の子A遺跡

## 第1節 遺構と遺物

### 1 竪穴住居跡

当遺跡において検出された住居跡は40軒にのぼり、南西部の谷を囲む平坦な標高25.8～26mに構築されている。住居跡は遺跡全域より確認され、特に中央部から集中して検出されている。また、いずれの住居跡も歴史時代(国分期)の遺構と思われる。40軒の住居跡のうち5軒は竈を付設しない遺構であった。

遺構内覆土土層は下記のように統一して表現する。

1	Hue 7.5 YR 2/1	黒色	13	Hue 10 YR 4/4	褐色	a	ローム粒子, 炭化粒子, 焼土粒子
2	"	2/2 黒褐色	14	"	4/6 褐色	b	ローム粒子, ロームブロック, 焼土粒子, 炭化粒子
3	"	3/2 黒褐色	15	"	3/2 黒褐色	c	ローム粒子, 炭化粒子, 焼土粒子
4	"	2/3 極暗褐色	16	Hue 7.5 YR 5/6	明褐色	d	ロームブロック, 焼土粒子, 炭化粒子, 砂粒
5	"	3/3 暗褐色	17	"	5/4 にぶい褐色	e	ロームブロック, 炭化粒子
6	Hue 10 YR 3/3	暗褐色	18	"	8/6 浅黄橙色	f	ロームブロック, 炭化粒子, ローム粒子
7	"	3/4 暗褐色	19	Hue 2.5 YR 5/8	明赤褐色	g	ローム粒子
8	Hue 7.5 YR 3/4	暗褐色	20	"	4/6 赤褐色	h	山砂
9	"	4/4 褐色	21	Hue 10 YR 6/3	黄褐色	※ 番号のないものは攪乱である。	
10	"	4/6 褐色	22	Hue 2.5 YR 2/3	極暗赤褐色		
11	"	4/3 褐色	23	"	4/4 にぶい赤褐色		
12	Hue 5 YR 3/3	暗赤褐色	24	"	3/6 暗赤褐色		

#### 第1A号住居跡(第2・3図)

本跡は遺跡の北側A2f8を中心に確認され、第1B・1C号住居跡の北側、第2号住居跡の西側の一部を切り、第6号住居跡の西側6.5mに位置している。規模は長軸3.4m・短軸3.05mほどの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-54°-Wである。壁高は45～55cmほどで、直線的に大きく外傾して立ちあがり、壁下に幅10～15cm、深さ5～8cmほどの壁溝が周回している。床は全体に踏み固められて硬い平坦な床であり、第1B号住居跡より10cm深く、第1C号住居跡より10cmほど浅い。また、床面上からのピットを確認することはできなかった。

竈は北西部の中央部よりやや北側に位置し、長さ102cm・袖幅105cmほどで、袖部は山砂を含んだ粘土で構築されている。焼成部は壁を90cm幅で45cmほど掘り込み、火床は長径41cmほどの楕円形状を呈し、床を4cmほど掘り窪めている。

覆土は褐色ないしは暗褐色で、おおむねレンズ状堆積を示し、全体にローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を少量含んでいる。

出土遺物(第4図)は土師器片、須恵器片を主に少量出土し、土師器の甕形土器(第4図-2)、高台付盤形土器(第4図-9)は第1C号住居跡との重複地点、すなわち南東の壁下床面上より出土してい





第1図 鹿の子A遺跡地形図

る。また覆土中より瓦を利用して作られた円形状の土製品1点、刀子2点をそれぞれ出土している。

遺物解説表(第4図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 20.2(復) B 26.5(現) C	底部を欠く。最大径を胴部よりやや上位にもち、頸部で括れて、口縁部は大きく外反して開き、先端はやや内彎する。	口縁部内外共に横ナデ、外面は縦位、横位の細いヘラ磨き整形がなされている。内面は、全体にナデ整形である。	普通 砂粒・砂礫 にぶい赤褐色	口縁～胴部、内外面共にスス付着。
2	甕 土師器	A 16.7 B 18.5 C 7.0	口縁部は頸部より大きく開き、口唇部でやや直立きみに立ち上がる。最大径は胴部上半に有する。	口縁部は内外面ともナデ整形。また外面はヘラ削りの後、胴部上半にナデ整形がなされている。	普通 砂粒・石英 黒赤褐色	全体にスス付着 底面は木葉痕有り。
3	坏 (墨書土器) 土師器	A B 3.0(現) C 5.1(復)	口縁部を欠損し、底面は平坦で、体部は内彎しながら開く。	ろくろ成形。外面は体部下半から底面にかけてヘラ削りがなされ、内面は(右→左)ヘラ磨きがなされている。	良好 砂粒・砂礫 褐灰色(外) 黒色(内)	外面(体部)側面に墨書。
4	坏 土師器	A 12.5(復) B 3.5 C 7.0(復)	底面は平坦、体部はゆるやかに外上方へ立ち上がる。	ろくろ成形。体部内外面共にナデ整形である。底面は、ヘラ削りがなされている。	良好 砂粒 橙褐色	
5	坏 土師器	A 11.9(復) B 3.9 C 6.0	底面は平坦で、体部は内彎して開き、口唇部はやや外反する。	ろくろ水挽き痕が認められ、内側はヘラ磨きがなされている。	良好 砂粒 明赤褐色(外) 黒色(内)	外面の一部にスス付着。
6	高台付 土師器	A 13.8(復) B 2.8 C 6.7	底部は丸く、緩やかに開く。高台は低く「ハ」の字に開く。	ろくろ水挽き整形であり、一部に認められる。また内面にはヘラ磨きがなされている。	良好 砂粒・砂礫 明褐色(外) 暗赤灰(内)	内面中央部に焼成後付けられたと思われる*こく書。
7	甕 土師器	A B 6.2(現) C 7.8	底面は平坦で、胴部は底面より直線的に開きながら立ち上がる。	内面板状工具によるナデ、外面はヘラ削り後、ヘラ磨き整形がなされている。また外面は摩滅している所あり。	普通 砂粒・石英 にぶい赤褐色	内外共スス付着。
8	坏 土師器	A B C	底部を欠損し、体部は内彎して開き、口唇部はやや外反する。	ろくろ成形。外面に水挽き痕有り。内面は(右→左)のヘラ磨き整形。	良好 砂粒・砂礫 にぶい橙褐色(外) 黒色(内)	
9	高台付 土師器	A 20.1 B 4.2 C 11.6	底面からやや内彎きみに開き、口辺部で外反して立ち上がる。台は直立きみに付く。	ろくろ整形。底面は回転ヘラ削り整形がなされている。	良好 砂粒・スコリア 明赤褐色	内面にスス付着。
10	蓋 須恵器	A 15.8(復) B 2.3 C	蓋部頂部はやや扁平で、やや内彎きみに大きく開く。	ろくろ整形で、蓋部頂部は、回転ヘラ削り。すそ部は水挽き整形である。	普通 長石粒・細砂 灰褐色	内外面に墨状付着物あり。
11	長頸 須恵器	A B C	胴部上半の破片。胴部は頸部より大きく張り出して、胴部最大径に至る。		良好 細粒 灰褐色	外面に灰緑色の自然釉が付着。
12 ・ 14	平瓦			凹面には布目、凸面には縄目の叩き。		
15 ・ 16	刀子					
17	土製品		土製円板である。	布目瓦を利用して円形に加工をする。		

第1B号住居跡(第3図)

本跡はA2g<sub>8</sub>を中心に確認されたもので、第1A号住居跡の南側、第1C号住居跡の東側で重複している。また、2軒の住居跡によって切られているため、規模・主軸方向等は不明である。壁高は45cmほどで、直線的に大きく外傾して立ち上がる。床面は全体に平坦であり、硬く踏み固められている。

覆土は全体に柔らかく、ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色・褐色土層である。出土遺物は土師器・須恵器を微量出土し、覆土中より須恵器の甕形土器口縁部(第5図-1)を出土している。

遺物解説表(第5図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 須恵器	A B C	口縁部は頸部より大きく外反し、胴部は頸部より直線的にさがる。	口縁部は水挽き成形がなされ、胴部は縦方位の叩きが行なわれている。	普通 細砂・雲母 灰白色	

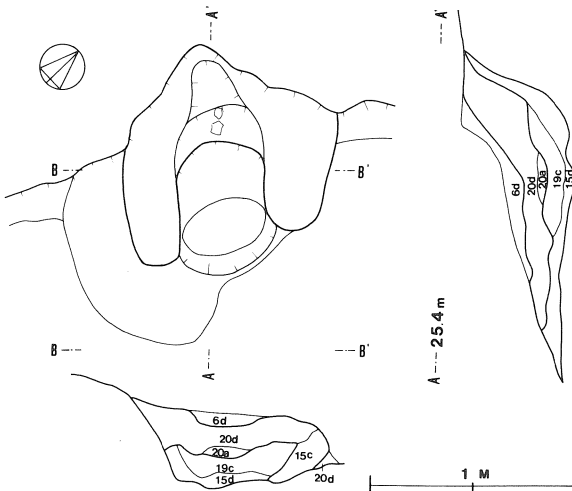
第1C号住居跡(第3・6図)

本跡はA2g<sub>8</sub>を中心に確認され、第1B号住居跡を西側で切り、第1A号住居跡によって北側部が切られており、第2号住居跡と北東コーナー部で接している。規模は長軸3.0m・短軸2.5mほどの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-72°-Wである。壁高は40~45cmで、直線的にやや外傾して立ち上がる。また壁下には幅12~15cm・深さ5cmほどの壁溝が周回していたものと思われる。床は全体に平坦で硬く、特に竈前方部が硬い。また、床面上からはピットを確認することはできなかった。

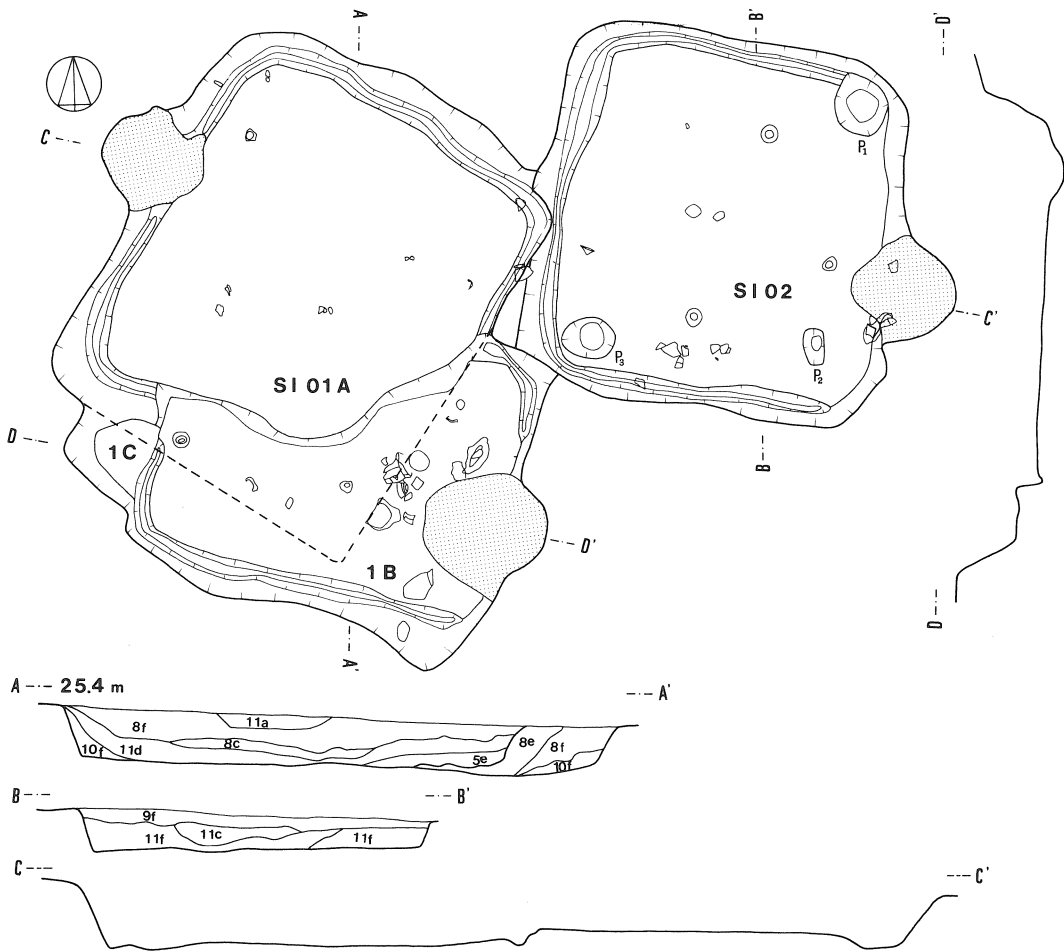
竈は南東壁の中央部よりやや南側コーナー部へ寄った所に位置し、長さ99cm・袖幅85cm・焚口部幅59cmほどである。保存状態は悪く、袖部は底部の一部のみ現存していた。焼成部は壁を82cm幅で、45cmほど掘り込み、火床は長径31cmほどの不整楕円形状を呈し、床を3cmほど掘り窪めている。

住居跡の覆土は第1A号住居跡によって切られているため、中央部の覆土は不明である。南側壁付近はロームブロック・ローム粒子・炭化粒子を含む暗褐色・褐色の土が壁から自然堆積の状態の流れこんでいる。

出土遺物は須恵器を中心に出土し、完形



第2図 1A号住居跡竈実測図

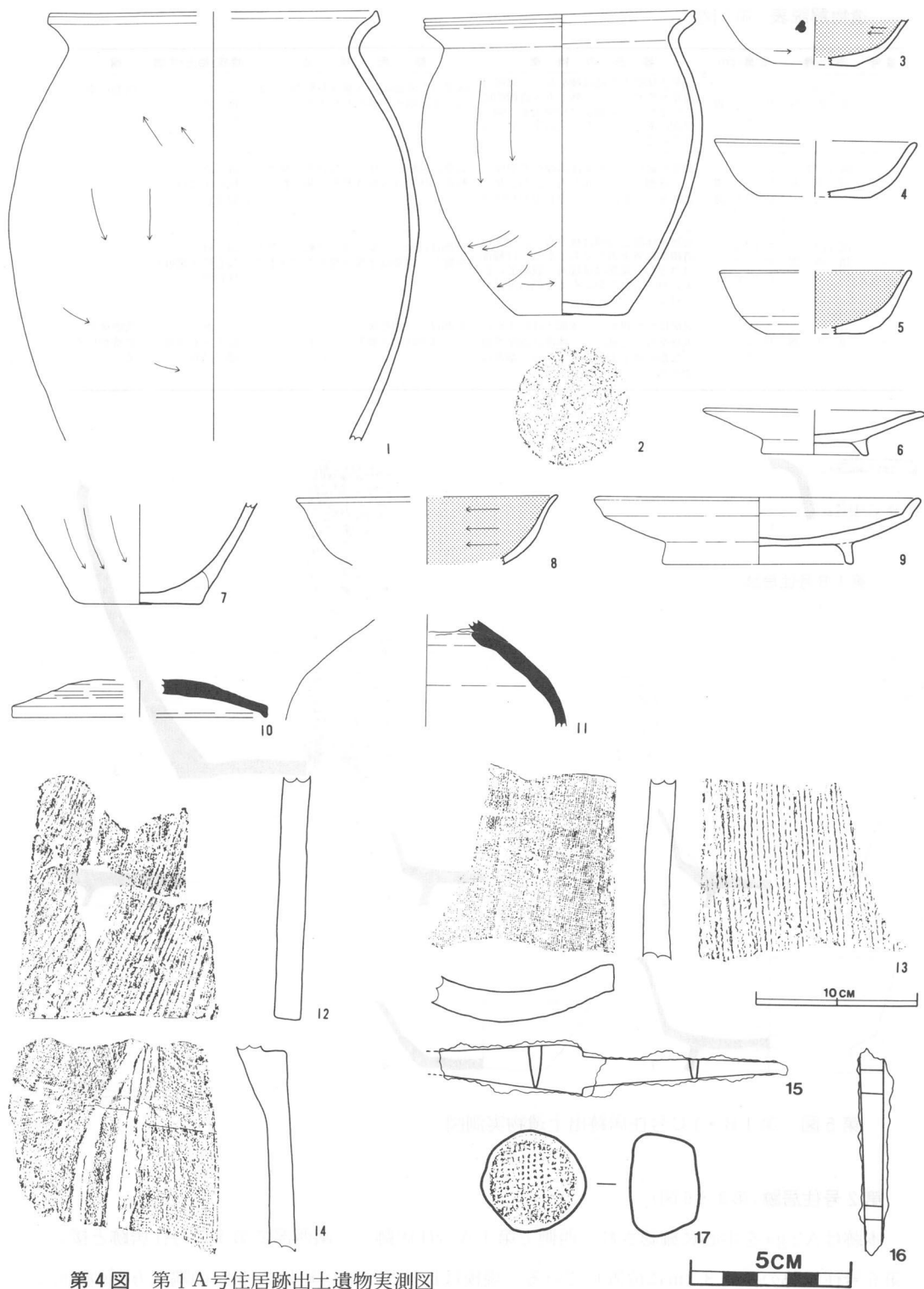


第3図 第1A・1B・1C・2号住居跡実測図

品は坏形土器(第5図-8)・高台付坏形土器(第5図-7), 一部破損のものは高台付坏形土器(第5図-4・5)であり, いずれも竈付近床面上より出土している。

遺物解説表(第5図)

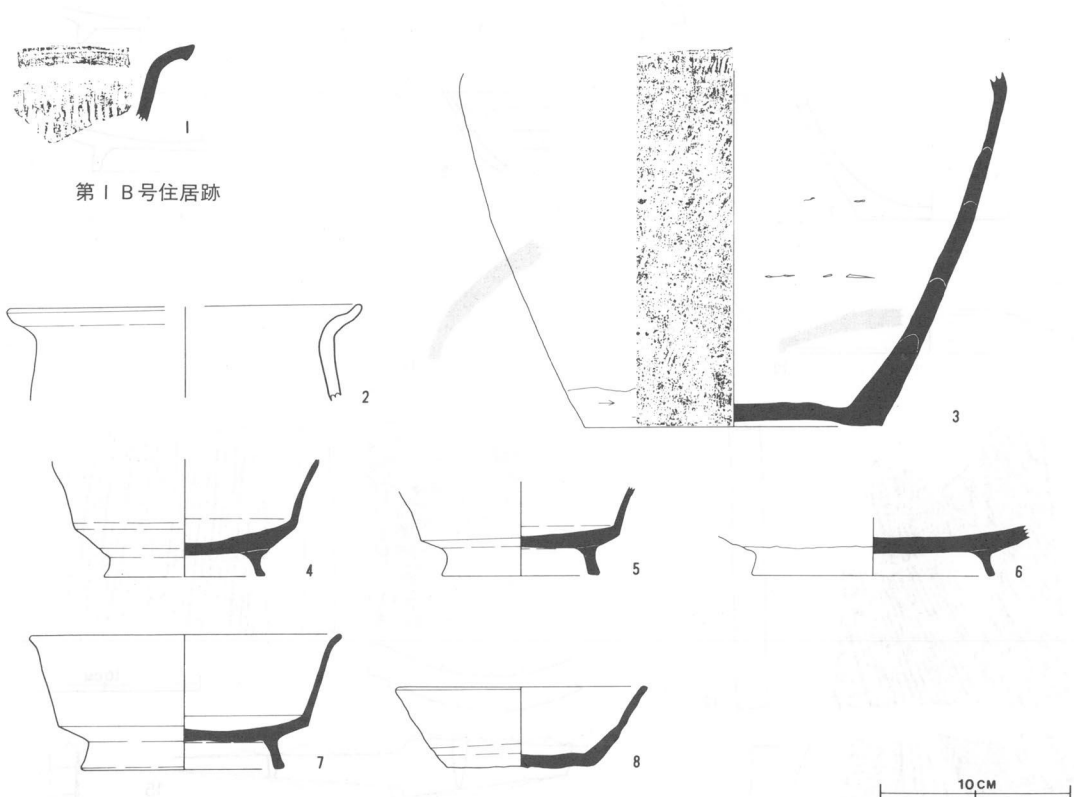
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
2	甕 土師器	A 18.3 B 4.8(現) C	口縁部は頸部より大きく外反して立ち上がり, 口唇部でやや立ち上がる。胴部付近は不明。	口縁部内外面共に横ナデ, 内面は多方向のナデ整形がなされている。	普通 砂粒・砂礫 橙色	外面にスス付着。
3	甕 須恵器	A B 18.6(現) C 15.6	底部は上底であり, 胴部は底部よりやや内彎きみに開き, 上位で大きく内彎する傾向有り。	胴部外面は右上から左下の斜方向の叩き後, 横ナデ, 下端は回転ヘラ削り。内面横ナデ整形である。	普通 長石粒 灰白色	胴部下位に緑色の自然釉が付着。
4	高台付 須恵器	A B 6.1(現) C 8.4	底部はやや厚めで, 体部へはやや丸味をもって移行し, 体部は器厚をうすくし, やや外反しながら立ちがる。高台は外下方へふんばるように貼り付ける。	底部は回転ヘラ削り, 高台部は横ナデ整形が施され, 体部は水挽き整形がなされている。	普通 長石粒 緑灰色	



第4図 第1A号住居跡出土遺物実測図

遺物解説表 (第5図)

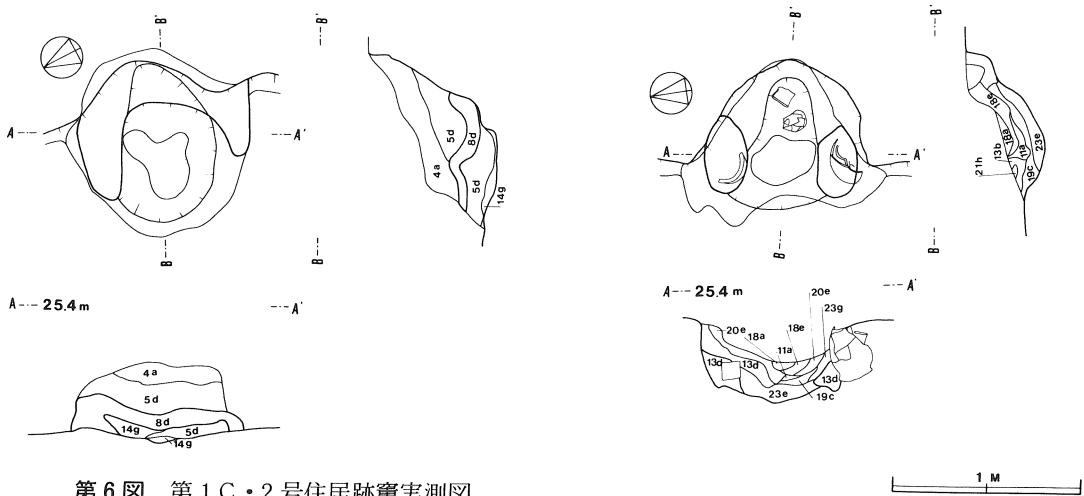
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	高台付坏須恵器	A B 4.6(現) C 8.3	底部と体部との境は稜を有し、体部は器厚をややうすく、外上方へ直線的に立ち上がり、中途よりやや大きく開く傾向にあり、高台を「ハ」の字に貼り付けている。	体部は内外面共に水挽き整形がなされ、高台部は横ナテ整形がなされている。	良好 細砂 灰色	内面に漆紙付着。
6	高台付坏須恵器	A B 2.6(現) C 12.8(復)	底部の破片で、底部は器厚をやや厚くし、体部は大きく外上方へ広がる傾向にある。高台は「ハ」の字に貼り付けている。	底部は回転ヘラ削り、高台部は横ナテ整形、体部は水挽き整形が施されている。	普通 細砂・雲母 緑灰色	
7	高台付坏須恵器	A 16.4 B 7.1 C 13.0	底部と体部との境は稜を有し、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は外反し、端部ははほ丸く収めている。また外下方へややふんばる高台を貼り付ける。	底部は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削りを施し、体部は水挽き整形がなされている。	良好 長石粒・細砂粒 灰白色	
8	坏須恵器	A 13.2 B 4.3 C 7.5	底部はやや厚めで、体部へはわずかに丸味を持って移行し、体部は器厚を減じながら外上方へ立ち上がる。端部はやや外方へはぶく突出する。	底部はヘラ切り後、一方からのヘラ削り、体部はナテ整形がなされている。	普通 長石・石英粒 暗灰黄色	内面体部中位以下に漆が付着している。



第5図 第1B・1C号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡(第3・6図)

本跡はA2g<sub>9</sub>を中心に確認され、西側で第1A号住居跡と、南西部で第1C号住居跡と接し、第6号住居跡の西側3.2mに位置している。規模は長軸2.86m・短軸2.76mの隅丸方形の平面形



第6図 第1C・2号住居跡竈実測図

を呈し、主軸方向はN-79°-Wである。壁高は25~38cmほどで、なだらかに外傾して立ちあがり、壁下には竈を有する。東壁を除いた壁下に壁溝が周り、幅12~18cm、深さ5cmほどを測る。床は全体に平坦で、ロームが硬く踏み固められている。ピットは北西部のコーナーを除いた各コーナー部から3個確認されいずれも支柱穴と考えられる。

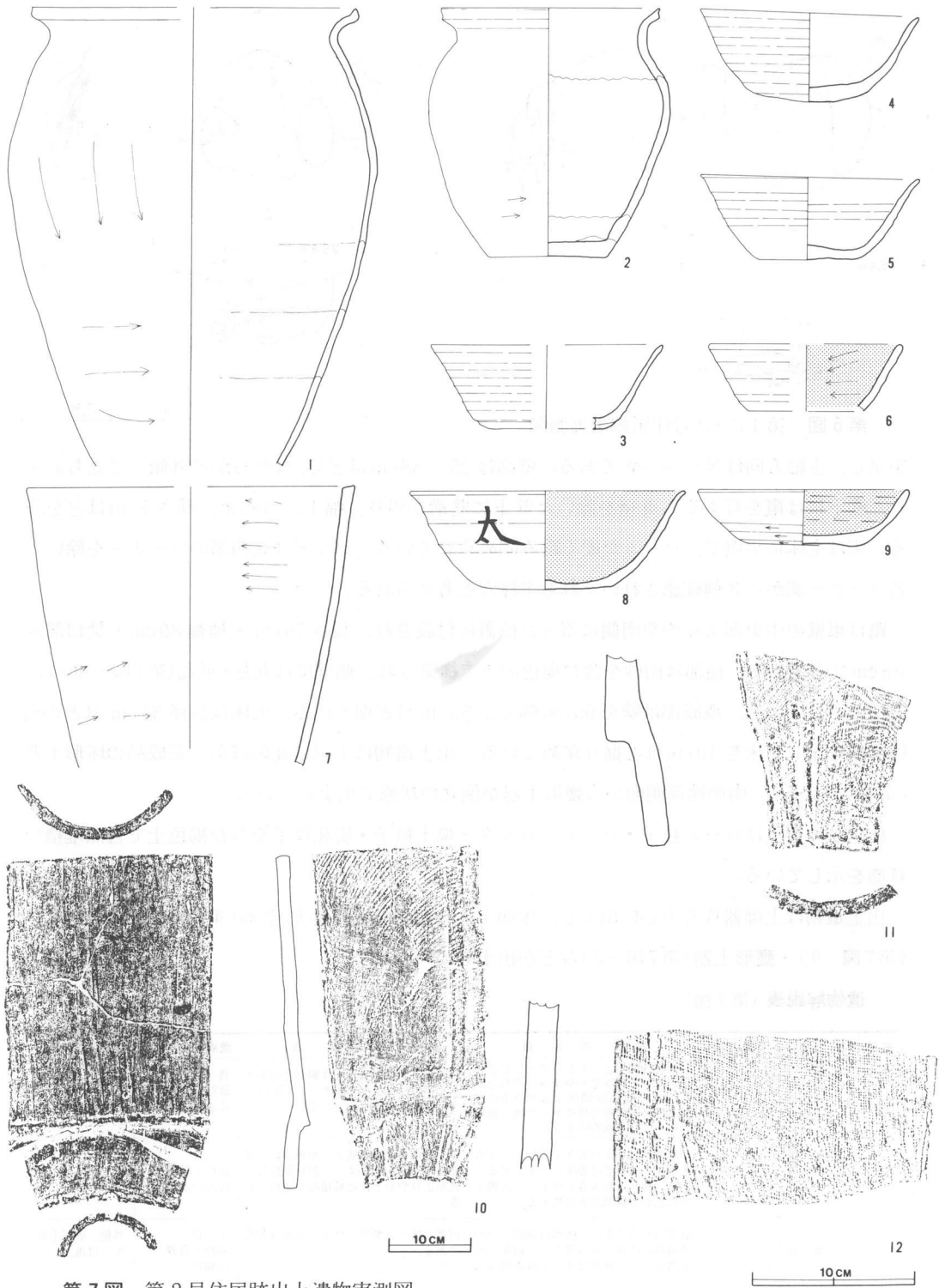
竈は東壁の中央部よりやや南側に寄った位置に付設され、長さ79cm・袖幅80cm・焚口部幅38cmほどである。袖部は山砂を含む褐色の土で構築され、側壁には丸瓦・平瓦(第7図-10・12)で補強されていた。焼成部は壁を95cm幅で、55cmほど掘り込み、火床は長径35cmほどの楕円形状を呈し、床を10cmほど掘り窪めている。出土遺物は上記の瓦のほか、完成品の坏形土器(第7図-4・5)、南側袖部側面から甕形土器が倒立の状態出土している。

住居跡の覆土はローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む褐色土で自然堆積の状態を示している。

出土遺物は土師器片を中心に出土し、床面上より完形の墨書坏形土器(第7図-8)・坏形土器(第7図-9)・甕形土器(第7図-2)などが出土している。

遺物解説表(第7図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕土師器	A 19.6 B 28.0(現) C	口縁部は頸部より大きく外反して立ち上がり、口唇部でややゆるく立ち上がる。また胴部は頸部より外下方に内彎ぎみに胴部最大径に至った後、底部へ内下方に直線的に至る。	内面はナデ整形、外面は胴部上位をナデ、中位はヘラ削り後ナデ、下位はヘラ磨き整形が施されている。	普通 砂粒・砂礫 にぶい橙色	
2	小形甕土師器	A 13.5(復) B 15.2 C 7.4	口縁部は頸部より大きく外反して立ち上がり、口唇部は器厚をうすくする。胴部は頸部より大きく外下方へ内彎ぎみに広がり胴部最大径に至る。	整形は内外面共に横ナデが施され、底部よりやや上位はヘラ削り痕有り、底部よりやや上位に輪積痕が認められる。	不良 砂粒・砂礫 にぶい赤褐色	
3	坏土師器	A 14.2(復) B 5.1 C 7.3	底部は平坦であり、体部は底部よりやや直線的に外上方へ開く。口縁部でやや外反し、口唇部はやや丸味を帯びる。	内面は横ナデ整形、外面は水挽き整形である。	不良 砂粒・砂礫 灰褐色	外側、底部上位にスス附着。



第7图 第2号住居跡出土遺物実測図



遺物解説表(第7図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
4	坏 土師質須恵器	A 13.4 B 5.4 C 6.0	底部は丸底状を呈し、体部は底部より器厚をやや薄くしながら丸味をもって立ち上がり、やや内彎きみに外上方へ大きく開く。また口縁部は外反する。	底部はヘラ切り後、ヘラ削りが施され、体部は内外面共に水挽き整形である。	良好 砂粒 にぶい橙色	
5	坏 土師質須恵器	A 13.5 B 5.2 C 6.0	底部は一部凹みを有し、側面は直線的に外上方へ大きく開く。また口縁部で外反する。	水挽き整形がなされた後、内外面共にナデ整形がなされている。	良好 砂粒・砂礫 にぶい黄橙色(外) 灰黄色(内)	底部から胴部にかけて焼土付着。
6	坏 土師器	A 12.0(復) B 4.1 C	底部は欠損し、体部は底部より大きく外上方へ開きながら立ち上がる。口唇部は丸味を帯びている。	内面はヘラ磨き、外面は水挽き整形がなされている。	良好 砂粒・砂礫 にぶい黄褐色(外) 黒色(内)	
7	甌 土師器	A 20.0(復) B 17.1(現) C	胴部から口縁部にやや内彎きみに外方向へ少々広がりながら立ち上がる。	内面上位は細いヘラ磨き、下位は横ナデ、底部付近に水挽き痕有り。外面は横ナデ後丁寧な細いヘラ磨き、下位はヘラ削りが施されている。	良好 砂粒・砂礫 明赤褐色(外) にぶい橙色(内)	内面下位にスス付着。
8	坏 (墨書土器) 土師器	A 15.9 B 6.0 C 8.2	底部は平坦で、体部は底部より丸味を持って立ち上がった後、内彎きみに外上方へ開き、口縁部でやや外反する。口唇部は丸味を帯びる。	内面はヘラ磨き、外面は水挽き整形である。また底部はヘラ切り後、回転ヘラ削りが施されている。	良好 砂粒・砂礫 橙色(外) 黒色(内)	側面上位に「太」の文字が4文字書かれている。
9	坏 土師器	A 12.65 B 3.6 C 6.4	底部は平坦で、体部よりやや丸味を帯びて立ち上がった後、大きく内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部付近はやや器厚が厚くなる。	底部はヘラ切り後、体部下位までヘラ削り整形、内面はヘラ磨き、外面口縁部水挽き整形。	良好 砂粒 にぶい橙色(外) 黒色(内)	
10	瓦		丸瓦。	凹面には布目。		
11	瓦		丸瓦。	凹面には布目。		
12	瓦		丸瓦。	凹面には布目。		

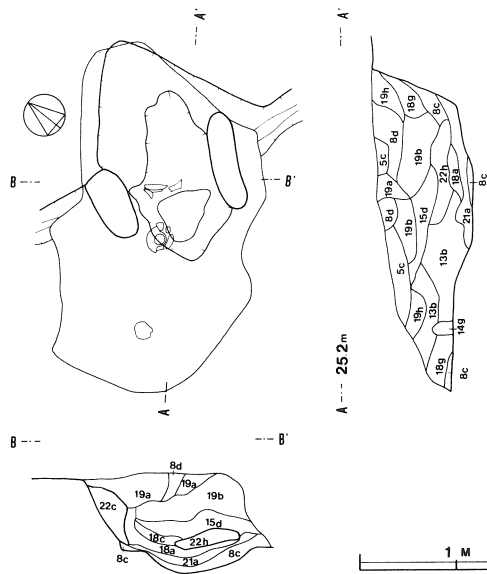
## 第3号住居跡(第8・9図)

本跡は遺跡のほぼ中央部A2j5を中心に確認され、2基の新しい土壌によって切られ、第4号住居跡の北西1mに位置している。規模は長軸3.1m・短軸2.85mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-24°-Eである。壁高は33~35cmで、垂直に立ち上がる。壁下には幅15~22cm・深さ7cmの壁溝が全周し、床は踏み固められて非常に硬く、全体に平坦である。住居跡内から3個のピットを確認したが、いずれも浅く本跡の支柱穴とは考えられない。

竈は北東壁中央部に付設され、長さ121cm・袖部75cm・焚口部幅45cmほどである。焼成部は壁を102cm幅で、58cmほど掘り込み、火床は長径28cmほどの不整形を呈し、床を11cmほど掘り窪めている。出土遺物は焚口部より須恵器の高台付坏形土器(第10図-7)を出土している。

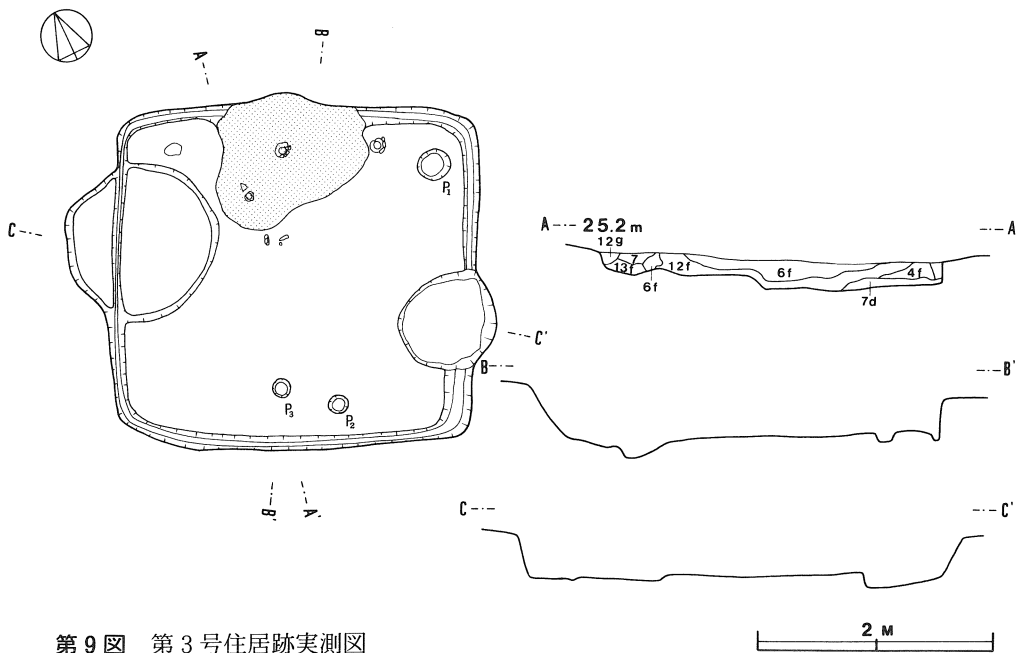
住居跡内覆土はロームブロック・炭化粒子・焼土粒子を含む柔らかい暗褐色の土がほぼレンズ状に堆積している。

出土遺物は土師器・須恵器を少量出土し、主に竈付近から検出されている。また、土師器の高台



第8図 第3号住居跡竈実測図

付坏形土器(第10図-3・4)を覆土中より、須恵器の坏形土器(第10図-6)は床面直上より出土している。



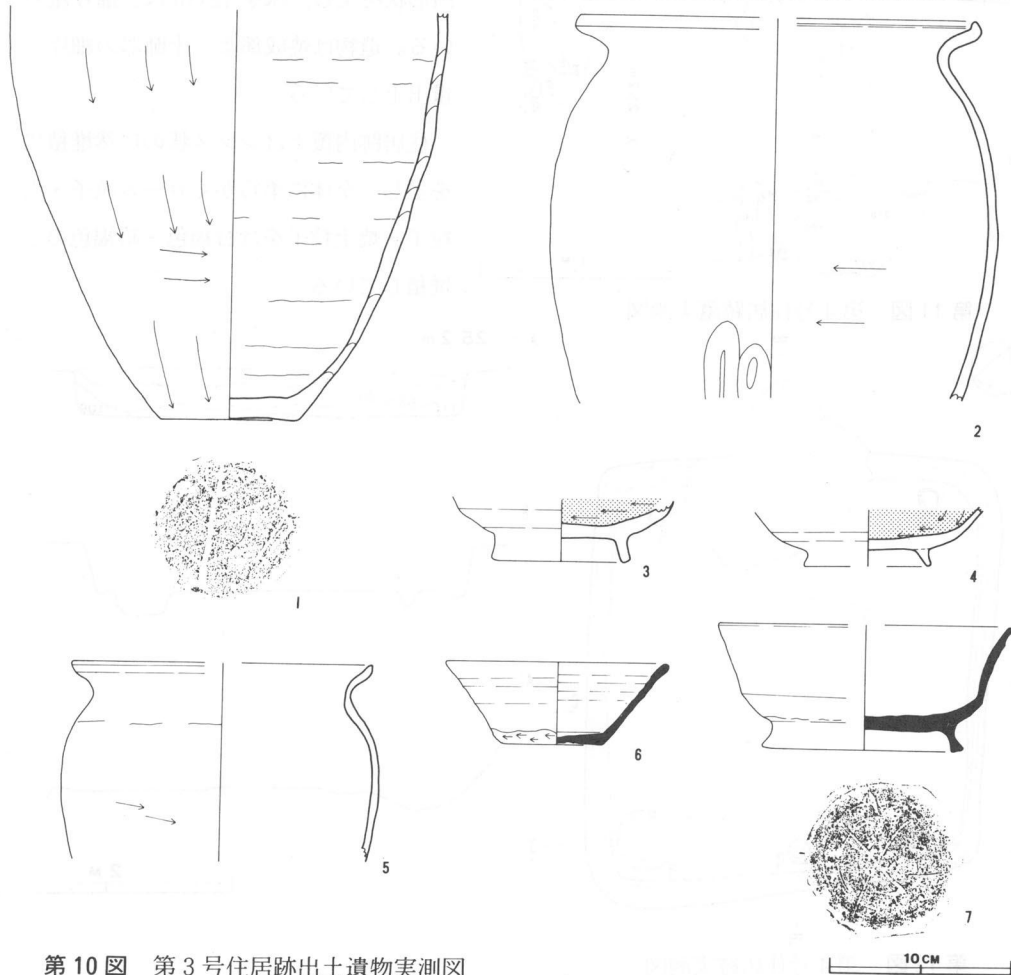
第9図 第3号住居跡実測図

遺物解説表(第10図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 22.4(現) B 22.4(現) C 7.4	底部はやや平坦で、胴部は底部よりやや内彎きみに外上方へ立ち上がる。器厚は0.5~0.7cmほどである。胴部最大径は上位に有すると思われる。) )	外面はヘラ削り後、ヘラ磨きが施され、内面はナデ整形である。また内面には輪横痕が顕著にみられる。底部に木葉痕有り。	普通 砂粒 灰褐色	
2	甕 土師器	A 22.1 B 20.6(現) C	口縁部は頸部より大きく外反し、口唇部で直立的に立ち上がり、丸味を持つ。胴部は頸部より内彎きみに外下方へゆるやかに開き中位最大径に至る。	内面ナデ、外面ヘラ削り後、胴位上位はナデ整形が施されている。	普通 砂粒・石英 灰褐色	

遺物解説表 (第10図)

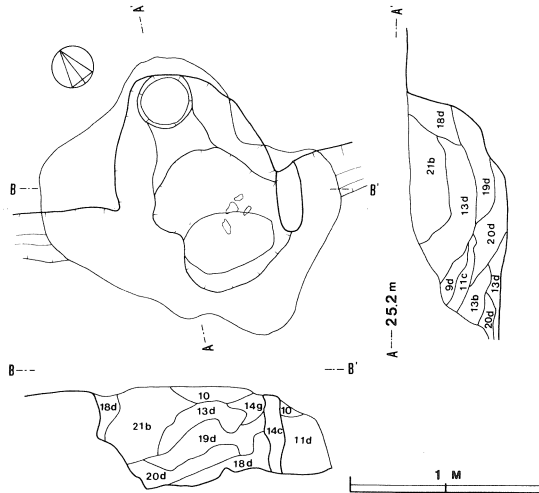
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	高台付坏土師器	A B 3.4(現) C 7.6	体部は底部より大きく外上方へ開いて立ち上がり、底部には貼付高台がつけられている。	内面はへら磨きが施され、外面は水挽き整形である。	普通砂粒 橙色(外) 黒色(内)	
4	高台付坏土師器	A B 3.0(現) C 6.9	底部は平坦で体部はゆるやかに底部より立ち上がった後、大きく外上方へ開く。底部に「ハ」の字の高台が貼り付けられている。	内面はへら磨き、外面は回転へら削りが施され、体部には水挽き痕が認められる。	普通砂粒・長石 明赤褐色	
5	甕土師器	A 16.4(復) B 10.8(現) C	口縁部は頸部よりやや外反して開き、口唇部は丸味をもつ。胴部は頸部より胴部最大径へ内彎して外下方へ開く。	口縁部内外面共に横ナデ、内面はナデ、外面はへら削り後ナデ整形が施されている。	普通砂粒・砂礫 黒褐色	
6	坏須恵器	A 12.2(11.7) B 4.5 C 5.5	底部はやや上げ底で、体部は直線的に外上方へ開き、口縁部上位でやや外反する。口唇部は丸味をもつ。	底部はへら切り後、外周部へらナデ、また体部下位外面手持ちへら削り、口縁部内外面共に横ナデ、その他水挽き整形がみられる。	灰黄褐色	内面に漆状付着物有り。
7	高台付坏須恵器	A 16.2 B 6.9 C 11.6(復)	底部は平坦で、底部より体部へ丸味をもって移行し、体部は外反きみに立ち上がる。底部には高台が貼り付けられている。	底部は回転へら削り、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 長石粒・細砂粒 灰白色	底部に「メ」印のへら記号有り。器面全体がガラガラで窯出の状態。



第10図 第3号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡(第11・12図)

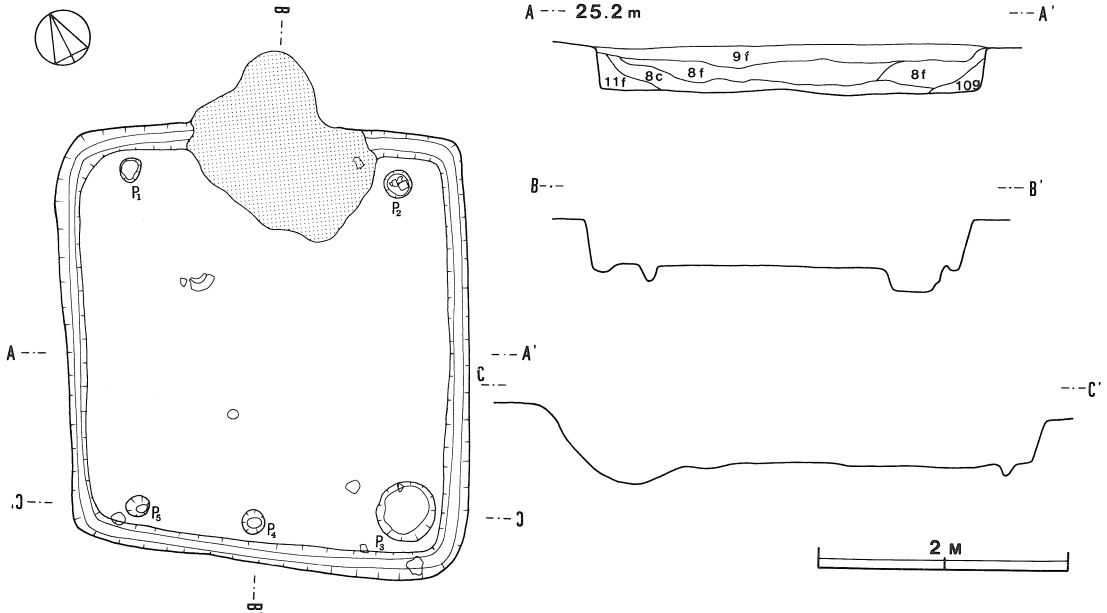
本跡はA2j6を中心に確認され、第3号住居跡の南東1m、第5号住居跡の南西2.3mに位置している。規模は長軸3.55m・短軸3.22mほどで、南のコーナー部に一部張り出しがみられるが、おおむね隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-27°-Wである。壁高は35~45cmで、直線的にやや外傾して立ちあがり、壁下に幅15~20cm・深さ10~15cmほどの壁溝が全周している。床はロームが踏み固められて非常に硬く、全体に平坦である。ピットは5個確認され、配列的には支柱穴と考えられるが、いずれのピットも深さ10~15cmと浅く支柱穴とはとらえにくい。



第11図 第4号住居跡竈実測図

竈は北東壁中央部に付設されていたが、保存状態が悪く、袖部の片側と煙道の一部を確認し、焼成部は壁を85cmの幅で、60cmほどを掘り込み、火床は長径47cmの楕円形状を呈し、床を12cmほど掘り窪めている。遺物は焼成部より土師器の細片を少量出土している。

住居跡内覆土はレンズ状の自然堆積状態を呈し、全体に柔らかくローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を含む褐色・暗褐色の土が堆積している。



第12図 第4号住居跡実測図

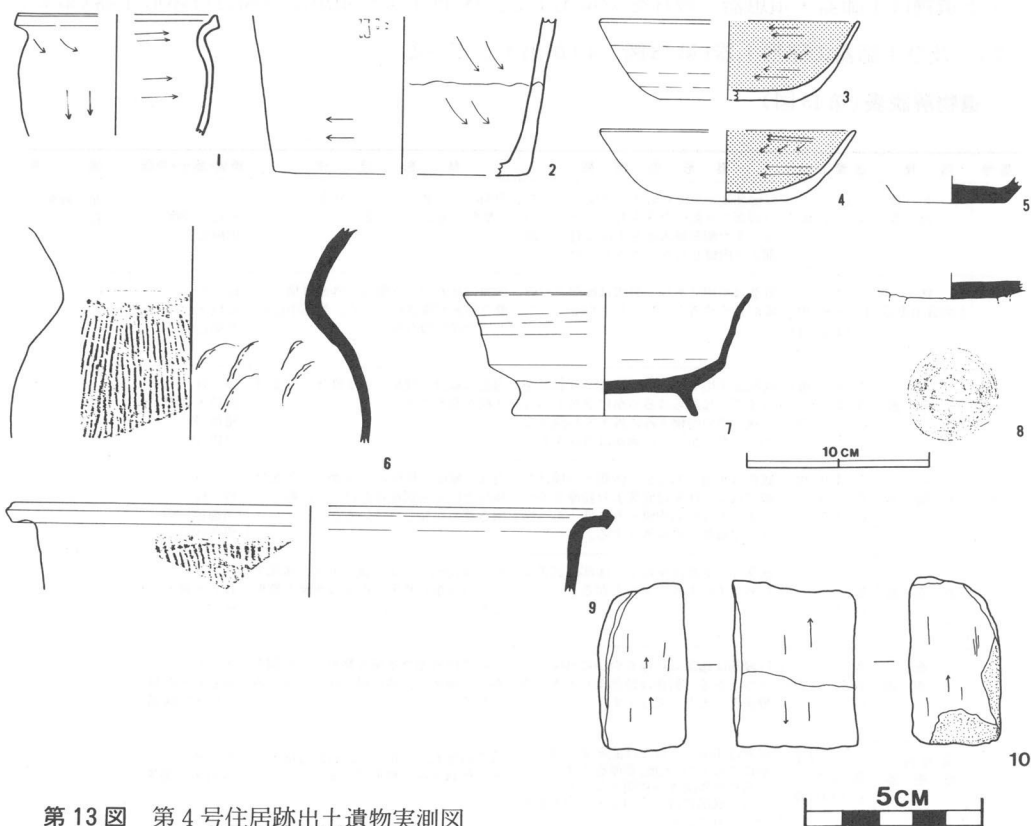
出土遺物は土師器・須恵器の破片を少量出土し、床面上より須恵器の高台付坏形土器(第13図-7)、及び土師器の坏形土器(第13図-4)が出土している。

遺物解説表(第13図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	小形壺 土師器	A 10.8 B 7.1(現) C	口縁部は頸部より大きく外反したのち口辺部で外側へ丸味をもって立ち上がる。また胴部最大径を上位に有し、頸部より内彎しながら外下方へ至る。	内面はヘラ磨き(左→右)外面はヘラ削り整形が施されている。	不良 砂粒・砂礫 黒褐色	内面口縁部にスス付着。
2	鉢 土師質須恵器	A B 8.6(現) C 14.0(復)	底部は平坦であり、胴部は底部より直線的にやや外上方へ立ち上がる。	内面は斜方向へラ磨き、外面は横へラ磨き整形が施されている。胴部中央にへらの押圧痕有り。	良好 砂粒・砂礫 明褐色	
3	坏 土師器	A 14.3(復) B 4.5 C 7.6(復)	底部は平坦で、体部は底部より器厚をうすくしながらゆるやかに立ち上がった後、やや内彎ぎみに外上方へ開きながら立ち上がる。口縁部は丸味をもつ。	内面は縦位、横位のへラ磨き、外面は水挽き整形である。	良好 砂粒・砂礫 橙色(外) 黒色(内)	
4	坏 土師器	A 14.0(復) B 3.9 C 4.5	底部は平坦であるが、体部との境は明瞭でなく、体部は底部より器厚をややうすくしながら内彎ぎみに外上方へ開き、口縁部でやや外反する。	内面は縦位、横位のへラ磨き、外面は体部下位から底部にかけて、回転へラ磨き整形が施されている。	良好 砂粒 明褐色(外) 黒色(内)	
5	坏 須恵器	A B C 6.0	底部片で底部は平坦で、体部は底部より外上方へ大きく立ち上がる。	底部は回転へラ切り後、ナデ、体部下位はへラ削り整形、内面は水挽き整形である。	普通 長石・細砂 灰白色	
6	壺 須恵器	A B 11.5(現) C	口縁部は頸部よりゆるやかに外反して立ち上がる。胴部は頸部より大きく内彎ぎみに大きく張り出す。	口縁部内外面共水挽き整形、内面胴部押えの後ナデ、外面縦方向の叩きがみられる。	不良 長石粒・細砂 灰白・暗灰黄色	
7	高台付坏 須恵器	A 15.7(復) B 6.7 C 10.0(復)	底部は平坦で、体部は底部よりゆるやかに立ち上がった後、器厚をうすくしながらやや外反ぎみに開きながら立ち上がる。底部には「ハ」の字の高台が貼り付けられている。	底部は回転へラ削り、高台部は横ナデ、その他は水挽き整形である。	普通 長石・石英等含 灰色	
8	高台付坏 須恵器	A B C	底部片で底部は平坦である。	底部は回転へラ切り後ナデ整形、内面水挽き整形である。	良好 長石・細砂粒 灰白	底部下面に1印のへラ記号。
9	鉢 須恵器	A 33.4(復) B C	口縁部は頸部より横に屈折し、口辺部で直立する。	口縁部内外面共に横ナデ、外面は縦方向の叩き整形である。	普通 長石粒・細砂・ 雲母 灰色	
10	砥石		原石は硬質砂岩	両面に使用痕あり。		

## 第5号住居跡(第14図)

本跡は遺跡の中央部よりやや北側 A2i7 を中心に確認され、第4号住居跡の北東側 2.5m、第9号住居跡の東側 8m に位置している。規模は長軸 3.22m・短軸 3.05m のほぼ隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向は N-18.5°-E である。壁高は 22~25cm と浅く、直線的にやや外傾して立ちあがる。また壁下には北東部のコーナー部を除く全体に幅 10~15cm・深さ 5cm の壁溝が周回している。床は全体に平坦であるが、床の状態は他の住居跡と異なり、ロームのやや軟弱なものである。ピットは 9 個確認されたが、配列からいって P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub> が主柱穴と思われる。



第13図 第4号住居跡出土遺物実測図

竈は北東壁の中央部に付設され、保存状態が非常に悪く、袖部の痕跡を確認するにとどまる。袖部は砂混りの粘土で構築され、袖幅は77cmほどで、煙道部は壁を85cm幅で、22cmほど掘り込んでいる。

住居跡内覆土は自然堆積の状態を示し、上層は黒褐色・下層は暗褐色であり、いずれもロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む柔らかい覆土である。

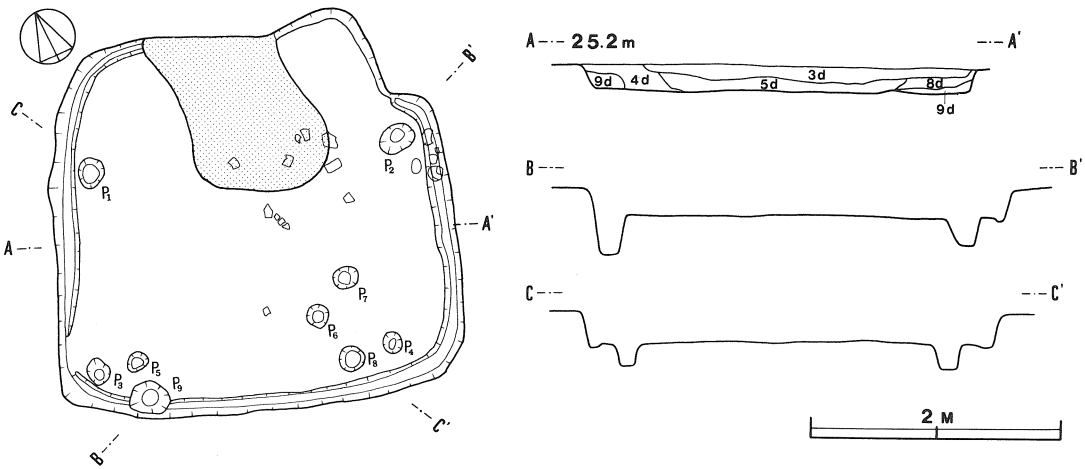
出土遺物は竈前方部と東側に多く、土師器を中心に出土し、坏形土器(第15図-3)は床面直上より出土しているが、その他の遺物はいずれも覆土中からの出土遺物である。

遺物解説表(第15図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付坏土師器	A 16.8 B 6.4 C 9.2	底部は平坦で、体部は底部より器厚をほぼ同一にして、やや内彎きみに大きく外上方へ立ち上がる。口辺部で外反する。底部に「ハ」の字の高台が貼り付けられている。	内面は横位のヘラ磨き、外面は高台部横ナデ、体部はナデ整形、外面に水挽き痕が認められる。	良好 砂粒・スコリア 暗赤褐色(外) 黒色(内)	
2	甕土師器	A 14.4(復) B 5.5(現) C	口縁部は頸部よりやや直線的に外上方へ立ち上がり、口唇部は丸味をもつ。また胴部は頸部より内彎きみに外下方へ張り出す。	全体にナデ整形が施され、口辺部に水挽き痕が認められる。	普通 砂粒・石英 黒褐色	

遺物解説表(第15図)

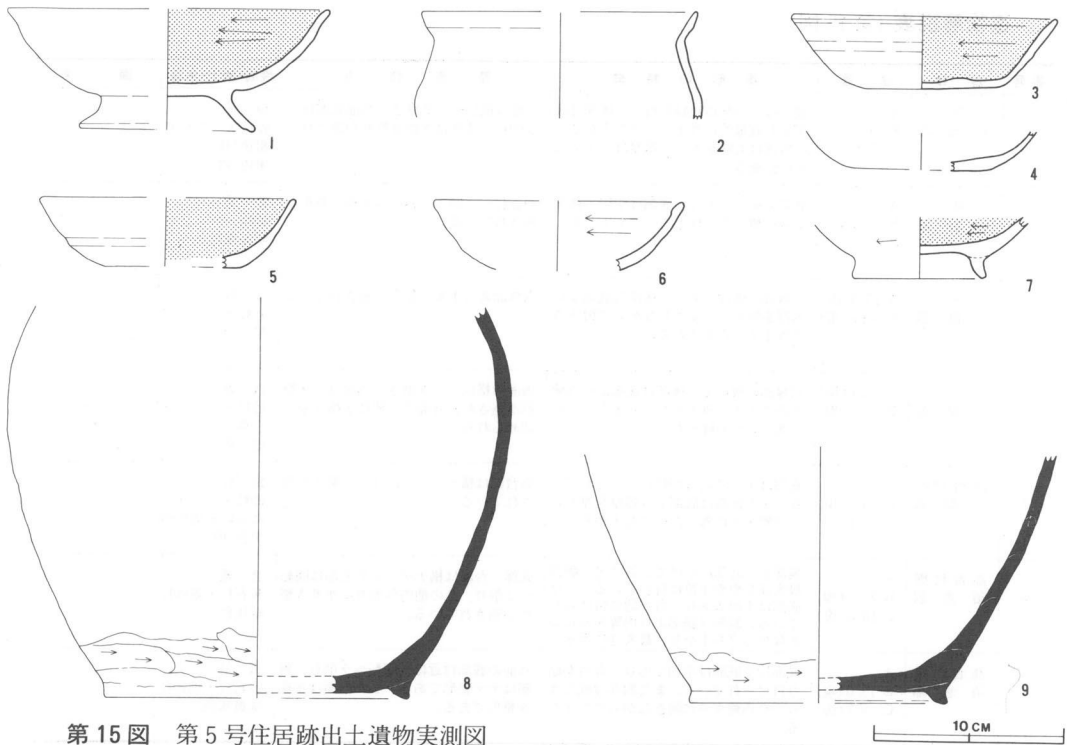
番号	器種	法量	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	坏土師器	A 13.7 B 3.9 C 7.2	底部は中心部に傾斜を有し、体部は底部より直線的に外上方へ立ち上がる。口唇部は丸味をもつ。器厚は0.3~0.4cmを測る。	内面は横位のヘラ磨き、外面底部はヘラ削り、体部は水挽き整形が施されている。	良好 砂粒・スコリア 橙色(外) 黒色(内)	
4	坏土師器	A B 2.0(現) C	底部の破片であり、底部は平坦で体部より内彎きみに外上方へ立ち上がる。	内面はヘラ磨き、外面は水挽き整形が施されている。	普通 砂粒・スコリア 明赤褐色	
5	坏土師器	A 13.9(復) B 3.65(現) C	口縁部の破片であり、体部は底部より器厚を徐々にうすくしながら内彎きみに外上方へ立ち上がる。	内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒・スコリア 橙色	
6	坏土師器	A 13.1(復) B 3.6(現) C	口縁部の破片で、体部は底部より内彎きみに大きく外上方へ立ち上がり、口辺部でやや丸味をもつ。	内面は横位のヘラ磨き、外面はナデ整形が施され、外面の一部に水挽き痕が認められる。	普通 砂粒・スコリア・石英 橙色	
7	高台付坏土師器	A B 3.2(現) C 7.1	底部は平坦で高台が貼り付けられている。また体部は底部より器厚を厚くして内彎きみに外上方へ立ち上がる。	高台部は横ナデ、内面はヘラ磨きが施されている。	良好 砂粒・スコリア にぶい赤褐色(外) 黒色(内)	
8	高台付甕須恵器	A B 20.5(現) C 16.0(復)	胴部から底部にかけての破片で、胴部最大径をやや上位に有している。また底部は平坦であり、台が貼り付けられている。胴部は底部より内彎きみに開きながら立ち上がり、最大径に至る。	底部、台部は横ナデ、やや上部は回転ヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	普通 長石粒・細砂粒 緑灰色	
9	高台付甕須恵器	A B 13.0(現) C 9.7(復)	底部片で底部は平坦であり、高台が貼り付けられている。また胴部は底部よりやや内彎きみに開きながら立ち上がる。	外面の底部付近は、回転ヘラ削り、胴部はナデ整形である。また内面は水挽き整形である。	普通 長石粒・細砂粒 灰黄褐色	



第14図 第5号住居跡実測図

第6号住居跡(第16・17図)

本跡は遺跡の北側 A3f1 を中心に確認され、第2号住居跡の東側3.2m、第7・8号住居跡の北側0.5mに位置している。規模は長軸4.86m・短軸4.56mの隅丸長方形の平面形を呈し、本遺跡の中では最も大型の住居跡である。また主軸方向はN-13°-Eである。壁高は38~50cmほど

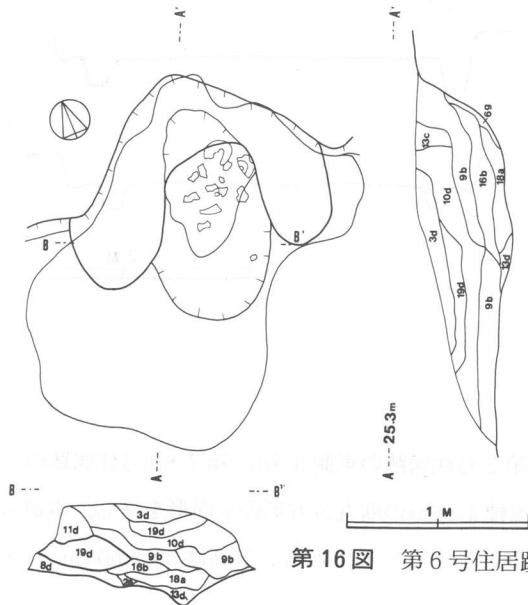


第15図 第5号住居跡出土遺物実測図

で、垂直に立ちあがり、壁下には幅12~15cm・深さ5cmの壁溝が周回している。床は全体に平で硬くしまっているが中央部が若干軟弱である。ピットは8個確認されているが、いずれのピットも20cm以下であり支柱穴とは考えられない。竈は北東壁の中央部に付設され、長さ136cm・袖幅140cm・焚口部幅60cmほどである。また、焼成部は壁を140cm幅で、62cmほど掘り込み、

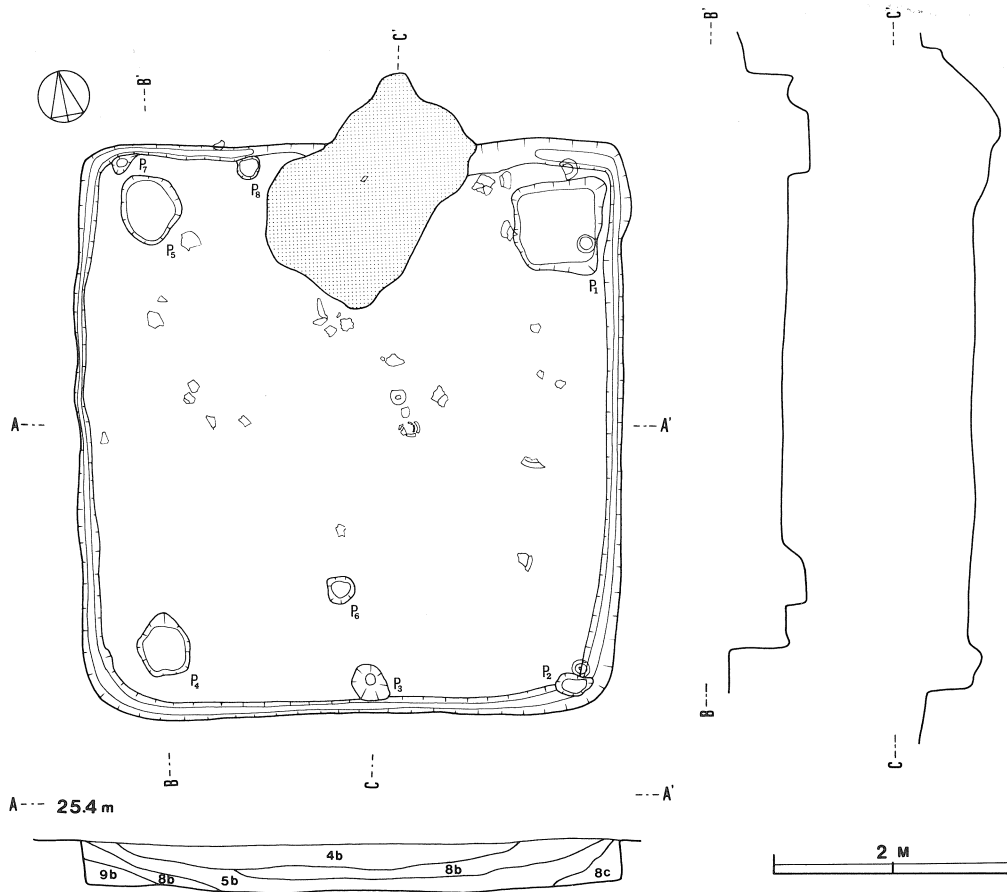
火床は長径63cmほどの不整形を呈し、床を5cmほど掘り窪めている。遺物は焼成部内部より土師器の甕形土器(第18図-2・4)、須恵器の壺形土器(第18図-6)、蓋形土器(第18図-10・13)を出土している。

住居跡内覆土は大きく5層に分けられ、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色・褐色の土がレンズ状に自然堆積している。遺物は須恵器を中心に北側より検出され、床面上より坏形土器(第18図-12)などが出土している。



第16図 第6号住居跡竈実測図





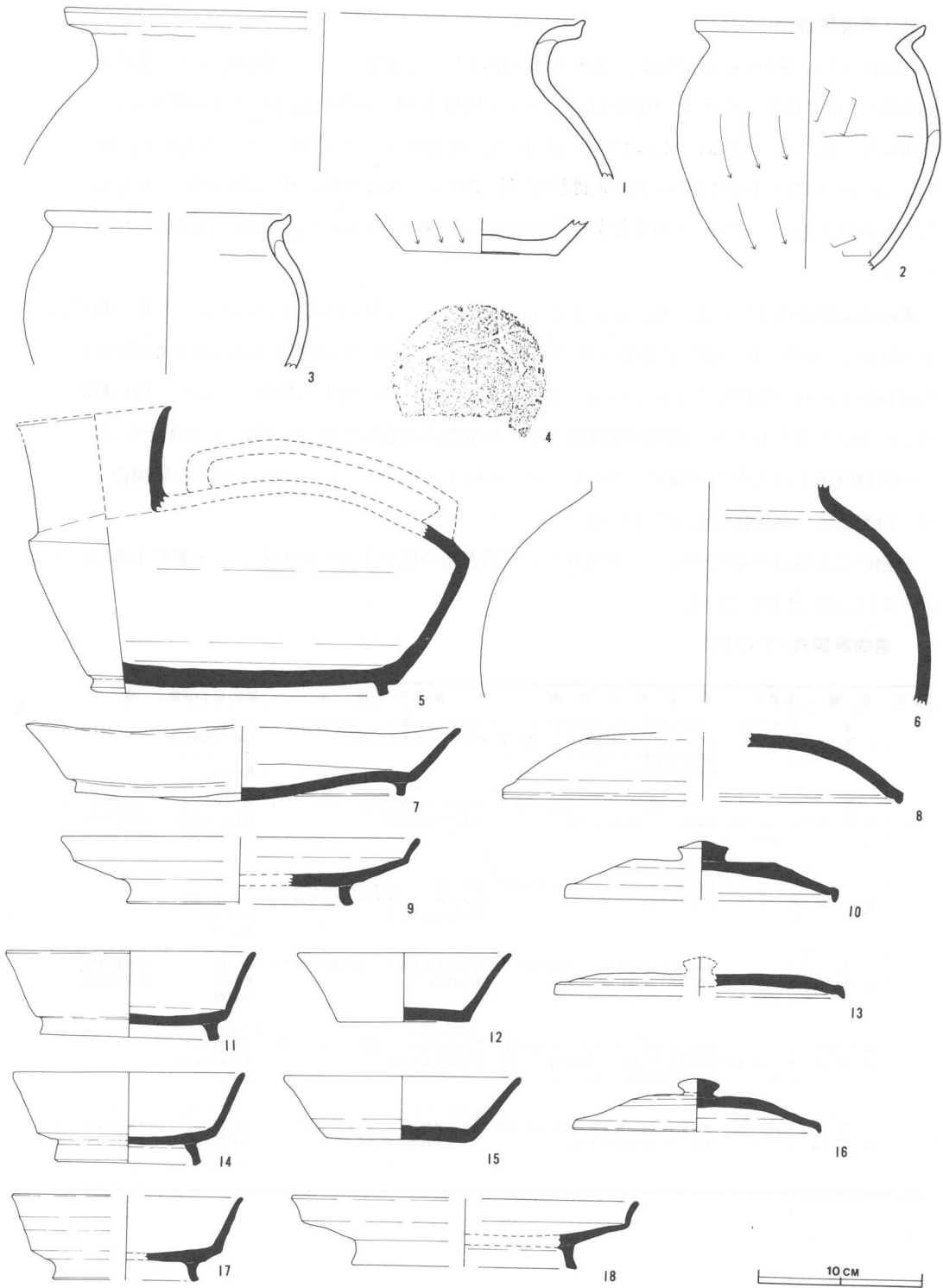
第17図 第6号住居跡実測図

遺物解説表 (第18図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 31.8 B 10.7(現) C	口縁部は頸部よりやや外反した後、大きく外反して口辺部に至る。胴部は頸部よりやや内彎ぎみに大きく外下方へ張り出す。	口縁部内外面共に横ナデ、その他は全体にナデ整形が施されている。	普通 砂粒・砂礫 橙色	
2	甕 土師器	A 14.0(復) B 14.8(現) C	口縁部は頸部より直線的に大きく外上方へ立ち上がる。また胴部最大径を中位上半に有し、頸部より内彎ぎみに外下方へ張り出して最大径に至る。	口縁部は、内外面共にナデ整形、外面は縦位のへら磨きが施され、内部の一部の輪積痕が認められる。	普通 砂粒・スコリア 明赤褐色	
3	甕 土師器	A 15.0 B 9.5(現) C	口縁部は頸部より大きく外反し、口辺部に凹みを有し、長さも短いものである。胴部より内彎しながら外下方へ張り出す。	口縁部内外面共に横ナデ、内面ナデ、外面へら磨きが施されている。	普通 砂粒・砂礫・石英 赤黒色	
4	甕 土師器	A B C 9.4	底部の破片で、底部はおおむね平坦であり、胴部へ直線的に立ち上がる。	底部底面に木葉痕が認められ、内面はナデ、外面はへら磨きが施されている。	普通 砂粒 明赤褐色	底部に木葉痕、外面の一部にスス附着。
5	平須 盆 患器	A B C 18.1	口縁部は筒形に近い漏斗状口縁である。底面はやや中央部が凹み、体部はやや内彎ぎみに外上方へ開く。	全体に横ナデ整形である。	良好 長石粒・細砂	口頸部、体部上面に灰緑色の自然釉附着。

遺物解説表 (第 18 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6	壺 須恵器	A B 13.7(現) C	胴部は頸部より内彎ぎみに大きく外下方へ張り出している。	外面は右上から左下方向の叩き目、また一部横ナデを行い叩き目を消している。	良好 長石粒・細砂粒 灰白色	胴部、かた部に自然釉付着。
7	高台付盤 須恵器	A 26.4 B 4.6 C 20.0	非常に歪みの大きい盤で、底部は中央部に大きく傾き、体部は直線的に外上方へ開く。また底部に高台が貼り付けられている。	底部は回転ヘラ削り、高台部は横ナデ、体部は内外面共に水挽き整形である。また内部底面は一方方向のナデ整形である。	良好 長石粒・細砂 黄灰色	
8	蓋 須恵器	A B 4.1(現) C 24.4	体部は大きく外下方へ開き、口辺部でやややね上がり、口唇部はやや開いて直立する。	内面天井部は水挽き整形後、多方向からのナデ、その他の各部は、水挽き整形が施されている。	普通 長石粒・細砂粒 黄灰色	内面に径 13.5 cm の重ね焼き痕跡有り。
9	高台付盤 須恵器	A 21.8(復) B 4.1 C 13.8(復)	底部は平坦で、体部は底部より連続してゆるやかに外上方へ開き、口縁部でやや外反して立ち上がる。底部には「八」の字の高台が貼り付けられている。	底部は回転ヘラ削り、高台部は横ナデその他、内外面共に水挽き整形である。	普通 長石粒・細砂 灰色	
10	蓋 須恵器	A B 3.6 C 16.8	宝珠状のつまみを有し、頂部は直線的に開く。口辺部は直立する。	頂部は回転ヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形	普通 長石粒・細砂・ 雲母 灰白色	
11	高台付坏 須恵器	A 15.2 B 5.4(5.1) C 10.9	底部はおおむね平坦で、体部は直線的に立ち上がり、口辺部でやや外反する。器厚は 0.4 cm ほどである。	底部は回転ナデ、高台部側面は横ナデ、底面は研磨が行われている。その他、体部内外面共水挽き整形後、口縁部のみ横ナデ整形である。	普通 長石粒・細砂 灰色	
12	坏 須恵器	A 13.0 B 4.2 C 8.0	底部はやや上げ底きみであり、体部は底部よりやや外反しながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後ナデ、その他は全体に水挽き整形が施された後、口縁部に横ナデ整形が行なわれている。	普通 長石粒・細砂 灰色	
13	蓋 須恵器	A B 1.5(現) C 17.8	頂部は直線的に平坦に開き、口縁部はゆるやかに外下方へ開く。	頂部回転ヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 細砂粒 黄灰	
14	高台付坏 須恵器	A 14.0 B 5.6 C 8.8	底部は中央部にやや傾斜し、体部は器厚を同じにして、直線的に外上方へ、口辺部でやや外反する。また底部には高台が貼り付けられている。	底部はヘラ削り、高台部は横ナデ、体部外面及び内面は水挽き整形が施され、口縁部は横ナデ整形である。	普通 長石粒・細砂 褐灰	
15	坏 須恵器	A 14.6 B 4.0 C 8.8	底部は平坦で、体部は直線的に器厚をうすめながら外上方へ開く。	底部回転ヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形後、口縁部に横ナデ整形が行なわれている。	不良 細砂粒・雲母 にぶい黄橙色	
16	蓋 須恵器	A B 3.2 C 15.2	つまみは宝珠状を呈し、頂部は滑らかな開きをみせる。口唇部はやや直立きみに立ち上がる。	頂部は回転ヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形である。	普通 長石粒 灰色	
17	高台付坏 須恵器	A 14.0(復) B 5.2 C 8.8(復)	底部は平坦で、高台が貼り付けられている。体部は底部より器厚をやや薄くしながら直線的に立ち上がり、口辺部でやや外反する。	高台部は横ナデ、その他体部は内外面共水挽き整形である。	普通 長石粒・細砂 灰色	
18	高台付盤 須恵器	A 21.2(復) B 4.2 C 13.8(復)	体部は底部より直線的に大きく外側へ広がりが口縁部は弓なりに立ち上がる。底部には高台が貼り付けられている。	高台部は横ナデ、その他内外面共に水挽き整形である。	普通 長石粒・細砂 灰色	処々灰緑色の釉が付着している。



第18図 第6号住居跡出土遺物実測図

## 第7号住居跡(第20図)

本跡はA3g<sub>1</sub>を中心に確認され、第8号住居跡によって北東コーナー部が切られ、第6号住居の南側0.5mに位置している。規模は長軸3.6m・短軸3.14mの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-70°-Wである。壁高は27~40cmで、直線的にやや外傾して立ちあがり、壁下に10~15cm・深さ3cmほどの浅い壁溝が周回している。床は全体に硬く踏み固められており、若干の凸凹がある。ピットは中央部よりやや西側に1個確認されたが、本跡とは関係のないピットである。

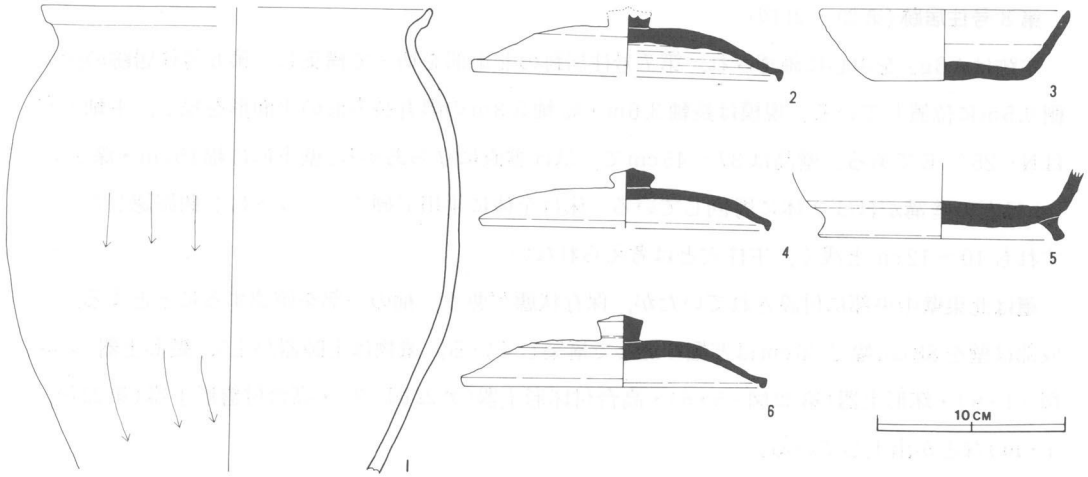
竈は南東壁中央部に付設され、長さ102cm・袖幅69cm・焚口部幅40cmほどである。袖部は屋内は短く、屋外へ長く伸びて構築されている。焼成部は壁を78cm幅で65cmほど掘り込み、火床は長径46cmの楕円形を呈している。また、内部には多量の焼土が堆積しており、長い期間使用したのと考えられる。遺物は焼成部内部より須恵器の蓋形土器(第19図-6)が出土している。

住居跡内覆土は大きく3層に分けられ、ローム粒子・ロームブロックなどを含む暗褐色土である。自然流入の堆積状態を示している。

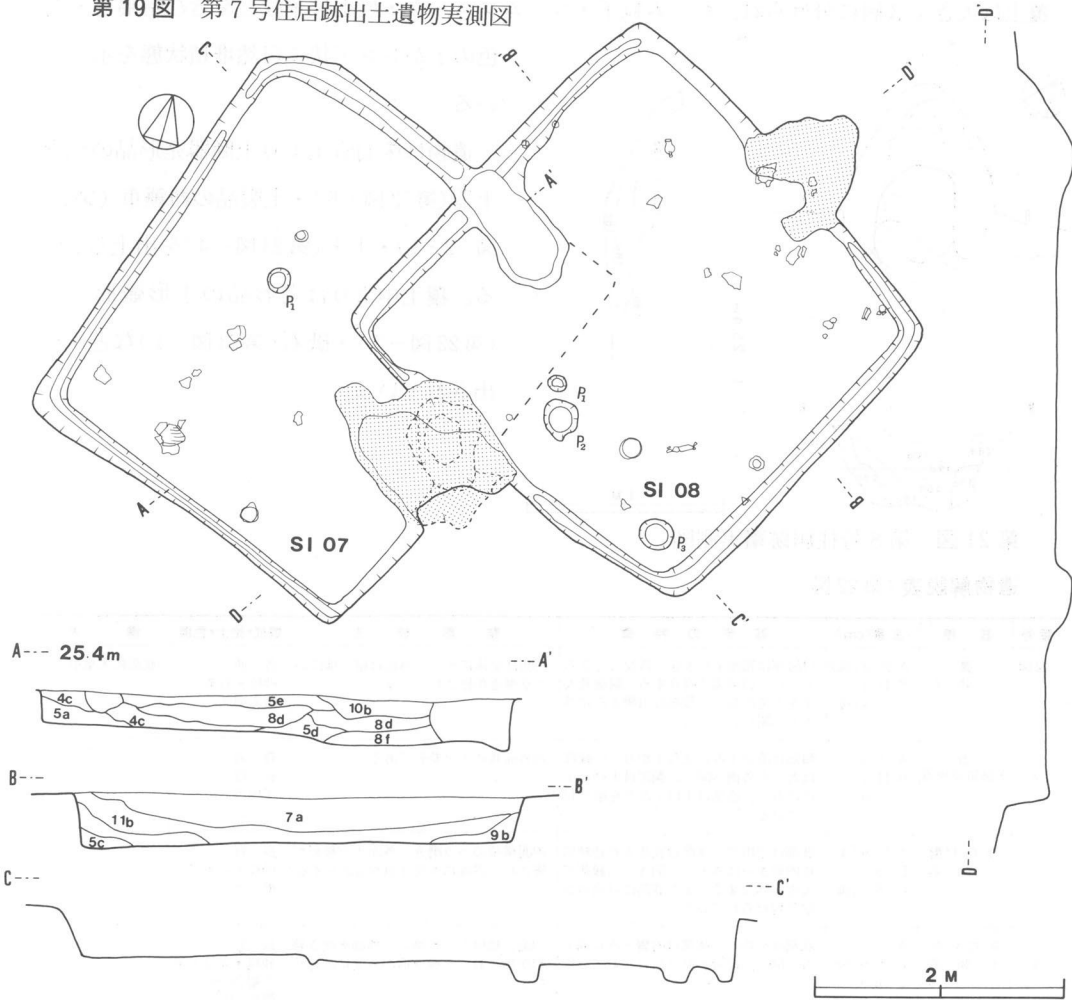
遺物の出土量は非常に少なく、床面直上より須恵器の坏形土器(第19図-3)・蓋形土器(第19図-2)などが出土している。

## 遺物解説表(第19図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 20.2(復) B 24.4 C	口縁部は頸部よりやや外反ぎみに立ち上がり、折り返し口縁である。胴部は頸部より内彎ぎみに外下方へ張り出し、胴部最大径に至る。	口縁内外面共横ナデ、胴部外面はヘラ磨き整形がなされている。	普通 砂粒・砂礫・雲母・スコリア 褐灰色	
2	蓋 須恵器	A B 3.1(現) C 16.4	つまみは宝珠状を呈し、頂部は直線的に開き、口辺部は直立する。	内面横ナデ、頂部回転ヘラ削り、つまみ横ナデ整形である。	普通 長石粒・細砂 灰白色	天井部内外面に重ね焼きの痕跡有り。
3	坏 須恵器	A 13.1 B 3.7 C 8	底部はやや凸凹であり、体部は直線的に外上方へ開く。	底部ヘラ削り、外面の底部と体部との境に研磨、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	普通 長石粒・細砂 灰色(内) 褐灰(外)	
4	蓋 須恵器	A B 3.1 C 15.4	宝珠状のつまみを有し、頂部は滑やかに開き、口辺部は直立する。	内面は水挽き整形、外面横ナデ整形が施されている。	良好 細砂 灰白色	天井部内外面に重ね焼きの痕跡有り。
5	高台付坏 須恵器	A B 3.6(現) C 13	底部は中央部が高くなり、体部は直線的に外上方へ開く。底部には「ハ」の字の高台が貼り付けられている。	高台部は横ナデ、底部は回転ヘラ削り、その他水挽き整形	普通 長石粒・細砂 灰色	
6	蓋 須恵器	A B 3.8 C 15	宝珠状のつまみを有し、頂部は平坦である。口辺部は直立する。	つまみは横ナデ、頂部回転ヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形である。	普通 長石粒・細砂 灰色	天井部外面に重ね焼きの痕跡有り。



第19図 第7号住居跡出土遺物実測図



第20図 第7・8号住居跡実測図

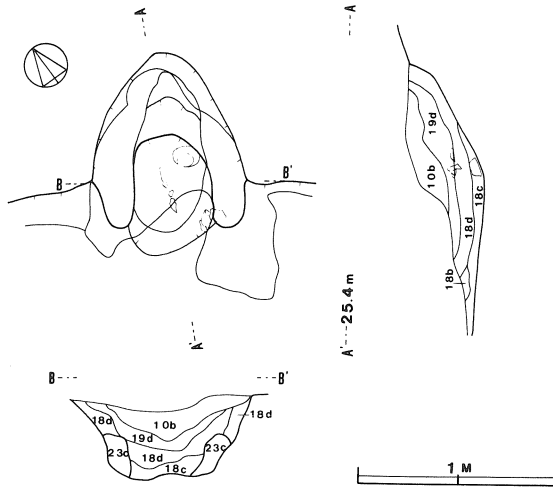
第 8 号住居跡(第 20・21 図)

本跡は A3g<sub>2</sub> を中心に確認され、第 7 号住居跡の北東部を切って構築し、第 6 号住居跡の南東側 0.5m に位置している。規模は長軸 3.6m・短軸 3.3m の隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向は N-25°-E である。壁高は 37~45cm で、ほぼ垂直に立ちあがり、壁下には幅 15cm・深さ 12cm ほどの壁溝がほぼ全体に周回している。床は全体に平坦で硬く、ピットは 2 個確認したがいずれも 10~12cm と浅く、支柱穴とは考えられない。

竈は北東壁中央部に付設されていたが、保存状態が悪く、袖の一部を確認するにとどまる。焼成部は壁を 88cm 幅で 30cm ほど掘り込んで構築している。遺物は土師器が主で、甕形土器(第 22 図-1・9)・坏形土器(第 22 図-5・6)・高台付坏形土器(第 22 図-3)・高台付盤形土器(第 22 図-7・10)などが出土している。

覆土は大きく 3 層に分けられ、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子などを含む暗褐色・褐色の土がレンズ状に自然堆積状態を示している。

遺物は床面直上より土師器完形品の坏形土器(第 22 図-8)・土製品の紡錘車(第 23 図-2・3)・土玉(第 23 図-4)を出土している。覆土中よりは完形品の小形壺形土器(第 22 図-2)・砥石(第 23 図-1)などが検出されている。



第 21 図 第 8 号住居跡竈実測図

遺物解説表(第 22 図)

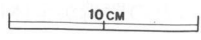
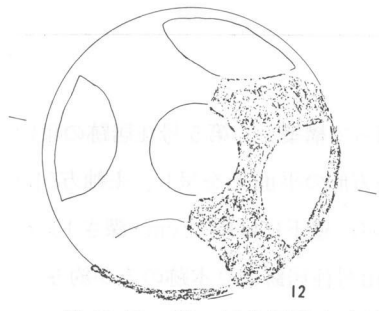
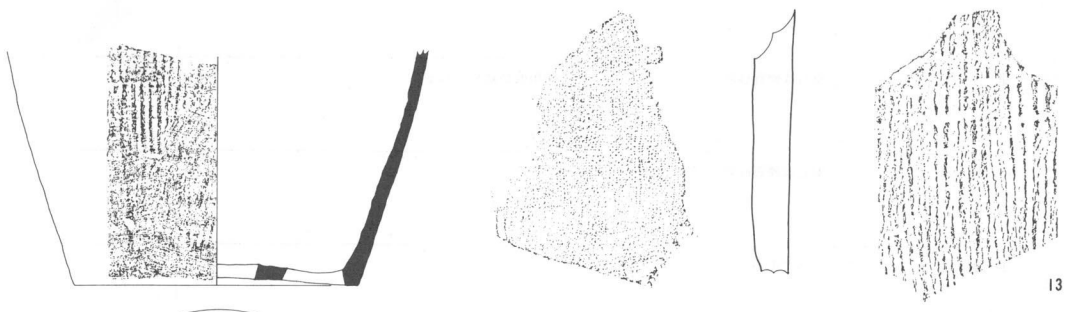
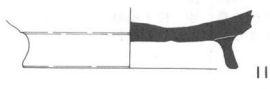
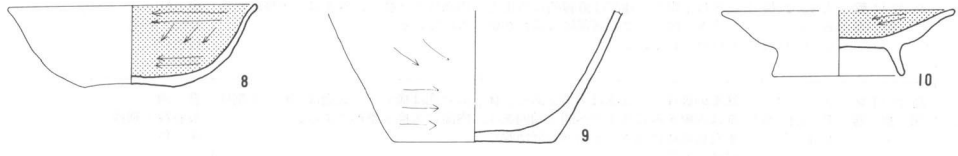
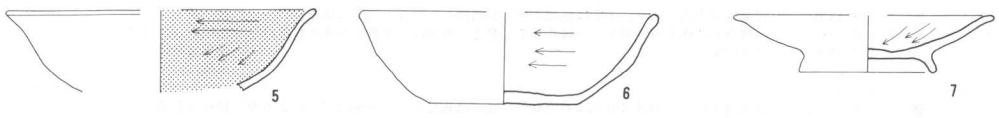
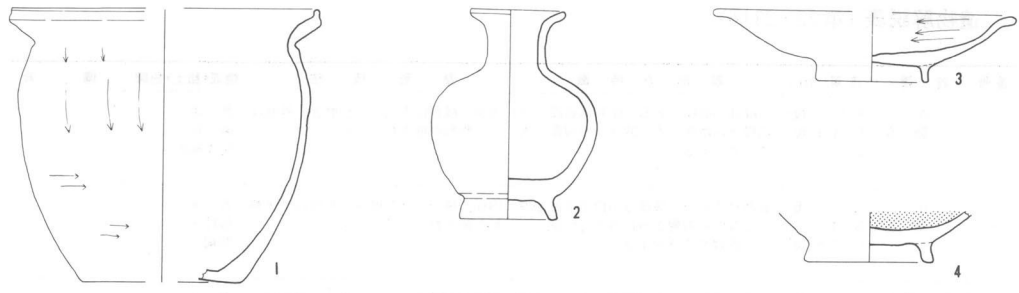
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
22 図 1	甕 土師器	A 16.0(復) B 14.4 C 8.4(復)	口縁部は頸部より大きく外反して立ち上がり、口辺部で直立する。胴部最大径を上位に有し、頸部は内彎きみに外下方へ開く。	内面は全体にナデ、外面は縦、横位のヘラ磨きが施されている。	普通 砂粒・石英 暗赤褐色	底部に木葉痕。
2	壺 土師質須恵器	A 5.0 B 11.1 C 5.0	頸部は直立きみに立ち上がり、口縁部は大きく外側へ開く。胴部最大径は上位に有し、底部は平坦で高台を貼り付けている。	内外面共にナデ整形である。	普通 砂粒 黒褐色	
3	高台付盤 土師器	A 15.9(復) B 3.7 C 6.0(復)	底部は平坦で、体部は底部より連続的に内彎きみに外上方へ開き、口縁部で大きく外反する。また底部には高台が貼り付けられている。	内面横位のヘラ磨き、外面ナデ整形が施され、内面に水挽き痕が認められる。	良好 砂粒・石英 橙 色	
4	高台付坏 土師器	A B 2.6(現) C 6.8	底部は平坦で、体部は内彎きみに外上方へ開く。高台が貼り付けられている。	内面、横位のヘラ磨き、外面水挽き整形が施され、水挽き痕が外面に認められる。	良好 砂粒・スコリア 赤褐色(外) 黒色(内)	

遺物解説表 (第22・23図)

番号	器種	量重(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	坏土師器	A 16.1(復) B 4.3(現) C	口縁部の破片である。体部は底部より内彎ぎみに外上方へ開き、口辺部で大きく外反する。	内面、横斜位方向のヘラ磨き、外面はナデ整形が施されている。	普通砂粒 明赤褐色	
6	坏土師器	A 15.3(復) B 4.9 C 7.6(復)	底部は平坦で、体部は中位で器厚を厚くしながら内彎ぎみに外上方へ開く。口辺部はやや外反する。	内面の横位のヘラ磨き、外面はナデ整形が施されている。	普通砂粒・スコリア 明褐色	
7	高台付盤土師器	A 13.7(復) B 3.0 C 7.3(復)	底部は平坦で体部は底部よりやや内彎ぎみに外上方へ大きく開く。また底部には「ハ」の字状の高台が貼り付けられている。	内面は斜位方向のヘラ磨き、外面はナデ整形が施されている。また内外面に水挽き痕が認められる。	普通砂粒 にぶい赤褐色	
8	坏土師器	A 13.0 B 4.1 C 4.6	底部は中央部が凹み、体部は底部より内彎ぎみに外上方へ開き、口縁部でやや外反する。	底部はヘラ削り、内面は横縦位のヘラ磨き、外面はナデ整形が施されている。	普通砂粒・スコリア 暗褐色(外) 黒色(内)	
9	甕土師器	A B 6.8(現) C 8.4	底部は平坦で、胴部は底部より直線的に外上方へ開く。	底部は雑なナデ、外面はヘラによる整形が行なわれている。内面は全体にナデ整形が施されている。	砂粒・石英 黒褐色	
10	高台付盤土師器	A 12.2(復) B 3.5 C 6.9(復)	底部は平坦で、体部は直線的に外上方へ大きく開く。また底部には高台が貼り付けられている。	内面はヘラ磨き、外面はナデ整形が施されている。	良好砂粒・石英 橙色(外) 黒色(内)	
11	高台付坏須恵器	A B 2.0(現) C 11.2	底部の破片で、底部は平坦であり、体部は内彎ぎみに外上方へ開く傾向あり。また底部には高さ1.5cmの高台が貼り付けられている。	高台部は横ナデ、底面は回転ヘラ削り、内面は水挽き整形である。	普通長石粒・細砂 灰色	
12	甕須恵器	A B 12.3(現) C 14.8	底部には5個の穴を有し、中央部には半径4.6cmの円形上の穴があいている。胴部は底部よりやや内彎ぎみに外上方へ開く。	内面は水挽き後、指による押え、外面は胴部中位は叩き、下位はヘラ削り整形が施されている。穴はヘラによる切断である。	良好砂粒・細砂 にぶい黄褐色	
13	瓦		平瓦の破片	凹面に布目、凸面に縄目の叩き。		
23図1	砥石		原石は硬質砂岩	使用痕が認められる。		
2・3	紡錘車		原石は硬質砂岩、泥岩			
4	土製品		土玉である。			

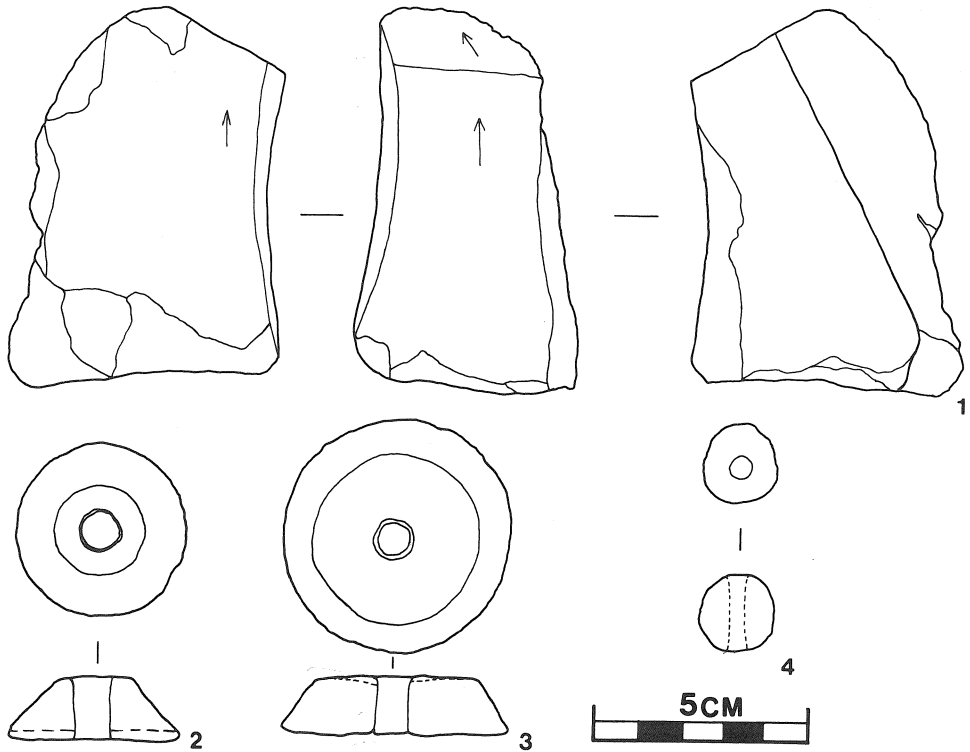
第9号住居跡(第24・26図)

本跡はA2j<sub>0</sub>を中心に確認され、第10号住居跡の西側を切って構築し、第5号住居跡の東側8.5mに位置している。規模は長軸3.7m・短軸3.5mの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-15°-Eである。壁高は32~35cmで、ほぼ垂直に立ちあがり、壁下には幅12cm・深さ10cmほどの壁溝が全体に周回している。床は全体に平坦で硬く、第10号住居跡より本跡の方が約5cmほど深く構築されている。



第 22 图 第 8 号住居跡出土遺物実測図

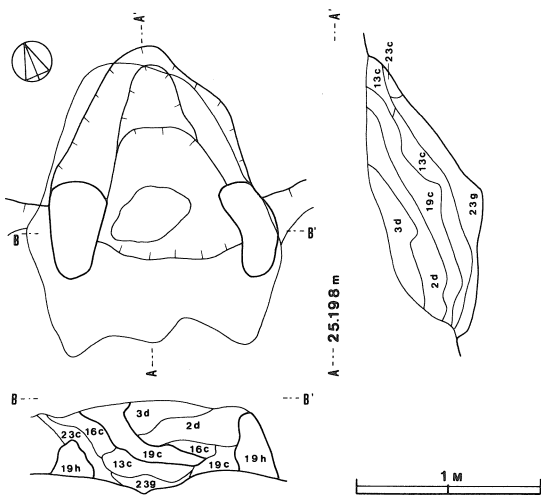




第23図 第8号住居跡出土遺物実測図

竈は北東壁中央部に付設され、長さ 135cm・袖幅 120cm・焚口部幅 83cmほどで、袖部は短く

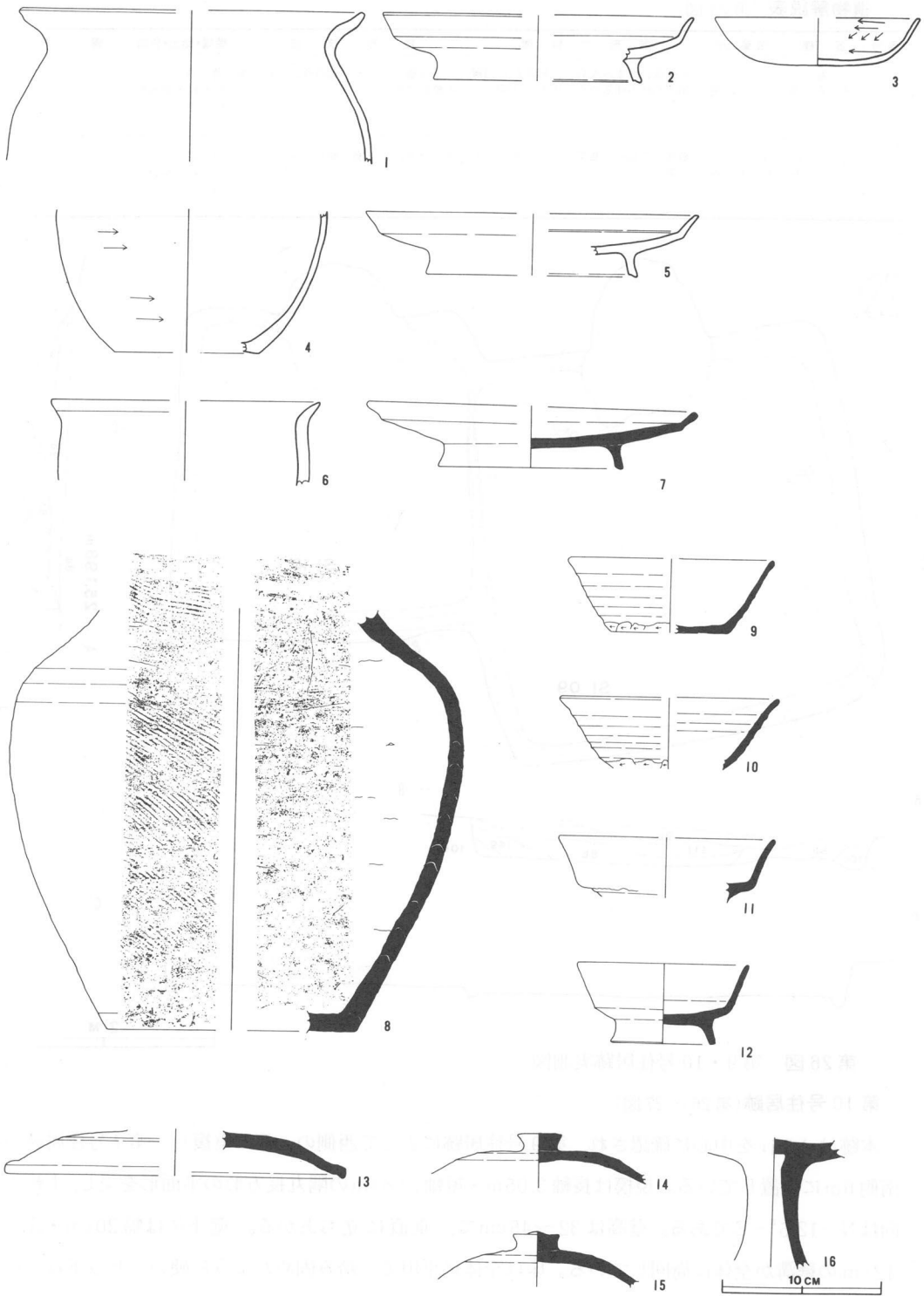
山砂を多量に含む粘土で構築されている。焼成部は壁を 114cm幅で、80cmほど掘り込み、火床は長径 45cmの不整楕円形を呈し、床を 8cmほど掘り窪めている。住居跡内覆土は大きく5層に分けられ、多量のローム粒子・ロームブロック・焼土粒子などを含むやや柔らかい土が自然流入の状態に堆積していた。出土遺物は土師器・須恵器が共伴して検出され、床面上よりの遺物は高台付坏形土器(第25図-7・12)・蓋形土器(第25図-14)などが出土している。



第24図 第9号住居跡竈実測図

遺物解説表 (第25 図)

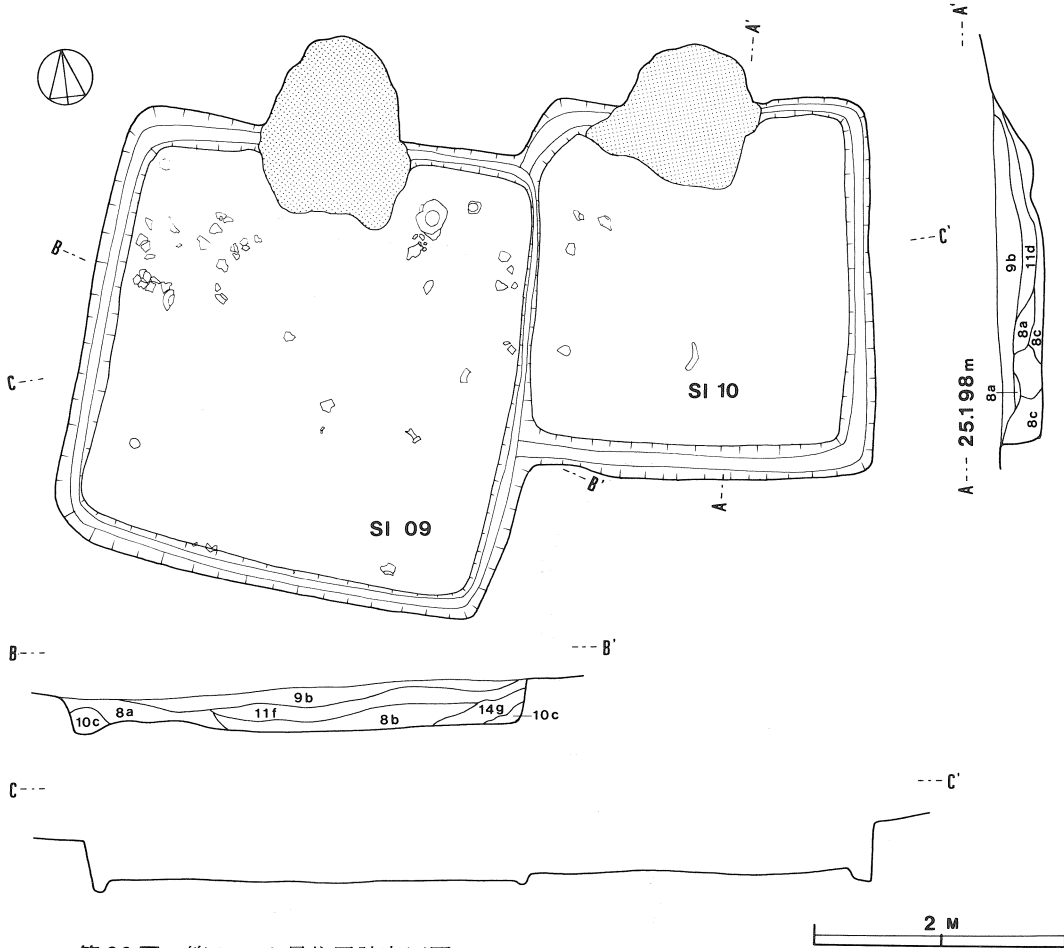
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 21.3(復) B 9.6(現) C	口縁部は頸部より「く」の字に大きく外反して開き、胴部は頸部より大きく外下方へ内彎きみに開く。	内外面共にナデ整形が施されている。	普通 砂粒・石英・長石 明赤褐色	内面上部にスス付着。
2	高台付盤 土師器	A 19.5(復) B 4.2 C 13.1(復)	体部は底部より内彎きみに外上方へ開き、口縁部は外反して立ち上がる。また底部には1.3cmの高台が貼り付けられている。	底部は回転ヘラ削り、その他水挽き整形である。水挽き痕が認められる。	良好 砂粒・石英 橙 色	
3	坏 土師器	A 12.9(復) B 3.0 C 4.6	底部は平坦で、体部は底部よりゆるやかに内彎して外上方へ開く。	底部、回転ヘラナデ、口縁部付近は横ナデ、内面は多方向のヘラ磨きが施されている。	普通 砂粒 褐色(外) 黒色(内)	
4	甕 土師器	A B 8.9(現) C 9.0(復)	胴部の破片で、胴部は底部より内彎して、外上方へ開く。	内面はナデ整形、外面は横位方向のヘラ削り整形が施されている。	不良 砂粒・石英 黒褐色	
5	高台付盤 土師器	A 20.9(現) B 3.7 C 13.3(復)	底部は平坦で、体部は底部よりやや内彎きみに大きく開き、口縁部で外反きみに立ち上がる。また底部には「ハ」の字状の高台が貼り付けられている。	高台部横ナデ、その他水挽き整形である。	良好 砂粒・長石 明褐色	内面にスス付着。
6	甕 土師器	A 16.7(復) B 5.0(現) C	口縁部の破片で、口縁部は頸部より短く大きく外反し、胴部はやや内彎きみに外下方へ開く。	内外面共にナデ整形が施されている。	普通 砂粒・石英 黒褐色一部赤色	
7	高台付盤 須恵器	A 20.2(復) B 3.6 C 11.6	体部は底部中央部より直線的に外上方へ開き、口縁部で大きく立ち上がる。口唇部は丸味をもつ。底部に高台が貼り付けられている。	底部は回転ヘラ削り、その他水挽き整形である。	良好 砂粒 にぶい褐色	
8	壺 須恵器	A B 26.4(現) C 15.6(復)	口縁部を欠損する破片で、底部は平坦であり、胴部最大径を上位にもち、頸部より大きく張り出した後、底部へ向って内傾する。	内面は粘土紐巻き上げ痕を多く残し、指によるナデ、外面は右下にかけての斜め方向の叩き目の後、部分的に指によるナデ整形(叩き目を消している。)	普通 長石粒・細砂 灰白色	肩部に薄灰緑色の自然釉が斑点状に付着。
9	坏 須恵器	A 13.6(復) B 4.6 C 7.2(復)	底部は平坦で、体部は底部より直線的に外上方へ開く。	底部は手持ちによる一方向からのヘラ削り、体部との境を手持ちヘラ削り、口縁部横ナデ整形、その他水挽き整形。	普通 長石粒(多) 黄灰色	
10	坏 須恵器	A 13.8(復) B 4.4(現) C	体部は底部より直線的に外上方へ開き、口縁部はやや外反して立ち上がる。	体部下位は、手持ちヘラ削り、その他水挽き整形である。	不良 細砂・雲母 暗灰黄色	
11	高台付坏 須恵器	A 13.6(復) B 3.8(現) C	体部は底部より外反して立ち上がる。また底部に高台が貼り付けられた痕有り。	内外面共に水挽き整形である。	良好 細砂 黄灰色	
12	高台付坏 須恵器	A 10.8 B 5.0 C 6.6	底部は平坦であり、体部は直線的に外上方へ開く。底部には1.2cmの高台が貼り付けられている。	底部中央部に糸切り痕、その他横ナデ整形である。その他内外面共に水挽き整形である。	良好 長石粒・細砂 灰黄色	器面が粗く、ザラザラで使用痕跡がなく、煮出しの状態とみられる。
13	蓋 須恵器	A B 2.8(現) C 21.4(復)	肩部から口縁部にかけて、ゆるやかに外上方へ開き、口辺部で大きく下る。	外面一部回転ヘラナデ、内面肩部は多方向からのナデ整形である。口辺部は横ナデ整形であり、その他は水挽き整形である。	普通 細砂 灰白色	
14	蓋 須恵器	A B 3.2(現) C	宝珠状のつまみを有し、肩部から口縁部にかけてゆるやかに広がって開く。	つまみ横ナデ、肩部回転ヘラ削りの後横ナデ、その他内外面共に水挽き整形である。	普通 長石粒・細砂粒 灰色	



第25図 第9号住居跡出土遺物実測図

遺物解説表 (第 25 図)

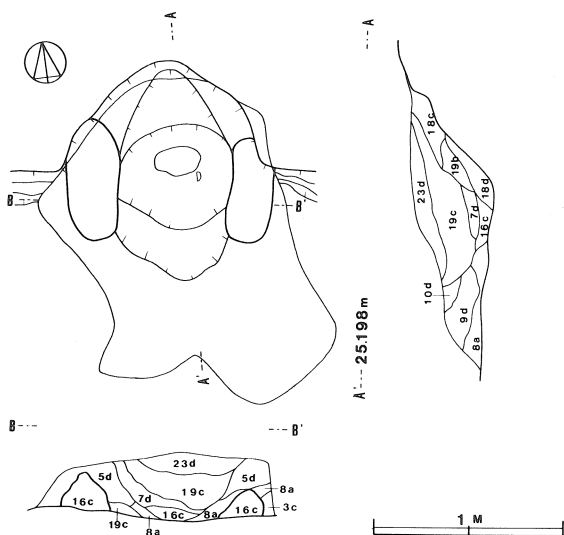
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
15	蓋 須恵器	A B 3.4(現) C	宝珠状のつまみを有し、肩部から口縁部にかけてゆるやかに広がって開く。	つまみ横ナデ、その他内外面共に水挽き整形である。	普通 長石粒・細砂粒 灰色	
16	高 須恵器	A B 9.0(現) C	脚部のみ現存、脚部はラッパ状に下方へ開く。	内外面共にヘラ磨き整形である。	良好 長石粒・細砂 灰色	



第 26 図 第 9・10 号住居跡実測図

第 10 号住居跡(第 26・27 図)

本跡は A3j<sub>1</sub> を中心に確認され、第 9 号住居跡によって西側の一部で重複し、第 7 号住居跡の南側 6m に位置している。規模は長軸 3.05m・短軸(2.8)m の隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向は N-12.5°-E である。壁高は 32~45cm で、垂直に立ちあがる。壁下には幅 20cm・深さ 12cm の壁溝が全体に周回している。床は全体に平坦で、踏み固めたように硬い。ピットは 1 個も確認することができなかった。



第27図 第10号住居跡竈実測図

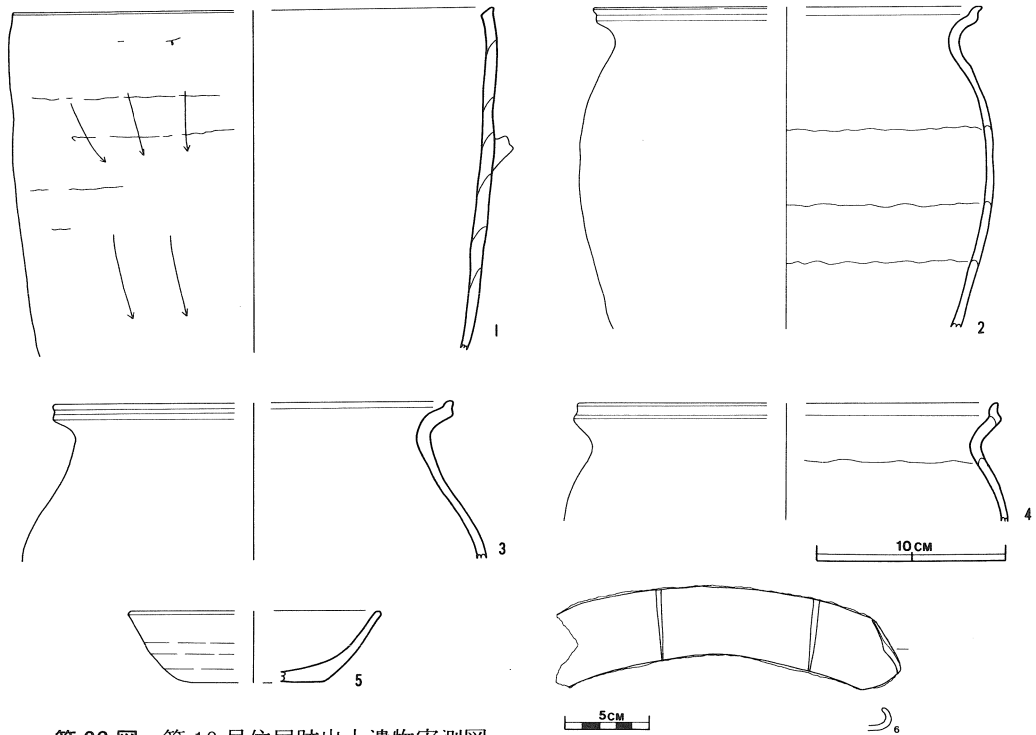
竈は北東壁中央部よりやや西側に付設され、長さ115cm・袖幅116cm・焚口部幅47cmである。袖部は短く、長い間使用されたためか、粘土が明褐色に焼け爛れていた。焼成部は壁を107cmの幅で、56cmほど掘り込み、火床は床を2cmほど掘り窪めている。遺物は甕形土器(第28図-2・3)・甑形土器(第28図-1)が出土している。

住居跡内覆土は大きく3層に分けられ、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子などを含む柔らかい暗褐色・褐色の土がおおむねレンズ状に自然堆積している。

遺物は床面上より大形鎌(第28図-6)、その他覆土中より甕形土器(第28図-4)・坏形土器の口縁部が出土している。

遺物解説表(第28図)

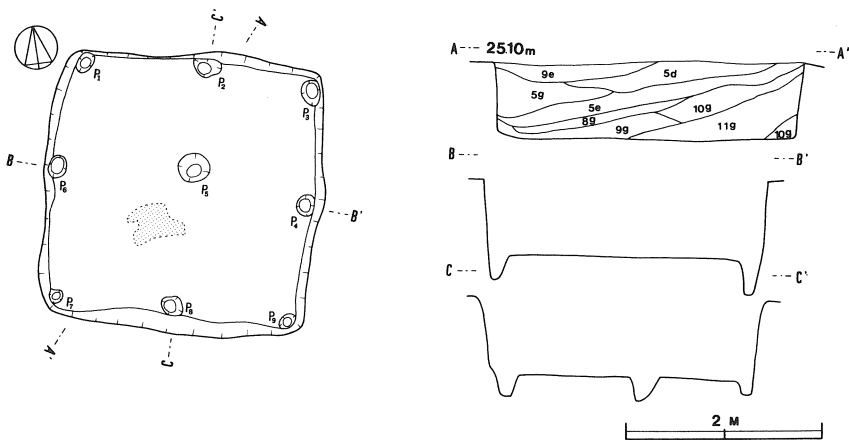
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甑 土師器	A 18.2(現) B 18.2(現) C	器厚は一定し、直線的に開き、ゆるやかに外傾する。また胴部上位に把手を有する。	内面はナデ整形、外面ヘラ削り後、ナデ整形が施され、外面の一部に輪積痕が認められる。	良好 砂粒・長石 橙褐色	
2	甕 土師器	A 20.4(復) B 17.0(現) C	口縁部は頸部より大きく外反して開き、口辺部でやや凹みふたたび外反して立ち上がる。胴部は頸部より外上方へ内彎して張り出す。	内外面共にナデ整形が施され、内面に輪積痕が認められる。	普通 砂粒・長石 明赤褐色	胴部上位外面にスス附着。
3	甕 土師器	A 21.0(復) B 8.3(現) C	口縁部は頸部より大きく外反して開き、口辺部で直立きみに立ち上がる。胴部は頸部より大きく張り出す。	内外面共にナデ整形	普通 砂粒・長石 明赤褐色	内面にスス附着。
4	甕 土師器	A 22.0(復) B 6.2(現) C	口縁部の破片で、頸部より「く」の字状に外反して立ち上がり、口辺部でやや外側へ凹み、ふたたび外反して立ち上がる。	内外面共にナデ整形が施されている。内面に輪積痕が認められる。	普通 砂粒・長石 明赤褐色	
5	坏 土師器	A 13.3(復) B 3.7 C 7.3(復)	底部は平坦であり、体部は底部より内彎ぎみに水挽き痕が認められる。	内面ナデ整形、外面の口縁部ナデ、体部水挽き整形がなされている。	普通 砂粒 橙褐色	
6	鎌		先端部を欠損する鎌である。取り付部は上におり返されている。			



第 28 図 第 10 号住居跡出土遺物実測図

第 11 号住居跡(第 29 図)

本跡は遺跡の中央部 B 2 a<sub>5</sub> を中心に確認され、第 15 号住居跡の北東 1.1 m に位置している。規模は長軸 2.9 m ・ 短軸 2.8 m の隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向は N - 20.5° - E である。壁高は 80 ~ 82 cm と非常に深く、壁面はほぼ垂直に立ちあがり、床は平坦であるが、他の住居跡と比較すると、さほど硬い状態でない。ピットは各コーナー部及び主軸方向に沿った中央部から 9 個



第 29 図 第 11 号住居跡実測図

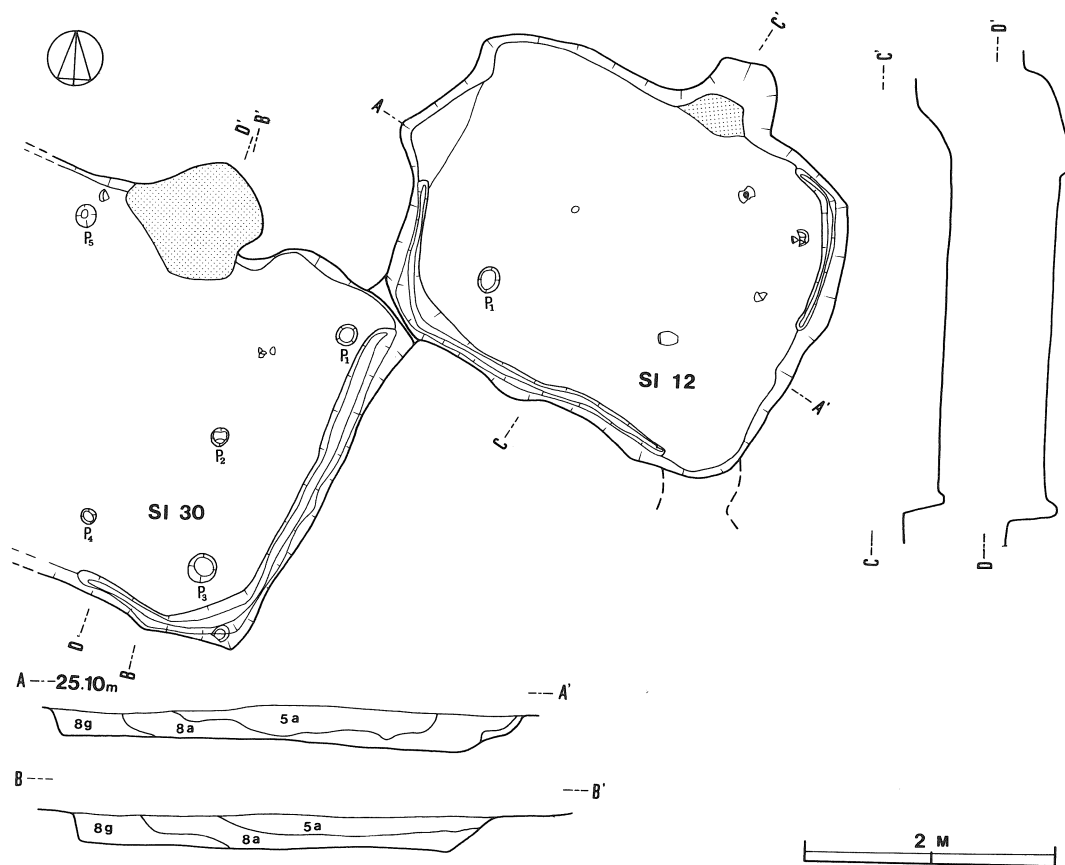
確認され、いずれも深さは20～50cmで、9個の柱で構築されたものと考えられる。また中央部よりやや南側に焼土の広がりが見られる。

覆土は東側からの自然堆積の状態を示し、ロームブロックを多量に含む暗褐色の土が東側から流れこんで堆積している。

遺物の出土はみられず、また竈を有しないなど他の住居跡と異なるため、住居跡とは考えられない。作業場の要素をもつ竪穴状遺構と考えられる。

第12号住居跡(第30図)

本跡は遺跡の中央部西側B2b<sub>3</sub>を中心に確認され、南西コーナー部で第30号住居跡・第13号住居跡と南コーナー部で接している。規模は長軸3.32m・短軸2.7mの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-63.5°-Wである。壁高は22～28cmで、直線的に外傾して立ちあがる。また南西コーナー、北東コーナー部壁下に幅10cm・深さ6cmの壁溝が回っている。また床は平坦でさほど硬いものではない。ピットは1個確認し、深さ30cmほどである。



第30図 第12・30号住居跡実測図

住居跡内覆土はレンズ状の自然堆積を示し、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色の土が主体に堆積している。

遺物は東側より少量出土し、竈東側より高台付環形土器(第31図-8)、北東コーナー部より環形土器(第31図-3)が出土している。

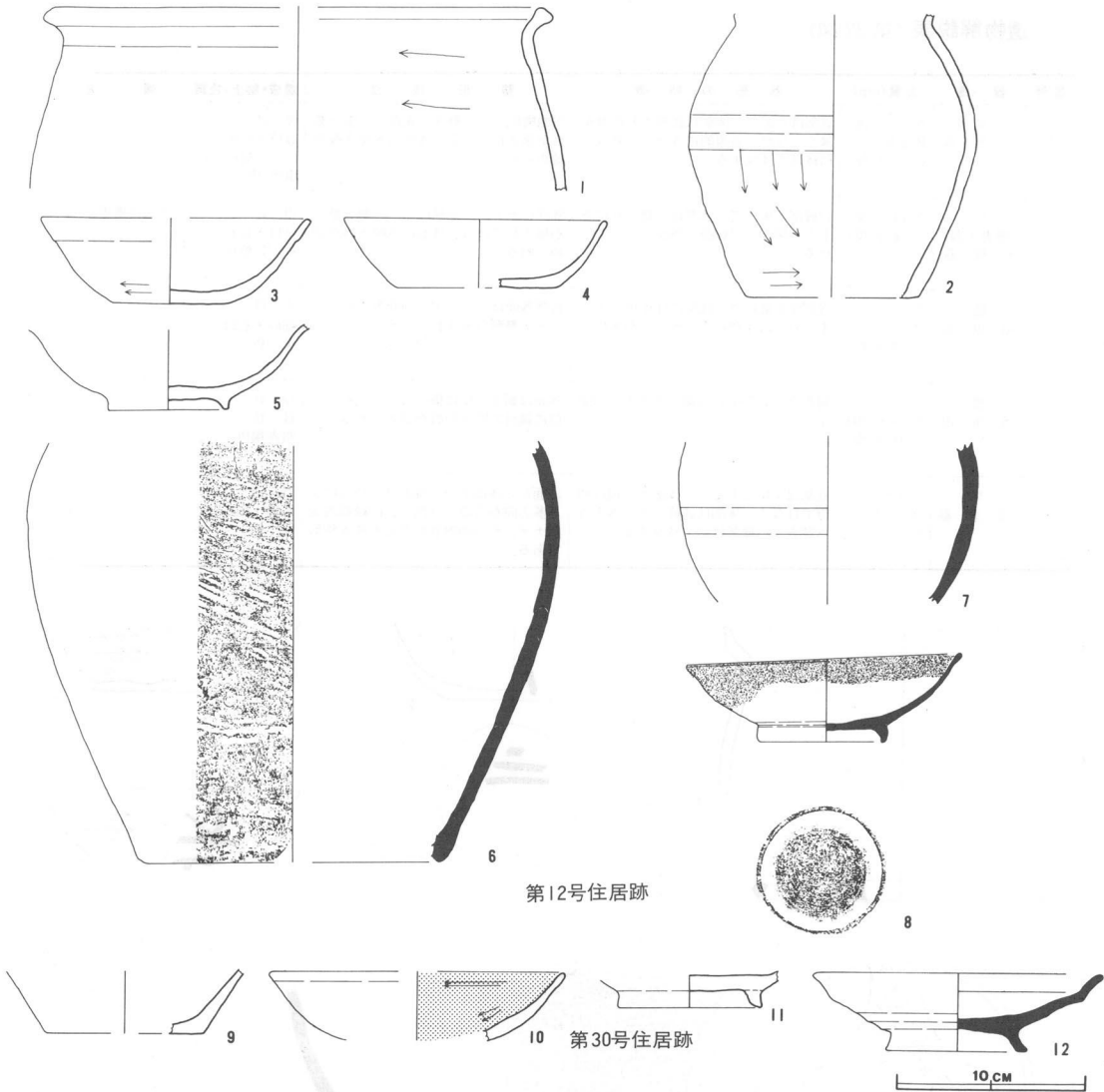
遺物解説表(第31図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師質須恵器	A 25.5(復) B 9.7(現) C	口縁部は頸部より短く、外反して開き、口辺部で器厚を厚くする。胴部は直線的に外下方へ開く。	内面横位のヘラ磨き、外面はナデ整形が施されている。	普通 石英・細砂 浅黄橙色	
2	甕 土師器	A B 15.0(現) C 9.1(復)	胴部の破片で、最大径を中位よりやや上に有し、頸部より大きく内彎して大きく張り出す。	内面ナデ整形、外面ヘラ削りである。また外面の一部に水挽き痕が認められる。	良好 石英・長石 にぶい橙色	
3	坏 土師器	A 14.0(復) B 4.5 C 6.2	底部は平坦で体部は内彎ぎみに外上方へ開く。口縁部で器厚をやや厚くする。	底部及び体部上位はヘラ削り整形、内外面共にナデ整形	良好 砂粒・石英 灰黄褐色	
4	坏 土師器	A 13.8(復) B 3.7 C 8.6(復)	底部は平坦で、体部は底部より器厚をやや薄めながら、外上方へ開く。	内外面共にナデ整形が施されている。	普通 石英・長石・砂 粒 橙色	
5	高台付坏 土師器	A B 4.25(現) C 6.3	底面はやや凸凹であり、体部は内彎ぎみに外上方へ開き、口縁部で外反して開く。底部には高さ0.5cmほどの高台が貼り付けられている。	全体にナデ整形が施され、外面に水挽き痕が認められる。	普通 石英・砂粒 灰褐色	
6	甕 須恵器	A B 22.2 C 16.6(復)	胴部の破片で、最大径を上位に有し、頸部より外上方へ張り出した後、底部へ直線的に狭まって至る。	内面粘土紐巻き上げの後、叩きのあてをし、指ナデ整形、外面斜位方向の叩きの後、ナデ整形が施されている。	普通 長石粒・細砂 灰色	
7	長頸壺 須恵器	A B 8.5 C	長頸壺の胴部片で、胴部は球形状を呈する。	外面は水挽き後、ナデ整形が施され、内面は水挽き整形である。	普通 細砂・雲母 灰色	内面に漆と思われる付着物。
8	高台付坏 灰軸陶器	A 14.5 B 4.5(4.2) C 6.7	底部は平坦で、器厚は薄く、内彎ぎみに大きく開き、口縁部は外反する。底部に高台が内彎して貼り付けられている。	底部は糸切り、高台部横ナデである。内外面共に体部上位に釉葉がぬられている。	良好 細砂 灰白色	内面に高台部径6.7cmと同径の重ね焼きの痕有り。

### 第13号住居跡(第36図)

本跡は遺跡の中央部B3c3を中心に確認され、第16号住居跡と南東コーナー部・第12号住居跡と北西コーナー部で接している。規模は長軸3.73m・短軸3.63mのほぼ隅丸方形の平面形を呈し、北西部に一部張り出しがみられる。主軸方向はN-28°-Eである。壁高は40cm前後で、直線的に外傾して立ちあがり、壁下には幅20cm・深さ15cmほどの壁溝が北東を除く壁下に周回している。床はロームでほぼ平坦であり、さほど硬い床ではない。ピットは確認することはできなかった。覆土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子などを含む、極暗褐色・暗褐色・褐色の3層に分けられる。





第12号住居跡

第30号住居跡

第31図 第12・30号住居跡出土遺物実測図

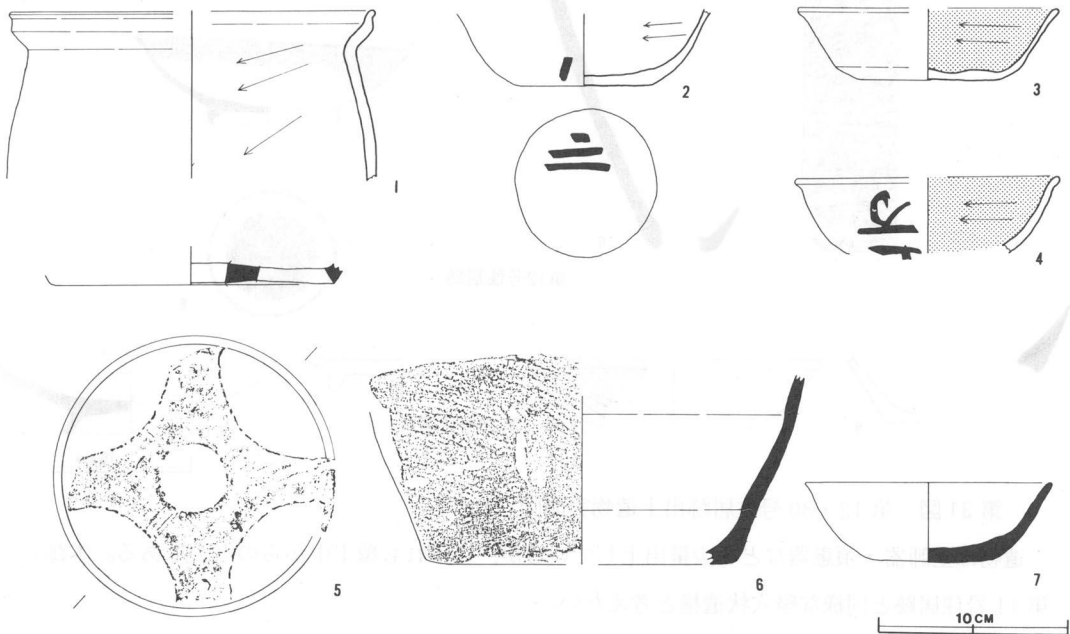
遺物は土師器・須恵器などを少量出土しているが、いずれも覆土中からのものである。本跡も第11号住居跡と同様な竪穴状遺構と考えたい。

遺物解説表(第32図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 18.0(復) B 8.7(現) C	口縁部の破片で、口縁部はやや外反して開き、口辺部で大きく外反して立ち上がる。胴部はやや内彎きみに外下方へ開く。	内外面共にナデ整形が施されている。	良好 石英・長石 明赤褐色	
2	坏 (墨書土器) 土師器	A B 3.85(現) C	底部は平坦で、体部は底部より内彎きみに外上方へ開く。	内面横位のヘラ磨き、底部ヘラ削り整形	良好 石英・砂粒 にぶい橙色	底部に「三」の文字と体部下位に墨書が認められる。

遺物解説表 (第 32 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	坏土師器	A 13.7(復) B 3.85 C 7.2(復)	底部は平坦で、体部は底部より器厚を薄くしながら直線的に外上方へ開き、口縁部で外反する。	内面横位のへら磨き、底部へら削り整形が施されている。外面に水挽き痕が認められる。	普通 砂粒・石英にぶい褐色(外) 黒色(内)	
4	坏(墨書土器)土師器	A 14.0(復) B 4.0(現) C	口縁部の破片で、体部は内彎きみに外上方へ開き、口縁部で外反して立ち上がる。	外面はナデ、内面横位のへら磨き整形が施されている。外面に水挽き痕が認められる。	良好 砂粒・長石にぶい橙色	外面に墨書。
5	甗須恵器	A B C 14.8(復)	底部片の破片で、底部には中央に円、まわりには4個の半円形の穴があいている。	底部外面はへらナデ、内面多方向からのナデ整形が施されている。	不良 細砂・雲母灰色	
6	甗須恵器	A B 9.9(現) C 16.4(復)	胴部片で底部より直線的に外上方へ開く。	外面は胴部下位に横位のへら削り、中に縄目の叩き目痕が認められる。	良好 砂粒 暗赤褐色	
7	坏須恵器	A 13.0 B 4.2 C 5.0	底部は平坦であるが、体部との境は明瞭ではなく、体部は連続して、外上方へ開き、口縁部はやや外反する。	底面から体部下位、外面は手持ちによる多方向からのへら削り、口縁部内面横ナデ、その他内外面共に水挽き整形である。	普通 砂粒・細砂 灰色	



第 32 図 第 13 号住居跡出土遺物実測図

第 14 号住居跡(第 33 図)

本跡は遺跡の中央部よりやや西側 B2 b4 を中心に確認され、第 15 号住居跡と北東コーナー部で接し、第 13・16 号住居跡の北側 0.4m に位置している。規模は長軸 3.15m・短軸 3.1m ほどで、隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向は N-62.5°-W である。壁高は 25cm 前後で、やや外反して

立ちあがり、壁下には幅 20 cm・深さ 10 cm 前後の壁溝が全体に周囲している。床は全体に平坦であり、踏み固められた硬い床である。ピットは 6 個確認されたがいずれも浅く、不規則的なので支柱穴とは考えられない。

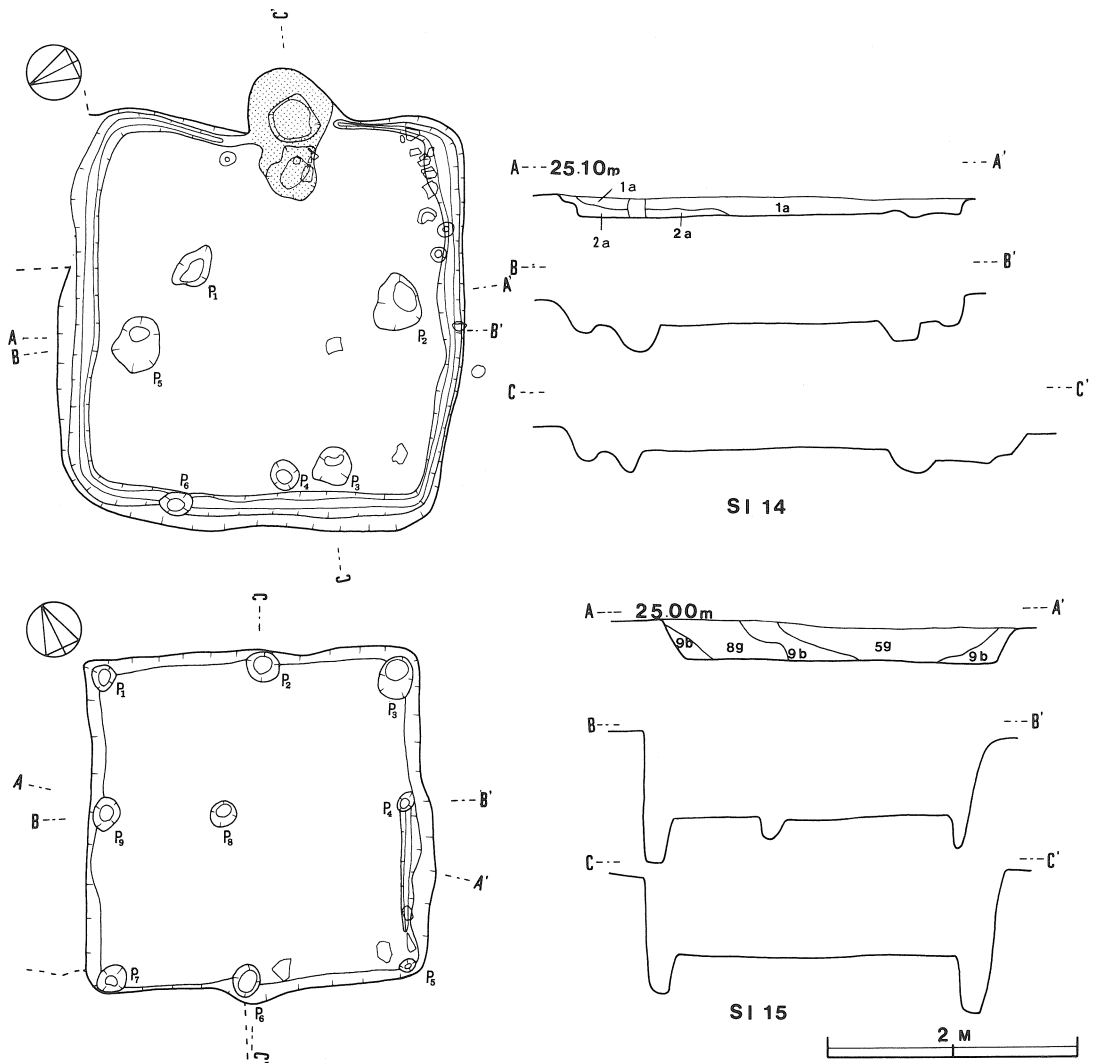
竈は南東壁中央部に付設されているが、保存状態が悪く、袖部などを確認することはできなかった。しかし、焼成部と思われるところから細片ではあるが、土師器・須恵器が出土している。

住居跡内覆土はロームブロック・焼土粒子などを含む極暗褐色のやや柔らかい覆土である。

遺物は南東部コーナー部の床面上に集中してみられ、壁ぎわより完形の坏形土器(第 34 図-3・4・5・7)、竈北側より小形壺形土器(第 34 図-1)を出土している。

遺物解説表(第 34 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	小型長頸壺 土師器	A B 10.5(現) C 6.5	口辺部を欠損するが、その他は完形品である。胴部は球形状を呈し、底部は平坦で非常に器厚が厚い。	底部から胴部下位がへら削り、その他、上位にかけてナデ整形が施されている。	普通 砂粒・石英 明赤褐色	
2	坏 土師器	A 13.6 B 4.2 C 7.3	底部は中央部が凹み、体部は器厚を薄くしながら、直線的に外上方へ開く。	底部及び体部下位はへら削り、内面はへら磨きが施されている。外面の一部に水挽き痕有り。	普通 石英・砂粒 にぶい褐色	
3	坏 土師器	A 12.4 B 4.45 C	右上がりの変形した坏で、体部は内彎して外上方へ開き、口辺部は外反する。	底部へら切り、内外面共に水挽き整形である。	普通 石英・砂粒 にぶい橙色(外) 黒色(内)	
4	坏 土師器	A 12.3 B 3.1 C 6.3	底部は、中央部が凹み、体部は底部より連続的に大きく外上方へ開く。	底部は、雑なへら切りで、その他、内外面共に水挽き整形である。外面に水挽き痕が認められる。	普通 石英・スコリア にぶい橙色	
5	坏 土師器	A 12.5(復) B 3.1 C 7.2	底部は凸凹であり、体部は器厚を薄くし内彎して外上方へ開く。	底部はへら切り、外面は水挽き整形である。内面はナデ整形である。	普通 石英・砂粒 橙 色	
6	坏 土師器	A 13.2 B 3.9 C 6.0	底部は平坦で、体部は底部と同様に薄く、体部中位までゆるやかに開き、上位になって大きく開く。口縁部は外反する。	底部へら切り、内外面共に水挽き整形である。	普通 石英・砂粒 灰褐色(外) 黒色(内)	
7	坏 土師器	A 11.3 B 3.6 C 5.3	底面は凸凹し、器厚は体部より薄く、体部は内彎ぎみに外上方へ開き、口辺部は外反する。	底部は雑なへら切りである。体部、内外面共に水挽き整形が施されている。内面に水挽き痕が認められる。	普通 砂粒・スコリア 橙 色	
8	瓦		丸瓦の破片である。	凹面は布目。		
9	紡錘車		断面形は台形状を呈している。			
10	刀子		茎部である。			



第33図 第14・15号住居跡実測図

第15号住居跡(第33図)

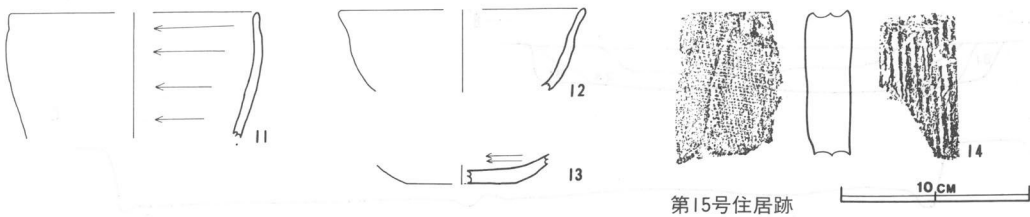
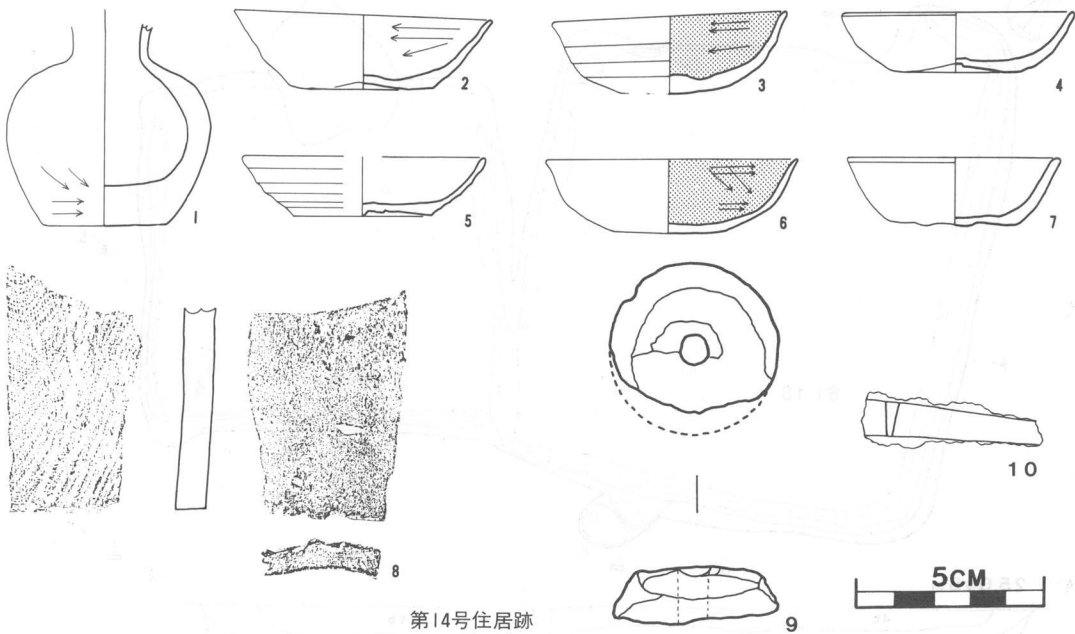
本跡はB2b4を中心に確認され、第14号住居跡と南西コーナー部で接し、第11号住居跡の南西1.1mに位置している。規模は長軸2.6m・短軸2.65mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-32.5°-Eである。壁高は62~72cmで、垂直に立ちあがり、南東部の壁下に一部壁溝が確認される。床はロームで、さほど硬くなく、やや西から東へ傾斜している。ピットは第11号住居跡と同じように9個確認され、深さは30~45cmとやや深くないずれも主柱穴と考えられる。

覆土はレンズ状の自然堆積を示し、ローム粒子などを含む暗褐色・褐色の土が堆積している。遺物の出土量は非常に少なく、覆土中より鉢形土器・坏形土器・瓦などの破片が出土し、また、

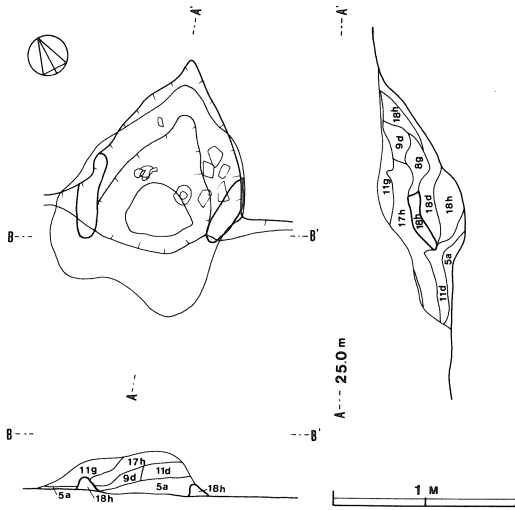
本跡も第11・13号住居跡と同じような目的で使用した竪穴状遺構と考えたい。

遺物解説表 (第34図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
11	鉢 土師器	A 13.1(復) B 6.6(現) C	口縁部の破片で、口縁部より頸部にかけて外方向へふくらみ、胴部で内方向へつぼまる。	内面横位のへら磨き、外面はナデ整形が施されている。また外面に水挽き痕が認められる。	良好 砂粒・石英 橙色	
12	坏 土師器	A 13.0(復) B 5.3(現) C	体部は底部より口縁部まで外上方へ開き、口縁部でやや外反する。	内外面共に、水挽き整形が施されている。	普通 石英・砂粒・雲母 にぶい橙色	
13	坏 土師器	A B 1.0(現) C 5.9(復)	底部の破片で、底部は平坦であり、体部は底部より外上方へ開く。	外面、底部、体部下位、へら削り、内面、横位のへら磨きである。	普通 石英・砂粒 明赤褐色	
14	瓦		平瓦の破片	凹面に布目、凸面に縄目の叩き。	普通 砂粒 灰色	



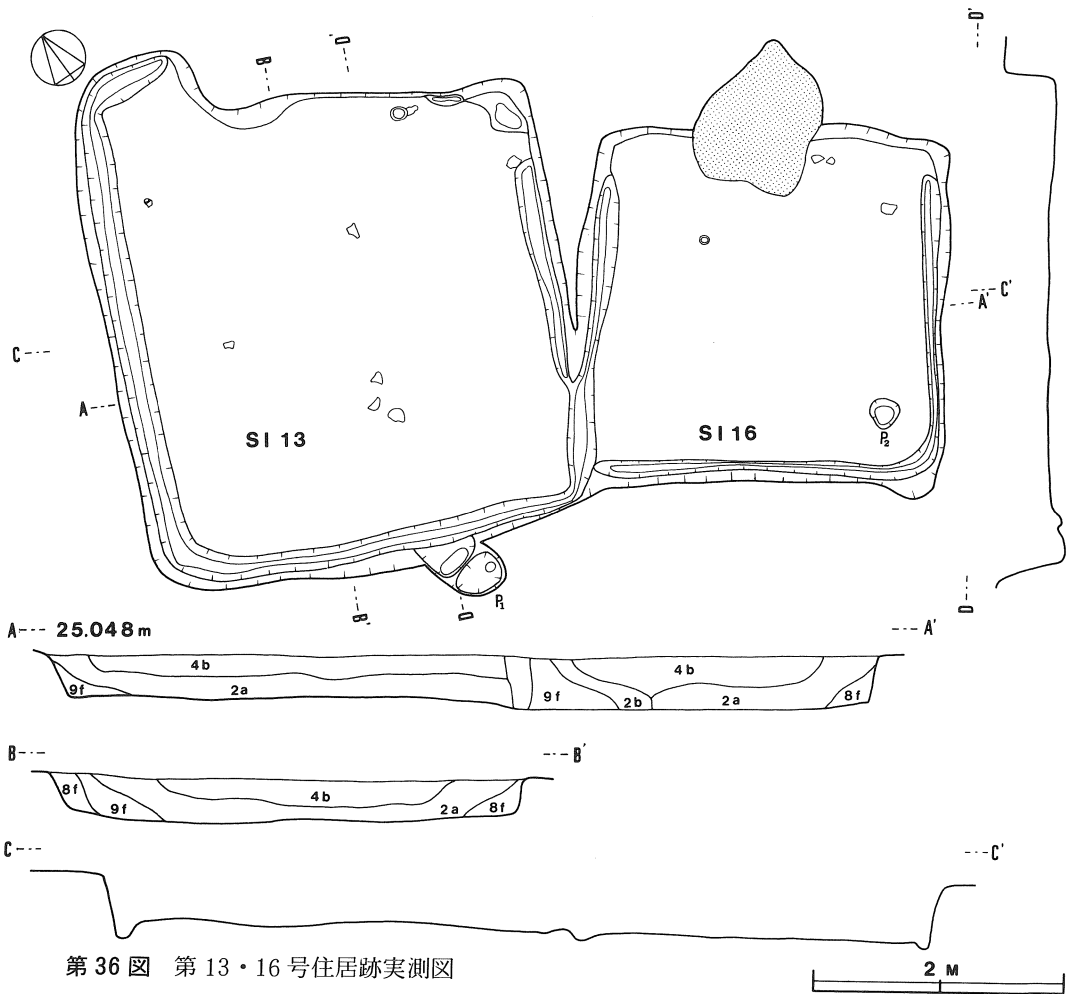
第34図 第14・15号住居跡出土遺物実測図



第 35 図 第 16 号住居跡竈実測図

### 第 16 号住居跡 (第 35・36 図)

本跡は A 2 b<sub>3</sub>より確認され、第 13 号住居跡と北西コーナー部で接し、第 22 号住居跡の北西 1.7m に位置している。規模は 1 辺が 2.85m の隅丸方形を呈し、主軸方向は N - 41° - E である。壁高は 47cm 前後で、やや外反ぎみに立ちあがり、竈を有する壁以外の壁下には幅 10cm ・ 深さ 7cm 前後の壁溝が周回している。床は全体に平坦で、ルームのやや硬い床である。ピットは南東部より 1 個検出したのみである。



第 36 図 第 13・16 号住居跡実測図

竈は北東壁の中央部に付設され、長さ107cm・袖幅82cm・焚口部幅60cmほどである。袖部は山砂で構築され、焼成部は壁を90cm幅で、71cmほど掘り込み、火床は長軸36cmの不整楕円形を呈し、床を7cmほど掘り窪めている。遺物は焼成部より坏形土器(第37図-3)・甕形土器(第37図-4)・東側部より瓦片(第37図-8・9)を出土する。

住居跡内覆土は3層に分けられ、上層が極暗褐色・下層が黒褐色でいずれもローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を含む土が堆積している。

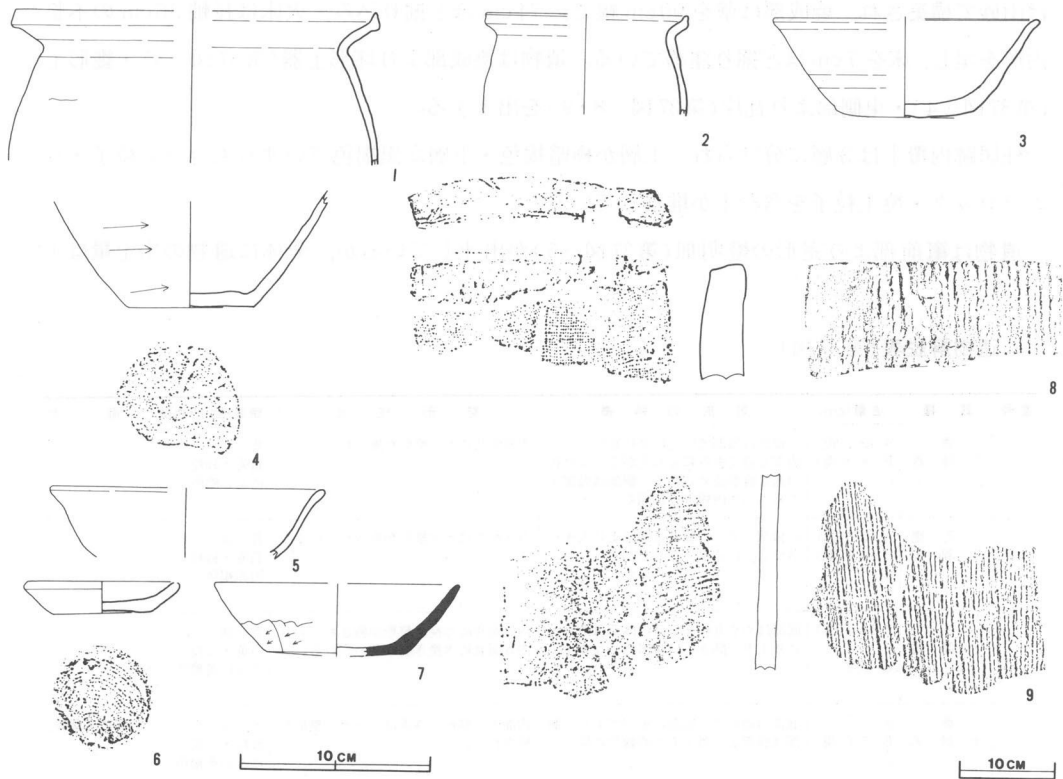
遺物は竈前部より完形の燈明皿(第37図-6)が出土しているが、全体に遺物の出土量は少ない。

遺物解説表(第37図)

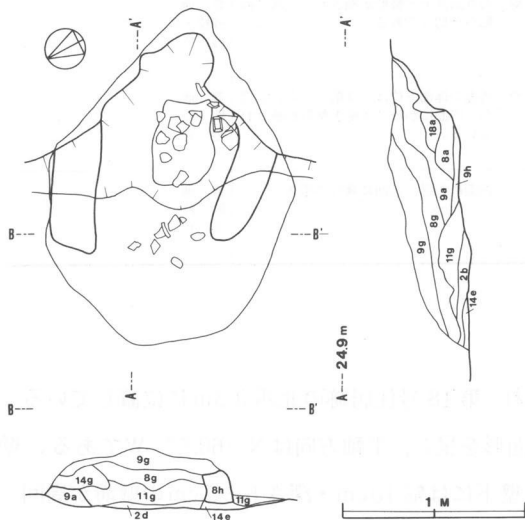
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕形土器	A 19.1(復) B 8.0(現) C	口縁部は頸部で「く」の字に屈折し、口辺部で直立きみに立ち上がる。また折り返し痕が認められる。胴部は頸部より外下向へ内彎きみに開く。	内外面共にナデ整形が施されている。	普通 石英・砂粒 にぶい橙色	
2	小形土器	A 10.6(復) B 5.3(現) C	口縁部片で、口縁部は頸部より大きく外反し、口辺部で立ち上がる。	内外面共にナデ整形が施されている。	普通 石英・砂粒 明赤褐色	
3	坏形土器	A 14.0(復) B 5.2 C 6.2	底部はやや丸味を帯び、体部は直線的に外上方へ開き、口縁部で外反する。	内外面共に水挽き整形が施されており、内外面共に水挽き痕が認められる。	普通 石英・砂粒 にぶい黄橙色	
4	甕形土器	A B 5.6(現) C 6.7	底部の破片で、底部は平坦であり、胴部は底部より外上方へ直線的に開く。	内面ナデ整形、外面はヘラナデ整形が施されている。	不良 砂粒・石英 にぶい赤褐色	底部に木葉痕。
5	坏形土器	A 14.3(復) B 3.7(現) C	口縁部の破片で、器厚は薄く、底部より内彎きみに開いた後、口縁部で外反する。	内外面共に水挽き整形が施され、内面に水挽き痕が認められる。	普通 砂粒・長石 にぶい褐色	
6	燈明土器	A 8.15 B 1.8 C 5.1	底部は中央部がやや凹み、体部は直線的に外上方へ開く。器厚は厚い。	内外面共にナデ整形が施され、底部は回転ヘラ切りである。	普通 砂粒・スコリア 橙色	
7	坏形須恵器	A 12.8(復) B 3.3(現) C 7.2(復)	底部は平坦であり、体部は底部よりやや内彎きみに外上方へ開く。	外面の体部下位はヘラ削り、中、上位から内面にかけて水挽き整形が施されている。	普通 砂粒 橙色	
8・9	瓦		8, 9 共に平瓦	凹面に布目、凸面に縄目の叩き	普通 砂粒 灰色	

## 第17号住居跡(第38・39図)

本跡は遺跡の中央部B2b<sub>6</sub>を中心に確認され、第18号住居跡の北西0.3mに位置している。規模は長軸3.6m・短軸3.45mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-60.5°-Wである。壁高は40cm前後で、やや外傾して立ちあがり、壁下には幅10cm・深さ5~7cmの壁溝が周回している。床はほぼ全体に平坦で、硬く踏み固められている。また南西コーナー部に長軸75cmを測



第 37 図 第 16 号住居跡出土遺物実測図



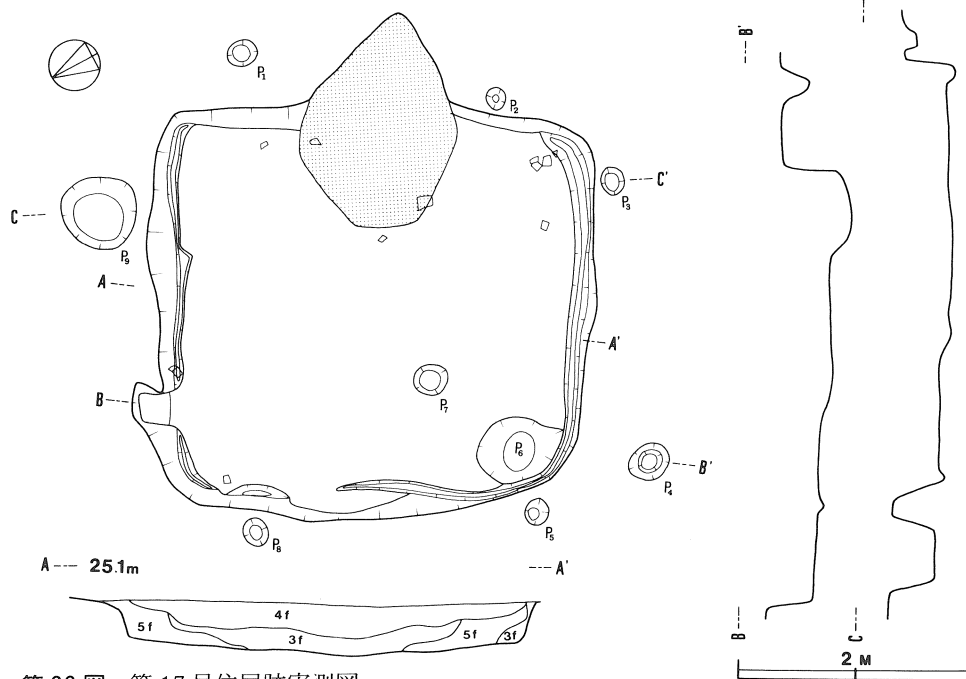
第 38 図 第 17 号住居跡竈実測図

る楕円形状の平面形を呈し、深さ 15 cm ほどの大きなピットを有し、その他小さなピットは屋内に 1 個、屋外に 7 個有し、深さは 20~42 cm を測り、屋外の柱を利用して構築された住居跡と思われる。

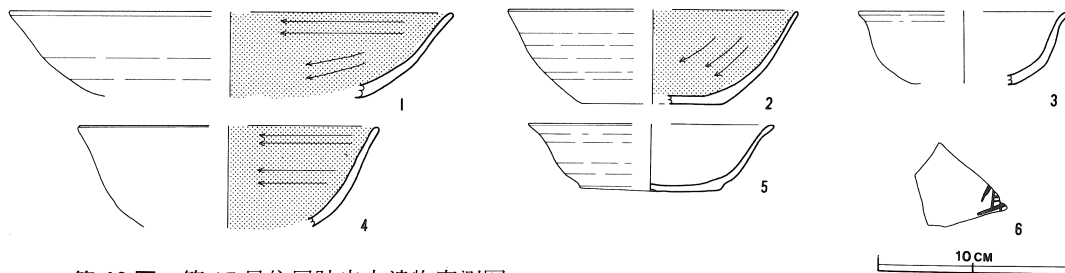
竈は中央部に付設され、長さ 140 cm・袖幅 103 cm・焚口部幅 62 cm ほどである。焼成部は壁を 120 cm の幅で、65 cm ほど掘り込み、火床は長軸 46 cm の楕円形を呈し、床を 4 cm ほど掘り窪めている。

遺物は焚口部より坏形土器(第 40 図-1)、焼成部より坏形土器(第 40 図-2)などを出





第39図 第17号住居跡実測図



第40図 第17号住居跡出土遺物実測図

土している。

住居跡内覆土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を含むやや柔らかい暗褐色の土が堆積している。

遺物は土師器を少量出土し、北西壁下より坏形土器(第40図-5)、南側コーナー部より同種のもの(第40図-4)が出土している。

遺物解説表(第40図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏土師器	A 23.2(復) B 4.5(現) C	体部は底部より大きく、外側へ内彎きみに立ち上がり、口縁部でやや外反する。	外面ナデ、内面へラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石 黒色(内) にぶい橙色(外)	
2	坏土師器	A 15.3(復) B 5.0 C 7.3(復)	底面は平坦で、体部から口縁部は外側へ大きく内彎きみに立ち上がる。	底部へラ削り、外面体部は水挽き整形、内面へラ磨きが施されている。	良好 砂粒・雲母 黒色(内) にぶい橙色(外)	

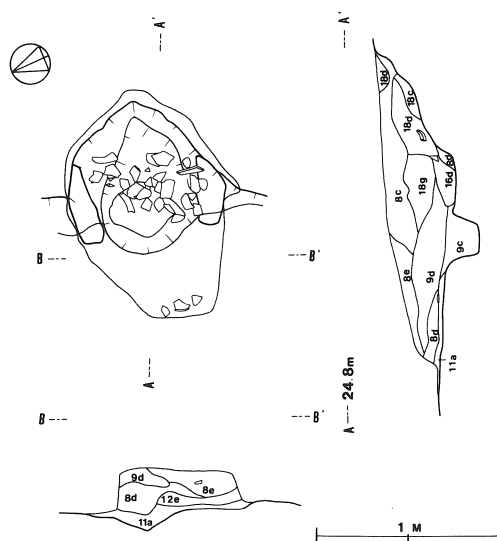
遺物解説表 (第 40 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	坏土師器	A 11.2 (復) B 3.8 C 5.3 (復)	体部は底部より外側へ内彎して立ち上がり、口縁部で外反する。	内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒 橙色	
4	坏土師器	A 15.8 (復) B 5.3 C	体部片で、底部より外側へ内彎きみに立ち上がり、口縁部でやや外反する。	外面水挽き整形後、ナデ調整、内面へラ磨き調整が施されている。内外面に水挽き痕が認められる。	普通 砂粒・石英 黒色(内) 橙色(外)	
5	坏土師須恵器	A 12.6 (復) B 3.55 C 7.4 (復)	底部は平坦で、体部は底部より外側へ内彎きみに立ち上がり、口縁部で大きく外反する。	内面及び外面体部は水挽き整形が施され、底面は、へラ削りが行なわれている。また外面体部に水挽き痕が認められる。	良好 砂粒・長石 にふい 橙色	
6	坏(墨書土器)土師器	A B C	底部の破片で不明	底部へラ削り後、へラ磨き。内面へラ磨きが施されている。	良好 砂粒・石英粒 黒色(内) 褐色(外)	底部に墨書。

第 18 号住居跡(第 41・42 図)

本跡は B2 c7 を中心に確認され、第 19B 号住居跡の北側を切り、第 17 号住居跡の東 0.3m に位置している。規模は長軸 3.62m・短軸 3.2m ほどの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向は N-20°-E である。壁高は 35cm 前後で、やや外傾して立ちあがり、壁下には幅 20~30cm・深さ 7cm ほどの壁溝が周回している。床はロームで硬く踏み固められて平坦である。ピットは 3 個確認されたが、いずれも主柱穴とは考えられない。

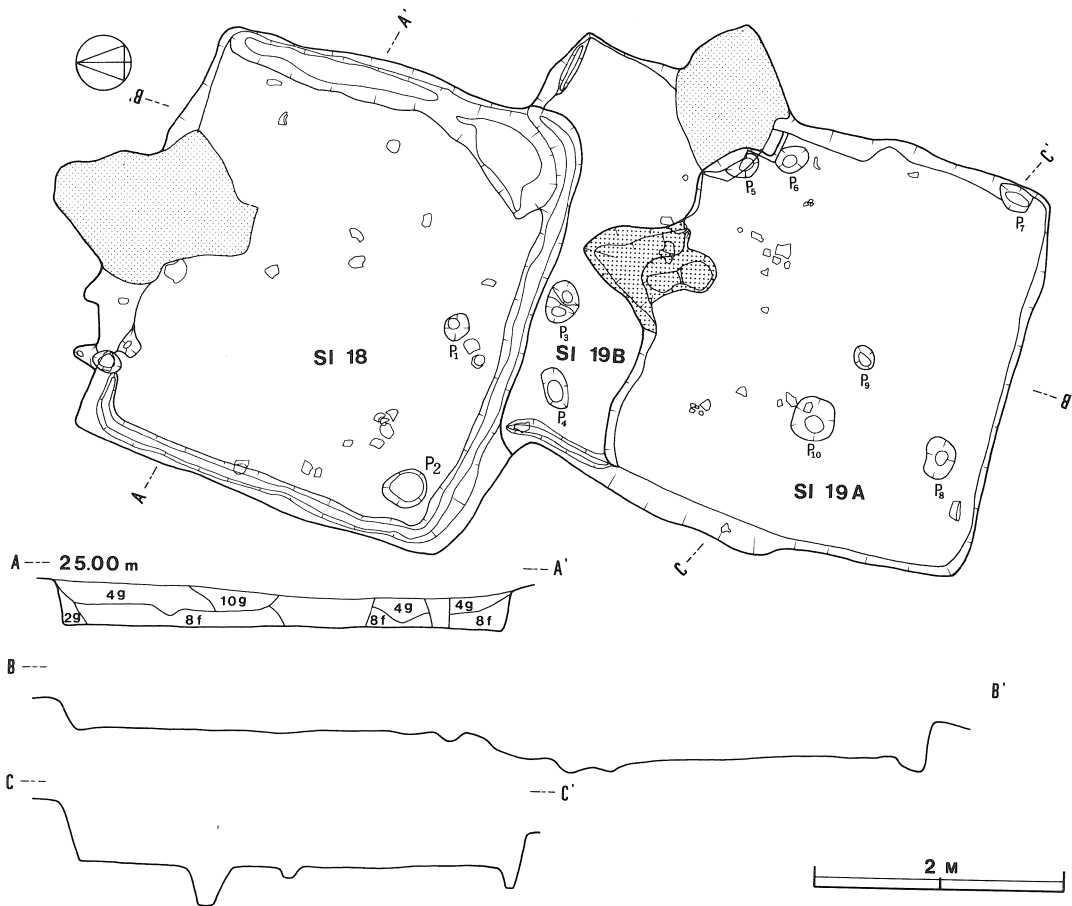
竈は北東壁中央部に付設され、長さ 90cm・袖幅 80cm・焚口部幅 52cm ほどで、袖部は山砂で構築されている。焼成部は壁を 95cm の幅で、56cm ほど掘り込み、火床は直径 40cm の円形状を呈し、床を 3cm ほど掘り窪めている。遺物は焼成部より坏形土器(第 43 図-1)が出土している。



第 41 図 第 18 号住居跡竈実測図

住居跡内覆土は一部攪乱されているところもあるが、大きく 3 層に分けられ、全体にローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を含む柔らかい極暗褐色・暗褐色・褐色の土が堆積している。

遺物は土師器・須恵器などを覆土中から少量出土している。



第42図 第18・19A・19B号住居跡実測図

遺物解説表(第43図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏土師器	A 13.5(復) B 4.95(現) C 4.8(復)	体部は底部より直線的に外側へ開き、口縁部で外反する。	内外面に共に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒・雲母 灰白色	
2	坏土師器	A 15.2(復) B 4.5(現) C	体部は底部より器厚を薄くしながら、大きくやや内彎ぎみに開く。	内面へラナデ整形、外面水挽き整形が施され、水挽き痕が外側に認められる。	良好 砂粒・石英 にぶい赤褐色(外) 黒色(内)	
3	坏(墨書土器)土師器	A 15.7(復) B 3.3(現) C	体部は底部より内彎ぎみに外側へ開く。	内外面に共に水挽き整形が施されている。	普通 砂粒・スコリア(少量) にぶい褐色	内面に漆付着。
4	坏土師器	A 11.7(復) B 3.5(現) C	体部は底部より内彎ぎみに外側へ開き、口縁部で外反する。	内面はへラナデ、外面水挽き整形が施されている。	普通 砂粒・石英 にぶい橙色(外) 黒色(内)	
5	坏土師器	A B 2.2(現) C 6.8(復)	底部は平坦であり、体部は底部より内彎ぎみに外側へ開く。また底部と体部との境に孔を有する。	外面、底部へラナデ整形、体部内外面に共に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒・雲母 にぶい橙色	

遺物解説表 (第 43 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6	蓋 須恵器	A B 1.8(現) C	宝珠状のつまみを有し、頂部は直線的に開く。	つまみは横ナデ、体部は回転ヘラ削り整形が施され、内面は水挽き整形である。	良好 砂粒・長石粒 灰色	
7	瓦		平瓦の破片	布目	普通 砂粒 灰色	

第 19 A 号住居跡(第 42 図)

本跡は B2d6 を中心に確認され、第 19 A 号住居跡の南側を切って構築し、第 18 号住居跡の南 0.3m に位置している。規模は長軸 3.26m・短軸 3.05m の隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向は N-20°-E である。壁高は 40cm ほどで、直線的に外傾して立ちあがる。床は全体的に平坦で、ロームが硬く踏み固められている。ピットは 6 個確認されたが、主柱穴とは考えられない。

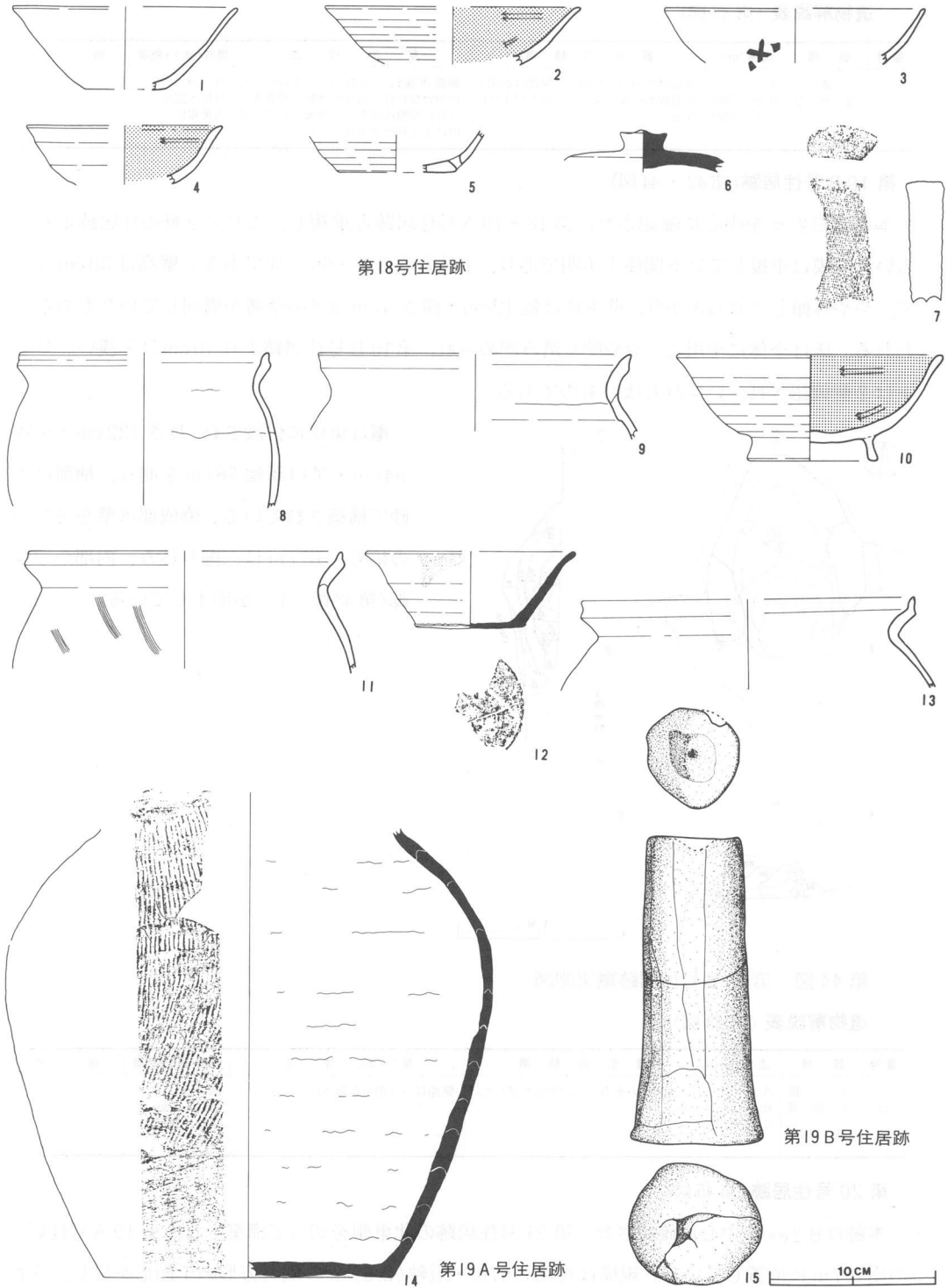
竈は北東壁中央部に付設されていたが、保存状態が悪く、袖部などは確認できなかった。また焼成部は壁を 95cm の幅で 67cm ほど掘り込み、内部から甕形土器(第 43 図-8・9・11)、高台付坏形土器(第 43 図-10)が出土している。

住居跡内覆土はレンズ状の自然堆積を示し、ローム粒子・ロームブロックなどを含む暗褐色・黒褐色の土が堆積している。

遺物の出土量は少なく、竈周辺の覆土から土師器の甕形土器(第 43 図-13)が出土している。

遺物解説表 (第 43 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
8	甕 土師器	A 14.9(復) B 9.2(現) C	口縁部は頸部より「く」の字状に外反し、口辺部で稜を有して立ち上がる。	口縁部ナデ整形、体部ヘラナデ整形が施されている。	普通 石粒・石英 明赤褐色	
9	甕 土師器	A 18.7(復) B 4.7(現) C	口縁部は大きく外反して開き、稜を有して立ち上がる。	内外面共にナデ整形がなされている。	普通 砂粒・石英 橙色	
10	高台付坏 土師器	A 16.1 B 6.35 C 7.8	坏部の底部はやや平坦で体部は底部より内彎して立ち上がり、口唇部で器厚を厚くする。また底部には「ハ」の字状の台が貼り付けられている。	内面ヘラ磨き、外面ナデ整形が施され、内外共に水挽き痕が弱く認められる。	良好 砂粒・石英 橙色(外) 黒色(内)	
11	甕 土師器	A 19.9(復) B 5.35 C	口縁部は、頸部より大きく外反して広がり、口辺部で稜を有して、垂直状に立ち上がる。胴部は頸部より内彎きみに外下方へ開く。	内外面共に口縁部はナデ整形、胴部外面ヘラ削り整形が施されている。	良好 砂粒・石英 にぶい橙色	
12	坏 須恵器	A 12.6(復) B 4.65(現) C 6.7(復)	底面は平坦で、体部は底面より器厚を厚くして、直線的に開き、口縁部で外反する。	口縁部内面は、横ナデ整形、その他は水挽き整形が施されている。またやや雑な作りで水挽き痕が弱く認められる。	普通 砂粒・長石 灰白色	底部にヘラ記号有り。
13	甕 土師器	A 18.7(復) B 7.0(現) C	口縁部は頸部より「く」の字状に開き、口辺部は稜を有し、器厚を薄くして立ち上がる。	口縁部内外面共にナデ整形、胴部外面にヘラ削りが施されている。	普通 砂粒・石英 橙色	



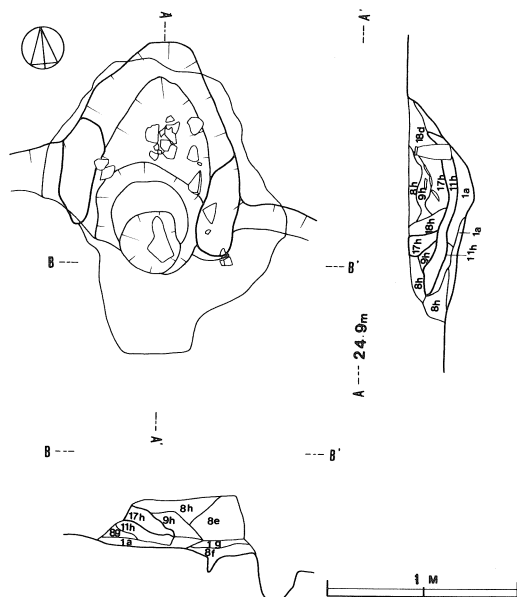
第43図 第18・19A・19B号住居跡出土遺物実測図

遺物解説表 (第 43 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
14	甕 須恵器	A B 26.9(現) C 19.2(復)	底面はやや凸凹な面で、胴部は底部より直線的に外へ開いて、最大径上位に至る。	胴部下端はヘラ削り、上半は叩きしめが行なわれ、内面には粘土紐巻き上げ痕が明瞭に残り、叩き後、ロクロ使用による横ナデを施している。	普通 砂粒・雲母 灰黄褐色	

第 19 B 号住居跡(第 42・44 図)

本跡は B2c7 を中心に確認され、第 18・19 A 号住居跡と重複し、これら 2 軒の住居跡よりも古い。規模は重複している関係上不明であり、主軸方向は N-66°-W である。壁高は 30 cm ほどで、やや外傾して立ちあがり、壁下には幅 12 cm・深さ 5 cm ほどの壁溝が周回していたものと思われる。床は全体に平坦で、やや硬く踏み固められ、第 19 B 号住居跡より 10 cm ほど浅い。ピットは 2 個確認され、いずれも浅いものである。



竈は東壁に付設され、長さ 122 cm・袖幅 94 cm・焚口部幅 58 cm を測り、袖部は山砂で構築されている。焼成部は壁を 97 cm の幅で、67 cm ほど掘り込み、内部から支脚(第 43 図-15)が出土している。

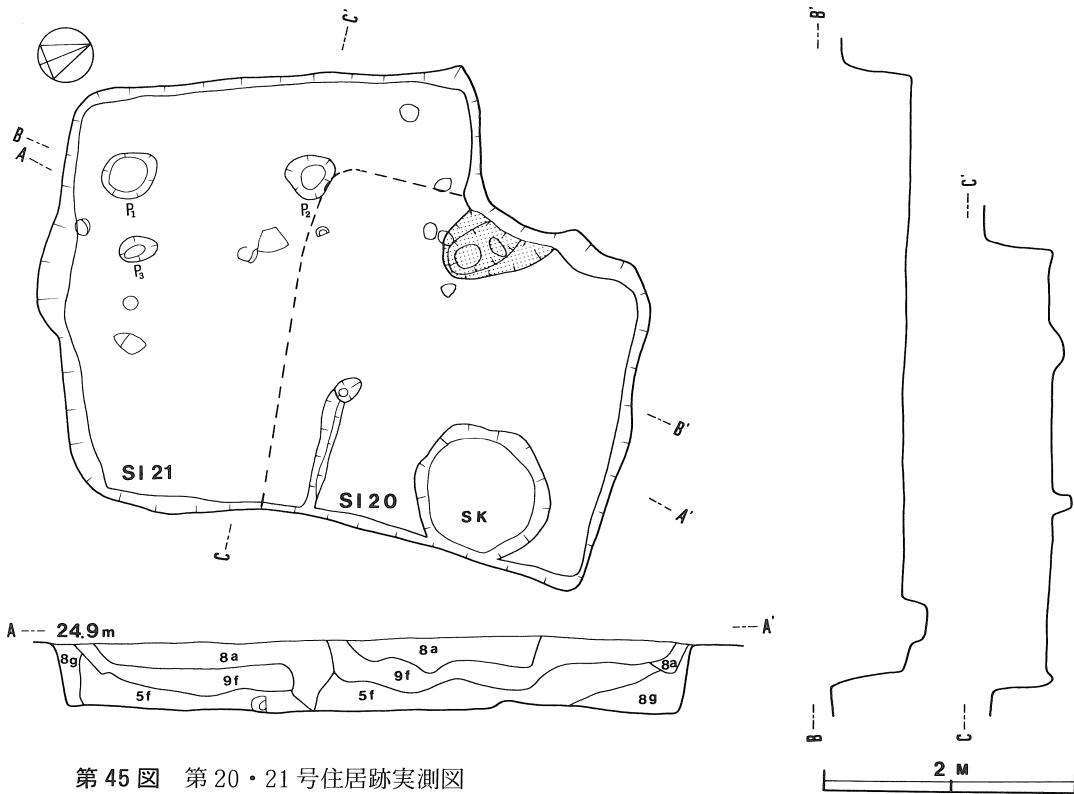
第 44 図 第 19 B 号住居跡竈実測図

遺物解説表 (第 43 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
15	支脚 土器	A 5.45 B 18.5 C 8.0	上面に凹みを有し、円筒状を呈している。	側面はヘラ削りが施されている。	普通 砂粒・雲母 にぶい橙色	

第 20 号住居跡(第 45 図)

本跡は B2e6 を中心に確認され、第 21 号住居跡の北東側を切って構築され、第 19 A 号住居跡の南 0.7 m に位置している。規模は長軸 2.67 m・短軸(2.6) m の隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向は N-52°-W である。壁高は 55~58 cm を測り、やや深く垂直に立ちあがり、床は全体に平



第45図 第20・21号住居跡実測図

坦で、硬く踏み固められている。ピットは確認されず、南東壁下に直径1.08m・深さ10cmを測る円形状の土壌が本跡を切って構築されている。

竈は北東壁中央部に付設されていたが、保存状態が悪く、袖部などを確認することはできなかった。

覆土は大きく3層に分けられ、全体にローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色・褐色の土がレンズ状に自然堆積している。

遺物は竈前部より墨書土器の盤形土器(第46図-1)・坏形土器(第46図-2・4)などが出土している。

遺物解説表 (第46図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	盤 (墨書土器) 土器	A 13.2(復) B 1.7(現) C 5.0(復)	底面はあげ底であり、体部は底部より直線的に大きく、外側へ開く。	内面は横位へラ磨き、外面ナデ調整が施されている。	良好 砂粒・石英 にぶい橙色(外) 黒色(内)	底部に「身」という墨書。
2	坏 土器	A 13.4 B 4.35 C 6.2	底面は平坦であり、体部は直線的に外上方へ開き、口縁部でやや外反する。	内面へラ磨き、外面ナデ整形が行なわれ、底部、体部下端はへラ削りが施されている。	良好 砂粒・石英 にぶい橙色(外) 黒色(内)	

遺物解説表 (第 46 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	甕 土師器	A B 3.9(現) C 8.1(復)	底部片で、底部には木葉痕が認められ、平坦である。また胴部は底部より直線的に外上方へ開く。	外面胴部下端は(左→右)へのヘラ削りが施されている。	良好 砂粒・石英 橙色	
4	坏 土師器	A 13.7 B 5.1 C 6.3	底部は中央部がやや凹み、体部は器厚を薄くしながら、直線的に外上方へ開く。	内外面共に水挽き整形が施され、水挽き痕が明瞭に認められる。	普通 砂粒・石英 にぶい橙色	
5	坏 土師器	A 15.4(復) B 4.5(現) C	体部は器厚を薄くしながら直線的に外側へ開く。	内面ヘラ磨き、外面水挽き整形が施されている。外面には、水挽き痕が明瞭に認められる。	普通 砂粒・石英 にぶい橙色(外) 黒色(内)	

## 第 21 号住居跡(第 45 図)

本跡は B2 e6 を中心に確認され、第 20 号住居跡によって北東側が切られている。第 23 号住居跡の南東 1.1m に位置し、主軸方向は N-63°-W である。規模は長軸 3.43m・短軸 3.3m の隅丸方形の平面形を呈し、壁高は 50～56cm で、直線的に外傾して立ちあがる。床はロームで硬く、全体に平坦で、第 20 号住居跡との差は見られない。ピットは西側から 3 個確認され、P<sub>1</sub> は深さ 20cm ほどで支柱穴と思われる。

竈は第 20 号住居跡によって本跡が切られているためか、確認することはできなかった。

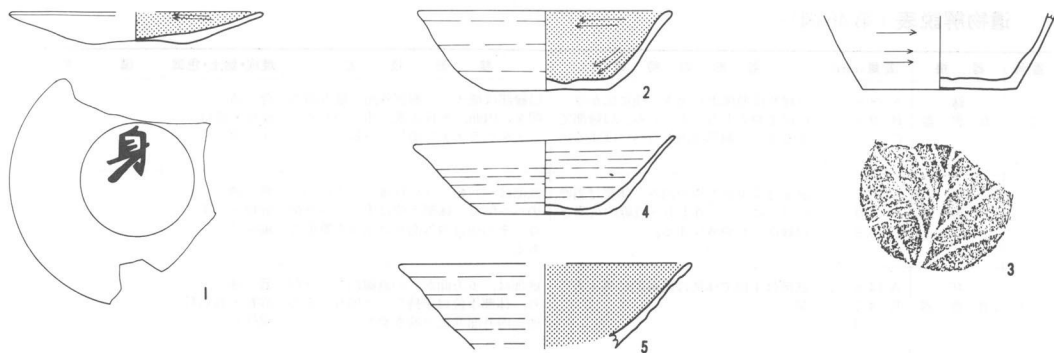
覆土は 3 層に分けられ、ローム粒子・ロームブロックなどを含む柔らかい暗褐色・褐色の土が自然流入の堆積状態を示している。

遺物は土師器・須恵器を少量出土し、南西の壁下より墨書土器の坏形土器(第 46 図-9)・中央部より完形品の坏形土器(第 46 図-8)・北西のコーナー部と中央部より須恵器の坏形土器(第 46 図-12・13)などが出土している。

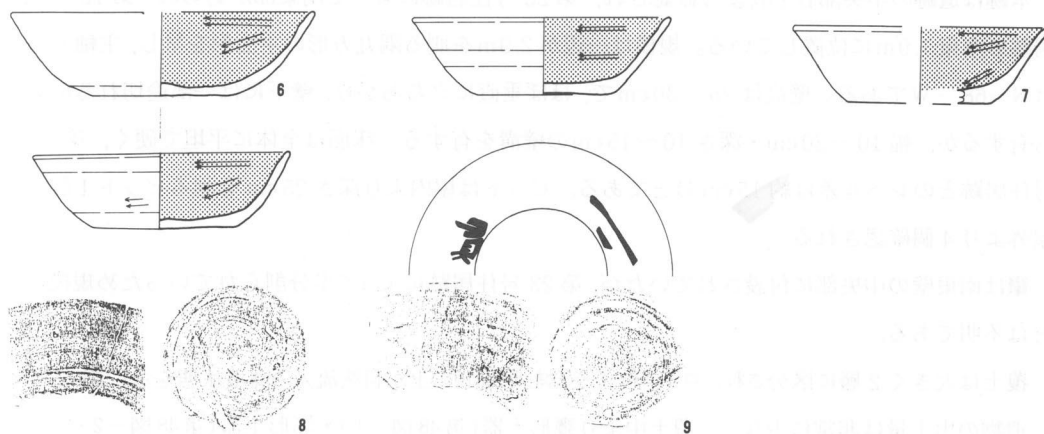
遺物解説表 (第 46 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6	坏 土師器	A 15.9(復) B 4.4 C 7.5	底部は平坦で、体部は底面よりゆるやかに内彎して外上方へ開く。	底面から体部下端にかけて回転ヘラ削り、内面は横位のヘラ磨きが施されている。	普通 砂粒・石英 褐灰色(外) 黒色(黒)	
7	坏 土師器	A 13.4(復) B 4.0(現) C 7.5	底面は平坦で、体部は器厚をうすくしながら外上方へ開き、口縁部でやや外反する。	底面から体部にかけて回転ヘラ削り、内面ヘラ磨きが施されている。	良好 砂粒・石英 にぶい赤褐色(外) 黒色(内)	
8	坏 土師器	A 13.4 B 5.1 C 7.5	底面は平坦で、体部はやや内彎ぎみに外方へ開く。	底面から体部下端は回転ヘラ削り、内面ヘラ磨きが施されている。	良好 砂粒・スコリア 明赤褐色(外) 黒色(内)	側面に焼成後ヘラ状工具によってかかれた「田」の文字。
9	坏 (墨書土器) 土師器	A 13.5 B 4.1 C 7.0	底面は中央部がやや凹むがおおむね平坦である。体部は直線的に外側へ開く。	底面は回転ヘラ切り後、体部下端から底面にかけてヘラ削り、内面ヘラ磨きが行なわれている。	良好 砂粒 橙色(外) 黒色(内)	側面に「二」 という墨書。
10	甕 須恵器	A B 26.2 C	胴部の破片である。	粗いハケ状工具によるナデ、内面に外面叩き時のアテ(中心円文)が認められる。	良好 長石・砂粒 灰黄褐色	

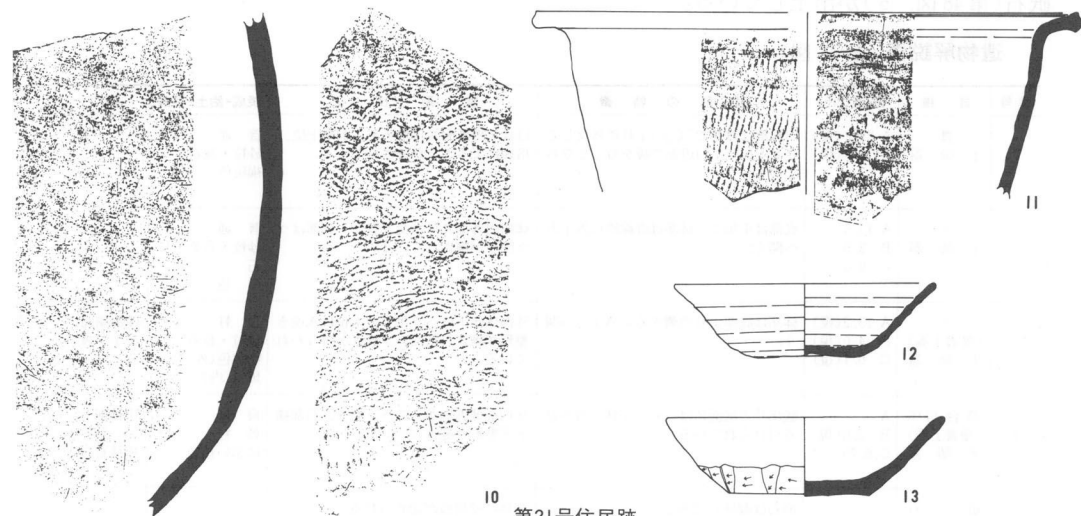




第20号住居跡



第21号住居跡



10 CM

第46图 第20・21号住居跡出土遺物実測図

遺物解説表 (第46図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
11	鉢 須恵器	A 28.8 B 9.6 C	口縁部は頸部より大きく横に広がり、口辺でやや上方へふくらみ、口唇部でまるまる。胴部は内下方へつぼまる。	口縁部は横ナデ、胴部外面、縦方向の叩き。内面、水挽き後、叩きのためのアテをヘラナデで消している。	普通 砂粒・雲母 灰色	
12	坏 須恵器	A 13.7 B 3.9 C 5.9	底面は中央部がやや凹み、体部は器厚を同じにして、外上方へ直線的に開き口縁部でやや外反する。	底部は、回転ヘラ切り後、一方向からのヘラ削り、体部下位は手持ちヘラ削り、その他は内外面共に水挽き整形である。	普通 砂粒・石英 褐灰色	
13	坏 須恵器	A 14.6 B 4.1 C 7.4	底部は平坦で体部は直線的に外上方へ開く。	底部は、多方面からの直線的なヘラ削り、体部下位は手持ちヘラ削り、その他、内外面共に水挽き整形である。	普通 砂粒・長石粒 褐灰色	

第22号住居跡(第47図)

本跡は遺跡の中央部B2d<sub>5</sub>より確認され、第23号住居跡によって南東部が切られ、第16号住居跡の南東1.9mに位置している。規模は一辺が2.9mを測る隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-68°-Wである。壁高は25~30cmで、ほぼ垂直に立ち上がり、壁下には一部途切れる部分も有するが、幅10~20cm・深さ10~15cmの壁溝を有する。床面は全体に平坦で硬く、第23号住居跡とのレベル差は約15cmほどである。ピットは屋内より深さ25cmを測るピット1個、屋外より4個確認される。

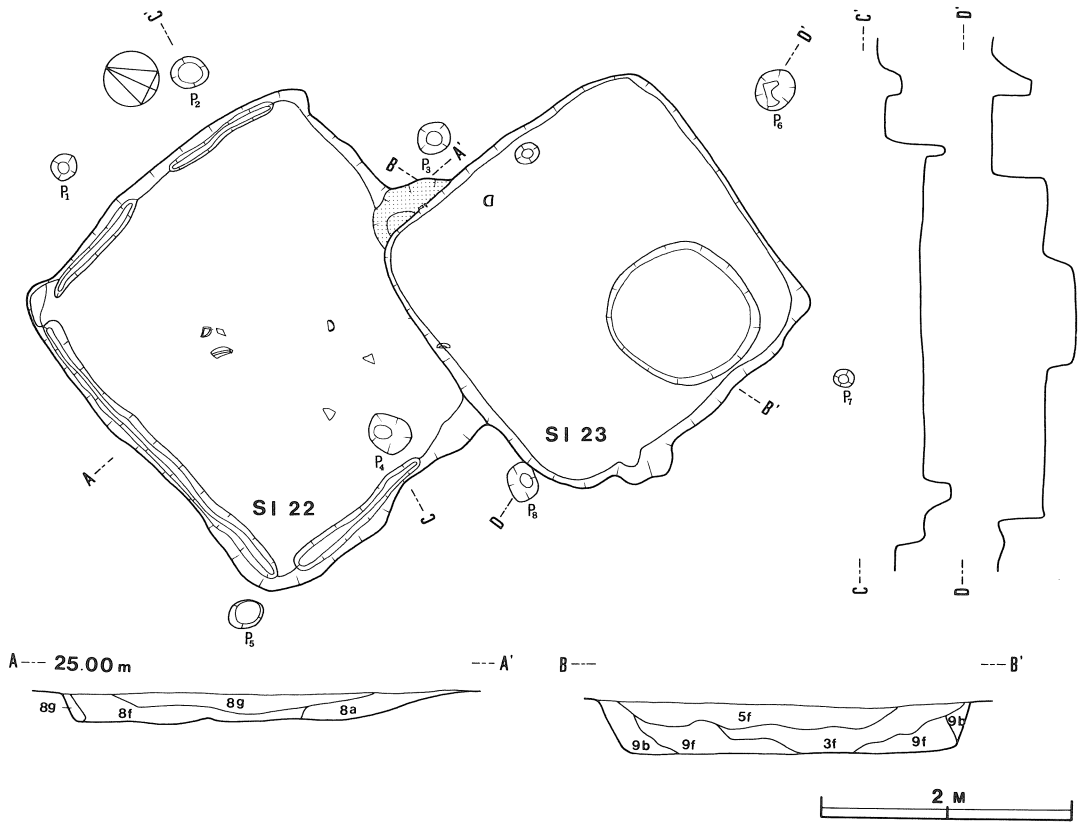
竈は南東壁の中央部に付設されていたが、第23号住居跡によって半分削られているため規模などは不明である。

覆土は大きく2層に区分され、ローム粒子を含む暗褐色の土が自然流入の堆積状態を示している。

遺物の出土量は非常に少なく、覆土中より甕形土器(第48図-1)・坏形土器(第48図-2・3)・砥石(第48図-5)が出土している。

遺物解説表 (第48図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 21.2(復) B 4.9(現) C	口縁部は頸部で「く」の字状に外反して立ち上がり、口辺部で稜を有して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部上位、指頭によるナデが施されている。	普通 砂粒・長石 褐灰色	
2	坏 土師器	A 13.5 B 2.6 C 9.0	底部は平坦で、体部は直線的に外上方へ開く。	体部内外面共に水挽き整形、底部はヘラ削りが施されている。	普通 砂粒・石英・長石 橙 色	
3	坏 (墨書土器) 土師器	A 13.2(復) B 4.0(現) C 6.1(復)	体部は底部より内彎ぎみに外上方へ開く。	外面体部下位ヘラ削り、上位は水挽き整形が施され内面ヘラ磨きが行なわれている。	良好 砂粒・長石 明褐色(外) 黒色(内)	体部側面に不明の文字が書かれている。
4	高台付坏 (墨書土器) 土師器	A B 2.0(現) C 6.75	底部片で底面には「ハ」の字状の台が貼り付けられている。	坏内面他方向からのヘラ磨き、台部横ナデ整形が施されている。	良好 砂 粒 にぶい橙 色	坏体部下位に墨書の一部と思われる痕残有り。
5	砥 石		原石は凝灰石である。	全体に使用痕が認められる。		



第47図 第22・23号住居跡実測図

第23号住居跡(第47図)

本跡はB2d<sub>5</sub>より確認され、第22号住居跡の南東部コーナーを切って構築し、第21号住居跡の南東1mに位置している。規模は長軸2.75m・短軸2.6mほどの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-26.5°-Eである。壁高は40~45cmを測り、ほぼ垂直に立ちあがり、床は東から西へやや傾斜するがおおむね平坦で硬い。また南壁下に直径107cmを測る円形状の土壇を有するが、本跡とは無関係のものである。

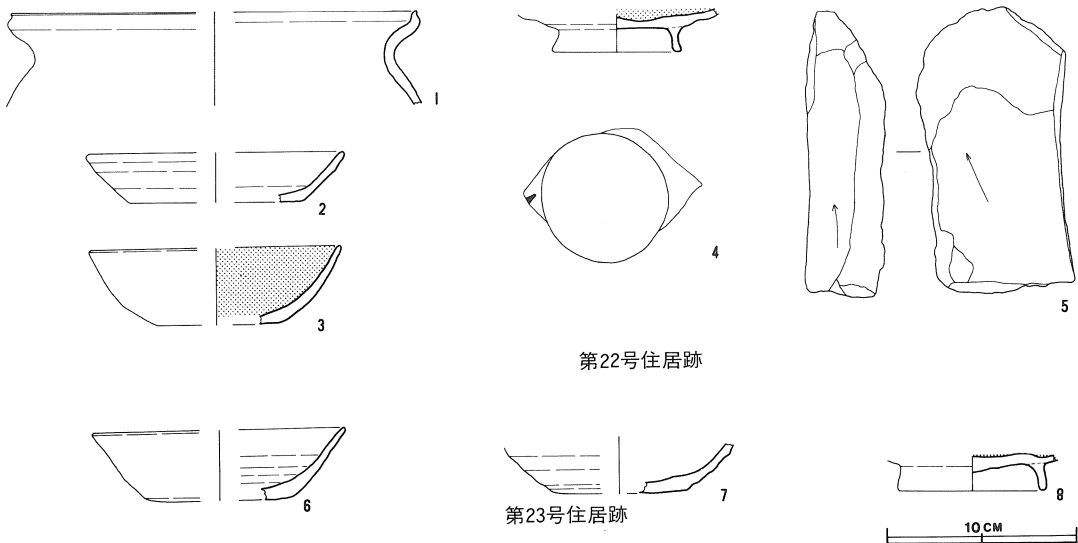
本跡には竈は付設されておらず、第11・13・15号住居跡と類似し、用途不明の竅穴状遺構で、住居跡とはとらえにくい。

覆土は大きく3層に区分され、ローム粒子・炭化粒子などを含む柔らかい暗褐色・黒褐色・褐色の土がレンズ状に堆積している。

遺物は覆土中より坏形土器(第48図-6・7)などが出土しているが、出土量は非常に少ない。

遺物解説表 (第 48 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6	坏土師器	A 13.2(復) B 3.65 C 8.0(復)	底部は平坦であり、体部は器厚を薄くしながら、外上方へ開き、口縁部でやや外反する。	底部はヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形が施され、内面には水挽き痕が認められる。	良好 砂粒・雲母にふい橙色	
7	坏土師器	A B 2.5 C 7.0(復)	底部は平坦で、体部はやや内彎ぎみに外上方へ開く。	体部内外面共に、水挽き整形が施され、外面には水挽き痕が認められる。	普通 砂粒・雲母にふい橙色	
8	高台付坏土師器	A B 1.6(現) C 7.9	底部には「ハ」の字状の台が貼り付けられている。	台部横ナデ、内面ヘラ磨き整形がなされている。	普通 砂粒・雲母にふい橙色	



第22号住居跡

第23号住居跡

第 48 図 第 22・23 号住居跡出土遺物実測図

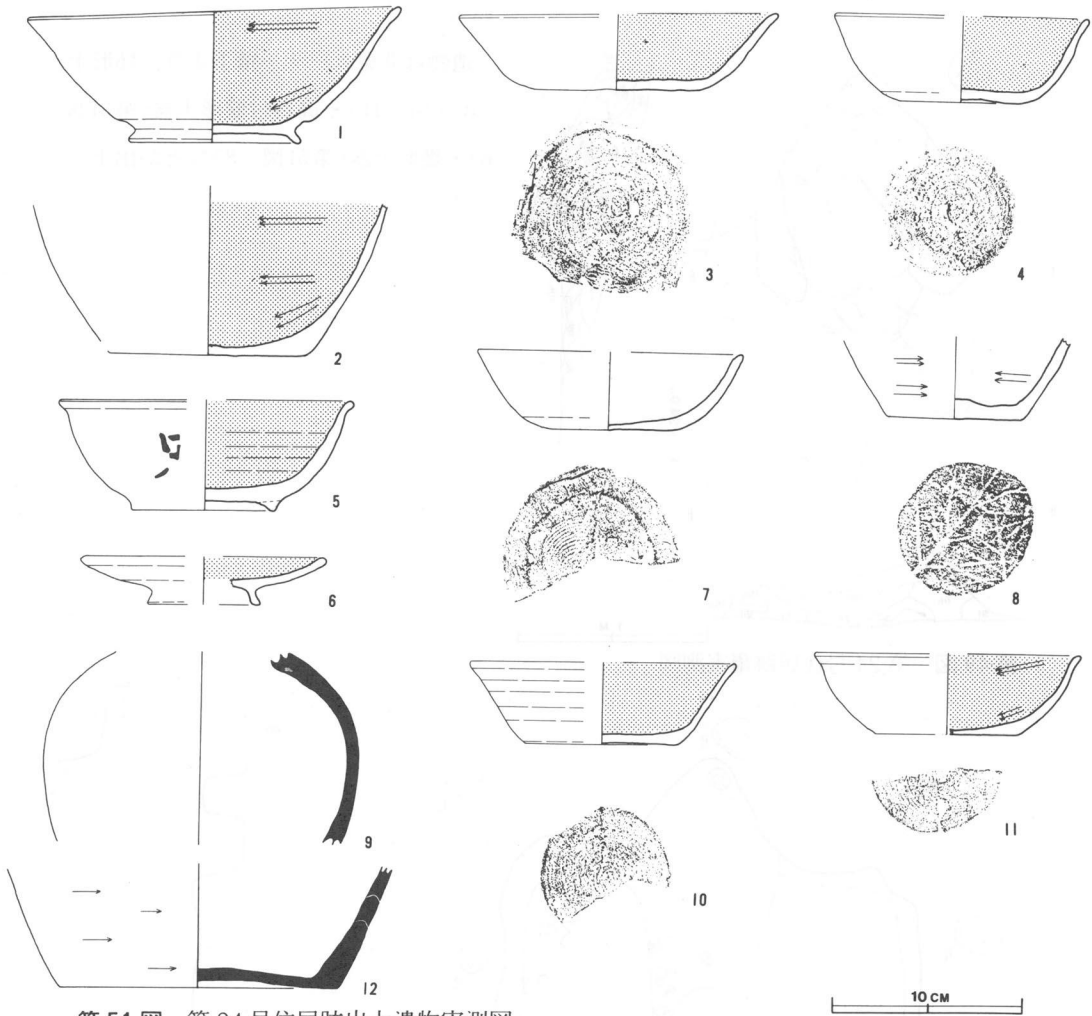
第 24 号住居跡(第 49・50 図)

本跡は B2c9 を中心に確認され、第 18 号住居跡の東 7m に位置している。規模は長軸 3.4m・短軸 3.35m の隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向は N-11.5°-E である。壁高は 40~42cm で、やや外傾して立ちあがり、ピットは屋内に 1 個・屋外に 9 個確認され、深さ 27~30cm を測る。床はおおむね平坦で、全体に硬く踏み固められ、特に竈前部が硬い。

竈は北東壁中央部に付設され、長さ 120cm・袖幅 112cm・焚口幅 54cm ほどである。袖部は山砂を主体にした土で構築され、焼成部は壁を 120cm の幅で、74cm ほど掘り込み、火床は長軸 50cm の不整楕円形で、床を 15cm ほど掘り窪めている。遺物は坏形土器(第 51 図-7)・須恵器の長頸壺形土器(第 51 図-9)・鉢形土器(第 51 図-12)などが出土している。

住居跡内覆土は大きく 3 層に分けられ、柔らかい暗褐色・極暗褐色の土がレンズ状に堆積して





第 51 図 第 24 号住居跡出土遺物実測図

遺物解説表 (第 51 図)

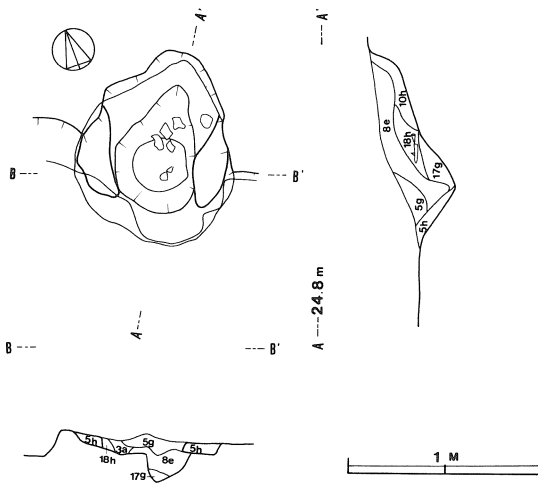
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付 土師器	A 19.5 B 7.3 C 8.9	底部は平坦で高台が貼り付けられ、体部下端が凹み、稜を有す。また体部はやや内彎きみに外上方へ開き、やや口縁部で外反する。	外面全体に水挽き整形、内面へラ磨き整形が施されている。	良好 砂粒・石英 灰褐色(外) 黒色(内)	
2	甕 土師器	A B 9.8(現) C 10.3	底部は平坦で胴部は内彎きみに外上方へ開く。	底部及び体部下位へラ削り、上位横ナデ、内面へラ磨き整形が施されている。	普通 砂粒・石英 橙色(外) 黒色(内)	
3	坏 土師器	A 15.7 B 4.25 C 8.8	底面は平坦であり、体部は直線的に外上方へ開く。また口縁部は外反する。	底部へラ削り、体部水挽き整形、内面へラ磨き整形が施されている。	良好 砂粒・長石 明赤褐色(外) 黒色(内)	
4	坏 土師器	A 13.4 B 4.6 C 6.7	底部は中央部がやや上底状になり、体部はやや内彎きみに外上方へ開き、口縁部は外反する。	底部から体部下端はへラ削り、体部水挽き整形、内面へラ磨きが施されている。	良好 砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色(外) 黒色(内)	

遺物解説表(第51図)

番号	器種	量法(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	高台付杯 (墨書土器) 土師器	A 15.4(復) B 5.8 C 7.4	底部は平坦で、体部はやや内彎きみに外上方へ立ち上がり、口縁部で大きく外反して開く。また底部には、高台が貼り付けられている。	外面は水挽き整形、内面へら磨きが施され、内面に水挽き痕が認められる。	良好 砂粒・石英 にぶい赤褐色(外) 黒色(内)	
6	高台付盤 土師器	A 12.8(復) B 3.0 C 6.0(復)	体部はやや内彎きみに外上方へ大きく開き、底面には「ハ」の字状の高台が貼り付けられている。	外面ナデ整形、内面多方向からのへら磨き整形が施されている。	良好 砂粒 にぶい赤褐色(外) 黒色(内)	
7	杯 土師器	A 14.0 B 4.1 C 6.6	底部は平坦で中央部の器厚がやや薄くなる。体部は内彎きみに外上方へ開く。	底部は糸切り後、へら削り、体部からなる。体部に掛けて水挽き整形。内面はへら磨きが施されている。	良好 砂粒 橙色	内面に漆が付着。
8	甕 土師器	A B 4.1(現) C 7.3	底部は平坦で、木葉痕が認められる。また胴部は底面よりやや内彎きみに外上方へ開く。	胴部下位はへら削り、内面はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・石英・長石 黒褐色	底部に木葉痕有り。
9	長頸壺 須恵器	A B 6.3(現) C 14.7	底部は上底を呈し、胴部は底部より直線的に外上方へ開く。	底部に縄目痕を有し、外面胴部は叩き後、横方向のへら削り、内面は胴部中位指頭による押文、下位から底部は横ナデ整形である。	普通 砂粒・雲母 にぶい黄褐色	
10	杯 土師器	A 13.9(復) B 4.3 C 8.1	底部は中央部がやや上底状になり、体部は直線的に外上方へ開く。	底部から体部下端にかけてへら削り、内面はへら磨き整形が行なわれている。内外面共に水挽き痕が認められる。	普通 砂粒・長石粒 黒褐色(外) 黒色(内)	
11	杯 土師器	A 14.0(復) B 4.25 C 7.5(復)	底面は平坦で体部は器厚をやや薄くしながら、外上方へ開き、口縁部で外反する。	底部糸切り、体部下位は手持ちへら削り、内面へら磨き整形である。	良好 砂粒・長石 明赤褐色(外) 黒色(内)	
12	鉢 須恵器	A B 9.8(現) C	胴部の破片であり、胴部は球形状を呈している。	内外面共に、横ナデ整形が施されている。	良好 砂粒 灰色	

第26号住居跡(第52・54図)

本跡はB2 f7を中心に確認され、第27号住居跡によって南東部コーナーが切られ、第21号住居跡の南東1.5mに位置している。規模は長軸3.22m・短軸3.2mの隅丸方形の平面形を呈し、



第52図 第26号住居跡竈実測図

主軸方向はN-38°-Eである。壁高は25~28cmほどで、ほぼ垂直に立ちあがる。床は全体に平坦で硬く、ピットは屋内に9個・屋外に1個確認され、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は深さ35~46cmを測り、本跡と関係のあるピットと思われる。

竈は北東壁の中央部より西側へ寄った位置に付設され、長さ84cm・袖幅75cm・焚口部幅40cmほどで、袖部は山砂で構築されている。焼成部は壁を80cmの幅で、55cmほど掘り込み、火床は直径28cmの円形を呈し、遺物は甕形土器(第53図-1)・

坏形土器(第53図-3)・高台付盤形土器(第53図-7)が出土している。

住居跡内覆土は大きく2層に分けられ、ローム粒子・ロームブロックなどを含む暗褐色・褐色の土が堆積している。

遺物の出土量は非常に少なく、覆土中より甕形土器(第53図-2)・坏形土器(第53図-6)・墨書土器(第53図-5)などが出土している。

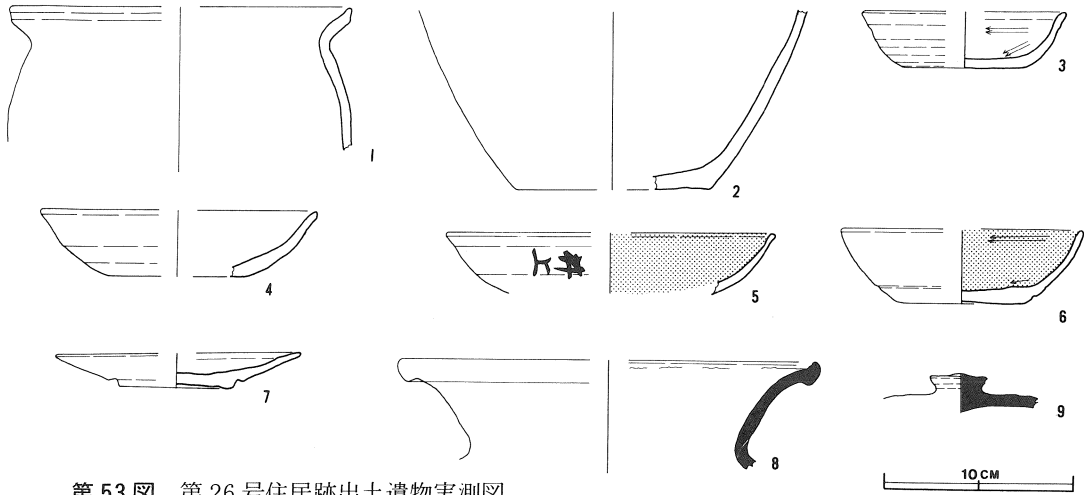
遺物解説表(第53図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 18.0(復) B 7.3(現) C	口縁部は頸部より直線的に外上方へ開き、口唇部で垂直になる。胴部は頸部より外下方へ開く。	内外面共にナデ整形が施されている。	悪い 砂粒・石英 にぶい赤褐色	
2	甕 土師器	A B 9.45(現) C 10.3(復)	底部は平坦であり、胴部は底部よりやや内彎ぎみに外上方へ開く。	外面はへら削り、内面は横ナデ整形が施されている。	悪い 砂粒・石英・長石 橙 色	
3	坏 土師器	A 10.8(復) B 3.0 C 6.2(復)	底部は平坦で、体部は底部より内彎ぎみに外上方へ開く。	底部へら削り、体部外面は水挽き整形、内面へら磨きが施されている。	普 通 砂 粒 にぶい褐色(外) 黒色(内)	
4	坏 土師器	A 14.5(復) B 3.5 C 7.2(復)	体部は大きく外上方へ内彎ぎみに開く。	底部から体部下位はへら削り、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	良 好 砂 粒 橙 色	
5	坏 (墨書土器) 土師器	A 17.2(復) B 3.25(現) C	体部は大きく内彎ぎみに外上方へ開く。	外面は水挽き整形、内面へら磨き整形が施されている。	良 好 砂 粒 にぶい褐色(外) 黒色(内)	体部側面に「井上」という墨書。
6	坏 土師器	A 12.7(復) B 3.9 C 6.6	底部は平坦で、体部は内彎して外上方へ開く。	外面水挽き整形、内面はへら磨き整形が施されている。	良 好 砂 粒 にぶい褐色(外) 黒色(内)	
7	高台付 盤形土器	A 12.8 B 2.0 C 6.1	底部は上底であり、体部は底部より直線的に開き、口縁部はやや水平になる。また台部は削り出しで作られている。	内外面共に横ナデ整形である。	良 好 砂粒・スコリア にぶい褐色(外) 黒色(内)	
8	壺 須恵器	A 22.2 B 5.3(現) C	口縁部の破片で、頸部より大きく外反して開く。	内外面共に横ナデ整形が施されている。	普 通 砂粒・雲母 灰 色	
9	蓋 須恵器	A B C	宝珠状のつまみを有し、肩部は水平に広がる。	つまみ部は横ナデ、肩部はへら削り、内面は横ナデ整形がみなされている。	良 好 砂粒・長石粒 灰 色	

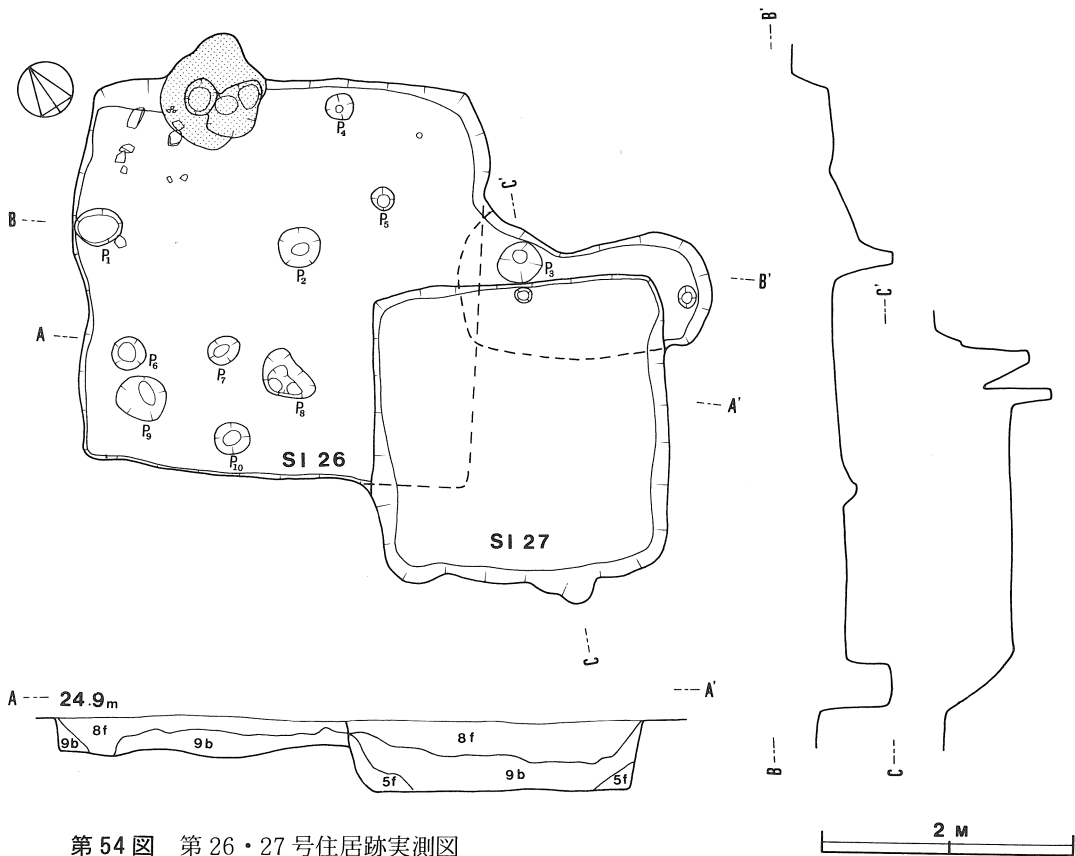
### 第27号住居跡(第54図)

本跡はB2g7を中心に確認され、第26号住居跡の南東部を切り、また北東壁の一部が新しい土壌によって切られ、第21号住居跡の南東4mに位置している。規模は長軸2.75m・短軸2.65mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-62.5°-Wである。壁高は55cmほどで、直線的に外傾して立ちあがる。また、北東壁下中央部より深さ35cmを測るピットを1個検出し、支柱穴と思われる。床は平坦で、硬く踏み固められ、第26号住居跡との差は34cmほどである。竈は北東部が土壌によって切られているため、付設されていたかは不明であり、深さ・規模から考えて、





第53図 第26号住居跡出土遺物実測図



第54図 第26・27号住居跡実測図

第11・13・15・23号と同類の竪穴状遺構と思われる。

覆土はレンズ状の自然堆積を示し、ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を含む暗褐色・褐色の土が堆積している。

遺物の出土はみられなかった。

### 第 30 号住居跡(第 30 図)

本跡は遺跡の中央部の西側より確認され、第 12 号住居跡と南西コーナー部で接している。規模は長軸(3.2)m・短軸 3.2 m の隅丸方形を呈すると思われ、主軸方向は N-30°-E である。壁高は 35~38 cm で、大きく外傾して立ちあがり、壁下には幅 15 cm・深さ 10 cm ほどの壁溝が周回している。床は全体に平坦で硬く、ピットは屋内に 5 個有するがいずれも 10 cm 前後で浅く支柱穴とは考えられない。

竈は北東壁に付設されていたが、保存状態が悪く、袖の一部と焼成部を確認する。袖部は山砂を主体にした粘土で構築され、焼成部は壁を 87 cm の幅で、42 cm ほど掘り込み、火床は床を 7 cm ほど掘り窪めている。遺物は焼成部より甕形土器の破片を少量出土する。

住居跡内覆土は 3 層に分けられ、ローム粒子・ロームブロックなどを含む柔らかい暗褐色・黒褐色の土が南側から自然流入の状態では堆積している。

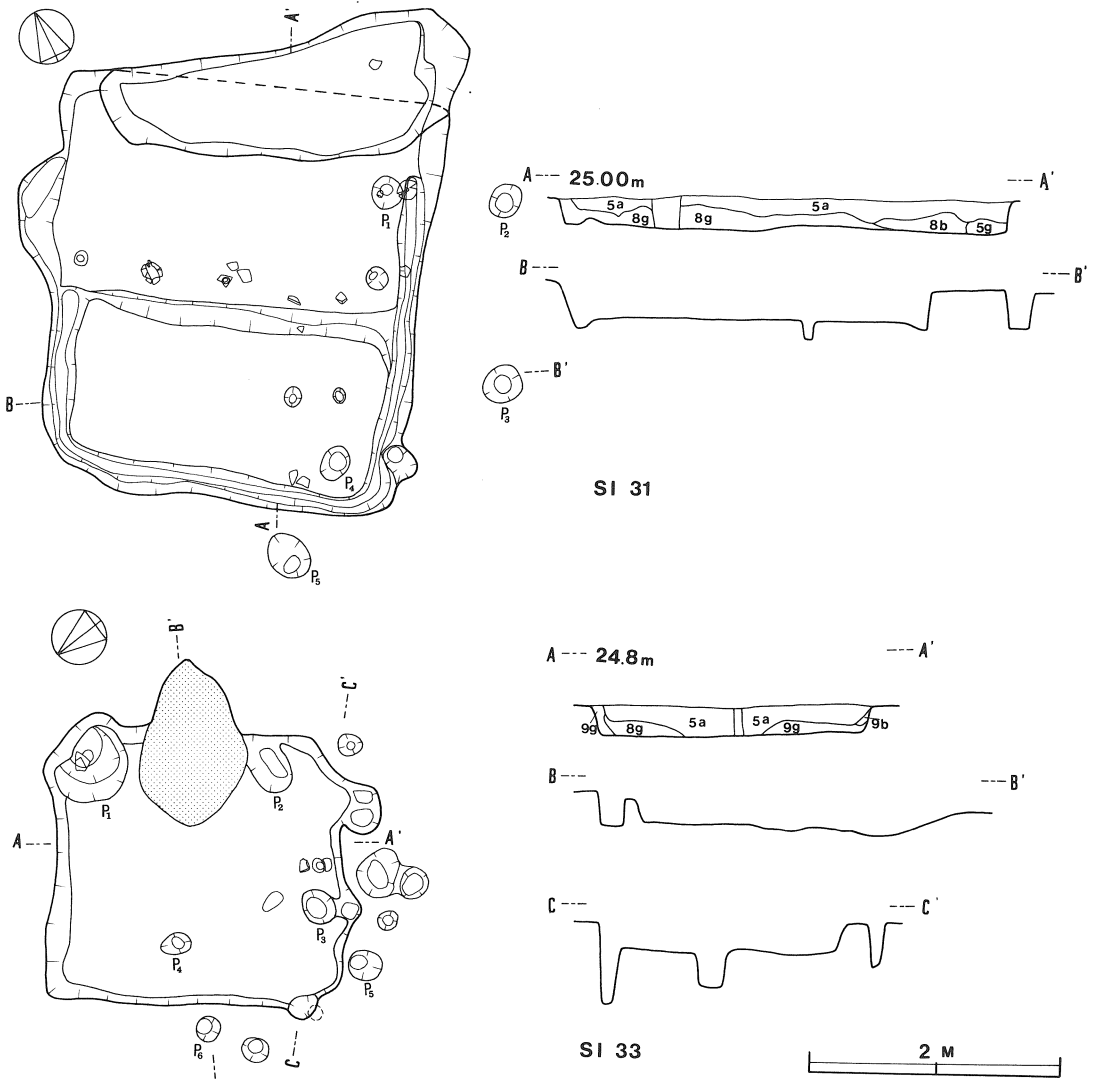
遺物の出土量は非常に少なく、床面直上より須恵器の高台付坏形土器(第 31 図-12)を出土しただけで、その他はいずれも覆土中からのものである。

遺物解説表(第 31 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
9	甕 土 師 器	A B 3.25(現) C 8.5(復)	底部の破片で、底部は平坦で、胴部は直線的に外上方へ立ち上がる。	胴部下端は、横位のへら削りが施され、また内面はナデ整形である。	普通 砂粒・石英 にふい褐色	
10	坏 土 師 器	A 15.5(復) B 3.6(現) C	口縁部の破片で、体部は底部より大きく内彎ぎみに外上方へ立ち上がる。	外面は水挽き整形、内面へら磨き整形が施されている。	良好 砂粒 にふい褐色(外) 黒色(内)	
11	高台付坏 土 師 器	A B 1.4(現) C 7.4(復)	底部は 0.9 cm の高台が「ハ」の字状に貼り付けられている。	底部はへら削り、高台部横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒 にふい褐色	
12	高台付坏 須 恵 器	A 15.3(復) B 4.1 C 7.5(復)	底部はやや凸凹であり、体部は底部より直線的に大きく外側へ開き、口縁部で稜を有して、外反する。底部には、「ハ」の字状の高台が貼りつけられている。	底部回転へら切り、体部下位回転へら削り、その他内外面共に水挽き整形である。	普通 砂粒 黄灰色	全体に器形は歪んでいる。

### 第 31 号住居跡(第 55 図)

本跡は B2 d<sub>2</sub> を中心に確認され、北東側は新しい土壌によって切られ、第 13 号住居跡の南西 4 m に位置している。規模は長軸 3.2 m・短軸 2.9 m の隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向は N-27°-E である。壁高は 40 cm ほどで、やや外傾して立ちあがり、壁下には幅 15~20 cm・深さ 5~7 cm の壁溝が周回している。床は南側の一段高い部分は非常に硬く、北側はやや硬い程度である。ピットは屋内より 5 個・屋外より 4 個検出され、屋外のピット 3 個が支柱穴ではないかと思われる。竈は北東壁が土壌によって切られているためか、確認することができなかった。



第55図 第31・33号住居跡実測図

覆土は一部攪乱を受けている部分を除いて、自然流入の堆積状態を示し、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子などを含むやや柔らかい暗褐色の土が堆積している。

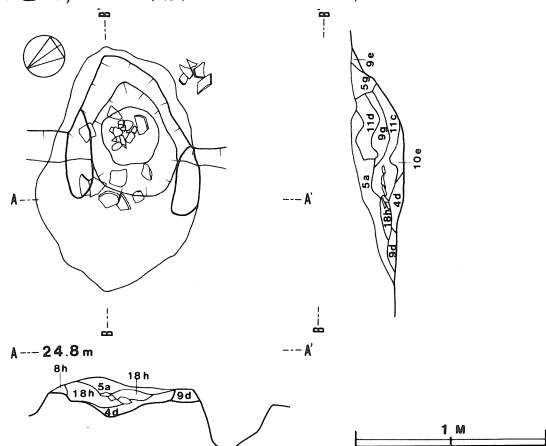
遺物は住居跡の中央部の一段低い場所より甕形土器(第57図-1)の口縁部・坏形土器(第57図-6)・高台付坏形土器(第57図-5)などが出土、覆土中より墨書土器の破片なども出土している。

遺物解説表 (第 57 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 土師器	A 22.8(復) B 6.6(現) C	口縁部の破片で、口縁部は頸部より大きく外反して開き、口辺部で稜を有して立ち上がる。	内外面共に横ナデ整形を施している。	良好 砂粒・石英 にふい橙色	内面にスス付着。
2	坏 土師器	A 17.7(復) B 4.0(現) C	体部は底部より器厚をやや薄くしながら、やや内彎きみに外上方へ開き、口縁部で外反して立ち上がる。	外面は横ナデ、内面はへら磨き整形が施されている。また外面に水挽き痕有り。	良好 砂粒・長石 にふい橙色(外) 黒色(内)	
3	坏 (墨書土器) 土師器	A B C	2つとも坏形土器の体部破片で、側面には文字が書かれている。			
4	坏 土師器	A B 3.25(現) C 6.7(復)	底部は平坦であり、体部は器厚をやや薄くしながら、外上方へ内彎きみに立ち上がる。	底部～体部下位にかけてへら削り、その他水挽き整形。内面へら磨き整形が施されている。	悪い 砂粒・長石 灰褐色	
5	高台付坏 土師器	A B 4.9(現) C 7.35	底部は平坦で、体部は底部より連続的に内彎して、外上方へ開く。底面には「ハ」の字状の高台が貼りつけられている。	底部から体部下位へら削り、体部水挽き整形、内面へら磨き整形が施されている。	普通 砂粒・長石 にふい橙色(外) 黒色(内)	
6	坏 土師器	A 14.5 B 4.7 C 7.3	底部は平坦であり、体部は器厚をやや薄くして外上方へ内彎きみに立ち上がる。	底部へら削り、体部水挽き整形、内面へら磨き整形が施されている。また内面に水挽き痕有り。	悪い 砂粒・長石 にふい橙色(外) 黒色(内)	
7	高台付坏 陶器	A 17.7(復) B 4.7 C 8.0(復)	底部は平坦であり、体部は底部より連続的に外上方へ立ち上がる。器厚は薄い。また底部に高台が貼り付けられている。	内外面共に水挽き整形であり、高台部は横ナデ整形である。また、口縁部にはハケ塗りの白色釉が塗られている。	良好 白色の胎土 灰黄色	

第 33 号住居跡 (第 55・56 図)

本跡は B2 h<sub>2</sub> を中心に確認され、第 34 号住居跡の北 3.5 m に位置している。規模は長軸 2.45 m・短軸 2.14 m の隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向は N-52°-W である。壁高は 18~24 cm ほどで、やや外傾して立ちあがり、西側壁面が一部攪乱を受けている。床はおおむね平坦で、全



第 56 図 第 33 号住居跡竈実測図

体に踏み固められて非常に硬く、またピットは西側屋外に 7 個・屋内に 5 個確認されているが、本跡との関係は不明である。

竈は南東壁の中央部に付設され、長さ 80 cm・袖幅 70 cm・焚口部幅 43 cm ほどで、袖部は褐色の粘土と山砂によって構築されている。焼成部は壁を 65 cm の幅で、45 cm 掘り込み、火床は直径 30 cm の円形状を呈し、床を 8 cm ほど掘り窪めている。遺物は焼成部より、甑形土器 (第 57 図-8)・

坏形土器(第57図-11・13~15)を出土している。

住居跡内覆土は自然流入の堆積状態を示し、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子などを含む暗褐色・褐色の土が堆積している。

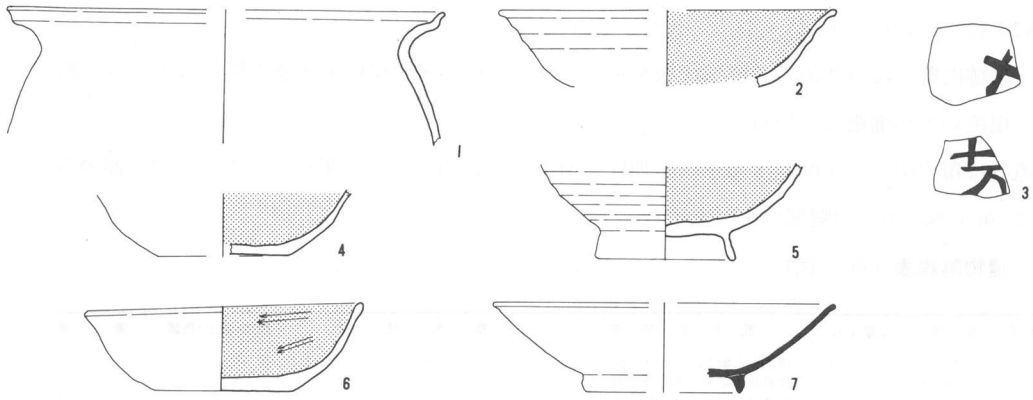
遺物は覆土中より土師器・須恵器の細片を出土し、北西コーナー部ピット内より須恵器の壺形土器(第57図-10)の胴部片を出土する。

遺物解説表(第57図)

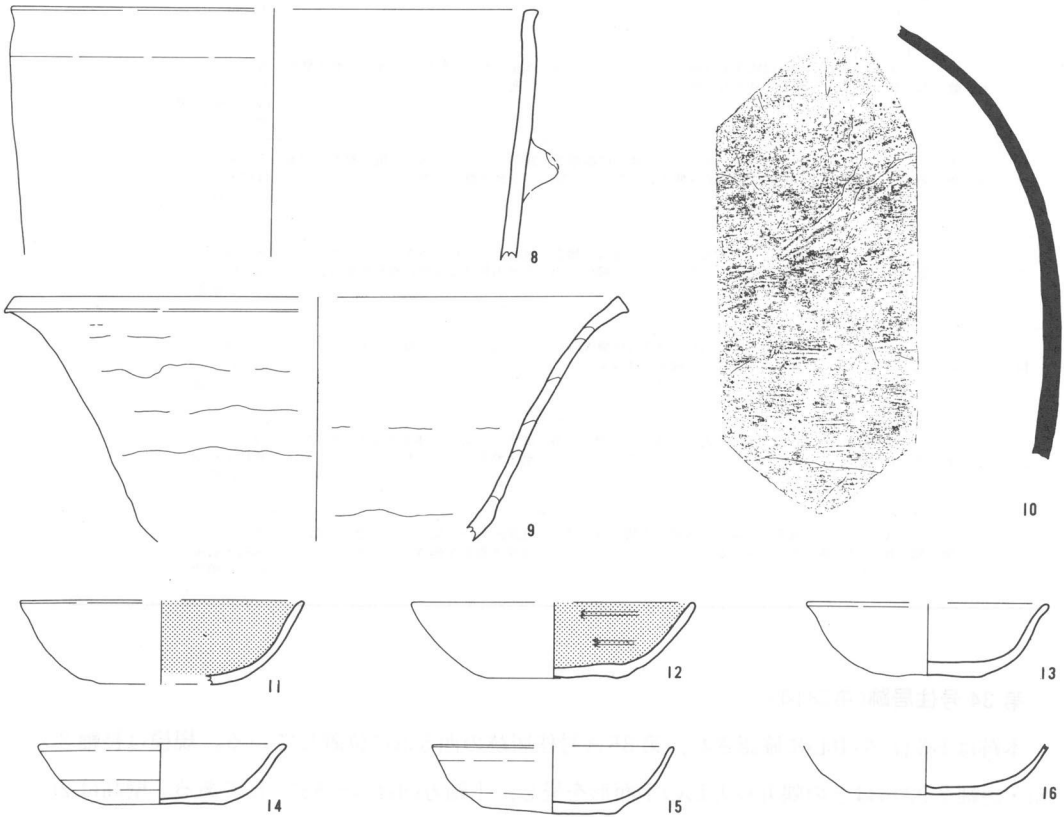
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
8	甌 土師器	A 27.2(復) B 13.0 C	口縁部から胴部にかけての破片で、胴部は直線的にやや外上方へ開く。また、口唇部は平坦であり、胴部には把手をもっている。	内外面共にナデ整形が施されている。	良好 砂粒 にぶい橙色	
9	鉢 土師器	A 31.6(復) B 12.8(現) C	体部は底部より外反して開き、口縁部で大きく外反して立ち上がる。また口唇部は平坦である。	内外面共に輪積み痕がみられ、その上を雑な横ナデ整形がなされている。	悪い 砂粒・石英・長石 灰褐色	
10	壺 須恵器	A B 22.5(現) C	胴部の破片である。	外面には弱い叩きが行われている。	良好 砂粒 灰色	
11	坏 土師器	A 14.4(復) B 4.4 C	体部は底部より器厚を同じくして、内彎して外上方へ開く。	外面は水挽き整形、内面ヘラ磨き整形が施されている。	普通 砂粒 にぶい褐色(外) 黒色(内)	
12	坏 土師器	A 14.9 B 4.0 C 6.8	底部はやや凸凹であり、体部は器厚を同一にしてやや内彎きみに外上方へ開く。	底部ヘラ削り、体部水挽き整形、内面ヘラ磨き整形が施されている。	普通 砂粒・スコリア にぶい褐色	
13	坏 土師器	A 12.7(復) B 3.9 C 4.5	底部はやや上底であり、体部は内彎きみに外上方へ立ち上がり、口縁部でやや外反する。	底部は糸切り、体部下位ヘラ削り、その他内外共に水挽き整形が施されている。	普通 砂粒 にぶい褐色	
14	坏 土師器	A 12.9 B 3.2 C 6.2	底部は平坦であり、体部は内彎きみに外上方へ開き、口縁部で外反する。	内外面共に水挽き整形である。	普通 砂粒 にぶい赤褐色	
15	坏 土師器	A 12.6 B 3.6 C 7.1	底部は平坦であり、体部は内彎して外上方へ立ち上がる。	底部ヘラ削り、体部水挽き、内面ヘラ磨き整形が行なわれている。	良好 砂粒・石英 にぶい橙色	
16	坏 土師器	A B 2.5(現) C 8.2	底部は平坦で、体部は内彎きみに外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	普通 砂粒・石英 にぶい橙色	

第34号住居跡(第58図)

本跡はB3j<sub>2</sub>を中心に確認され、第35A号住居跡の西5mに位置している。規模は長軸3.24m・短軸2.93mほどの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-53°-Eである。壁高は20~24cmほどで、やや外傾して立ちあがり、東側壁下の一部に壁溝が確認されている。床は西側部が壁より1.4m幅で一段高くなり、東側部との比高差は13cm内外である。いずれの床も平坦で硬く踏み固められている。ピットは屋内より8個・屋外より13個確認されているが、主柱穴と思



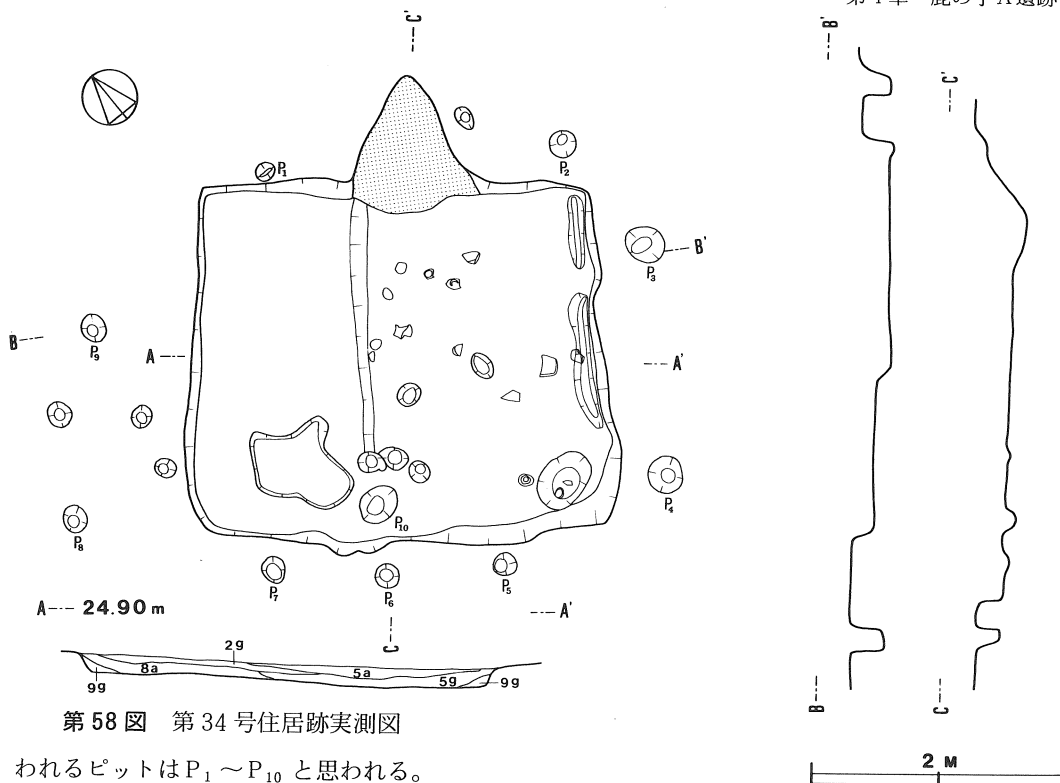
第31号住居跡



第33号住居跡

第 57 図 第 31・33 号住居跡出土遺物実測図





第58図 第34号住居跡実測図

われるピットはP<sub>1</sub>～P<sub>10</sub>と思われる。

竈は北東壁の中央部に付設されていたが、保存状態が悪く袖部などは確認できなかった。焼成部は壁を55cmの幅で、84cmほど掘り込んで作られている。遺物は焼成部より甕形土器(第59図-1)・坏形土器(第59図-4・7)などが出土している。

住居跡内覆土は大きく3層に分けられ、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子などを含むやや柔らかい黒褐色・暗褐色・褐色の土が、自然流入の堆積状態を示している。

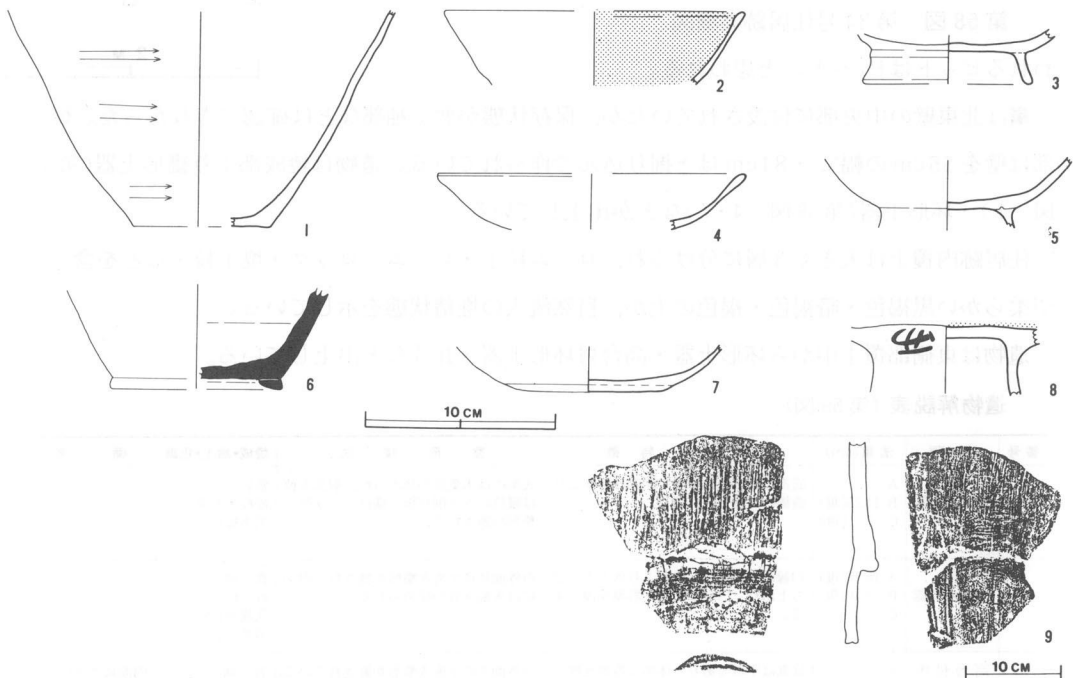
遺物は東側部覆土中から坏形土器・高台付坏形土器・瓦片など出土している。

遺物解説表(第59図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕土師器	A B 11.25(現) C 7.2(復)	底部はおおむね平坦で胴部は底部より直線的に外上方へ開く。	底部には木葉痕が認められ、胴部中位は縦位のへら削り後、横位のへら削り整形が施されている。	悪い 砂粒・石英 明赤褐色	
2	坏土師器	A 15.6(復) B 3.9(現) C	口縁部の破片で、底部より外上方へ立ち上がり、口唇部でやや器厚を厚くする。	内外面共に水挽き整形が施され、内面には水挽き痕が認められる。	普通 砂粒 灰褐色(外) 黒色(内)	
3	高台付坏土師器	A B 2.6(現) C 8.9	底部は平坦であり、体部は器厚を厚くして外上方へ開く。	内外面共に水挽き整形が施されている。	普通 砂粒 橙色	内面にスス附着。
4	坏土師器	A 16.0(復) B 2.9(現) C	口縁部の破片で、底部よりやや内彎ぎみに大きく外上方へ開く。口縁部で器厚を厚くし外反して立ち上がる。	内外面共に水挽き整形が施されている。	普通 砂粒 橙色	

遺物解説表 (第59図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	高台付 坏土師器	A B 3.5(現) C	底部は平坦で体部は底部より連続的にやや内彎して外上方へ立ち上がる。また底部には高台が貼り付けられている。	外面、高台共に横ナデ整形、内面ヘラ磨きが行なわれている。	普通 砂粒・石英 にぶい黄橙色	
6	高台付 須恵器	A B 5.1(現) C 9.0(復)	底部は平坦で胴部は底部より直線的に外上方へ立ち上がる。	底部は糸切り、外面胴部回転ヘラ削り。内面水挽き整形が施されている。	良好 砂粒 黄灰色	胴部側面の一部に自然軸。
7	坏土師器	A B 2.35(現) C 6.5	底部は平坦で、体部は器厚を薄くし内彎して外上方へ立ち上がる。	底部はヘラ削り、その他内外面に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒 橙色	
8	器台 (墨書土器) 土師器	A B 3.6(現) C	受部から脚部にかけての破片である。受部下端側面に「西」という墨書が認められる。	ナデ整形がなされている。	良好 砂粒 橙色(外) 黒色(内)	
9	瓦		丸瓦の破片である。	凹面に布目、凸面ヘラ削り整形。二次焼成を受けている。		



第59図 第34号住居跡出土遺物実測図



## 第35A号住居跡(第60図)

本跡はB2j<sub>4</sub>を中心に確認され、第35A・36号住居跡が重複し、本跡は第36号住居跡によって切られている。第34号住居跡の東5mに位置し、規模は長軸3.65m・短軸(3.55)mほどの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-38°-Eである。壁高は40cmほどで、やや外傾して立ちあがり、南西部壁下には幅10cm・深さ7cmほどの壁溝が周回している。床は多少起伏が見られるが硬く、ピットは重複しているため不明の点が多いが、規則制からP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>11</sub>が支柱穴ではないかと考えられる。

覆土は3層に分けられ、黒褐色・極暗褐色の土がレンズ状に堆積していたものと思われる。

遺物は南側よりやや多く出土し、西側床面上より高台付坏形土器(第61図-1・2)の完形品が出土している。また覆土中より刀子片1点検出される。

遺物解説表(第61図)

番号	器種	量量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付坏土器	A 14.6 B 5.4 C 7.8	底部は平坦で、体部は器厚を薄くしながら、外上方へ立ち上がる。底部には「ハ」の字状の高台が貼り付けられている。	底部から体部下位回転ヘラ削り、内面横位のヘラ磨きが施され、内外面共に水挽き痕が認められる。	良好 砂粒・石英 にぶい橙色(外) 黒色(内)	
2	高台付坏土器	A 14.5 B 5.5 C 7.1	底部はやや平坦で、体部は底部より連続的にゆるやかに外上方へ開き、中位より内彎して上方へ立ち上がる。口縁部は外反する。また底部には高台が貼り付けられている。	底部から体部下位は、回転ヘラ削り、内面は横位のヘラ磨き整形が施されている。	良好 砂粒・石英 黒褐色(外) 黒色(内)	
3	高台付坏土器	A B 2.3(現) C	底部は平坦で体部は底部より連続的に外上方へ立ち上がる。	内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒・スコリア 橙色(外) 黒色(内)	
4	高台付坏土器	A B 2.5(現) C 8.2	底部は平坦で、底面には「ハ」の字状の高台が貼り付けられている。	内面ヘラ磨き、高台部横ナデ整形である。	良好 砂粒・石英 にぶい橙色(外) 黒色(内)	
5	高台付坏(墨書土器)土器	A 13.4(復) B 4.3(現) C	体部は底部より、連続的に外上方へ立ち上がる。	内面体部は横位、底部斜位のヘラ磨き、外面横ナデ整形がなされている。	良好 砂粒 にぶい橙色(外) 黒色(内)	体部側面に墨書あり。
6	坏(墨書土器)土器	A B C	墨書土器の体部破片3個であり、いずれも体部側面に文字が書かれている。			
7	瓦		平瓦の破片である。	凹面に布目、凸面に縄目の叩き。		
8	刀子		茎部である。			

## 第35B号住居跡(第60図)

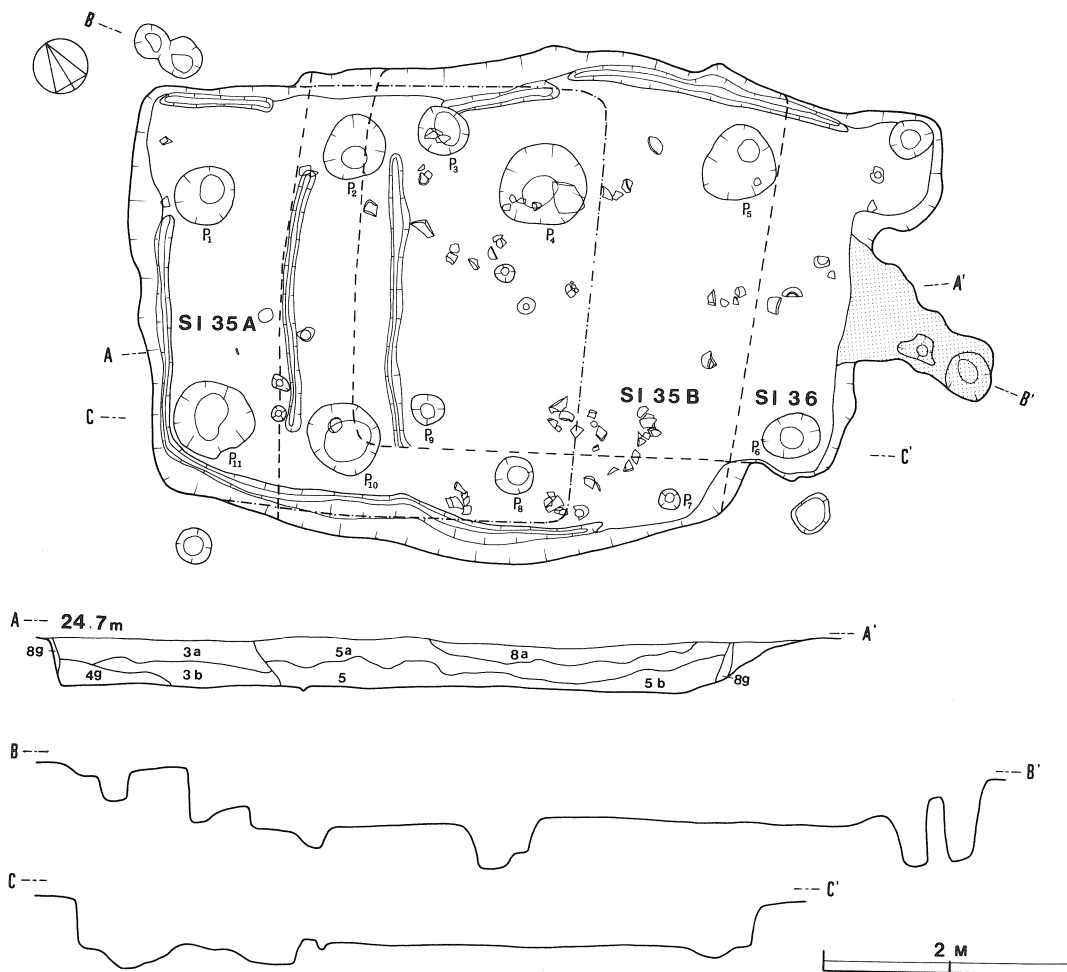
本跡はB2j<sub>3</sub>を中心に確認され、第35A・36号住居跡と重複し、第35Aと同様第36号住居跡によって切られている。規模は長軸(3.7)m・短軸3.55mを測る隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-39.5°-Eである。壁高は第35A号住居跡と同レベルの40cmほどで、やや外傾して

立ちあがる。床は平坦で硬く、ピットはP<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>10</sub>が確認される。本跡及び第35A号住居跡からは竈は確認できず、第36号住居跡構築の際破壊されたものと思われる。

遺物は南側壁下より高台付环形土器が出土している。

遺物解説表 (第61図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
9	高台付 坏土 師器	A B 6.4(現) C 5.2	底部は平坦であり、体部は連続的に外上方へ内彎ぎみに立ち上がる。また底部には3cmを測る高台が貼りつけられている。	内外面共に横ナデ整形形である。	普通 砂粒 にぶい褐色	



第60図 第35A・35B・36号住居跡実測図

第36号住居跡(第60図)

本跡はB2j<sub>4</sub>を中心に確認され、第35A・B号住居跡を切って構築している。規模は長

軸(4.05)m・短軸2.9mの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-52°-Wである。壁高は約40cmほどで、やや外傾して立ちあがり、床は平坦で硬い。ピットは6個確認されたが、主柱穴はP<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>9</sub>と思われる。

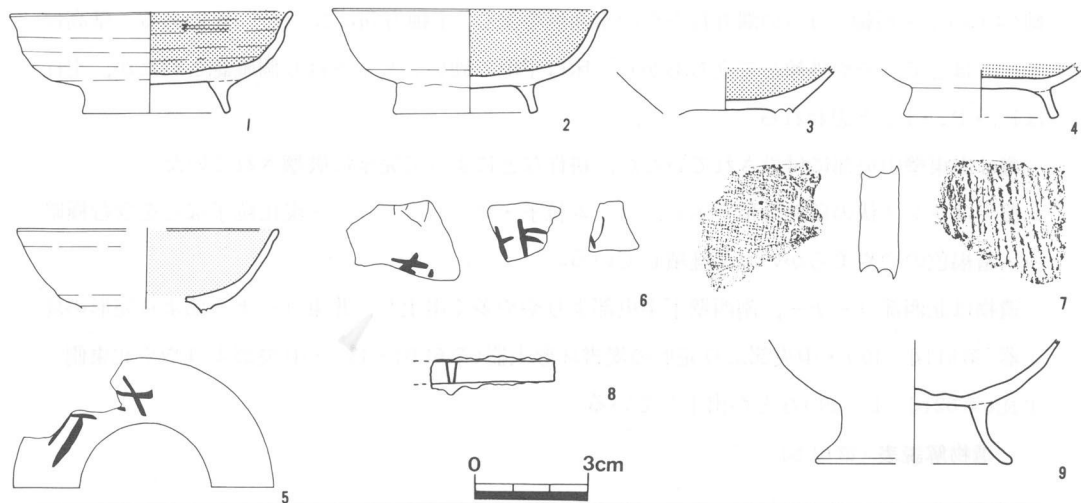
竈は南東壁中央部に付設されていたが、耕作などによって完全に破壊されていた。

覆土はレンズ状の自然堆積を示し、ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子などを含む極暗褐色・暗褐色のやや柔らかい土が堆積している。

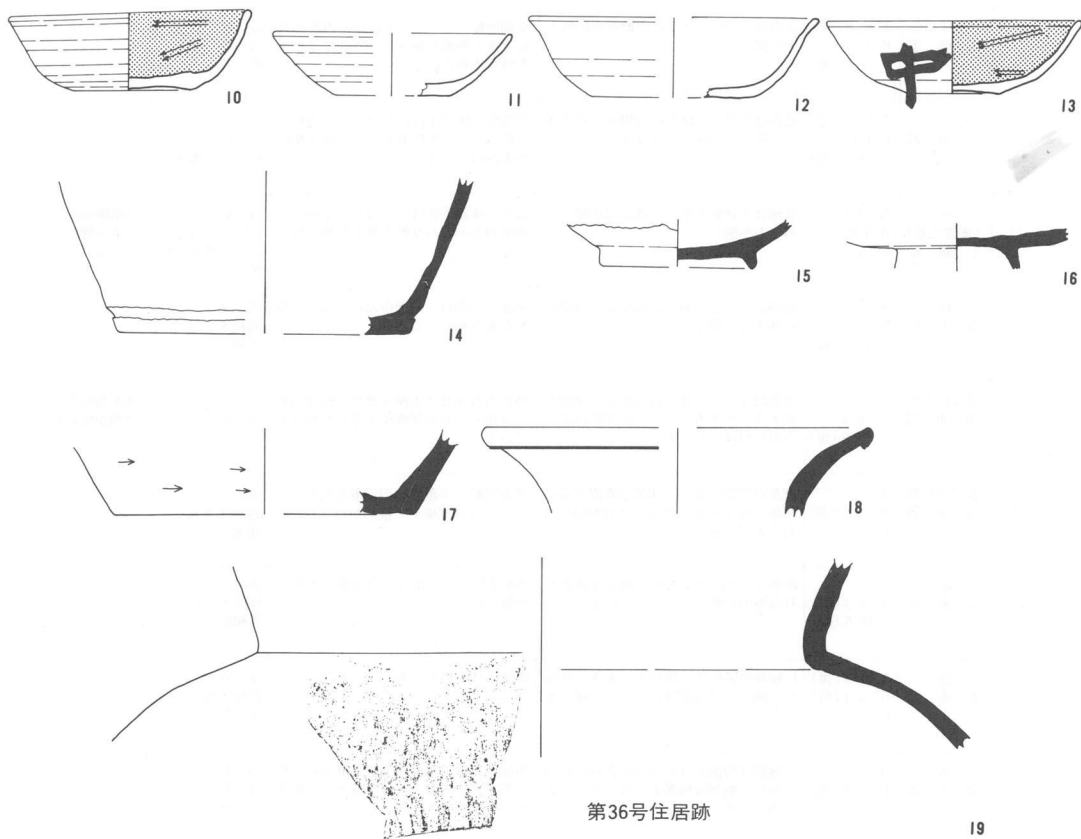
遺物は北西部コーナー、南西壁下中央部よりやや多く出土し、北東コーナー部より完形の坏形土器(第61図-10)・中央部より完形の墨書坏形土器(第61図-13)・中央部よりやや北東側より平瓦(第62図-1~10)などが出土している。

遺物解説表(第61図)

番号	器種	量(㎝)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
10	坏土器	A 12.3 B 4.2 C 6.1	底部は上げ底を呈し、体部は内彎してやや外上方へ立ち上がる。	底部は回転へら削り、体部水挽き、内面横位のへら磨き整形が施されている。	良好 砂粒・雲母にぶい 橙色(外) 黒色(内)	
11	坏土器	A 12.6(復) B 3.25 C 6.0(復)	底部は平坦で、体部は内彎ぎみに外上方へ開く。	底部回転へら削り、その他、内外面共に水挽き整形が施され、外面には水挽き痕が認められる。	良好 砂粒 橙色	
12	坏土器	A 15.0(復) B 4.15 C 8.8(復)	底部は平坦で、体部は内彎ぎみに外上方へ開き、口縁部で外反する。	底部から体部下位にかけて、手持ちへら削り、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	悪い 砂粒 にぶい黄橙色	
13	坏(墨書土器)土器	A 13.3 B 3.85 C 4.8	底部は上げ底を呈し、体部は内彎して外上方へ開く。	底部、体部下位は、手持ちへら削り、内面斜方向のへら磨き整形が施されている。	良好 砂粒・スコリアにぶい 橙色(外) 黒色(内)	体部側面に「中」の文字一個が書かれている。
14	鉢須恵器	A B 8.2 C 15.2(復)	底部は平坦で、胴部は底部より直線的に外上方へ開く。	外面へら削り、内面指頭によるナデ整形が施されている。	普通 砂粒・雲母 黒褐色	
15	高台付坏須恵器	A B 2.4 C 7.8(復)	底部は平坦で、体部は底部より連続的に大きく外上方へ開く。底部には高台が貼り付けられている。	体部内外面共に水挽き整形、底部回転へら削り、高台部横ナデ整形が施されている。	良好 細砂 灰白色	体部側面に一部白色釉が塗られている。
16	高台付盤須恵器	A B 2.1(現) C	底部は平坦であり、体部は垂直ぎみに外側へ開く。底部には、高台が貼り付けられている。	底部回転へら削り、内面多方向からのナデ、高台部横ナデ整形が施されている。	悪い 細砂・雲母 黒褐色	
17	鉢須恵器	A B 4.3(現) C 15.6(復)	底部はやや凸凹であり、胴部は底部より直線的に外上方へ立ち上がる。	外面手持ちへら削り、内面横ナデ整形が施されている。	悪い 砂粒・長石 黒褐色	
18	壺須恵器	A 20.0(復) B 4.4(現) C	口縁部の破片で、頸部より大きく外反して開き、口辺部はおり返し口縁である。	内面横ナデ整形である。	良好 砂粒・長石 灰白色	
19	壺須恵器	A B 9.8(現) C	口縁部は頸部よりやや外反ぎみに立ち上がり、胴部は頸部より外上方へ大きく張り出す。	外面、口縁部水挽き、胴部縦方向の粗い叩き目。内面、口縁部横ナデ、胴部ナデ整形が施されている。	良好 砂粒 灰色	

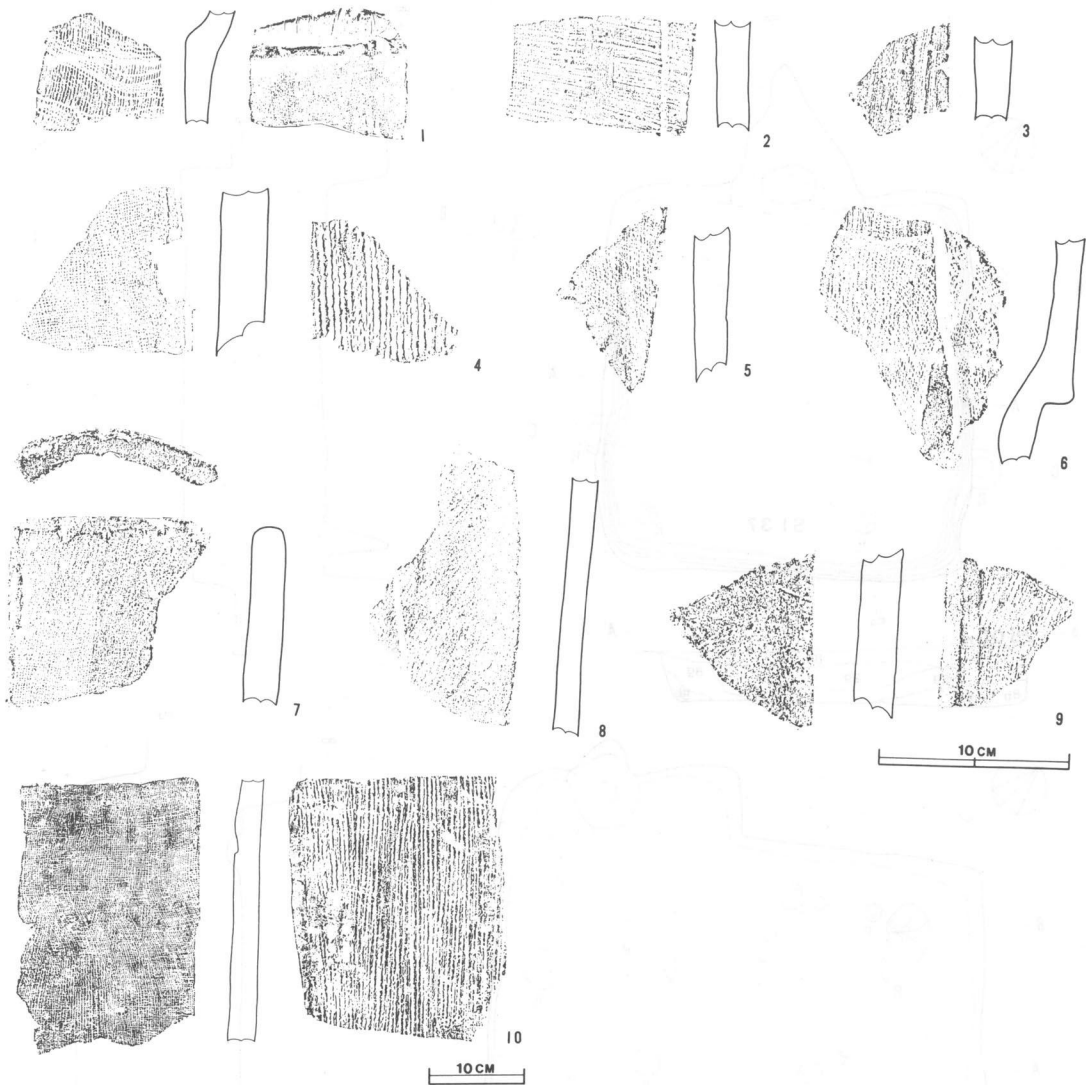


第35 A · B号住居跡(A-1~8, B-9)



第36号住居跡

第61图 第35 A · 35 B · 36号住居跡出土遺物実測図



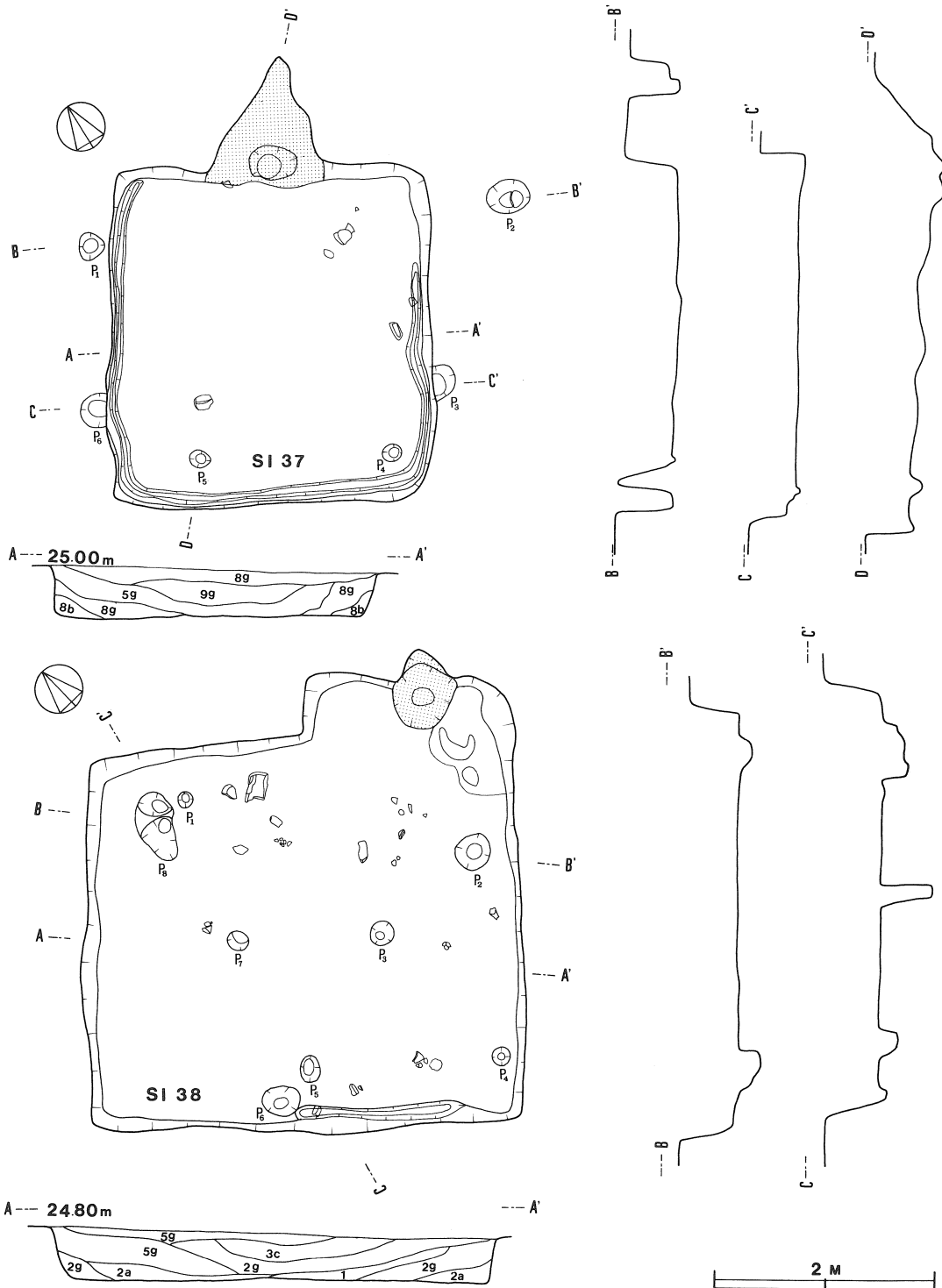
第62図 第36号住居跡出土遺物実測図

遺物解説表(第62図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1 / 10	瓦		平瓦、丸瓦の破片である。	凹面には布目、凸面には縄目の叩き	8812	

第37号住居跡(第63図)

本跡はB1j8を中心に確認され、第34号住居跡の西14mに位置している。規模は長軸3.06m・短軸2.86mほどの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-35°-Eである。壁高は40~45cmほどで、直線的に外傾して立ちあがり、壁下には幅7~20cm・深さ5~10cmの壁高が周回している。



第 63 图 第 37·38 号住居跡実測図

床は多少起伏が見られるがおおむね平坦で硬く、また、ピットは屋内に小ピット2個・屋外に4個有し、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>～P<sub>6</sub>は本跡の支柱穴と考えられる。

竈は北東壁中央部に付設され、焼成部は壁を112cm幅で、98cmほど掘り込んで構築している。遺物は焚口部より高台付坏形土器(第64図-1・3)などが出土している。

住居跡内覆土は大きく5層に分けられ、ローム粒子・焼土粒子などを含む暗褐色・極暗褐色・褐色の土がレンズ状に堆積している。

遺物の出土量は非常に少なく、覆土中より坏形土器(第64図-2・4)などが出土している。

遺物解説表(第64図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付坏土師器	A 20.1 B 7.0(現) C	底部平坦で体部は器厚をやや薄くしながら、外上方へ立ち上がり、口縁部でやや外反する。	底部回転ヘラ削り、体部水挽き整形、内面横斜位のヘラ磨きが行われている。	普通砂粒・石英にふい橙色(外)黒色(内)	
2	坏土師器	A 19.2(復) B 5.8(現) C	体部は底部方向より外上方へ開き口縁部でやや外反する。	外面体部水挽き、内面横位のヘラ磨き整形が行われている。	普通砂粒・長石灰褐色(外)黒色(内)	
3	高台付坏土師器	A 16.0(復) B 5.0(現) C	底部は平坦で体部は器厚をうすくして内彎ぎみに外上方へ大きく開き、口縁部で外反する。	外面水挽き整形、内面横斜位方向のヘラ磨きが行われている。	普通砂粒・長石にふい橙色(外)黒色(内)	
4	坏(墨書土器)須恵器	A 14.5(復) B 2.7 C	口縁部の破片で体部側面に墨書有り。	内外面共に水挽き整形が施され外面に水挽き痕が認められる。	普通砂粒灰黄色	

第38号住居跡(第63図)

本跡は遺跡の南側C1c9を中心に確認され、第39号住居跡の北1.4mに位置している。規模は長軸4.2m・短軸3.96mほどの長方形を呈するが、竈が付設されている北東壁半分に約60cmほど張り出しが見られる。また、主軸方向はN-42°-Eである。壁高は50～55cmとやや深く、直線的に外傾して立ちあがり、床は全体に硬く平坦である。ピットは屋内より8個確認されたが、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>を除いていずれも10cm内外と浅く、支柱穴はP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>と考えられる。

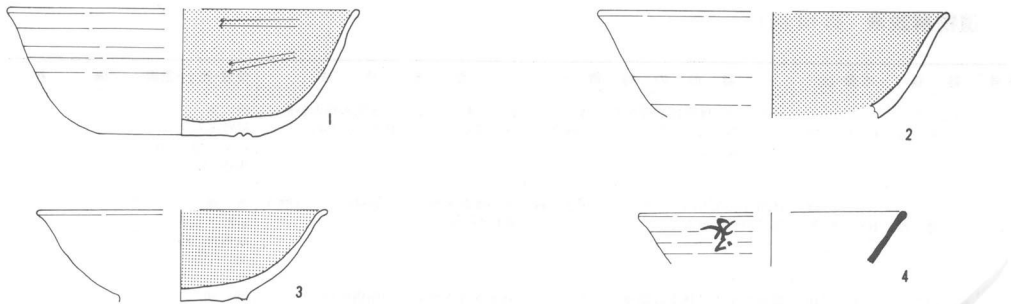
竈は北東壁の中央部より南側に寄った位置に付設されていたが、保存状態が非常に悪く、規模及び袖部等を確認することはできない。

住居跡内覆土は6層に分けられ、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子などを含む黒褐色・暗褐色の土がレンズ状に自然堆積している。

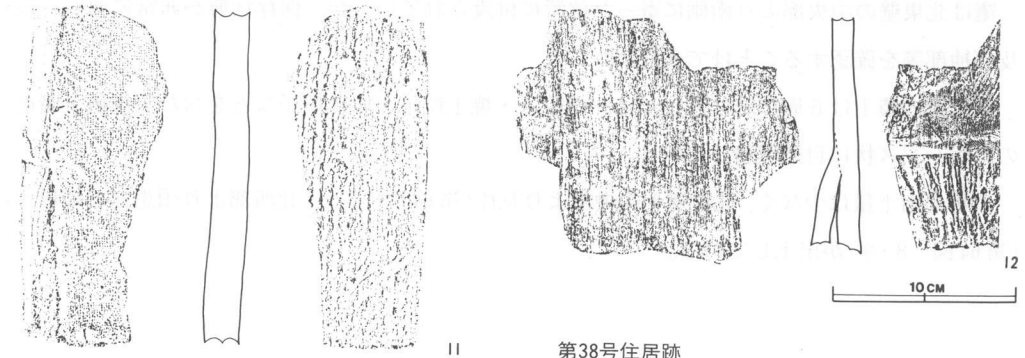
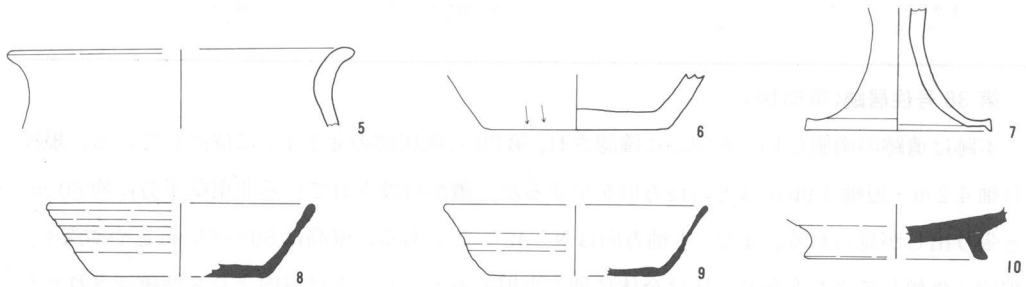
遺物の出土量は少なく、北東壁下中央部より瓦片(第64図-12)・西北部より須恵器の坏形土器(第64図-8・9)が出土している。

遺物解説表 (第 64 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	甕 土師器	A 19.0 B 4.3(現) C	口縁部の破片で、頸部より外反して開き、口辺部は水平になる。	内外面共に横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・石英 明赤褐色	
6	甕 土師器	A B 3.0(現) C 10.0(復)	底部は平坦で、胴部は底部より直線的に外上方へ開く。	外面の胴部は縦位のへら削り、内面ナデ整形が施されている。	悪い 砂粒・石英 にぶい褐色	



第37号住居跡



第38号住居跡

第 64 図 第 37・38 号住居跡出土遺物実測図



遺物解説表(第64図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
7	高土師質須恵器 坏	A B 6.7(現) C 10.2(復)	高坏の脚部の破片で、脚部は柱部よりゆるやかに外上方へ開き、端部は稜を有して水平になる。	外面は水挽き整形、内面は横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・長石にぶい 褐色	
8	坏 須恵器	A 14.6(復) B 4.0 C 9.3(復)	底部は平坦で体部は直線的に外上方へ開く。	底部は手持ちによる一方からのへら削り、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 細砂・長石 灰白色	
9	坏 須恵器	A 14.2(復) B 3.9 C 9.4(復)	底部は平坦で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部回転へら切り後、外周へらナデ、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 細砂・雲母 灰白色	
10	高台付坏 須恵器	A B 2.8(現) C 10.0(復)	底部は側面から中央部に向かって、やや傾斜し、また底部には「ハ」の字状の高台が貼り付けられている。	底面は回転へら切り、高台部横ナデ、その他、内外共に水挽き整形が施されている。	良好 細砂・雲母 黄灰色	
11・12	瓦		平瓦、丸瓦の破片である。	凹面には布目、10の凸面には縄目の叩き、11はへら削り。		

第39号住居跡(第65図)

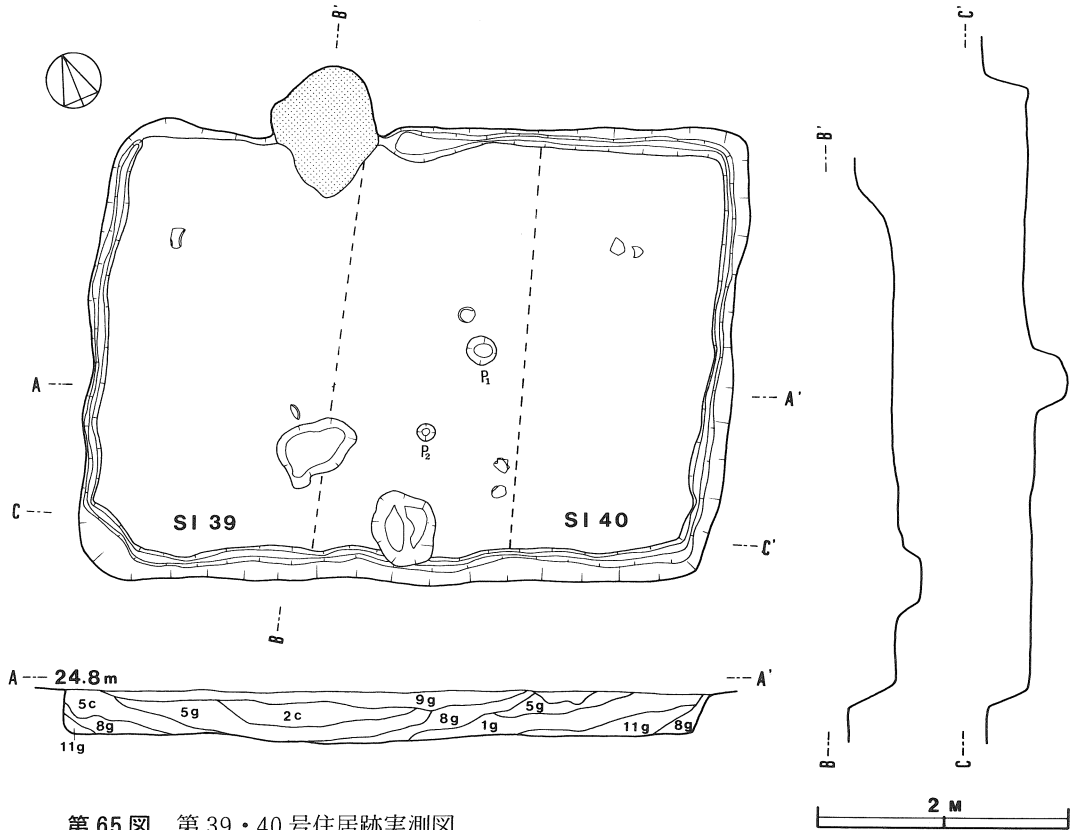
本跡はC1d9を中心に確認され、第40号住居跡の北西部を切り、第38号住居跡の南1.4mに位置している。規模は長軸3.6m・短軸3.45mの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-23°-Eである。壁高は35~40cmを測り、直線的に外傾して立ちあがり、壁下には幅10cm・深さ4cmほどの壁溝が周回している。床はほぼ平坦で硬く、ピットは3個確認されたが、いずれも支柱穴とは考えられない。

竈は北東壁中央部に付設されていたが、耕作などによる攪乱がひどく袖部などは確認できず、また、焼成部は壁を85cmの幅で55cmほど掘り込んで構築している。

住居跡内覆土は大きく5層に分けられ、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子などを含む褐色・黒褐色・暗褐色の土がレンズ状の自然堆積の状態を示している。

遺物解説表(第66図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 須恵器	A 11.6 B 2.8 C 8.0	底部はおおむね平坦で、体部は内彎きみに外方向へ開いた後、やや垂直きみに立ち上がる。	底部は回転へら削り、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 細砂・長石粒 灰色	底面に「//」のへら記号有り。
2	高台付坏 須恵器	A B 3.6(現) C 8.4	底部は平坦で、体部は底部よりゆるやかに外上方へ開き、稜を有して直線的にやや外上方へ立ち上がる。底部には「ハ」の字状の高台が貼り付けられている。	底部は回転へら削り、その他内外面共に水挽き整形、高台部の底は研磨が行われている。	良好 細砂・長石粒 灰色	
3	鉢 須恵器	A B 5.7(現) C 14.2(復)	胴部は底部よりやや内彎きみに外上方へ立ち上がる。	外面は中位斜めの叩き、下位回転へら削り、内面は指頭によるナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石粒 灰白色	
4	高台付坏 (墨書土器) 須恵器	A B 4.2(現) C 9.5	底部は平坦で体部は底部よりゆるやかに外上方へ開いた後、直線的に外上方へ立ち上がる。また底部には高台が貼り付けられている。	底部は回転へら削り、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 細砂・長石粒 黄灰色	底面に「正」の墨書有り。



第 65 図 第 39・40 号住居跡実測図

遺物の出土は非常に少なく、北西コーナー部より須恵器の鉢形土器(第 66 図-3)・東側より須恵器の墨書高台付坏形土器(第 66 図-4)などが出土している。

#### 第 40 号住居跡(第 65 図)

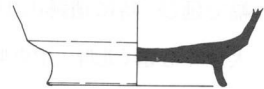
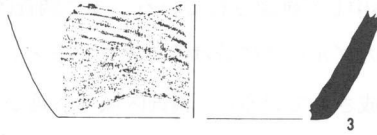
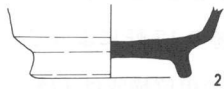
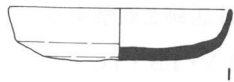
本跡は C1 d<sub>9</sub> を中心に確認され、第 39 号住居跡によって西側を切られ、第 38 号住居跡の南東約 3m に位置している。規模は長軸(3.7)m・短軸 3.6m の隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向は N-22°-E である。壁高は 35cm 前後で、第 39 号住居跡よりやや浅く、外傾して立ちあがる。また、壁下には幅 10cm・深さ 5~7cm ほどの壁溝が周回し、床面はロームで硬く平坦である。竈は本跡と別の住居跡と重複しているためか確認できなかった。

覆土は大きく 4 層に分けられ、ローム粒子を含む暗褐色・黒褐色・褐色の土がレンズ状に自然堆積していたと考えられる。

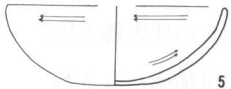
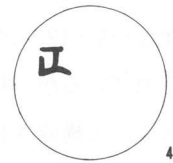
遺物の出土量は極少量であり、北東コーナー部覆土中より坏形土器(第 66 図-5)が出土している。

遺物解説表 (第66図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	坏 土師質須恵器	A 11.3(復) B 4.2 C 4.6	底部は円底状を呈し、体部は内彎して外上方へ開き立ち上がる。	内外面共に丁寧なヘラ磨き整形が行われている。	良好 細砂 灰黒色	靨痕が体部側面に認められる。

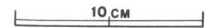


第39号住居跡



第40号住居跡

第66図 第39・40号住居跡出土遺物実測図

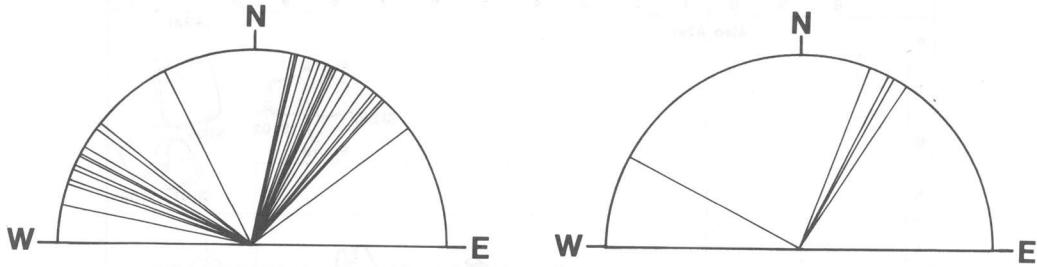


## 第2節 ま と め

本遺跡より確認された遺構は、竪穴住居跡35軒および竈を付設されない竪穴状遺構5軒である。これらの遺構は標高25～25.2mのほぼ平坦地に立地し、調査区内では带状に南北へ30mの幅で延び、特に遺跡の中央部に集中して確認されている。また調査区内から住居跡を観察すると、大きく3群(北群・中央群・南群)のグループに分けることができる。北群は1A・1B・1C・2・6～10号住居跡の9軒によって構成されているが、調査区域外へ延びている可能性が強い。中央群は第3～5・12・14・16～19A・19B・20～22・24・26・30・31号住居跡の17軒によって構成されているが、場所によって2～3軒の重複の住居跡が確認されているため単位構成は17軒以下によって構成されていたと考えられる。また本群には他の群と異なり、竈を付設しない竪穴状遺構が5軒検出されており、本群の住居跡と何らかの関係の有していたと思われる。南群は33～35A・35B・36～40号住居跡の9軒から構成されているが、周辺には未調査の住居跡と思われる遺構が6軒ほど確認されており、南群も中央群と同様に10数軒によって単位構成がなされていたと考えられる。またいずれの群からも重複した住居跡が確認されており、重複の原因は明らかではないが、考えられることは建て替えか、他集団の移動によってなされたものと思われる。しかし重複した住居跡内からの出土遺物からは時期差は捉えることはできない。

また本遺跡より検出された住居跡の平面形は、隅丸方形および隅丸長方形を呈し、割合はほぼ半々である。規模は3m前後を測る住居跡が全体の66%を占め、比較的小形の住居跡をもつ集団が居住していたと考えられる。最小の規模を有する住居跡は長軸2.45m・短軸2.14mを測る第33号住居跡、最大の住居跡は長軸4.86m・短軸4.56mを測る第6号住居跡である。住居跡の深さは大半が40～50cmを測り、支柱穴は全体に不明瞭な点が多く、確認された住居跡は全体の66%である。また第31・33・34号住居跡はいずれも屋外に支柱穴を有する住居跡である。主軸方向を分類すると2つに分類することができる。1類は20軒でN-15°～40°-Eの方向を向き、竈を北東壁中央部に付設し、2類は14軒でN-50°～70°-Wの方向を向き、大半は竈を南東壁に付設しているが、一部東壁、北西壁に付設している住居跡もある。

出土遺物は大部分の住居跡から土師器および須恵器を共伴して出土し、遺物は主に坏形土器が多く一部内黒の土器もある。また瓦の破片は10軒の住居跡から出土し、特に第36号住居跡からは平瓦および丸瓦などを10点ほど出土。その他鉄製品は4軒の住居跡から刀子および完形の鎌を出土する。特に本遺跡で注目すべき出土遺物は土師器、須恵器の体部側面および底部に書かれている墨書土器である。墨書土器は本遺跡で検出された住居跡の33%、すなわち15軒から18個の土器が出土し、主に器形は土師器の坏形土器が多く、その他は高台付坏形土器・盤形土器・器台



縦穴住居跡主軸方向

縦穴状遺構主軸方向

形土器であり、須恵器は土師器に比較して出土量は少なく、主に高台付坏形土器に書かれている。墨書されていた場所は主に体部側面であるが、物によっては底部に書かれているものもある。また書かれていた文字は「太」・「身」・「二員」・「井上」・「考」・「中」・「正」・「三」であり、その他の土器の文字は解読不明である。なお、本遺跡の北方300～400mに位置する鹿の子C遺跡より多量の墨書土器が出土しているため、鹿の子C遺跡との関係および常陸国の歴史解明に役立つものと思われ、今後の検討課題にしたい。

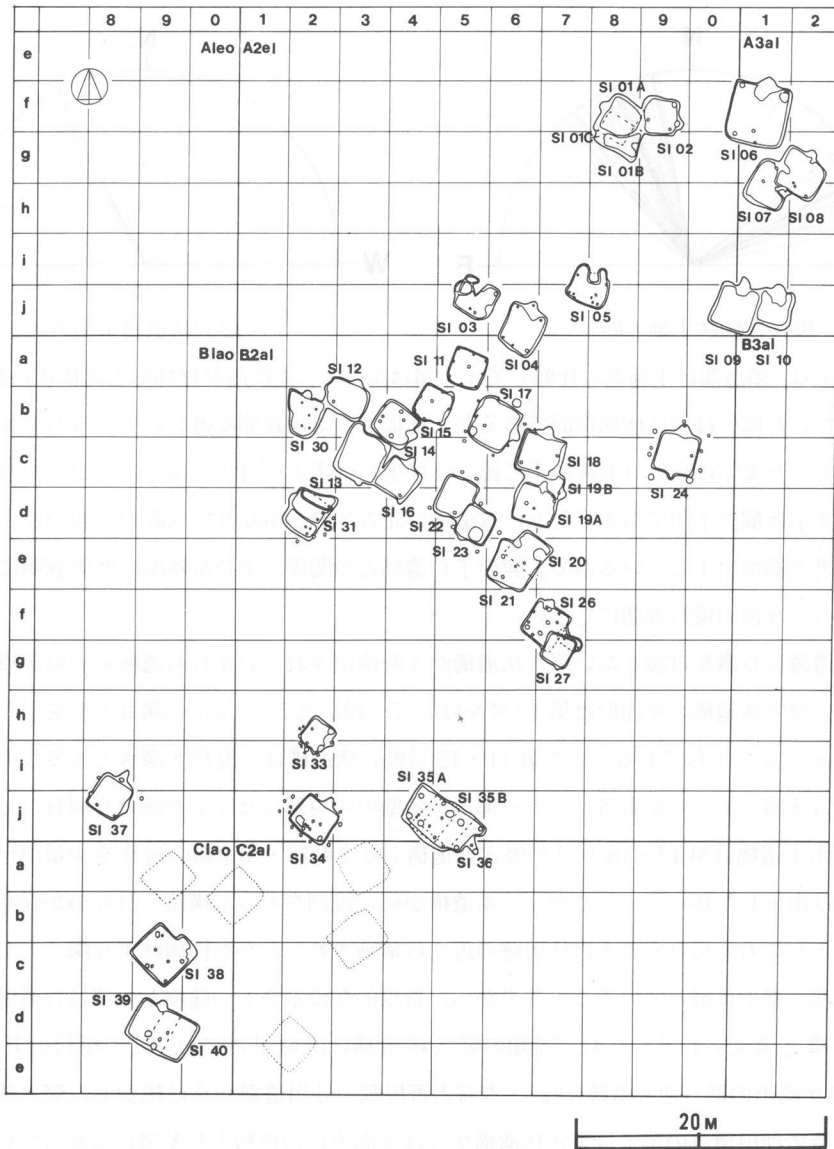
また本遺跡より竈を付設しない縦穴状遺構が5軒検出され、いずれも遺跡の中央部周辺に位置している。縦穴状遺構の平面形は第13号を除いて一辺が2.7～2.9mの隅丸方形を呈し、深さは55～82cmとまちまちである。また第11・15号縦穴状遺構は、規模・深さとも多少の違いはあるもののほぼ同一で、しかも各コーナー部と、各壁の中央部にピットを総計9個有して構築されている。出土遺物は第13・15・23号縦穴状遺構より土師器・須恵器の破片を少量出土し、その他の遺物は出土しなかった。したがって本遺構が何の役割をもって構築されたのか判断はし得ない。機能として考えられることは住居跡の近くに構築され、しかも住居跡より深く、ピットを各コーナー部と壁下に掘っていることなどから、倉庫的な役割をもつ建物か、或は作業場の役割をもった遺構と考えられる。なお、同類の縦穴状遺構は茨城県内において、桜村の下広岡遺跡(注1)・竜ヶ崎市の廻り地A遺跡(注2)・本報告書掲載の砂川遺跡からは類似した縦穴状遺構が検出され、特に砂川遺跡の第3号縦穴状遺構からは床面上に白色粘土が多量に広がっていた。

以上のような調査結果から、鹿の子A遺跡は歴史時代(国分期)約10世紀ごろに比定される時期に人々の生活が営まれたものと思われる。

以上鹿の子A遺跡の調査結果を述べてきたが、今後鹿の子C遺跡および周辺遺跡、常陸国分寺との関係など総合的に考えて歴史解明を行うと同時に、今後の検討課題としたい。

注1 財団法人 茨城県教育財団「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書2」昭和56年3月

注2 財団法人 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7」昭和57年3月



第 67 図 遺構配置図

# 第5章 砂川遺跡

## 第1節 遺構と遺物

検出された遺構は竪穴住居跡 43 軒・土壇 261 基・埋設土器 16 基・井戸 1 基・溝 2 条であり、そのうち竪穴住居跡 19 軒・土壇 261 基・埋設土器 16 基は縄文時代中期末から後期初頭にかけての遺構である。これらの遺構は標高 33.5～34mの台地上に立地し、直径約 38 mの円形状内に分布している。

本遺跡における遺構内覆土土層、及び縄文土器分類に当たっては次のような基準のもとに行った。

### 土層解説

1	Hue7.5YR1.7/1 黒色	23	Hue 10YR 4/6 褐色	a	ローム粒子
2	" 2/1 黒色	24	" 5/4 にぶい褐色	b	ローム粒子, ロームブロック
3	" 2/2 黒褐色	25	" 5/6 黄褐色	c	ローム粒子, ロームブロック, 焼土粒子
4	" 3/2 黒褐色	26	" 6/4 にぶい黄褐色	d	ローム粒子, 焼土粒子, 炭化材
5	" 3/1 黒褐色	27	" 2/2 黒褐色	e	ローム粒子, 焼土ブロック
6	" 3/3 暗褐色	28	" 3/3 暗褐色	f	ローム粒子, 砂粒
7	" 3/4 暗褐色	29	2.5YR 3/4 暗赤褐色	g	砂粒, ロームブロック
8	" 2/3 極暗褐色	30	" 5/3 にぶい赤褐色	h	砂粒, ローム粒子, 焼土粒子, 炭化材
9	" 4/6 褐色	31	" 6/3 にぶい橙色	i	砂粒, ローム粒子, 焼土粒子
10	" 4/4 褐色	32	" 4/8 赤褐色	j	焼土ブロック, 炭化材
11	" 4/3 褐色	33	5YR 2/1 黒褐色	k	焼土ブロック
12	" 5/6 褐色	34	" 2/2 黒褐色	l	粘土ブロック
13	" 4/2 灰褐色	35	" 2/3 極暗赤褐色	m	山砂
14	Hue 10YR1.7/1 黒色	36	" 3/2 暗赤褐色		
15	" 2/1 黒色	37	" 3/3 暗赤褐色		
16	" 2/2 黒褐色	38	" 3/4 暗赤褐色		
17	" 3/2 黒褐色	39	" 4/3 にぶい赤褐色		
18	" 2/3 黒褐色	40	" 4/4 にぶい赤褐色		
19	" 3/3 暗褐色	41	" 2/4 極暗赤褐色		
20	" 3/4 暗褐色	42	" 3/6 暗赤褐色		
21	" 4/3 にぶい黄褐色	43	" 4/6 赤褐色		
22	" 4/4 褐色	44	" 5/8 明赤褐色		

※ 土層番号等のないものは攪乱である。

### 縄文土器分類

#### 1群 加曽利E IV式土器

- |                   |                 |
|-------------------|-----------------|
| a 微隆起線による区画文様を有する | b 沈線による区画文様を有する |
| c 縄文の文様を有する       | d 縄文と櫛歯状の沈線を有する |
| e 櫛歯状文の文様を有する     |                 |

#### 2群 称名寺式土器

- |                   |                 |
|-------------------|-----------------|
| a 微隆起線による区画文様を有する | b 沈線による区画文様を有する |
|-------------------|-----------------|



第1図 砂川遺跡地形図



## 1. 縄文時代

### (1) 竪穴住居跡

#### 第13号住居跡(第2図)

本跡はB2d<sub>6</sub>・B2e<sub>6</sub>を中心に確認され、北側で第57、北東側で第46号土壌と重複し、いずれも本跡より新しい遺構であり、第11号住居跡の西2mに位置している。規模は長径6.12m・短径5.28mの楕円形の平面形を呈し、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は30~33cmほどで、直線的に外傾して立ちあがり、床は暗褐色のロームで全体に平坦であり、中央部および炉跡付近は非常に硬い床面である。炉跡はほぼ中央部に位置し、長径80cm・短径75cmの楕円形を呈し、床を約18cmほど掘り込んだ地床炉である。内部には暗赤褐色の焼土が充満していた。ピットは27個検出され、長方形に配されたP<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>が主柱穴と考えられる。深さは74cmから84cmと非常に深い。その他のピットは18cmから40cmと深さはまちまちである。

覆土は大きく3層に分けられ、ローム粒子や砂粒を含み黒褐色・暗褐色のそれぞれしまった土が自然堆積の状態に堆積している。

#### 出土遺物

遺物は中央部覆土上層から下層にかけて縄文土器片を多量出土し、P<sub>2</sub>西側より埋甕(第3図-1)が押し潰された状態で出土している。

#### 縄文土器(第3・4図)

1群a(第3図-2~17) 微隆線による区画文様を有するもの。

2~5・7・9は微隆線によって曲線的な区画文様を作り、2・3・9は口縁部の破片で、3は口辺部は器厚を厚くしながら外反して開く。

1群b(第3図-18~20, 第4図-1~3) 沈線による区画文様を有するもの。

18・19は口縁部の破片で、19は特に口辺部が大きく内彎する。第3図-20, 第4図-1~3, 1は胴部片で、3は曲線的な区画がなされている。

1群c(第4図-4~22・24) 縄文の文様を有するもの。

4・5は口縁部の破片で、4は内彎し、5は直線的に外上方へ立ちあがる。その他の土器はいずれも胴部片で、縦・横・斜位の縄文が配されている。

1群d(第4図-23) 縄文と櫛歯状の文様を有するもの。

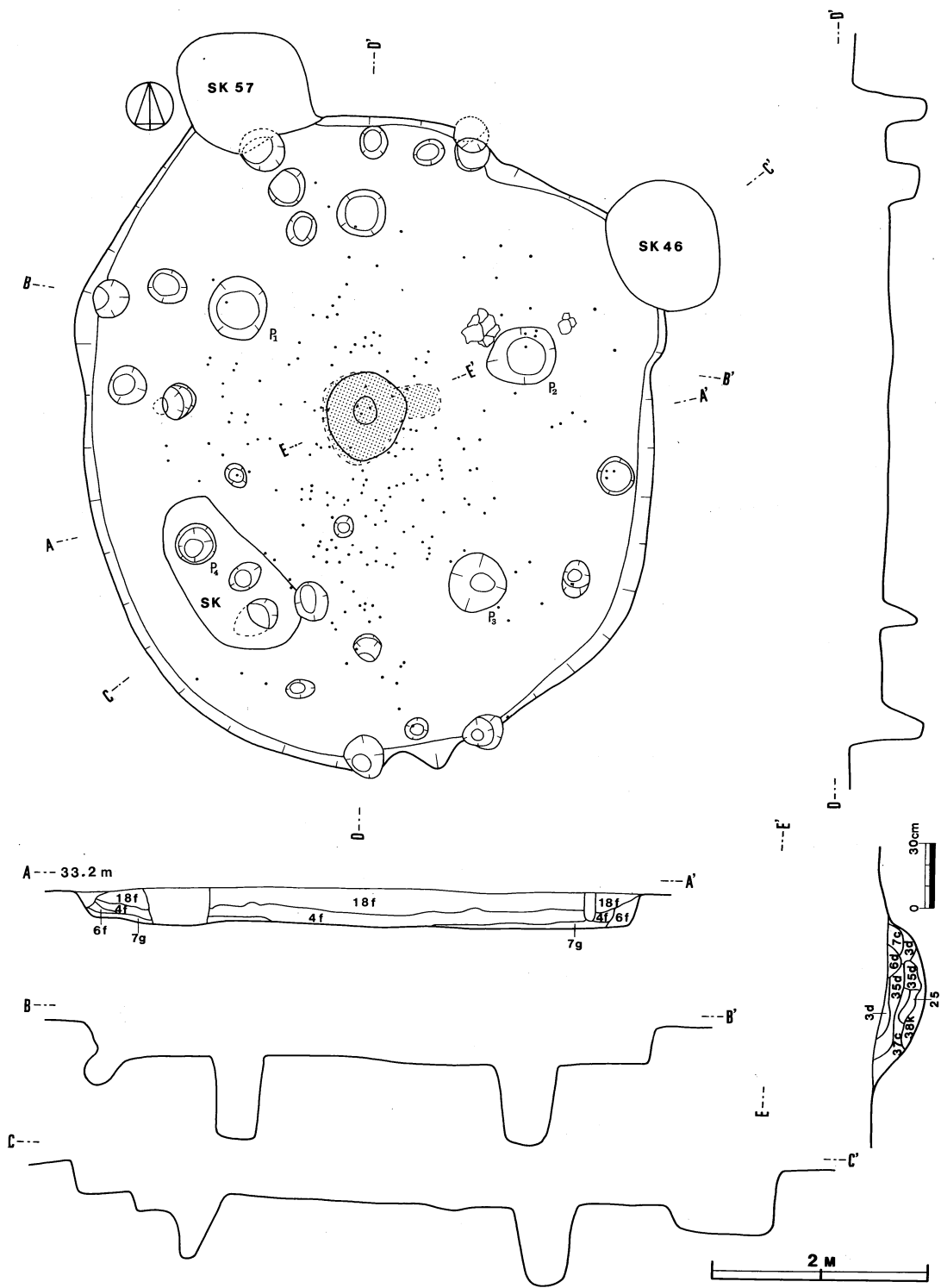
23は胴下部の破片と思われ、縄文の下に縦位の沈線が配されている。

#### 石器(第143図-2)

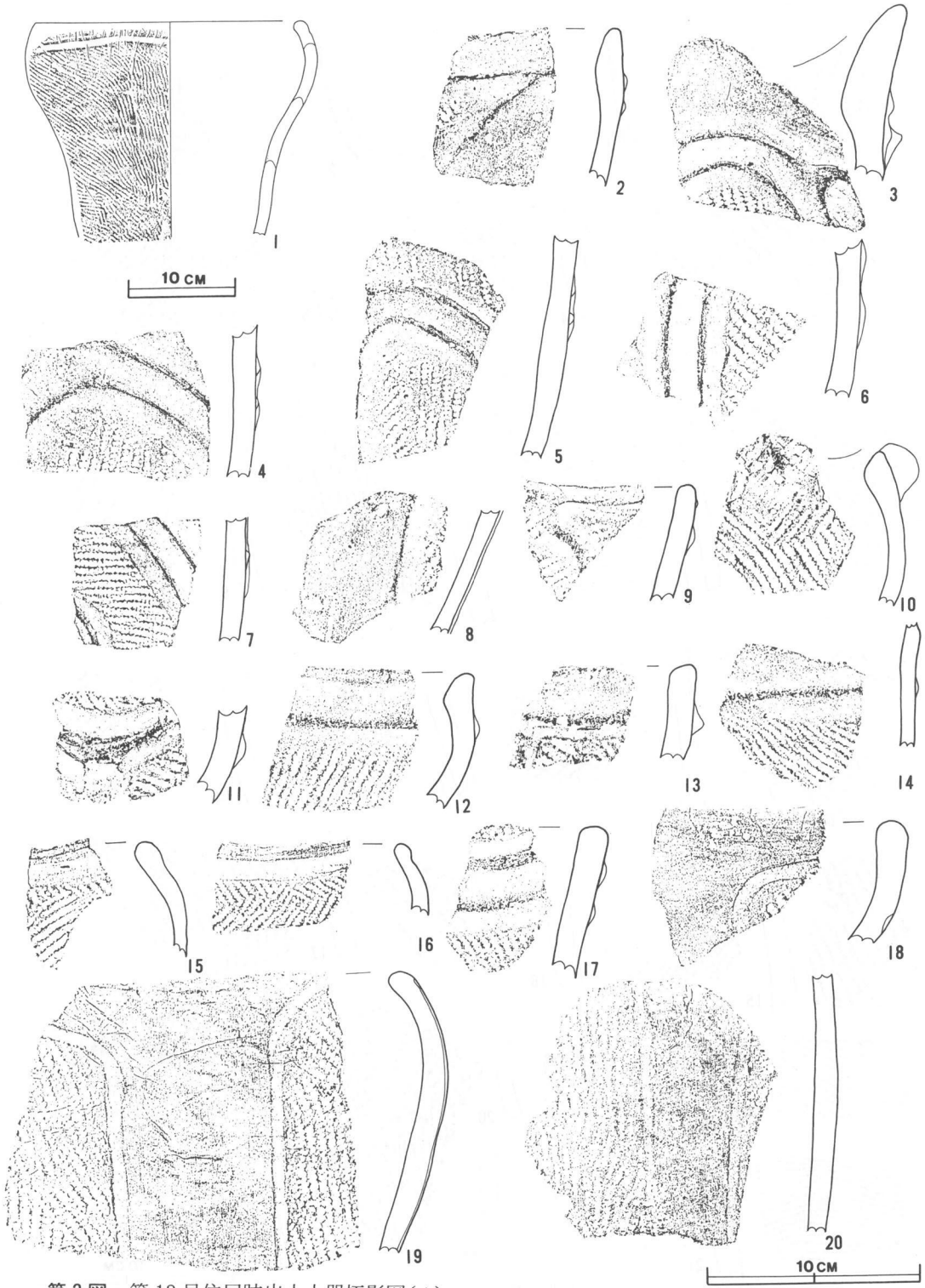
2は敲石で、自然石の中央部に敲痕が認められる。石質は砂岩である。

#### 第14号住居跡(第5図)

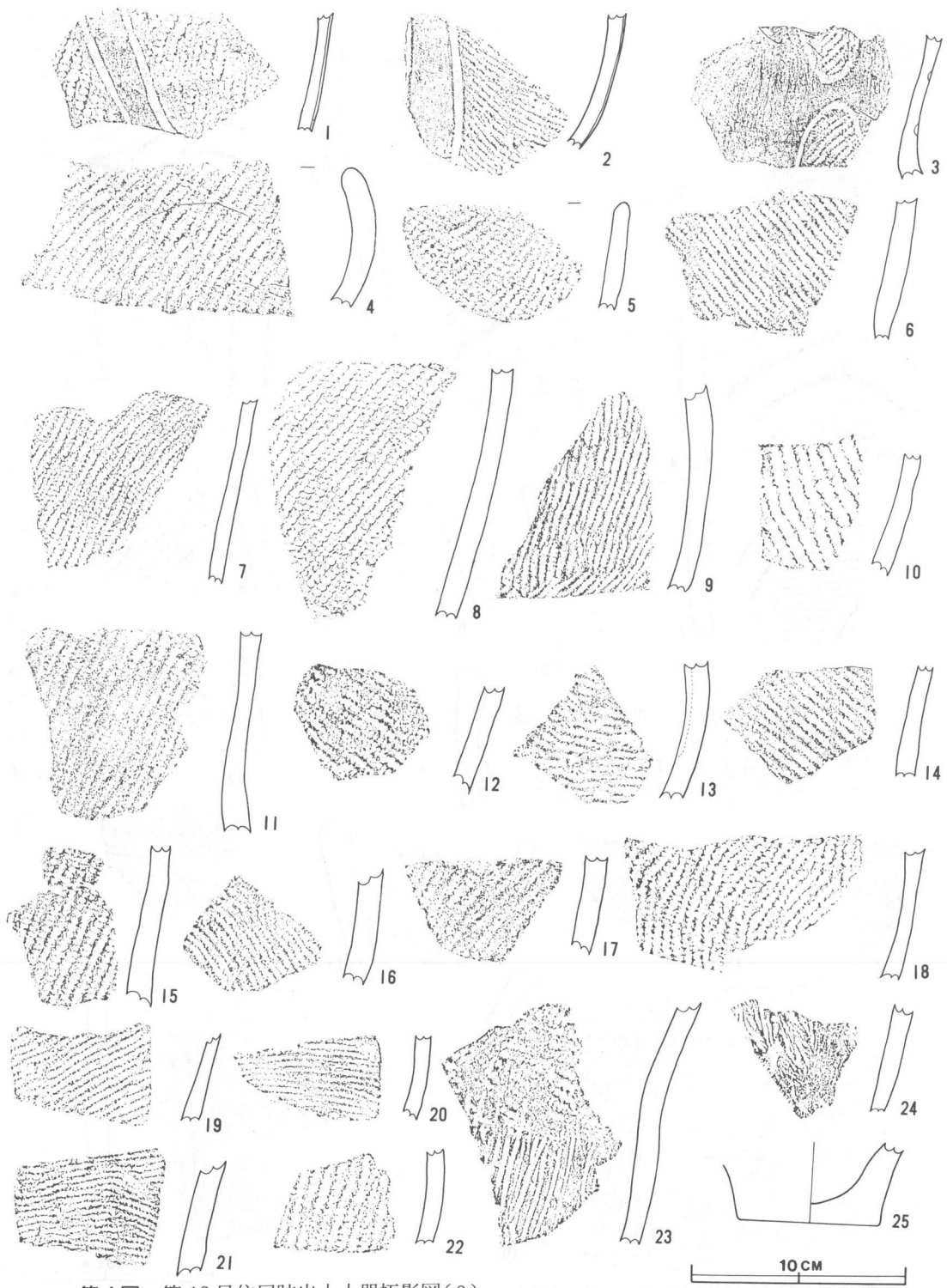
本跡は遺跡の中央部B2j<sub>8</sub>を中心に確認され、第10・11号土壌に中央南側が切られ、第20



第 2 图 第 13 号住居跡実测图

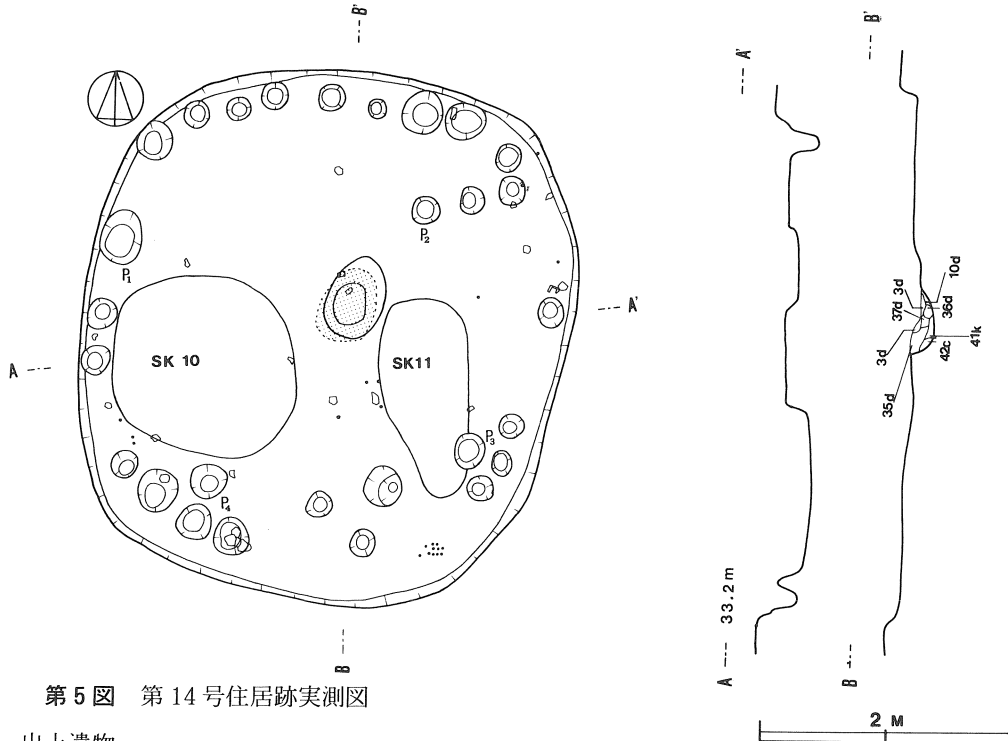


第3图 第13号住居跡出土土器拓影图(1)



第4图 第13号住居跡出土土器拓影图(2)

号住居跡の西7.2mに位置している。規模は長径4.28m・短径3.88mのほぼ円形状の平面形を呈し、主軸方向はN-7°-Eである。壁高は10~15cmと非常に浅く、やや外傾して立ちあがり、床はロームでさほど硬いものではなく、多少起伏は見られるが全体に平坦である。また壁直下には30~80cmの間隔をもって壁柱穴が認められ、深さはいずれも20~29cm前後を測る。ピットは5個検出されP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴と考えられ、深さは29~49cmほどである。炉跡は中央部よりやや北側寄りから確認され、長径65cm・短径45cmの楕円形を呈し、床を約20cmほど掘り下げた地床炉である。内部には暗赤褐色の焼土が充満している。



第5図 第14号住居跡実測図

出土遺物

遺物の出土量は、浅い住居跡のためか非常に少なく、第11号土壌の西側より少量の縄文土器片、南東コーナー部より石器類などがまとまって出土する。

縄文土器(第6図)

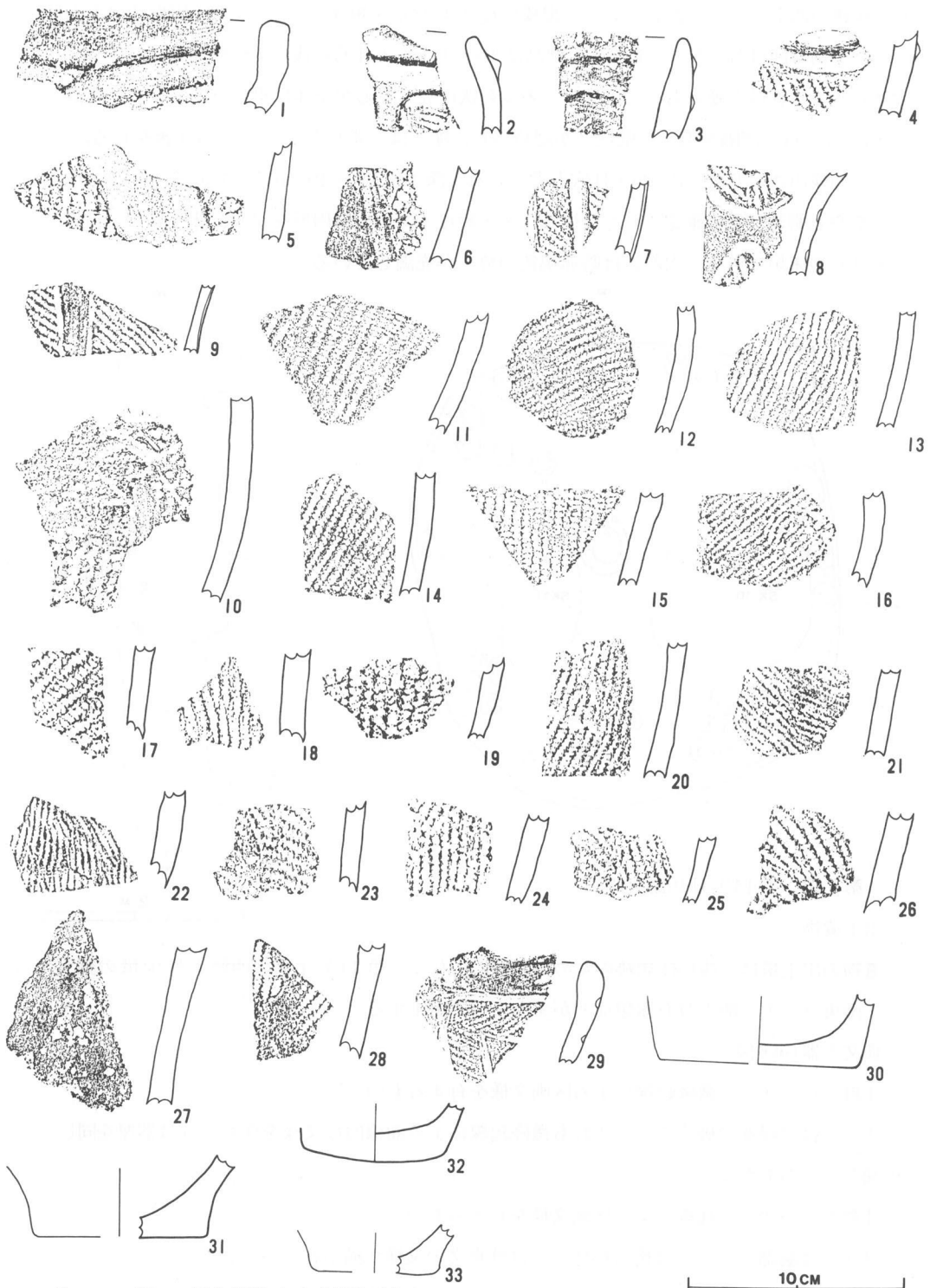
1群 a (1~6) 微隆起線による区画文様を有するもの。

1~3は口縁部の破片で、いずれも微隆起線による曲線的な文様を作り、3は器厚を同じくし、内傾して立ちあがる。

1群 b (8・9) 沈線による区画文様を有するもの。

8・9は胴部片で、8は楕円形状、9は懸垂文の文様が描かれている。

1群 c (11~28) 縄文の文様を有するもの。



第 6 图 第 14 号住居跡出土土器拓影图

11～26は胴部中位の破片であり、縦・斜・横位の縄文が配されている。27・28は胴部下位の破片と思われる。

2群b(29) 沈線による細い区画文様を有するもの。

29は口縁部の破片で、口辺部でやや器厚を厚くしてやや内彎する。沈線内には多方向からのRLの縄文が配されている。

石器類(第140・第141図)

磨製石斧(第140図-1・2)

1・2共に両面に丁寧な研磨を行い、刃部には使用痕が認められる。石質は1が砂岩、2が角閃岩である。

搔器(第141図-6)

6は両面に丁寧な剝離調整を行い、先端部にスクレイパーエッジが施されている。石質は碧玉チャートである。

石鏃(第141図-8)

8は両面に丁寧な剝離調整を行い、側縁は小鋸歯状を呈している。石質は瑪瑙である。

剥片(第141図-2～5)

2・3は剥片として取り扱ったが石核ではないかと考えられる。また、いずれの剥片も石質は瑪瑙である。

#### 第15号住居跡(第7図)

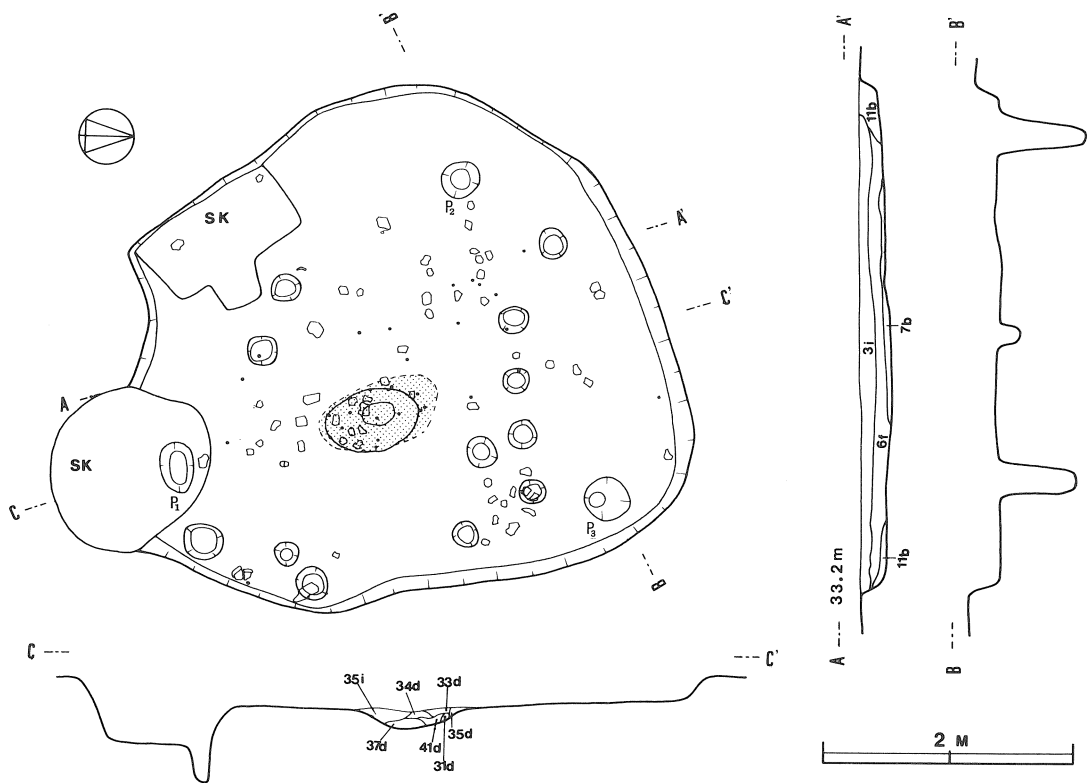
本跡は遺跡の中央部B 2gより確認され、南東部を第53号土壌によって切られ、第16号住居跡の西1m、第14号住居跡の北7mに位置している。規模は長径4.62m・短径4.18mほどではほぼ円形状の平面形を呈し、主軸方向はN-32°-Wである。壁高は20～25cmほどで、直線的にやや外傾して立ちあがる。床はロームで褐色を呈し、炉周辺がやや硬く踏み固められており、全体に平坦である。ピットは小ピットを含め15個確認され、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>が主柱穴と考えられ、深さは62～70cmを測る。本跡は第25号住居跡と同様に3本の柱を基本にして構築された住居跡と思われる。その他の小ピットは10～20cmの深さで補柱穴として使用されたものと思われる。炉跡は中央部のやや東側に確認され、長径75cmを測る楕円形を呈し、床を13cmほど掘り込んだ地床炉である。内部には暗褐色の焼土が充満していた。

覆土は大きく3層に分けられ、ローム粒子・砂粒・焼土粒子を含む黒褐色・暗褐色の硬い覆土であり自然堆積の状態を示している。

#### 出土遺物

遺物は中央部覆土中より縄文土器片をやや多く出土する。

縄文土器(第8図)



第7図 第15号住居跡実測図

1群a(1~13) 微隆起線による区画文様を有するもの。

1は南東コーナー部より出土した胴上半分の破片であり、口辺部は器厚を同じくして内彎して開く。文様は口辺部全体にLRの縄文を全体に施した後、微隆起線による半月文と円文を1個体にして、全周に4単位の区画文を構成し、区画外を磨消している。外面の一部に煤が附着している。

2~6は口縁部の破片で、2~4・6は器厚をやや厚くしてやや外傾する。13はやや内彎して立ち上がり、微隆起を施した後、強いなぞりを行う。

1群b(14~16) 沈線による区画文様を有するもの。

14は口縁部の破片で、大きく内彎して開き、横位の太い沈線の上下には刺突文が配されている。

15・16は胴部下位の破片である。

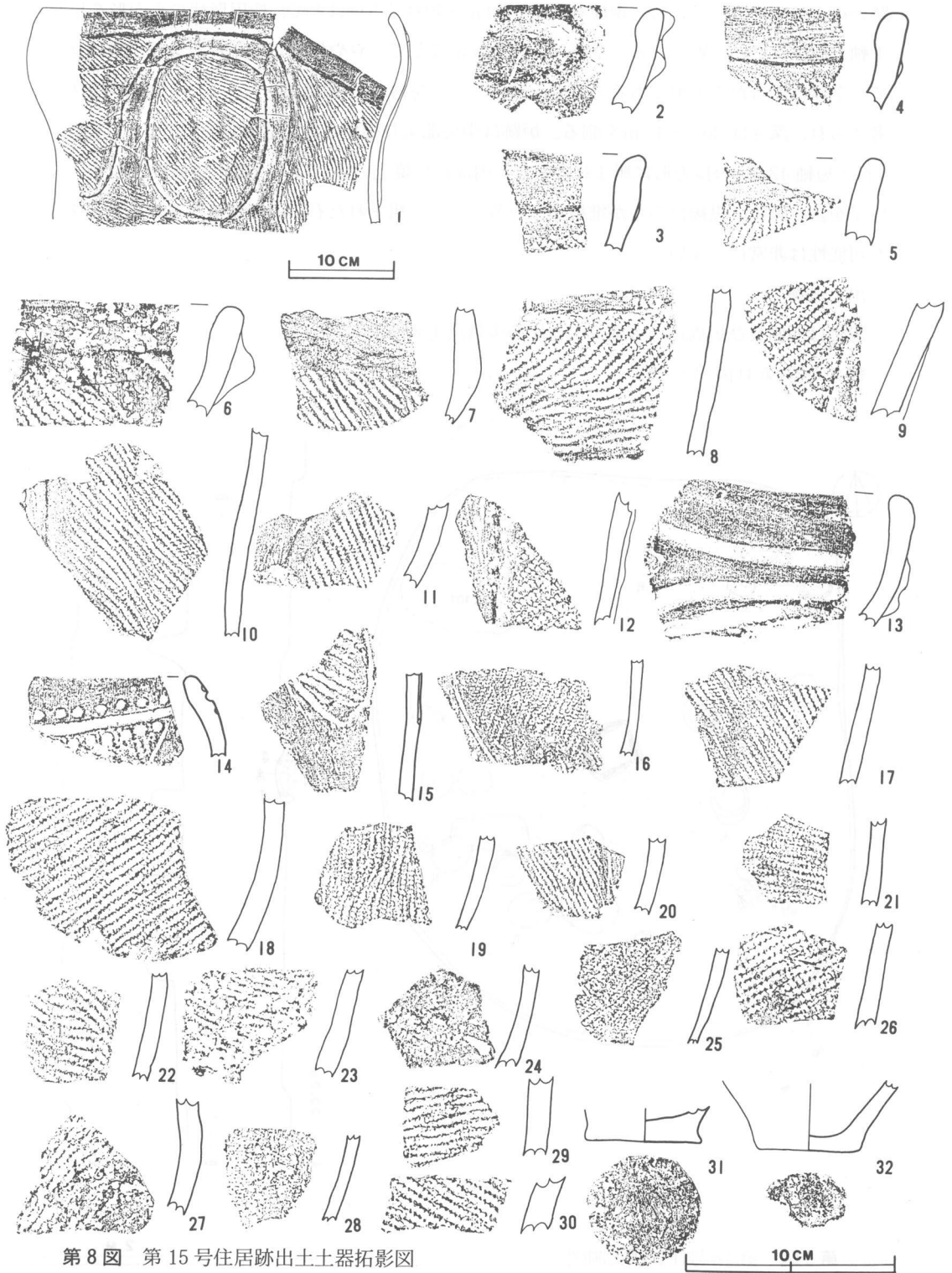
1群c(17~30) 縄文の文様を有するもの。

いずれも胴部の破片である。

#### 第16号住居跡(第9図)

本跡は遺跡の中央部B2g<sub>0</sub>より確認され、第101号土壌によって北東部が切られ、第15号住居





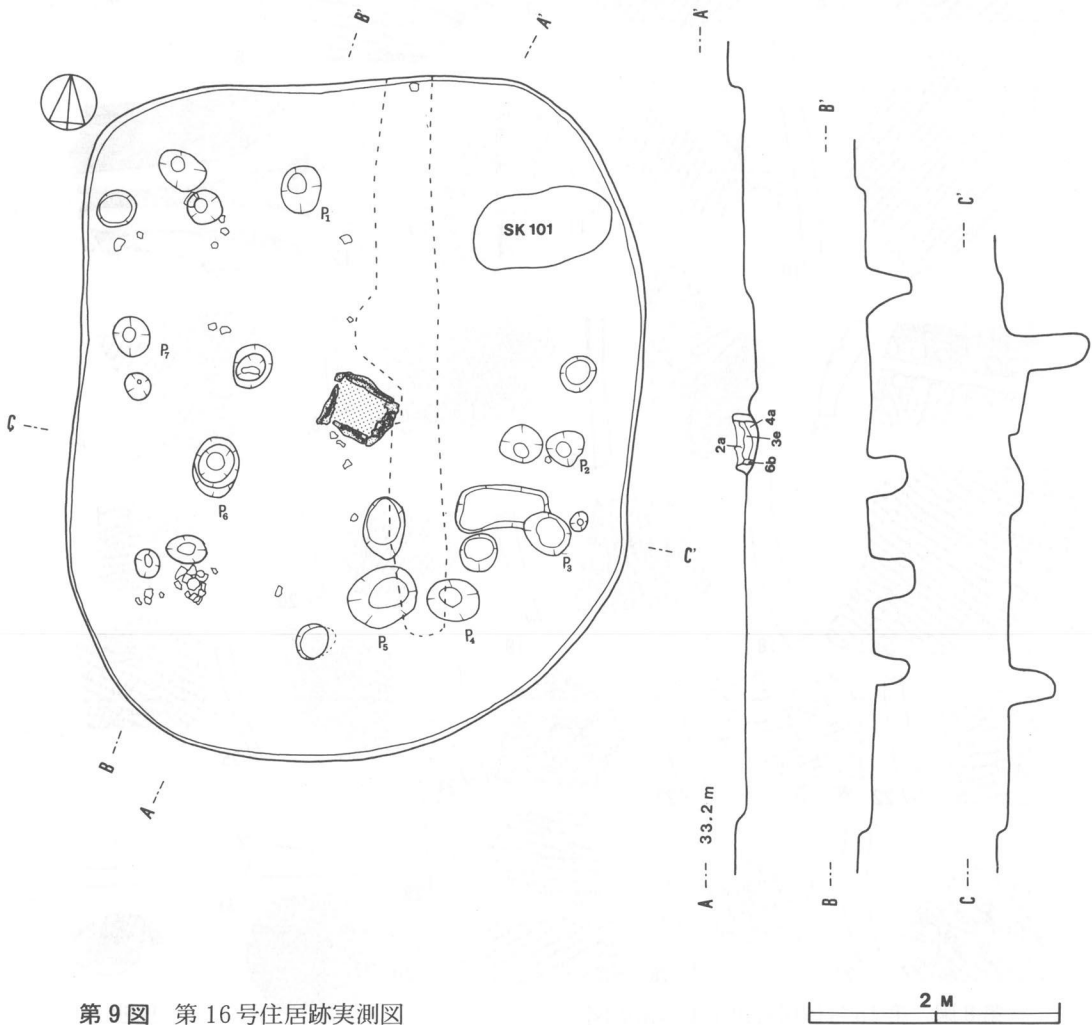
第8图 第15号住居跡出土土器拓影图

跡の東1mに位置している。規模は長径5.34m・短径4.5mほどで、楕円形状の平面形を呈し、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は8~12cmほどで、やや外傾して立ちあがり、床はロームで、全体に柔らかく平坦である。ピットは小ピットを含め19個確認され、P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>が支柱穴と考えられ、深さは36~64cmを測る。炉跡は中央部より確認され、粘板岩の石によって長軸56cm・短軸42cmの長方形に組まれており、内部には焼土の層はなく、覆土中に焼土粒子・炭化粒子を含む黒色・黒褐色の土が堆積している。また、組まれた石の内側は焼けておらず、使用した可能性は非常に小さい。

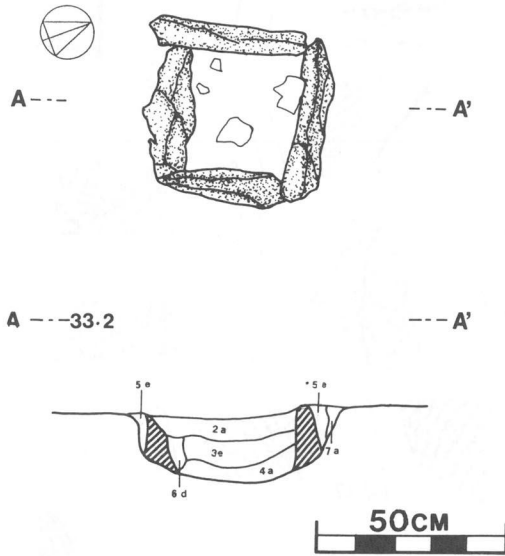
出土遺物

遺物は西側及び炉周辺から縄文土器片を少量出土する。

縄文土器(第11図-1~14)



第9図 第16号住居跡実測図



第10図 第16号住居跡炉跡実測図

第17号住居跡(第12図)

本跡はB2 f<sub>0</sub> を中心に確認され、内部は第82～85号土壌によって切られ、第19・20号住居跡の西0.2mに位置している。規模は長軸3.52m・短軸3.4mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-58°-Wである。壁高は16cmほどで、やや外傾して立ちあがり、床はロームで柔らかく平坦である。炉跡は確認することはできず、住居跡とは断定することはできない。

出土遺物

遺物は縄文土器片を第83号土壌の南東部より少量出土する。

縄文土器(第11図-15～28)

1群a(15～17) 微隆起線による区画文様を有するもの。

15～16は口縁部の破片であり、15は波状口縁を呈し、突起部には孔を有する。17は口縁部に近い破片で、側面に舌状の横位突起が貼り付けられている。

1群c(18～25) 縄文の文様を有するもの。

18～25はいずれも胴部の破片である。27・28は底部の破片である。

第18号住居跡(第13図)

本跡はB2 d<sub>0</sub> より確認され、第100号土壌によって南西部コーナーを切られ、第21号住居跡と北西部で重複し、第22号住居跡の南東3.1mに位置している。規模は長軸5.88m・短軸5.68mほどの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は20～38cmを測り、

1群a(2～7) 微隆起線による区画文様を有するもの。

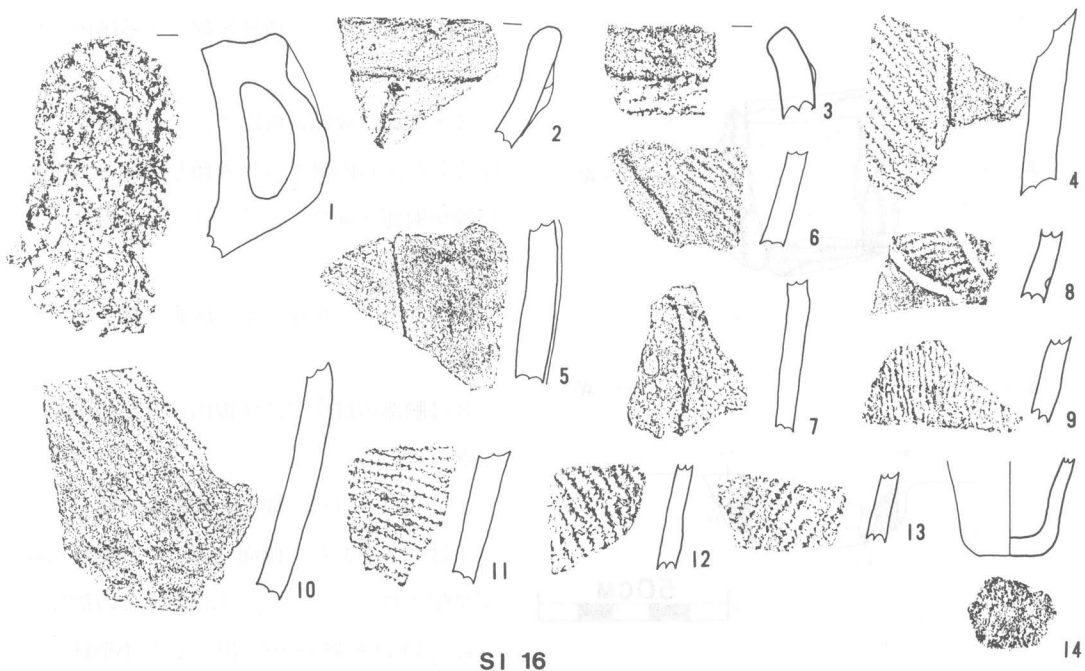
2・3は口縁部の破片で、2は器厚をやや厚くしながら内彎ぎみに外傾して開き、微隆起線が胴部へ延びている。4～7は胴部の破片である。

1群b(8) 沈線による区画文様を有するもの。

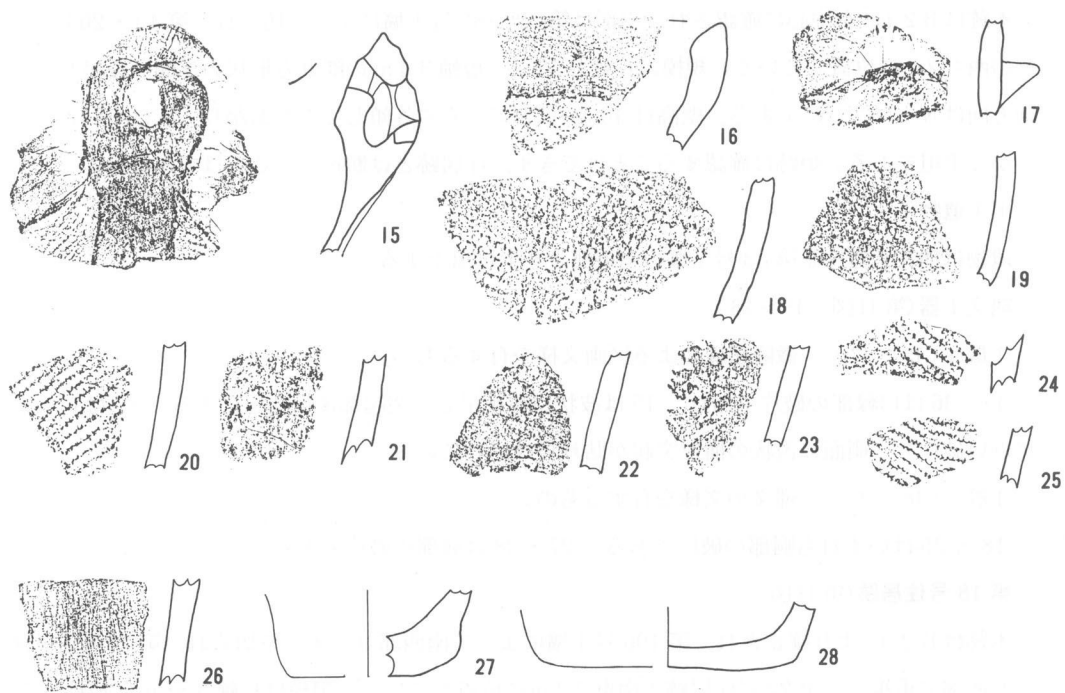
8は胴部の破片で、沈線内にRLの縄文が配されている。

1群c(9～13) 縄文の文様を有するもの。

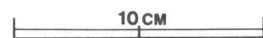
1は把手であり、側面全体にやや粗雑な縄文が配されている。9～13は胴部の破片である。14は炉跡内から出土した小形鉢の底部である。

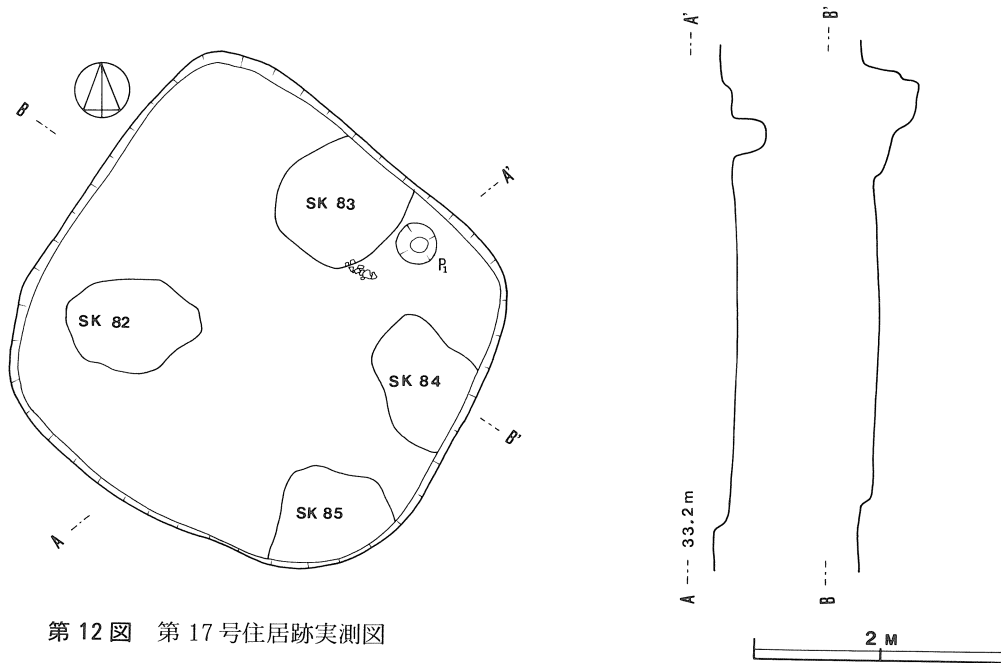


S1 16



第11图 第16·17号住居跡出土土器拓影图





第 12 図 第 17 号住居跡実測図

直線的に外傾して立ちあがる。南壁から南東コーナー部にかけて、幅 20～30 cm、深さ 10 cm ほどの壁溝が周回している。床は暗褐色の小さな起伏のある硬い床で、全体に平坦である。ピットは 5 個確認されているが、支柱穴は  $P_1 \sim P_4$  と考えられる。規模は長径 45～60 cm の楕円形を呈し、深さは 83～110 cm ほどである。炉跡はピットの対角線上の交点よりやや南側に存在し、規模は長軸 70 cm・短軸 60 cm の長方形の平面形を呈し、側面は凝灰岩で整然と組まれた石組炉である。内部側面は焼けただけ、各コーナー部には土器片が埋設され、くずれを防止している。また、炉の東側には灰の掃き出し部と思われる深さ 25 cm ほどの浅い皿状の掘り込みがみられる。

覆土は北東部が第 21 号住居跡によって切られているが、本跡の切られていない東側の土層を見ると、上層がローム粒子や砂粒を含む黒色、中層から下層にかけては砂粒・炭化粒子・炭化材を含む暗褐色の土がレンズ状に自然堆積している。

#### 出土遺物

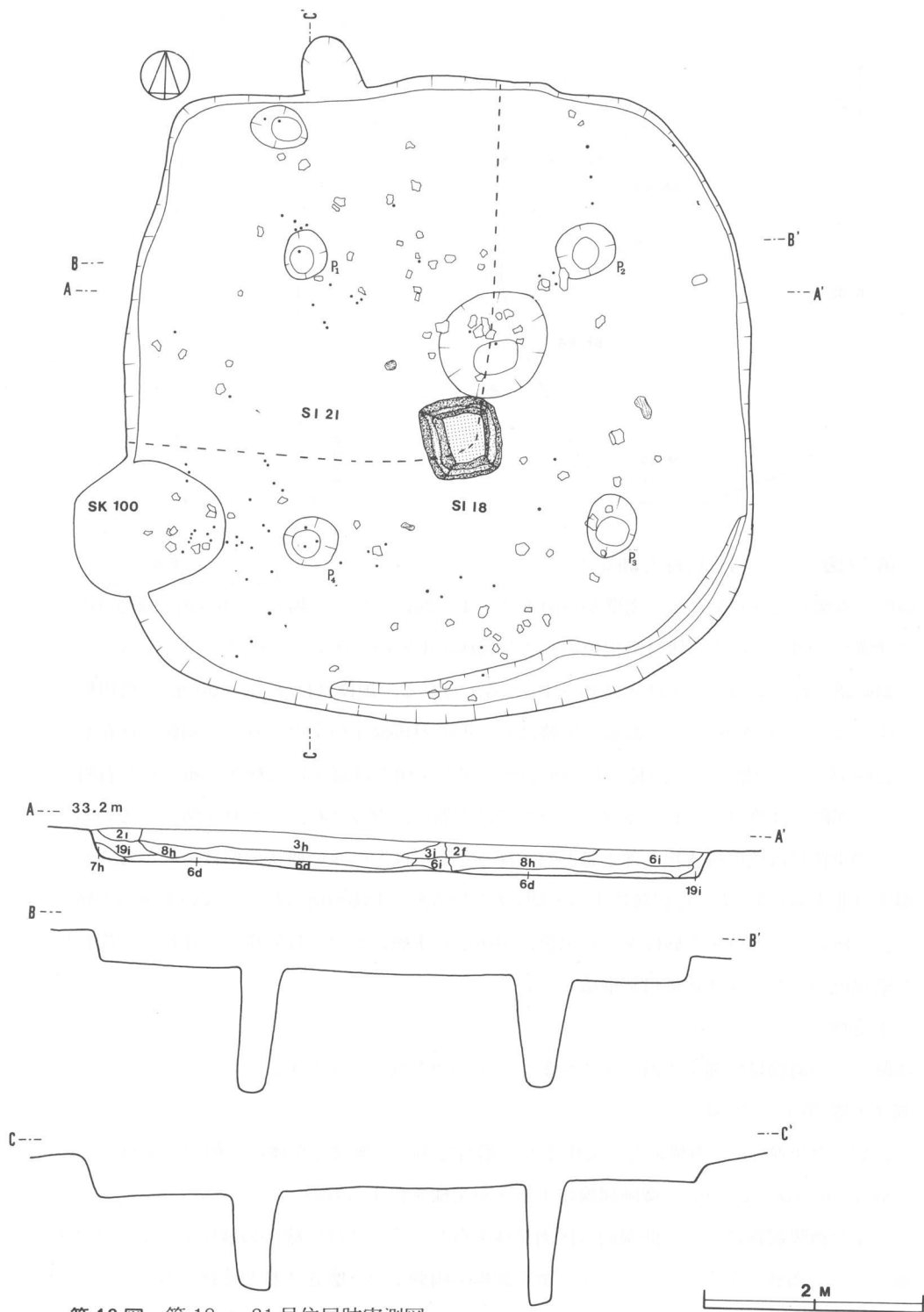
本跡からの遺物量は縄文土器片をやや多く、その他石鏃 1 点を出土している。

#### 縄文土器(第 15・16 図)

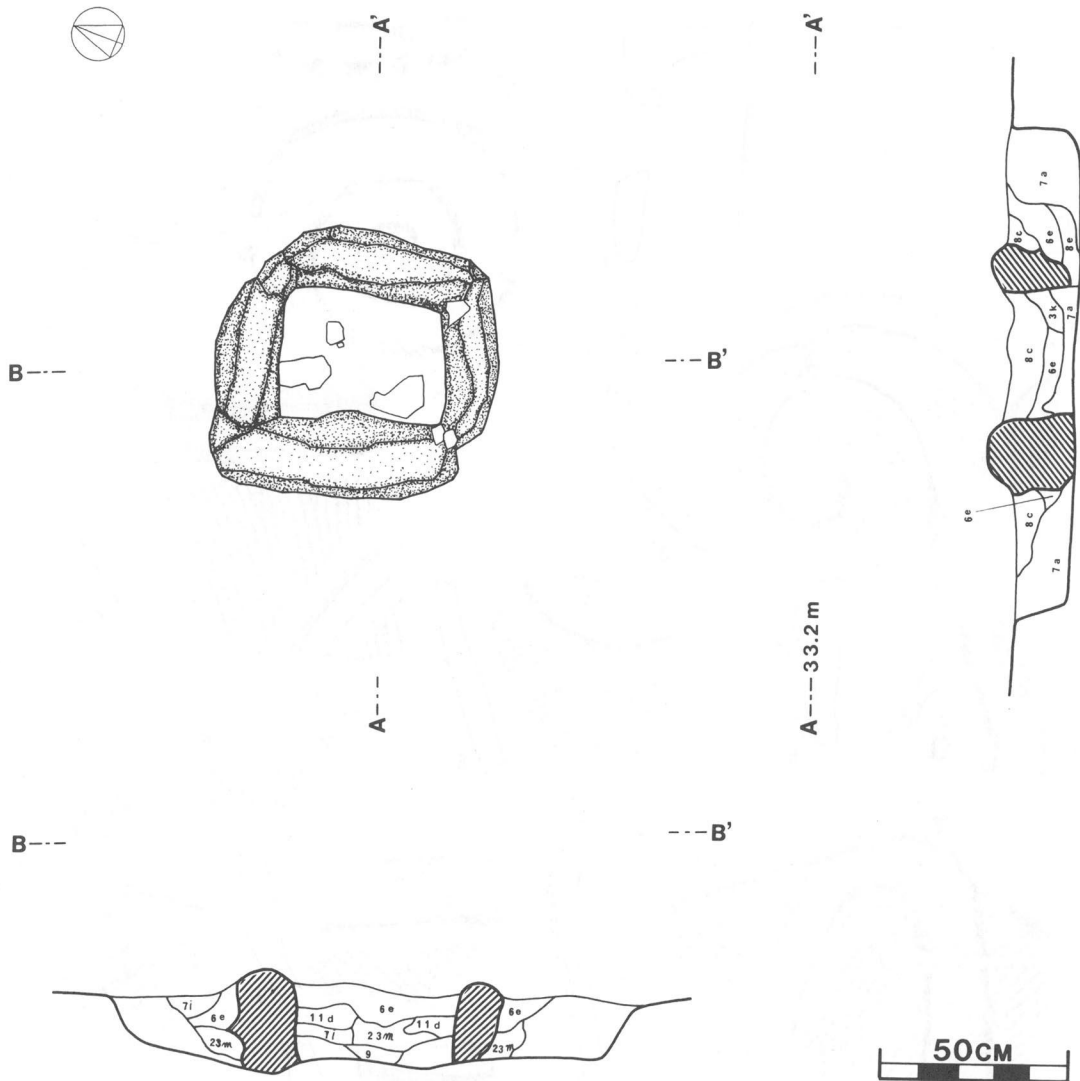
1 は炉より東側 1 m より横になって出土した器台である。無文で全体に 5 個の孔を有している。

1 群 a (第 15 図-2～16) 微隆起線による区画文様を有するもの。

2～7 は微隆起線によって曲線的な区画文様を有し、2～4 は口縁部の破片で、2・3 は微隆起線によって渦巻文を作っている。4 は微隆起線の両側がヘラ磨きされ凹線状となっている。8～12・15・16 は平行的な微隆起線によって区画文様を作り、8～10・15・16 は口縁部の破片



第 13 图 第 18 · 21 号住居跡実測图



第14図 第18号住居跡炉跡実測図

で、8・10は波状口縁を呈する。8は微隆起線による「凵」文が描かれている。

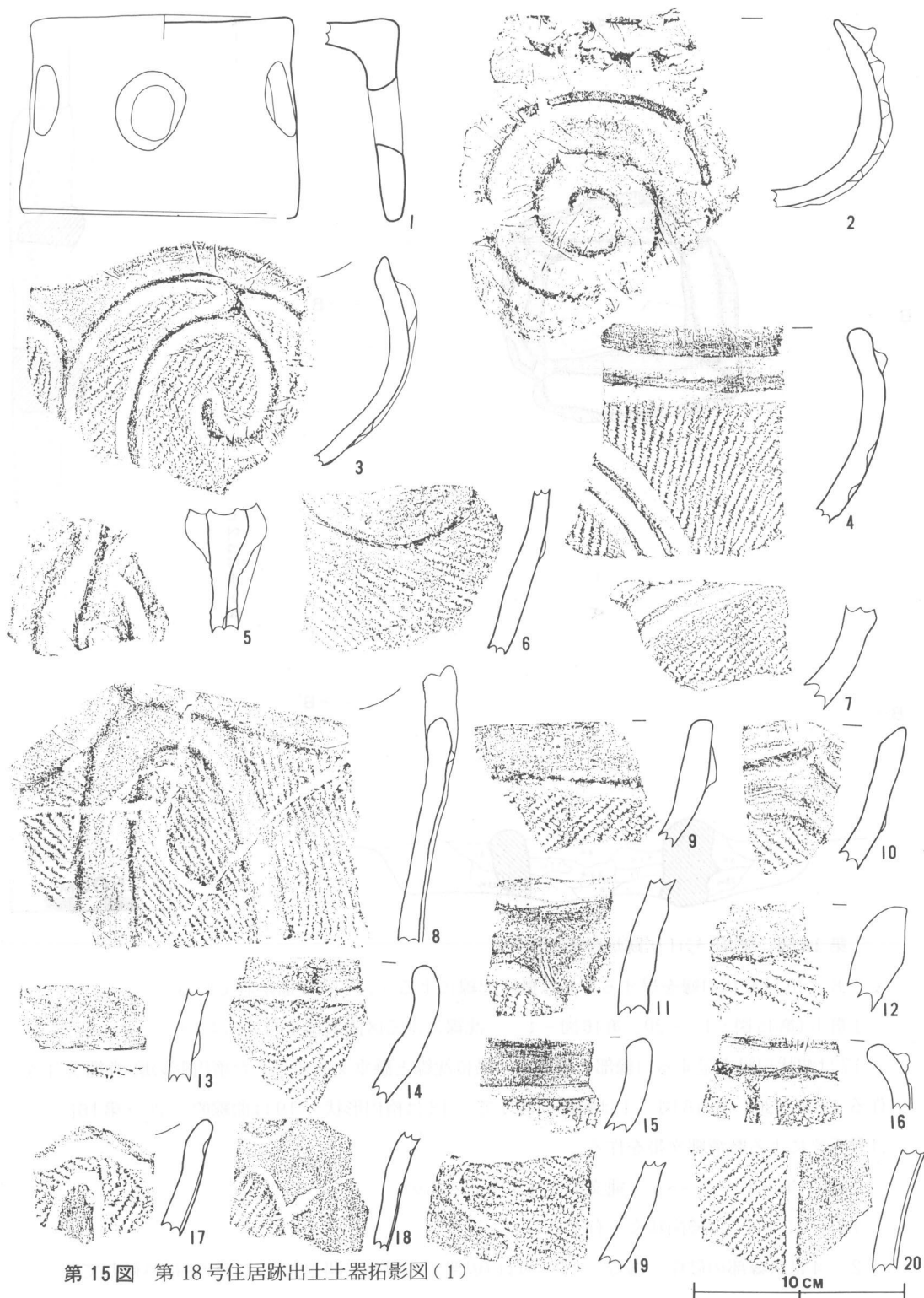
1群b(第15図-17~20, 第16図-1) 沈線による区画文様を有するもの。

17は波状口縁を呈する口縁部の破片で、横位沈線と懸垂文の変化した楕円形の磨消縄文帯を作る。18~20, 第16図-1は胴部の破片で、18は楕円形状、19は曲線的、20・第16図-1は懸垂文による磨消縄文帯を作る。

1群c(第16図-5~8) 縄文の文様を有するもの。

1群e(2~4) 櫛歯状文を有するもの。

2~4は口縁部の破片である。2・3は口辺部で内彎して開き、4は直線的に外傾して開く。



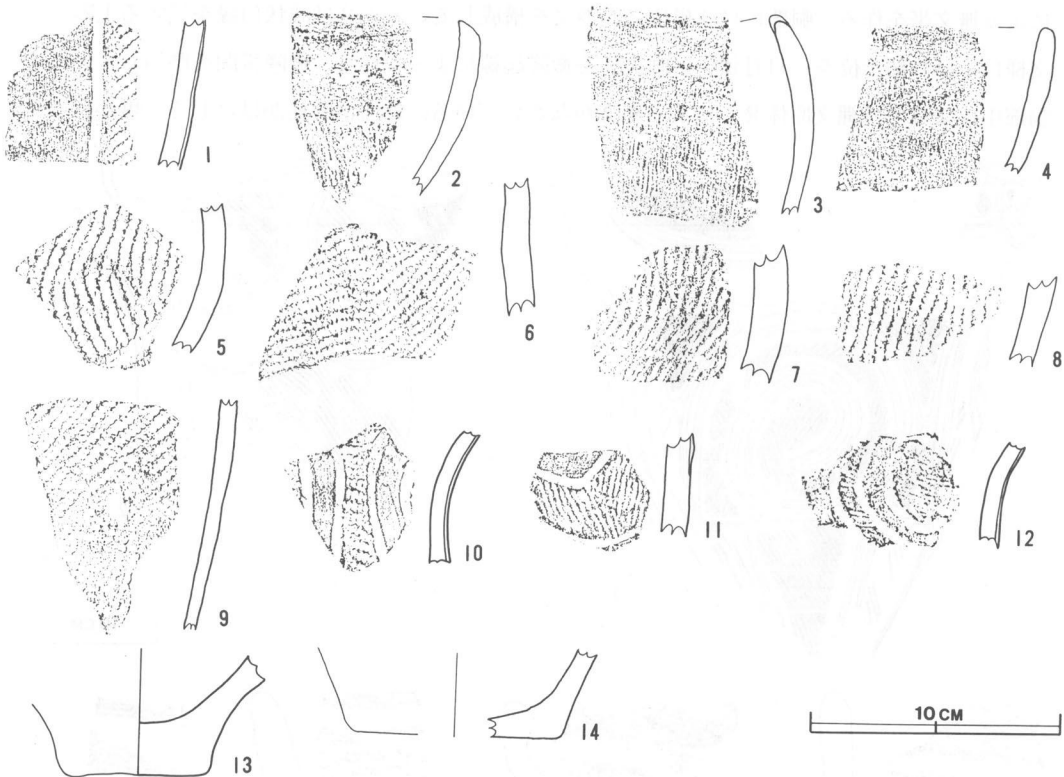


2群b(10~12) 沈線による区画文様を有するもの。

11は胴部、10・12はくびれ部の破片である。いずれも沈線によって区画文様を作り、12は渦巻状を呈する。

石鏃(第141図-10)

10は炉内覆土中から出土した石鏃で、熱を帯びてぼろぼろであり、剝離などは不明である。石質は長石である。



第16図 第18号住居跡出土土器拓影図(2)

第19号住居跡(第18図)

本跡はB3g<sub>2</sub>を中心に確認され、第22号住居跡によって北側が切られている。第17号住居跡の南東1.5m、第23号住居跡の北西1mに位置している。規模は長軸(4.5)m・短軸4.38mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-3°-Wである。壁高は14~16cmほどで、外傾して立ち上がり、床は暗褐色で全体に柔らかく、平坦である。ピットは6個と考えられるが、第22号住居跡と重複しているため、不明の点が多い。支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>と思われる。炉跡は中央部よりやや西側より確認され、直径55cmほどの円形を呈し、床を5cmほど掘り込んだ地床炉である。内部には焼土はさほどみられず、長い期間使用した可能性は少ない。

覆土は砂粒・ローム粒子・焼土粒子を含む黒色・黒褐色のややしまった土である。

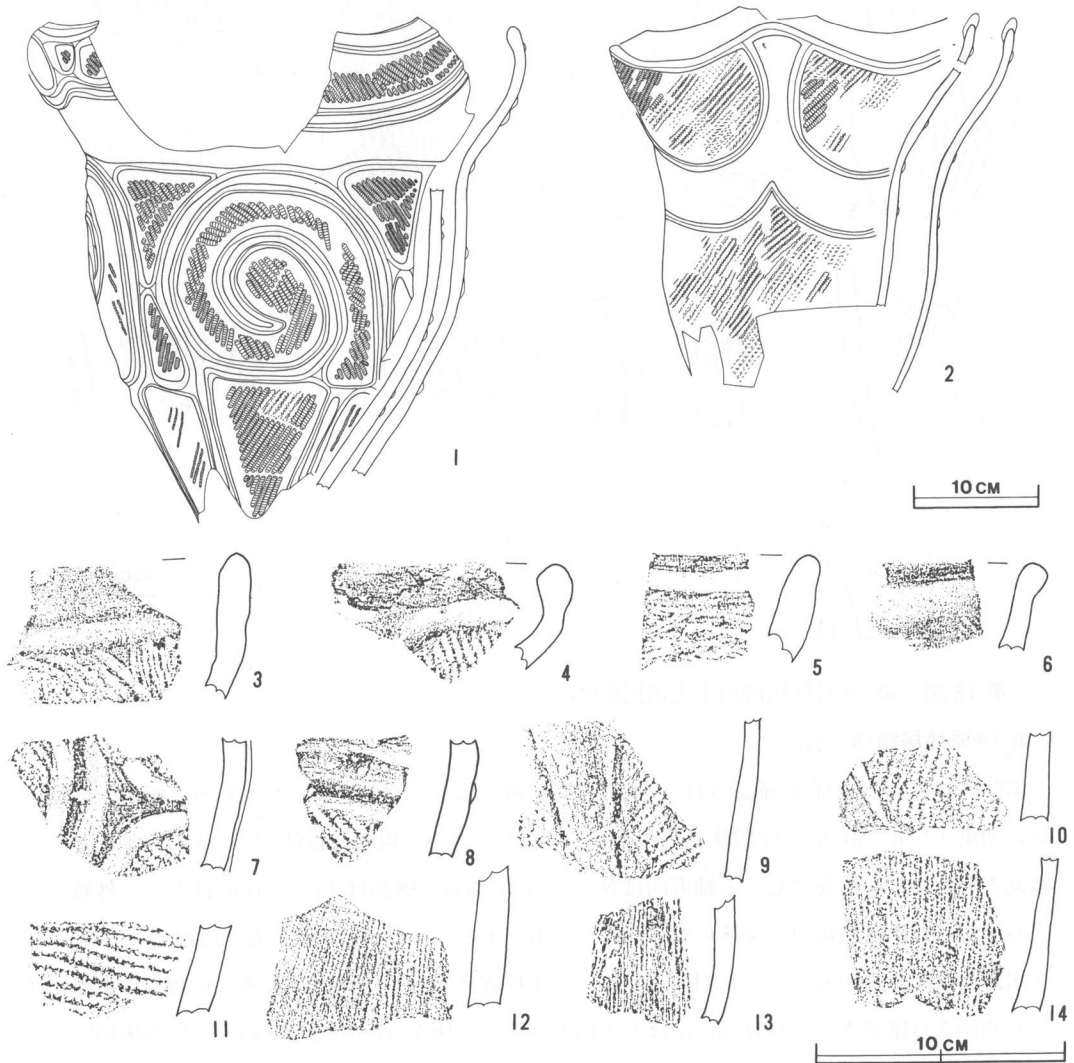
### 出土遺物

本跡からの遺物は縄文土器を少量出土し、炉跡南側より一個体の土器片が一括出土している。

### 縄文土器(第17図)

1群a(1~10) 微隆起線による区画文様を有するもの。

1・2は底部を欠損する土器で、口辺部文様と胴部文様を区別するために、くびれ部に、磨消による無文帯を作る。胴部には4単位の渦巻文を構成している。2は波状口縁を呈する土器で、文様はくびれ部上位を三日月状の区画文様を微隆起線によって作り、微隆帯間を磨消している。胴部中位より下は縄文原体RLによる施文がなされている。外面は磨耗がはげしく、煤が付着し



第17図 第19号住居跡出土土器拓影図

ている。

1群c(11) 縄文の文様を有するもの。

11の胴部の破片である。

1群e(12～14) 櫛歯状文を有するもの。

12～14はいずれも胴部の破片で、縦位の櫛歯状の文様を有する。

#### 第22号住居跡(第18図)

本跡は遺跡の中央部B3 f<sub>2</sub>より確認され、第97～99号土壌によって切られ、また、第19号住居跡を切って構築されている。第17号住居跡の東0.2m、第18号住居跡の南東3mに位置し、主軸方向はN-3°-Wである。規模は長軸(5.4)m・短軸5.0mほどの、隅丸長方形の平面形を呈し、壁高は14～16cmを測り、外傾して立ちあがる。床は炉跡周辺が硬く踏み固められ、壁側は全体に柔らかく、平坦である。ピットは12個確認され、P<sub>5</sub>～P<sub>16</sub>が本跡の柱穴と思われる。深さは35～58cmを測り、炉を中心に円形状に掘られている。炉は中央部よりやや北側部に存在し、第18号住居跡と同類の炉で、規模は長軸85cm・短軸75cmの長方形を呈し、東西の側面には凝灰石の石が組まれた石組炉である。覆土中には焼土の堆積はみられず、焼土粒子や炭化粒子を含む土層である。

覆土はローム粒子や砂粒を含む黒色・黒褐色の土が堆積している。

#### 出土遺物

出土遺物は縄文土器片を少量出土する。

#### 縄文土器(第20図)

1群a(1～10) 微隆起線による区画文様を有するもの。

1～4は口縁部の破片で、1・2はやや外傾して立ちあがる。3は波状口縁を呈する。その他は胴部の破片と思われ、5・6は曲線的な微隆起線を有する。

1群c(11～22) 縄文の文様を有するもの。

11～22はいずれも胴部の破片である。

1群b(28) 沈線による区画文様を有するもの。

28は胴部の破片で、沈線による懸垂文がみられる。

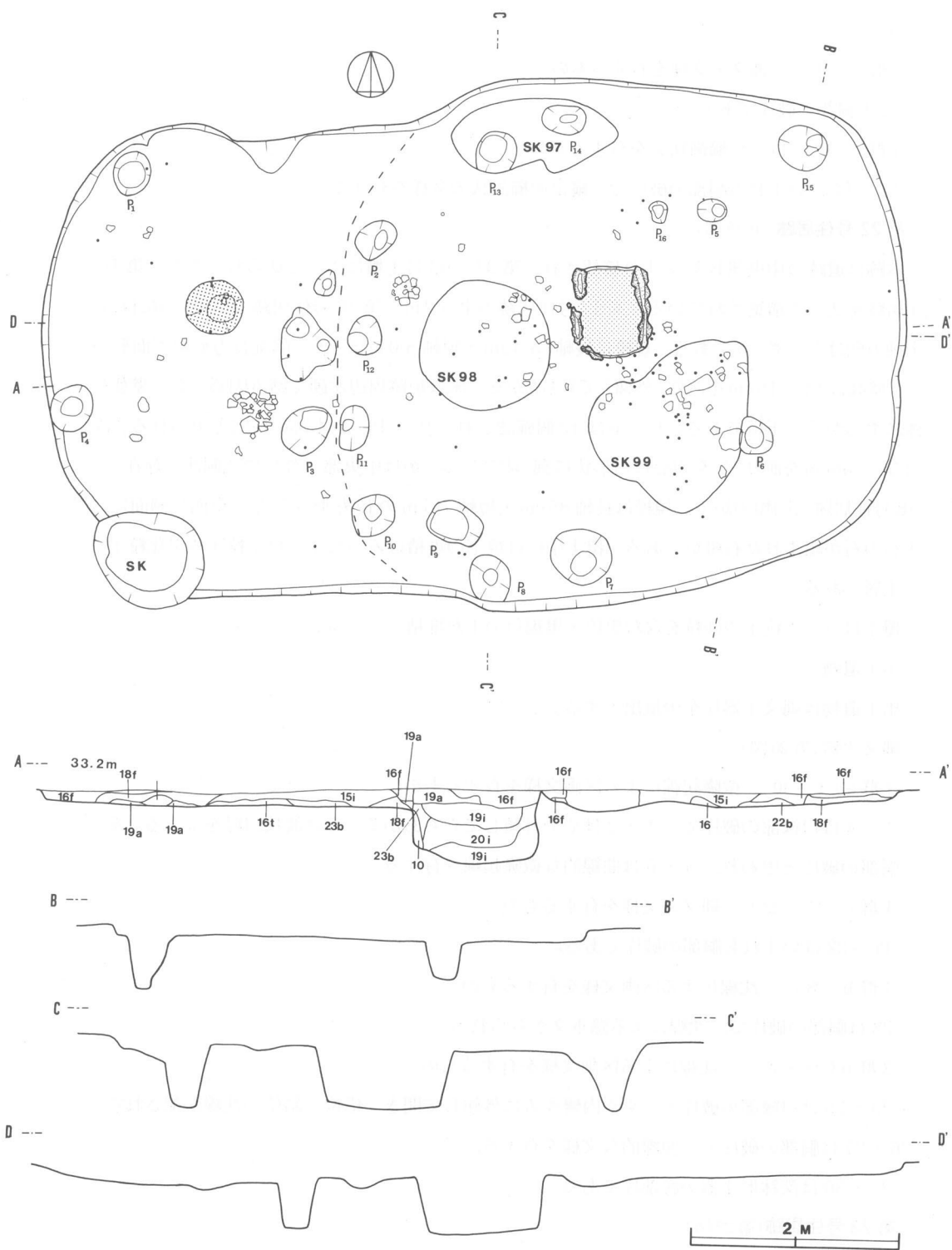
2群b(23～27) 沈線による区画文様を有するもの。

23～25は口縁部の破片で、やや内彎ぎみに外傾して開き、横位・斜位の沈線が配されている。26・27は胴部の破片で、曲線的な文様を有する。

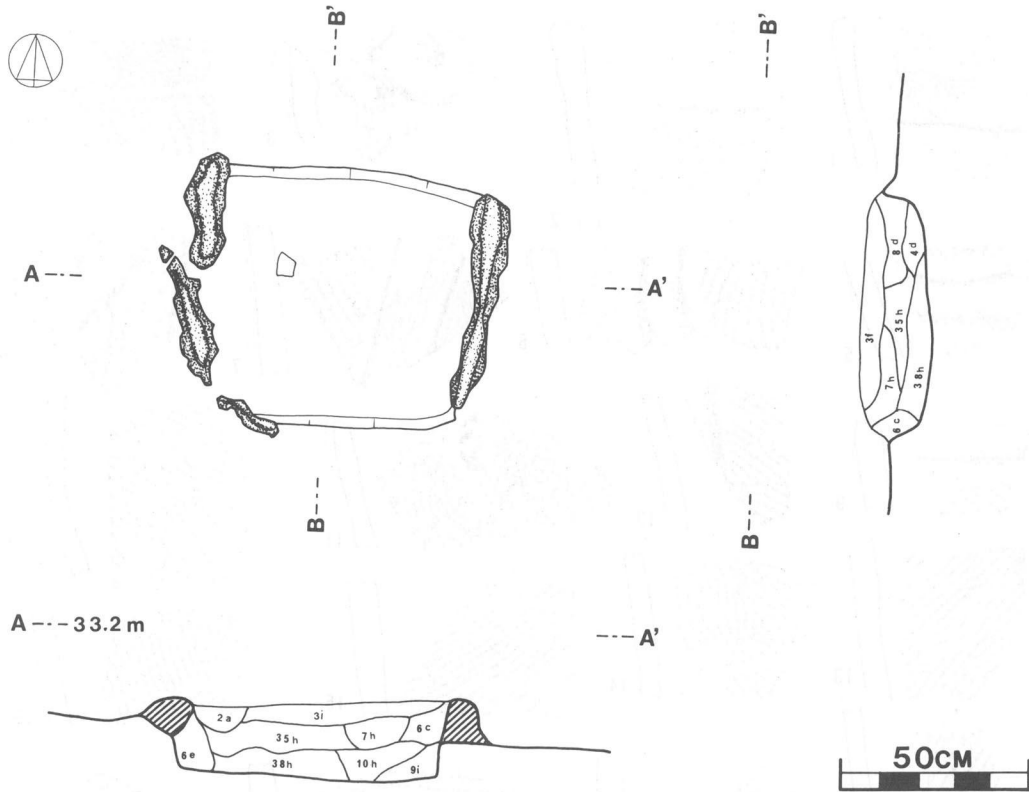
29・30は深鉢形土器の底部片である。

#### 第23号住居跡(第22図)

本跡は遺跡の中央部やや西側B3 h<sub>2</sub>より確認され、第24号住居跡と南側で重複し、第19号



第 18 图 第 19·22 号住居跡実測图



第19図 第22号住居跡炉跡実測図

住居跡の南0.8mに位置している。規模は長軸4.4m・短軸(4.3)mほどの隅丸形状の平面形を呈し、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は8~11cmと浅く、外傾して立ちあがり、床は全体にはほぼ平坦であり、炉跡周辺はパカパカに硬く、壁近くはやや柔らかい。ピットは壁に沿って20個検出され、主柱穴はP<sub>17</sub>~P<sub>19</sub>・P<sub>21</sub>~P<sub>24</sub>と思われ、深さは25~42cmを測る。炉跡は中央部よりやや北側より確認され、長径85cm・短径70cm・深さ16cmほどの地床炉である。また、覆土中には焼土ブロック・焼土粒子が多く含まれている。

住居跡内覆土は2層に分けられ、ローム粒子や砂粒を含む黒褐色・褐色のしまった土が堆積している。本跡は他の住居跡と比較して浅いため、覆土は一部攪乱を受けている。

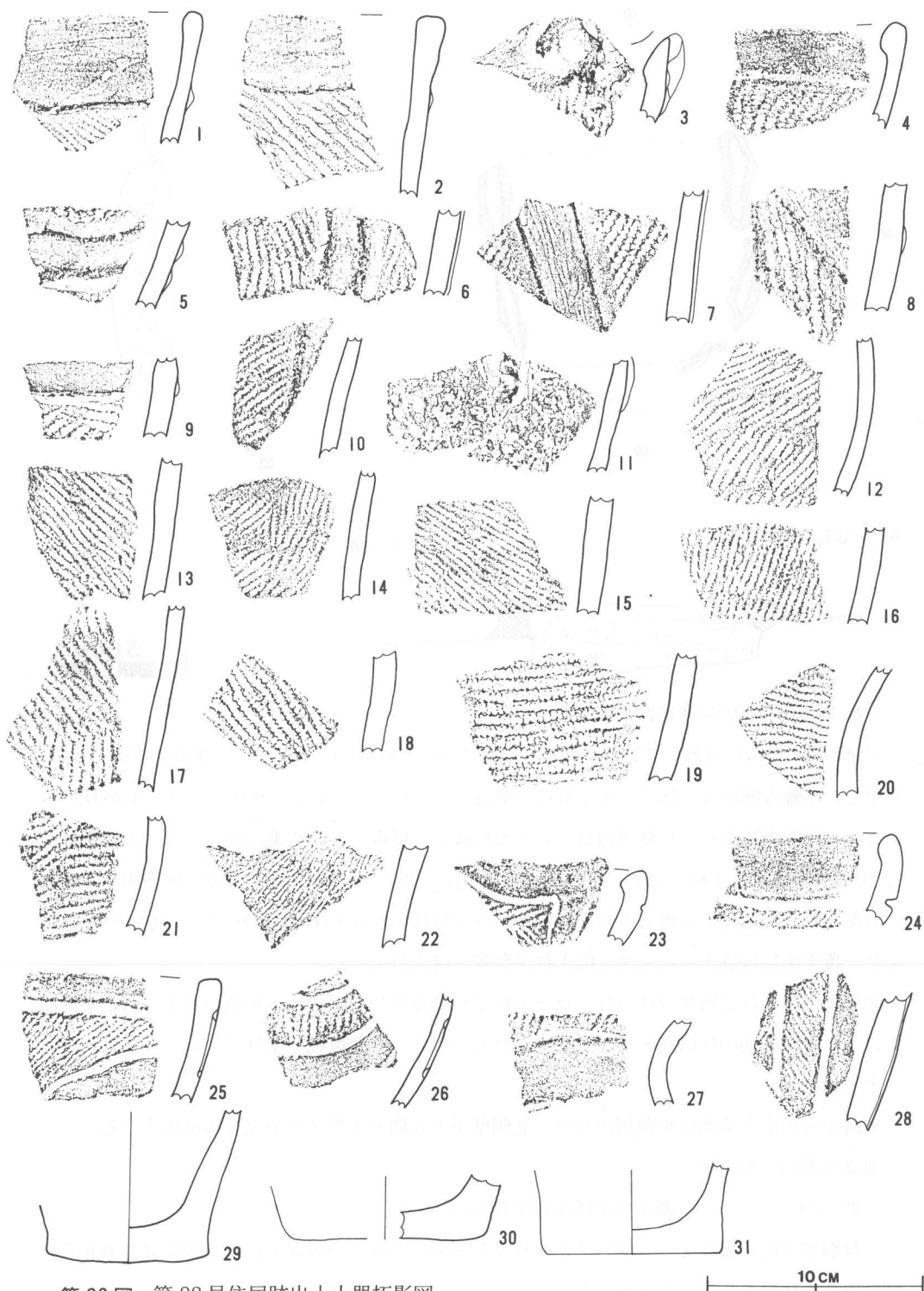
出土遺物

本跡からの出土遺物は炉跡周辺及び、北側壁下より縄文土器・土製品を少量出土する。

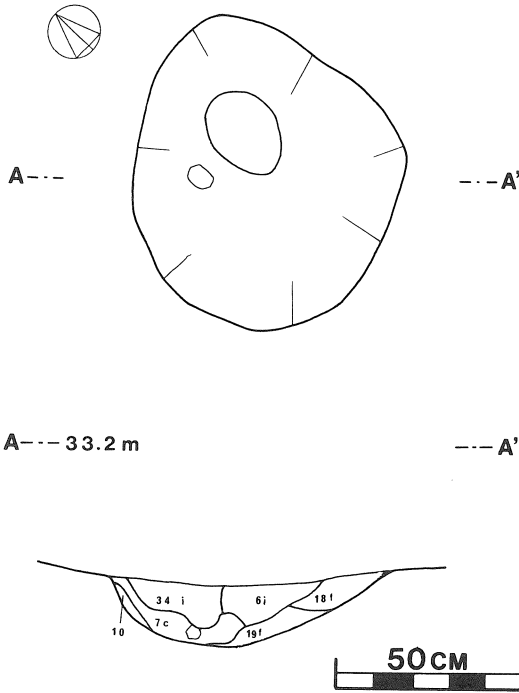
縄文土器(第23図-1~7)

1群c(1・3~7) 縄文の文様を有するもの。

1は胴部上位の破片で、くびれ部より外反して開いた後、口辺部で内彎ぎみに立ちあがる。文様は縄文原体RLの施文が全体になされている。3~7は胴部の破片である。



第 20 图 第 22 号住居跡出土土器拓影图



第21図 第23号住居跡炉跡実測図

$P_{10} \sim P_{13} \cdot P_{15} \sim P_{18}$  が支柱穴と考えられ、深さは25～53 cmを測る。炉跡は中央部に存在し、長軸53 cm・短軸48 cmの長方形に砂岩の石で組まれ、深さは15 cmを測る。覆土中にはローム粒子・焼土粒子・炭化材を含む土が堆積していた。また、炉の東側には灰の掃き出し部と思われる落ち込みが認められた。

住居跡内覆土は一部攪乱がみられるが、大きく3層に分けられ、ローム粒子・焼土粒子・炭化材等を含む黒褐色・暗褐色・褐色の土が堆積している。全体に覆土はしまっている。

#### 出土遺物

本跡からの出土遺物は炉跡の東側より縄文土器・石器などを出土する。

#### 縄文土器(第23図-8～20)

8・15は無文の口縁部で、8は直線的に外傾した後、口辺部で内傾して開き、側面には横位の浅い窪みがみられる。

1群 a (9・10) 微隆起線による区画文様を有するもの。

いずれも口縁部の破片で、無文と縄文の境を微隆起線によって区画する。10は無文部下位に横位の円形刺突文がみられる。

1群 b (11～14) 沈線による区画文様を有するもの。

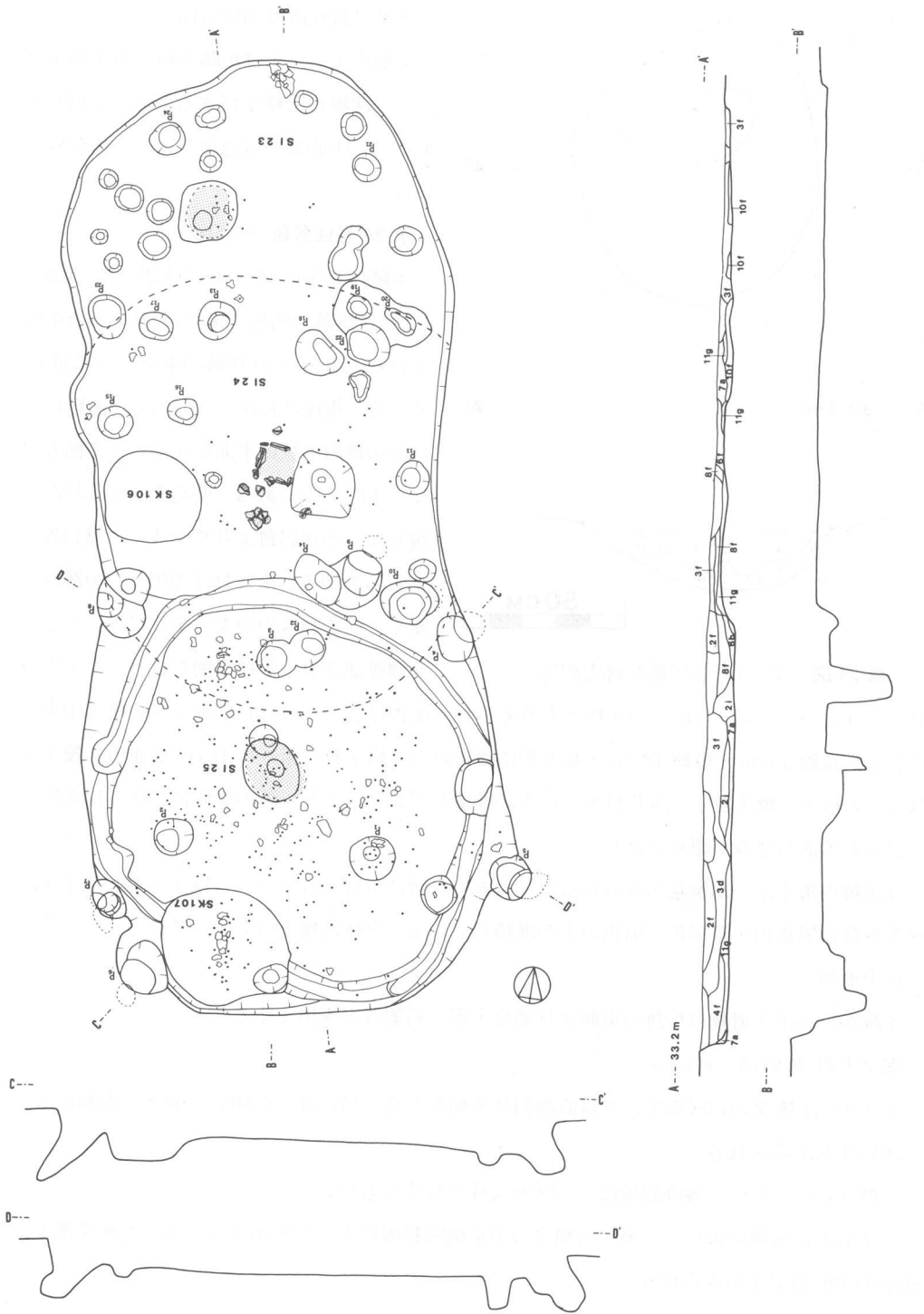
11は波状口縁を呈する把手部の破片で、沈線によって横位及び、懸垂文の変形した楕円形の

土製品有孔円板(第144図-1・2)

2個出土し、1は炉跡上層の覆土中より出土し、沈線の文様を有する土器片を円形状に加工し、中心部には直径7 mmの孔を有している。

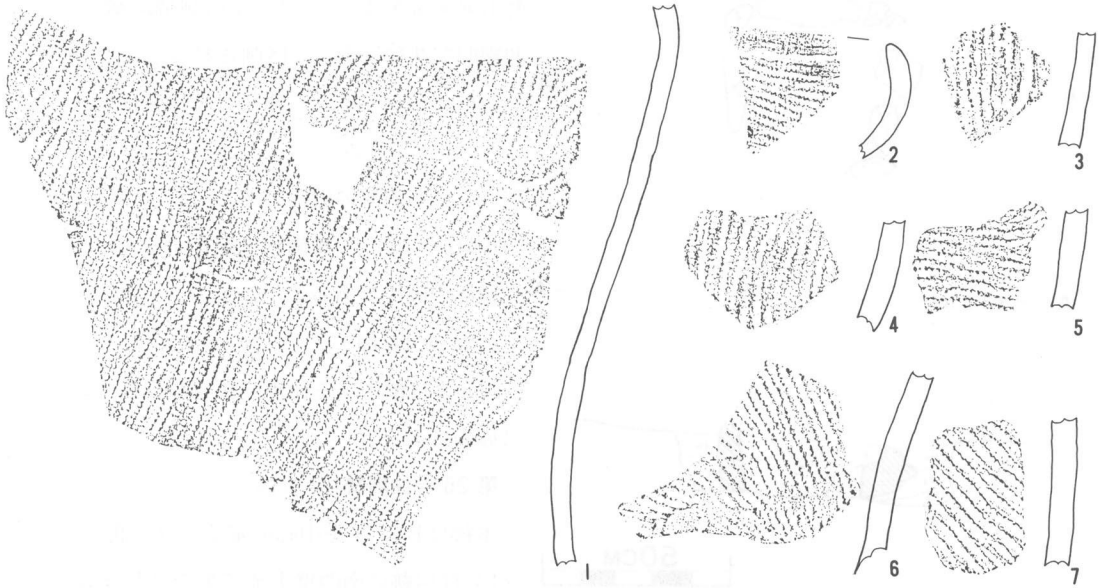
#### 第24号住居跡(第22図)

本跡はB3 i<sub>3</sub>を中心に確認され、北側で第23号住居跡、南側で第25号住居跡と重複している。第20号住居跡の東0.3 mに位置している。規模は長径(5.1) m・短径4.11 mほどの楕円形状の平面形を呈し、主軸方向はN-40°-Wである。壁高15 cmほどで、重複している住居跡よりやや浅く、壁は外反して立ちあがる。床はほぼ平坦で、炉跡周辺は硬く、壁ぎわはやや柔らかくなる。ピットは9個確認され、炉跡を囲むようにしている

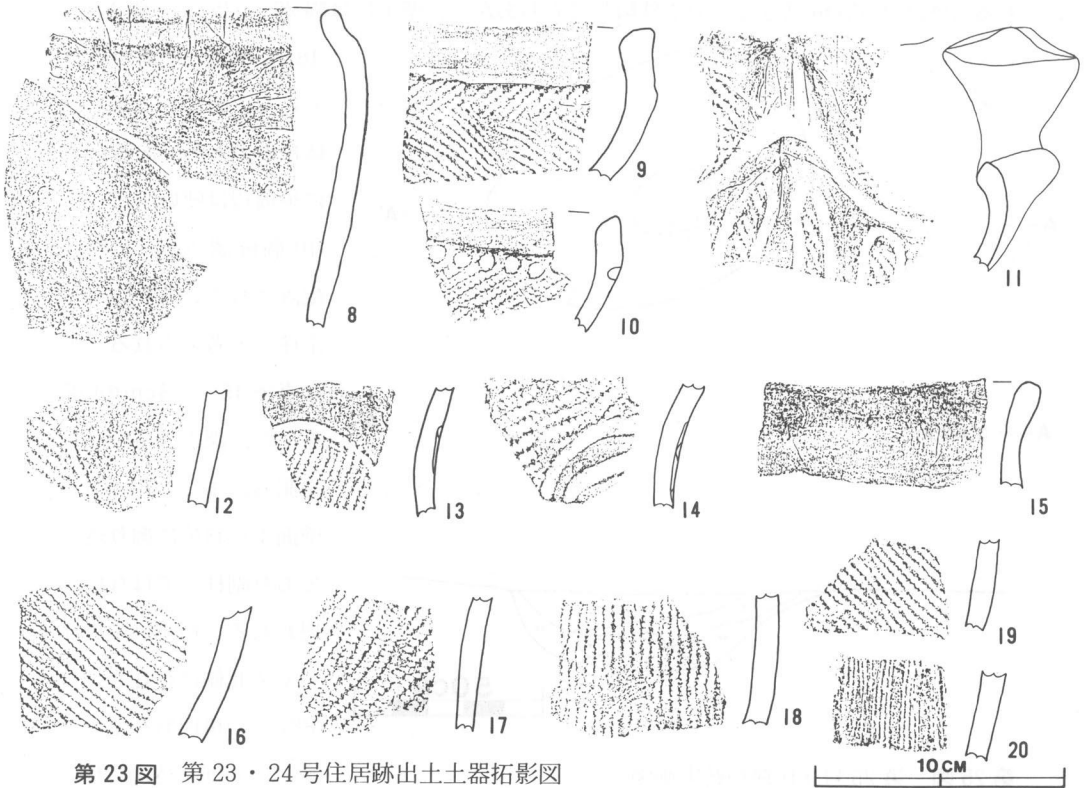


第 22 图 第 23 · 24 · 25 号住居跡実測图

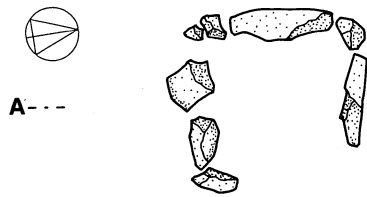




SI 23



第23图 第23・24号住居跡出土土器拓影图



A---

---A'

磨消縄文帯を作る。12～14は胴部の破片で、  
曲線的な沈線によって区画される。

1群c(16～19) 縄文の文様を有するもの。  
の。

いずれも胴部の破片である。

1群e(20) 櫛歯状文を有するもの。

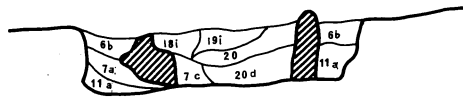
A--- 33.2 m

---A'

胴部の破片である。

石器(第142図-9)

両面に打撃による使用痕が認められ、石質  
は砂岩である。



50CM

第25号住居跡(第22図)

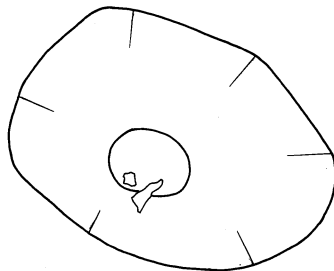
本跡はB3j<sub>3</sub>を中心に確認され、北側を第  
24号住居跡の南西壁下部で第107号土壌に  
よって切られ、第30号住居跡の南東1.5mに

第24図 第24号住居跡炉跡実測図

位置している。規模は長径5.0m・短径4.36mの円形状の平面形を呈し、主軸方向はN-16°-  
Eである。壁高は33cmほどで、やや外傾して立ちあがり、壁下には幅20～25cm・深さ15～



A---



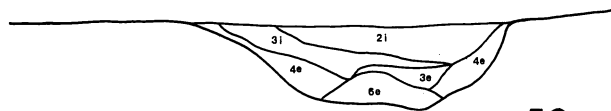
---A'

18cmほどの壁溝が周回し  
ている。床はロームで、全  
体に硬いものであるが、特  
に炉周辺は硬い。ピットは  
10個確認され、三角形に  
配置されているP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>が  
支柱穴と考えられる。規模

A--- 33.2 m

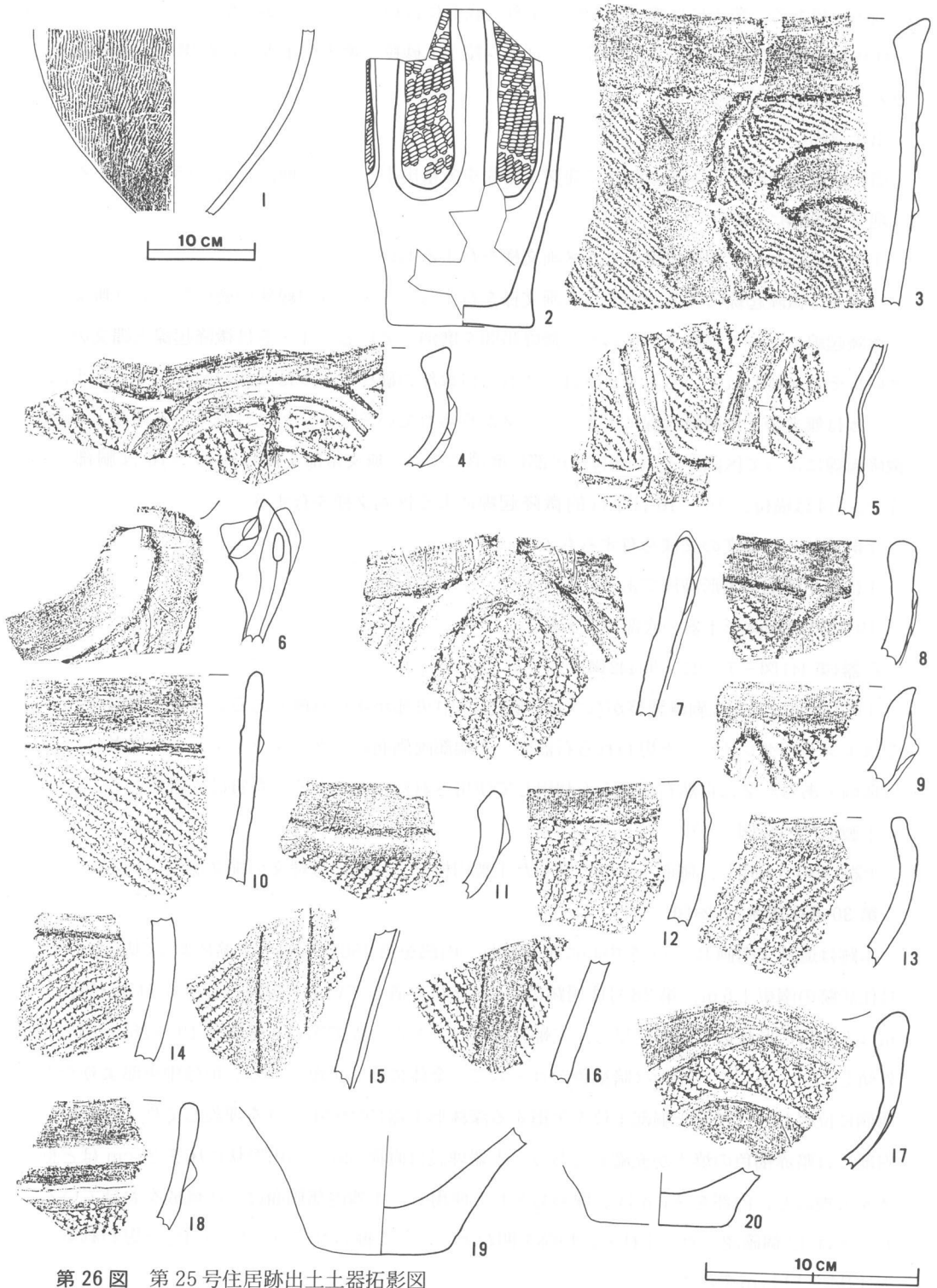
---A'

は直径45～53cmの円形状  
を呈し、深さは77～87cm  
を測る。また、P<sub>5</sub>～P<sub>10</sub>は  
壁面より斜位に掘り込まれ  
ており副柱穴ではないか  
と思われる。炉跡は中央部  
よりやや北側に存在し、長  
径88cmの楕円形を呈し、  
床を20cm掘り込んで作られ



50CM

第25図 第25号住居跡炉跡実測図



第 26 图 第 25 号住居跡出土土器拓影图

た地床炉である。覆土には焼土粒子が含まれ、底面には焼土ブロックが広がっている。

住居跡内覆土は全体にしまりを帯び、ローム粒子・砂粒・焼土粒子等を含む黒色・黒褐色・褐色の土が堆積している。

#### 出土遺物

遺物は覆土上層から下層にかけて縄文土器片を多量出土し、その他、石器2点を出土する。

#### 縄文土器(第26図)

1群 a (3～16) 微隆起線による区画文様を有するもの。

3～5は微隆起線による曲線的な区画文様を有する。3・4は口縁部の破片で、3は無文帯下に微隆起線によって渦巻文が作られ、微隆帯間を磨消している。4・5は微隆起線と縄文の境に強いなぞりが行われている。6～9はいずれも口縁部の破片で、6は波状口縁を呈する把手部、7～8は無文帯下に微隆起線による「 $\cap$ 」文が作られている。10～12は無文帯と縄文との境を微隆起線によって区画する。13は口辺部に磨消によって無文帯部を作る。14～16は胴部の破片で、14は横位、15・16は平行的微隆起線による区画文様を有する。

1群 c (1) 縄文の文様を有するもの。

1は胴下位部の大形破片である。

19・20は深鉢形土器の底部片である。

#### 石器(第141図-7・11, 第142図-2)

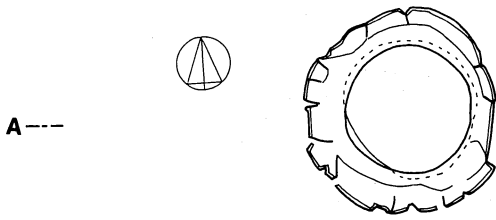
11は両面に入念な剝離調整がなされ、底辺の中央部が窪む石鏃である。石質は瑪瑙である。7はエンドスクレイパーと思われる石器で、先端部両側面にスクレイパーエッジが施され、石質は瑪瑙である。2は自然石の窪みを利用して使用された石皿である。石質は砂岩である。

#### 土製品(第145図-4)

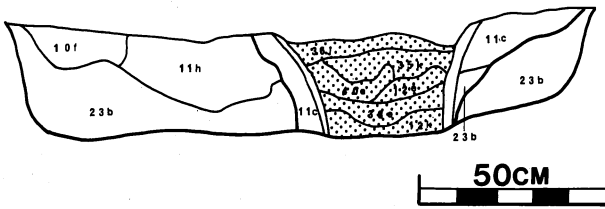
土器の破片を利用し、側面を丁寧に磨った土製円板で、片側には縄文の施文がみられる。

#### 第30号住居跡(第28図)

本跡は遺跡の南側 B 3 j<sub>4</sub> を中心に確認され、内部を第150・151号土壌によって切られ、第25号住居跡の南東1.5m、第28号住居跡の西0.1mに位置している。規模は長径5.71m・短径4.8mほどの楕円形状の平面形を呈し、主軸方向はN-53°-Wである。壁高は10～25cmほどで、外傾して立ちあがり、床面は暗褐色のロームで、全体に硬く平坦である。炉は中央部よりやや北西側に位置し、口縁部と胴部下位を欠損する深鉢形土器(第29図-1)を埋設して作られている。内部には暗赤褐色の焼土が充満しており、土器埋設は直径85cmの円形状に床を25cmほど掘り込んで埋設し、内部を7cmほど埋めもどして使用し、土器内部側面は二次焼成をおびている。ピットは12個確認され、支柱穴は炉跡を囲むようにして掘られているP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>と思われる。深さは94～110cmを有する。



A---33.2 m



第27図 第30号住居跡炉跡実測図

微隆起線による渦巻状の文様が8個、また胴部には微隆起線による方形状の区画が作られ、内面にはLRの縄文の施文がなされている。2は東壁下より出土した土器で、微隆起線による円文が作られている。3は口縁部の破片で、器厚を同じくして内彎して立ちあがり円文状の文様が微隆起によって作られる。11~12は口縁部の破片で、口辺部に無文帯を作り、その下に縄文の施文がなされ、境を微隆起線によって区画している。また12には横位状の突起が貼り付けられている。

1群b(第29図-13・14, 第30図-6) 沈線による区画文様を有するもの。

13・14は口縁部の破片で、13は大きく内彎し、14はやや内彎して立ちあがり、口辺部に横位の沈線と口縁部には曲線的な平行沈線区画がなされ、内部が磨消されている。6は楕円形状の懸垂文が施されている。

1群c(第30図-7~10) 縄文の文様を有するもの。

いずれも胴部下位の破片であり、10は横位の縄文が施されている。

11~15は底部の破片で、11は胴部下位までは縄文の文様が施され、底部付近は無文である。石器(第140図-3, 第142図-10)

3は基部を欠損する磨製石斧である。石質は硬質砂岩で両面共に丁寧に磨られている。10は敲石で、半分欠損した自然石のため中央部に敲痕、側面に磨痕が認められる。

覆土は大きく3層に分けられ、砂粒やローム粒子などを含む硬い

---A' 覆土で、黒色・黒褐色・暗褐色の土が自然堆積している。

出土遺物

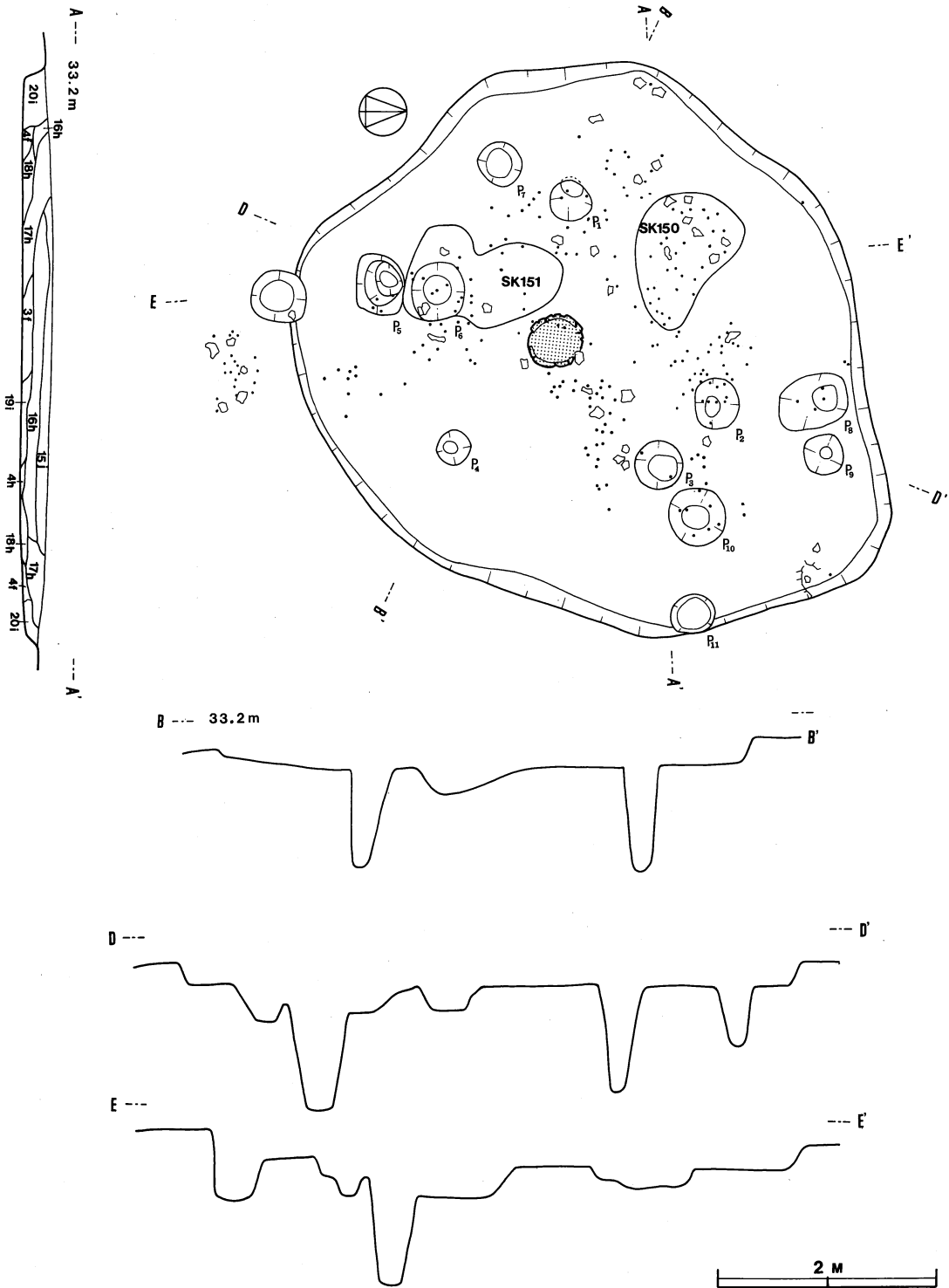
本跡からの出土遺物は中央部を中心に縄文土器を多量に、及び石器・土製品を出土する。

---A'

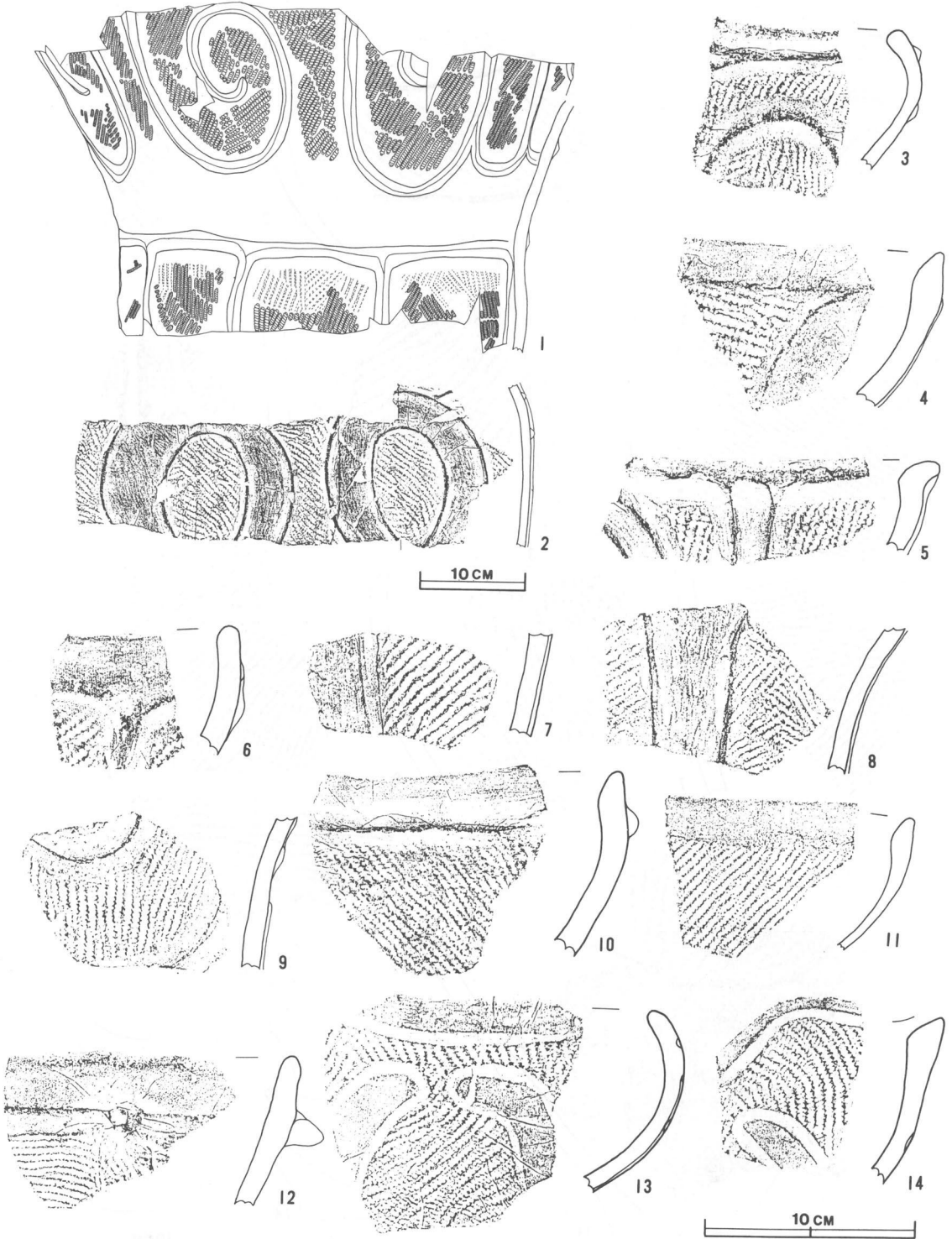
縄文土器(第29・30図)

1群a(第29図-1~12, 第30図-1~4) 微隆起線による区画文様を有するもの。

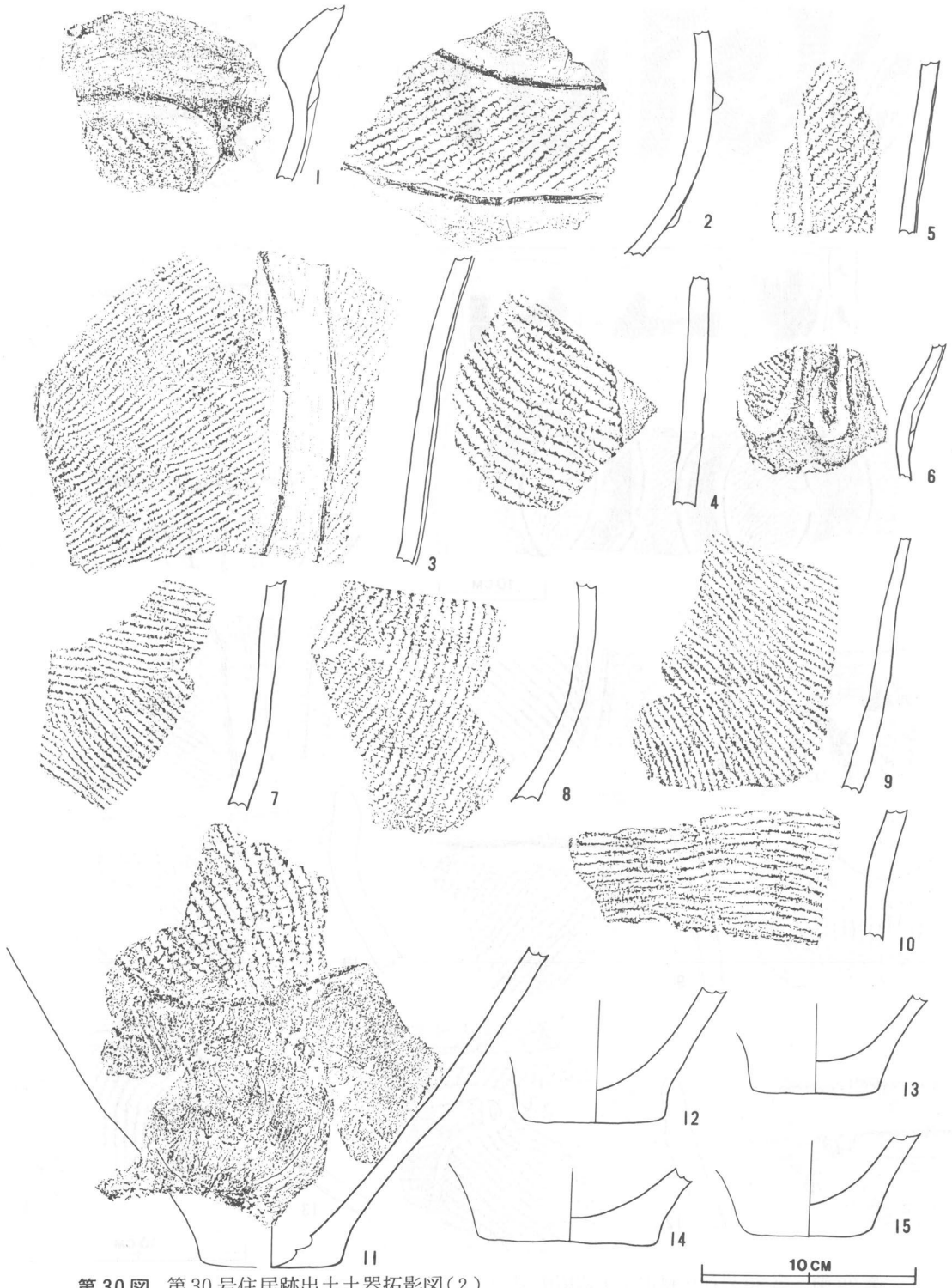
第29図-1~3は微隆起線による曲線的な区画文を有し、1は埋設炉に使用された土器で、くびれ部全周を磨消し、口縁部文様は微隆起線による渦巻状の文様が8個、また胴部には微隆起線による方形状の区画が作られ、内面にはLRの縄文の施文がなされている。2は東壁下より出土した土器で、微隆起線による円文が作られている。3は口縁部の破片で、器厚を同じくして内彎して立ちあがり円文状の文様が微隆起によって作られる。11~12は口縁部の破片で、口辺部に無文帯を作り、その下に縄文の施文がなされ、境を微隆起線によって区画している。また12には横位状の突起が貼り付けられている。



第 28 图 第 30 号住居跡実測图

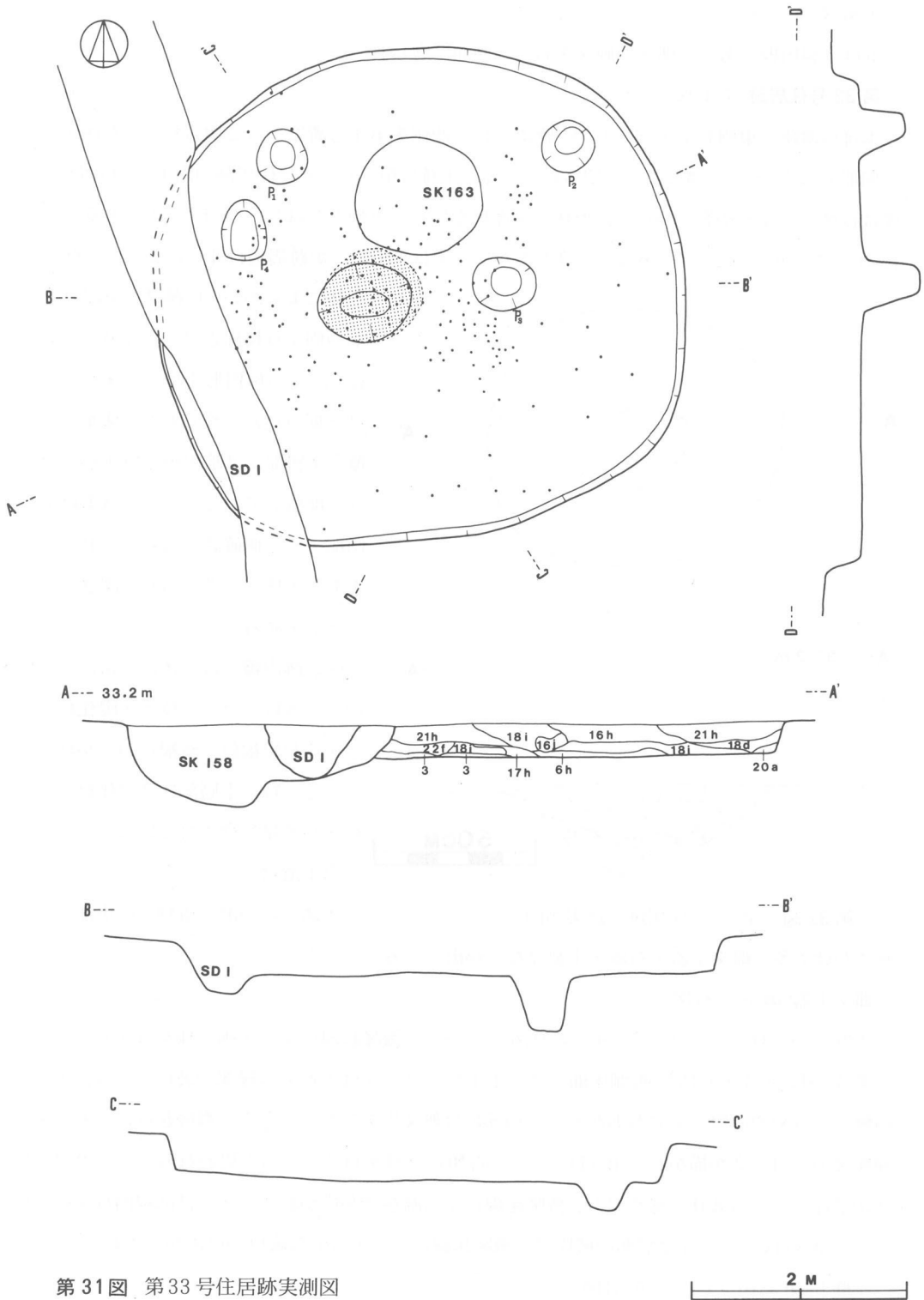


第29图 第30号住居跡出土土器拓影图(1)



第30图 第30号住居跡出土土器拓影图(2)





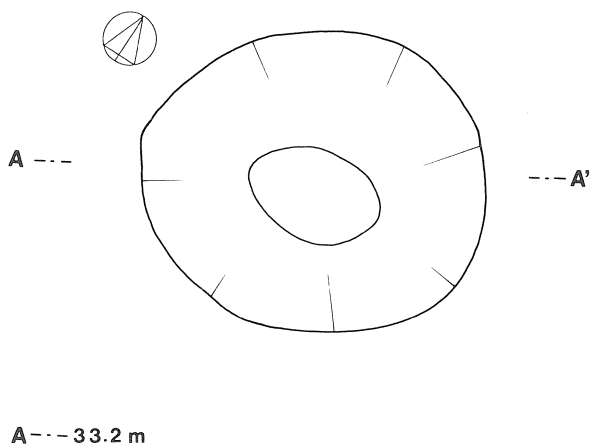
第31図 第33号住居跡実測図

土製器(第145図-6)

6は土製円板である。縄文の施文を有し、側面は磨られている。

### 第33号住居跡(第31図)

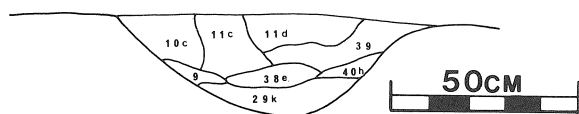
本跡は遺跡の東側B4 b3を中心に確認され、西側を第1号溝によって切られ、また住居跡内北側部では第16号土壌によって切られている。本跡は第35・36号住居跡の南4mに位置し、規模は長径4.7m・短径3.65mの円形状の平面形を呈し、主軸方向はN-28.5°-Wである。壁高は30~33cmほどで、やや外反して立ちあがり、床は平坦で、炉跡周辺は非常に硬いが、壁側は



全体に柔らかい。炉跡は中央部よりやや西側より検出され、長径92cm・短径78cmの楕円形を呈し、床を20cmほど掘り込んで作られた地床炉である。覆土下層部には暗褐色の焼土が5cmほど堆積している。ピットは本跡の北側部より4個確認されたが、P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>までは支柱穴と考えられ、深さは27~53cmを測る。

A---33.2m

---A'



住居跡内覆土は全体に非常に硬いもので、砂粒・ローム粒子・炭化粒子などを含む黒褐色・暗褐色の土が堆積している。特に下層部には炭化材・焼土粒子が多量に含まれている。

出土遺物

### 第32図 第33号住居跡炉跡実測図

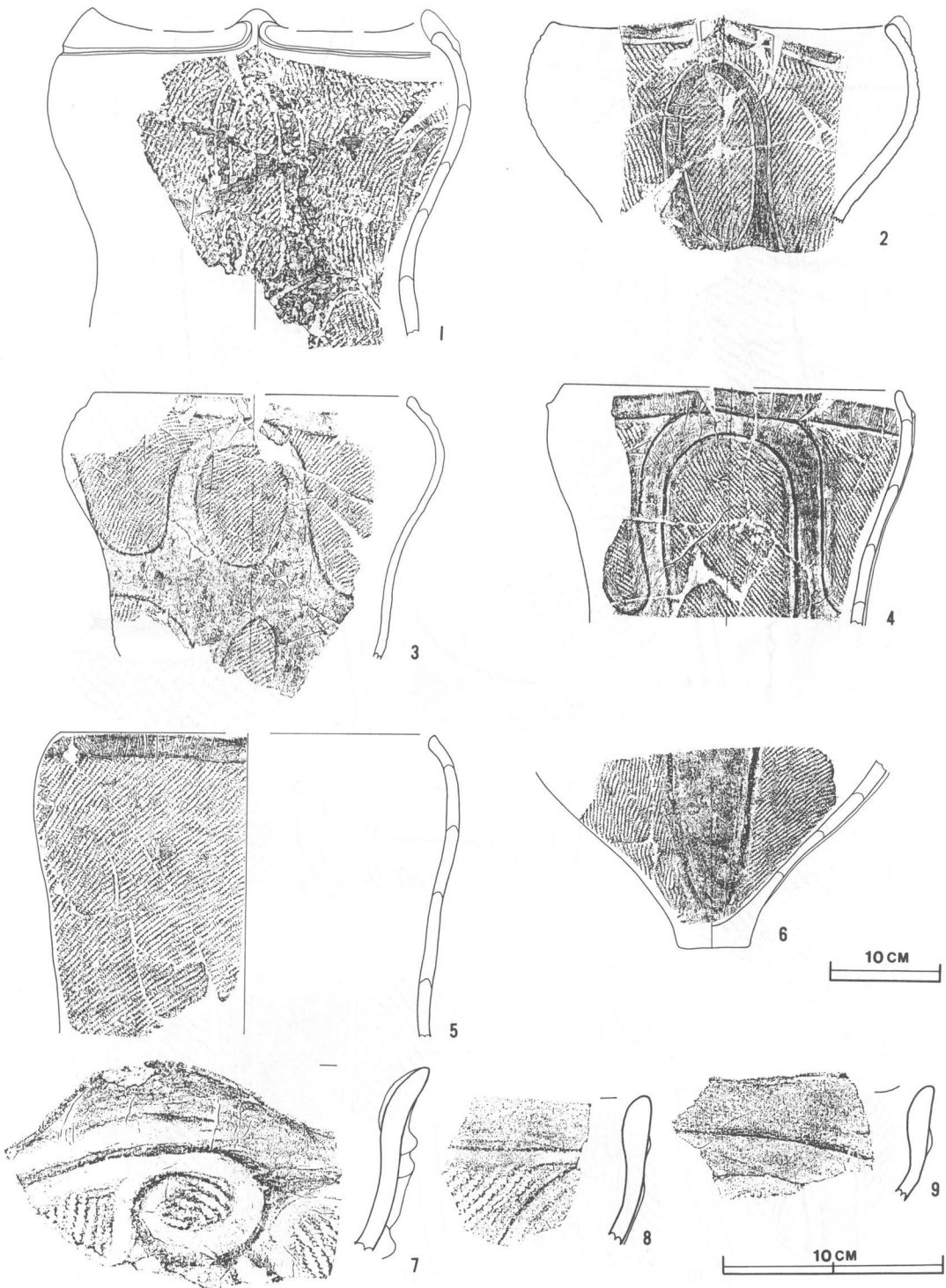
本跡からの出土遺物は中央部から西側にかけて多く縄文土器・石器・土製品などが出土する。

縄文土器(第33・34図)

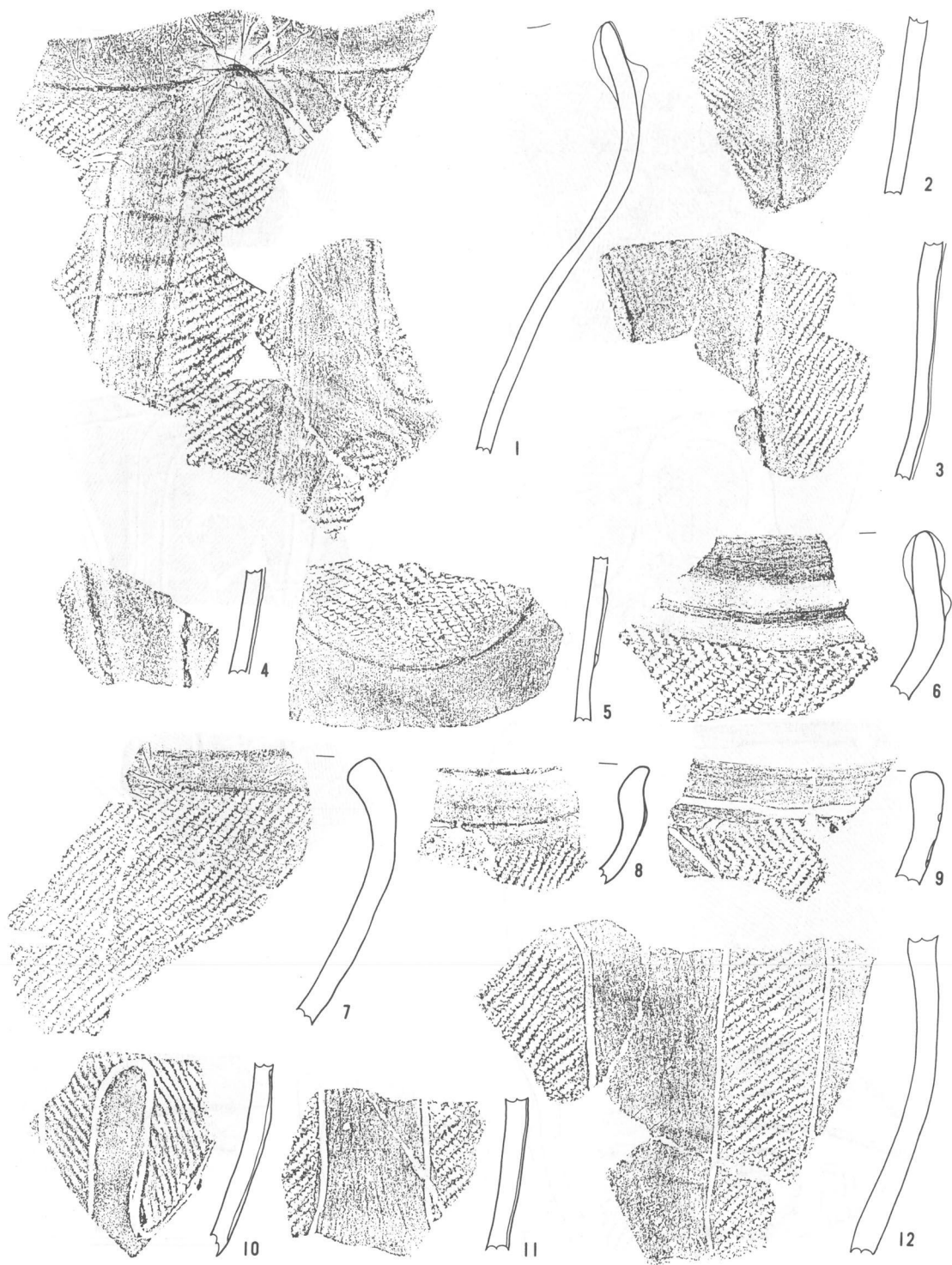
1群a(第33図-3・4・6~9, 第34図-1~8) 微隆起線による区画文様を有するもの。

第33図3・4・6は炉西側床面上より出土し、3・4は大形の口縁部の破片で、3は大きく内彎、4はやや内彎して立ちあがり、口辺部には無文帯を有し、その下に微隆起線による平行状曲線文の「∩」文が描かれ、第34図-1も同類の文様を有する土器と思われる。7~9は口縁部の破片で、7は波状口縁を呈し、微隆起線による渦巻文が描かれ、8・9は曲線的な文様を有する。第34図-2~4は胴部の破片で、微隆起線による平行的な縦位の区画がなされている。

1群b(第33図-1・2, 第34図-8~12)



第33图 第33号住居跡出土土器拓影图(1)



第 34 图 第 33 号住居跡出土土器拓影图(2)

1・2共に波状口縁を呈する大形の口縁部の破片で、1は無文帯の口縁部をめぐる隆線がつまみあげられた小突起を有し、2にも同様な小突起がみられる。1・2共に沈線による平行状曲線の「 $\cap$ 」文が口縁部に描かれている。10～12は胴部の破片で、10は2本の沈線による楕円形状の懸垂文、11・12は沈線による懸垂文が描かれている。

石器(第140図-4・5, 第142図-12, 第143図-1・3・5)

本跡から2個の磨製石斧(4・5)が出土し、4は刃部に使用痕が認められ、石質は安山岩である。5は刃部を欠損した石斧で、石質は粘板岩である。敲石3個(第142図-12, 第143図-1・3・5)出土し、いずれも自然石を利用し、中央部に使用痕が認められる。

土製品(第145図-9)

縄文土器を利用して作られた土製円板である。側面は丁寧に磨られている。

### 第36号住居跡(第35図)

本跡は遺跡の東側A4j<sub>2</sub>を中心に確認され、第161号土壇及び第1号溝によって南東部と西側を切られ、また、北側で第41号住居跡と重複している。本跡は第35号住居跡の西2mに位置し、規模は長軸4.8m・短軸(4.65)mの隅丸形状の平面形を呈し、主軸方向はN-60°-Eである。壁高は14cmほどで、外傾して立ち上がり、床は全体にロームで柔らかく、一部炉跡周辺に硬い場所が認められる。炉跡は本跡の中央部に存在し、規模は長径70cm・短径60cmの楕円形を呈し、床を20cmほど掘り込んで作られた地床炉である。覆土には焼土の層は見られず、覆土中に焼土粒子少量含む程度で、長い期間使用された炉とは考えられない。またピットは7個確認され、支柱穴は炉跡を囲みP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>と考えられ、深さは53～92cmを測る。

#### 出土遺物

本跡からの出土遺物は炉跡の東側より縄文土器片を少量出土する。

#### 縄文土器(第36図)

1群a(2～6) 微隆起線による区画文様を有するもの。

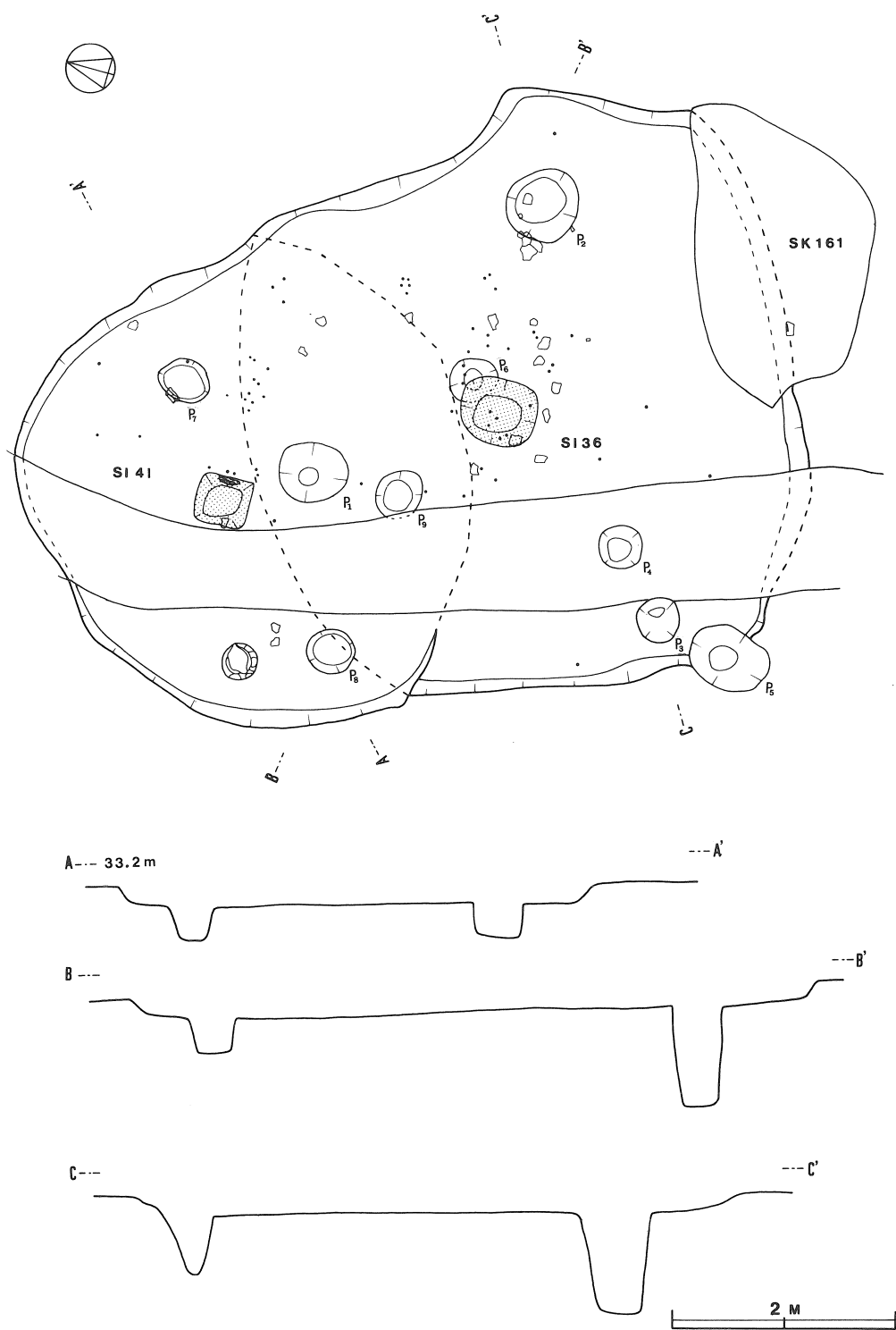
2～4は微隆起線による曲線的な区画がなされ、2・3は口縁部の破片である。5・6は微隆起線によって無文帯と縄文を区画している。

1群b(7～14) 沈線による区画文様を有するもの。

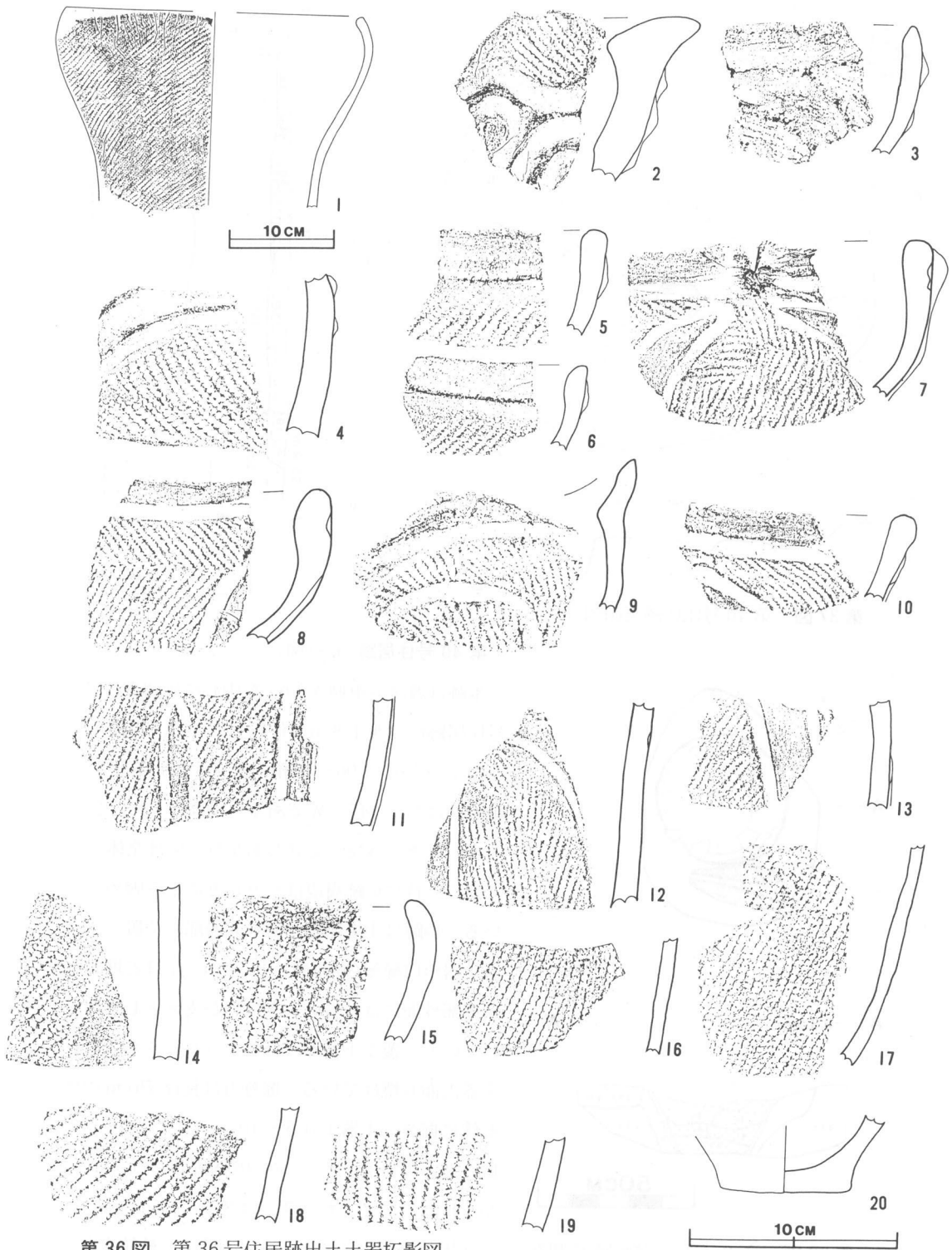
7～10は口縁部の破片で、いずれも口縁部をめぐる1条の沈線と懸垂文の変形した楕円形状の区画文が描かれている。また7には横位の沈線間に瘤状小突起が貼り付けられている。11～14は胴部の破片で、11・12は楕円形状の懸垂文、11・13・14は懸垂文が引かれている。

1群c(1・15～19) 縄文の文様を有するもの。

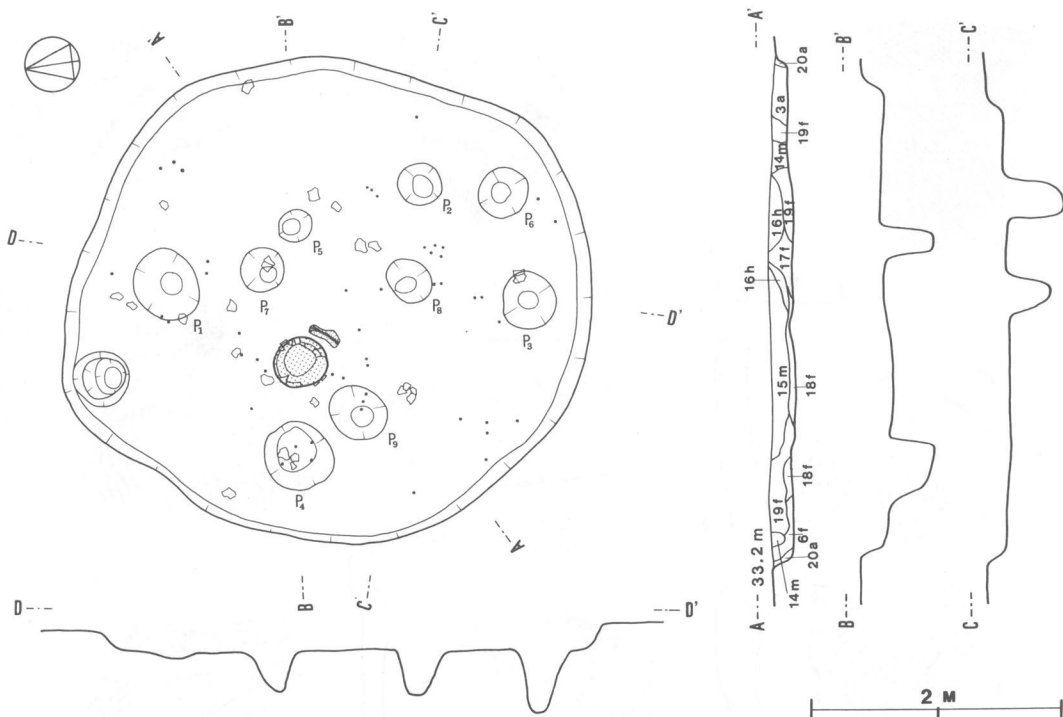
1はP<sub>2</sub>西側床面上より出土した土器で、口縁部は胴部より外反した後、口辺部で内彎して立ちあがる。文様は全体にLRの縄文が施文されている。



第 35 图 第 36 · 41 号住居跡实测图



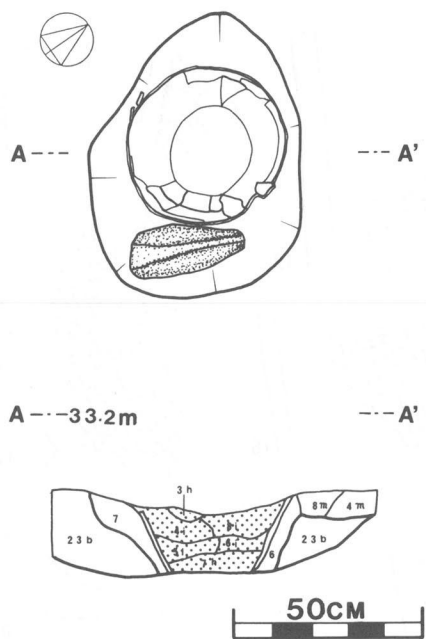
第36图 第36号住居跡出土土器拓影图



第 37 図 第 40 号住居跡実測図

第 40 号住居跡(第 37 図)

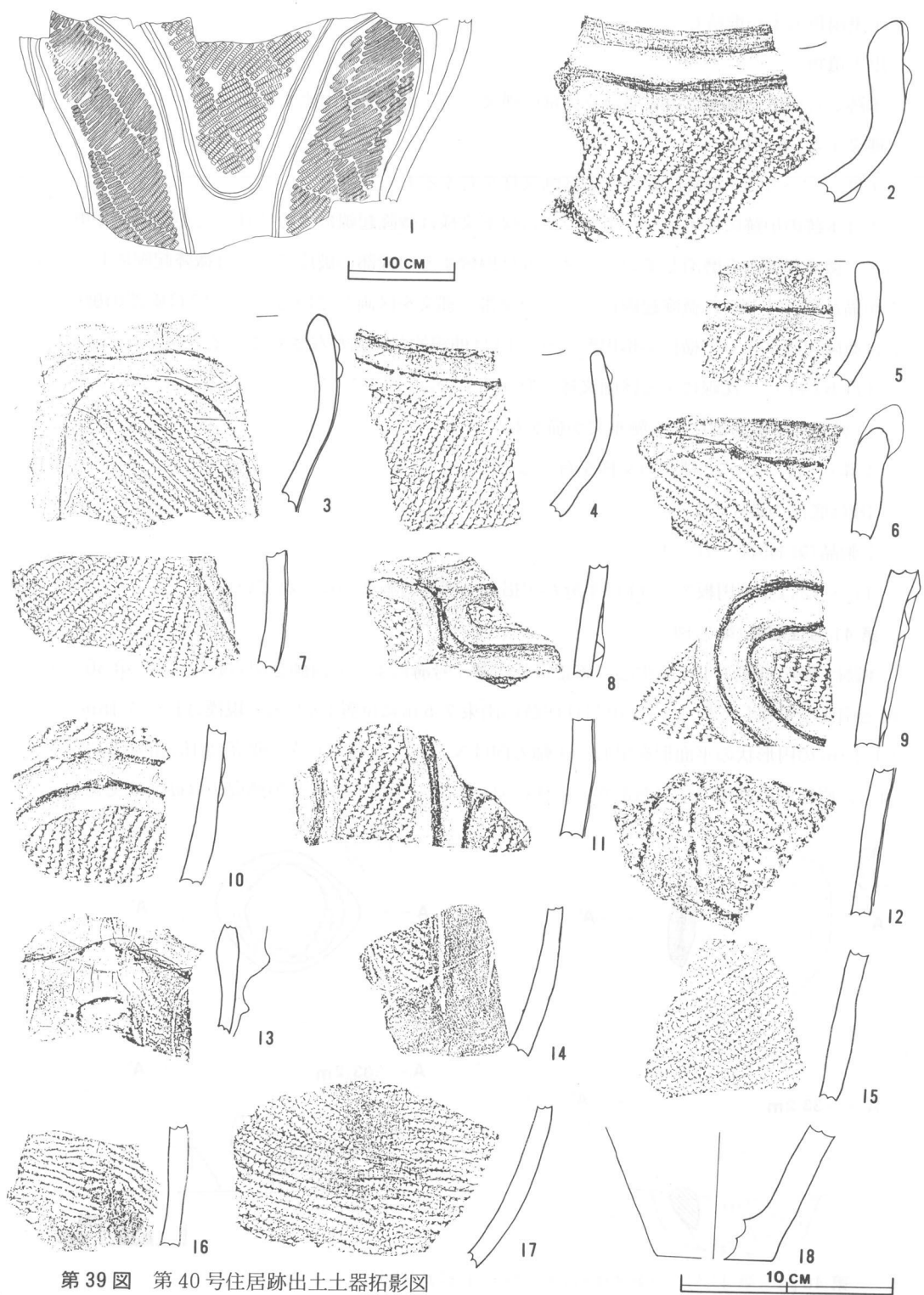
本跡は遺跡の東側 A 3 h<sub>9</sub> を中心に確認され、第 39 号住居跡の北西 1.8 m に位置している。規模は長径 4.35 m・短径 3.96 m の楕円形の平面形を呈し、主軸方向は N - 14° - W である。壁高は 18 ~ 22 cm ほどで、大きく外反して立ちあがり、床は全体に平坦で硬く、特に炉跡周辺はバカバカに踏み固められている。炉跡は中央部よりやや北西部に位置し、深鉢形土器の口縁部(第 39 図-1)を 18 cm ほど埋設し、南東部外面には砂岩の大きな石が支えとして埋められている。覆土下層部には焼土ブロックが含まれ、土器内面も焼けている。掘り方は長径 75 cm の楕円形状に掘り、土器より 6 ~ 10 cm ほど大きく斜めに掘り込んでいる。ピットは 10 個確認され、P<sub>1</sub> ~ P<sub>4</sub> が支柱穴と考えられ、深さは 31 ~ 55 cm を測る。



第 38 図 第 40 号住居跡炉跡実測図

住居跡内覆土は全体にローム粒子や砂粒を含む黒





第39图 第40号住居跡出土土器拓影图

色・黒褐色の土が堆積している。

出土遺物

本跡からの出土遺物は中央部より少量の縄文土器・土製品を出土する。

縄文土器(第39図)

1群 a (1~12) 微隆起線による区画文様を有するもの。

1は本跡の炉跡に使用された土器で、口縁部文様は微隆起線による「H」文が全体に4単位作られ、微隆起線内を磨消している。2~5は内彎する口縁部の破片で、3は微隆起線によって「H」文が描かれ、4~5は微隆起線によって無文帯と縄文を区画している。7~12は胴部の破片で、8は微隆起線によって横位の楕円形、9・10は曲線的な区画がなされている。

1群 b (14) 沈線による区画文様を有するもの。

14は胴部下位の破片で、懸垂文が描かれている。

1群 c (15~17) 縄文の文様を有するもの。

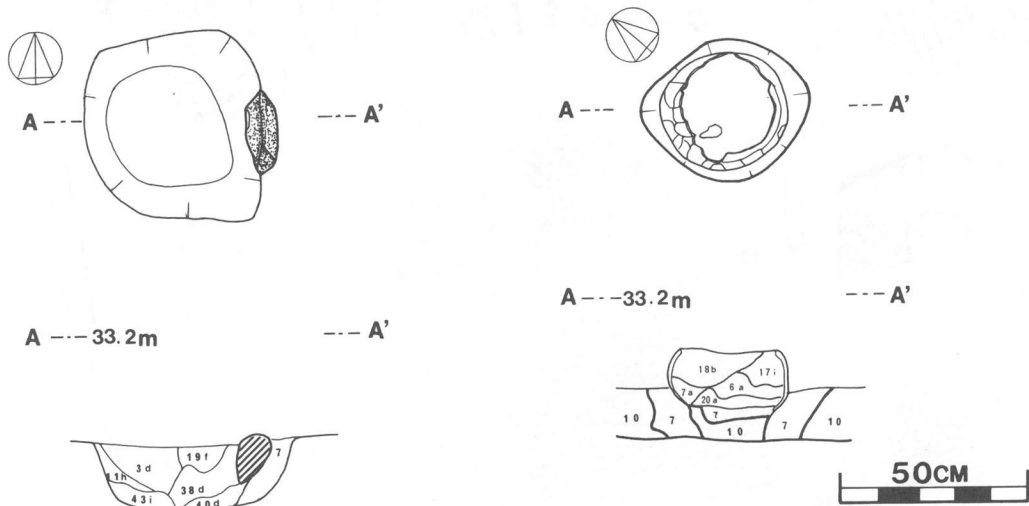
18は底部の破片である。

土製品(第145図-11・12)

11・12は土製円板で、11は半分が欠損し、縄文の施文がなされている。

第41号住居跡(第35図)

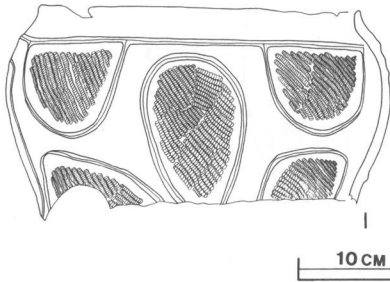
本跡は遺跡の東側A4 i<sub>1</sub>を中心に確認され、第1号溝によって西側を切られ、また、第36号住居跡と南側で重複している。第40号住居跡の南東7.5mに位置している。規模は長径4.15m・短径(4.1)mの円形状の平面形を呈し、主軸方向はN-61°-Eである。壁高は15cmほどの深さを有し、直線的に外傾して立ちあがる。床はロームで、平坦であり、炉跡周辺は硬い床であるが、



第40図 第41号住居跡炉跡および埋設土器実測図

全体的にやや柔らかいものである。炉跡は中央部よりやや北側に位置し、規模は長軸 50 cm・短軸 45 cm の隅丸長方形を呈し、深さは 17 cm を測る。また、東壁には砂岩の平たい石が置かれ、覆土下層部には暗赤褐色の焼土が充満している。西側壁より 25 cm 内部に埋設土器が出土し、床を 5 cm ほど掘り込んで深鉢形土器(第 41 図-1)の口縁部が埋設されている。支柱穴は P<sub>7</sub>~P<sub>9</sub> の 3 個が確認され、深さは 31~51 cm を測る。

住居跡内覆土は住居跡が浅く、また攪乱がはげしいため、観察は不可能であった。



出土遺物

本跡からの出土遺物は縄文土器、及び土製品を出土する。

縄文土器(第 41 図)

1 群 a (1) 微隆起線による区画文様を有するもの。

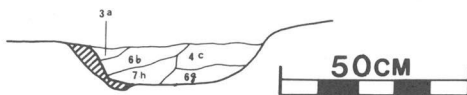
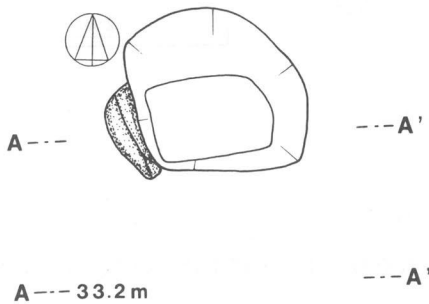
第 41 図 第 41 号住居跡出土土器実測図 1 は西側より出土した埋設土器の口縁部で、微隆起線による「 $\Pi$ 」文が 4 単位作られ、微隆起帯間を磨消し、縄文との境になぞりによる整形がなされている。縄文原体は R L である。

土製品(第 145 図-13)

13 は炉跡内覆土より出土した土製円板である。

第 42 号住居跡(第 43 図)

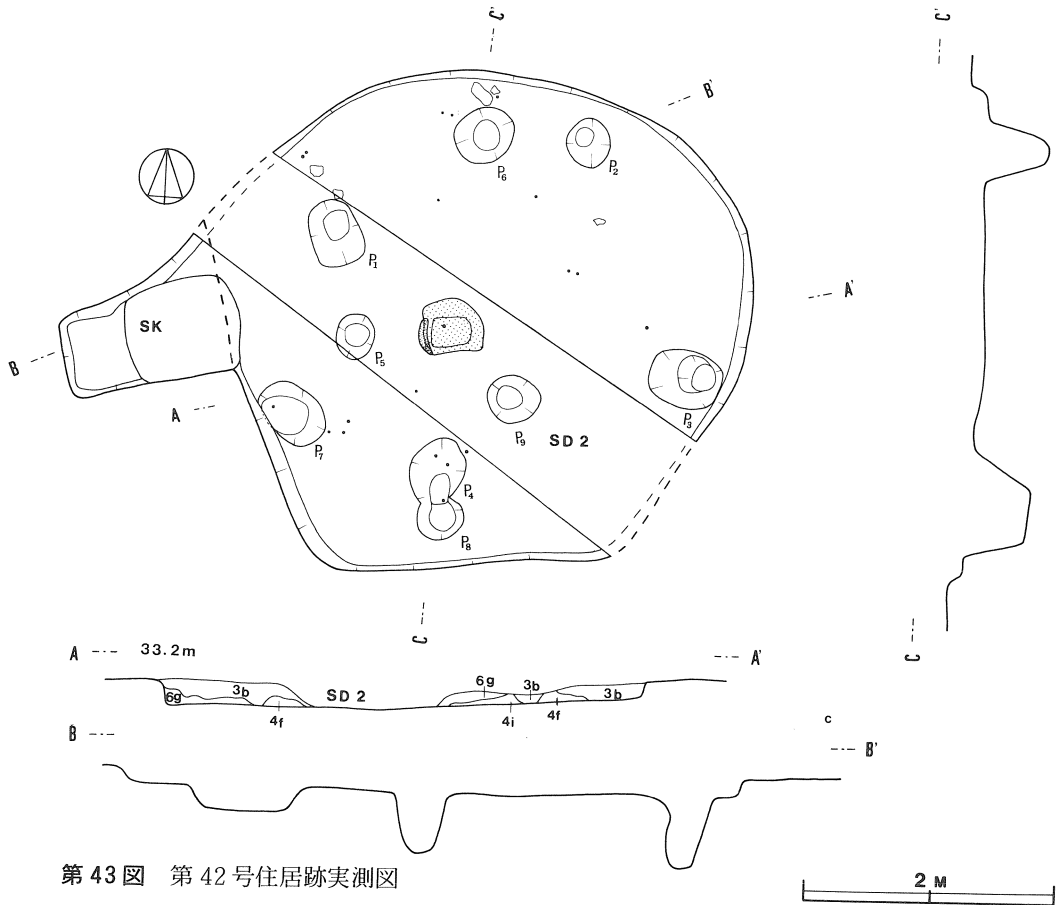
本跡は遺跡の東端 A 4 e<sub>2</sub> を中心に確認され、第 2 号溝によって中央部が南北に切られ、第 44 号住居跡の東 1 m に位置している。規模は長径 4.15 m・短径 3.95 m の円形状の平面形を呈し、主軸方向は N-77.5°-E である。壁高は 10~18 cm ほどで、やや外傾して立ちあがり、床はロームで、全体に柔らかく平坦である。炉跡は中央部に存在し、規模は長径 4.5 cm の不整形円形状を呈し、床を 10 cm ほど掘り込んだ地床炉である。また西側には花崗岩の石が埋められ、焼けてポロポロになっていた。ピットは 9 個確認され、支柱穴は炉を囲むように掘られている P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub> と考えられ、深さは 49~63 cm を測る。



第 42 図 第 42 号住居跡炉跡実測図

住居跡内覆土は第 2 号溝によって中央部が切られているが、おおむね自然堆積の状態が示され、

ローム粒子や砂粒等を含む黒褐色・暗褐色の土が堆積している。



第 43 図 第 42 号住居跡実測図

出土遺物

本跡からの出土遺物は縄文土器，及び石器を少量出土する。

縄文土器(第 44 図)

1 群 a (1~4) 微隆起線による区画文様を有するもの。

1~3 は口縁部の破片で，2・3 は微隆起線の側面をなぞりによって窪ませている。4 は胴部の破片で，微隆起線による平行状曲線文が描かれている。

1 群 b (5・6) 沈線による区画文様を有するもの。

5・6 は胴部の破片で，沈線による区画文様が描かれている。

1 群 c (7~9) 縄文の文様を有するもの。

7~9 は胴部の破片である。

10・11 は底部の破片である。

石器(第 142 図-3，第 143 図-4)

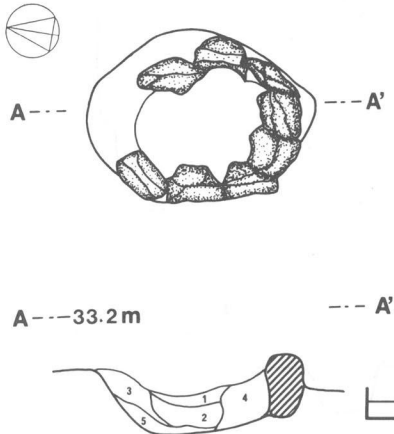
3は石皿の破片で、中央部が3mmほどなだらかに窪んでいる。石質は砂岩である。4は敲石で、中央部と側面に敲痕が認められる。石質は砂岩である。



第44図 第42号住居跡出土土器拓影図

第43号住居跡(第45図)

本跡はB3 doを中心に確認され、第211・212号土壙と重複し、第33号住居跡の北東10mに



第45図 第43号住居跡炉跡実測図

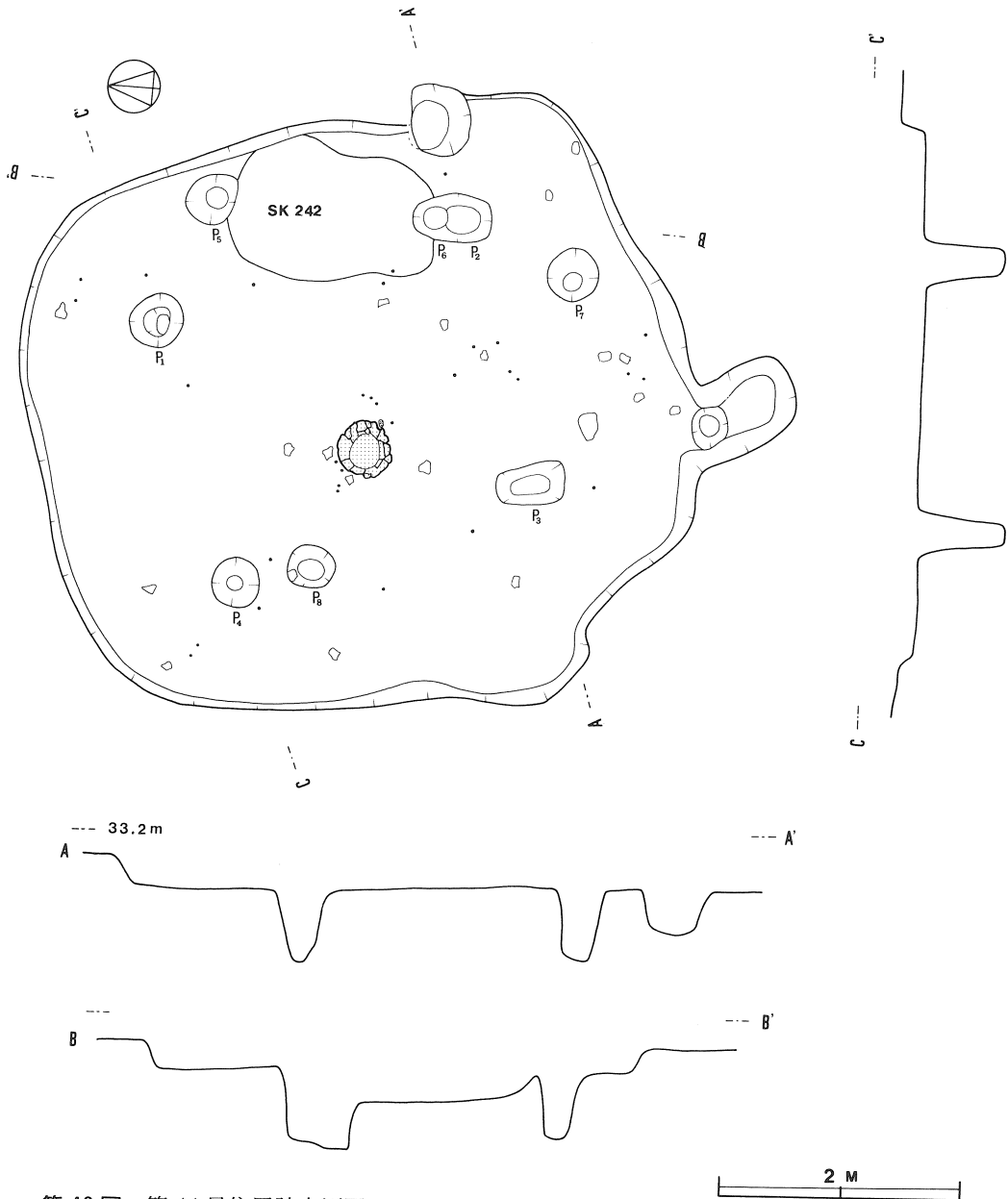
位置している。本跡は表土除去後の遺構確認調査中に炉跡のみ検出したもので、浅い住居跡であったために削平してしまったものと思われる。周辺のピットの調査を実施したが、多数の土壙が存在するためにピットの存在を確認することはできなかった。炉跡は8個の砂岩をならべて楕円形状に作った石囲い炉であり、第24号住居跡の炉と類似している。石の内側はやや焼けてはいるが、長い期間使用した炉とは考えられない。また、本跡の下

から第211・212号土壙が検出されているため、土壙の方が古い遺構である。

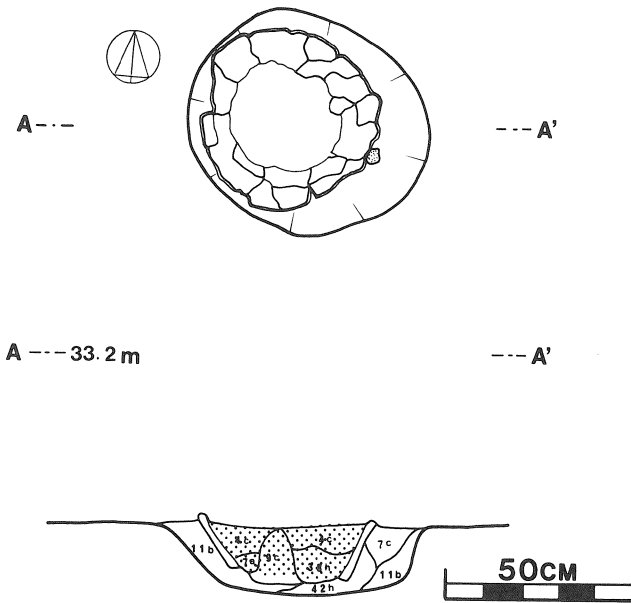
第44号住居跡(第46図)

本跡は遺跡の東側A4 e1を中心に確認され、第242号土壙と重複し、第42号住居跡の西1mに位置している。規模は長軸5.25m・短軸4.9mほどの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-19°-Wである。壁高は12~25cmほどで、外傾して立ちあがり、床はロームで、全体に踏み

固められた硬い床で、平坦である。特に炉跡周辺は硬く踏み固められた床面である。炉跡は中央部に在存し、深鉢形土器の口縁部(第48図-1)を、16cmほど床を掘り込んで埋設して作られている。内部覆土下層には暗赤褐色の焼土が充満し、また、土器の内部及び埋設土器外の覆土も焼けており、長い期間使用したと考えられる。ピットは7個確認され、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が支柱穴と考えられ、深さは65~75cmを測る。その他のピットも本跡に関係あるピットと思われる。



第46図 第44号住居跡実測図



第47図 第44号住居跡炉跡実測図

て区画している。

1群b(15~18) 沈線による区画文様を有するもの。

いずれも胴部の破片である。

1群c(1・20~25) 縄文の文様を有するもの。

1は本跡の炉跡として使用されていた深鉢形土器の口縁部で、RLによる施文が全体に施されている。21~25は胴部の破片である。

石器(第140図-6, 第142図-5)

6は磨製石斧の基部である。石質は硬質砂岩で両面を丁寧な磨いている。5は石皿と凹石を共有する石器で、石質は流紋岩である。

出土遺物

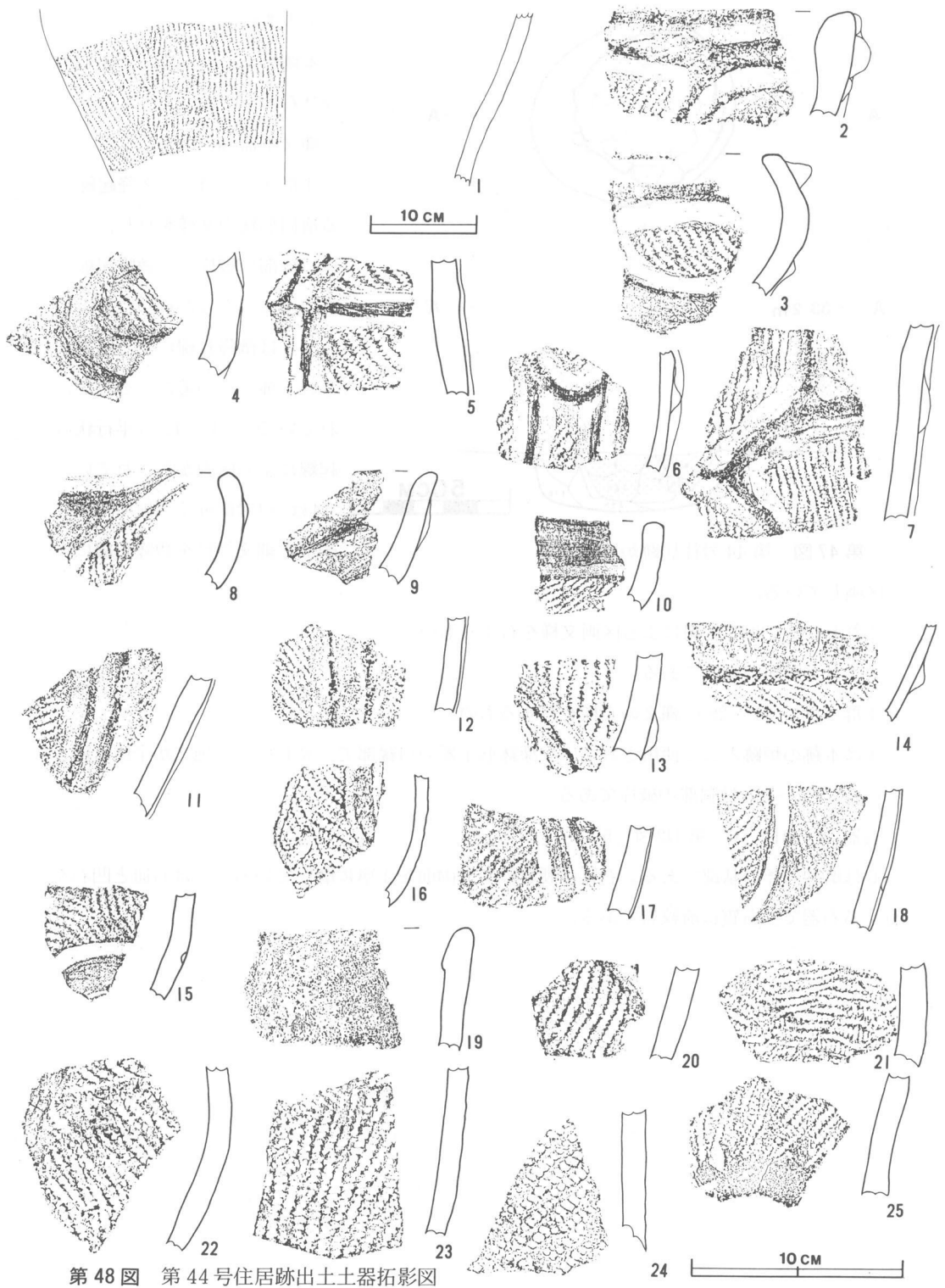
本跡からの出土遺物は縄文土器、及び石器を少量出土する。

縄文土器(第48図)

1群a(2~4) 微隆起線による楕円形状の文様を有し、2・3は口縁部の破片で、微隆起線と縄文の境になぞりが行われている。

5・7は微隆起線による区画がなされ、縄文との境になぞりが行われている。11~13は平行状微隆起線による区画がなされている。

14は、口縁部近くの破片で、無文帯部と縄文の境を微隆起線によ



第 48 图 第 44 号住居跡出土土器拓影图



縄文時代住居跡一覧表

番号	長軸方向	平面形	規模 (長径×短径)(m)	壁高 (cm)	壁溝	壁柱穴	炉	柱穴	備考
13	N-10°-W	楕円形	6.12 × 5.28	30~33	無	無	地床炉	有	
14	N-7°-E	円形	4.28 × 3.88	10~15	無	有	地床炉	有	
15	N-32°-W	円形	4.62 × 4.18	20~25	無	無	地床炉	有	
16	N-7°-W	楕円形	5.34 × 4.5	8~12	無	無	石組炉	有	
17	N-58°-W	隅丸方形	3.52 × 3.4	16	無	無	無	無	
18	N-4°-W	隅丸方形	5.88 × 5.68	20~38	有	無	石組炉	有	
19	N-3°-W	隅丸方形	(4.5) × 4.38	14~16	無	無	地床炉	有	
22	N-3°-W	隅丸長方形	(5.4) × 5.0	14~16	無	無	石組炉	有	
23	N-35°-W	隅丸方形	4.4 × (4.3)	8~11	無	無	地床炉	有	
24	N-40°-W	楕円形	(5.1) × 4.11	15	無	無	石組炉	有	
25	N-16°-E	円形	5.0 × 4.36	33	有	無	地床炉	有	
30	N-53°-W	楕円形	5.71 × 4.8	10~25	無	無	埋設炉	有	
33	N-28.5°-W	円形	4.7 × 3.65	30~33	無	無	地床炉	有	
36	N-60°-E	隅丸方形	4.8 × (4.65)	14	無	無	地床炉	有	
40	N-14°-W	楕円形	4.35 × 3.96	18~22	無	無	埋設炉	有	
41	N-61°-E	円形	4.15 × (4.1)	15	無	無	埋設炉	有	
42	N-77.5°-E	円形	4.15 × 3.95	10~18	無	無	地床炉	有	
43	不明						石囲い炉	不明	
44	N-19°-W	隅丸方形	5.25 × 4.9	12~25	無	無	埋設炉	有	

## (2) 土 壤

本遺跡において検出された土壌は261基にのぼり、遺跡の中央部から東側にかけて集中して検出され、遺跡調査区域内においては住居跡周辺に密集し、弧状に分布している。しかし、遺跡の南側(区域外)へ伸びていたことが十分考えられ、環状に広がっているのではないと思われる。

土壌の分類は下記の様な基準で行い、遺構の解説と共に一覧表で表わした。

### 土 壌 分 類

平 面 形	断 面 形
A — 円 形	a — 円 筒 状
B — 楕 円 形	b — 楕 鉢 状
C — 不整円形 — 不整楕円形 — 長楕円形 — 不 整 形	c — 袋 状  d — V 字 状

### 土 壌 一 覧 表

遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規 模		各 部 の 状 況	出 土 遺 物	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
1	C2as C2bs	N-2°-W	円 形	153×140	133	底面平坦で壁面は内傾して立ち上がり袋状を呈す。	縄文土器多量 1群 a・b・c 2群 b	称名寺	Ac	
2	B3js	N-46°-W	楕 円 形	115×98	23	底面は平坦で、壁面はやや内傾して立ち上がる。覆土は北からの自然流入である。			Bb	
3	B2gs	N-1°-E	楕 円 形	145×121	45	底面は浅い皿状を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。	縄文土器 1群 a・c	加IV	Bb	
4	B2hs B2hr	N-21°-E	楕 円 形	150×102	25	底面平坦で、壁面は直線的に外上方へ開く。	縄文土器 1群 a・b・c	加IV	Ba	
5	B2hr B2is B2ir	N-39°-E	不整長楕円形	241×110	A-62 B-30	2基の土壌の重複で、壁面は大きく外反して立ち上がる。覆土は自然堆積。	縄文土器少量 1群 a・b・c 2群 b	称名寺	Cb	
6	B2hr B2ir	N-81°-E	不整長楕円形	200×92	42	底面に2個のPitを有する底面は凸凹である。	縄文土器少量 1群 a・c 2群 b	称名寺	Ca	
7	B2hr B2hs B2ir	N-42°-E	不 整 楕 円 形	144×96	50	底面平坦、壁面は直線的に外上方へ開く。覆土南西側からの自然堆積。	縄文土器少量 1群 a・c	加IV	Ca	
8	B2jr	N-3°-E	楕 円 形	113×93	36	底面は浅い皿状。壁面は「U」字状に立ち上がる。レンズ状の自然堆積。	縄文土器微量 1群 c	加IV	Bb	
9	B2js	N-74°-E	不 整 楕 円 形	194×116	30	底面は平坦、壁面は内傾して立ち上がる。覆土下層には炭化材が含まれる。	縄文土器多量 1群 a・b・c	加IV	Ba	
10	B2is B2is	N-18°-W	不 整 楕 円 形	159×141	43	底面は平坦で壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器・土製品 1群 a・c	加IV	Ca	
11	B2js	N-11°-W	不整長楕円形	180×58	20	底面は平坦で、北側に小Pitを有する。	縄文土器少量 1群 a・c・e	加IV	Cb	

\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)

第5章 砂川遺跡

遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規模		各部の状況	出土遺物	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
12	B2i7	N-6°-W	不整楕円形	192×106	39	底面は平坦で2個のPitを有する。壁面はゆるやかに外上方へ立ち上がる。	縄文土器少量 1群b・c 2群b	称名寺	Cb	
13	B2i4 B2i5	N-58°-W	楕円形	163×140	65	底面は平坦で壁面は内彎して立ち上がり袋状を呈する。	縄文土器多量・土製品 1群a・b・c	加N	Bc	
14	B2h5 B2i5	N-3°-E	円形	110×109	79	底面は平坦で壁面は底面よりオーバーハングして立ち上がり、袋状を呈する。	縄文土器多量 1群a・c 2群b	称名寺	Ac	
15	B2g6 B2h6	N-7°-W	円形	180×171	65	底面は平坦で南側に小Pitを有する。壁面は西側で大きくオーバーハングして立ち上がる袋状を呈する。	縄文土器少量 1群a・c	加N	Ac	
16	B2h7 B2h8	N-15°-W	不整長楕円形	226×120	35	底面は北から南へやや傾斜し3個のPitを有する。壁面は直線的に外反して立ち上がる。	縄文土器少量・土製品 1群a・b・c・d	称名寺	Cb	
17	B2j6 B2j7	N-74°-W	楕円形	121×90	28	底面に平坦で壁面は平線的に立ち上がる。	縄文土器微量 1群c	加N	Bb	
18	B2i6	N-76°-E	不整長楕円形	151×78	56	2段の底面を有し断面形は「U」字状を呈する。	縄文土器微量 1群b	加N	Cb	
19	B2g5	N-63°-W	不整円形	179×155	15	底面は西側へ傾斜し、断面形は「U」字状である。	縄文土器少量・土製品 1群a・b・c	加N	Cb	
20A	B2h4	N-56°-E	楕円形	(150)×80	36	2基の土壌が重復し、Aの方が古い土壌である。A・B共に底面は平坦でBの壁面は内彎きみに立ち上がり、袋状を呈する。	縄文土器少量 1群a・b・c	加N	Bb	
20B	B2h4	N-60°-E	円形	120×100	64				Ac	
21	B2h4	N-56°-E	不整楕円形	156×131	71	底面は平坦で壁面は直線的にやや外反に立ち上がるが一部底面よりオーバーハングする部分もある。	縄文土器多量・土製品 1群a・b・c	加N	Ca	
22	B2h4	N-28°-W	不整楕円形	185×138	53	底面は2段掘り込みで、平坦である。壁面は直線的に外反して立ち上がる。			Cb	
23	B2h5 B2i5	N-47°-E	楕円形	84×65	20	底面は中央部がやや凹み皿状を呈す。断面形は「U」字状を示す。			Bb	
24	B2i5	N-87°-E	不整円形	128×120	38	底面は浅い皿状を呈し、壁面は外反して立ち上がる。	縄文土器少量 1群a・c	加N	Cb	
25	B2i7	N-29°-W	不整楕円形	131×90	66	底面は西から東へやや傾斜し、断面形は「U」字状を示す。			Cb	
26	B2i2 B2i3 B2j2 B2j3	N-30°-E	不整長楕円形	175×59	33	底面は凸凹であり壁面は直線的に外反して立ち上がる。			Cb	
27	B2i2 B2i3	N-53°-E	長楕円形	130×70	23	底面は凸凹であり、壁面は直線的に大きく外反して立ち上がる。			Cb	
28	B2h3	N-6°-E	楕円形	122×100	35	底面は皿状を呈し、断面形は「U」字状を示す。			Bb	
29	B2g3	N-55°-W	不整楕円形	140×125	42	底面は皿状を呈し、壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。	縄文土器多量 1群a・c 2群b	称名寺	Ca	
30	B2g3	N-55°-W	楕円形	140×115	52	底面は起伏が大きく西から東へ傾斜壁面はゆるやかに外反して立ち上がる。	縄文土器少量 1群a・b・c 2群b	称名寺	Bb	

\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)

遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規模		各部の状況	出土遺物	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
31	B2 <sub>h5</sub>	N-68°-W	楕円形	168 × 93	23	底面は平坦で壁面は垂直きみに立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a	加Ⅳ	Aa	
32	B2 <sub>g6</sub> B2 <sub>i6</sub>	N-72°-W	長楕円形	187 × 101	37	底面は皿状を呈し、断面形は「U」字状を呈す。			Cb	
33	B2 <sub>g6</sub> B2 <sub>h6</sub>	N-38°-W	楕円形	160 × 145	45	底面は平坦で壁面はゆるやかに外反して立ち上がる。	縄文土器・土製品 1群 a・b・c	加Ⅳ	Bb	
34	B2 <sub>g6</sub> B2 <sub>g7</sub>	N-31°-W	円形	120 × 115	35	底面は皿状を呈し、断面形は「U」字状を示す。	縄文土器少量 1群 a・c	加Ⅳ	Ab	
35	B2 <sub>j6</sub>	N-40°-E	不整楕円形	157 × 125	51	2基の土壌が重複し北側の土壌が南側の土壌によって切られている。いずれの土壌も壁面は直線的に立ち上がる。			Cb	
36A	B2 <sub>i6</sub> B2 <sub>j6</sub>	N-79°-W	楕円形	(150)×112	26	2基の土壌が重複、Bの土壌が新しく、また底面はA、B共に平坦である。	縄文土器少量 1群 a・c 2群 b	称名寺	Bb	
36B	B2 <sub>i6</sub> B2 <sub>j6</sub>	N-63°-W	円形	(112)×115	48				Ab	
37	B2 <sub>e8</sub> B2 <sub>f8</sub>	N-69°-W	不整楕円形	125 × 85	35	底面は平坦で、壁面はゆるやかに外反して立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・b・c	加Ⅳ	Cb	
38	B2 <sub>i8</sub>	N-61°-E	楕円形	181 × 110	30	底面は平坦で、西側壁下に30cmを測るPitを有する。壁面はゆるやかに大きく外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・b・c	加Ⅳ	Bb	
39	B2 <sub>h8</sub> B2 <sub>h9</sub>	N-12°-E	楕円形	143 × 118	50	底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。レンズ状の自然堆積	縄文土器多量 1群 a・c	加Ⅳ	Ba	
40	B2 <sub>h8</sub> B2 <sub>h9</sub>	N-80°-E	長楕円形	300 × 131	27	2基の土壌が重複し、西側の土壌が東側の土壌を切っている。底面はやや凸凹で、壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・b・c	加Ⅳ	Cb	
41	B2 <sub>i8</sub>	N-55°-E	楕円形	138 × 111	60	底面は東側から西側へ大きく傾斜している。	縄文土器少量 1群 b・c	加Ⅳ	Bb	
42	B2 <sub>i9</sub>	N-42°-W	不整楕円形	257 × 156	30	上層は非常に攪乱がはげしく全体のプランは不明、実際の土壌プランは中央部と思われる。	縄文土器少量 1群 a・b・c 2群 b	称名寺	Cb	
43	B2 <sub>j9</sub> B2 <sub>j0</sub>	N-23°-E	楕円形	133 × 170	43	底面は東側から西側へ傾斜し、壁面は西側でやや外反し東側で大きく外反して立ち上がる。	縄文土器少量 1群 a・b・c	加Ⅳ	Bb	
44	C2 <sub>a9</sub> C2 <sub>a0</sub> B3 <sub>i9</sub> B2 <sub>j0</sub>	N-8°-W	不整楕円形	192 × 152	38	2基の土壌が重複した土壌。底面はやや南西側へ傾斜し、壁面は直線的に立ち上がる。	縄文土器多量 1群 a・c	加Ⅳ	Cb	
45	B2 <sub>i9</sub>	N-24°-W	隅丸長方形	137 × 101	43	底面は南側へ傾斜し、平坦、断面形は「U」字状に立ち上がる。	縄文土器多量・石器 1群 a 2群 b	称名寺	Ca	
46	B2 <sub>e6</sub>	N-36°-W	楕円形	133 × 106	58	S1013重複し、本跡の方が古い遺構である。底面は平坦で、壁面はゆるやかに外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Ba	
47	B2 <sub>h7</sub> B2 <sub>h8</sub> B2 <sub>g9</sub>	N-34°-W	不整楕円形	156 × 117	37	底面はおおむね平坦で、壁面は垂直きみに立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Ca	
48	B2 <sub>f8</sub>	N-41°-W	楕円形	103 × 65	15	底面は皿状を呈し、壁面は大きく外反して立ち上がる。			Bb	
49	B2 <sub>f8</sub> B2 <sub>g8</sub>	N-41°-W	不整楕円形	279 × 197	61	底面は皿状を呈し、断面形は底面より中位まで「U」字状に立ち上がり中位で水平になった後ふたたび大きく外反して立ち上がる。			Ca	

\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)

第5章 砂川遺跡

遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規模		各部の状況	出土遺物	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
50	B2g <sup>4</sup> B2g <sup>5</sup>	N-43°-E	楕円形 (円形)	148×136	45	底面は平坦で、壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。	縄文土器・土製品 1群 a・b・c	加Ⅳ	Bb	
51	B2f <sup>9</sup>	N-39°-E	不整楕円形	160×115	29	底面は平坦で、壁面は南側でゆるやかに大きく開き北側で直線的に立ち上がる。			Cb	
52	B2d <sup>9</sup> B2e <sup>9</sup>	N-85°-E	楕円形	166×100	30	底面は平坦であるが壁面との境は明瞭ではない。壁面は大きく外上方へ立ち上がる。			Bb	
53	B2g <sup>8</sup> B2g <sup>9</sup> B2h <sup>8</sup> B2h <sup>9</sup>	N-47°-W	楕円形	141×105	53	S1015と重複し、本土壤の方が新しい遺構である。底面は平坦で壁面は直線的に大きく外反している。	縄文土器少量 1群 a	加Ⅳ	Bb	
54	B2d <sup>8</sup>	N-86°-E	不整長楕円形	225×119	43	底面は平坦で壁面は垂直に立ち上がる。覆土はレンズ状の自然の堆積。	縄文土器少量 1群 a・c	加Ⅳ	Ca	
55A	B2d <sup>7</sup>	N-28°-W	楕円形	122×106	61	2基の土壌が重複し、底面はいずれも平坦である。断面形は「U」字状を示す。	縄文土器微量・石器 1群 a・c	加Ⅳ	Ba	
55B	B2d <sup>7</sup>	N-89°-W	楕円形	64×47	50				Ba	
56	B2c <sup>7</sup>	N-85°-W	長楕円形	191×109	45	底面は平坦、壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器少量 1群 a・b・c 2群 b	称名寺	Ca	
57	B2d <sup>5</sup>	N-70°-W	楕円形	123×104	141	SK01と類似した深い土壌で、壁面は底面より大きくオーバーハングして立ち上がる。断面形は袋状を示す。			Bc	
58	C2a <sup>9</sup>	N-62°-W	円形	86×74	23	底面は中央部が凹み皿状を呈し壁面はやや外反して立ち上がる。			Ab	
59	C2a <sup>9</sup>	N-43°-W	楕円形	137×116	83	底面は平坦で、壁面は垂直きみに立ち上がる。断面形は円筒状を示す。			Ba	
60	C2a <sup>9</sup>	N-48°-W	円形	154×142	30	底面は平坦で、壁面は南側でゆるやかに北側で直線的に立ち上がる。	縄文土器少量 1群 a・c 2群 b	称名寺	Ab	
61	C2a <sup>9</sup> C2a <sup>0</sup>	N-29°-E	長楕円形	201×110	40	2基の土壌が重複し、底面は平坦で西側から東側へ傾斜する。壁面はゆるやかに立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Cb	
62	C2a <sup>0</sup> C2b <sup>0</sup>	N-74°-W	不整形	278×231	25	底面は平坦で北西側壁下に42cmほどのPitを有する。壁面はやや外反して立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Cb	
63	C2c <sup>8</sup> C2c <sup>9</sup>	N-1°-E	円形	129×113	49	底面は平坦で壁面は直線的に大きく外反して立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Aa	
64	C2b <sup>9</sup>	N-37°-W	楕円形	179×143	45	底面は平坦で、壁面は底面よりややオーバーハングして立ち上がる。断面形は袋状を示す。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Bc	
65	C2b <sup>0</sup> C3b <sup>1</sup>	N-22°-W	円形	128×115	53	底面は北側が浅く、南側で深い2段階掘り込みになり平坦である。壁面は直線的に立ち上がる。	縄文土器微量 1群 b・c	加Ⅳ	Ab	
66	C2c <sup>0</sup>	N-38°-E	楕円形	133×93	29	底面は北側から南側に傾斜し、平坦である。壁面は垂直に立ち上がる。			Ba	
67	C2b <sup>0</sup> C2c <sup>9</sup>	N-58°-W	円形	141×134	63	底面は平坦で、壁面は直線的に立ち上がる。	縄文土器多量 1群 a・c	加Ⅳ	Aa	
68	C2d <sup>8</sup> C2d <sup>9</sup>	N-62°-W	不整楕円形	177×136	43	底面は平坦で、4個のPitを有する。壁面は直線的にやや外反して立ち上がる。			Cb	

\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)

遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規模		各部の状況	出土遺物	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
69	C2c1	N-72°-W	円形	147×142	58	底面は中央部がやや凹む皿状を呈し、断面形は「U」字状を示す。	縄文土器微量 1群a	加N	Aa	
70	C3c1 C3d1	N-31°-W	楕円形	130×103	31	底面は平坦で、壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。			Ba	
71	C2e0 C2f0	N-29°-W	楕円形	148×109	31	底面に2個のPitを有し、平坦である。断面形は「U」字状を示す。			Ba	
72	C2e0	N-1°-W	楕円形	127×108	28	底面は平坦で、壁面は底面よりオーバーハングして立ち上がる。			Bc	
73	C2e9 C2e0 C2f9 C2f0	N-40°-W	楕円形	161×128	39	底面は西側から東側へ傾斜し、平坦である。壁面は直線的にやや外上方へ立ち上がる。			Bb	
74	C2e0 C3e1	N-81°-E	不整楕円形	134×89	17	底面は平坦であり、東側壁下にやや大きいPitを有す。壁面は垂直に立ち上がる。			Ca	
75	C2d0	N-30°-E	長楕円形	292×83	28	底面は起伏がはげしく、壁面は外反して立ち上がる。			Cb	
76	C3e1 C3f1	N-71°-E	長楕円形	132×77	19	底面は平坦であり、東側に大きなPitを有し、その他小Pitを有する。断面形は「U」字状を示す。			Cb	
77	C3d1 C3e1	N-54°-E	楕円形	146×128	57	底面は平坦であるが、壁面との境は明瞭でない。壁面は西側の一部でオーバーハングするが、その他は垂直に立ち上がる。	縄文土器少量 1群a・b	加N	Bc	
78	C3d2	N-56°-E	楕円形	89×57	24	底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。			Ba	
79	C3e0	N-55°-W	楕円形	109×89	34	底面は北側から南側へ傾斜し、平坦である。壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。			Bb	
80	C3e2 C3e3	N-89°-W	楕円形	130×65	27	底面平坦で、壁面は直線的に立ち上がる。			Bb	
81	B2e9 B2e0	N-23°-W	不整形	243×214	25	底面は全体的に平坦であるが、本土城と関係のないPitが数個検出。壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・c 2群b	称名寺	Cb	
82	B2f0	N-83°-W	楕円形	116×86	25	底面は平坦であり、中央部に小Pitを有する。壁面はゆるやかに立ち上がる。			Bb	
83	B3f1	N-2°-E	円形	109×103	120	底面はほぼ平坦であるが、壁面は底面より直線的に斜めに立ち上がる。			Aa	
84	B3f1	N-45°-W	不整形	91×74	43	底面は凸凹であり、壁面はゆるやかに外上方へ立ち上がる。			Cb	
85	B2f0 B3f1	N-52°-E	不整楕円形	109×95	11	底面は平坦で、壁面はゆるやかにやや大きく外反して立ち上がる。			Cb	
86	B2h0	N-33°-W	円形	117×101	45	底面は平坦で、壁面は直線的にやや外上方へ立ち上がる。			Ab	
87	B2h0	N-39°-W	楕円形	136×86	47	底面は西側から東側へ傾斜し、全体に凸凹である。壁面は直線的に立ち上がる。			Ba	
88	B2h0	N-87°-W	楕円形	167×104	21	底面は全体に凸凹であり、西側と東側にPitを有する。壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。			Bb	

\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)

第5章 砂川遺跡

遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規模		各部の状況	出土遺物	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
89	B3i0	N-78°-W	円形	141×131	41	底面は南側から北側へやや傾斜し、平坦である。壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。	縄文土器少量・土製品 1群 a・b・c	加Ⅳ	Ab	
90A	B3i1 B3hi	N-42°-W	不整楕円形	250×118	14	底面は凸凹であり、壁はゆるやかに立ち上がる。	縄文土器少量・土製品 1群 a・c	加Ⅳ	Ca	
90B	B3i1 B3hi	N-74°-E	円形	120×125	41	底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。			Aa	
90C	B3i1 B3hi	N-79°-W	不整円形	112×108	30	底面やや凸凹、壁面は垂直に立ち上がる。			Ca	
91A	B2h1 B2h2 B2i1 B2i2	N-19°-E	不整楕円形	85×( )	10	底面が平坦で、壁面大きく外反して立ち上がる。			Cb	
91B	B2h1 B2h2 B2i1 B2i2	N-41°-W	不整楕円形	63×71	18	底面平坦で壁面ゆるやかに立ち上がる。			Cb	
91C	B2h1 B2h2 B2i1 B2i2	N-18°-E	不整楕円形	82×70	28	底面平坦で、断面形は「U」字状を示す。			Cb	
92	B3i1 B3i2	N-86°-W	不整楕円形	177×132	60	底面は平坦で、壁面は底面より垂直に立ち上がり、中位で段を有した後、ふたたび立ち上がる。	縄文土器 1群 a・c 2群 b		Ca	
93	B2i0	N-0°	楕円形	130×104	30	底面は平坦で、北側壁下にPitを有す。断面形は「U」字状を示す。	縄文土器微量 1群 b・c	称名寺	Bb	
94	B2j0 B2j0	N-29°-E	不整楕円形	140×101	20	底面は平坦で、北西、南東壁下に深いPitを有する。壁面は直線的に立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a	加Ⅳ	Cb	
95	B2i0 B2j1	N-86°-W	不整楕円形	127×109	17	底面は東側から西側へ傾斜し、平坦である。壁面は直線的に立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Ca	
96	B3j7	N-12°-W	楕円形	199×(150)	40	住居跡と重複しているため、平面プラン不明、本土壌の方が古い遺構である。底面は平坦壁面は直線的にやや外上方に立ち上がる。	縄文土器 1群 a・b・c	加Ⅳ	Bb	
97	B3f1	N-2°-W	長楕円形	167×71	15	底面はやや凸凹であり、壁面はゆるやかに立ち上がる。			Ca	
98	B3f1 B3f2	N-88°-W	円形	133×131	60	底面はやや凸凹で、壁面はやや外反して立ち上がる。			Ab	
99	B3f2	N-43°-W	楕円形	178×145	40	底面は東側から西側へ傾斜し、壁面はゆるやかに立ち上がる。			Bb	
100	B2d0	N-85°-W	楕円形	148×131	61	底面は皿状を呈し、壁面との境は明瞭でない。断面形は「U」字状を示す。			Bb	
101	B2g0	N-73°-E	楕円形	56×31	15	底面は一部凸凹な部分もあるが、おおむね平坦である。壁面はやや外反して立ち上がる。			Bb	
102	B3i2	N-39°-E	不整楕円形	170×117	28	SK92と重複し、本土壌が古い。底面は平坦で壁面はやや内彎して立ち上がる。	縄文土器少量 1群 a・c	加Ⅳ	Cb	
103	C3d1 C3d2	N-68°-E	楕円形	142×120	7	浅い土壌で底面には半径60cm、深さ51cmのPitを有す。壁面はやや外傾して立ち上がる。			Bb	
104A	C2a0 C3a1	N-32°-W	楕円形	117×90	15	2基の土壌が重複し、Aの土壌が古い。底面は共に平坦で壁面は垂直きみに立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・b	加Ⅳ	Bb	

\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)

遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規模		各部の状況	出土遺物	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
104B	C2a0 C3a1	N-63°-E	楕円形	53×48	20				Bb	
105	C3a4 C3b1 C3b2	N-70°-W	円形	158×150	158	底面は平坦であり、壁面は底面よりオーバーハングした後、外反して立ち上がる。	縄文土器多量 1群a・b	加Ⅳ	Ac	
106	B3i2	N-61°-W	楕円形	122×109	23	底面は平坦であり、壁面は垂直きみに立ち上がる。	縄文土器少量 1群a・c	加Ⅳ	Bb	
107	B3j2 B3j3	N-64°-W	楕円形	158×132	72	住居跡と重複し、本土壌の方が新しい。底面は平坦で、壁面は底面よりオーバーハングして立ち上がる。断面形は袋状を呈す。	縄文土器多量 1群a・b・c 2群b	称名寺	Bb	
108	B3d2	N-25°-W	円形	143×135	53	底面は中央部がやや凹む。壁面断面形は「U」字状を呈す。	縄文土器微量 1群a・c	加Ⅳ	Ab	
109	B3c2	N-76°-W	長楕円形	221×122	34	底面は北から南へやや傾斜し、壁面は大きく外反して立ち上がる。	縄文土器少量・土製品 1群a・c	加Ⅳ	Cb	
110A	B3c2	N-15°-E	円形	150×(150)	42	2基の土壌が重複し、Bの土壌が新しい。底面は平坦で、壁面は内彎きみに立ち上がる。	縄文土器多量・石器 1群a・b・c・e	加Ⅳ	Ab	
110B	B3c2	N-20°-E	円形	115×(99.5)	42				Ab	
111	B3c3	N-31°-E	楕円形	136×97	24	底面は皿状を呈し、壁面はゆるやかに外反して立ち上がる。			Bb	
112	B3c3	N-33°-W	楕円形	84×71	23	底面は平坦で、断面形は「U」字状を呈す。			Ba	
113	B3d3	N-49°-W	楕円形	146×126	53	底面は平坦で、壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。			Ba	
114	B3d4 B3e3	N-31°-W	楕円形	218×168	62	底面は平坦で、壁面はゆるやかに大きく外反して立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・b・c	加Ⅳ	Bb	
115	B3c5	N-47°-E	円形	114×112	223	断面形は「V」字状を呈し、本遺跡の土壌の中では異質の土壌である。			Ad	
116	B3d2 B3e2	N-53°-W	楕円形	116×77	31	底面は東から西へ傾斜し、平坦である。壁面は北西側で大きく外反して立ち上がる。			Bb	
117	B3i3 B3i4	N-42°-W	不整形	237×199	28	底面は平坦で、西側に深さ40cmのPitを2個有す。壁面はなだらかに外反して立ち上がる。	縄文土器少量 1群a・c 2群b	称名寺	Cb	
118	B3i4	N-28°-W	楕円形	116×90	40	底面は平坦、壁面は北西側で大きく外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群b・c	加Ⅳ	Bb	
119	A3f0	N-86°-E	楕円形	138×112	77	底面は平坦で壁面は北側上部でやや外反するがその他の壁面は直線的に立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・c	加Ⅳ	Ba	
120	B3i5	N-80°-W	楕円形	138×100	42	底面は東から西へ傾斜する。壁面は東側で大きく外反し、その他は直線的に外上方へ立ち上がる。			Bb	
121	B3i5	N-65°-W	楕円形	114×69	36	底面は西から東へやや傾斜し、壁面は西側でゆるやかに、東側で大きく外反して立ち上がる。			Bb	
122	B3h5 B3i5 B3i6	N-88°-W	円形	146×137	43	底面は平坦で、壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群a	加Ⅳ	Ab	

\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)



第5章 砂川遺跡

遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規模		各部の状況	出土遺物	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
123	B3h4	N-5°-E	不整形円形	110×108	19	底面は平坦である。壁面はゆるやかに内彎して立ち上がる。			Cb	
124	B3g4 B3g5	N-20°-E	円形	95×89	15	底面は平坦であるが、壁面との境は明瞭でなく、断面形は皿状を呈す。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Aa	
125	B3g3 B3g4	N-86°-E	円形	133×123	56	底面は中央部がやや凹むが、おおむね平坦である。壁面は垂直に立ち上がり、断面形は円筒状を呈す。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Aa	
126	B3h5	N-86°-W	不整形円形	83×62		底面は平坦であるが、東西壁下にPitを有す。壁面は外上方へ立ち上がる。			Cb	
127	B3h5	N-53°-W	不整形	103×75	38	底面は南側が浅く、北側はやや深くなる。壁面はゆるやかに外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群 c	加Ⅳ	Cb	
128	B3b1 B3c1	N-43°-W	楕円形	132×119	42	底面は平坦である。壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群 c	加Ⅳ	Ba	
129	B3h7	N-25°-E	楕円形	155×140	41	底面は平坦である。壁面は直線的にやや外上方へ立ち上がる。			Bb	
130A	B3g7	N-63°-W	円形	131×(120)	28	底面は平坦で、壁面はゆるやかに外上方へ立ち上がる。			Ab	
130B	B3g7	N-22.5°-W	円形	70×(79)	65	底面は中央部が凹み、断面形は「U」字状を呈す。			Aa	
131	B3g8	N-78°-W	円形	89×86	19	2基の土壌が重複した土壌と思われる。底面は平坦、底面と壁面との境は明瞭でなく、ゆるやかに内彎しながら立ち上がる。	縄文土器微量 1群 b	加Ⅳ	Aa	
132	B3g8	N-66°-W	円形	114×103	18	浅い土壌で、底面は平坦である。壁面はゆるやかに外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Ab	
133	B3f8 B3g8	N-59°-W	円形	70×64	59	底面は中央部がやや凹み、壁面は垂直に立ち上がり、断面形は円筒形を呈す。			Aa	
134	B3f7	N-1°-E	不整形楕円形	173×80	20	底面は平坦で、中央部に直径60cmのPitを有する。壁面はやや外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群 b・c	加Ⅳ	Ca	
135	B3f7 B3f8	N-15°-E	不整形円形	117×108	20	底面は凸凹である。壁面はゆるやかに外上方へ立ち上がる。			Cb	
136	B3f7 B3g7	N-5°-E	不整形楕円形	155×95	39	底面は平坦で、壁面は垂直きみに立ち上がる。また南側に50×45cm、深さ60cmのPitを有する。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Ca	
137	B3f7	N-21°-E	楕円形	98×83	62	南側でSK138号と重複し、本土壌の方が新しい。底面は中央部がやや凹み、壁面はゆるやかに大きく外反して立ち上がる。			Bb	
138	B3f7	N-87°-W	不整形楕円形	117×88	87	底面は南から北へやや傾斜し、壁面は西側を除いてやや外上方へ立ち上がる。			Cb	
139	B3f8	N-41°-W	不整形楕円形	115×95	28	底面はやや凸凹である。壁面は外上方へ立ち上がる。			Cb	
140	B3e8	N-0°	円形	100×92	18	底面は平坦で、壁面は外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群 c	加Ⅳ	Ab	
141	B3f9	N-59°-W	円形	128×120	51	底面は南側で1段低くなり平坦である。壁面は直線的にやや外上方へ立ち上がる。	縄文土器少量・石器 1群 a・c	加Ⅳ	Ab	

\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)

遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規模		各部の状況	出土遺物	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
142	B3f8	N-2°-W	円形	152×149	42	底面は中央部がやや凹み、壁面は連続的に外上方へ立ち上がる。北側からの自然堆積。	縄文土器多量 1群a 2群b		称名寺	Aa
143	B3f8	N-87°-W	円形	112×104	38	底面は平坦で、壁面は南側でやや内彎きみに、その他はやや外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・c		加N	Aa
144	B3e8 B3e9	N-80°-W	円形	112×117	57	底面は北側が一段低くなり、平坦である。壁面は垂直きみに立ち上がり、中位より外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群b 2群b		称名寺	Ab
145	B3a6	N-57°-W	不整形円形	107×104	125	断面形は円錐形を呈し、本遺跡の中では異質の土壌である。落し穴状遺構か。				Ad
146	B3a7	N-31°-E	楕円形	159×104	20	底面は中央部がやや凹み皿状となし、また中央部には30×28cm・深さ28cmのPitを有する。壁面は外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・c		加N	Bb
147	B3a8	N-84°-W	円形	115×104	47	底面は平坦で壁面は西側でやや内彎きみに立ち上がる。	縄文土器少量 1群a・c		加N	Ab
148	B3a0 B3b0	N-27°-E	不整形円形	436×350	130	壁面は平坦な底面より東側で40cmほど垂直に、西側で65cmほどやや外反した後、大きく外反して立ち上がる。覆土中に褐色のロームがベルト状に堆積。	縄文土器多量 1群a・b・c 2群b		称名寺	Cb
149	B3a9 B3b9 B3b0	N-52°-W	不整形	205×135	38	底面は西から東へ傾斜し、東側の底面は皿状を呈す。壁面はゆるやかに外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・c		加N	Cb
150	B3j4	N-60°-W	不整形	128×85	20	底面は西側へやや傾斜し、平坦である。東側壁下に65×50cm、深さ15cmのPitを有す。	縄文土器微量 1群a・c		加N	Cb
151	B3j4 C3a4	N-2°-E	不整形	142×92	40	底面は凸凹であり、壁面はやや外反しながら立ち上がる。S130と重複し、本土壌の方が新しい。	縄文土器少量 1群a・b・c		加N	Cb
152	B3d5 B3d6	N-12°-W	円形	155×140	141	底面は東から西へやや傾斜し、壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・c		加N	Ab
153	C3b4	N-68°-W	円形	152×151	71	底面は平坦であり、壁面は北東側はゆるやかに大きく外反、南西側は直線的に立ち上がる。	縄文土器多量 1群a		加N	Ab
154	C3c4 C3e5 C3d5	N-26°-W	円形	121×111	43	底面は皿状を呈し、壁面はゆるやかに外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・c 2群b		称名寺	Ab
155	C3c5 C3c6 C3b5 C3b6	N-47°-E	不整形円形	253×226	54	底面は南から北へ傾斜し、壁面はやや外反して立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・b・c		加N	Cb
156	B3b0 B3b1	N-62°-E	長楕円形	249×123	73	壁面は大きく外上方へ立ち上がり、断面形は摺鉢状を呈する。				Cb
157	B3c0 B4c1 B3d0 B4d1	N-50°-E	円形	155×141	70	底面は平坦で、壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・c		加N	Aa
158	B4c2 B4b1 B4b2	N-4°-E	楕円形	405×300	123	底面は全体に凸凹であり、断面形は摺鉢状を呈する。覆土層に褐色のロームがベルト状に堆積。	縄文土器少量 1群a・c		加N	Bb
159	B3b8 B3b9	N-74°-W	楕円形	145×80	40	底面は浅い皿状を呈し、壁面はゆるやかに外上方へ立ち上がる。	縄文土器多量・土製品 1群a・b・c 2群b		称名寺	Bb
160	A3i8 A3i9	N-45°-E	楕円形	215×195	69	底面は平坦で、壁面はゆるやかに外上方へ立ち上がる。	縄文土器少量・石器・土製品 1群a・b・c		加N	Ba
161	A3j2 A3j3	N-50°-E	不整形楕円形	266×185	67	底面は全体に凸凹したもので、壁面はやや外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・c		加N	Cb

\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)

第5章 砂川遺跡

遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規模		各部の状況	出土遺物	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
162	A3j3 A3j4 B3j3 B3j4	N-7°-E	長楕円形	160 × 85	66	底面は平坦であり、北側より50×64cm、深さ25cmのPitを確認する。			Cb	
163	B4a2 B4a3	N-55°-W	円形	122 × 113	60	底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器少量・石器 1群a	加Ⅳ	Aa	
164	B2a8 B2a9	N-64°-W	円形	117 × 104	62	底面は中央部がやや凹皿状を呈し、壁面は直線的にやや外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・c	加Ⅳ	Aa	
165	B2b8 B2b9	N-29°-E	不整形円形	139 × 122	38	底面は平坦で、壁面は外反して立ち上がる。	縄文土器微量 1群a	加Ⅳ	Cb	
166A	B2b7 B2b8	N-33°-E	隅丸方形	111 × 110	24	2基の土壌が重複し、Bの方が新しい土壌である。壁面は垂直に立ち上がる。			Ca	
166B	B2b7 B2b8	N-39°-E	不整形	95×( )	18				Ca	
167	B2c8	N-69°-W	楕円形	165 × 130	28	底面は平坦であるが、壁面との境は明瞭でなく連続して大きく立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・c	加Ⅳ	Bb	
168	B2c7 B2c8	N-19°-W	長楕円形	241 × 114	29	底面は北から南へやや傾斜し、壁面は直線的に大きく外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量・石器 1群a・c	加Ⅳ	Cb	
169	B2a0 B3a1	N-1°-E	円形	226 × 206	30	底面には70×63cm、深さ42cmのPitを有し、底面は壁よりPitへ向って傾斜している。	縄文土器微量・土製品 1群a・c	加Ⅳ	Ab	
170	A2g9 A2g0	N-36°-W	円形	121 × 113	58	底面は平坦で、壁面は北側で大きく外反した後、垂直に立ち上がる。			Ab	
171	B2a0	N-42°-E	楕円形	161 × 134	80	底面は平坦であるが、壁面との境は明瞭でなく、壁面はやや内彎して立ち上がる。			Ba	
172	B2c0	N-60°-E	不整形円形	165 × 150	18	底面はやや凸凹しており、壁面はやや外反して立ち上がる。	縄文土器微量 1群c	加Ⅳ	Cb	
173	B2c0 B2d0	N-44°-E	長楕円形	182 × 105	37	底面は平坦で、壁面は南側はやや外反し、北側はゆるやかに立ち上がる。	縄文土器微量・石器 1群a・c	加Ⅳ	Cb	
174	B2c9 B2c0	N-75°-W	楕円形	193 × 119	30	底面は中央部がやや凹み、壁面は東側で大きく外反し、その他は垂直に立ち上がる。			Ba	
175	B2b8	N-53°-W	楕円形	137 × 110	30	底面は全体に凸凹であり、壁面は外上方へ立ち上がる。	縄文土器少量・石器 1群a・c	加Ⅳ	Bb	
176	B2b8 B2b9	N-66°-W	長楕円形	197 × 112	24	底面は中央部がやや高いがおおむね平坦である。壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器少量・石器 1群a・c	加Ⅳ	Ca	
177A	B3b7	N-0°	楕円形	123 × 95	78	2基の土壌が重複し、Aは底面平坦Bは南側Pitへ向って傾斜している。また壁下には3個のPitを有する。			Bb	
177B	B3b7	N-26°-E	不整形	195 × 155	30				Cb	
178	A3j3 B3a3	N-21°-E	楕円形	99 × 70	22	底面には2個のPitを有し、いずれも深さ12cmと浅い。	縄文土器微量 1群a・c	加Ⅳ	Bb	
179	B3a3	N-60°-E	円形	119 × 106	29	底面は壁から中央に向かってやや傾斜し、壁面は南側で垂直その他は内彎しながら立ち上がる。	縄文土器微量 1群b	加Ⅳ	Aa	

\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)

遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規模		各部の状況	出土遺物	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
180	A3i2 A3i3 A3j2 A3j3	N-49°-W	不整形	161×151	54	底面は全体に凸凹である。壁面は内彎ぎみに立ち上がる。			Cb	
181	A3i1	N-74°-W	円形	222×210	81	断面形は摺鉢状を呈す。	縄文土器少量 1群 a・c	加Ⅳ	Ab	
182	B2a7	N-42°-E	不整形	110×94	37	底面は全体に凸凹し断面形は摺鉢状を呈す。	縄文土器微量 1群 c 2群 b		称名寺	Cb
183	A3j4 A3j5	N-0°	楕円形	123×103	35	底面は平坦で、壁面は外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a	加Ⅳ	Bb	
184	A3j4 A3j5	N-53°-W	隅丸長方形	145×95	19	底面は中央部がやや高い。壁面は直線的に大きく外上方へ立ち上がる。			Cb	
185A	B3a4 B3a5	N-69°-W	楕円形	166×(103)	29	2基の土壌が重複した土壌で、A・B共に底面は平坦である。壁面Aは内彎ぎみに、Bは直線的に大きく外上方へ立ち上がる。			Bb	
185B	B3a4 B3a5	N-47°-E	円形	55×50	50				Ab	
186	A3j5	N-40°-E	円形	114×105	45	底面皿状を呈し、壁面はやや内彎しながら立ち上がる。	縄文土器少量 1群 a・c	加Ⅳ	Ab	
187	A3j5 A3j6	N-5°-W	不整形	74×68	73	底面は平坦で壁面は北側で2段に立ち上がり、その他は直線的に立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・b・c	加Ⅳ	Cb	
188	B3a5 B3a6	N-57°-E	楕円形	123×85	24	底面は平坦、壁面は南側でゆるやかに、北側でやや外反して立ち上がる。			Bb	
189	B3b5	N-62°-E	楕円形	134×107	65	底面は浅い皿状を呈し、壁面は北側で直線的に外上方へ、南側で段状になって立ち上がる。			Bb	
190A	B3b5	N-34.5°-E	楕円形	82×72	45	2基の土壌が重複し、Bの土壌が新しい。底面は西から東へ傾斜し、内彎しながら立ち上がる。底面は中央部が凹み垂直に立ち上がる。			Bb	
190B	B3b5	N-63°-W	楕円形	82×(73)	83				Ba	
191	B3e5	N-81°-E	楕円形	95×71	161	底面は平坦で壁面は底面より15cmほどオーバーハングして1m立ち上がった後、やや外反して立ち上がる。断面形は袋状を呈する。	縄文土器微量 1群 c	加Ⅳ	Bc	
192	B3e6	N-72°-W	円形	102×99	24	底面は浅い皿状を呈し、壁面はゆるやかに立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Ab	
193	B3e6	N-0°	円形	116×111	30	SK194と重複し、本土壌の方が古い土壌である。底面は平坦で、壁面はゆるやかに外上方へ立ち上がる。			Aa	
194	B3e6	N-88°-W	楕円形	103×94	21	底面は東から西へ傾斜し、壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器微量・土製品 1群 a・b・c	加Ⅳ	Ba	
195A	B3e6	N-73°-W	円形	90×(90)	29	2基の土壌が重複、Aの底面は北から南へ傾斜し、ゆるやかに立ち上がる。Bの底面は中央部が凹む。壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・b・c	加Ⅳ	Ab	
195B	B3e6	N-76°-W	円形	122×123	58					Ab
196A	B3d5 B3e5	N-82°-W	楕円形	194×180	21	底面は皿状を呈し、壁面は直線的に外上方へ立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Bb	

\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)

第5章 砂川遺跡

遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規模		各部の状況	出土遺物	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
196B	B3ds B3es	N-1°-W	円形	193×125	24	底面は平坦で壁面は垂直に立ち上がる。			Aa	
197	B3ds B3ds	N-81.5°-E	楕円形	130×112	49	底面は平坦で壁面は垂直に立ち上がる。			Ba	
198	B3ds B3ds	N-42°-E	円形	129×113	26	底面は平坦で壁面は直線的にやや外上方へ立ち上がる。	縄文土器少量 1群 a・b・c	加Ⅳ	Ab	
199	B3ds	N-26°-E	円形	123×112	45	底面は平坦で壁面との境は明瞭でなく連続的に立ち上がる。			Ab	
200	B3ds B3es B3es	N-1°-E	不整形円形	153×134	64	底面は西から北側にかけてやや深い。壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・b・c	加Ⅳ	Ca	
201	B3ds B3ds	N-33°-W	楕円形	104×92	17	底面は中央部がやや凹む皿状を呈し壁面はゆるやかに外側に立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a	加Ⅳ	Bb	
202	B3es B3es	N-54°-W	円形	155×140	35	底面は平坦で東側壁下に58×45cm深さ37cmのPitを有する。壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器微量 1群 b・c	加Ⅳ	Aa	
203	B3ds B3ds	N-74°-E	楕円形	118×90	38	底面は平坦で壁下に30×25cm、深さ26cmのPitを有する。壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器少量 1群 a・c	加Ⅳ	Ba	
204	B3f7	N-51°-W	楕円形	80×65	38	底面は平坦で、壁面は直線的に外傾して立ち上がる。			Bb	
205	B3ds	N-24°-E	円形	138×137	67	底面は平坦で南側に50×42cm深さ19cmのPitを有する。壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器少量 1群 a	加Ⅳ	Aa	
206A	B3c9	N-0°	円形	95×(95)	18	底面は平坦で壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器・土製品 1群 a・b・c	加Ⅳ	Aa	
206B	B3c9	N-88°-W	楕円形	150×105	35	底面は皿状を呈し、壁面はゆるやかに外傾する。			Bb	
207	B3c9	N-6°-W	不整形円形	123×112	75	底面は平坦で壁面は垂直に立ち上がり、断面形は円筒状を呈す。	縄文土器多量 1群 a・b	加Ⅳ	Ca	
208	B3c9 B3ds	N-37°-W	円形	124×114	50	底面は北東側へやや傾斜し、壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Aa	
209A	B3ds	N-72°-W	楕円形	154×(135)	55	底面はいずれも平坦であり、壁面はやや外傾して立ち上がる。	縄文土器少量 1群 a・b・e	加Ⅳ	Ba	
209B	B3ds	N-77°-W	不整形楕円形	132×(110)	52				Ca	
210	B3c9	N-39°-W	楕円形	137×116	27	底面は平坦で壁面は直線的に外傾して立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Bb	
211	B3c9 B3ds	N-86°-E	楕円形	178×148	46	底面は平坦で外反して立ち上がる。	縄文土器多量 1群 a・b	加Ⅳ	Bb	
212	B3ds	N-85°-W	円形	126×123	61	底面は南から北へやや傾斜し、壁面は底面よりややオーバーハングして立ち上がる。	縄文土器多量 1群 a・b・c	加Ⅳ	Aa	
213	B3c9	N-3°-W	楕円形	121×97	90	底面は平坦で壁面はゆるやかに外傾して立ち上がる。また覆土層に多量の焼土が堆積していた。	縄文土器微量 1群 a	加Ⅳ	Ba	

\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)

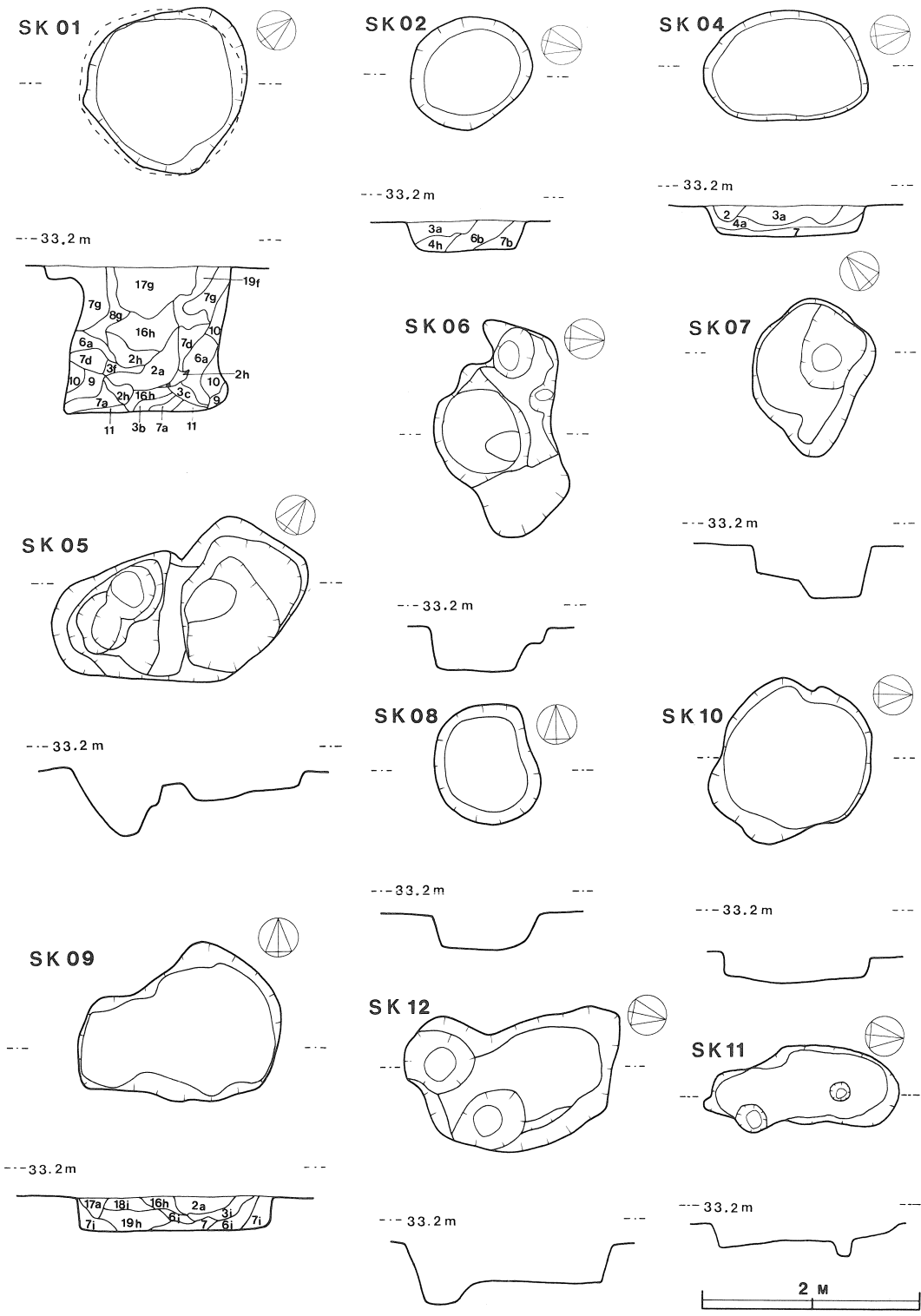
遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規模		各部の状況	出土遺構	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
214	B3c6	N-81°-E	円形	123 × 120	48	底面は東から西へ傾斜し、壁面はゆるやかに立ち上がる。	縄文土器多量 1群 a・b	加Ⅳ	Aa	
215A	B3c7 B3dr	N-1°-W	楕円形	139 × 115	32	2基の土壌が重複し、Bの土壌が新しい。底面はやや傾斜するがおおむね平坦である。壁面は大きく外傾して立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Bb	
215B	B3c7 B3dr	N-10°-W	楕円形	148 × 107	44				Bb	
216	B3c6	N-73°-E	不整楕円形	143 × 91	33	底面は凸凹であり、両側に60×42cm深さ39cmのPitを有する。壁面はやや外反して立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・e	加Ⅳ	Cb	
217	A3j6	N-38.5°-E	楕円形	183 × 134	33	底面は中央部がやや凹み、壁面は内彎ぎみに立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・b・c・e	加Ⅳ	Bb	
218	B3c7	N-19°-E	楕円形	101 × 79	82	底面はやや東側へ傾斜し、壁面は大きく外反して立ち上がる。			Bb	
219	B3br	N-40.5°-W	楕円形	146 × 127	27	底面は浅い皿状を呈し、壁面は連続的に大きく外反して立ち上がる。	縄文土器多量 1群 a・c	加Ⅳ	Bb	
220A	B3i4 B3i5	N-66°-W	不整楕円形	140 × 80	63	2基の土壌が重複し、いずれの土壌も底面が平坦で、壁面は直線的に外傾して立ち上がる。			Bb	
220B	B3i4 B3i5	N-60°-W	不整楕円形	75 × 70	50				Ab	
221	A3i6 A3i7	N-30°-E	円形	168 × 164	55	底面は平坦で壁面は直線的に外傾して立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a	加Ⅳ	Aa	
222	A3j6 A3j7	N-14.5°-W	円形	138 × 117	31	底面は皿状を呈し、壁面はゆるやかに外反して立ち上がる。	縄文土器少量 1群 a・b	加Ⅳ	Ab	
223	A3j6 A3j7	N-21.5°-W	楕円形	92 × 68	78	底面は平坦で、壁面は底面より30cmほど垂直に立ち上がった後、大きく内彎ぎみに立ち上がる。			Bb	
224	A3j9	N-85°-E	楕円形	170 × 132	59	底面は平坦で、壁面は東側でゆるやかに大きく外傾して立ち上がる。	縄文土器少量 1群 a・b・c	加Ⅳ	Bb	
225	B4i1 B4e1	N-29.5°-W	円形	118 × 101	27	底面は平坦で、壁面はゆるやかに立ち上がる。	縄文土器微量 1群 c	加Ⅳ	Aa	
226	B3e0 B4e1	N-20°-E	円形	152 × 143	56	底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Aa	
227	B3d0	N-22°-E	円形	125 × 123	39	底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。断面形は円筒状を呈す。	縄文土器微量 1群 a・c	加Ⅳ	Aa	
228	B3d0 B3e0	N-84°-E	楕円形	120 × 95	17	浅い土壌で底面は皿状を呈す。壁面はゆるやかに外傾して立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a	加Ⅳ	Bb	
229	B4d1	N-86°-E	楕円形	155 × 120	78	SK230と重複し、本土壌の方が新しい土壌。底面は平坦で壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器少量・土製品 1群 a・b・c	加Ⅳ	Ba	
230	B4d1	N-55°-W	円形	172 × 170	53	底面は平坦で壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器微量 1群 a・e	加Ⅳ	Aa	
231	A3he	N-41°-E	楕円形	91 × 75	69	埋設16号の下から検出された土壌である。底面は東から西へ傾斜し、壁面は外側に立ち上がる。			Bb	

\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)

第5章 砂川遺跡

遺構番号	地区	主軸方向	平面形	規模		各部の状況	出土遺構	時期	分類	備考
				長径×短径	壁高					
232	A3j8 A3a8	N-81.5°-E	楕円形	101×94	43	底面は平坦で、壁面は底面より連続してゆるやかに立ち上がる。	縄文土器微量 1群c	加Ⅳ	Bb	
233	A3j9 B3a9	N-17.5°-E	円形	118×117	72	底面は平坦で壁面は底面より連続的に立ち上がる。	縄文土器微量 1群c	加Ⅳ	Ab	
234	B3a8 B3a9	N-4.5°-E	円形	112×100	27	底面は皿状を呈し、壁面はゆるやかに外傾して立ち上がる。	縄文土器少量 1群a 2群b	称名寺	Ab	
235	B3a9 B3a0	N-29.5°-E	円形	143×135	55	底面は平坦で、壁面は直線的に外傾して立ち上がる。	縄文土器少量・土製品 1群a・c	加Ⅳ	Ab	
236	B3j0 B3a0	N-54°-E	楕円形	138×105	28	底面は北側より傾斜し、壁面は垂直に立ち上がる。	縄文土器微量 1群b・c	加Ⅳ	Ba	
237	A3i9 A3i0	N-31°-W	楕円形	210×157	111	底面は中央部が凹む皿状を呈し、壁面は底面より15cmほどオーバーハングして70cm立ち上がった後、外反して立ち上がる。	縄文土器多量 1群a 2群b	称名寺	Bc	
238	A3b0 A3b0 A3g9 A3g0	N-73°-E	円形	117×109	32	底面は平坦で、壁面は西側でゆるやかに外傾、その他は垂直に立ち上がる。	縄文土器少量 1群c 2群b	称名寺	Ab	
239	A3f9 A3f0	N-54°-E	楕円形	192×145	95	底面は平坦で、壁面は底面より5cmほどオーバーハングして40cmほど立ち上がった後ゆるやかに外傾に立ち上がる。	縄文土器多量 1群a 2群b	称名寺	Bc	
240	A3e8 A3f8	N-88°-W	円形	131×130	67	底面は平坦で、壁面は底面より直線的に外傾して立ち上がる。			Ab	
241	A3d7 A3d8 A3e7 A3e8	N-35°-E	円形	154×140	45	底面は平坦で壁面はやや外傾して立ち上がる。	縄文土器少量 1群a・c	加Ⅳ	Ab	
242	A4e1	N-8°-E	楕円形	190×115	30	S144号と重複し、本跡の方が新しい遺構である。底面は平坦、壁面はゆるやかに外傾して立ち上がる。	縄文土器少量・土製品 1群a・b・c・e	加Ⅳ	Ba	
243	A3f8	N-33.5°-W	楕円形	111×95	46	底面は平坦で、壁面は外反して立ち上がる。	縄文土器微量 1群a・c	加Ⅳ	Bb	
244	B3b0 B4b1	N-61°-E	楕円形	153×123	91	底面は平坦で、壁面は外反して立ち上がる。	縄文土器微量 1群a	加Ⅳ	Bb	

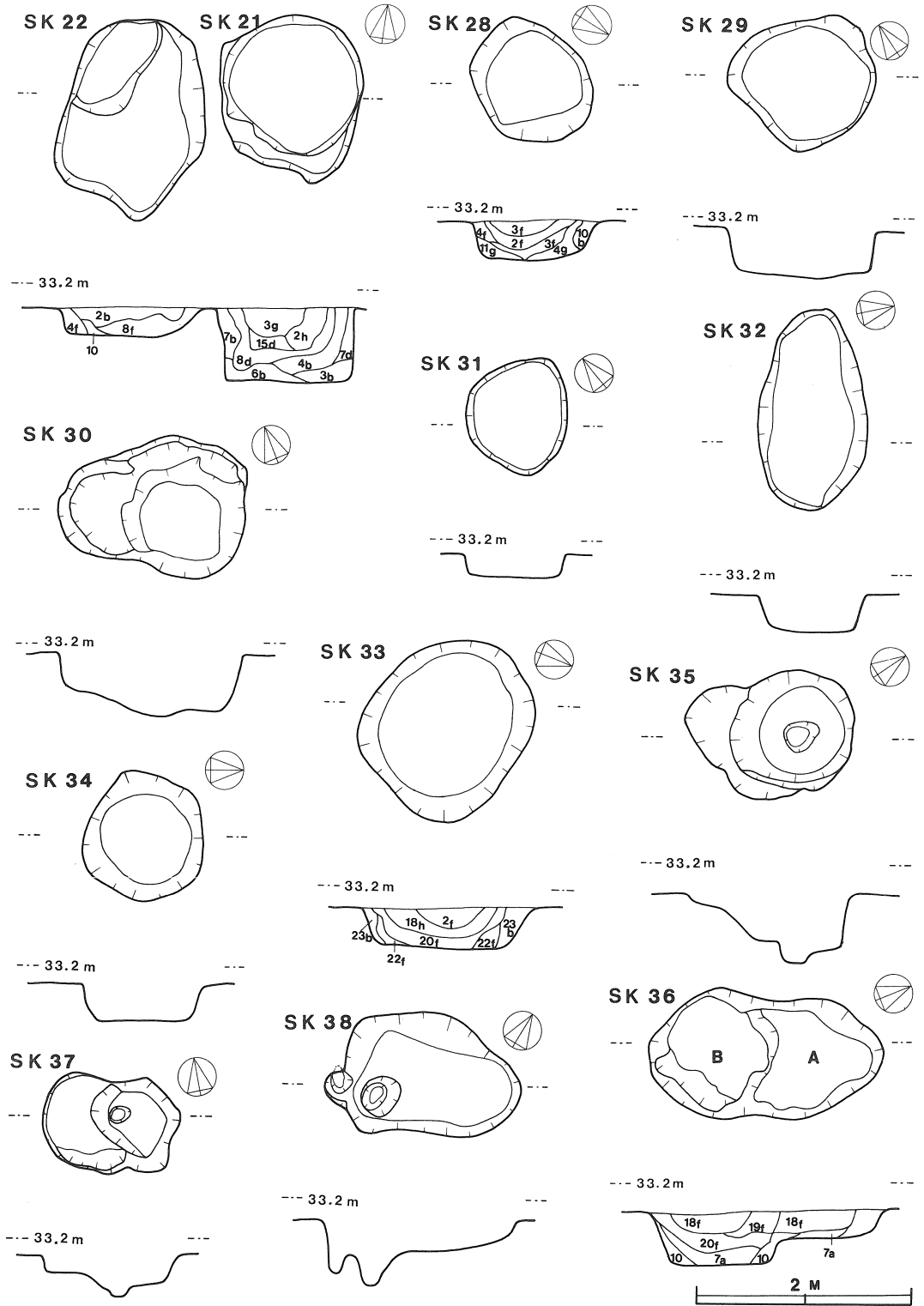
\* 長径×短径(cm) 壁高(cm)



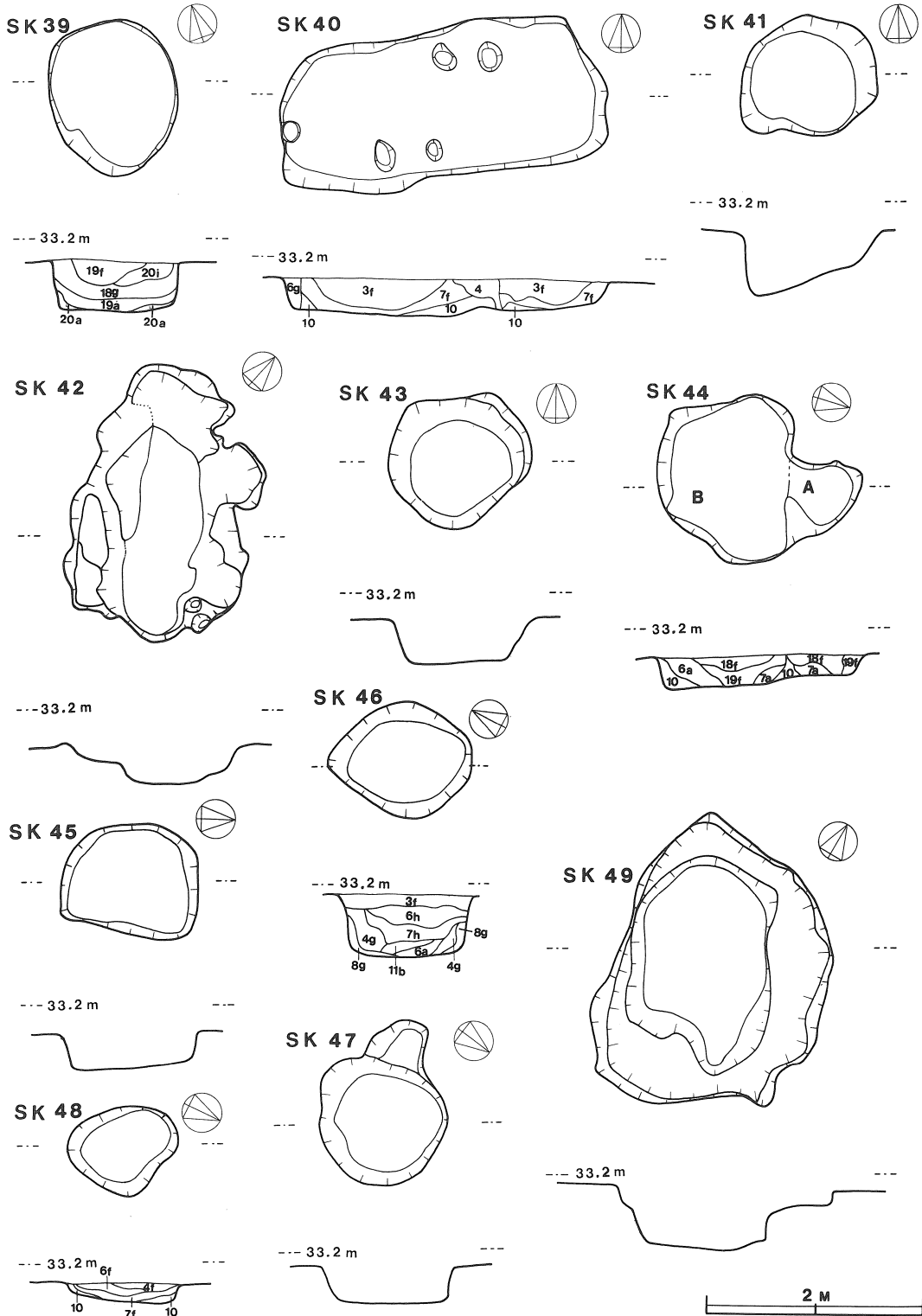
第 49 図 土壙実測図(1)



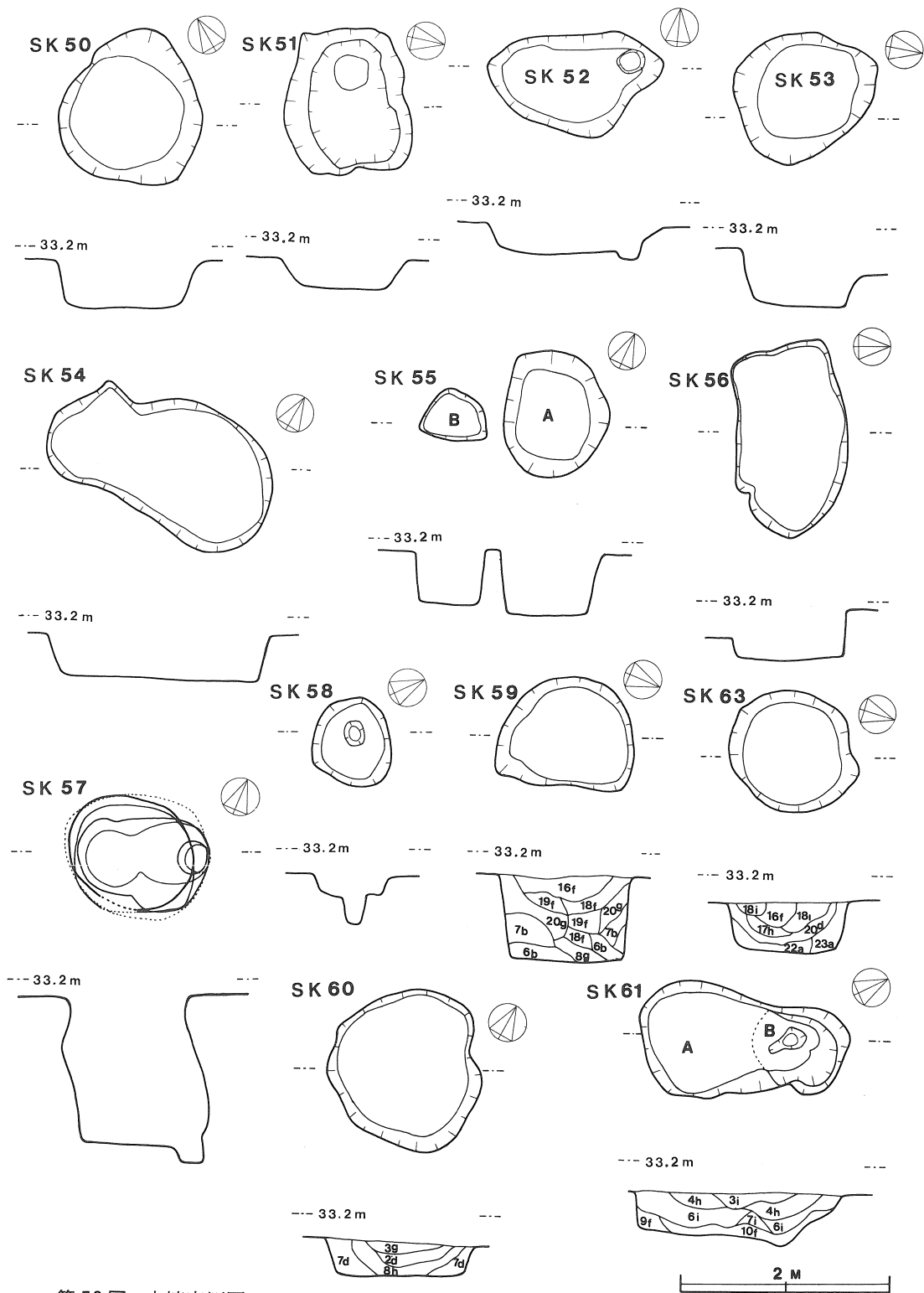




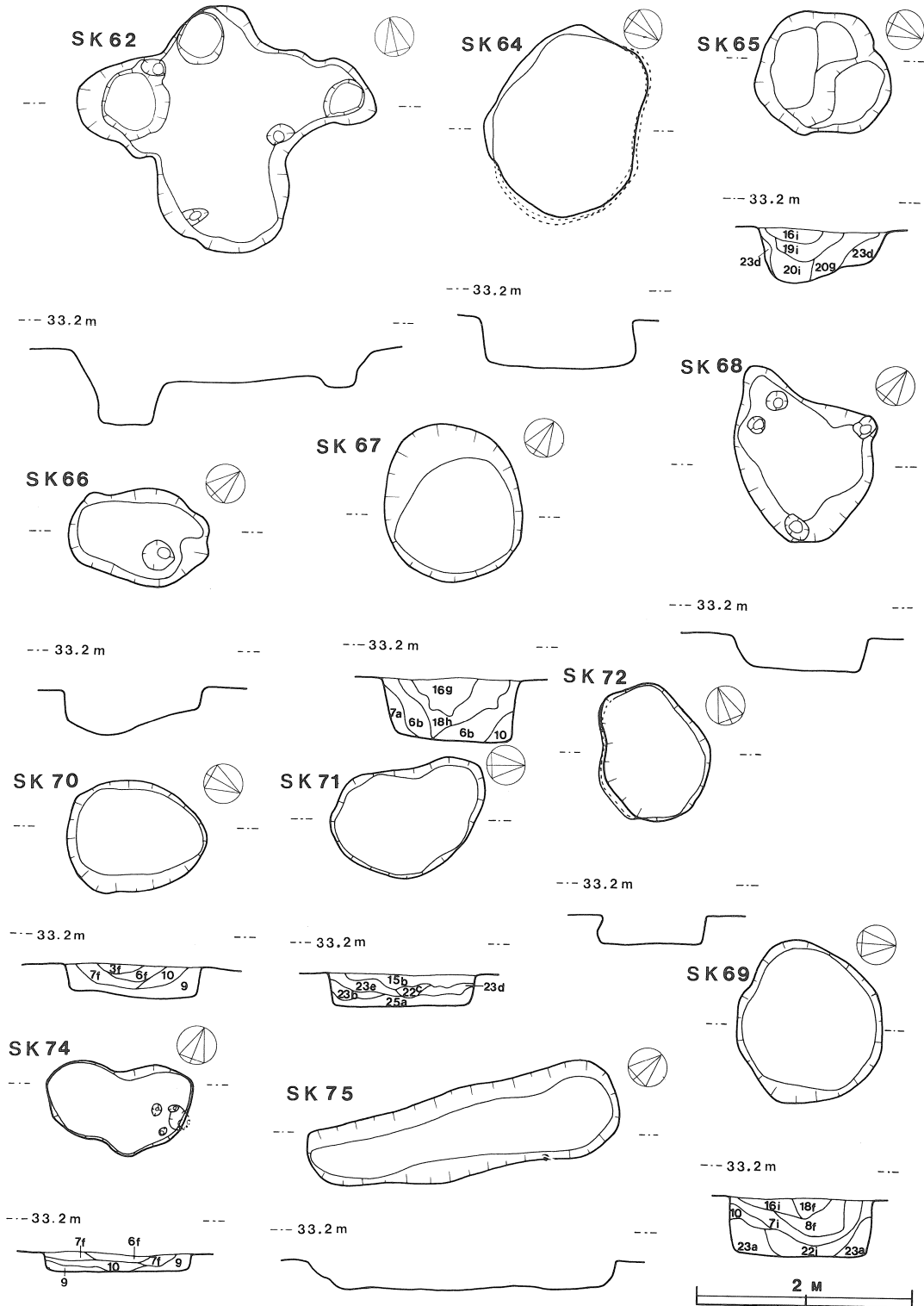
第 51 図 土壌実測図 (3)



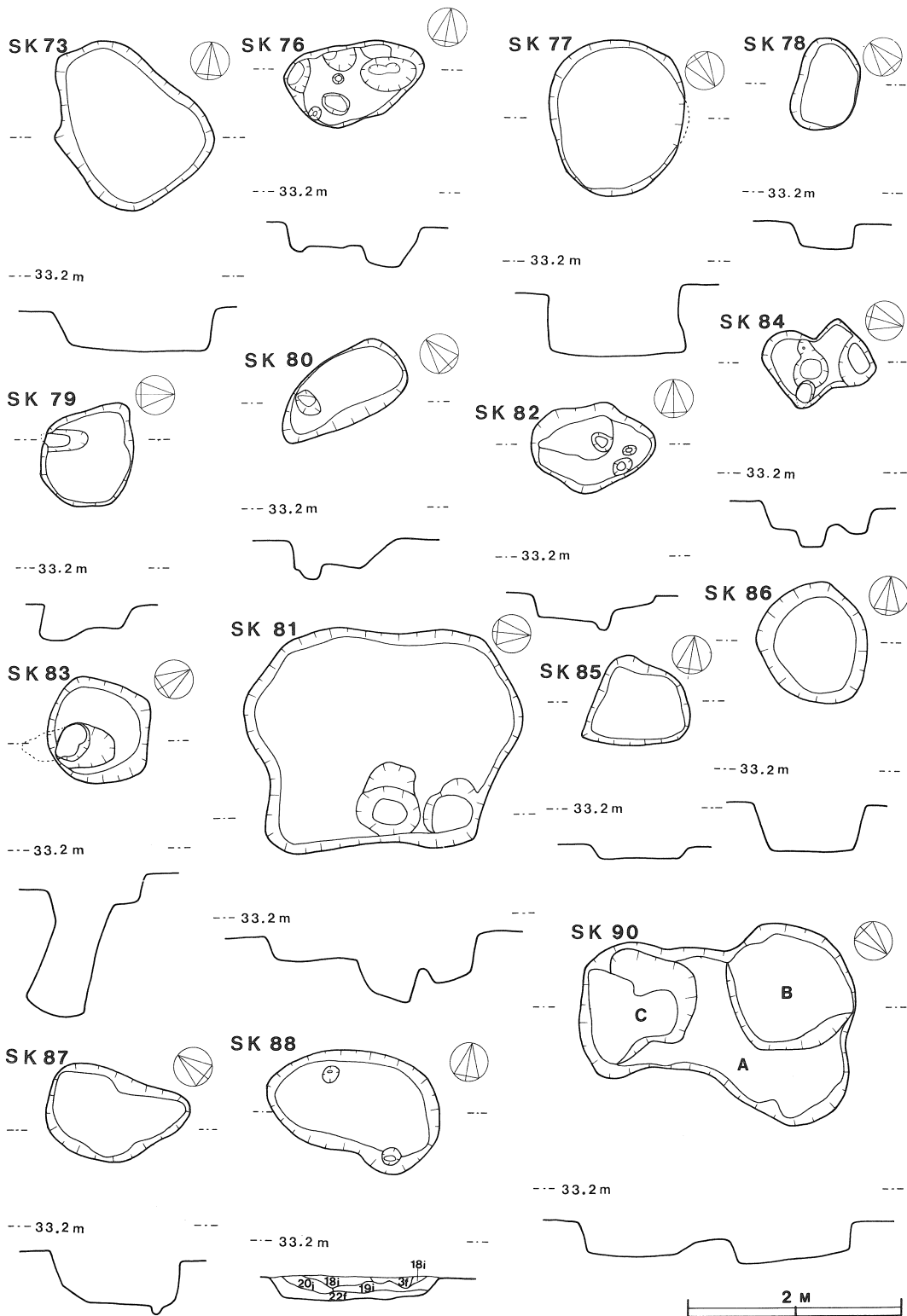
第52図 土壌実測図(4)



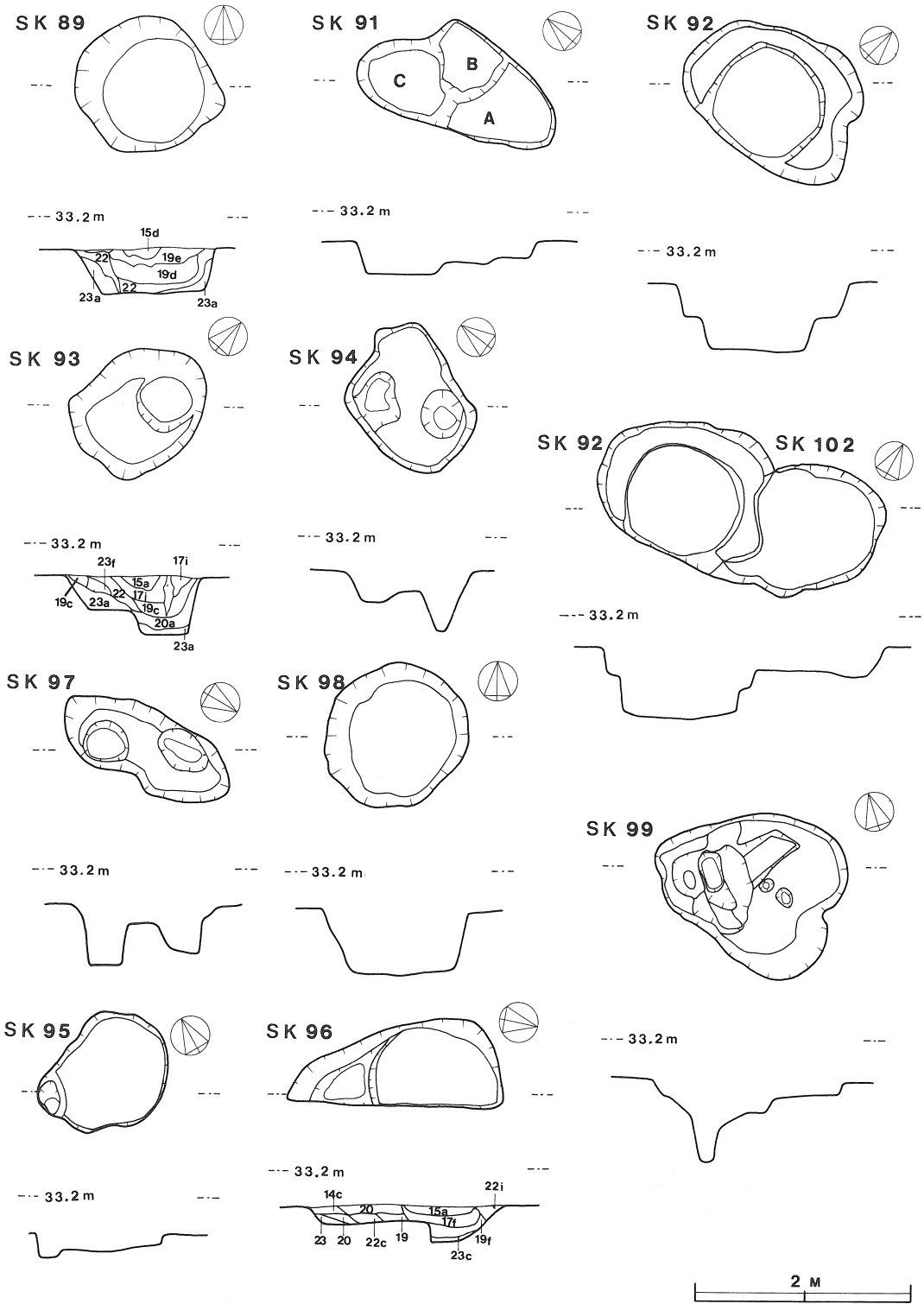
第 53 図 土壤実測図 (5)



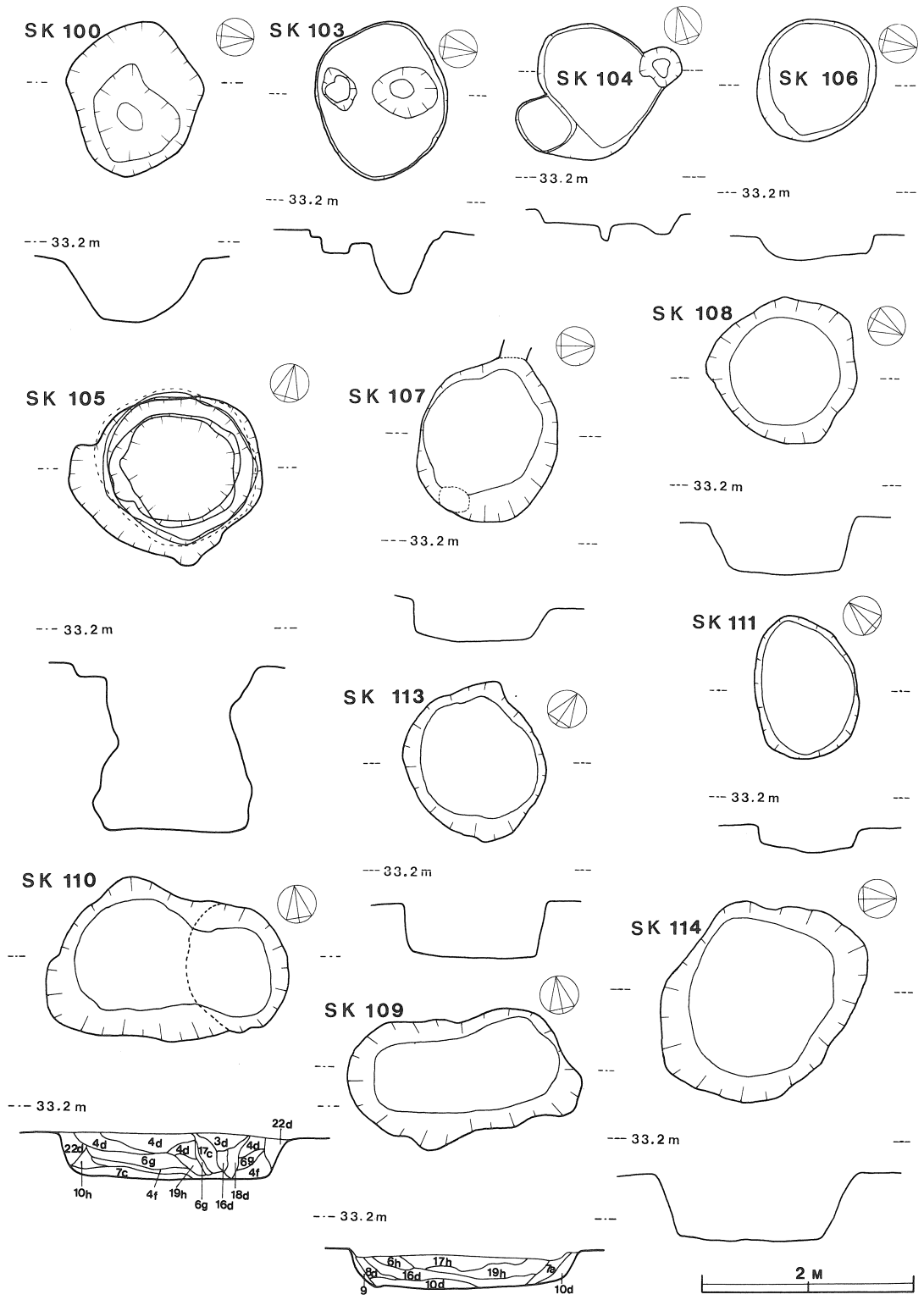
第54図 土壌実測図(6)



第 55 图 土壤実測図(7)



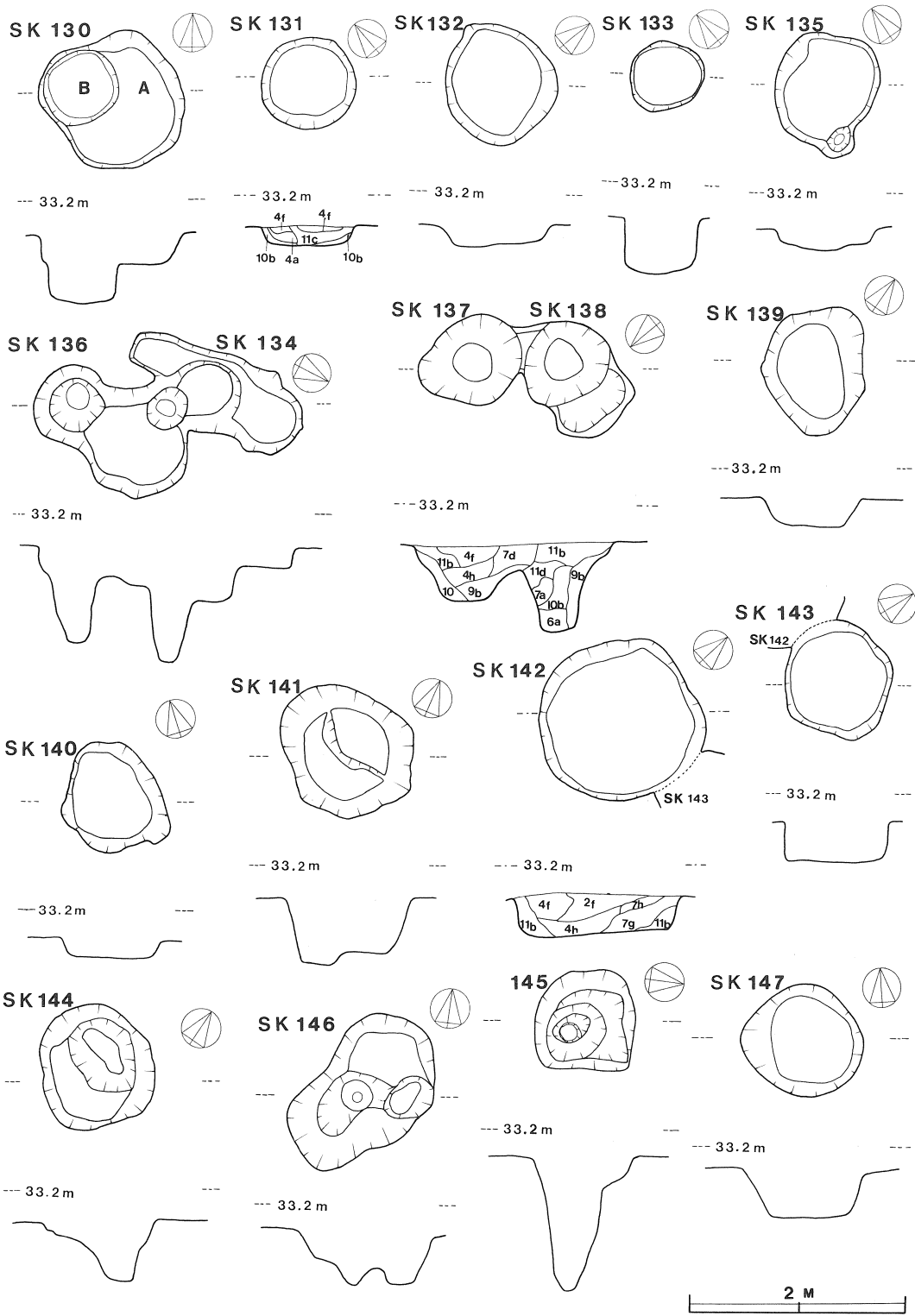
第 56 図 土壌実測図(8)



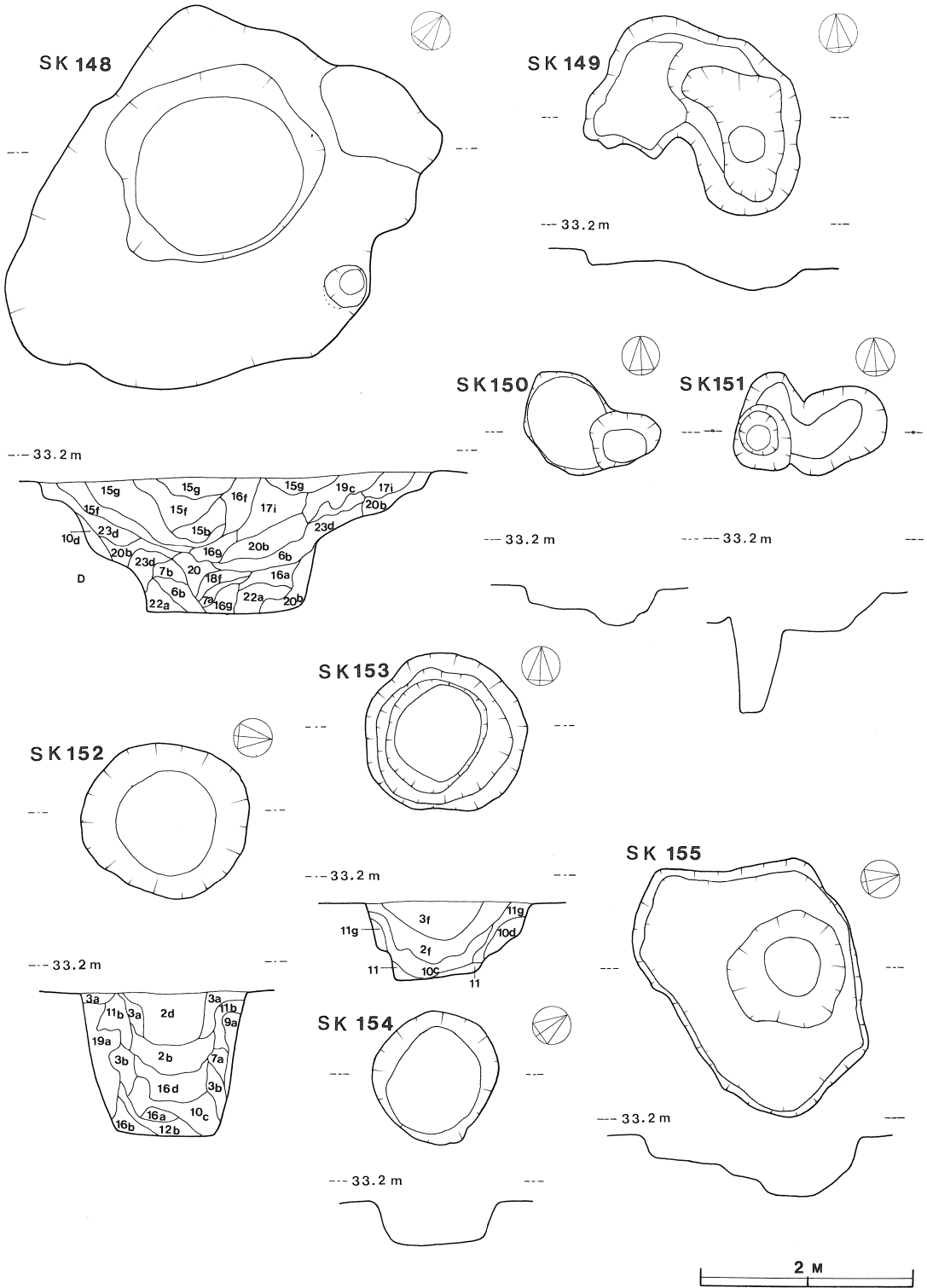
第 57 图 土壤实测图(9)



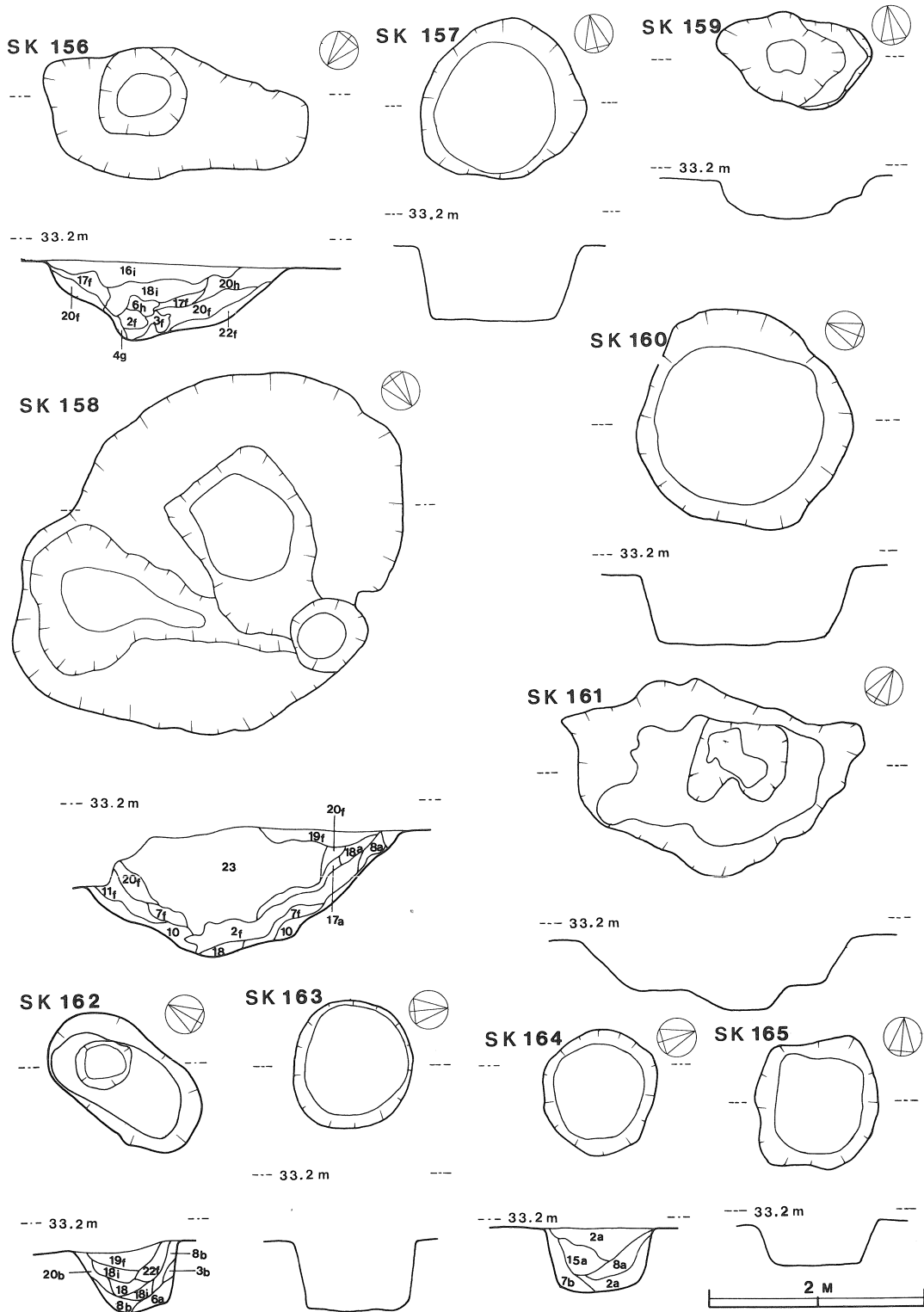




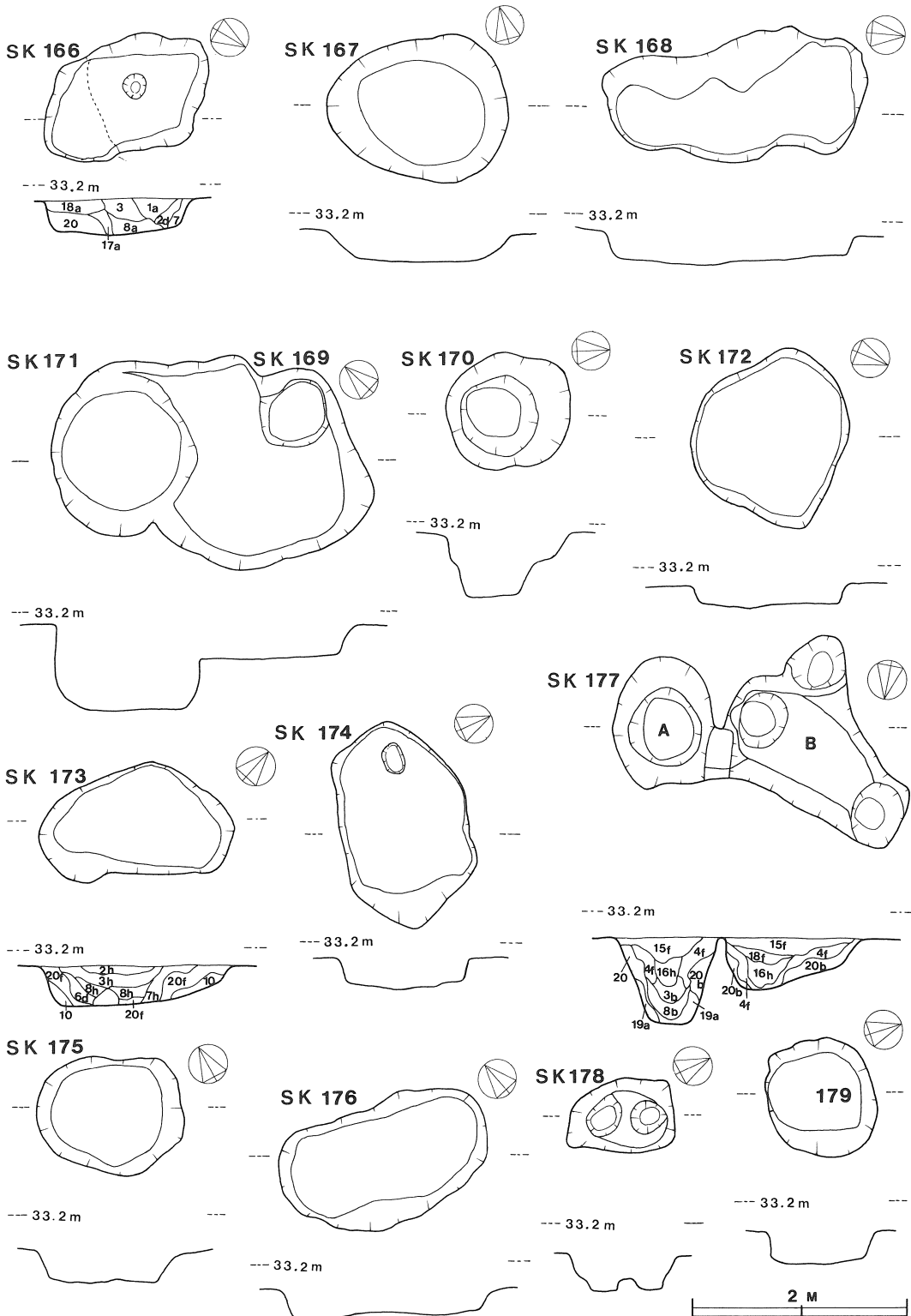
第 59 图 土壤実測図 (11)



第 60 図 土坑実測図(12)

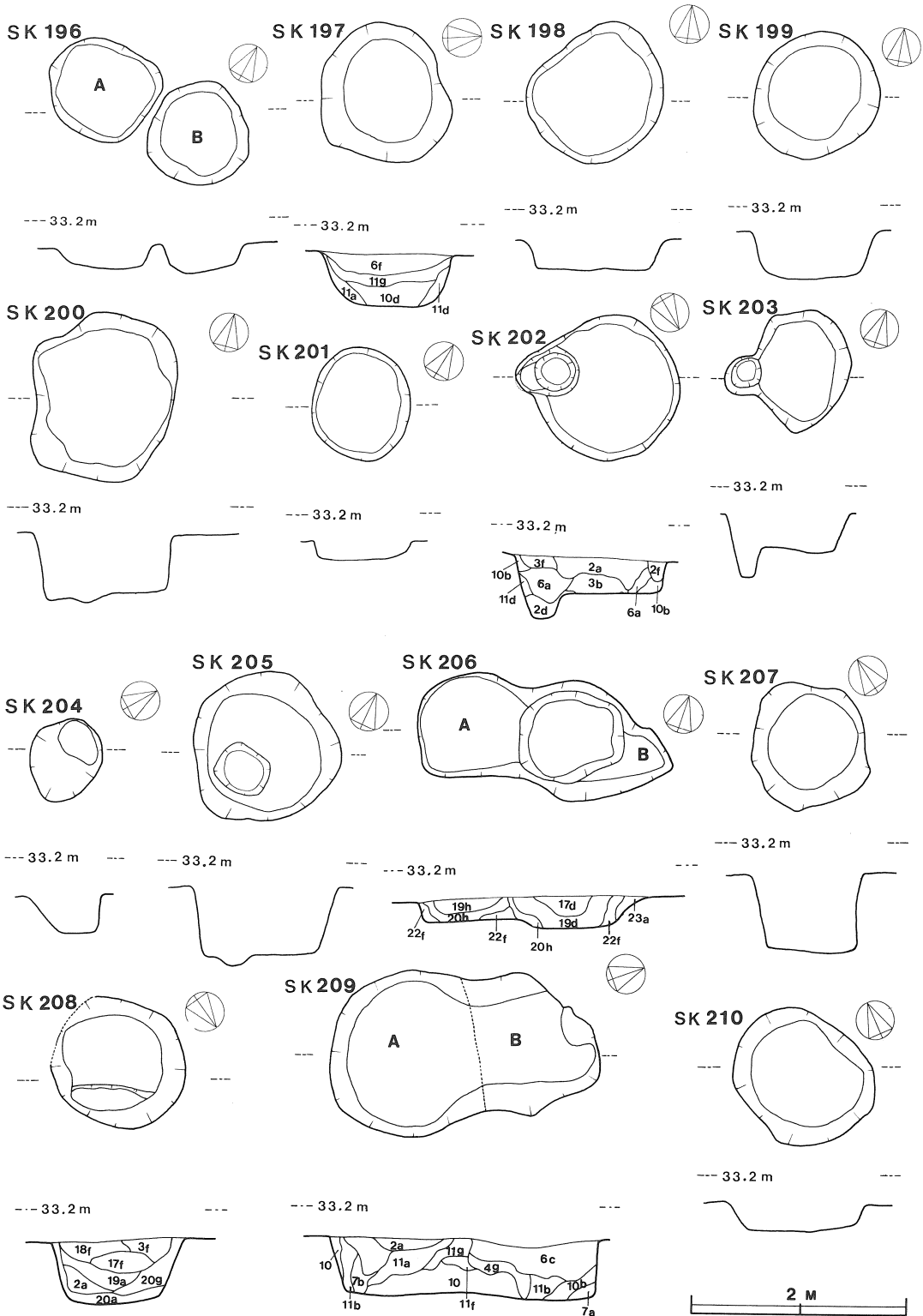


第 61 図 土壌実測図(13)

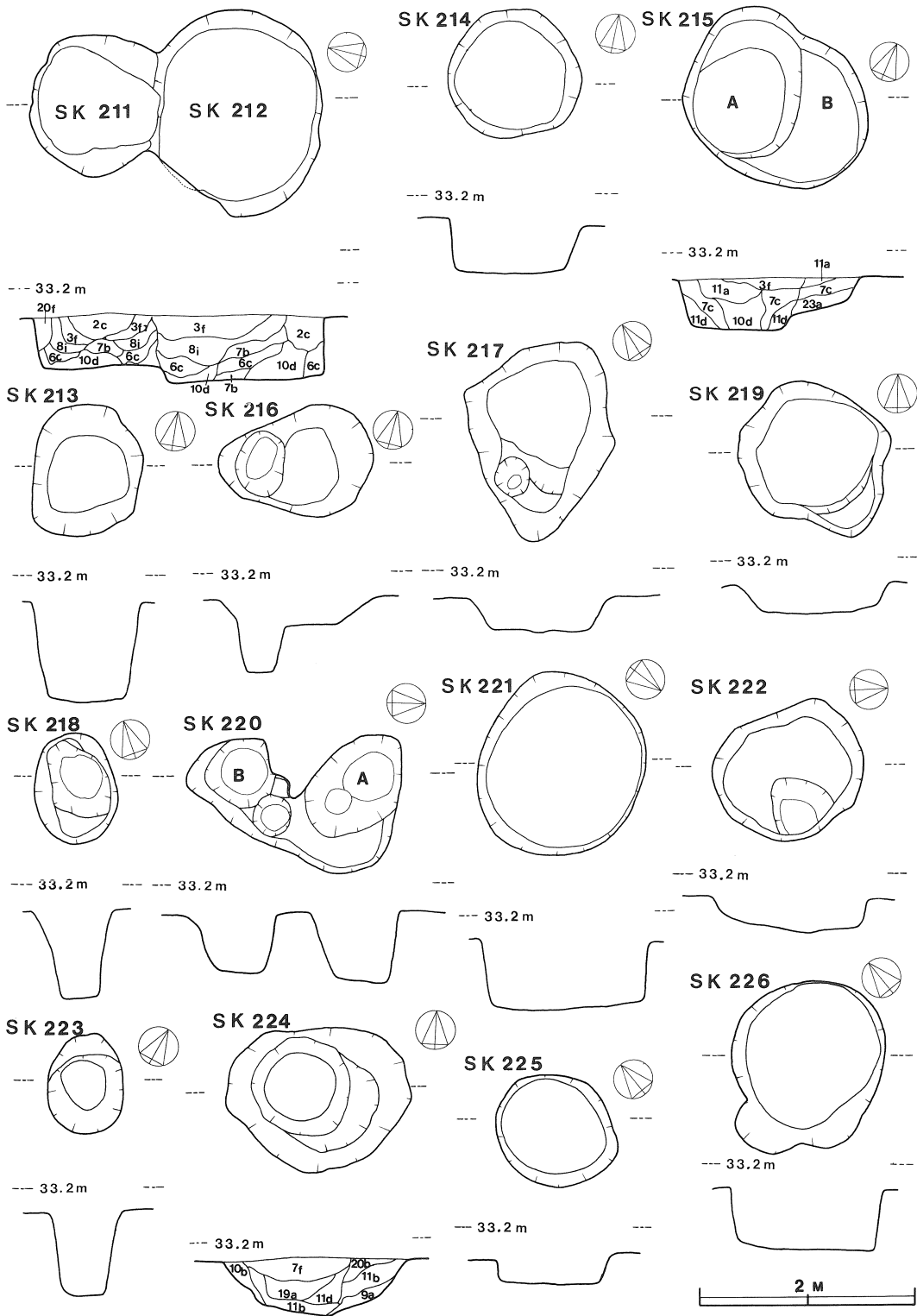


第 62 図 土壌実測図 (14)



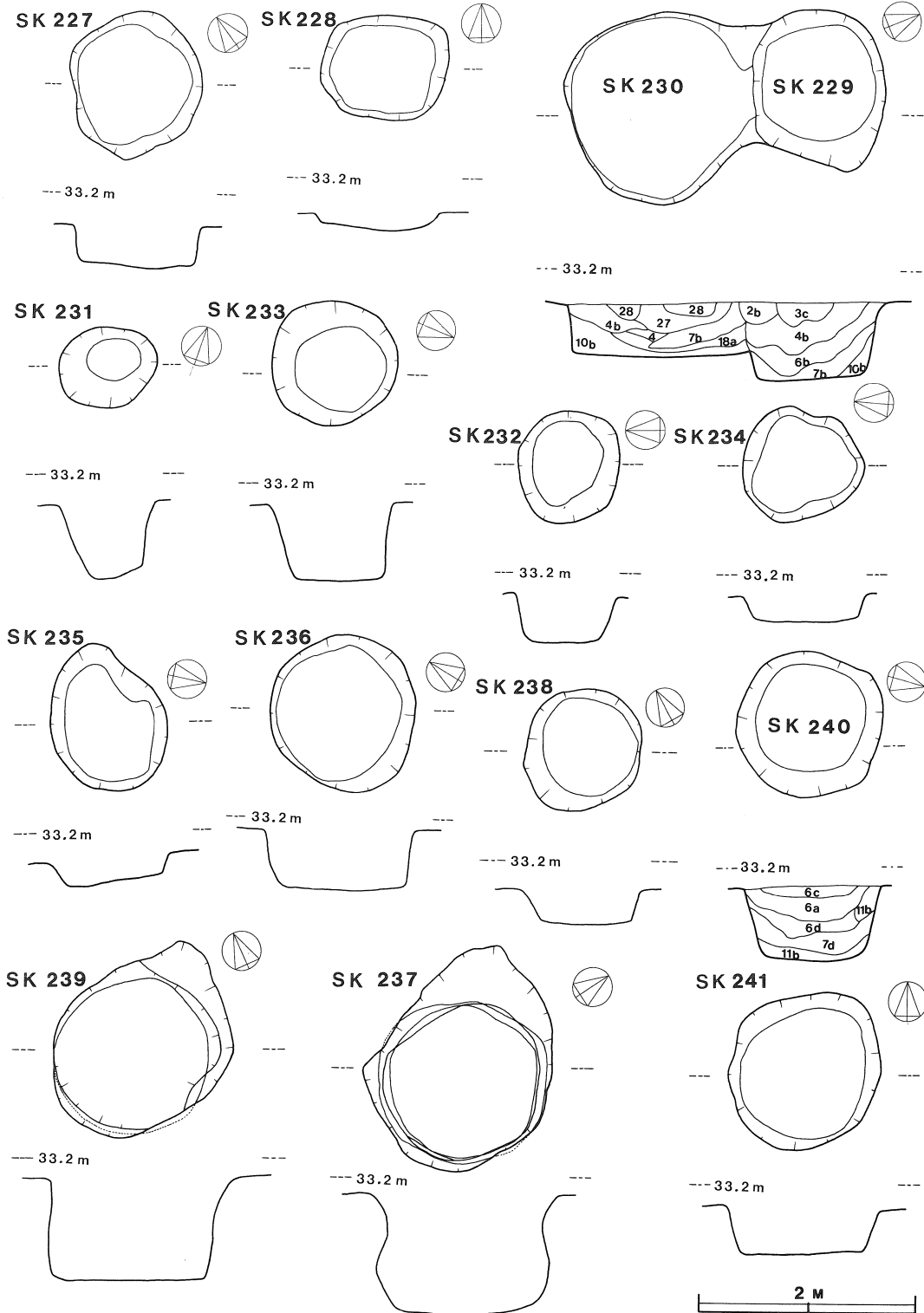


第 64 図 土壤実測図(16)

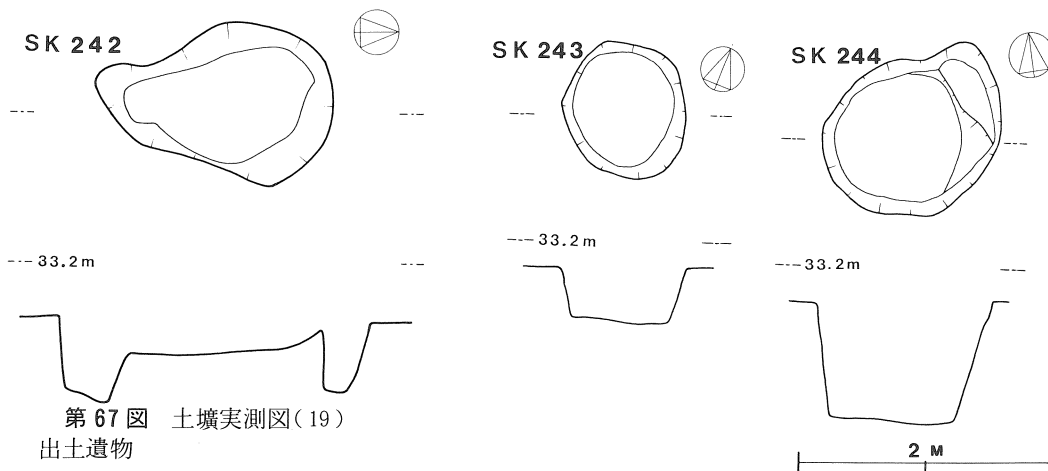


第 65 図 土壌実測図 (17)





第 66 図 土壌実測図 (18)



第 67 図 土壌実測図(19)

出土遺物

### 第 1 号土壌

多くの遺物は覆土上層から中層の中央部から多く出土し、大半が縄文土器片である。

縄文土器(第 68 図)

1 群 a (1~5) 微隆起線による区画文様を有する。1~4 は口縁部の破片で、1 は微隆起線による渦巻文が描かれている。

1 群 b (17~19) 沈線による区画文様が作られ、いずれも胴部の破片である。19 には横位の円点列文が配されている。

1 群 c (6~16) 縄文のみの文様を有するもの。

2 群 b (20~21) 曲線的な沈線による区画文様を有する。

石器(第 141 図-12)

覆土上層より出土した石鏃で、両面は入念な剝離調整がなされ、底部の中央部がやや窪み、側縁は小鋸歯状を呈している。石質はチャートである。

### 第 3 号土壌

覆土上層より縄文土器片を出土する。

縄文土器(第 69 図-1~6)

1 群 a (1~3) 微隆起線による区画文様を有する胴部辺で、1 は微隆起線による「H」文が構成され、その他の部に縄文の文様が充填されている。

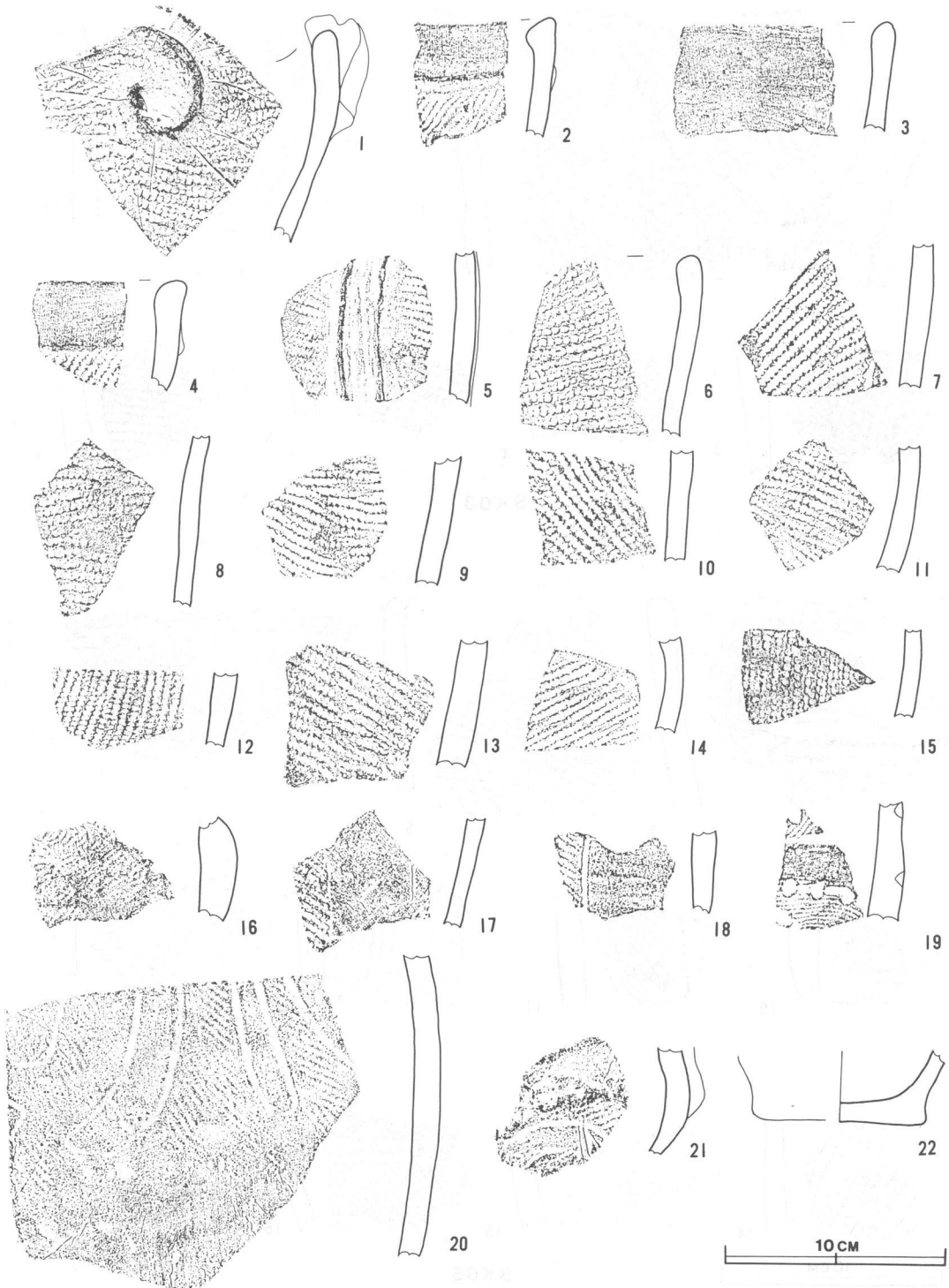
1 群 c (4~6) 縄文の文様のみを有するもの。

### 第 4 号土壌

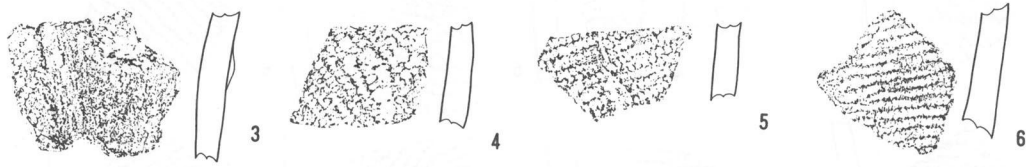
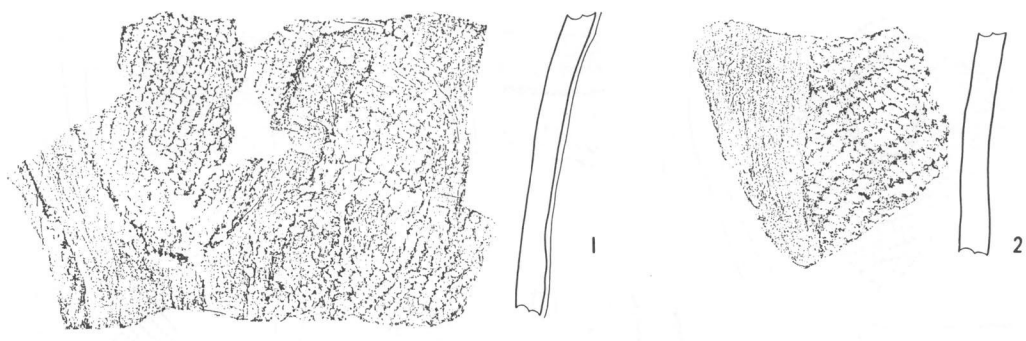
覆土上層よりやや大形の縄文土器片を出土する。

縄文土器(第 70 図)

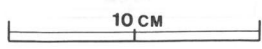
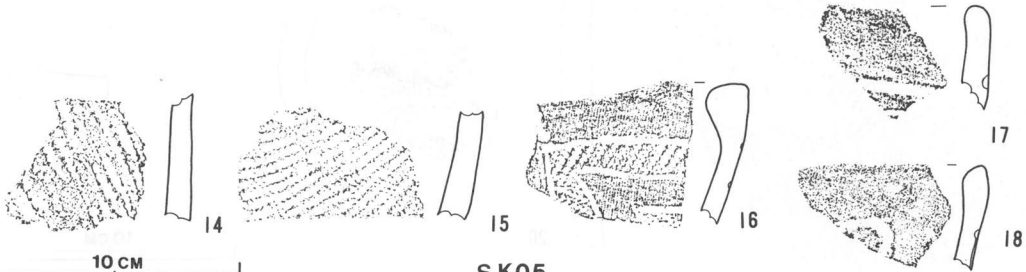
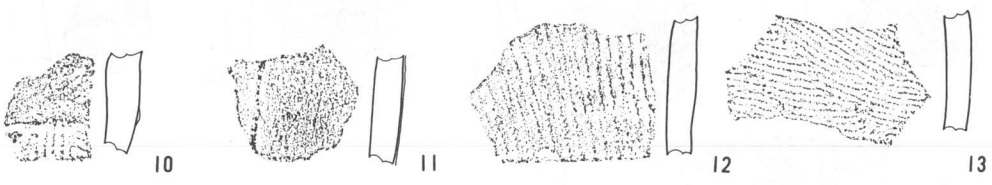
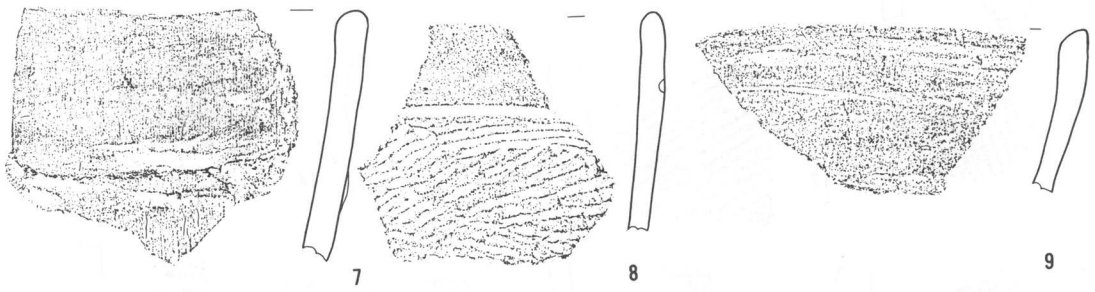
1 群 a (1~10) 微隆起線による区画文様を有し、1~5 は口縁部の破片で、横位の微隆起線



第68图 第1号土坑出土土器拓影图

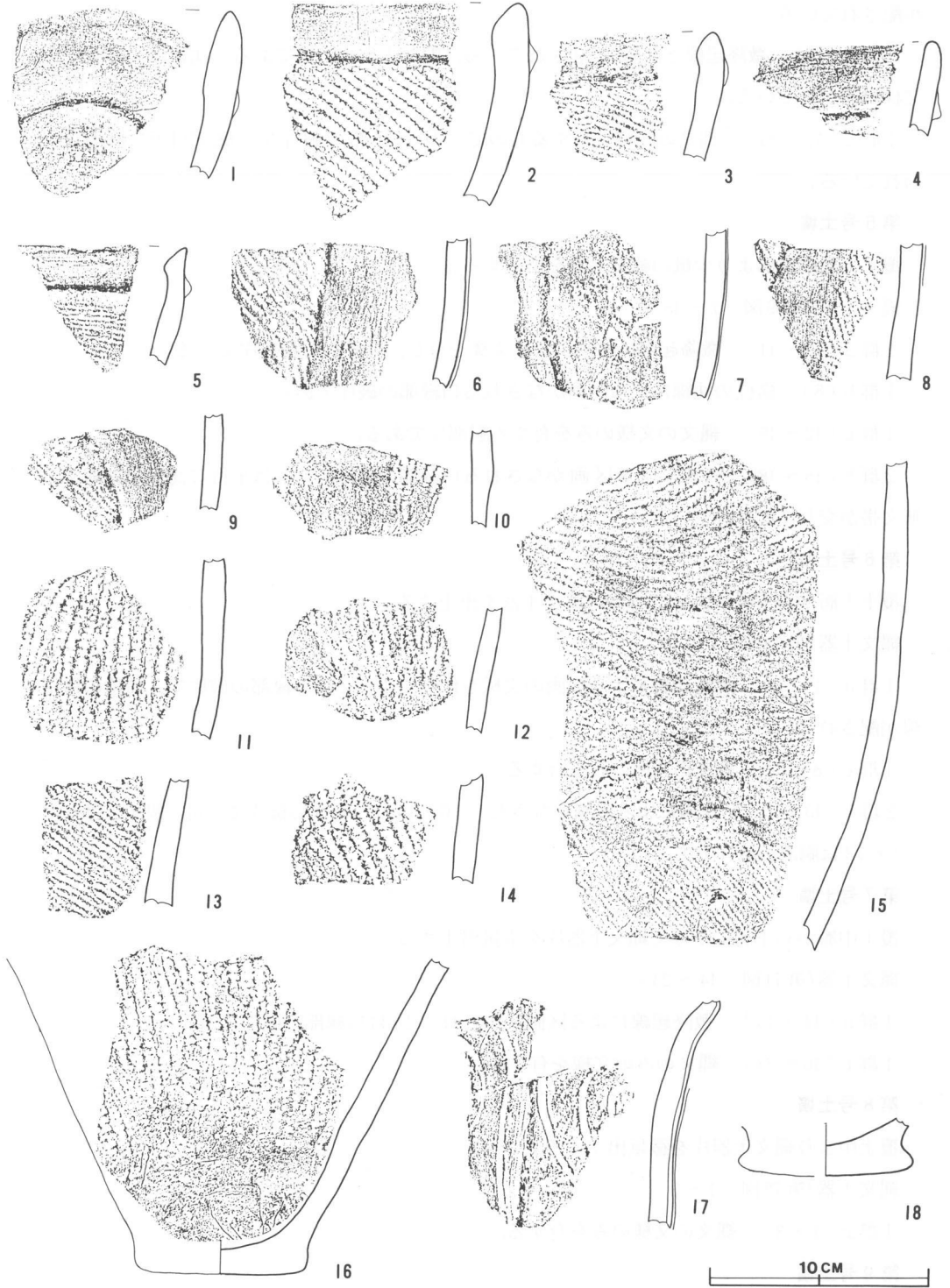


SK03



SK05

第 69 图 第 3 · 5 号土坑出土土器拓影图



第70图 第4号土壙出土土器拓影图

が配されている。

1群 b(17) 微隆起線と沈線が配されている。胴部上半の土器である。沈線による曲線的な文様が描かれている。

1群 c(11～16) 縄文の文様を有するもので、16は底部の破片で、底部付近は磨消しが行われている。

#### 第5号土壌

覆土上層中央部より少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第69図-7～18)

1群 a(10・11) 微隆起線の区画による文様を有し、いずれも胴部片である。

1群 b(8) 横位の沈線による区画がなされる口縁部の破片である。

1群 c(12～15) 縄文の文様のみを有する胴部片である。

2群 b(16～18) 沈線による区画がなされる口縁部の破片で、2は平行な沈線間に縄文帯と無文帯が交互に配されている。

#### 第6号土壌

覆土上層から下層にかけて少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第71図-1～13)

1群 a(1～7) 微隆起線による区画の文様を作り、1・2は口縁部の破片で、横位の微隆起線が配されている。

1群 c(8・9) 縄文の文様のみを有する。

2群 b(10～13) 沈線による区画がなされ、10・11は口縁部の破片で、同一個体と思われる。12・13は胴部の破片である。

#### 第7号土壌

覆土中層から下層にかけて縄文土器片を少量出土する。

縄文土器(第71図-14～23)

1群 a(14・15) 微隆起線による区画がなされ、14は口縁部の破片である。

1群 c(16～23) 縄文のみの文様を有する。

#### 第8号土壌

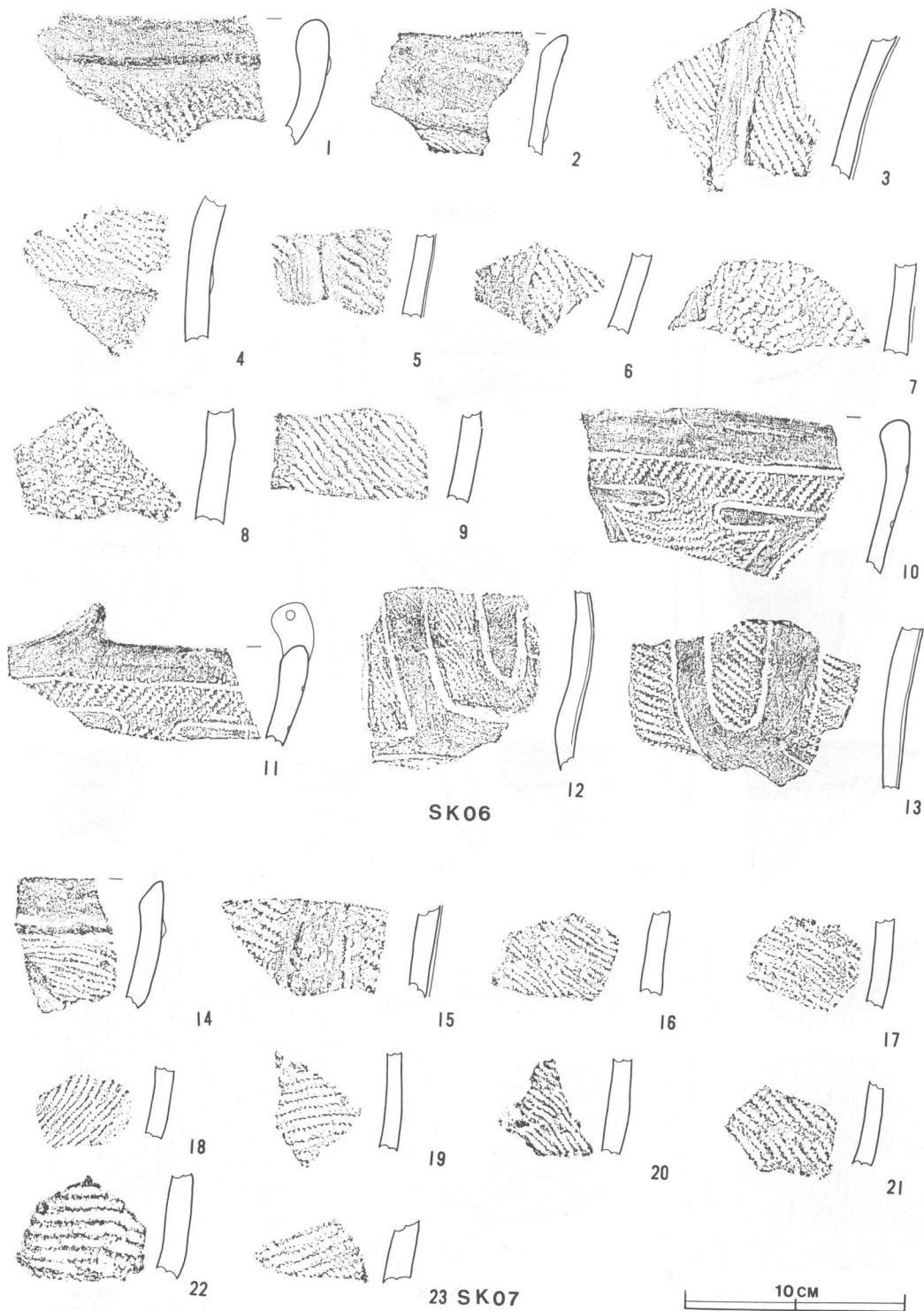
覆土中より縄文土器片を微量出土する。

縄文土器(第72図-1～3)

1群 c(1～3) 縄文の文様のみを有する。

#### 第9号土壌

覆土上層より多量、床面上より少量の縄文土器片を出土する。



第71図 第6・7号土壇出土土器拓影図



第 72 图 第 8 · 9 号土壤出土土器拓影图



縄文土器(第72図-4~18)

1群a(4~8) 微隆起線による区画文様を有し、4~6は口縁部の破片である。

1群b(9~15) 沈線による区画文様を有し、9~15は同一個体の口縁部の破片と思われ、口辺部に無文帯を作り、沈線間に縄文を配している。

1群c(16~18) 縄文の文様を有し、17は口縁部の破片で、やや外反して開く。

#### 第10号土壌

出土遺物はほぼ全体からの覆土上層から下層にかけて縄文土器片、及び土製品を出土する。

縄文土器(第73図-1~18)

1群a(1~7) 微隆起線による区画文様を有する。1~6はほぼ縦位の微隆起線の区画を有している。7は口辺部に無文帯を作り、その下に縄文を配する口縁部の破片で、無文帯と縄文との間を微隆起線によって区画している。

1群c(8~18) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

土製品(第145図-15)

覆土上層より出土した完形の土製円板である。

#### 第11号土壌

覆土中より縄文土器片を少量出土する。

縄文土器(第73図-19~24)

1群a(19・20) 微隆起線による区画文様を有し、19は横位の微隆起線を有する口縁部の破片である。

1群c(21) 縄文の文様のみを有する。

1群e(22) 縦位の櫛歯状の文様を有する。

#### 第12号土壌

覆土中層を中心に少量の縄文土器片を出土する。

縄文土器(第74図-1~11)

1は無文帯を有する口縁部の破片で、口辺部は外反して開く。

1群b(2~5) 沈線による区画がなされ、いずれも胴部の破片である。2~4は浅い沈線であるが、5はやや深い三本の沈線が配されている。

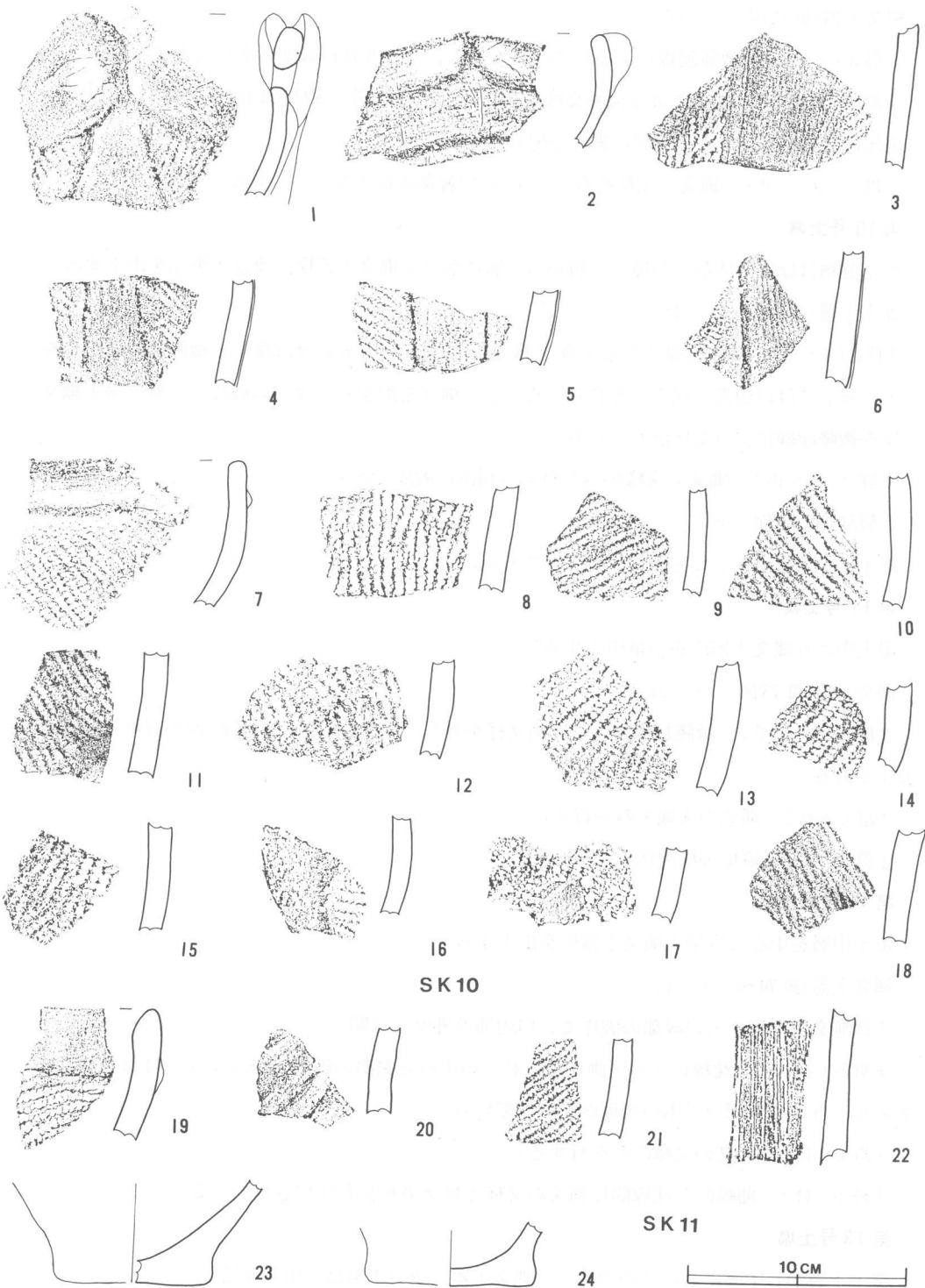
1群c(10) 縄文の文様のみを有する。

2群b(11) 曲線的な沈線間に縄文の文様と無文帯が交互に配されている。

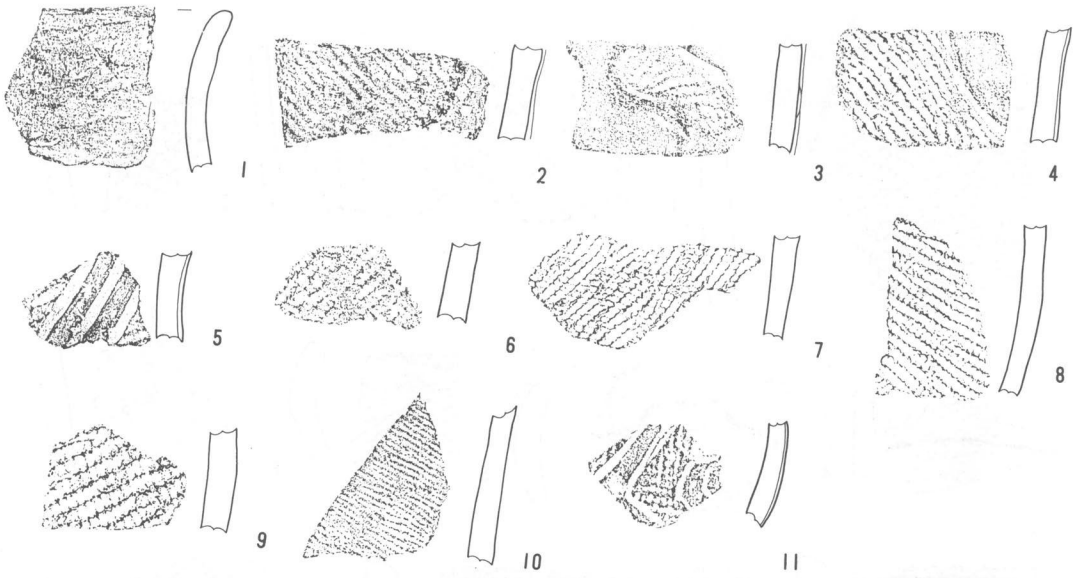
#### 第13号土壌

覆土上層から中層にかけてやや多くの縄文土器、及び土製品を出土する。

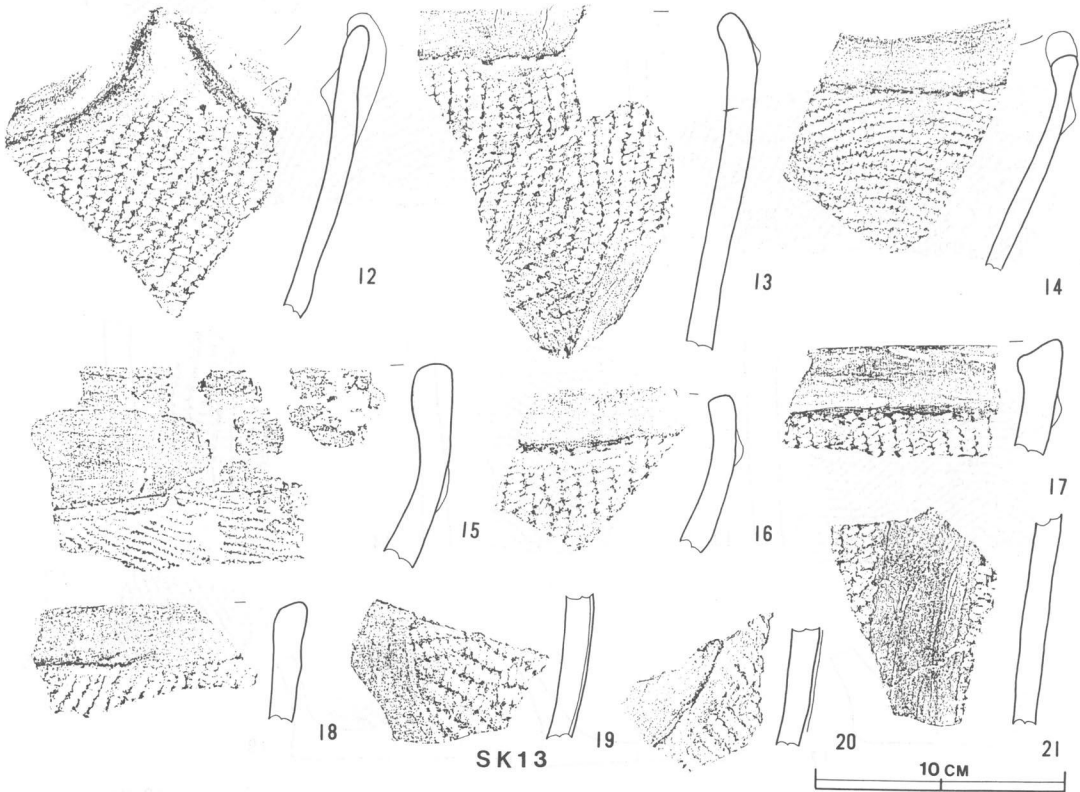
縄文土器(第74図-12~21, 第75図)



第 73 图 第 10·11 号土坑出土土器拓影图

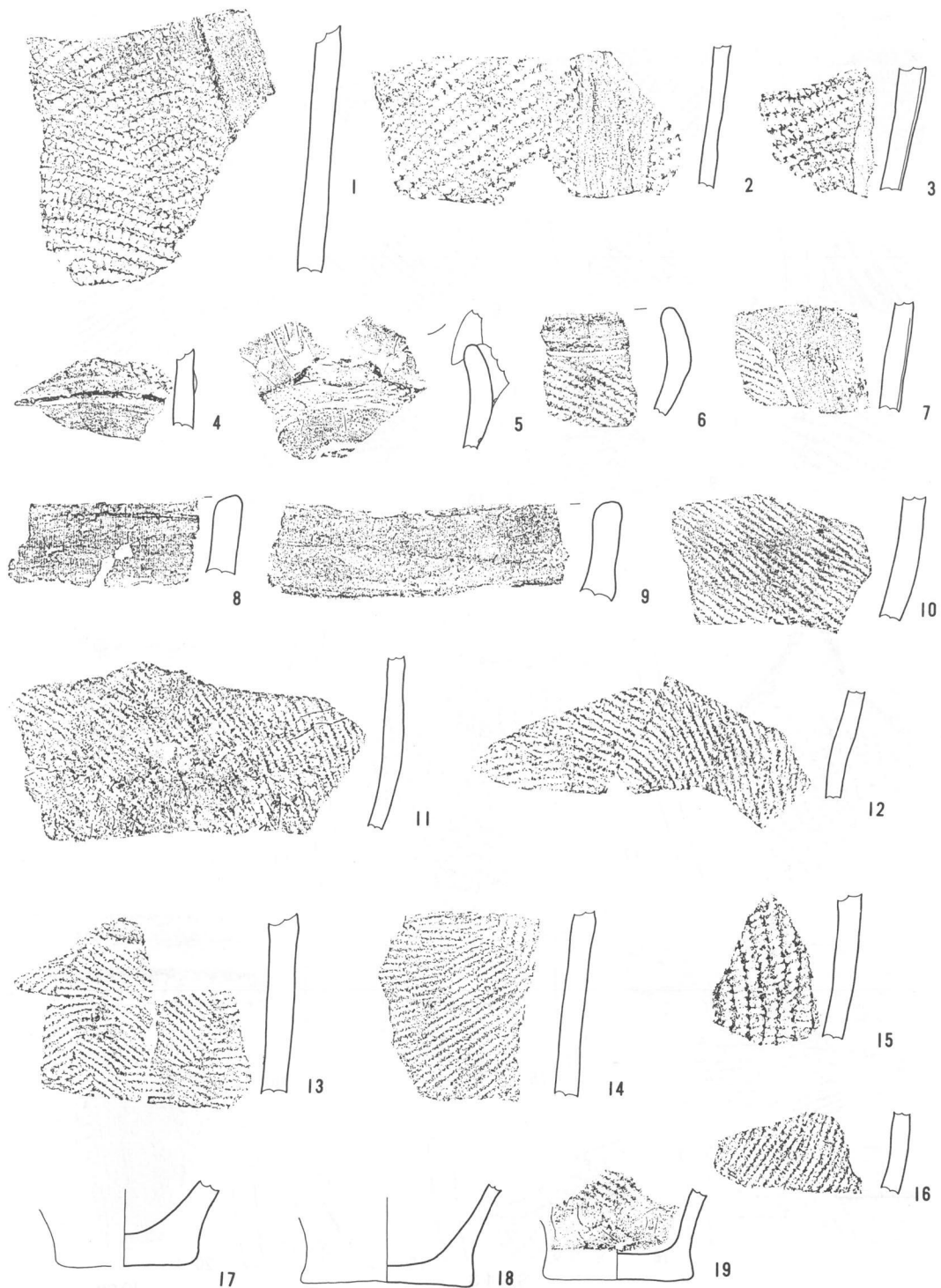


SK12



SK13

第74図 第12・13号土壇出土土器拓影図



第75图 第13号土坑出土土器拓影图

1群a(第74図-12~21,第75図-1~5) 微隆起線による区画を有し,12~18は横位の微隆起線によって無文帯と縄文の区画を明確にしている。また12は波状口縁を呈する。19~21・第75図-1~3は斜位,または縦位の微隆起線が配されている。

1群b(第75図-6~7) 沈線によって区画され,5・6は口縁部の破片である。また5は微隆起線が沈線の上に配されている。

1群c(第75図-10~16) 縄文の文様のみを有する。

土製品(第145図-16・17)

いずれも覆土上層より出土した完形の土製円板である。縄文の文様を有する土器を利用して作っている。

#### 第14号土壌

本土壌の中央部覆土上層より縄文土器片を多量,また底面直上より2個体の一括土器片(第76図-1・2)を出土している。

縄文土器(第76,77図)

1群a(第76図-1,第77図-1・2・4~9・11) 微隆起線による区画文様を有する。(第76図-1)は底部を欠損するがほぼ完形で出土し,口縁部は波状口縁を呈し,2個の突起を有する。文様は微隆起線によって描かれ,胴部には「C」字状の文様が4個体作られている。

1群c(第77図-3・10) 縄文のみの文様を有し,3は把手である。

2群b(第76図-2) 細い沈線によって複雑な曲線の文様が構成されている胴部上半の土器である。

#### 第15号土壌

覆土上層より少量の縄文土器片を出土する。

縄文土器(第78図-1~9)

1群a(1~3) 微隆起線による区画文様を有し,1は波状口縁を呈する口縁部である。

1群c(5~7) 縄文のみの文様を有する胴部の破片である。

#### 第16号土壌

遺物は縄文土器片を覆土上層から中層にかけて少量,また土製品を1個出土する。

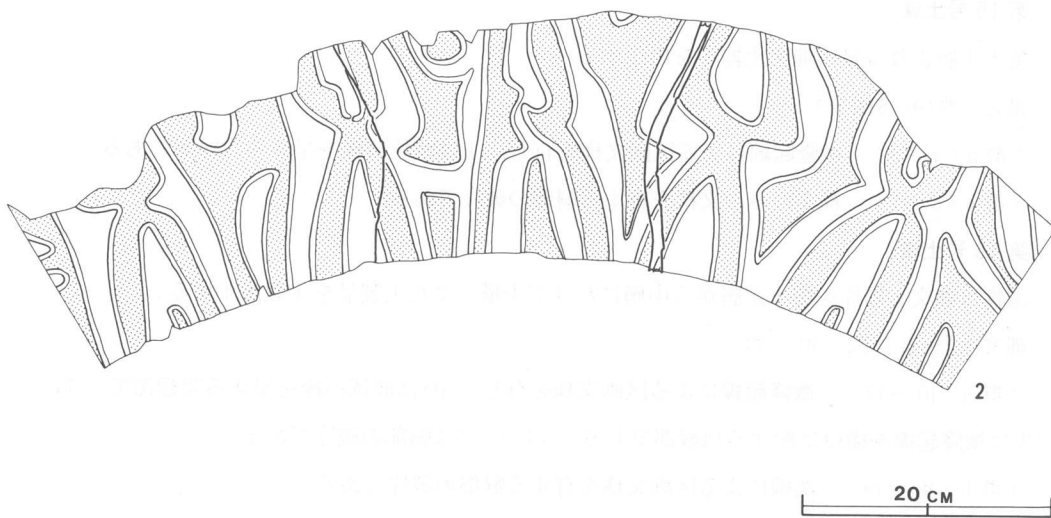
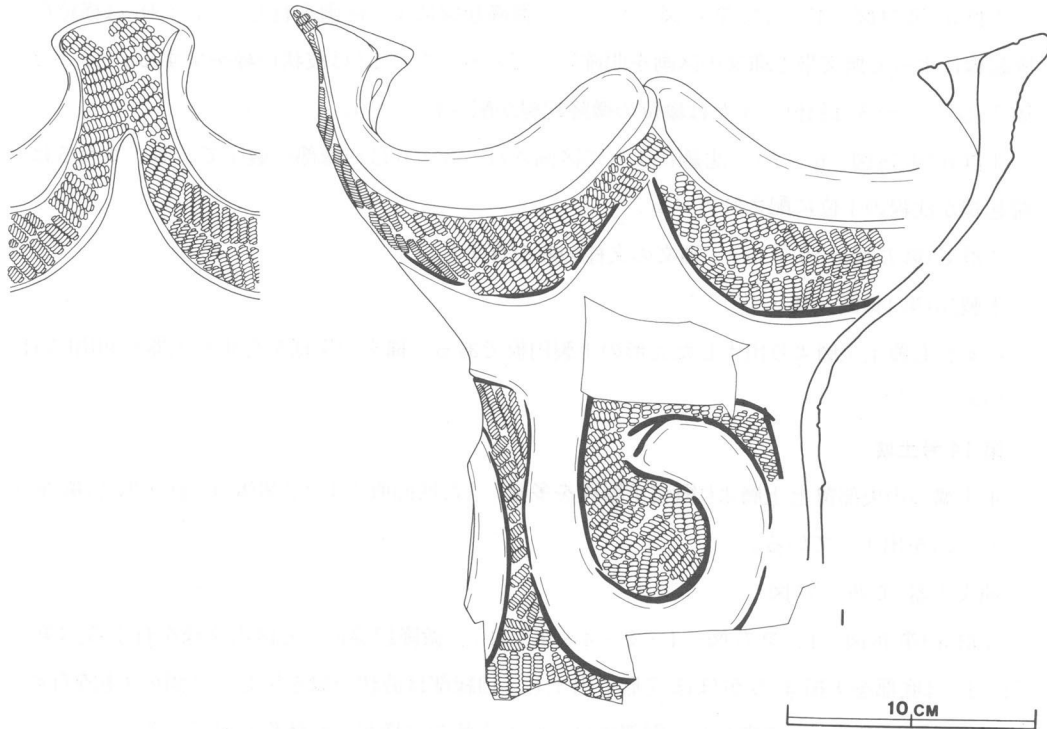
縄文土器(第78図-10~22)

1群a(10~17) 微隆起線による区画文様を有し,10は波状口縁を呈する突起部で,11~13は微隆起線を横位に配する口縁部である。14~17は胴部の破片である。

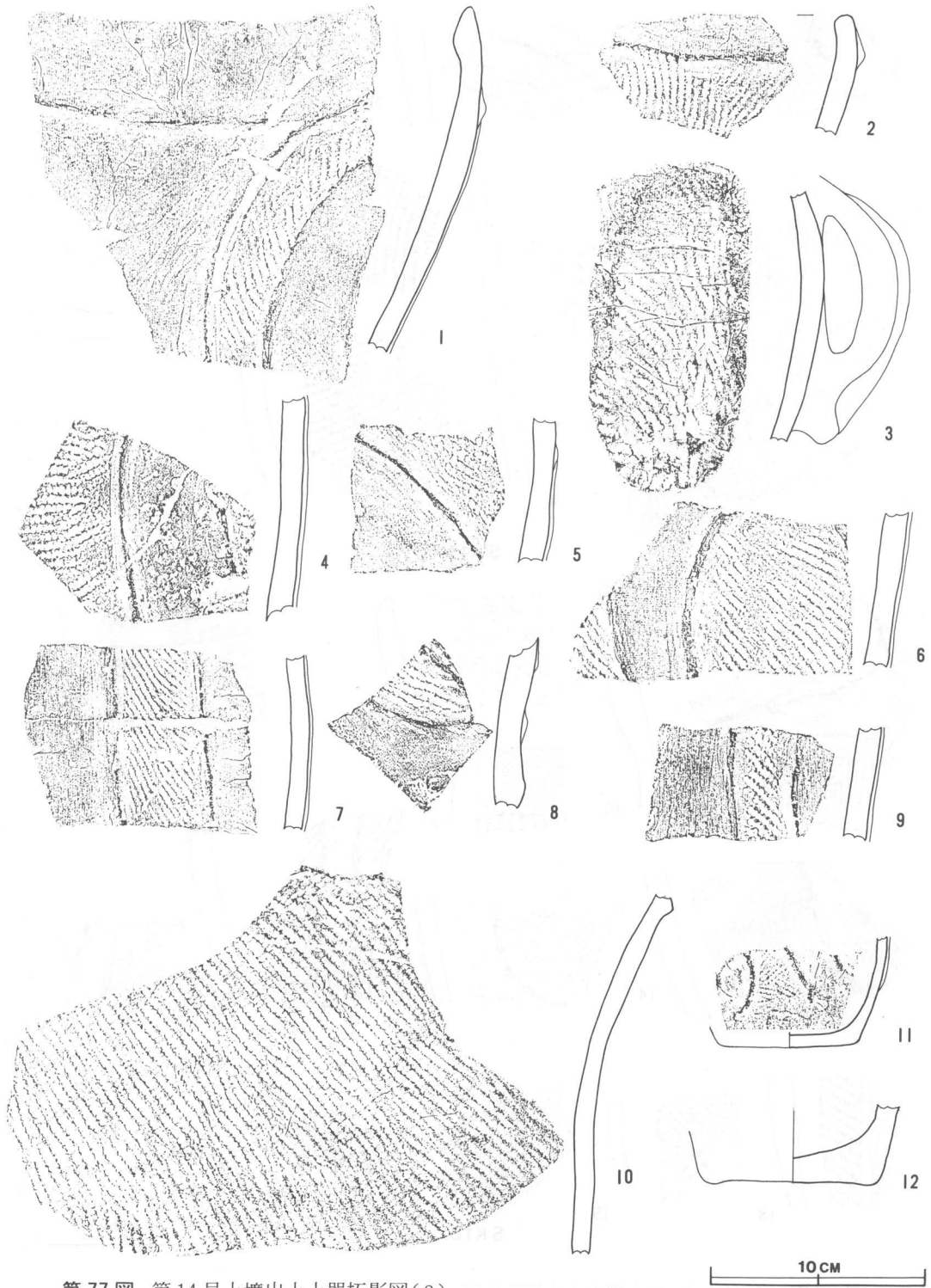
1群b(18・19) 沈線による区画文様を有する胴部の破片である。

1群c(21) 縄文のみの文様を有する。

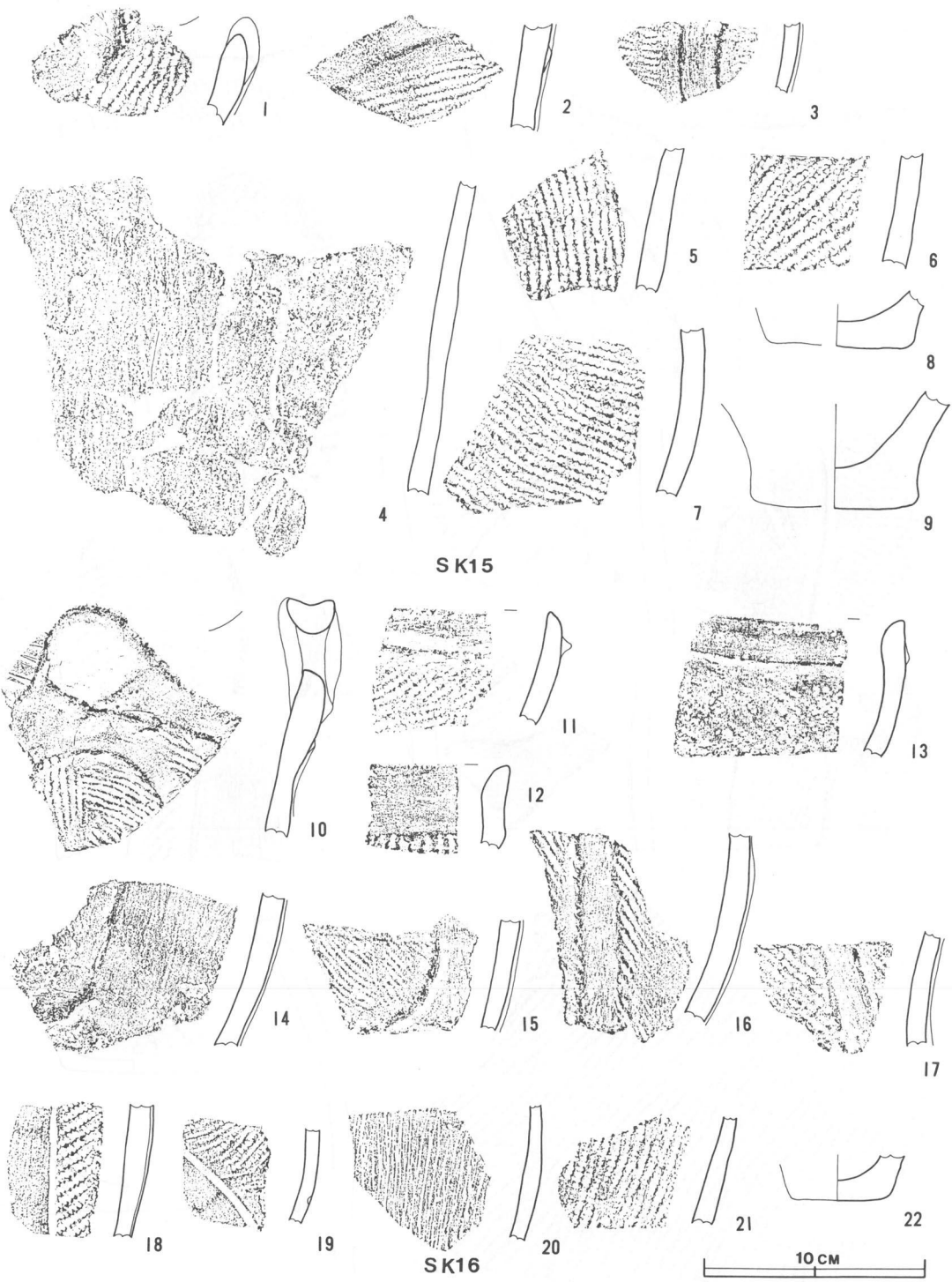
1群d(20) 縦位の櫛歯状の沈線が配されている。



第 76 图 第 14 号土坑出土土器拓影图(1)



第77图 第14号土坑出土土器拓影图(2)



第 78 图 第 15 · 16 号土壤出土土器拓影图



土製品(第145図-18)

覆土上層より出土した完形土製円板で、表面には縄文の文様が見られる。

#### 第19号土壌

覆土上層から中層にかけて少量の縄文土器片と土製品を出土する。

縄文土器(第79図)

1群a(1~8) 微隆起線による区画文様を構成し、1・2は口縁部の突起部である。3~6は口縁部の破片で、3は微隆起線によって胴部に「H」文が描かれている。

1群b(9・10) 沈線によって区画文様が見られ、9は口辺部に無文帯を作り、その下に沈線が配されている。

1群c(11・12) 縄文の文様のみを有する。11は口縁部の破片で、器形は口辺部でやや外反して開き、文様はLRの原体による縄文が施されている。

土製品(第144図-10)

覆土中より出土した完形土器片錘で、ノッチを2個有している。

#### 第20号土壌

遺物は土壌のほぼ中央部、覆土上層から中層にかけて縄文土器を少量出土する。

縄文土器(第80図)

1群a(1~3) 微隆起線による区画文様を有し、1・2は口縁部の破片である。

1群b(4~7) 沈線によって区画文様を作る。

1群c(8~16) 縄文の文様を有し、8は口辺部に無文帯を作り、その下に縄文を施している。9~16は縄文のみを有する胴部の破片である。

#### 第21号土壌

本土壌からの出土遺物は覆土上層から中層にかけて縄文土器を多量出土し、その他土製品を2個検出される。

縄文土器(第81図)

1群a(1・3~18) 微隆起線による区画文様を有する。1は口縁部の突起部。3~7は口縁部の破片で、いずれも波状口縁を呈する。

1群b(14・15) 沈線による区画文様を有し、いずれも胴部の破片で文様は懸垂文である。

1群c(12) 縄文のみの文様を有する。

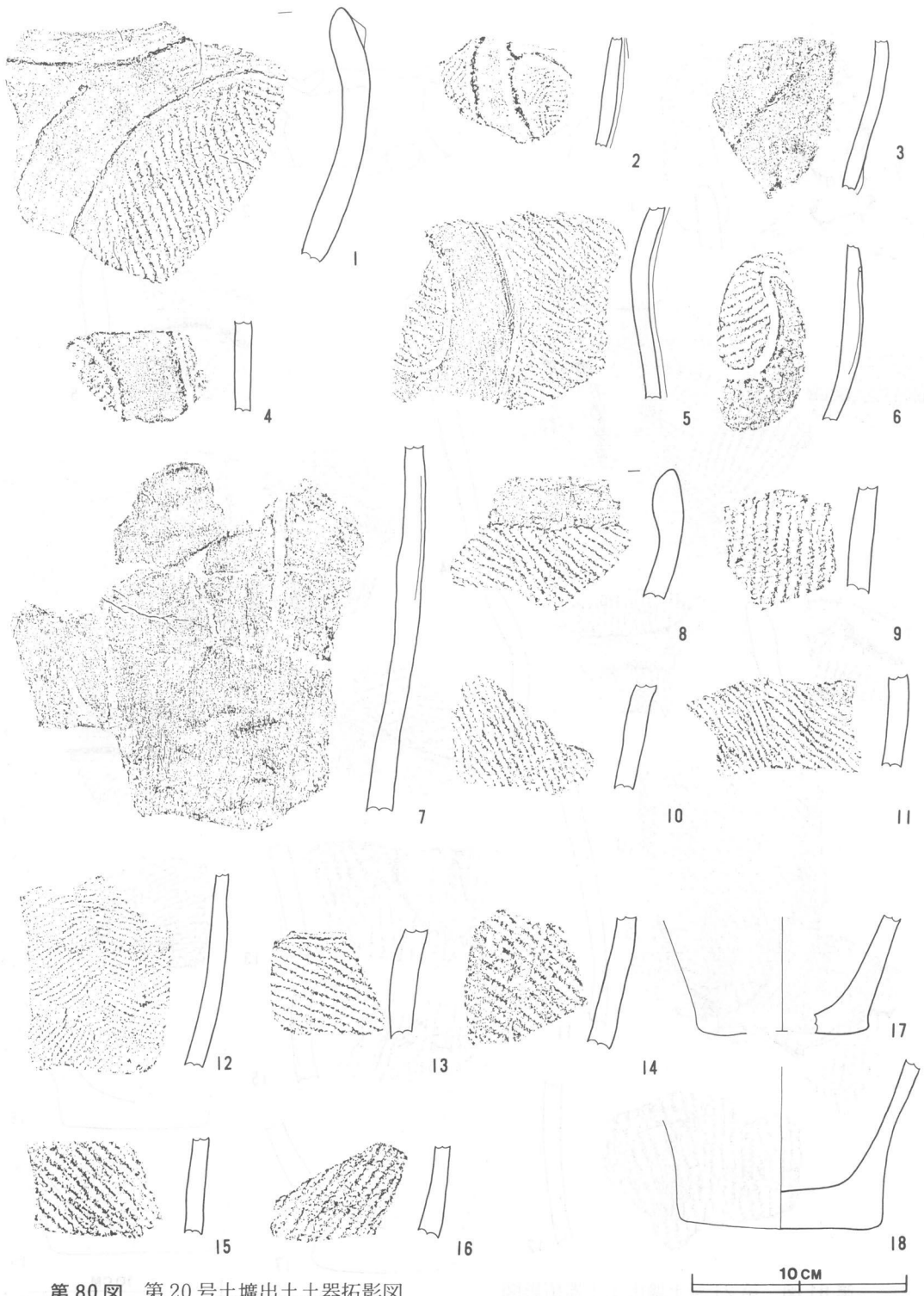
3は注口土器の破片である。

土製品(第145図-19・20, 第144図-12)

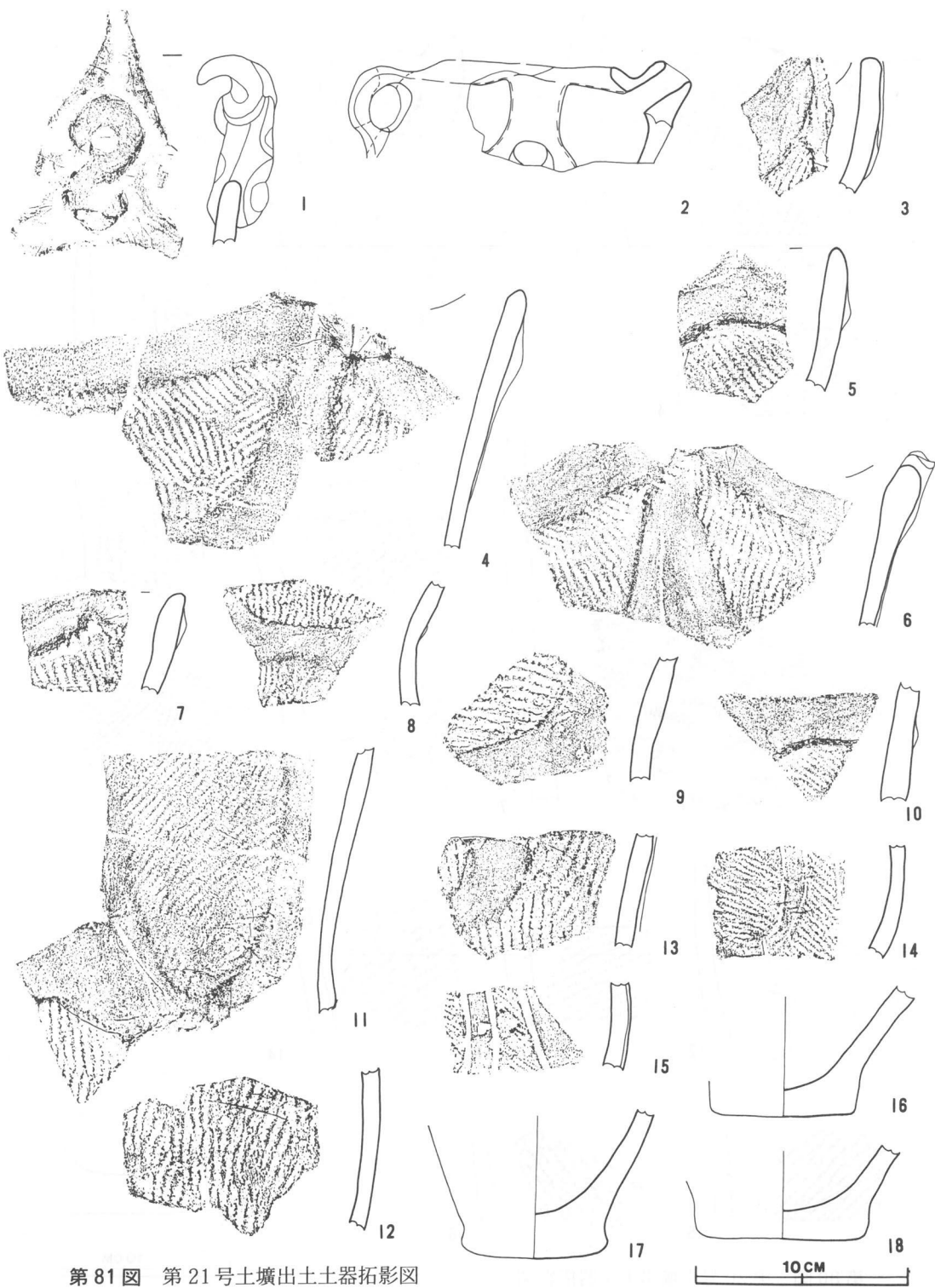
19・20は覆土上層より出土した完形の土製円板である。また12は簡単に作られた耳飾である。



第 79 图 第 19 号土壙出土土器拓影图



第80图 第20号土壙出土土器拓影图



第81图 第21号土坑出土土器拓影图

**第24号土壇**

覆土上層より少量の縄文土器片を出土する。

縄文土器(第82図-1~7)

1群a(1~3) 微隆起線による区画を有する胴部の破片である。

1群c(4~6) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

**第29号土壇**

覆土上層から中層にかけて多量の縄文土器片を出土する。

縄文土器(第82図-8~15)

1群a(8~12) 微隆起線による区画文様を有する。8~10は口縁部の破片で、8はやや内彎して開き、9・10は直線的にやや外傾して開く。

1群c(13) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

2群b(14) 曲線的な沈線によって区画された文様を有する。

**第30号土壇**

覆土中層より縄文土器片を少量出土する。

縄文土器(第82図-16~20)

1群a(18・19) 微隆起線によって区画文様が作られ、18は口縁部付近の破片である。

1群b(16) 縦位の沈線によって無文帯と縄文帯を区画している口縁部の破片である。

1群c(17) 縄文の文様のみを有する口縁部の破片で、器厚を厚くしながらやや外傾して立ち上がる。

2群b(20) 沈線によって渦巻状に区画された底部の破片である。

**第33号土壇**

覆土上層から中層にかけて縄文土器片、土製品を出土する。

縄文土器(第83図-1~7)

1群a(1~4) 微隆起線による区画文様を有する。1・2は口縁部の破片で、2には口縁部外側に舌状の突起を有する。3・4は胴部の破片である。

1群b(6) 沈線による区画文様を有する。

1群c(5) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

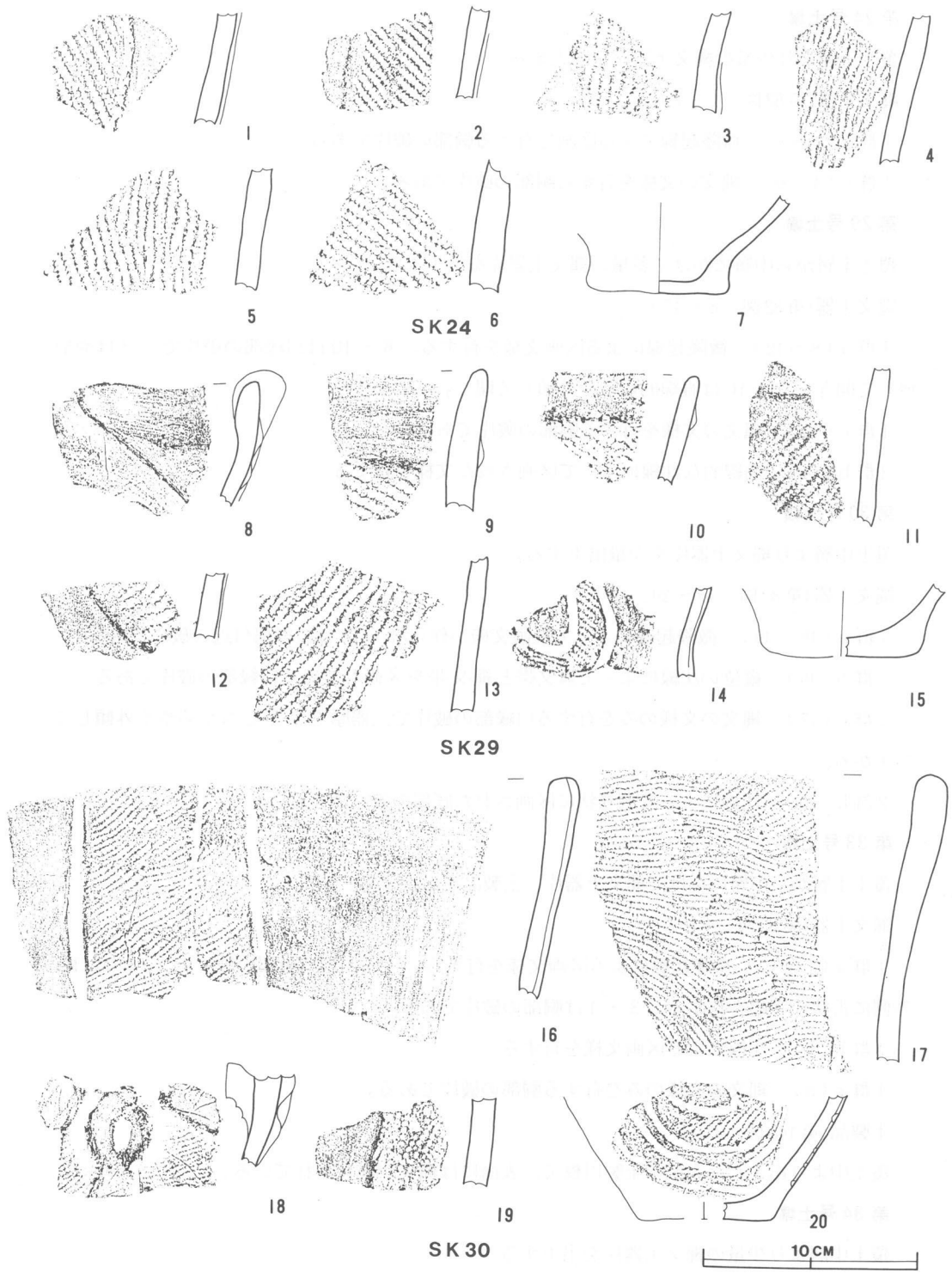
土製品(第145図-21)

覆土中より出土した完形の土製円板で、表面には縄文が施文されている。

**第34号土壇**

覆土中層より少量の縄文土器片を出土する。

縄文土器(第83図-8~11)



第 82 图 第 24 · 29 · 30 号土坑出土土器拓影图

1群 a (8・9) 微隆起線による区画文様を有する口縁部の破片である。

1群 c (10・11) 縄文のみの文様を有する土器で、10は直線的にやや外傾して開く口縁部の破片である。

#### 第36号土壙

覆土中より少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第83図-12～19)

1群 a (12) 微隆起線による区画文様を有する。

1群 c (13～17) 縄文のみの文様を有する胴部の破片である。

2群 b (18) 二本の沈線と、横位の円点列文によって文様が構成されている。

#### 第37号土壙

覆土上層より微量の縄文土器片を出土する。

縄文土器(第83図-20～24)

1群 a (20～22) 微隆起線による区画文様を有する。

1群 b (23) 沈線によって区画文様を有する。二本の懸垂文が配されている胴部の破片である。

1群 c (24) 縄文の文様のみの有する胴部の破片である。

#### 第38号土壙

本土壙の壁下中層より微量の縄文土器片を出土する。

縄文土器(第84図-1～4)

1群 a (2・3) 微隆起線による区画文様を有し、いずれも口縁部付近の破片である。

1群 b (1) 浅い横位の沈線を有する口縁部の破片である。

1群 c (4) 縄文の文様のみの有する胴部の破片である。

#### 第39号土壙

遺物は覆土上層から中層にかけてやや多く縄文土器片を出土する。

縄文土器(第84図-5～18)

1群 a (5～13) 微隆起線による区画文様を有する。5～7は口縁部の破片で、5は波状口縁を呈する。6・7は無文帯下に横位の微隆起線が配されている。8～13は胴部の破片である。

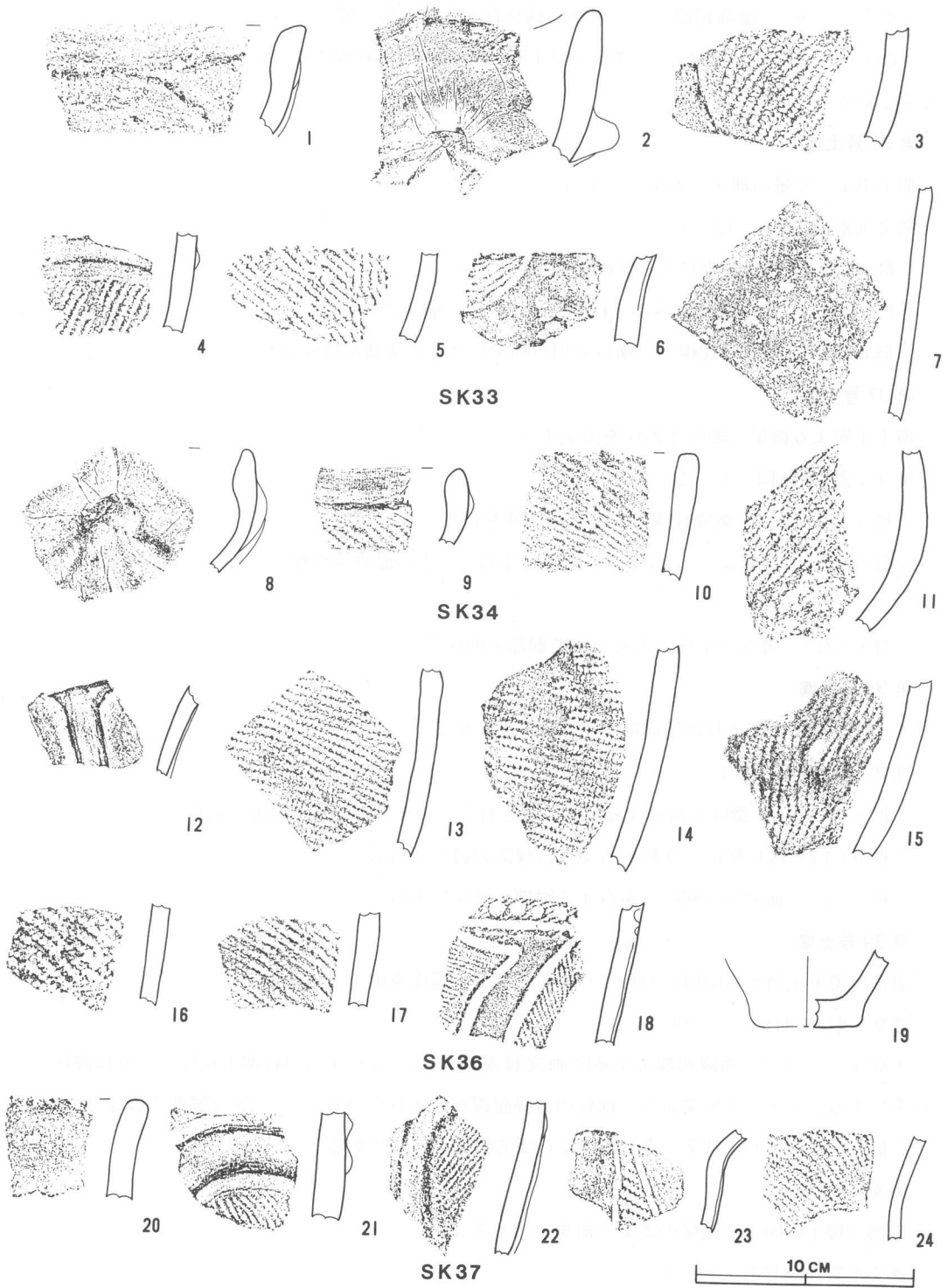
1群 c (14～17) 縄文の文様のみの有する胴部の破片である。

#### 第40号土壙

遺物は覆土中層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第84図-19～26)

1群 a (19～21) 微隆起線による区画文様を有する。19・20は口縁部の破片で、いずれも



第 83 图 第 33 · 34 · 36 · 37 号土坑出土土器拓影图



口辺部に無文帯を有し、縄文との境に横位の微隆起線を有する。

1群b(25) 沈線による区画文様を有する胴部の破片である。懸垂文を有する。

1群c(22～24・26) 縄文のみの文様を有する土器で、22は口縁部の破片である。

#### 第41号土壙

遺物は覆土上層より少量の縄文土器片を出土する。

縄文土器(第85図-1～5)

1群b(1～4) 沈線による区画文様を有する。1は口縁部の破片で、口辺部に無文帯を有し、その下に横位の沈線を配す。胴上位には懸垂文の変化した楕円形状の沈線が施されている。

1群c(5) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第42号土壙

遺物は覆土上層から中層にかけて少量の縄文土器片を出土する。

縄文土器(第85図-6～14)

1群a(6～10) 微隆起線による区画文様を有する。6は波状口縁を呈する口縁部の突起部である。

1群b(11) 懸垂文を有する胴部の破片である。

1群c(12) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

2群b(13・14) 曲線的な沈線を有する土器片で、13は口縁部の破片で、やや外傾して開く。14は胴部の破片である。

#### 第43号土壙

遺物は覆土上層から中層にかけて縄文土器片を少量出土する。

縄文土器(第85図-15～19)

1群a(17・18) 微隆起線による区画文様を有する。17は横位の微隆起線を有する口縁部の破片である。

1群b(15・16) 沈線の文様を有する土器片で、15は波状口縁を呈する口縁部。文様は懸垂文の変化した楕円形である。

1群c(19) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

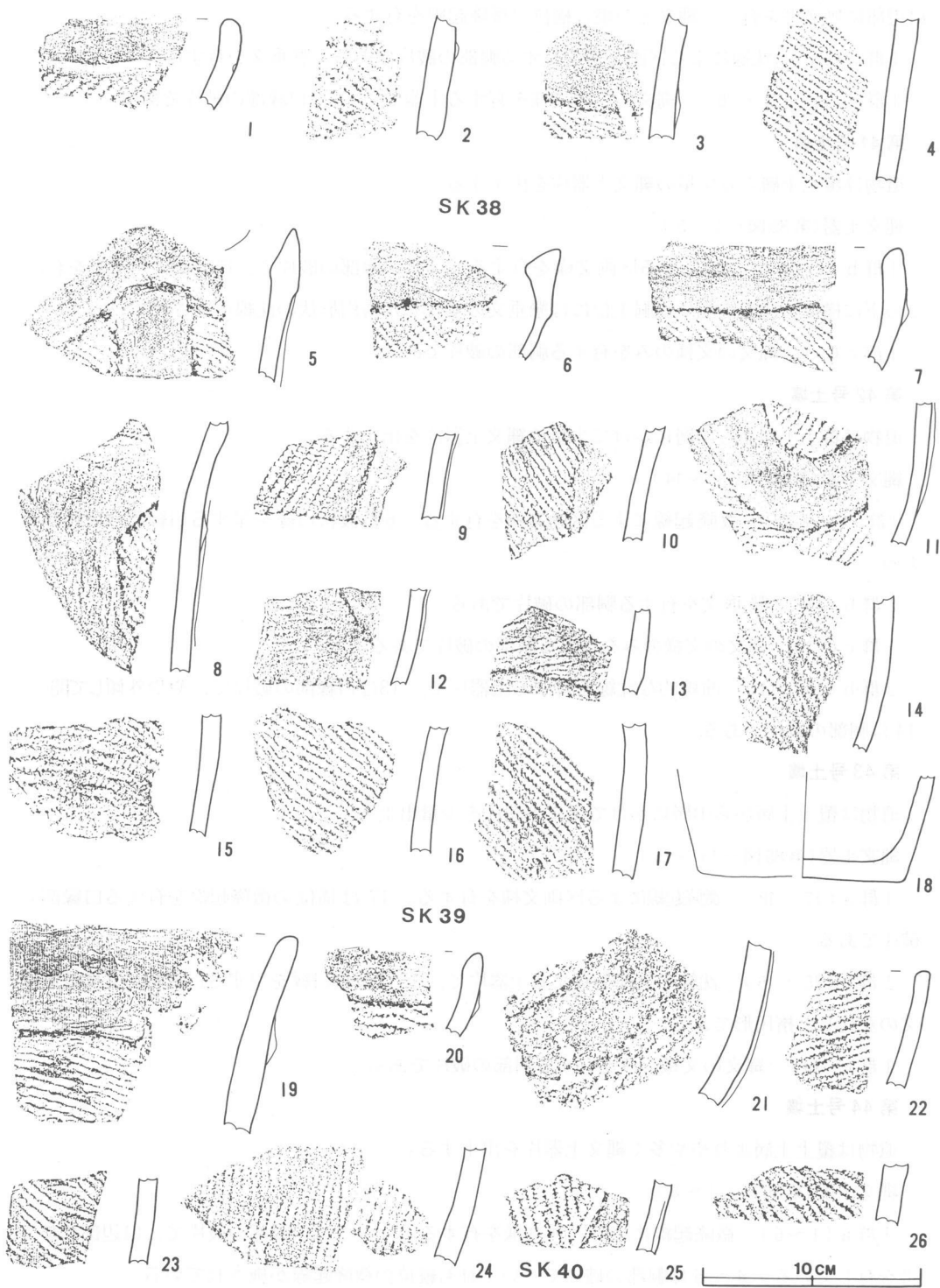
#### 第44号土壙

遺物は覆土上層よりやや多く縄文土器片を出土する。

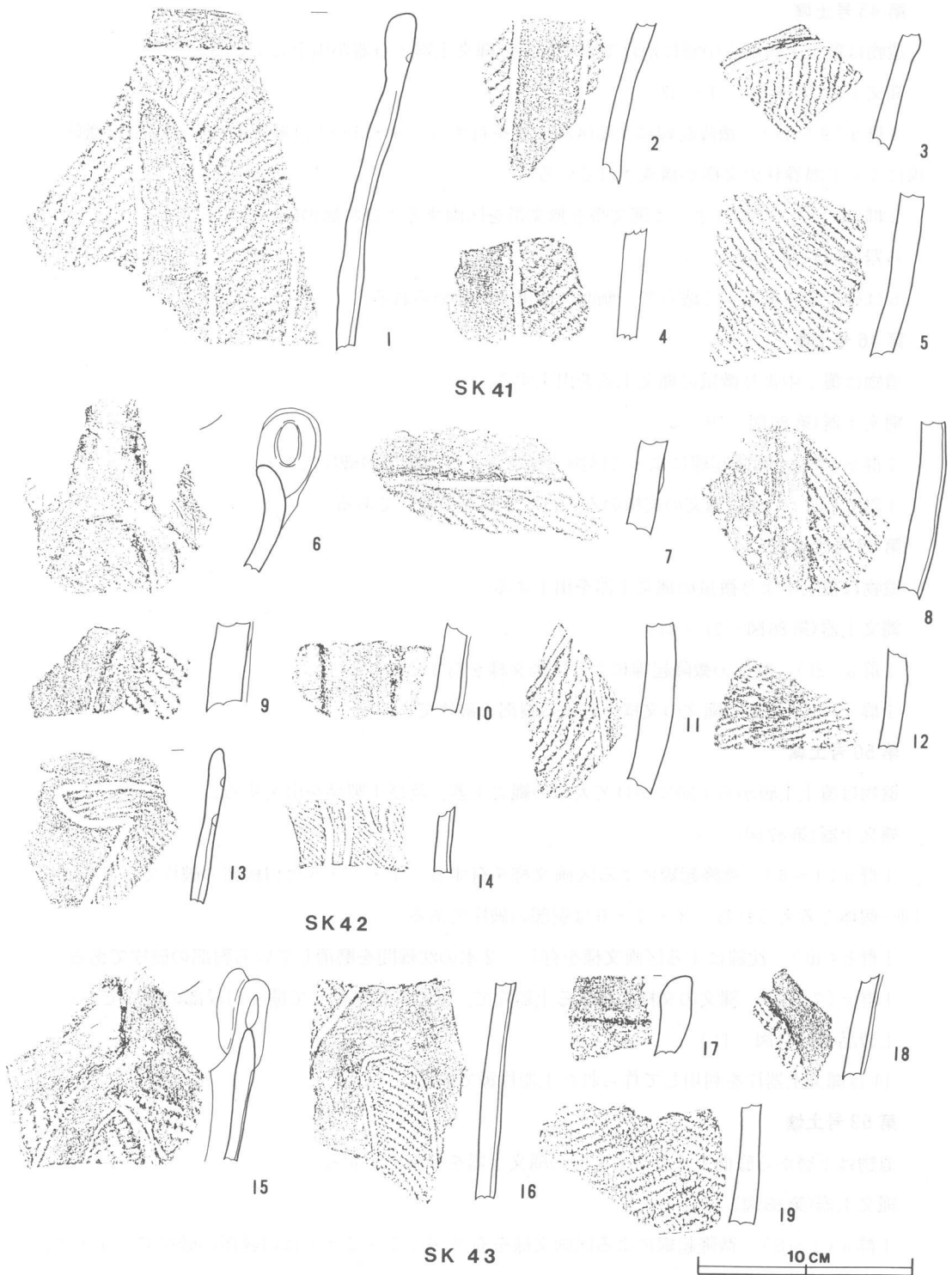
縄文土器(第86図-1～8)

1群a(1～6) 微隆起線による区画文様を有する。1～3は口縁部の破片で、口辺部に無文帯を有している。4～6は胴部の破片で、いずれも縦位の微隆起線が施されている。

1群c(7・8) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。



第 84 图 第 38 ~ 40 号土壤出土土器拓影图



第 85 図 第 41 ~ 43 号土壇出土土器拓影図

#### 第 45 号土壌

遺物は覆土上層から中層にかけてやや多くの縄文土器・石器が出土している。

縄文土器(第 86 図 - 9 ~ 17)

1 群 a (9 ~ 13) 微隆起線による区画文様を有する。9 ~ 11 は口縁部の破片で、9 は微隆起線によって渦巻状の文様が構成されている。

2 群 b (14) 沈線によって縄文帯と無文帯を区画するくびれ部の破片である。

石器(第 143 図 - 6)

6 は砂岩を原石とする敲石で、側面に使用痕が認められる。

#### 第 46 号土壌

遺物は覆土中より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第 86 図 - 18 ~ 20)

1 群 a (18) 微隆起線によって区画文様を有する口縁部の破片である。

1 群 c (19・20) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第 47 号土壌

遺物は覆土中より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第 86 図 - 21 ~ 23)

1 群 a (21) 縦位の微隆起線による区画文様を有する。

1 群 c (22・23) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第 50 号土壌

遺物は覆土上層から下層にかけて大形の縄文土器、及び土製品を出土する。

縄文土器(第 87 図)

1 群 a (1 ~ 6) 微隆起線による区画文様を有する。1・2・5 は口縁部の破片で、2・5 は同一個体と考えられる。3・4・6 は胴部の破片である。

1 群 b (10) 沈線による区画文様を有し、2 本の沈線間を磨消している胴部の破片である。

1 群 c (7 ~ 9) 縄文の文様を有する土器片で、7 はやや外傾して開く口縁部の破片である。

土製品(第 144 図 - 11)

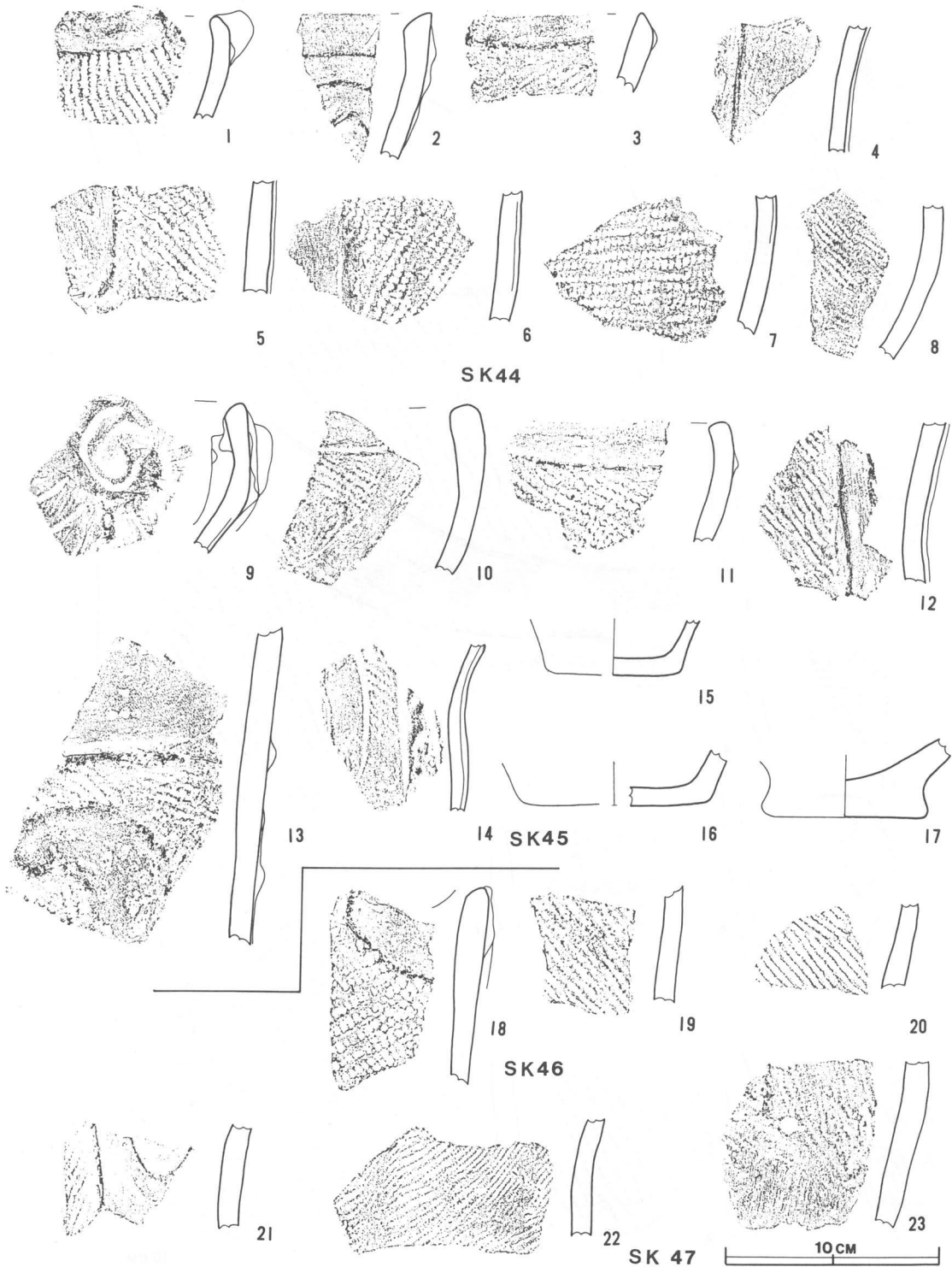
11 は縄文土器片を利用して作られた土器片錘である。

#### 第 53 号土壌

遺物は下層から底面上よりやや大形の縄文土器を少量出土する。

縄文土器(第 88 図)

1 群 a (1 ~ 6) 微隆起線による区画文様を有する。1・2・6 は口縁部の破片で、1・2 は波状口縁を呈する。3 ~ 5 は胴部の破片で、微隆起線によって曲線的な文様が構成され、特に 4・



第86图 第44~47号土坑出土土器拓影图



第 87 图 第 50 号土坑出土土器拓影图



第88图 第53号土壙出土土器拓影图

5は渦巻状を呈する。

#### 第54号土壌

遺物は覆土上層より少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第89図-1~8)

1群a(1~7) 微隆起線による区画文様を有する。1は口縁部の破片で、4~7は微隆起線の側面になぞりが施されている。

1群c(8) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第55号土壌

遺物は覆土上層より微量の縄文土器、及び石器を出土する。

縄文土器(第89図-9~13)

1群a(9~12) 微隆起線による区画文様が施され、9~11は胴部の破片である。

1群c(13) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

石器(第140図-13)

13は流紋岩を原石にして使用した石錘で、各側面に使用痕が認められる。

#### 第56号土壌

遺物は覆土上層より少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第89図-14~28)

1群a(14・15) 微隆起線による区画文様を有し、いずれも口縁部の破片で、口辺部に横位の微隆起線が施されている。

1群b(16~19) 沈線による区画文様を有する。いずれも胴部の破片で、懸垂文が施されている。

1群c(20~27) 縄文の文様を有する土器である。

2群b(28) 曲線的な二本の沈線によって文様構成がなされている胴部の破片である。

#### 第60号土壌

遺物は覆土下層より少量の縄文土器を出土する。

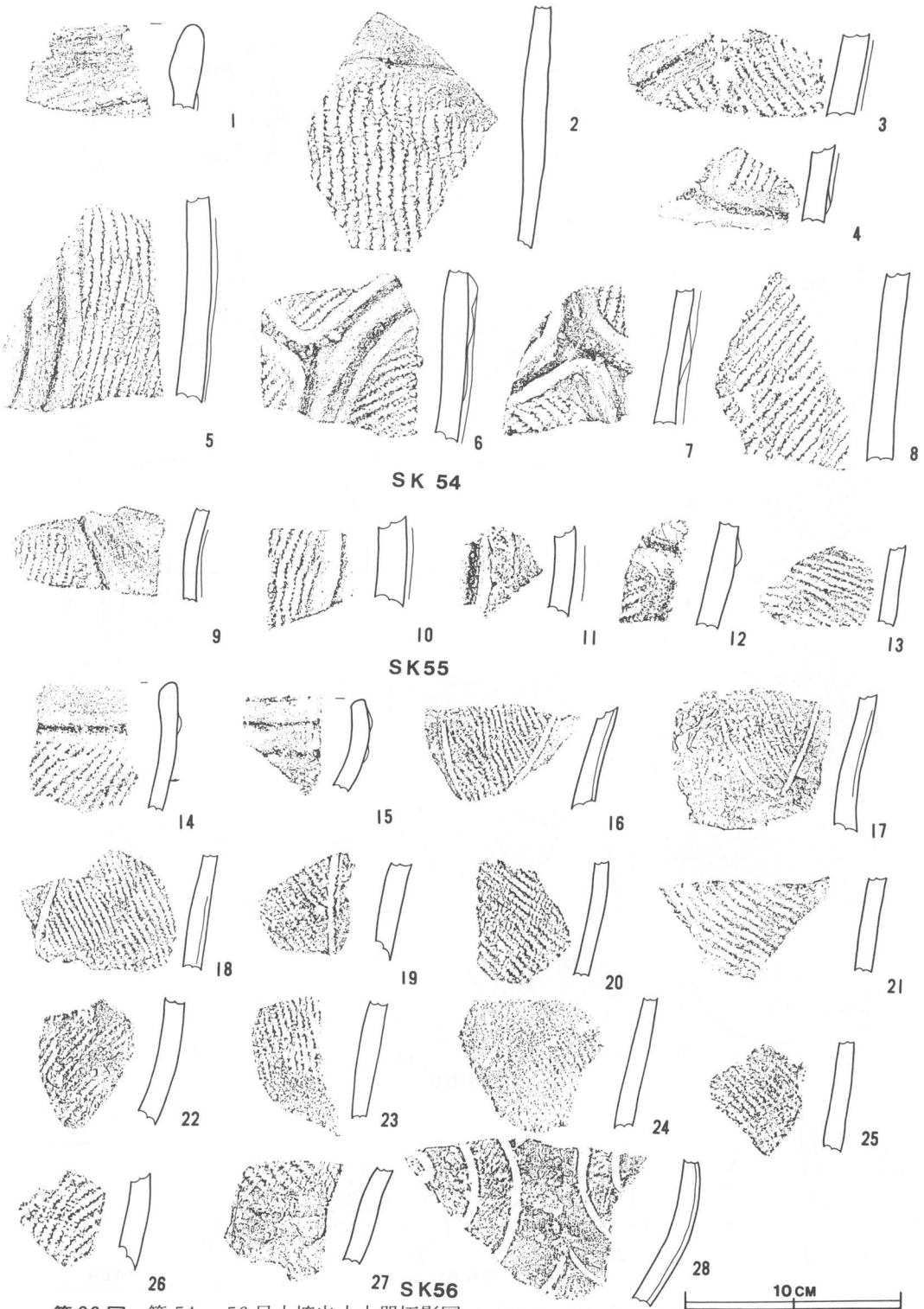
縄文土器(第90図-1~18)

1群a(1~8) 微隆起線による区画文様を有し、1~3は口縁部の突起部である。4~7は口縁部の破片で、いずれも口辺部に無文帯を有し、その下に横位の微隆起線を施している。また6には微隆起線上に舌状の突起が貼り付けられている。

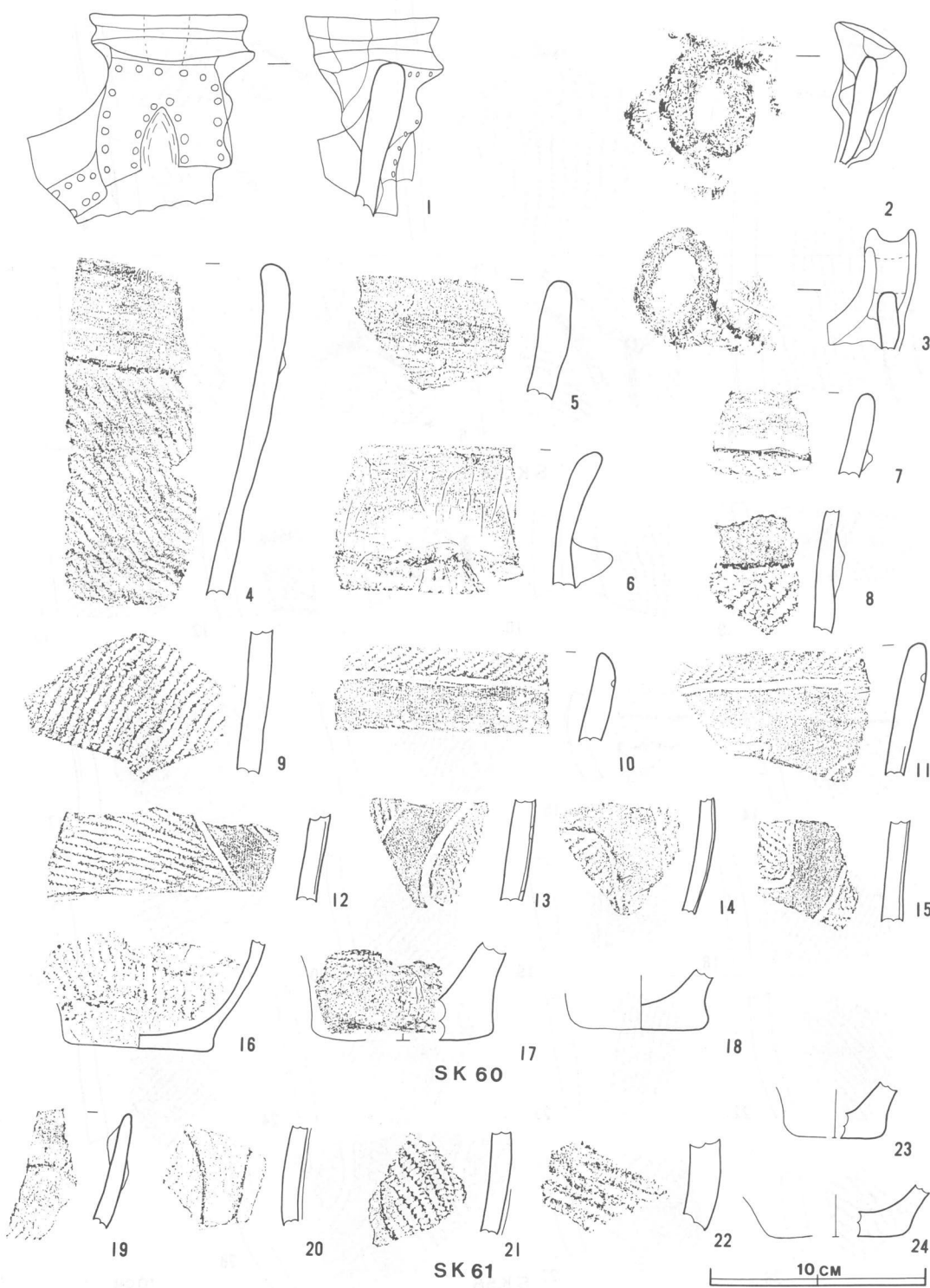
1群c(9) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

2群b(10~15) 沈線による区画文様がなされている。10・11は同一個体と思われる口縁部の破片で、口縁部上位に縄文、その下に無文帯を作り、境に横位の沈線を引いて区別しており、無文帯下には曲線的な沈線が引かれている。12~15は胴部の破片である。





第89图 第54~56号土坑出土土器拓影图



第 90 图 第 60 · 61 号土壤出土土器拓影图

**第 61 号土壙**

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第90図-19～24)

1群a(19～21) 微隆起線が施されている胴部の破片である。

1群c(22) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

**第 62 号土壙**

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第91図-1～4)

1群a(1) 縦位の微隆起線が施されている胴部の破片である。

1群c(2～4) 縄文の文様を有するもの。2・3は口辺部に弱い磨消しがみられる口縁部。

**第 63 号土壙**

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第91図-5～8)

1群a(5～7) 微隆起線による区画文様を有する。5は横位の微隆起線を有する口縁部。7は曲線的な微隆起線の側面に強いなぞりが行われている胴部の破片である。

1群c(8) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

**第 64 号土壙**

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第91図-9～12)

1群a(9) 縦位の微隆起線を有する胴部の破片である。

1群c(10～12) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

**第 65 号土壙**

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第91図-13～15)

1群b(13) 波状口縁を呈する口縁部で、懸垂文の変化した楕円形の文様を有する。

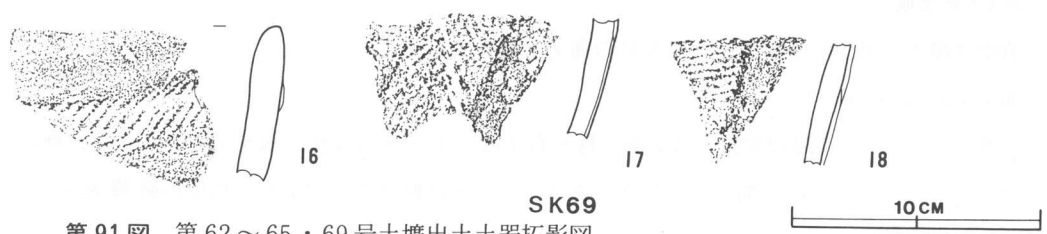
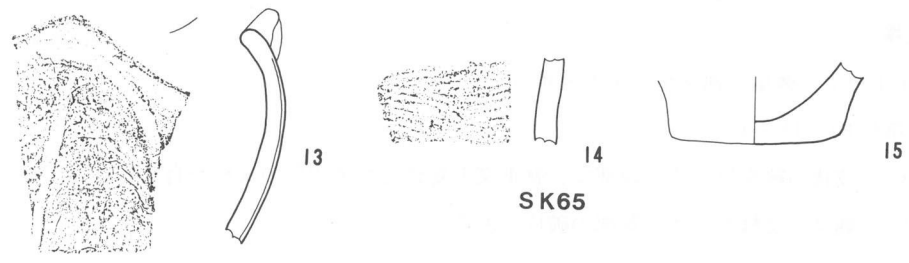
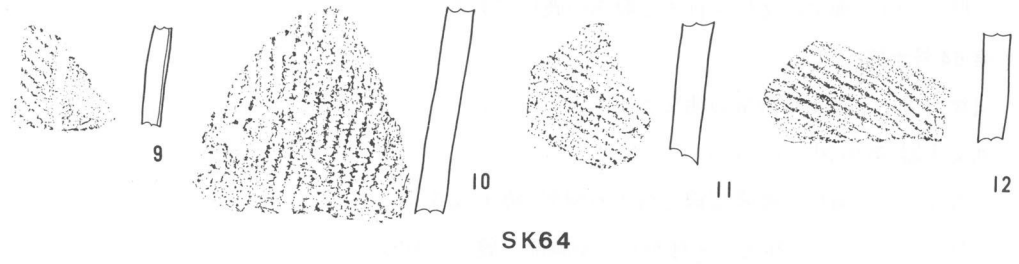
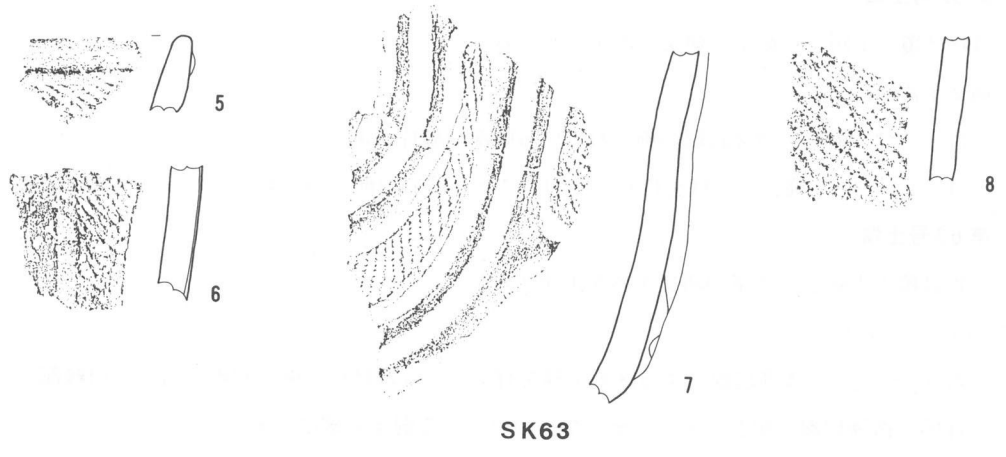
1群c(14) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

**第 67 号土壙**

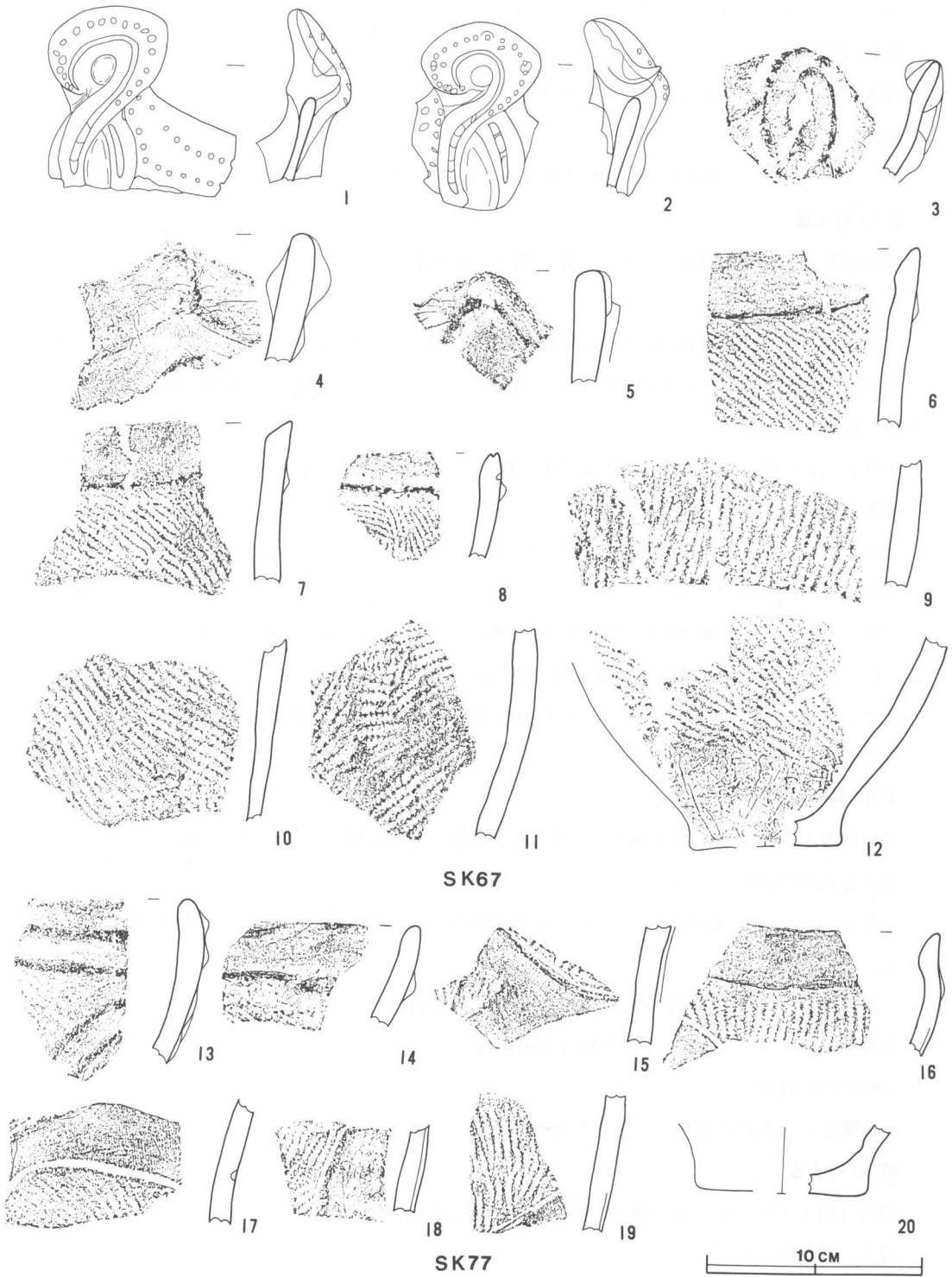
遺物は覆土上層から中層にかけて多量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第92図-1～12)

1群a(1～8) 微隆起線による区画文様を有する。1～5は波状口縁を呈し、1・2は微隆起線によって「8」字状に描いた突起部である。6～8は無文帯と縄文帯を横位の微隆起線によって区画している。



第 91 图 第 62 ~ 65 · 69 号土壤出土土器拓影图



第92图 第67·77号土壙出土土器拓影图

1群c(9～11) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第69号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第91図-16～18)

1群a(16～18) 微隆起線による区画文様を有し、16は口縁部である。

#### 第77号土壙

遺物は覆土上層から中層にかけて少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第92図-13～20)

1群a(13～16) 微隆起線による区画文様がなされ、13・14は口縁部の破片である。13は二本の横位の微隆起線下に曲線的な文様が構成されている。16は横位の微隆起線下に曲線的な沈線が施されている。

1群b(17～19) 沈線による区画文様を有し、いずれも胴部の破片である。

#### 第81号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第93図-1～10)

1群a(1～7) 微隆起線による区画文様を有し、1・2は口縁部の破片である。

1群c(9) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

2群b(10) 曲線的な沈線によって区画文様を有する口縁部の破片で、口辺部に横位の円点列文が施されている。

#### 第89号土壙

遺物は覆土中層から下層にかけて少量の縄文土器、及び土製品を1個出土する。

縄文土器(第93図-11～18)

1群a(11～14) 微隆起線による区画文様を有し、11・12は波状を呈する口縁部の破片である。

1群b(15) 無文帯と縄文との境に浅いなぞりが行われ、沈線状になっている。

1群c(16～18) 縄文の文様を有する胴部破片。

土製品(第144図-5)

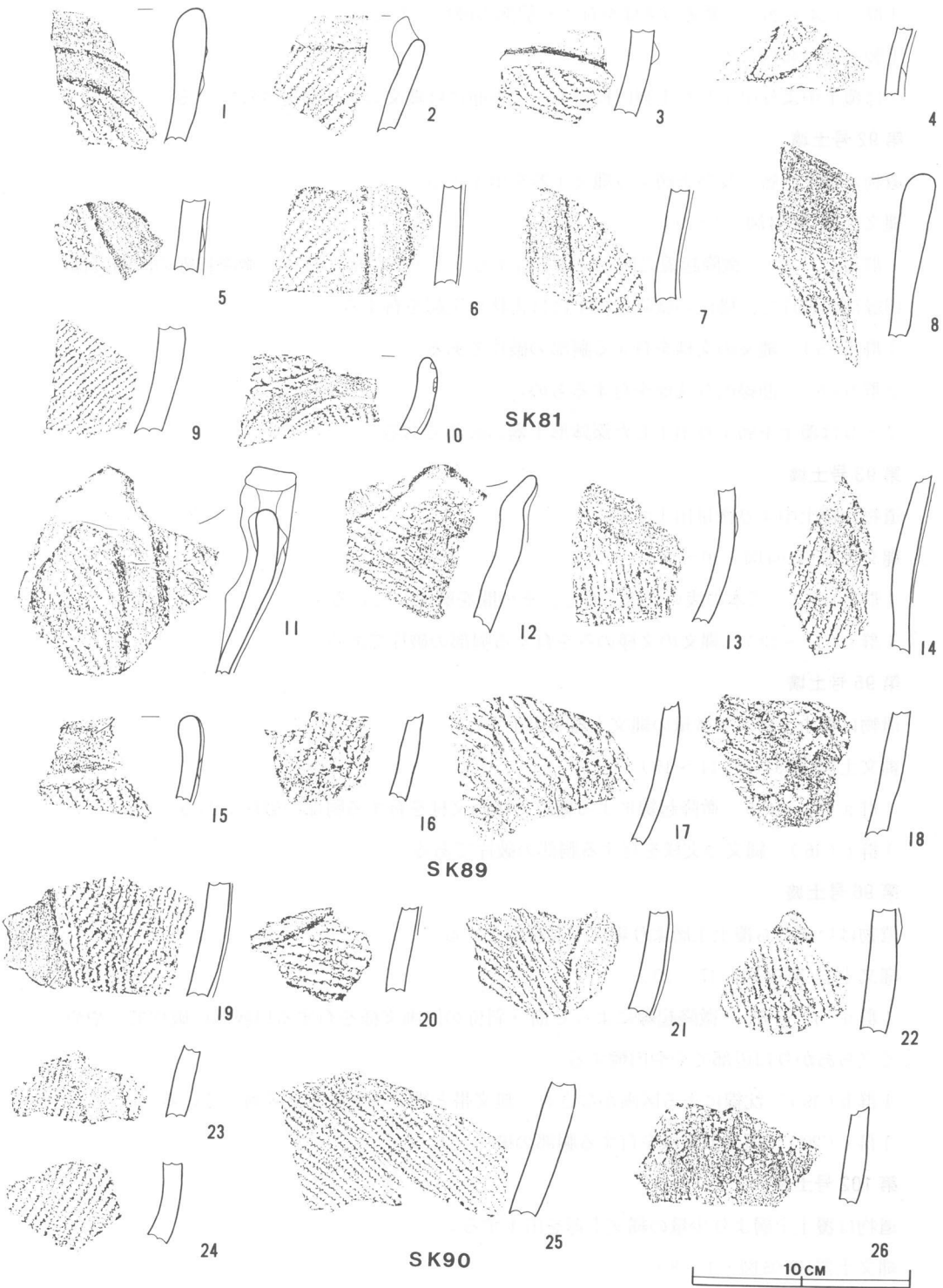
5は縄文の土器片を利用して作られた有孔円板の土製品である。

#### 第90号土壙

遺物は覆土上層より少量の縄文土器、及び土製品を出土する。

縄文土器(第93図-19～26)

1群a(19～23) 微隆起線による区画文様を有する胴部の破片である。



第93图 第81·89·90号土壤出土土器拓影图

1群c(24～26) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

土製品(第146図-2)

2は覆土中より出土した土製円板である。表面には縄文の文様が施されている。

#### 第92号土壙

遺物は覆土上層、及び下層より縄文土器を出土する。

縄文土器(第94図-1～9)

1群a(1～4) 微隆起線の区画文様を有する。1・2は横・縦位の微隆起線の区画文様をもつ口縁部の破片で、横位の微隆起線上には舌状の突起を有する。

1群c(5) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

2群b(6) 曲線的な沈線を有するもの。

7～9は覆土下層より出土した深鉢形土器の底部である。

#### 第93号土壙

遺物は覆土中より微量出土する。

縄文土器(第94図-10～13)

1群b(10) 二本の浅い沈線を有し、その間を磨消している。

1群c(11～13) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第95号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第94図-14～16)

1群a(14・15) 微隆起線による縦位の区画文様を有する胴部の破片である。

1群c(16) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第96号土壙

遺物はいずれも覆土上層より縄文土器を出土する。

縄文土器(第94図-17～20)

1群a(17～18) 微隆起線によって横・斜位の区画文様を有する口縁部の破片で、やや外傾して立ちあがり口辺部でやや内彎する。

1群b(19) 沈線による区画がなされ、無文帯と縄文を懸垂文で区画している。

1群c(20) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

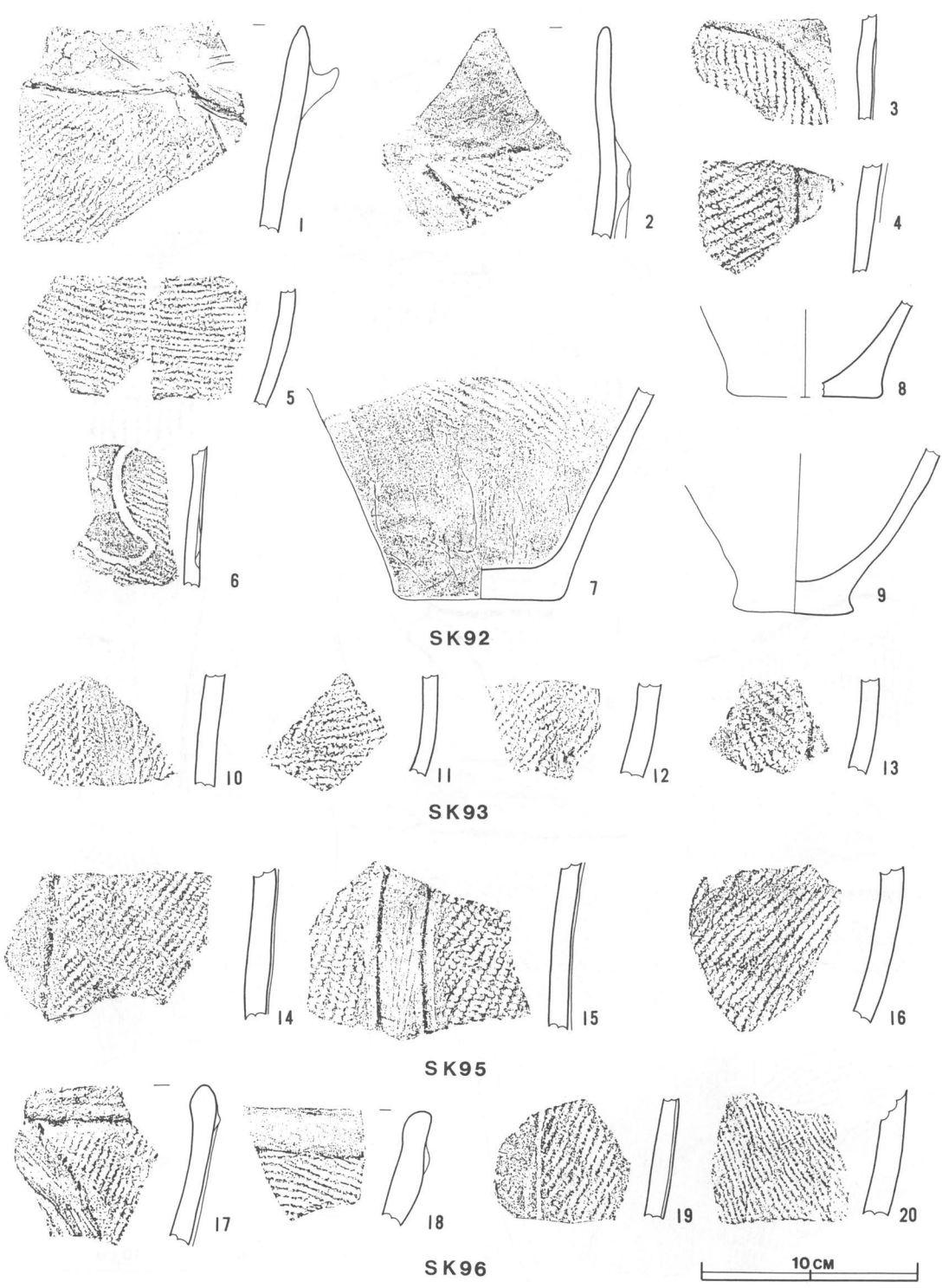
#### 第102号土壙

遺物は覆土上層より少量の縄文土器を出土する。

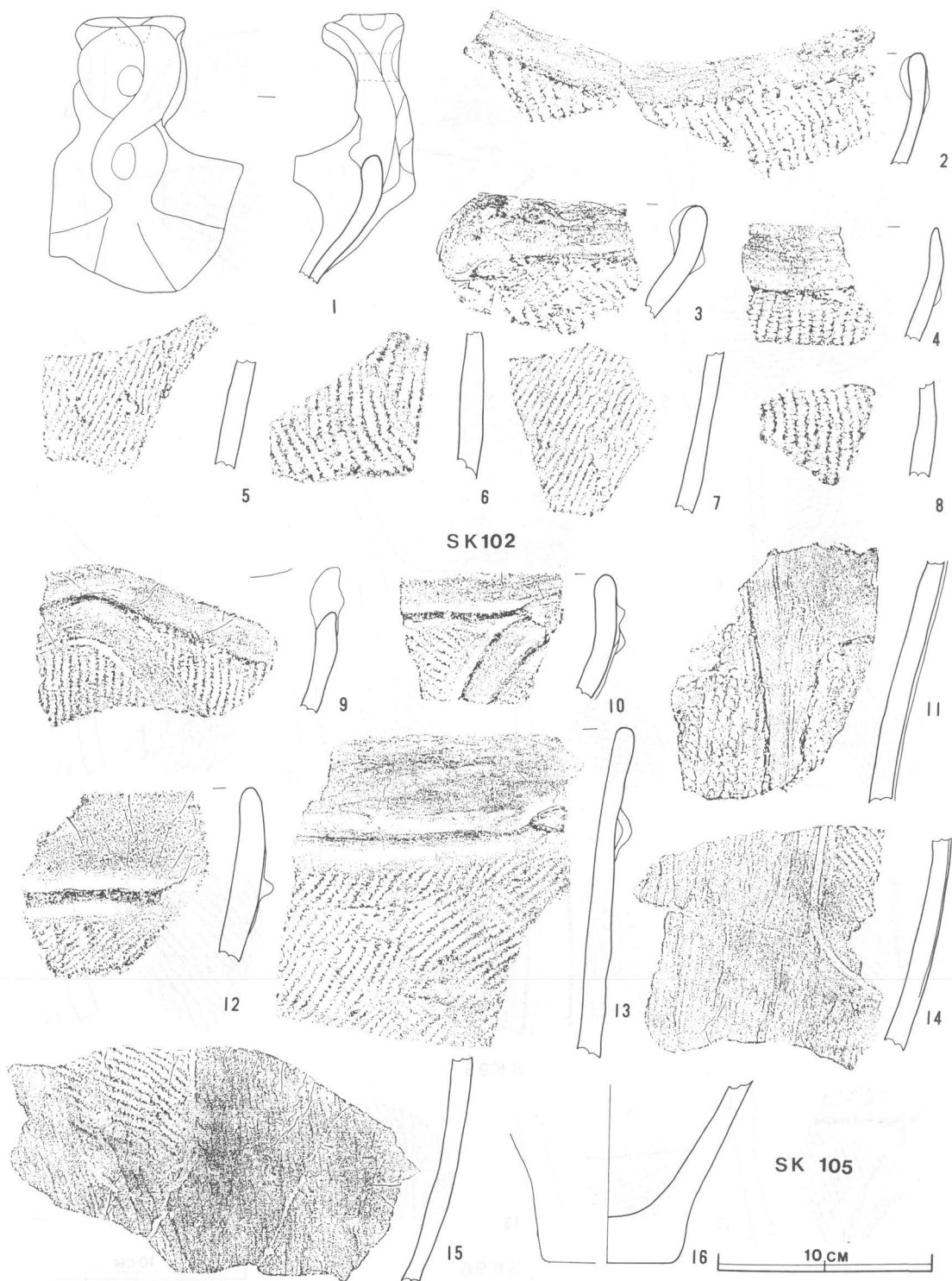
縄文土器(第95図-1～8)

1群a(1～4) 微隆起線によって区画文様がなされ、1は波状を呈する口縁の突起部で、微





第94图 第92・93・95・96号土壙出土土器拓影图



第 95 图 第 102 · 105 号土壙出土土器拓影图

隆起線によって「8」字状に描かれている。2～4も口縁部の破片、口辺部に無文帯を作り、縄文との文様の境に微隆起線が施されている。

1群c(5～8) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第105号土壙

遺物は覆土上層より多量、底面より少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第95図-9～16)

1群a(9～13) 微隆起線による区画文様を有する。9・10・12・13は口縁部の破片で、9は波状を呈し、胴部には懸垂文の変化した曲線的な沈線が施されている。また9・10・12はやや内彎ぎみに開き、13は垂直ぎみに立ちあがった後、口辺部でやや外反する。

1群b(14・15) 沈線による区画文様を有する。懸垂文の変化した楕円形状の沈線が無文帯と縄文との境に施されている。

#### 第106号土壙

遺物は底面上より少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第96図-1～4)

1群a(1～3) 微隆起線による区画文様を有する。1は口辺部で内彎する口縁部の破片である。

1群c(4) 縄文の文様を有する。

#### 第107号土壙

遺物は中層から下層にかけて多量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第96図-5～7, 第97図, 第98図-1～6)

1群a(第96図-6, 第97図-1～6・8・10) 微隆起線による区画文様を有する。第96図-6は覆土中層より出土し、口辺部に無文帯を作った後、横位に2列の円点列文が施されている。第97図-1～6・8・10はいずれも口縁部の破片である。

1群b(第96図-5) 沈線による区画文様を有する。口縁は波状を呈し、2個の突起を有する。文様は縄文を施した後、沈線によって6個の渦巻文が施されている。

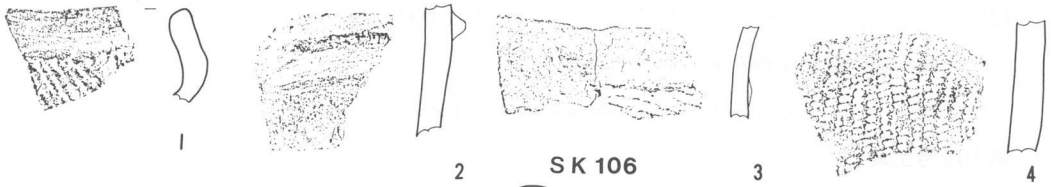
1群c(第96図-6, 第96図-7・9) 縄文の文様を有し、7は浅鉢形土器で、2個の把手を有する。

2群b(第98図-1～4) 沈線による区画文様が構成される。1・2は波状を呈する同一の個体で、曲線的な二本の沈線間に縄文が施されている。

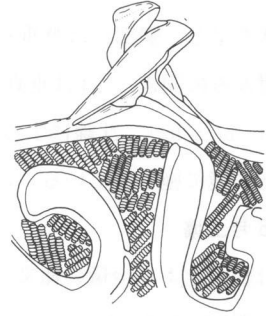
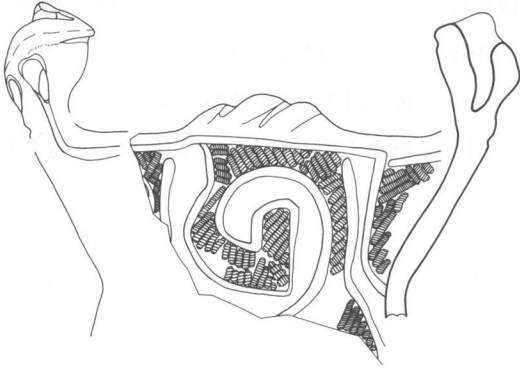
#### 第108号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

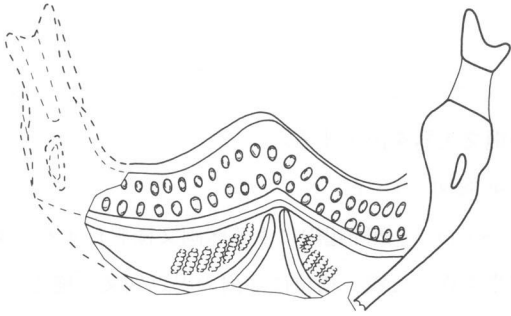
縄文土器(第98図-7～9)



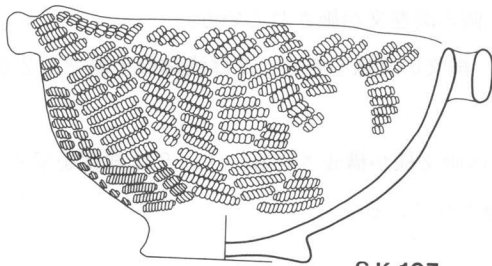
SK 106



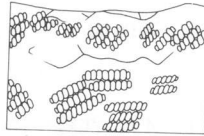
5



6



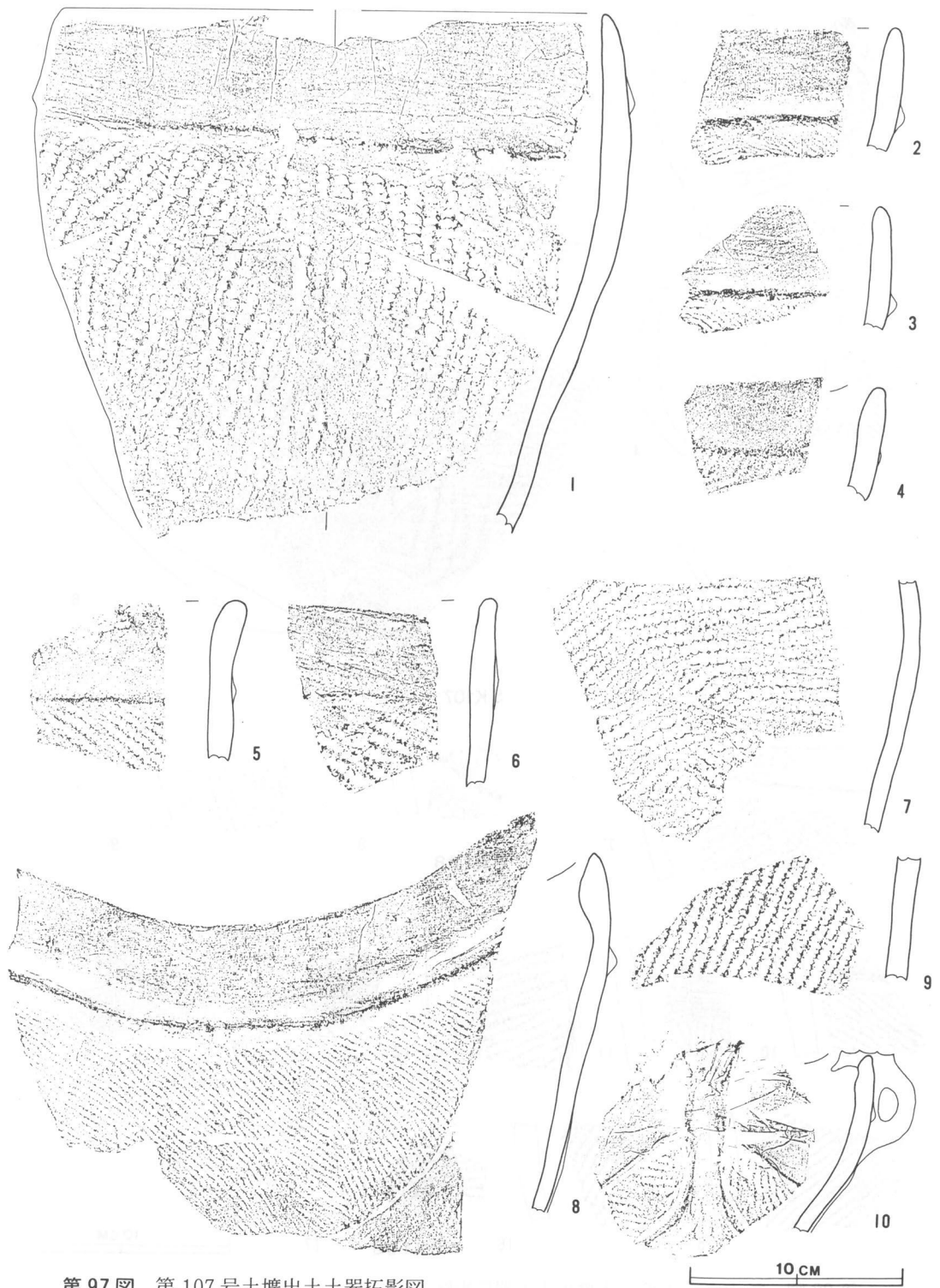
SK 107



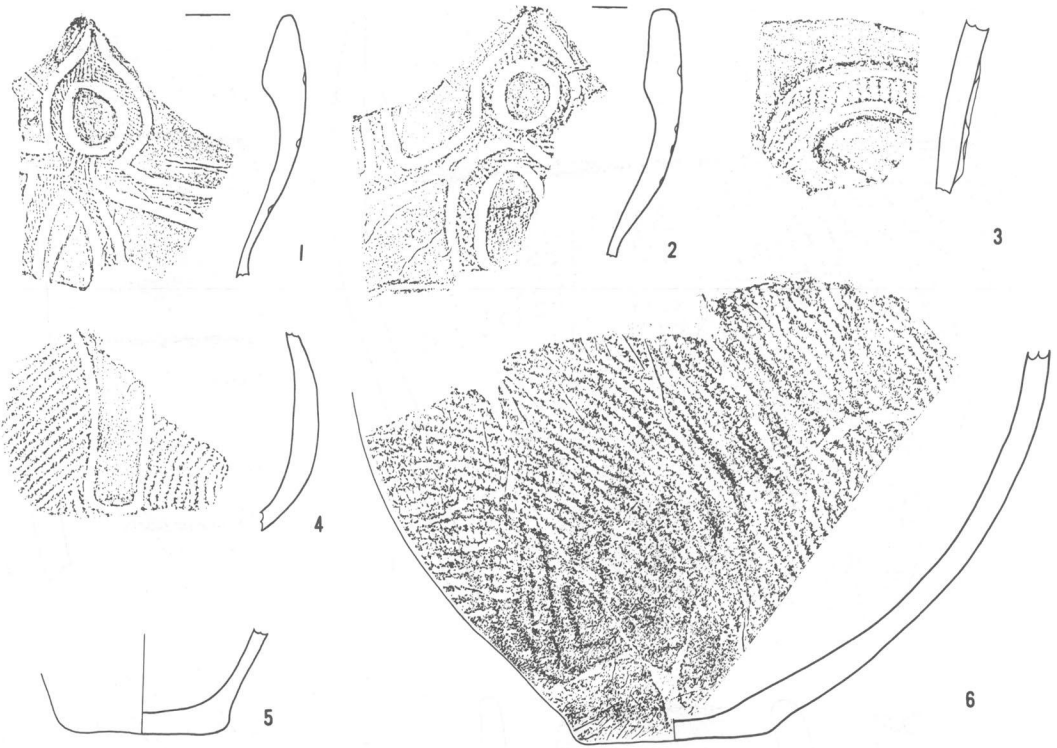
7



第 96 图 第 106 · 107 号土坑出土土器拓影图



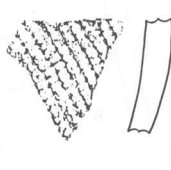
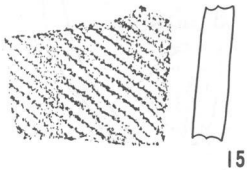
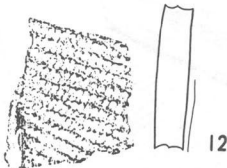
第97图 第107号土壙出土土器拓影图



SK107



SK108



SK109



第98图 第107~109号土壤出土土器拓影图

1群 a(7・8) 微隆起線による区画文様を有する。7は口縁部の破片で、横位の微隆起線下に縄文が施されている。

1群 c(9) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第109号土壌

遺物は覆土中層より少量の縄文土器、及び土製品を出土する。

縄文土器(第98図-10～17)

1群 a(10～13) 微隆起線による区画文様を有する。

1群 c(15～17) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

土製品(第146図-1)

1は覆土上層より出土した土製円板である。

#### 第110号土壌

遺物は覆土上層から中層にかけて多量の縄文土器、及び石器を出土する。

縄文土器(第99図)

1群 a(1～11) 微隆起線による区画文様を有し、1～4は口縁部の破片である。5～12は胴部の破片で、5・7は微隆起線によって「H」文が構成されている。

1群 b(14) 横位の沈線が施されている口縁部の破片で、直線的に外傾して開く。

1群 c(12・13・15・16) 縄文の文様のみを有し、12はやや外傾して立ちあがる口縁部。

1群 e(17) 櫛歯状の沈線を有する。

石器(第143図-7～10)

7～10はいずれも敲石で、自然石の中央部にいずれも敲痕が認められる。7・9・10の側面には磨痕が認められ、原石は砂岩・閃緑岩である。

#### 第114号土壌

遺物は覆土上層より微量の縄文土器片を出土する。

縄文土器(第100図-1～4)

1群 a(2・3) 微隆起線による区画文様を有する胴部の破片である。

1群 b(1) 沈線による区画文様を有する胴部の破片で、文様は二本の曲線的な沈線間を磨消して無文帯にしている。

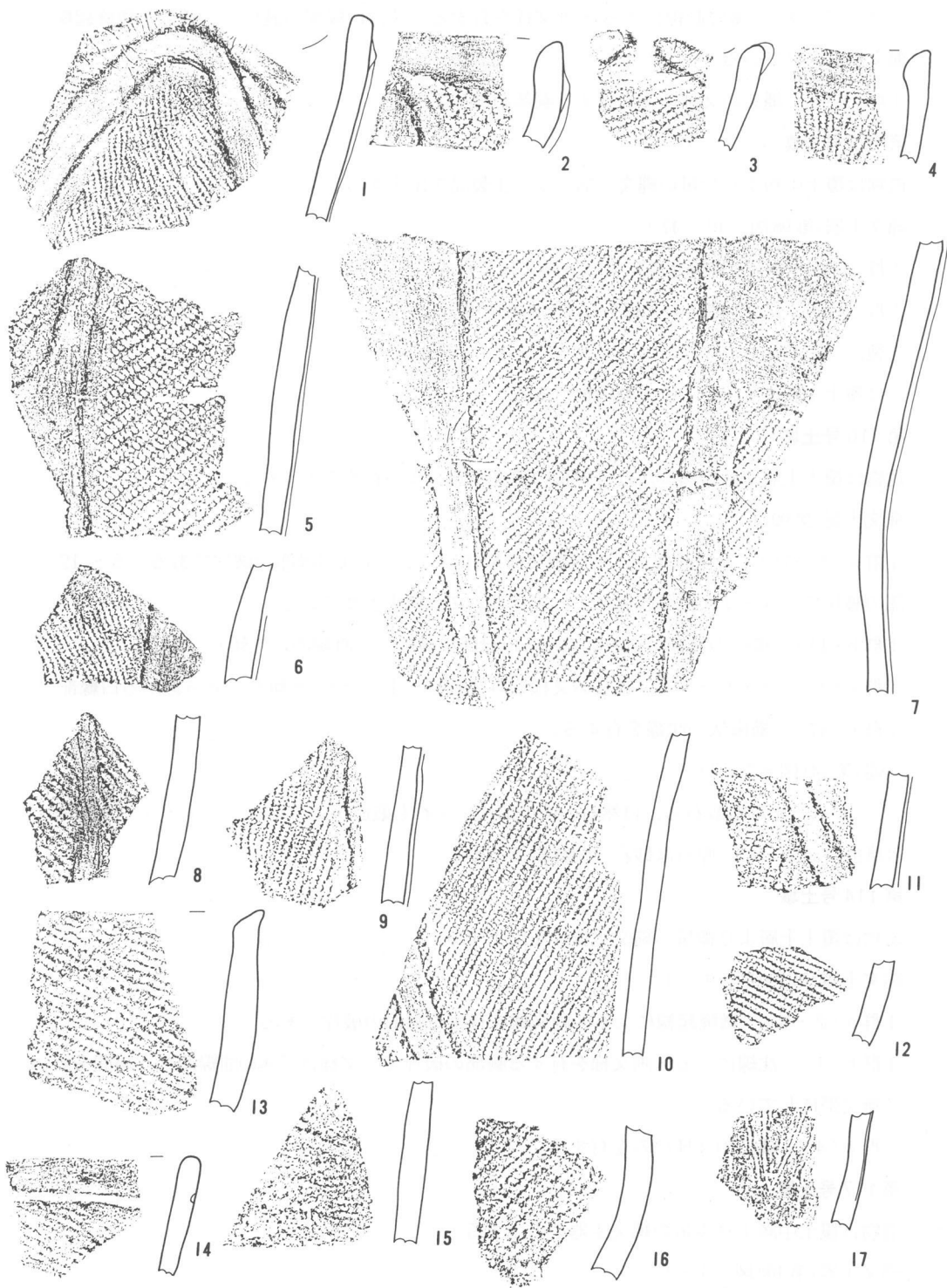
1群 c(4) 縄文の文様のみを有する。

#### 第117号土壌

遺物は覆土中層より少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第100図-5～15)

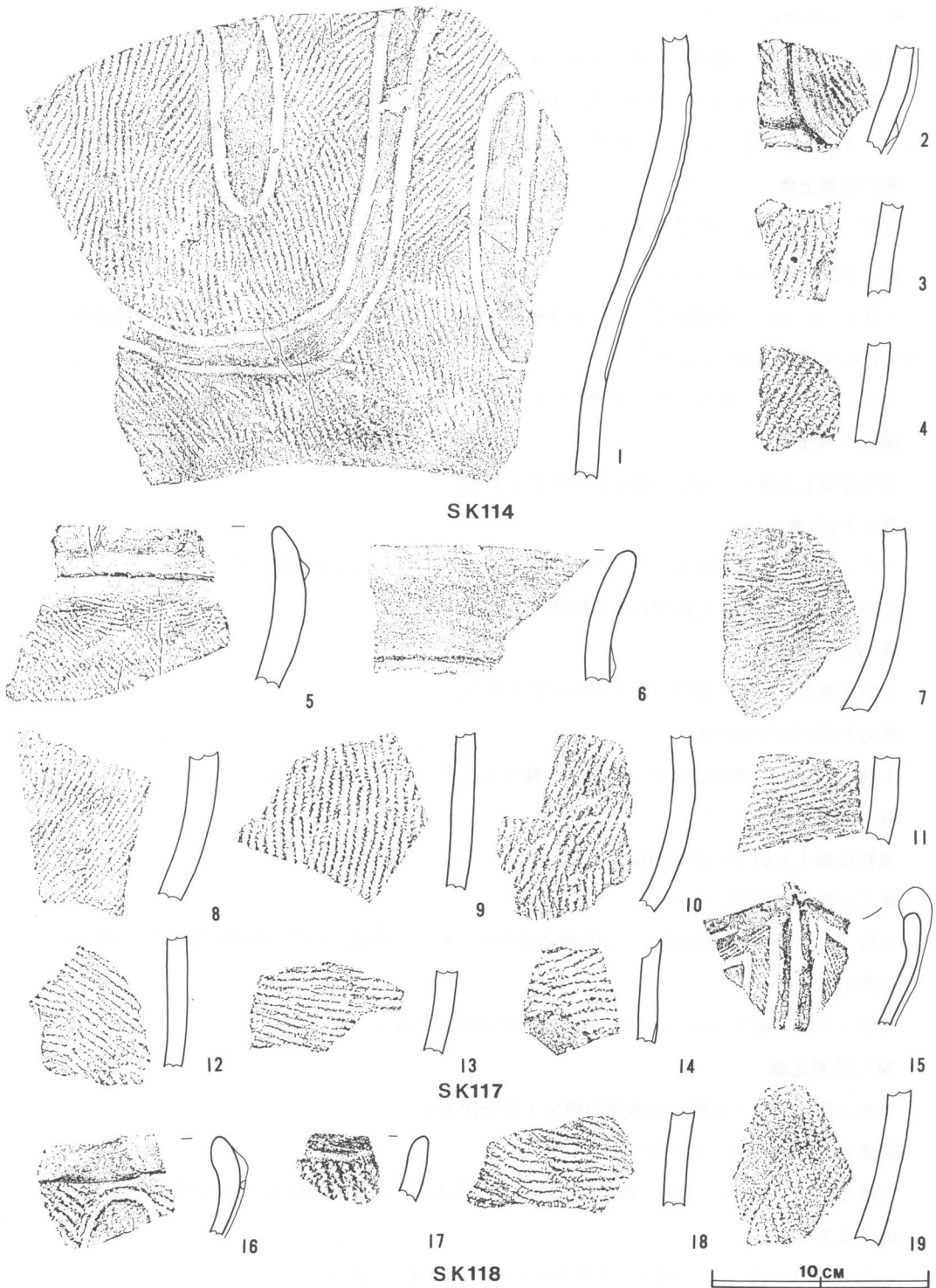
1群 a(5・6) 横位の微隆起線による区画文様を有し、いずれも口縁部の破片である。5は



第 99 图 第 110 号土壤出土土器拓影图

10 CM





第100图 第114・117・118号土坑出土土器拓影图

内彎し、6は外反して開く。

1群c(7～14) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

2群b(15) 沈線による区画文様を有する口縁部の破片で、波状を呈し、沈線によって縄文と、無文帯を区画している。口唇部には突起が貼り付けられている。

#### 第118号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第100図-16～19)

1群b(16・17) 沈線によって区画文様を有する口縁部の破片で、16は懸垂文の変化した楕円形状の文様が描かれている。

1群c(18・19) 縄文のみの文様を有する胴部の破片である。

#### 第119号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第101図-1～3)

1群a(1・2) 微隆起線による区画文様を有する。1は口縁突起部の破片である。

1群c(3) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第122号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第101図-4～6)

1群a(4・5) 微隆起線による区画文様を有する。4は口縁部の破片である。

#### 第124号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第101図-7～9)

1群a(7・8) 微隆起線による区画文様が作られ、7は横・斜位の微隆起線が施され、その内部を磨消している。

1群c(9) 縄文のみの文様を有する胴部の破片である。

#### 第125号土壙

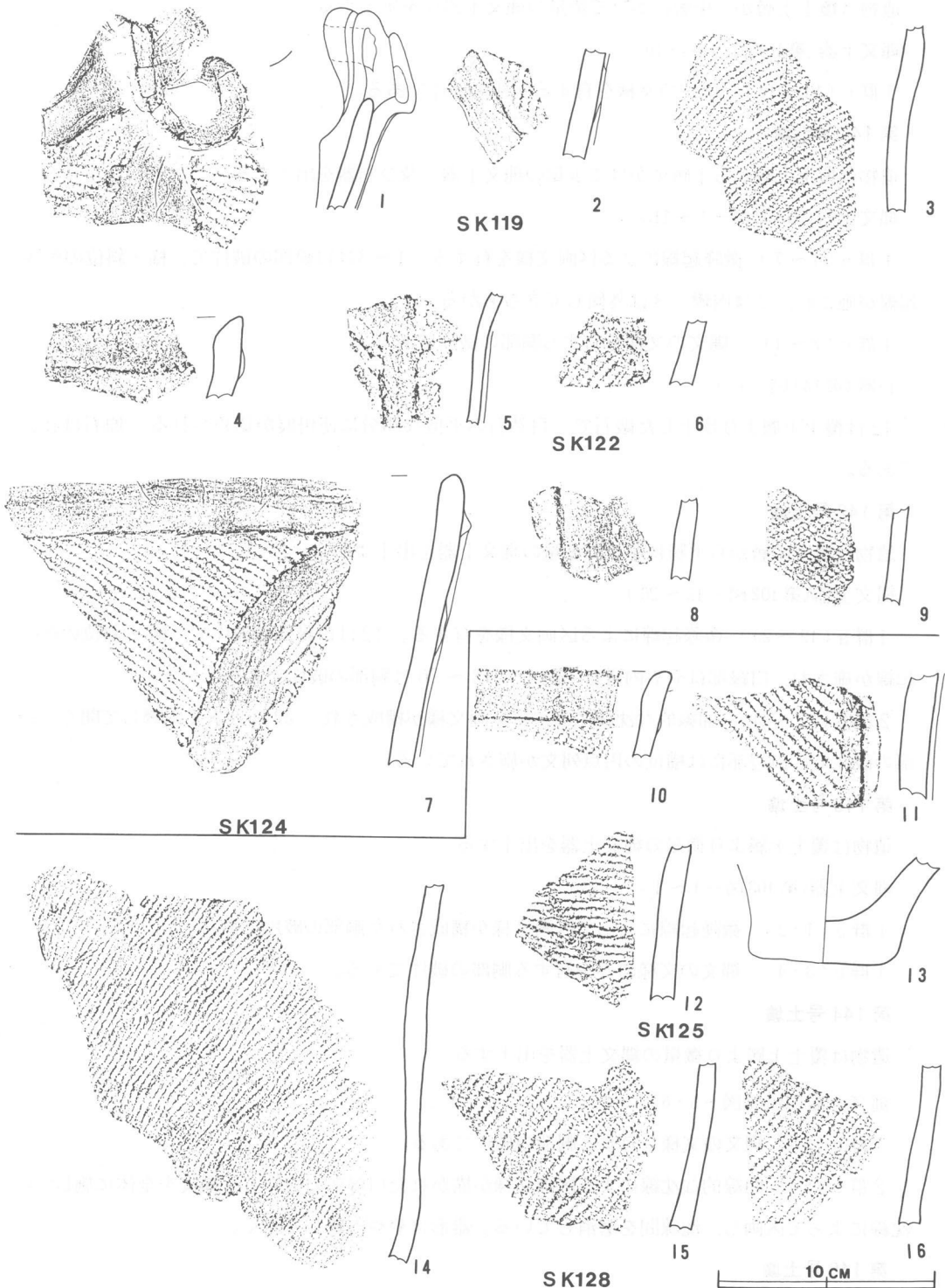
遺物は覆土上層と下層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第101図-10～13)

1群a(第101図-10・11) 微隆起線による区画を有し、10は横位の微隆起線を有する口縁部の破片である。

1群c(第101図-12) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第128号土壙



第101図 第119・122・124・125・128号土壙出土土器拓影図

遺物は覆土上層から中層にかけて微量の縄文土器片を出土する。

縄文土器(第101図-14～16)

1群c(14～16) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第141号土壌

遺物は覆土上層から下層にかけて少量の縄文土器、及び石器を出土する。

縄文土器(第102図-1～11)

1群a(1～7) 微隆起線による区画文様を有する。1～3は口縁部の破片で、横・斜位の微隆起線が施され、2は内彎、3は外傾して立ちあがる。

1群c(8～10) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

石器(第143図-12)

12は覆土上層より出土した敲石で、自然石の平坦な部分に使用痕が認められる。原石は砂岩である。

#### 第142号土壌

遺物は覆土中層から下層にかけて多量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第102図-12～26)

1群a(12～20) 微隆起線による区画文様を有する。12は口縁部の破片で、横・斜位の微隆起線が施され、口縁部はやや内彎して開く。13～20は胴部の破片である。

2群b(21～24) 曲線的な沈線によって区画文様が構成され、22は大きく内彎して開く口縁部の破片で、口辺部には横位の円点列文が施されている。

#### 第143号土壌

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第103図-1～4)

1群a(1・2) 微隆起線によって区画文様が構成された胴部の破片である。

1群c(3・4) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第144号土壌

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

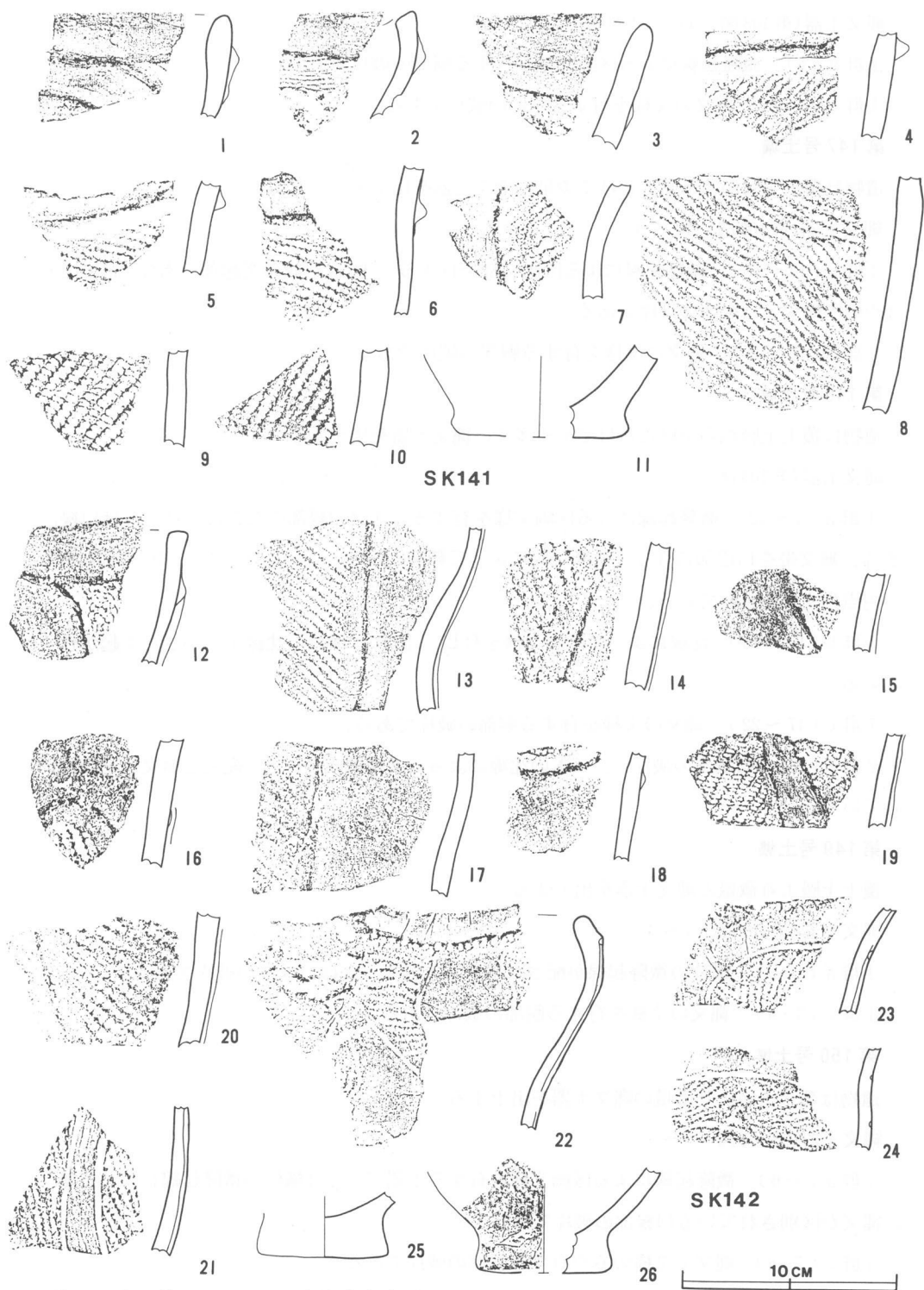
縄文土器(第103図-5・6)

1群b(6) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

2群b(5) 曲線的な沈線による区画文様が描かれた口縁部の破片で、縄文を全体に施した後、沈線によって区画し、沈線間を磨消している。器形はやや内彎して開く。

#### 第146号土壌

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。



第102図 第141・142号土壇出土土器拓影図

縄文土器(第103図-10~20)

1群a(7) 微隆起線による区画文様を有する胴部の破片である。

1群c(8・9) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第147号土壙

遺物は覆土中層から下層にかけて少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第103図-10~20)

1群a(10~15) 微隆起線による区画文様を有する。10は口縁の突起部であり、11・12・15はやや内彎する口縁部の破片である。

1群c(16~20) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第148号土壙

遺物は覆土上層から下層にかけてやや多くの縄文土器を出土する。

縄文土器(第104図)

1群a(1~12) 微隆起線による区画文様を有する。1は口縁部の突起部。2~8は口縁部の破片、無文帯を口辺部に作り、微隆起線によって縄文と区画している。また3の口辺部には横位の円点列文が施されている。

1群b(13~16) 沈線によって区画文様を有し、16には横位の沈線上に小さな突起が作られている。

1群c(17~22) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

2群b(23) 口縁部の破片で、二本の沈線によって文様構成を行い、縄文と無文部を交互に配している。

#### 第149号土壙

覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第105図-1~4)

1群a(1・2) 横位の微隆起線が配されている土器で、1は口縁部の破片である。

1群c(3・4) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第150号土壙

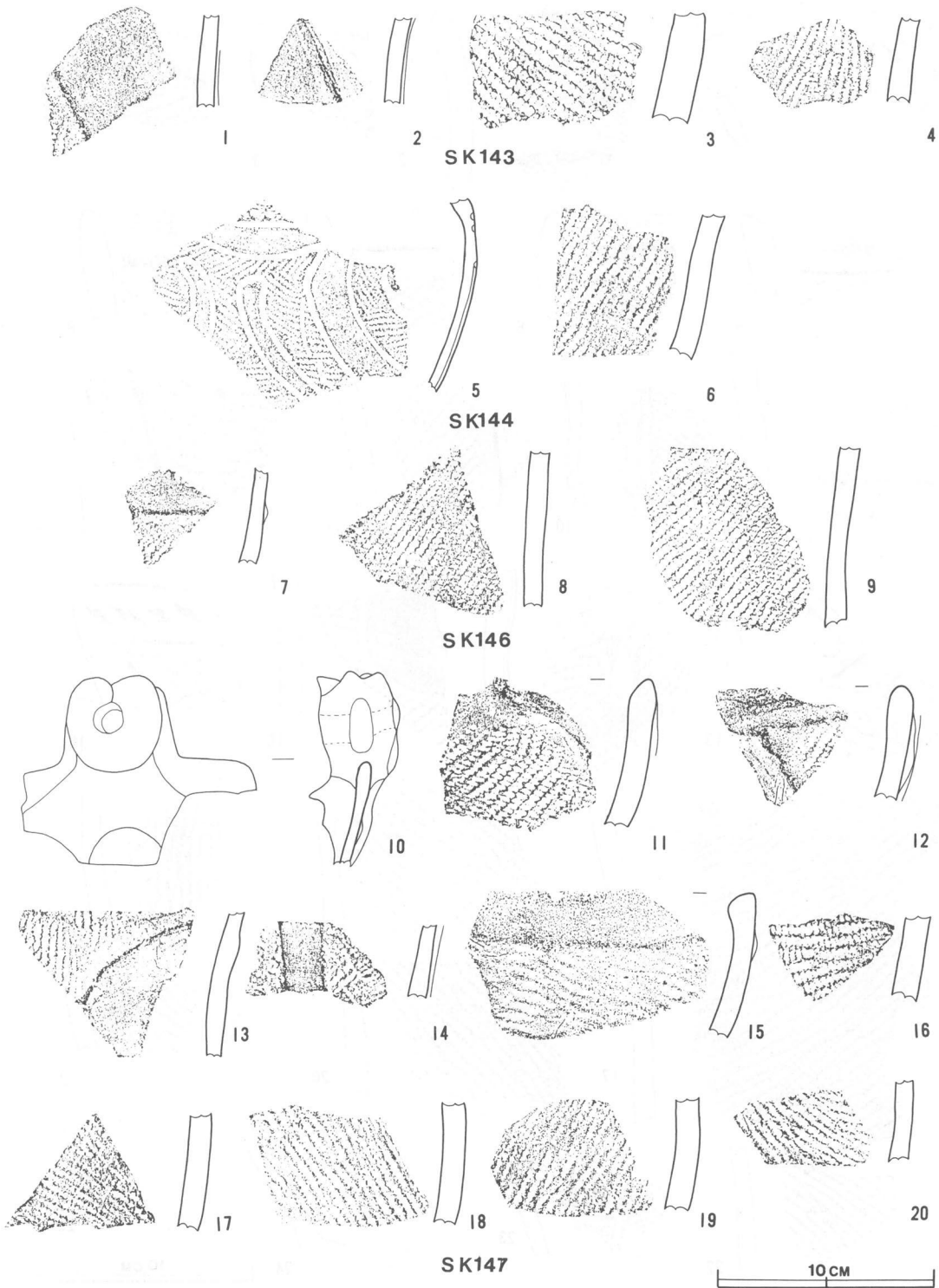
遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第105図-5~8)

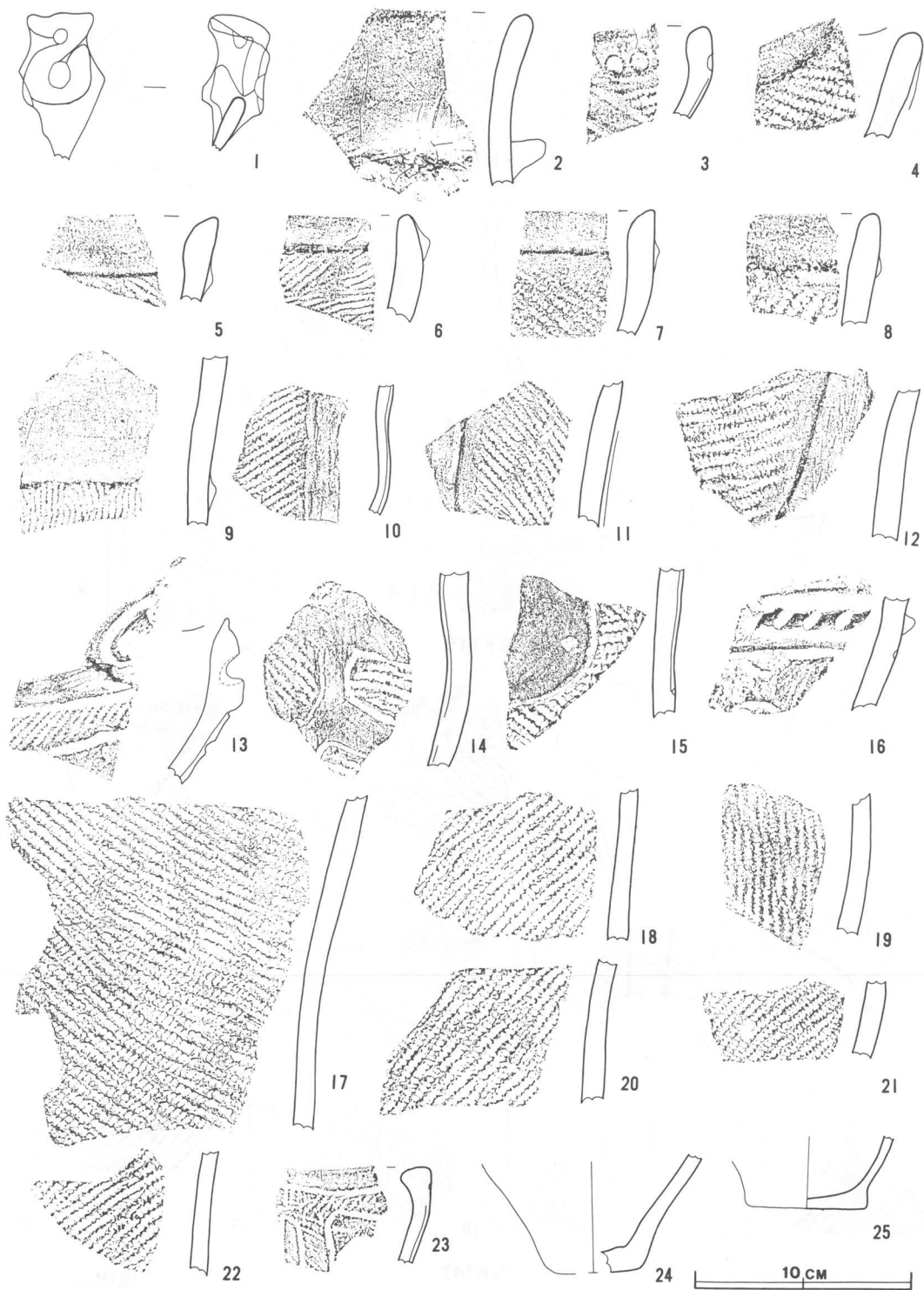
1群a(5・6) 微隆起線による区画文様を有する土器で、5は横位の微隆起線によって無文帯と縄文が区別されている口縁部の破片である。

1群c(7・8) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第151号土壙



第 103 图 第 143 · 144 · 146 · 147 号土壙出土土器拓影图



第 104 图 第 148 号土壤出土土器拓影图



遺物は覆土上層から中層にかけて少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第105図-9~15)

1群a(9・11) 微隆起線による区画文様を有する。9は内彎して立ちあがる口縁部である。

1群b(10) 浅い沈線によって区画文様が施された口縁部の破片である。

1群c(13~15) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第153号土壇

遺物は覆土上層から下層にかけて多量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第105図-16~20)

1群a(16~20) 微隆起線による区画文様を有し、16~19は横位の微隆起線が配されている口縁部の配片である。

#### 第154号土壇

遺物は上層から中層にかけて微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第106図-1~7)

1群a(1~3) 微隆起線による区画文様を有する。1・2は微隆起線によって無文帯と縄文が区別されている口縁部で、口唇部に縄文の施文がみられる。

1群c(5・6) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

2群b(4) 沈線によって区画文様がなされ、縦位の微隆帯の上にスリットが行われている。

#### 第155号土壇

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第106図-8~19)

1群a(8~12) 微隆起線によって区画文様がなされ、8は口縁部の破片。11は縦位の微隆起線上にスリットが施されている。

1群b(4) 沈線による区画文様を有する。

1群c(14~19) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第157号土壇

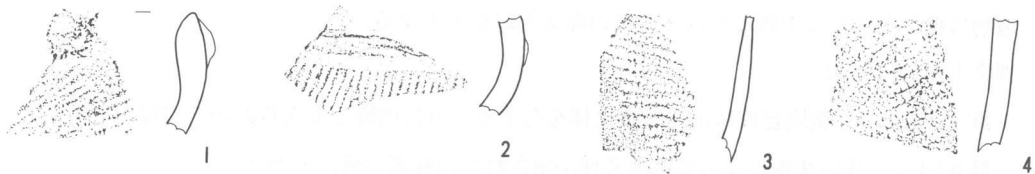
遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第106図-20~26)

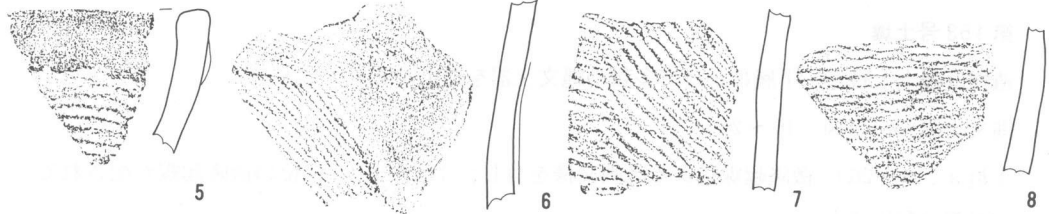
1群a(20~25) 微隆起線による区画文様を有する。20・21は口縁部の破片で、いずれもやや内彎ぎみに立ち上がる。また20・22・23・25は微隆起線の側面をなぞって沈線状になっている。

1群c(26) 羽状に縄文を施した胴部の破片である。

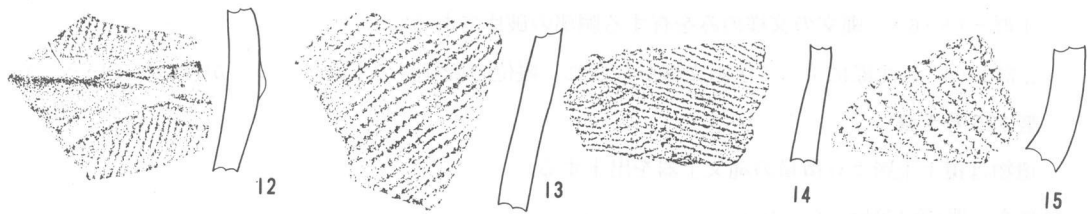
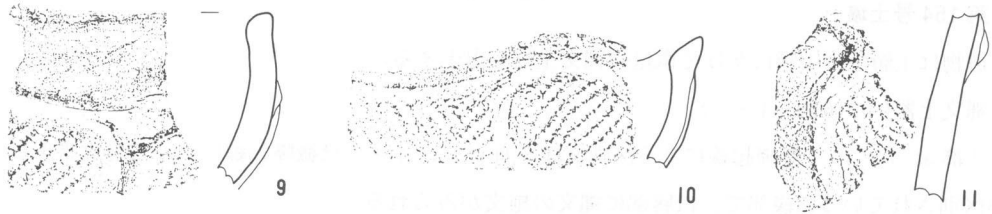
#### 第158号土壇



SK 149



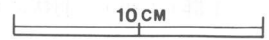
SK 150



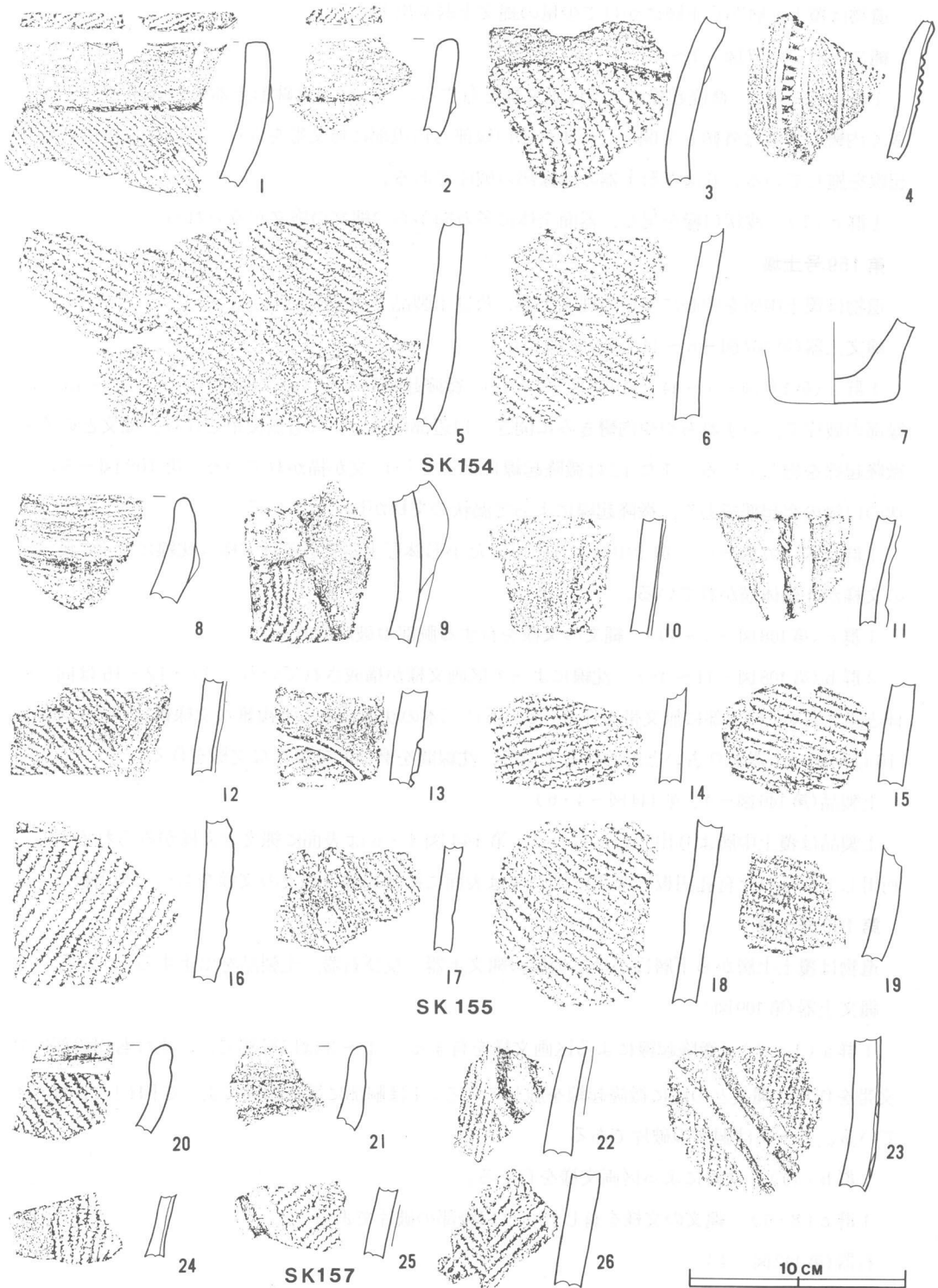
SK 151



SK153



第 105 图 第 149 ~ 115 · 153 号土壤出土土器拓影图



第 106 图 154 · 155 · 157 号土壙出土土器拓影图

遺物は覆土上層から下層にかけて少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第107図-1~7)

1群a(1~6) 微隆起線による区画文様を有する。1・2・4は鉢形土器の口縁部で、1は大きく内彎し、2は外傾して開く。いずれの口縁部も口辺部に無文帯を作り、その下に横位の微隆起線を施している。6は壺形土器の口縁部の破片である。

1群c(7) 波状口縁を呈し、器面全体に多方向からの縄文の施文がみられる。

#### 第159号土壙

遺物は覆土中層を中心に多量の縄文土器、及び土製品2個を出土する。

縄文土器(第107図-8~14, 第108図)

1群a(第107図-9~14, 第108図-1~5) 微隆起線による区画文様を有する。9~13は口縁部の破片で、いずれもやや内彎ぎみに開き、口辺部にはいずれも無文帯を作り、縄文との境に微隆起線を施している。また12は微隆起線によって「Π」文が描かれている。第108図-5は波状の口縁の突起部であり、微隆起線によって渦状の文様が作られている。

1群b(第107図-8) 覆土中層より出土した小形鉢形土器である。文様は沈線によって渦巻状の文様が4個体描かれている。

1群c(第108図-6~10) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

2群b(第108図-11~16) 沈線によって区画文様が構成されている。11・12・15は同一個体と考えられ、口辺部に無文帯を作り、その下に二本の沈線によって複雑な文様構成がみられる。16は前記の土器より古いと思われる土器で、沈線間を磨消して複雑な文様を作る。

土製品(第146図-4, 第144図-4・6)

土製品は覆土中層より出土したもので、第144図4・6は表面に縄文の文様がみられる土器を利用して作られた有孔円板。第146図-4は表面に微隆起線と縄文の文様をもつ土製円板である。

#### 第160号土壙

遺物は覆土上層から下層にかけて少量の縄文土器、及び石器、土製品を出土する。

縄文土器(第109図)

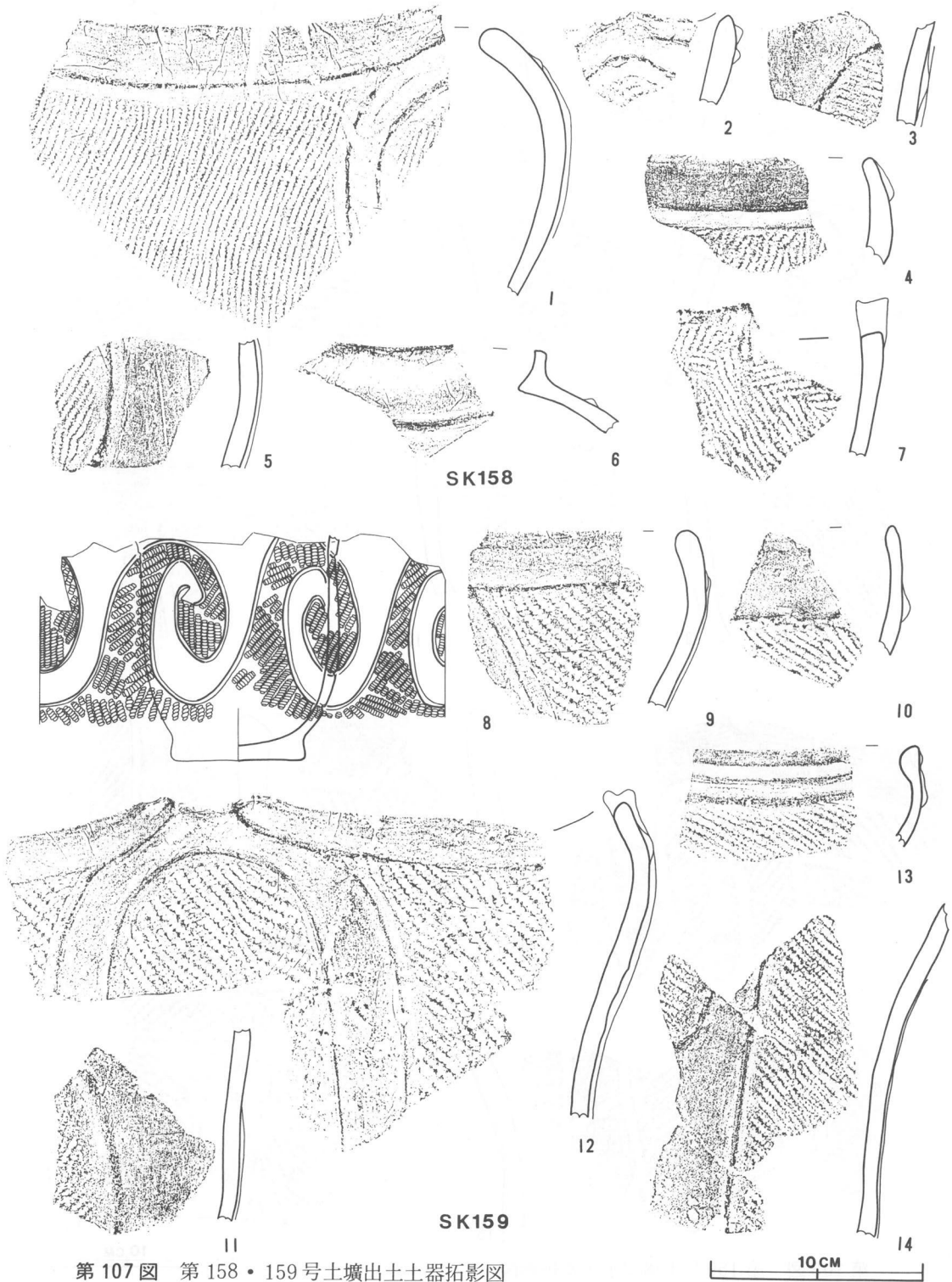
1群a(1~7) 微隆起線による区画文様を有する。1~3は口縁部で、いずれも口辺部に無文帯を作り、縄文との境に微隆起線を施している。1は胴部に微隆起線によって「H」文が描かれている。5~7は胴部の破片である。

1群b(10) 沈線による区画文様を有する。

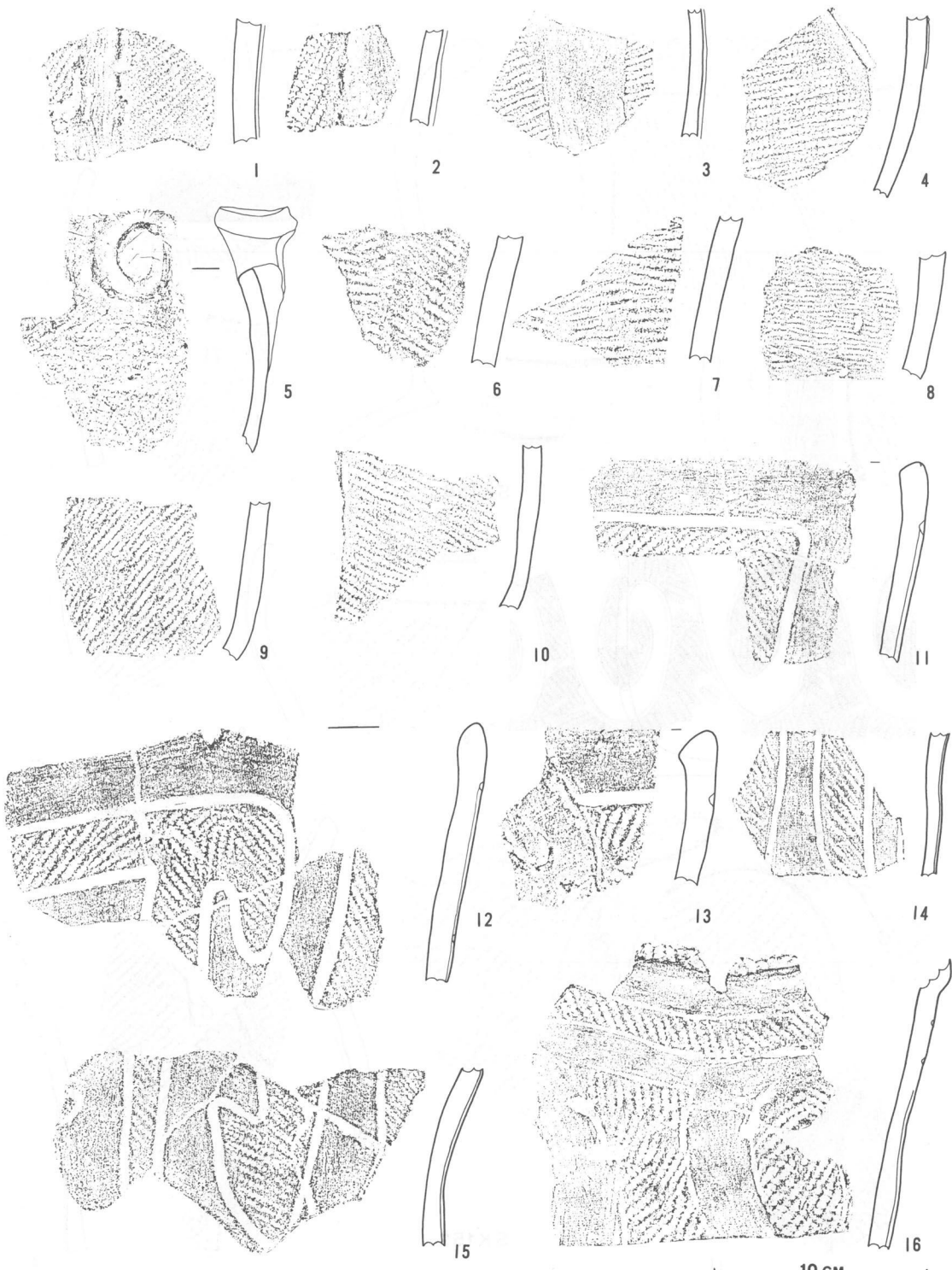
1群c(8・9) 縄文の文様を有し、1は口縁部の破片である。

石器(第142図-4)

4は磨石の破片であり、原石は砂岩である。



第107図 第158・159号土壙出土土器拓影図



第 108 图 第 159 号土坑出土土器拓影图

土製品(第146図-5)

5は覆土中より出土した半完形品の土製円板である。

#### 第161号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第110図-1~5)

1群a(1・2) 微隆起線による区画文様を有する。いずれも胴部の破片である。

1群c(3~5) 縄文の文様をもつ胴部の破片である。

#### 第163号土壙

遺物は中層から下層にかけて少量の縄文土器、及び石器を出土する。

縄文土器(第110図-6~12)

1群a(7~12) 微隆起線によって区画文様を作り、いずれも微隆起線の側面をなぞって沈線状にしている胴部の破片である。

6は覆土上層より出土した楕円形の皿状土器である。

石器(第140図-7)

7は覆土下層より出土した磨製石斧で、側縁には使用した時敲いたと思われる敲痕が認められる。原石は流紋岩である。

#### 第167号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第110図-13~16)

1群a(13) 口辺部に微隆帯を貼り付けてある口縁部の破片である。

1群c(14~16) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第168号土壙

遺物は覆土中層より少量の縄文土器、及び石器を出土する。

縄文土器(第111図-1~14)

1群a(1~11) 微隆起線による区画文様を有する。1は内彎して立ちあがる口縁部の破片で、口辺部に無文帯を作り、その下に微隆起線による「 $\cap$ 」文が描かれている。2~11は胴部片。

1群c(12~14) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

石器(第141図-13)

13は覆土中より出土した石鏃である。両面は丁寧な剝離調整が行われ、側縁は小鋸歯状を呈している。

#### 第169号土壙

遺物上層より微量の縄文土器、及び土製品を出土する。



第 109 图 第 160 号土坑出土土器拓影图



縄文土器(第110図-17・18)

1群a(18) 口辺部に無文帯を作り、縄文との境に微隆起線を施している口縁部。

1群c(17) 縄文の文様をもつ胴部の破片である。

土製品(第146図-6)

6は覆土上層より出土した土製円板であり、表面には縄文・微隆起線が施されている。

#### 第172号土壌

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第110図-19・20)

1群c(19・20) 縄文の文様をもつ胴部の破片である。

#### 第173号土壌

遺物は覆土上層より微量の縄文土器、及び石器を出土する。

縄文土器(第111図-15～18)

1群a(15～17) 微隆起線による区画文様を有する。15は口辺部に無文帯を作り、その下に微隆起線が施されている口縁部である。

1群c(18) 縄文の文様をもつ胴部の破片である。

石器(第143図-13)

13は片側の広い部分全体を磨石として使用したもので、原石は溶岩である。

#### 第175号土壌

遺物は覆土上層より少量の縄文土器、及び石器を出土する。

縄文土器(第112図-1～11)

1群a(1～6) 微隆起線による区画文様を有する。1・2共に内彎して立ちあがる口縁部の破片で、口辺部に無文帯に強いなぞりが行われている。

1群c(7～11) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

石器(第140図-8)

8は覆土中層より出土した磨製石斧で、基部には敲痕がみられる。原石は砂岩である。

#### 第176号土壌

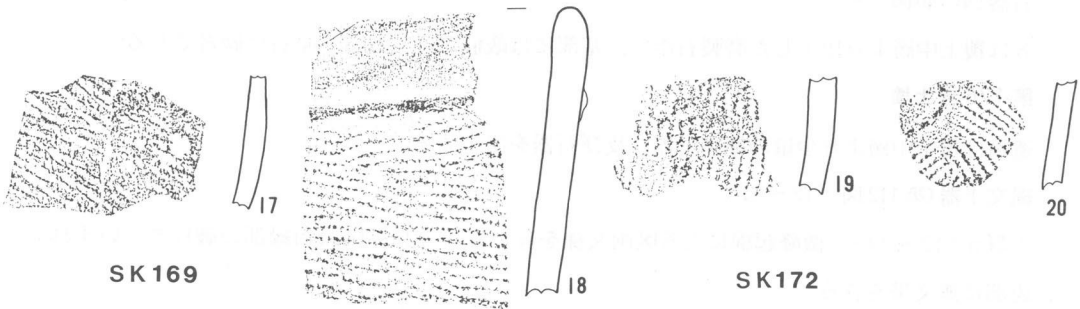
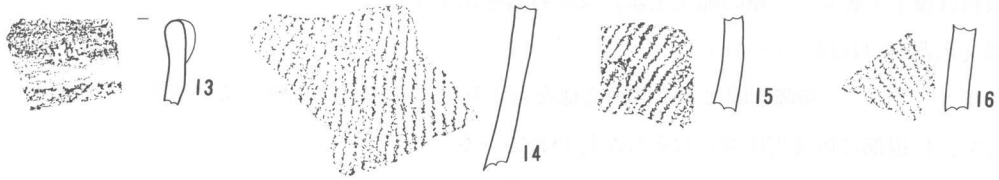
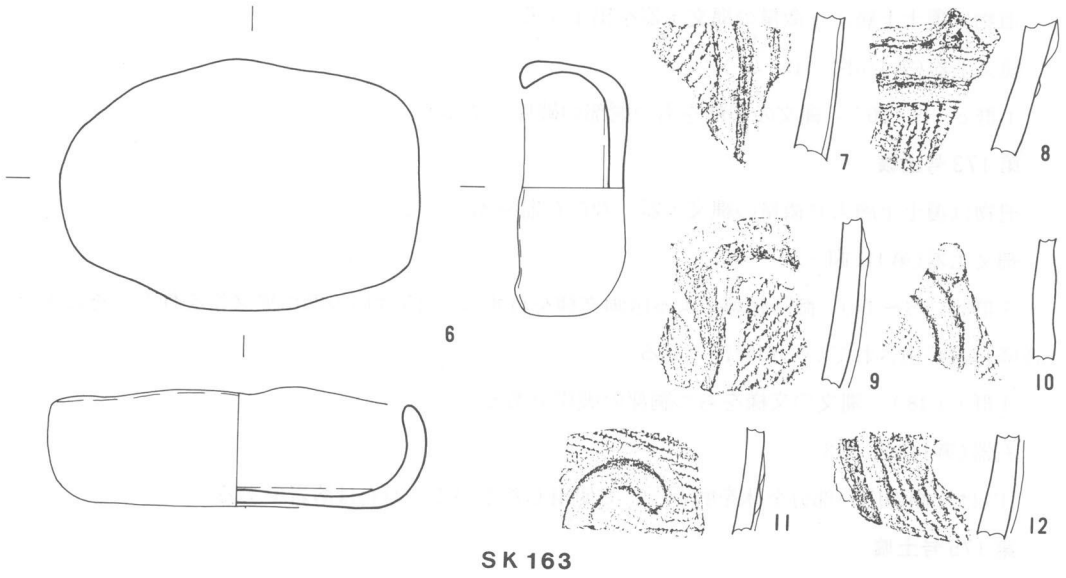
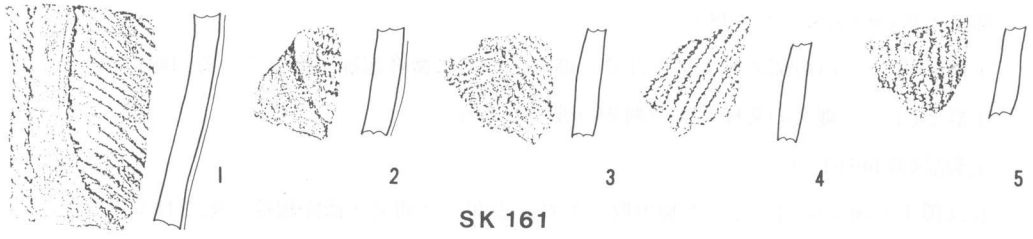
遺物は覆土中層より少量の縄文土器、及び石器を出土する。

縄文土器(第112図-12～21)

1群a(12～19) 微隆起線による区画文様を有する。12～14は口縁部の破片で、いずれも口辺部に無文帯を作る。

1群c(20) 底部付近の破片で、縄文の文様の下を磨消している。

石器(第143図-11)



第 110 图 第 161 · 163 · 167 · 169 · 172 号土壤出土土器拓影图

11は覆土中より出土した磨石で、原石は砂岩である。

#### 第181号土壙

遺物は覆土上層から中層にかけて少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第113図-1~8)

1群a(1~3) 微隆起線による区画文様を有する。1は口辺部に無文帯を作る口縁部。

1群c(4~6) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第182号土壙

遺物は覆土中層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第113図-9~11)

1群c(9) 縄文の文様のみを有する土器。

2群b(10) 二本の沈線による曲線的な文様が描かれている土器である。

#### 第183号土壙

遺物は覆土中より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第113図-12~15)

1群a(12~15) 微隆起線による区画文様を有する胴部の破片である。

#### 第186号土壙

遺物は覆土上層より少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第113図-16~26)

1群a(16~22) 微隆起線による区画文様を有し、16~20は口縁部である。16は口縁部がやや外反して開き文様は微隆起線によって「凵」文が作られ、微隆起線の両側になぞりが行われている。

1群c(23~26) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第187号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第114図-1~4)

1群a(1・2) 微隆起線による区画文様を有する。1は口縁部の破片で、口辺部に無文帯を作り、その下に横位の微隆起線を施している。

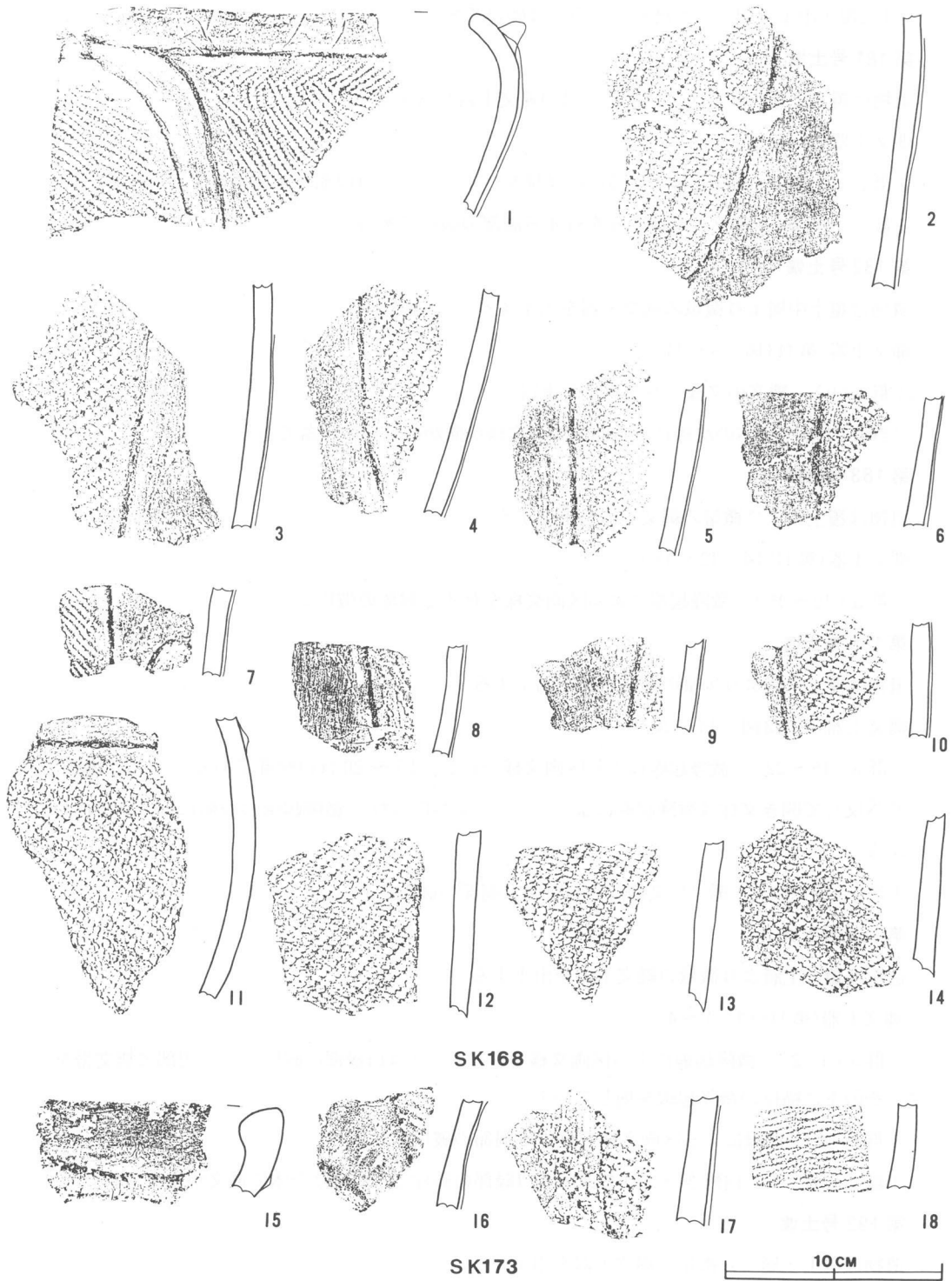
1群b(4) 沈線による区画文様を有する胴部の破片。

1群c(3) やや内彎ぎみに立ちあがる口縁部の破片で、文様は全体に縄文が施文されている。

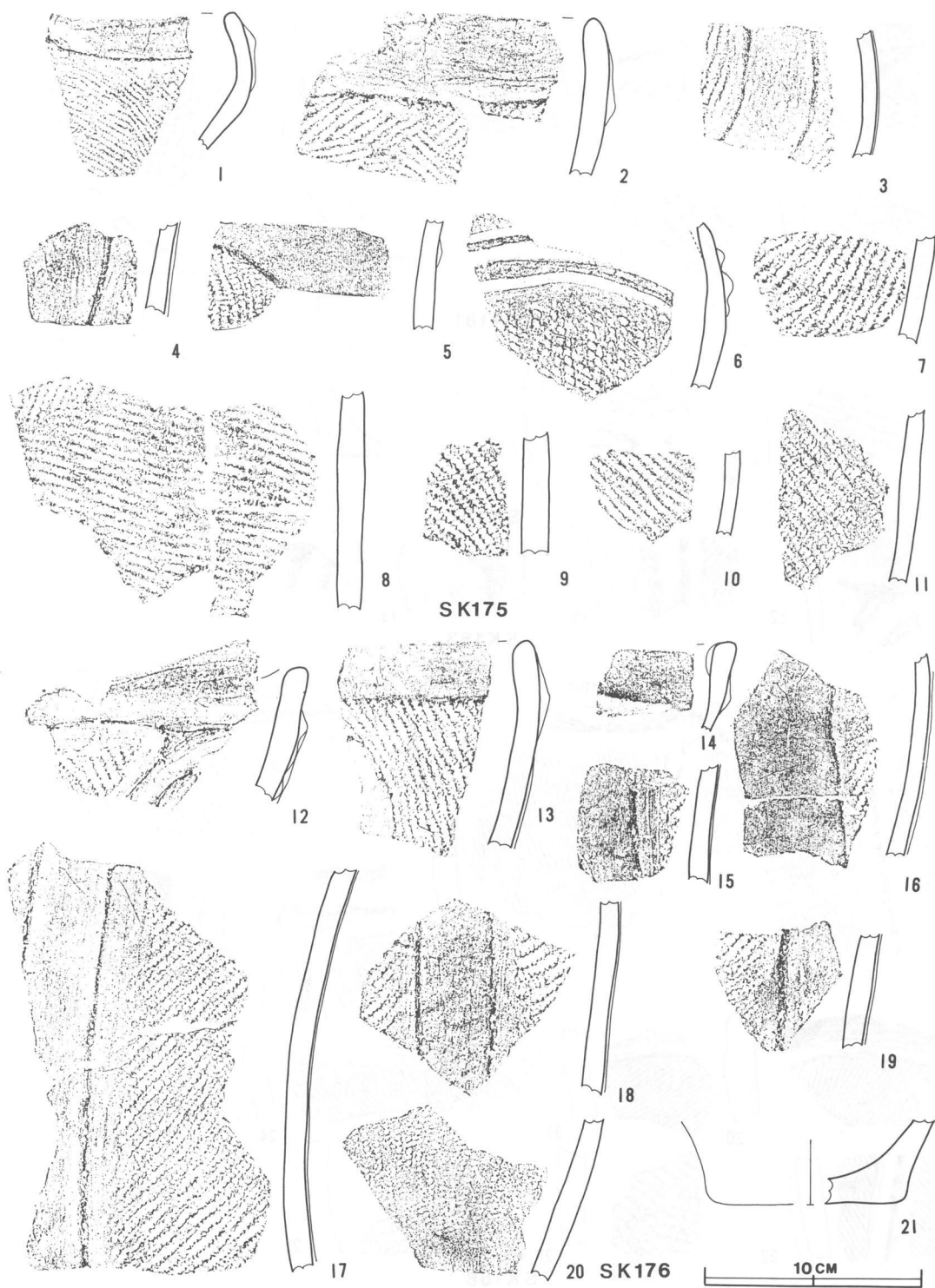
#### 第192号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

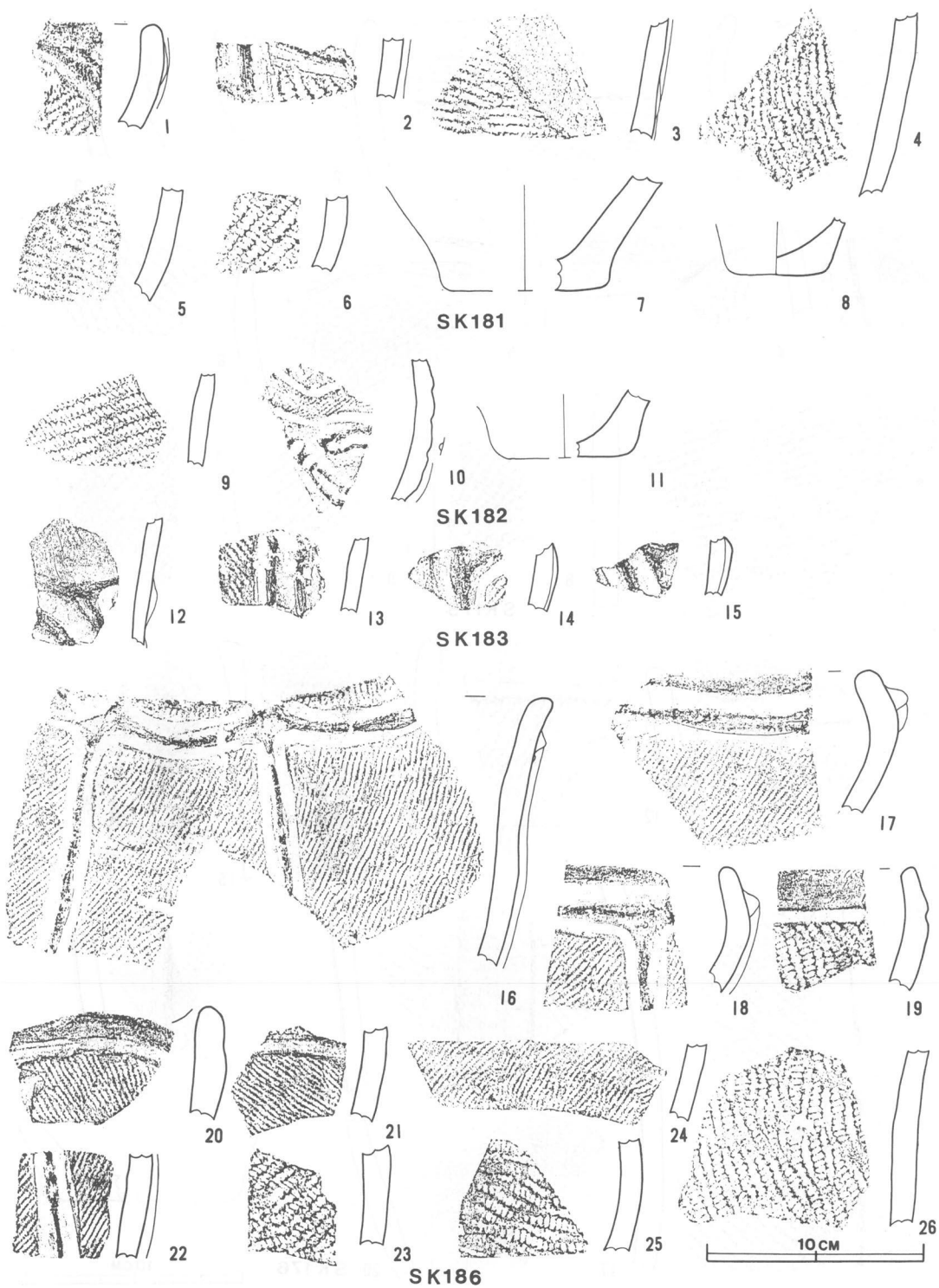
縄文土器(第114図-5~7)



第 111 图 第 168 · 173 号土坑出土土器拓影图



第112图 第175・176号土坑出土土器拓影图



第113图 第181~183·186号土壤出土土器拓影图

1群 a (5) 横位の微隆起線を口辺部に有する口縁部の破片である。器形はやや外反して立ち上がった後、口辺部で内彎する。

1群 c (6・7) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第194号土壌

遺物は覆土上層より微量の縄文土器、及び土製品を出土する。

縄文土器(第114図-8~13)

1群 a (8・9) 微量起線による区画文様を有する。1は口辺部に無文帯を作り、横位の微隆起線によって縄文と区別している。

1群 b (10・11) 沈線による区画文様を有する。10は波状の口縁を呈し、文様は二本の沈線間に縄文が施文されている。

1群 c (12・13) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

土製品(第146図-7)

7は覆土上層より出土した完形の土製円板である。表面には縄文が施文されている。

#### 第195号土壌

遺物は覆土中より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第114図-14~18)

1群 a (14) 微隆起線によって区画文様を有する。胴部の破片である。

1群 b (17・18) 二本の沈線によって区画文様が行なわれ、17は沈線間を磨消して無文帯にしている。

1群 c (15・16) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第196号土壌

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第114図-9~22)

1群 a (19~21) 微隆起線によって区画文様を有し、いずれも微隆起線の側面になぞりが行われている。

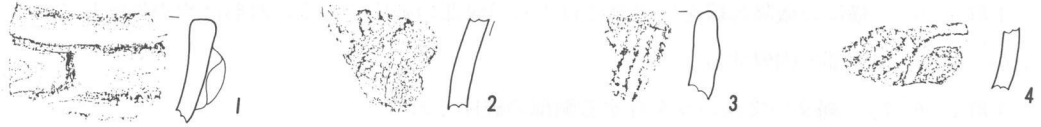
1群 c (22) 縄文の文様のみを有する土器。

#### 第198号土壌

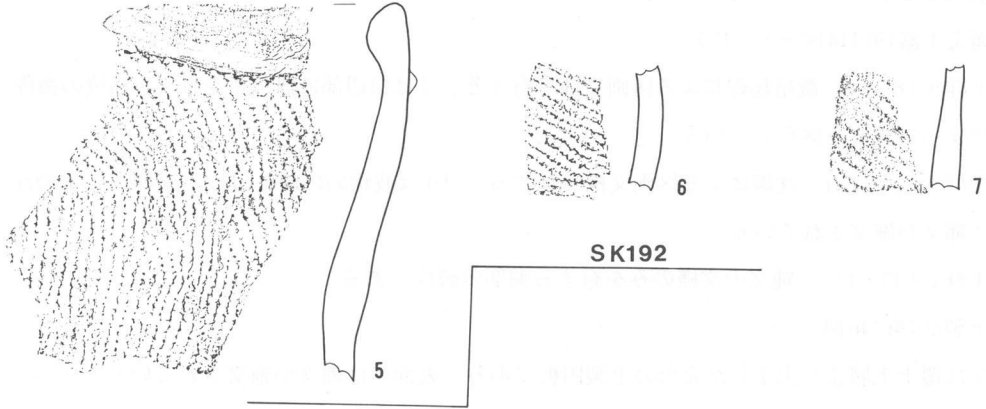
遺物は覆土中層から下層にかけて少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第115図-1~13)

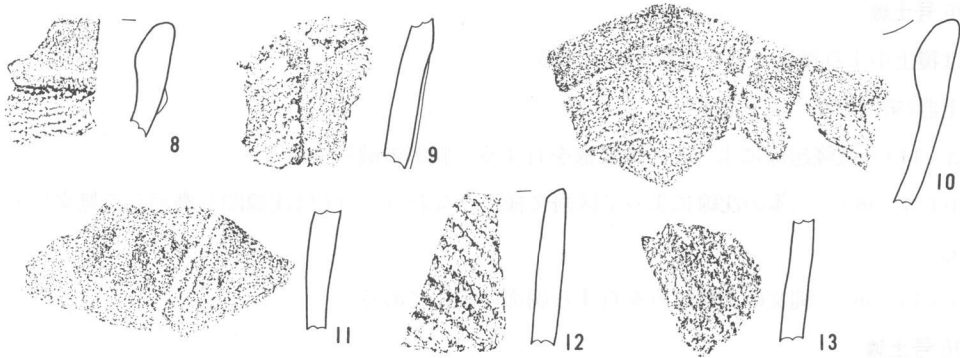
1群 a (1~5) 微隆起線による区画文様を有する。1・2・5は口縁部の破片で、1・2共に微隆起線によって無文帯と縄文を区別している。また5は口唇部に二列の円点列文が施文されている。



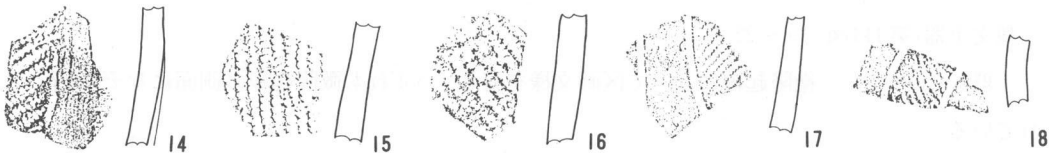
SK187



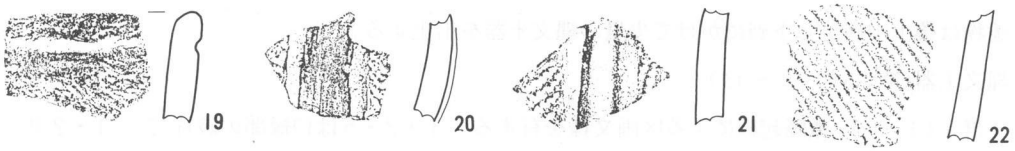
SK192



SK194



SK195



SK196

第 114 图 第 187 · 192 · 194 ~ 196 号土壤出土土器拓影图





1群 b (11～13) 二本の沈線によって区画文様を構成している。11は口縁部の破片である。

1群 c (6～10) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第200号土壙

遺物は覆土中より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第115図-14～21)

1群 a (14・15・17・18) 微隆起線による区画文様を有し、14は口縁部の破片で、横位の微隆起線によって口辺部の無文帯と縄文を区別している。

1群 b (16) 沈線による区画文様を有する口縁部の破片である。器形は内彎して立ちあがり口唇部は丸味を持つ。文様は口辺部に縄文を施し、その下に懸垂文の変化した楕円形状の文様が区画され、その間を磨消している。

1群 c (19～21) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第202号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第115図-22～28)

1群 b (26・27) 沈線による楕円形の懸垂文が施されている胴部の破片である。

1群 c (22～25) 縄文の文様をもつ土器で、22はやや外傾して立ちあがる口縁部である。

#### 第203号土壙

遺物は下層部より少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第116図-1～4)

1群 a (1) 口辺部に横位、口縁部に「 $\Omega$ 」文の文様が微隆起線によって描かれている口縁部の破片である。

1群 c (2～4) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第205号土壙

遺物は覆土上層から下層にかけて少量の縄文土器を出土する。

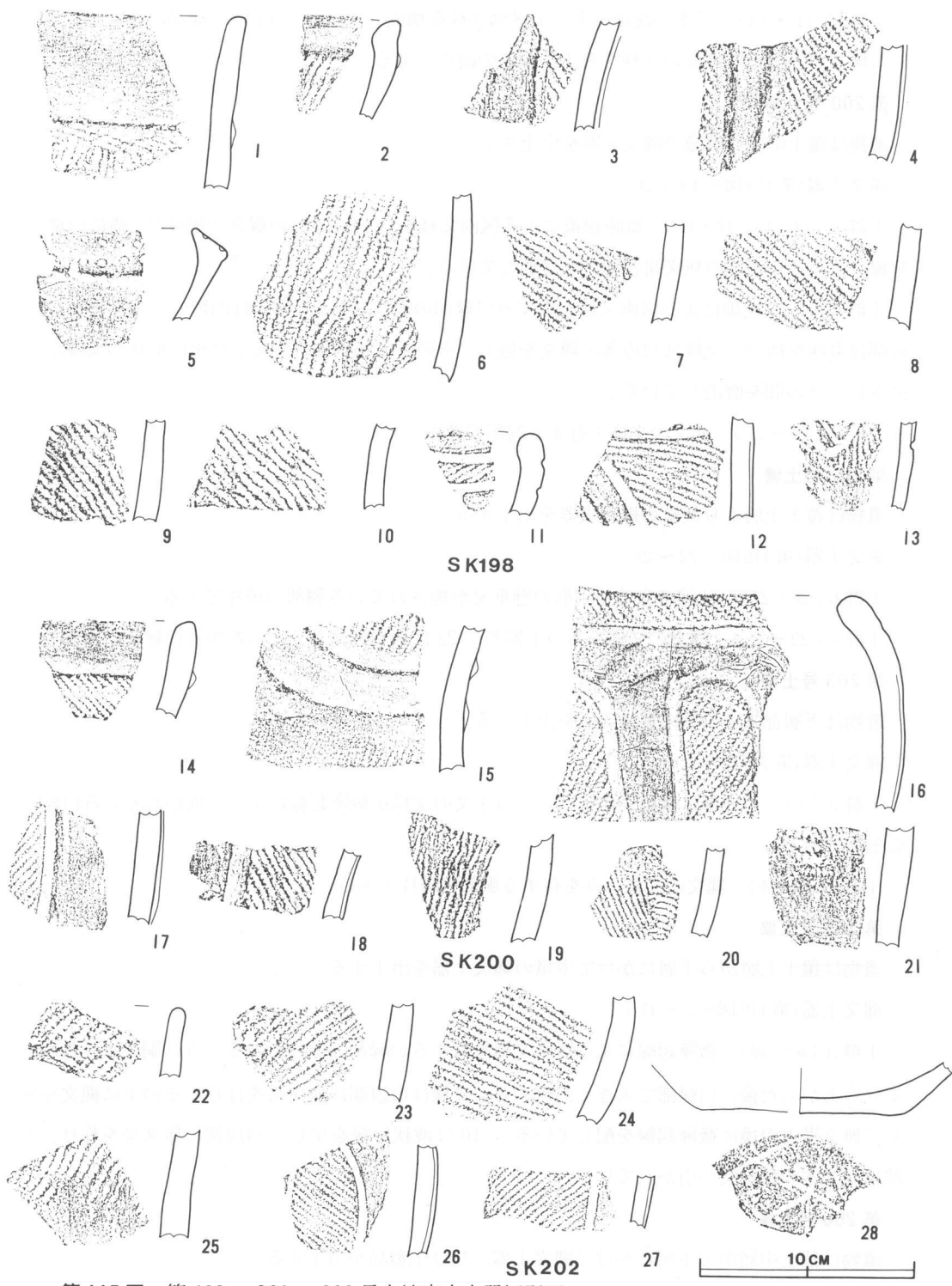
縄文土器(第116図-5～11)

1群 a (5～10) 微隆起線による区画文様を有する口縁部の破片である。5は胴部より外反して立ちあがった後、口縁部で大きく内彎する。文様は口辺部に無文帯を作り、その下に縄文を施し、無文帯との境に微隆起線を配している。10は波状口縁を呈し、口辺部に無文帯を作り、胴部には二本の懸垂文が引かれている。

#### 第206号土壙

遺物は覆土中層から下層にかけて縄文土器、及び土製品を出土する。

縄文土器(第118図-1～11)



第 115 图 第 198 · 200 · 202 号土壤出土土器拓影图

1群a(2・3) 微隆起線による区画文様を有し、1は口辺部に無文帯を作り、縄文との境にやや弱いなぞりが行われている。

1群b(4～9) 沈線による区画文様を有し、4～6は同一個体と思われ、口辺部に横位の沈線と懸垂文が施されている。

1群c(10・11) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

土製品(第146図-8・9)

8・9は覆土中層より出土した完形の土製円板である。表面にはいずれも沈線と縄文が施文されている。

#### 第207号土壙

遺物は覆土上層から中層にかけて多量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第117図)

1群a(1～10・15) 微隆起線による区画文様を有し、1～3は口縁部の破片である。4～7・9は同一個体の胴部の破片で、微隆起線による曲線的な文様が構成されている。

1群b(11～14) 沈線による区画文様がなされ、いずれも口縁部の破片である。11は無文帯の下に横位の沈線を配し、縄文との区画を明確にしている。12～14は同一個体と思われ、沈線内に縄文を施文し、渦巻状の文様を構成している。

#### 第208号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(118図-12～14)

1群a(12) 横位の微隆起線によって無文帯と縄文を区別している口縁部の破片で、器形は外反して立ちあがり、口唇部は丸味をもっている。

1群c(13・14) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第209号土壙

遺物は覆土上層から中層にかけて少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第118図-15～21)

1群a(15・16・18・19) 微隆起線による区画文様を有し、15・16は口縁部の破片である。

1群b(20) 斜位の懸垂文が施されている胴部の破片である。

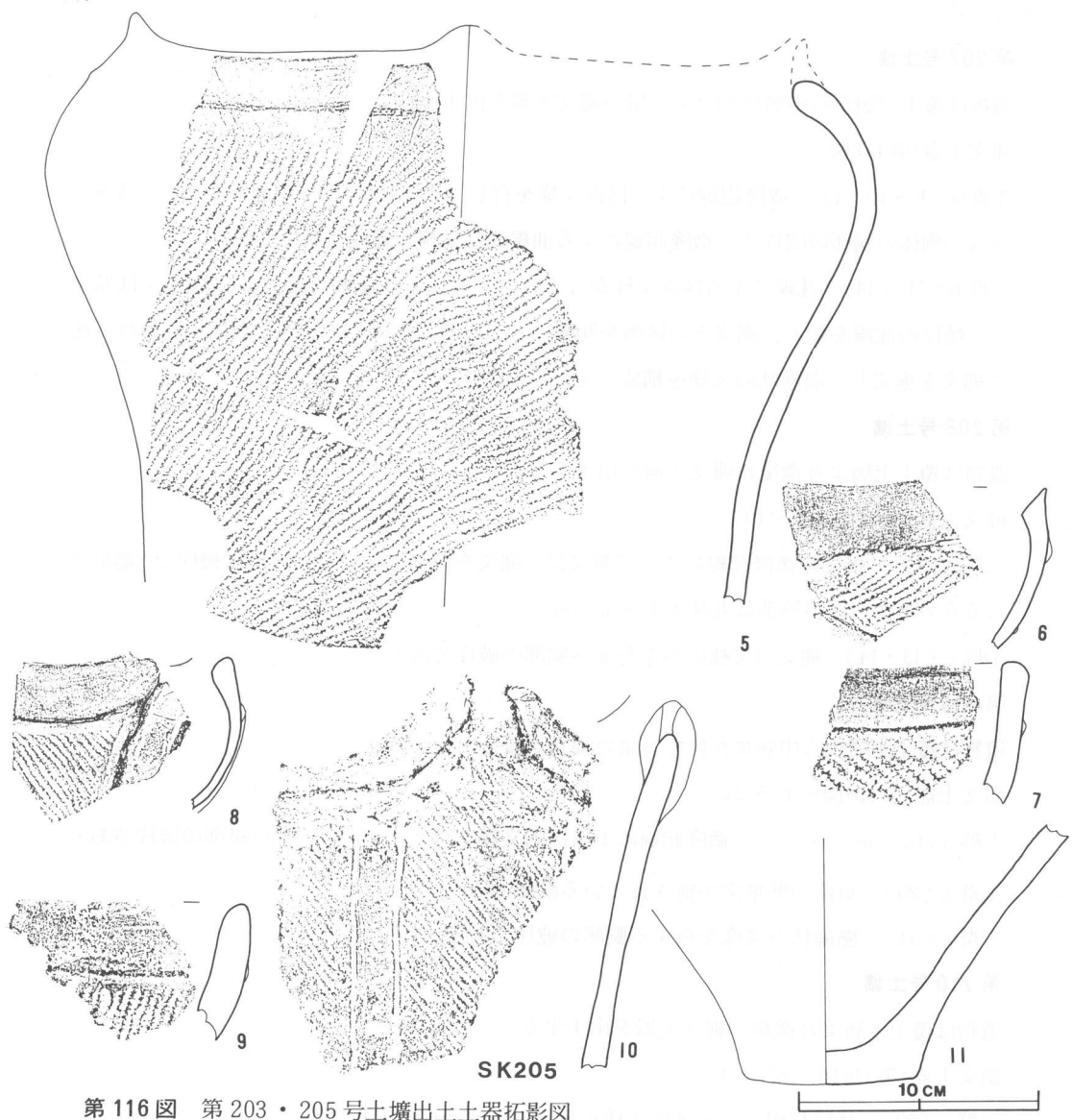
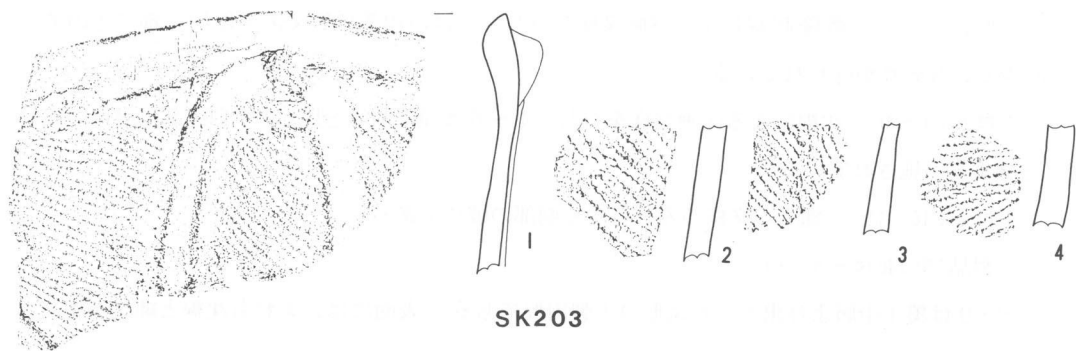
1群e(21) 櫛歯状の文様を有する胴部の破片である。

#### 第210号土壙

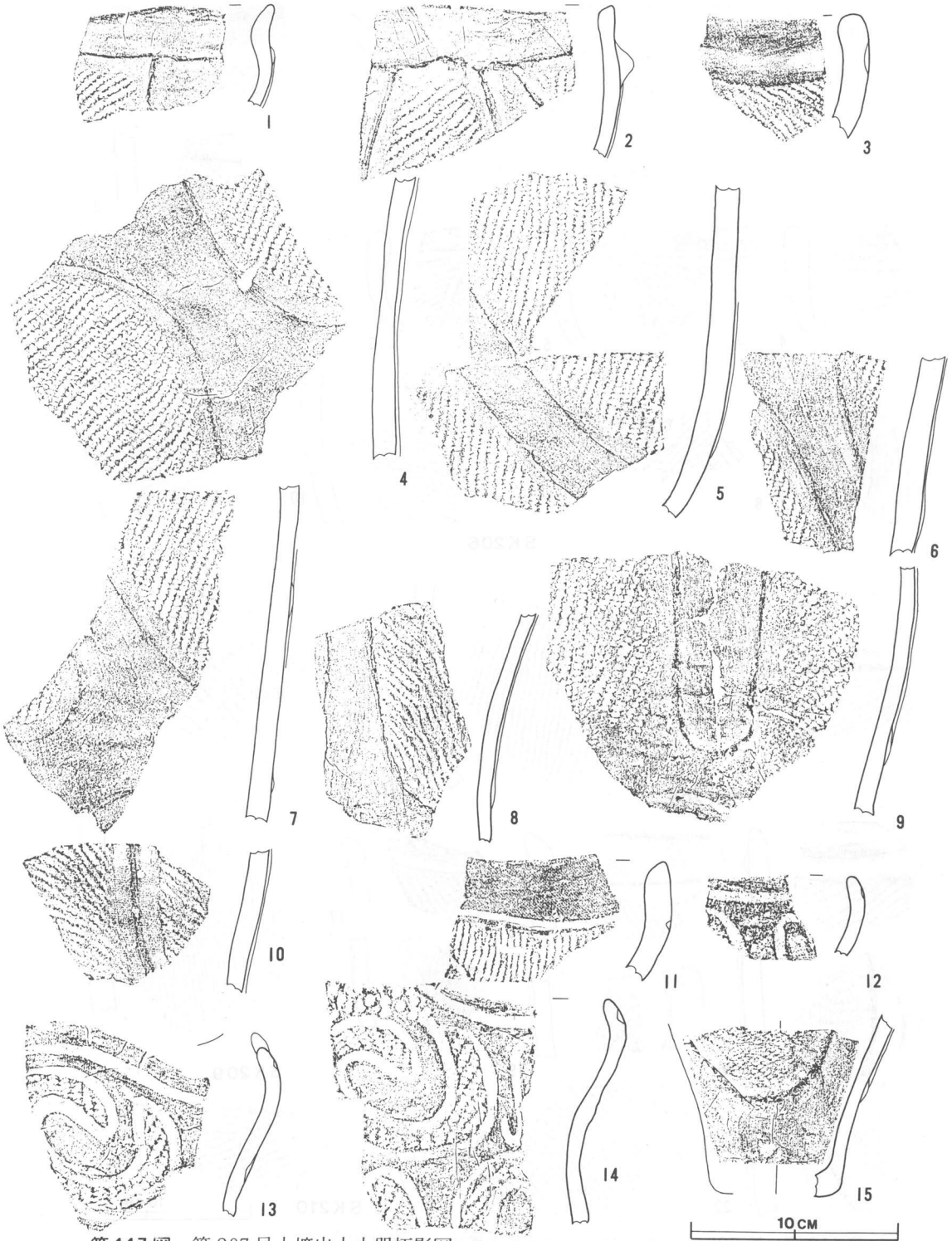
遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第118図-22～24)

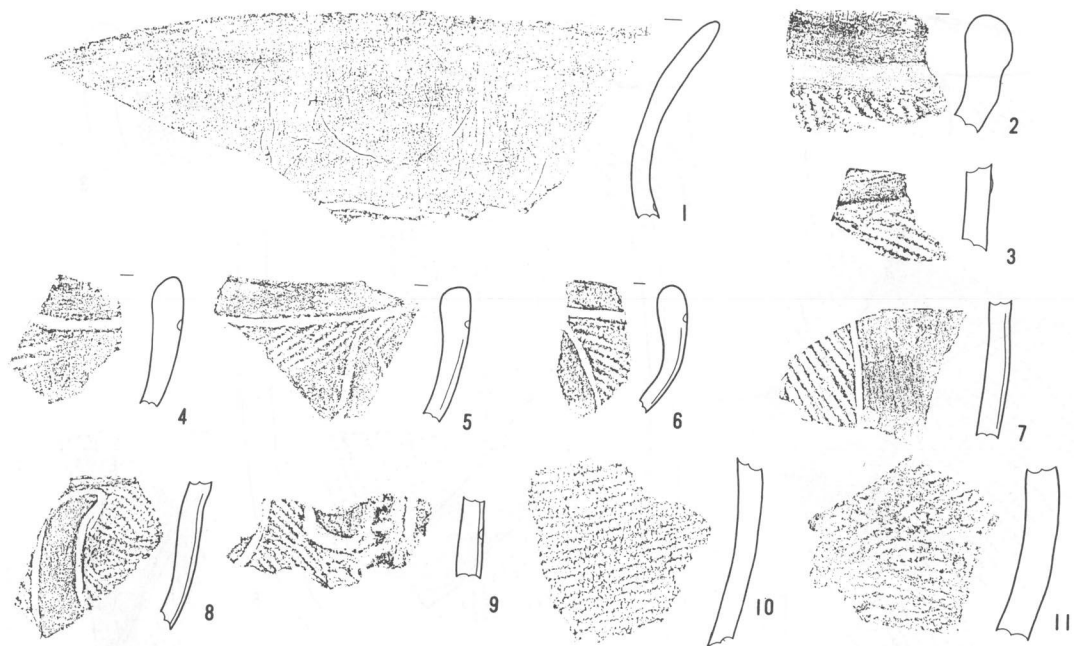
1群a(22) 微隆起線による区画文様を有する底部近くの土器である。



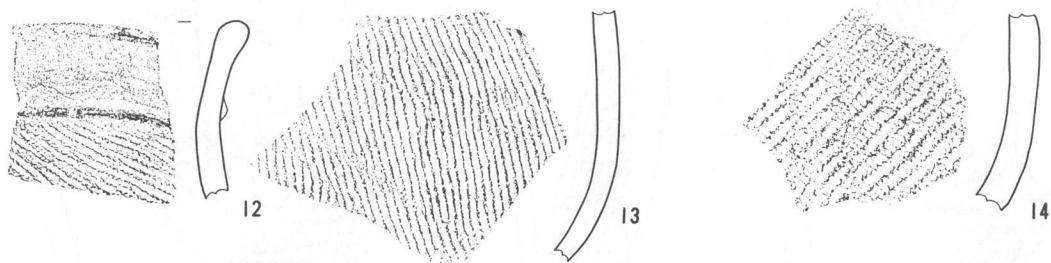
第 116 图 第 203 · 205 号土壤出土土器拓影图



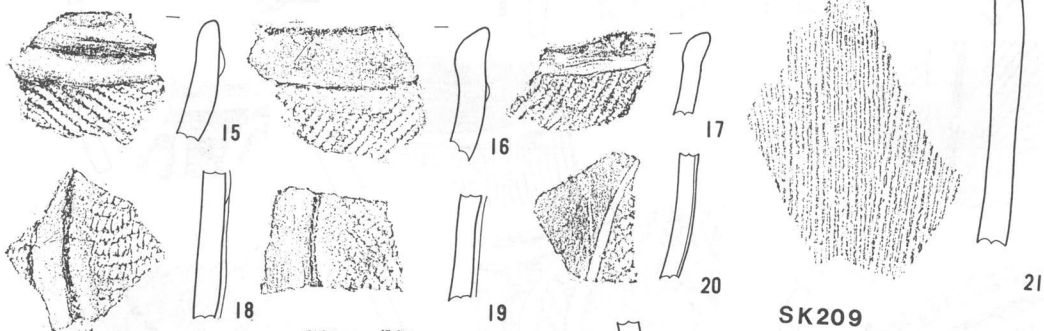
第117图 第207号土壙出土土器拓影图



SK206



SK208



SK209



第118图 第206·208·209·210号土壤出土土器拓影图

1群c(23・24) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第211号土壙

遺物は中層より多量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第119図-1~15)

1群a(1~7) 微隆起線による区画文様を有し、1~3は口縁部の破片である。

1群b(9・10) 沈線による区画文様を有する同一個体の土器である。口辺部には横位の沈線を配し、一列の円点列文が施され、胴部には懸垂文の変化した楕円形状の文様が描かれている。

1群e(11・12) 櫛歯状の文様が描かれている胴部破片である。

#### 第212号土壙

遺物は覆土上層から中層にかけて多量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第119図-16~23)

1群a(16~18) 微隆起線による区画文様を有する。16・17は口縁部の破片で、いずれも無文帯の下に微隆起線を施している。16は口縁部で大きく内彎して立ちあがる。

1群b(19~22) 沈線による区画文様を有する。19は無文帯下に沈線を施し、胴部には懸垂文の変化した楕円形状の文様が描かれている。21は胴部の破片で、文様は沈線による楕円形の文様が描かれている。

1群c(23) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第213号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第120図-1~4)

1群a(1~4) 微隆起線による区画文様を有する。いずれも微隆起線の側面になぞりを入れて沈線状にしている胴部の破片である。

#### 第214号土壙

遺物は覆土上層より多量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第120図-5~19)

1群a(5~15) 微隆起線による区画文様がなされ、1は突起部、6~12は口縁部の破片でいずれも口辺部に無文帯を作り、縄文との間に微隆起線を施している。

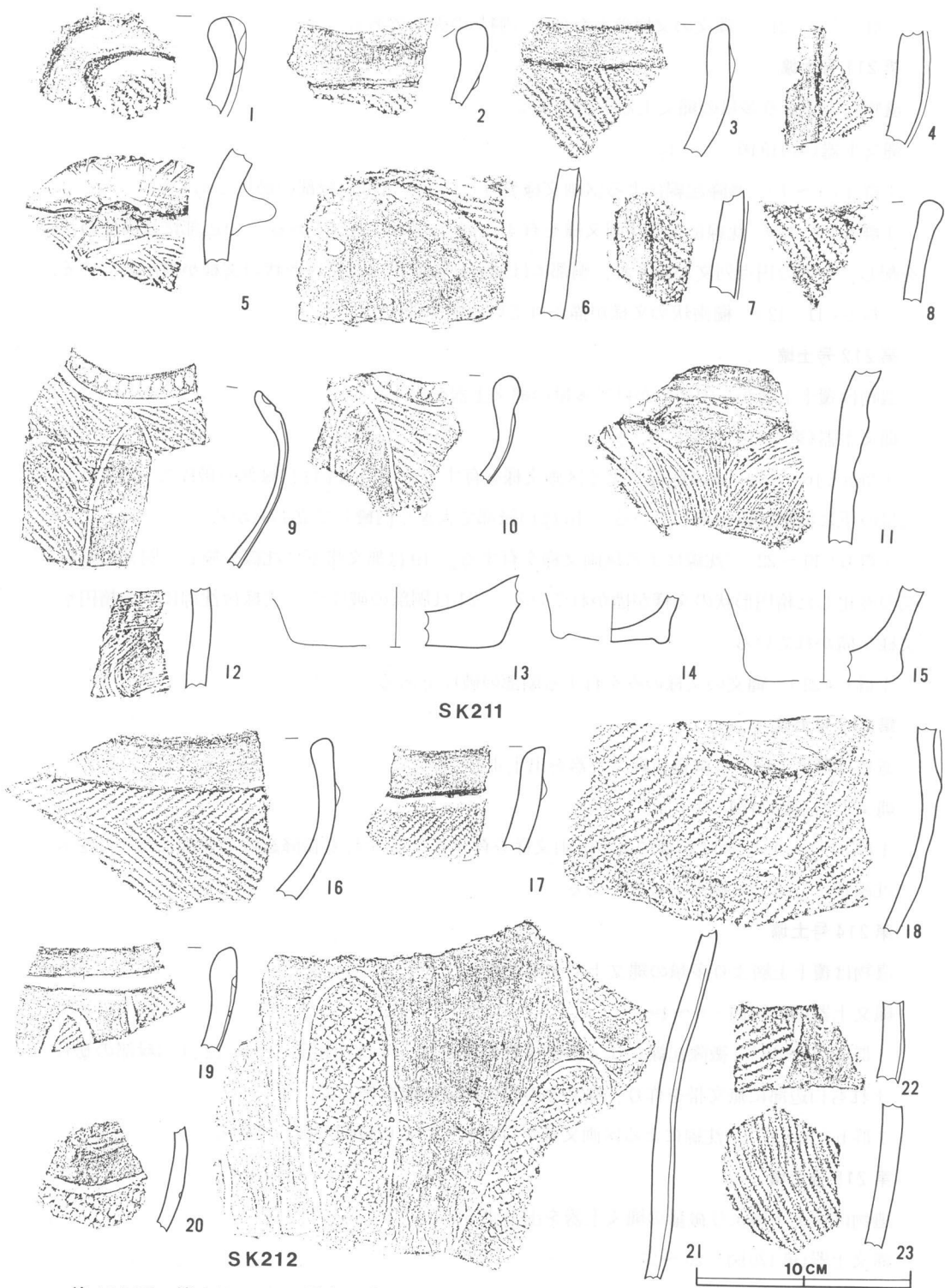
1群b(16・17) 沈線による区画文様が行われている口縁部の破片である。

#### 第215号土壙

遺物は覆土下層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第120図-20~27)

1群a(20~22) 微隆起線による区画文様がなされている胴部の破片である。



第 119 图 第 211 · 212 号土坑出土土器拓影图



1群c(23～26) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第216号土壇

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第121図-1～4)

1群a(1～3) 微隆起線による区画文様となされる胴部の破片である。1・2共に微隆起線の側面に強いなぞりを行い沈線状にしている。

1群e(4) 櫛歯状の文様を有する胴部の破片である。

#### 第217号土壇

遺物は覆土上層より縄文土器を微量出土する。

縄文土器(第121図-5～9)

1群a(5) 微隆起線による区画文様を有し、微隆起線間を磨消している。

1群b(6・7) 沈線による区画文様を有する胴部の破片である。

1群c(8) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

1群e(9) 櫛歯状の文様が描かれている胴部の破片である。

#### 第219号土壇

遺物は覆土中層から下層にかけて多量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第121図-10～21)

1群a(10～15) 微隆起線による区画文様を有する。10～12は口縁部の破片で、10・11はやや内彎し、12は垂直に立ちあがる。微隆起線によって無文帯と縄文を区別している。

1群c(16～20) 縄文の文様のみを有し、16はやや外傾して立ちあがる口縁部である。

#### 第221号土壇

遺物は覆土中層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第121図-22～25)

1群a(22・23) 微隆起線による区画文様を有する。22は内彎して立ちあがる口縁部の破片であり、23は微隆帯になぞりを行って沈線状にしている胴部の破片である。

#### 第222号土壇

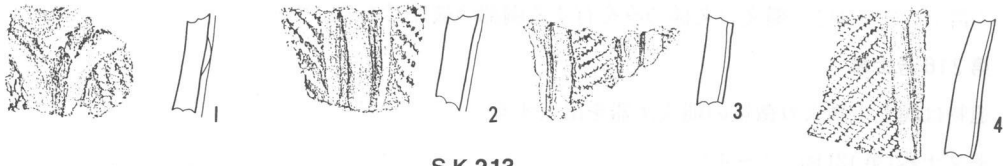
遺物は覆土上層より少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第121図-26～28)

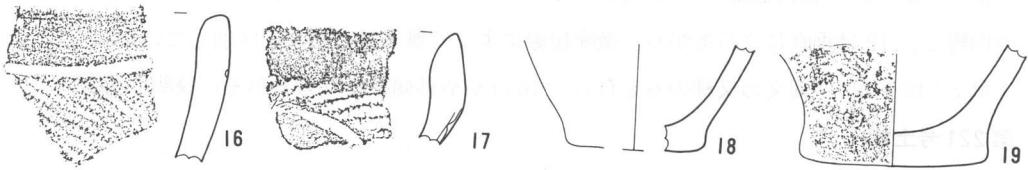
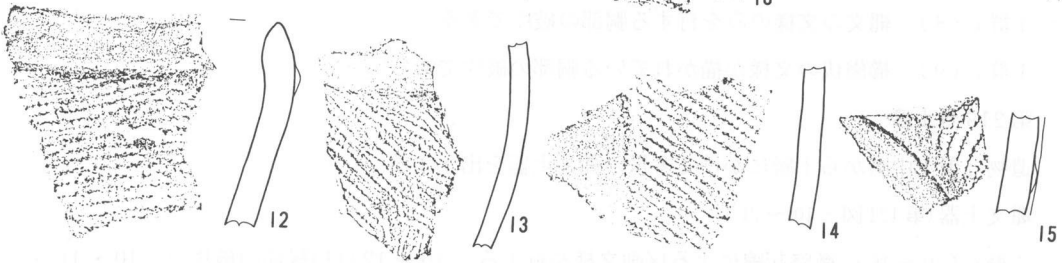
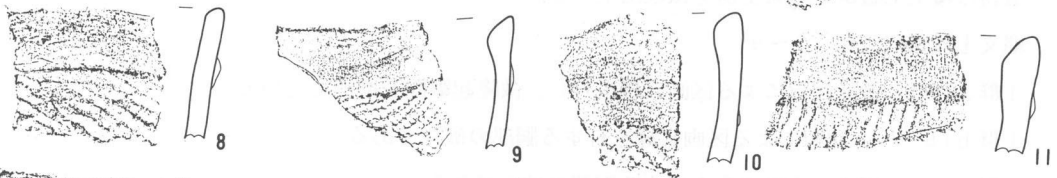
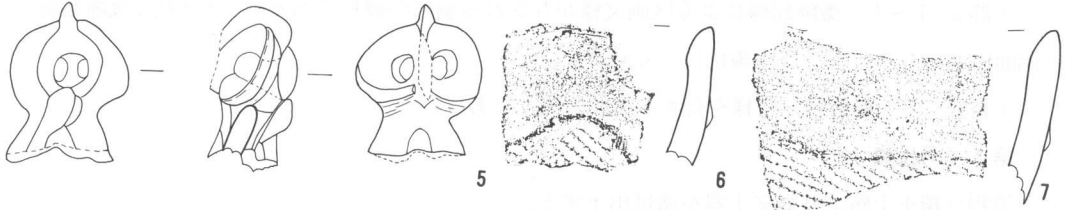
1群a(26) 無文帯と縄文との間に微隆起線を有し、やや外傾して立ちあがる口縁部である。

1群b(27) 沈線による区画文様を有する口縁部で、口辺部に横位、胴部に曲線的な沈線を施し、器形は大きく内彎して立ちあがる。

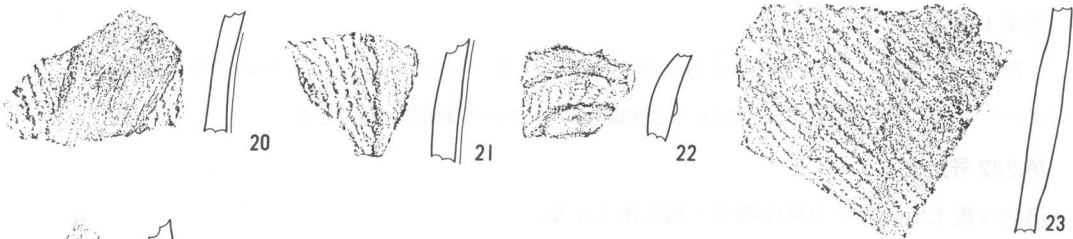
#### 第224号土壇



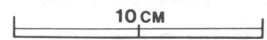
SK 213



SK 214



SK 215



第 120 图 第 213 ~ 215 号土壤出土土器拓影图

遺物は覆土上層から下層にかけて少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第122図-1~9)

1群a(1~4) 微隆起線によって、口辺部の無文帯と縄文を区画している口縁部である。

1群b(9) 曲線的な沈線によって区画文様を有する。

1群c(5~7) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第225号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第122図-10~13)

1群c(10~13) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第226号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第122図-14~17)

1群a(14~16) 横位の微隆起線によって無文帯と縄文を区別し、14は内彎、15・16はやや内彎して立ちあがる口縁部の破片である。

1群c(17) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第227号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第123図-1~5)

1群a(1~3) 微隆起線による区画文様を有する。

1群c(4) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第228号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第123図-6~9)

1群a(6~9) 微隆起線による区画文様を有する。6・9は微隆起線の側縁になぞりが行われている口縁部。

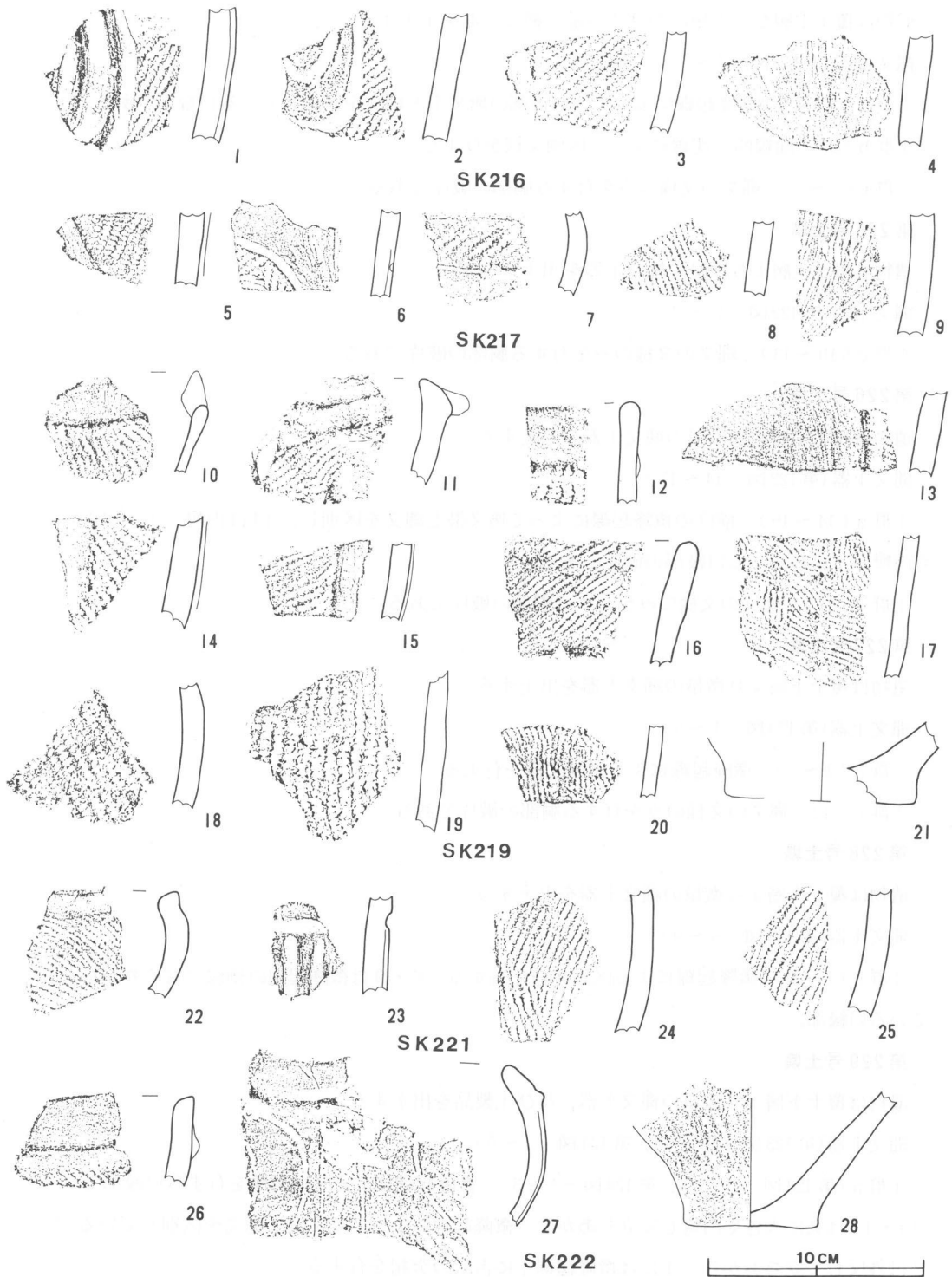
#### 第229号土壙

遺物は覆土下層より少量の縄文土器、及び土製品を出土する。

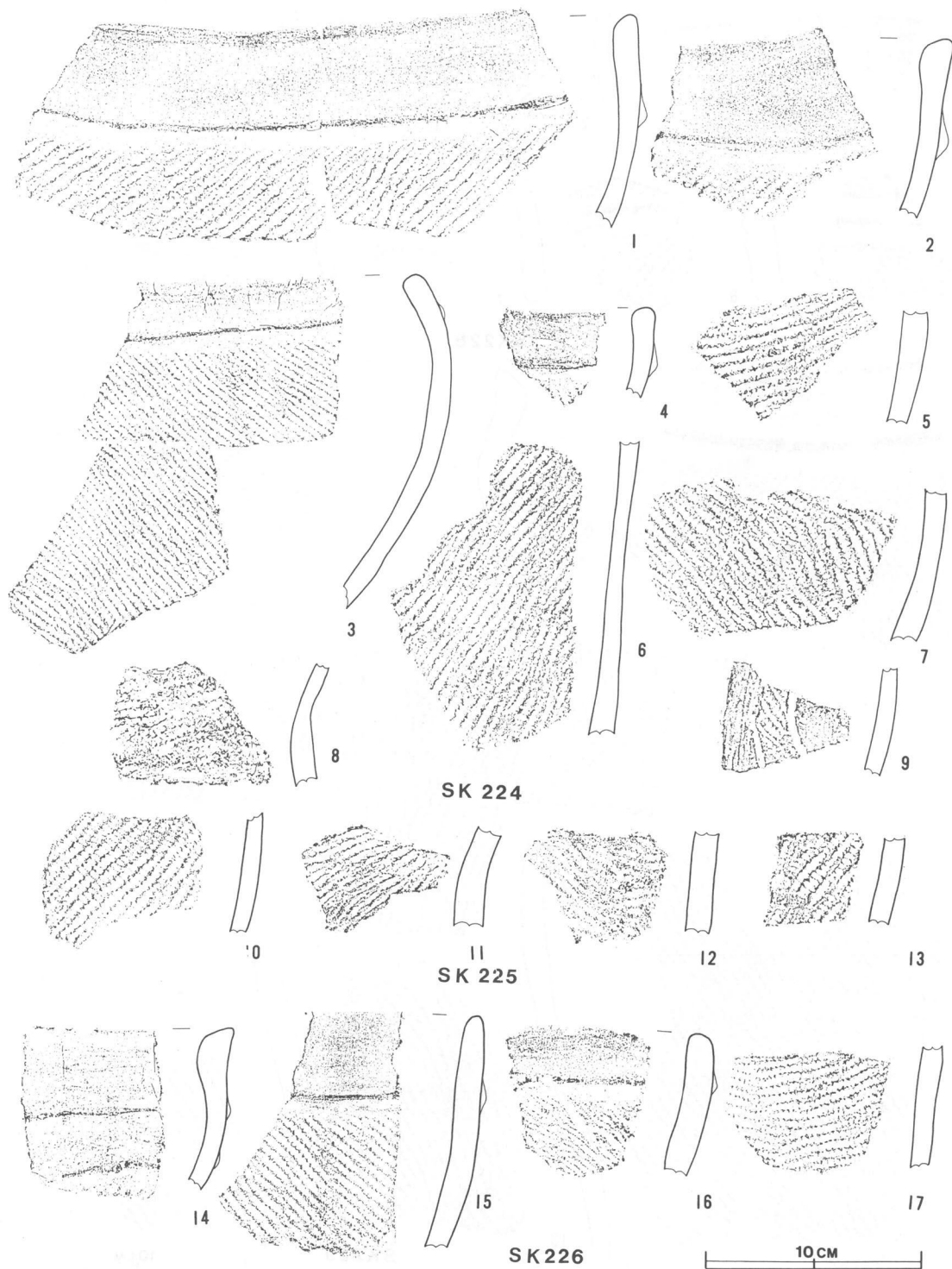
縄文土器(第123図-10~15, 第124図-1~6)

1群a(第123図-10・11, 第124図-1~3) 微隆起線による区画文様を有する口縁部である。10・11は共に大きく内彎して立ちあがり、微隆起線によって無文帯と縄文を区別している。1・2は外反して立ちあがり、1には微隆起線上に舌状の突起を有する。

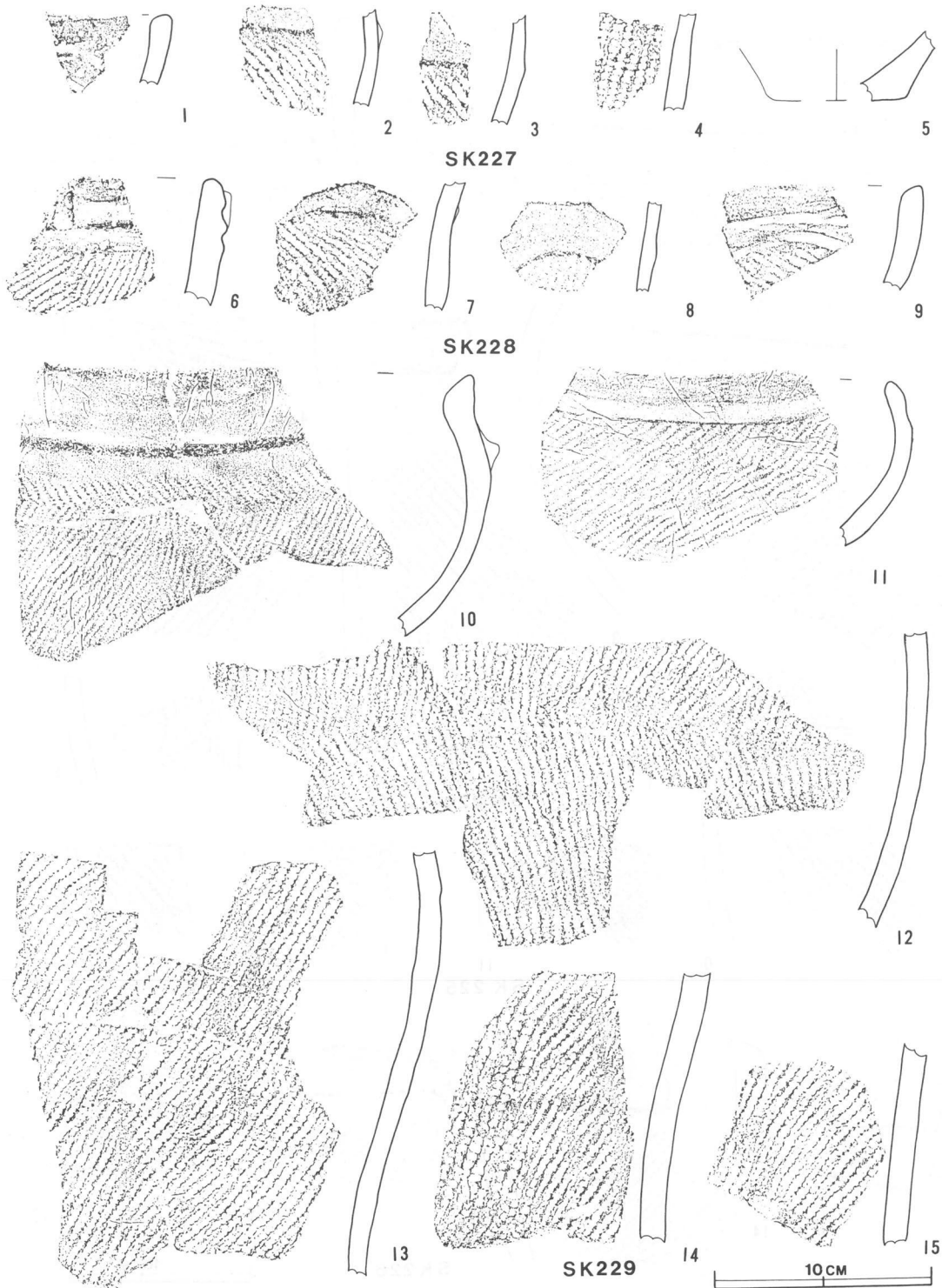
1群b(第124図-4~6) 沈線による区画文様を有する口縁部である。4・5は同一個体の口



第 121 图 第 216 · 217 · 219 · 221 · 222 号土壤出土土器拓影图



第122図 第224～226号土壇出土土器拓影図



第 123 图 第 227 ~ 229 号土壙出土土器拓影图

縁部で、くびれ部より外反して立ちあがった後、内彎して開く。文様は口辺部に横位の沈線、その下に懸垂文の変化した楕円状の文様が二段に描かれている。6は口辺部に横位の微隆起線を配し、その下に二本の懸垂文が描かれている。

1群c(第124図-12~15) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

土製品(第146図-10・11)

いずれも覆土上層より出土した完形の土製円板である。10には微隆起線、11には縄文と沈線の文様が描かれている。

### 第230号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第124図-7~13)

1群a(7~11) 微隆起線による区画文様を有する。7~10は横位の微隆起線を有する口縁部の破片で、7は外反、8は内彎、9・10は垂直に立ちあがる。

1群e(12・13) 櫛歯状の文様を有する胴部の破片である。

### 第232号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第125図-1~3)

1群c(1~3) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

### 第233号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第125図-4~7)

1群c(4~7) 縄文の文様のみを有する土器で、4は底部付近のものである。

### 第234号土壙

遺物は覆土上層より少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第125図-8~15)

1群a(8~11) 微隆起線による区画文様を有する。8~10は口縁部の破片である。

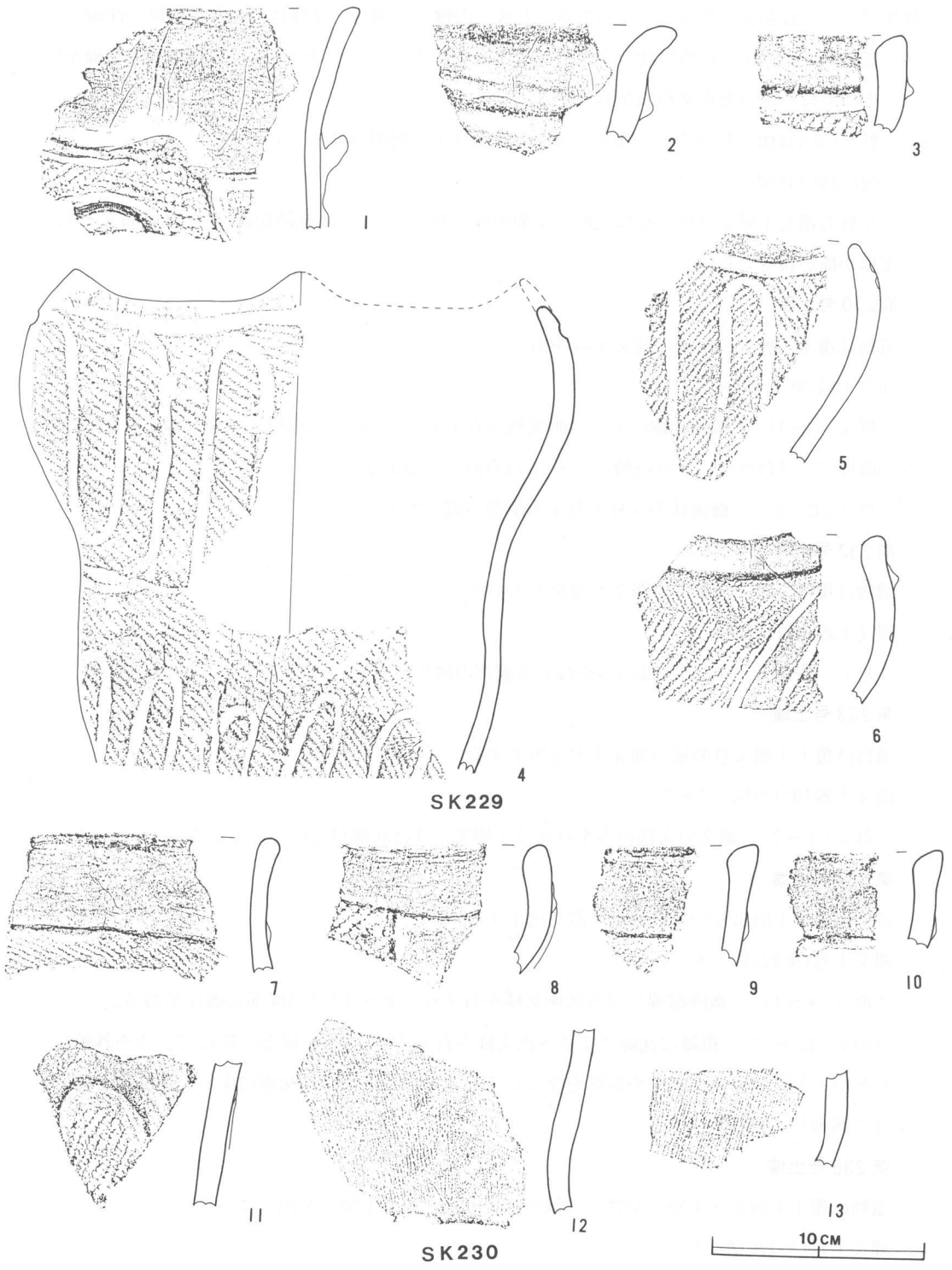
2群b(12~15) 複雑な沈線による区画文様を有する。12は口縁部の破片で、やや外傾して立ちあがった後、口唇部でやや器厚を厚くして丸味をもつ。文様は沈線によって無文帯と縄文を交互に区画している。

### 第235号土壙

遺物は覆土上層から下層にかけて少量の縄文土器、及び土製品を出土する。

縄文土器(第126図-1~16)

1群a(1~12) 微隆起線による区画文様を有する。1~7は口辺部に無文帯を作り、微隆起



SK229

SK230

第 124 图 第 229 · 230 号土坑出土土器拓影图



線によって縄文との区別を明確にしている口縁部である。また1～4は胴部には「 $\Omega$ 」文が微隆起線によって描かれている。

1群c(13～16) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

土製品(第146図-12)

12は覆土下層より出土した完形の土製円板である。表面には縄文が施文されている。

#### 第236号土壌

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第126図-17～24)

1群b(17) 沈線による区画文様を有する口縁部の破片である。口辺部には無文帯を有し、横位の沈線によって縄文との文様を区別している。

1群c(18～24) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第237号土壌

遺物は覆土上層より多量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第127図-1～13)

1群a(1～8) 微隆起線による区画文様となされ、1・2は口縁部の破片で、1は外反し、2は内彎して立ちあがる。3～8は胴部の破片である。

2群b(9・10) 沈線による区画文様を有する。9は波状口縁を呈し、くびれ部より外反して立ちあがった後、口縁部で内彎して開く。文様は口辺部に横位の楕円形状の文様を沈線によって区画した後、区画外を磨消している。胴部は複雑な文様が沈線によって区画されている。

#### 第238号土壌

遺物は覆土上層から中層にかけて少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第127図-14～23)

1群c(23) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

2群b(14～22) 沈線による区画文様を有する。14～16は同一個体の口縁部で、器形は口縁部でやや内彎して開く。文様は口辺部に無文帯を作り、その下に横位の沈線が配されている。

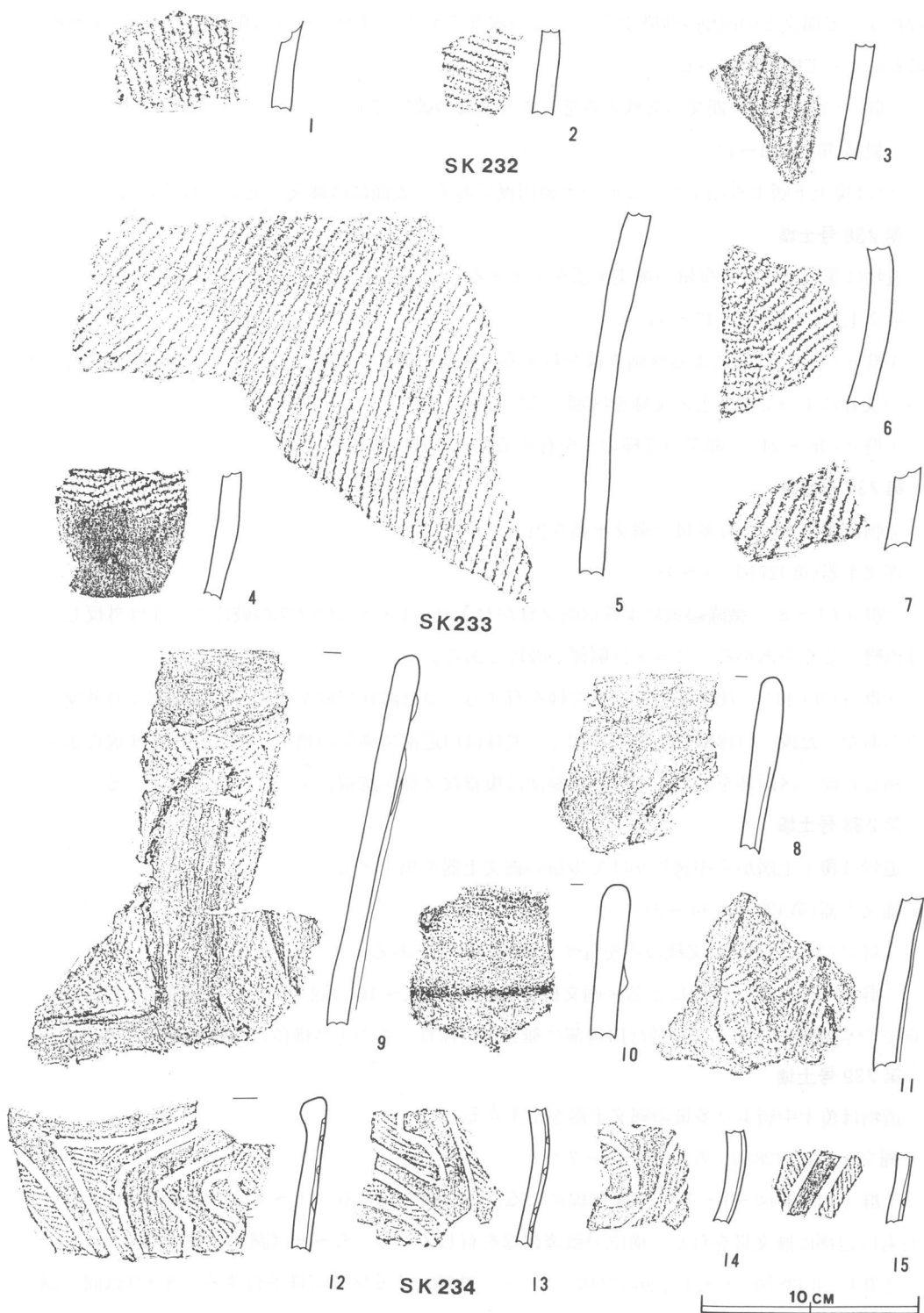
#### 第239号土壌

遺物は覆土中層より多量の縄文土器を出土する。

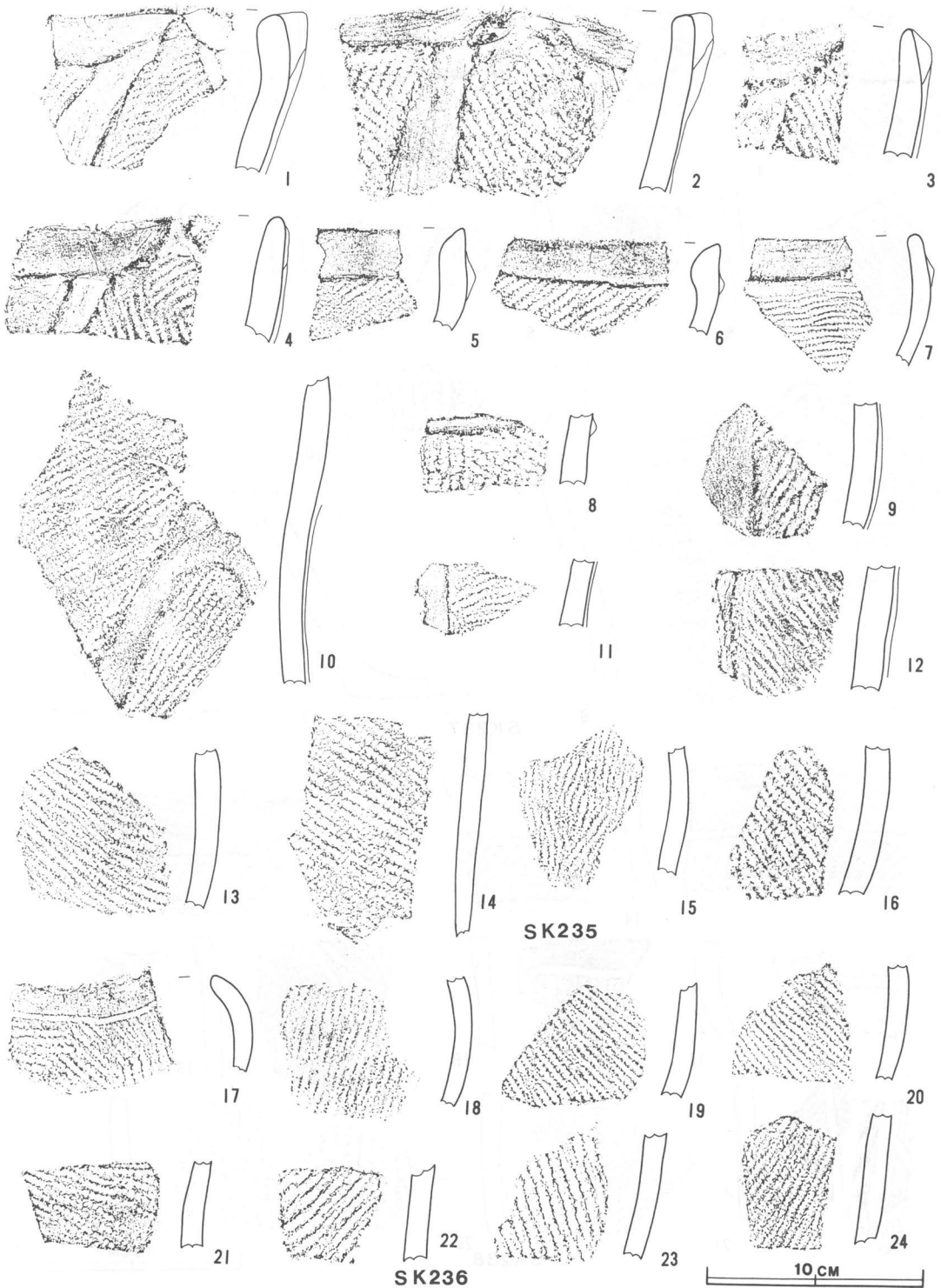
縄文土器(第128図, 第129図-1～7)

1群a(第128図-1～7) 微隆起線による区画文様を有する。1～4は口縁部の破片で、いずれも口辺部に無文帯を有し、横位の微隆起線を有している。5～6は胴部の破片である。

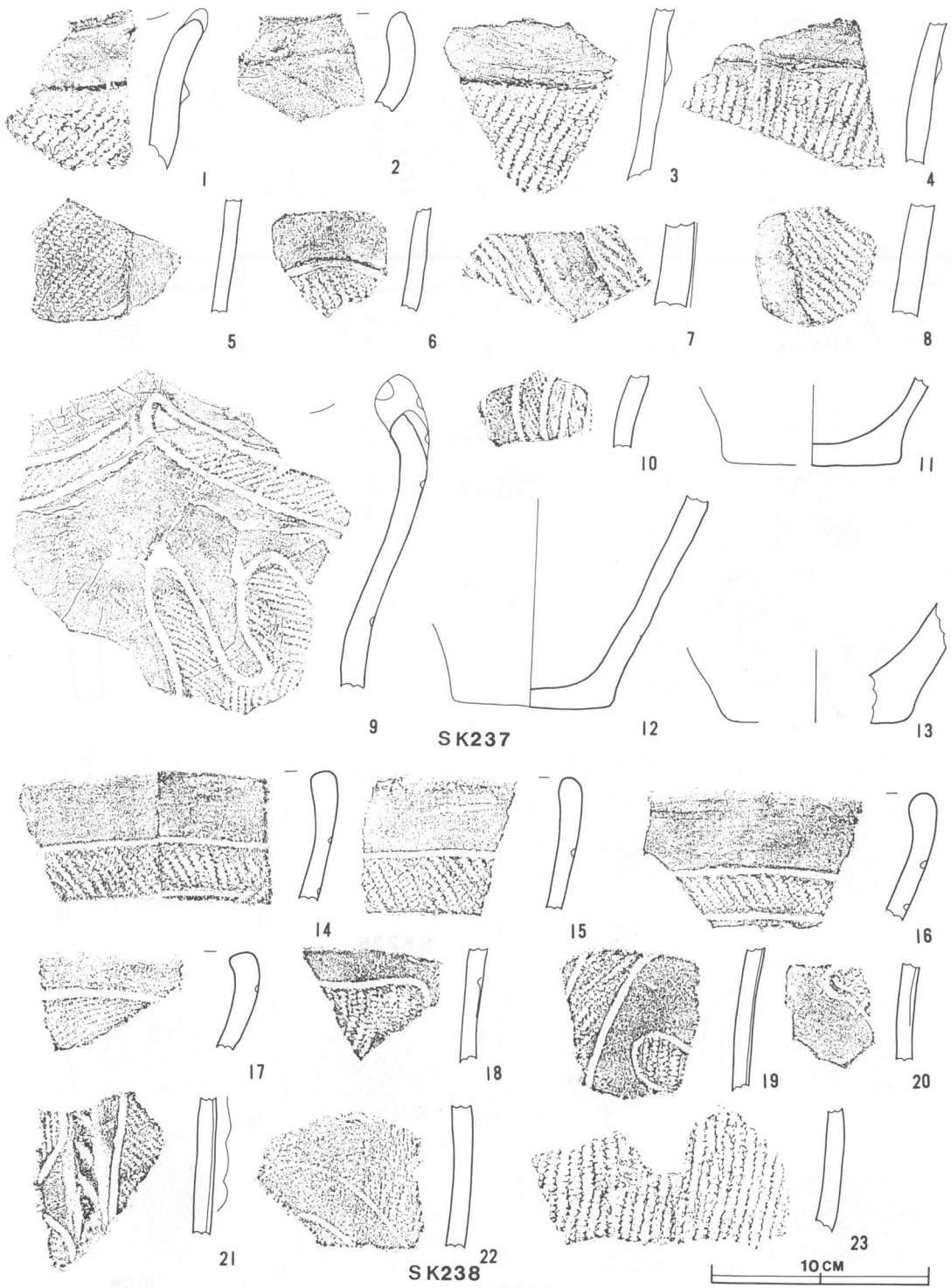
2群b(第128図-8～12, 第129図-1～5) 沈線による区画文様を有する。8・9は同一個体と思われ、沈線によって逆三角形形状、及び複雑な文様が描かれている。第129図-1は口縁部を欠



第 125 图 第 232 ~ 234 号土壙出土土器拓影图



第 126 图 第 235・236 号土坑出土土器拓影图



第 127 图 第 237 · 238 号土壤出土土器拓影图

損する小形鉢形土器で、文様はくびれ部に横位の楕円点列文が配され、胴部には沈線によって楕円変形渦巻文が2単位描かれ、区別は楕円点列文が行われている。

#### 第241号土壙

遺物は覆土中層から下層にかけて少量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第129図-8~22)

1群a(8~15) 微隆起線による区画文様を有する。8・9は口縁部の破片で、8は波状口縁を呈する。いずれも口辺部に無文帯を作り、その下に横位の微隆起線が配されている。10~15は胴部の破片で、15は縦位の微隆起線上にスリットが行われている。

1群c(16~21) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

#### 第242号土壙

遺物は覆土中層から中層にかけて少量の縄文土器、及び土製品を出土する。

縄文土器(第130図-1~17)

1群a(1~8) 微隆起線による区画文様を有する。1・3~5は口縁部の破片で、いずれもやや内彎して立ちあがる。文様は曲線的な微隆起線による区画がなされている。

1群b(10~12) 横・縦位の沈線による区画文様がなされている。

1群c(13~17) 縄文の文様を有する胴部の破片である。

1群e(9) 横位の沈線下に櫛歯状の沈線が描かれている。

土製品(第146図-13, 第144図-7)

13・7共に覆土中層より出土した完形の土製円板、及び有孔円板である。

#### 第243号土壙

遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第130図-18~21)

1群a(18・19) 縦位の微隆起線を有する胴部の破片である。

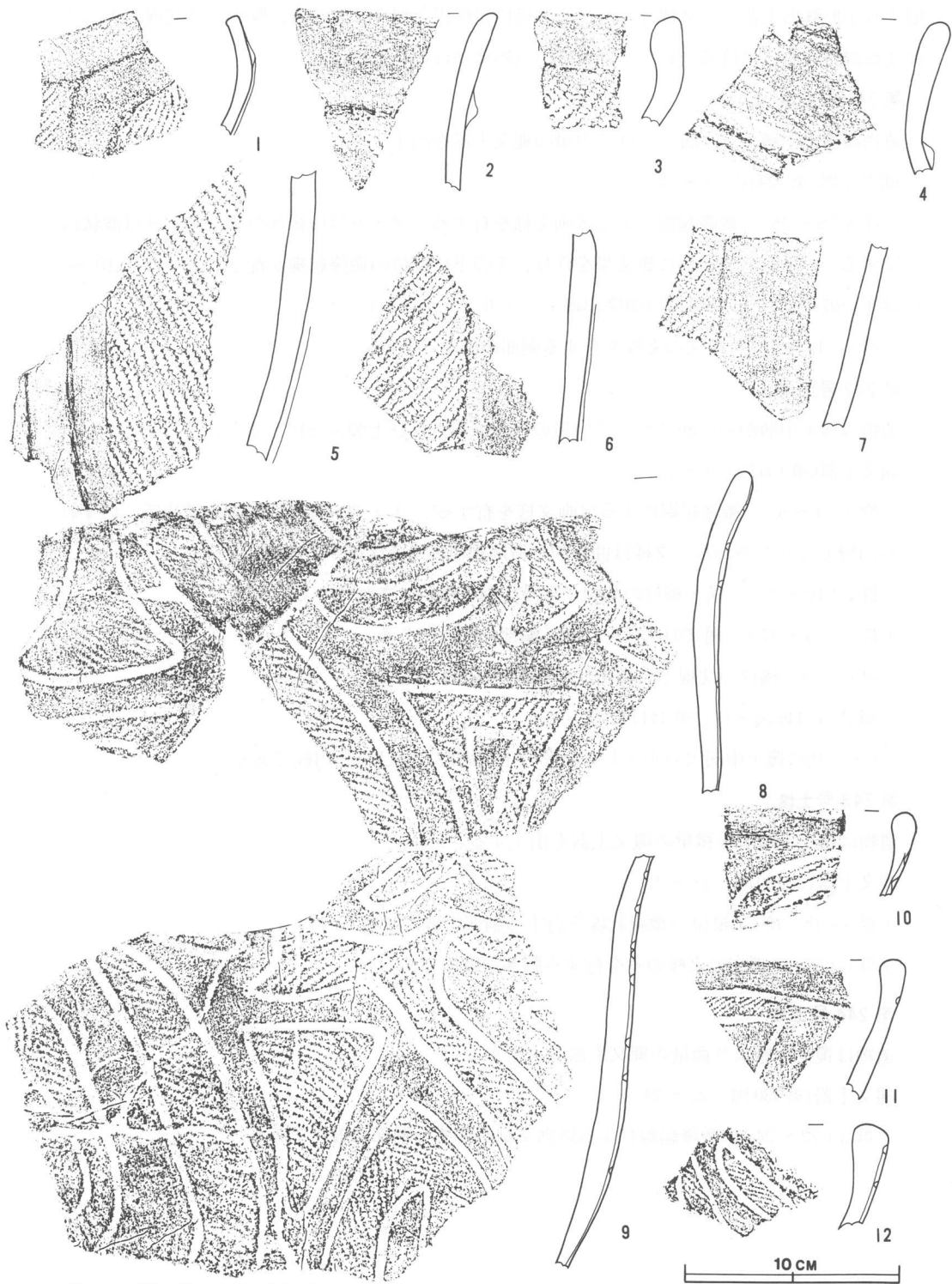
1群c(20) 縄文の文様のみを有する胴部の破片である。

#### 第244号土壙

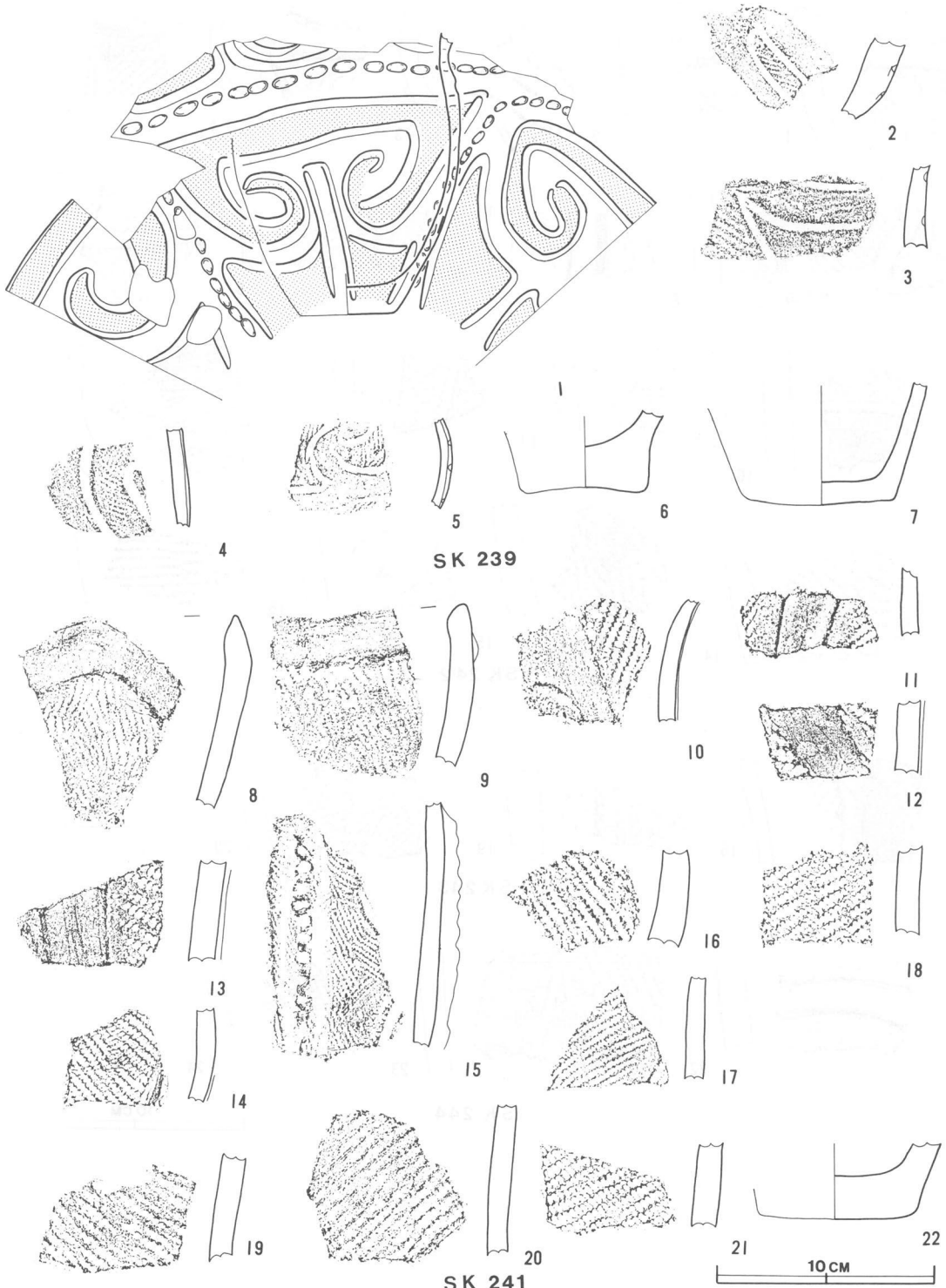
遺物は覆土上層より微量の縄文土器を出土する。

縄文土器(第130図-22~24)

1群a(22~24) 微隆起線による区画文様を有する胴部の破片である。



第 128 图 第 239 号土壤出土土器拓影图



第129图 第239・241号土壙出土土器拓影图



第 130 图 第 242 ~ 244 号土壤出土土器拓影图



## (3) 埋設土器

本遺跡から確認された埋設土器は遺跡のやや小高い地区に存在し、総計16基検出された。

## 第1号埋設土器(第132図)

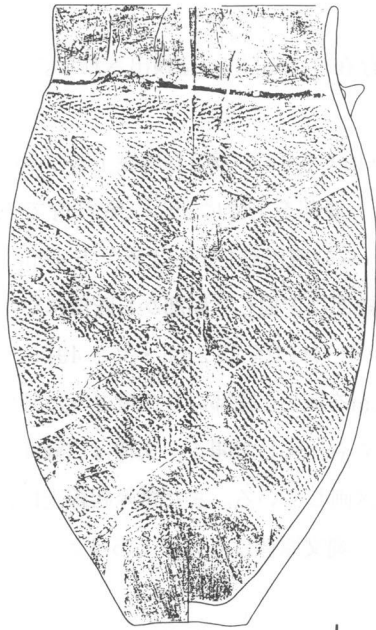
本埋設土器はB3e<sub>3</sub>の東側より確認され、第22号住居跡の北東6.5m、第9号埋設土器の南西1.5mに位置している。口縁部はS-37°-Eの方向へ向き、口縁部を上位に25°の傾斜角で埋設された斜位埋設土器である。掘り方は長径74cm・短径68cmの楕円形を呈し土器下方4cmほど深く掘りこんでいる。また斜位に埋設されていた土器の口縁部は欠損し、胴部から底部にかけては完全な形で出土している。埋設されていた土器(第131図-1)は口径22.2cm・高さ49cm・底径9cmの大きさで、胴部最大径は胴部上位に有し、14.6cmを測る。底部より内彎ぎみに外傾して胴部最大径に至った後、内彎して立ちあがり、口縁部でやや外反して開く。文様は口縁部の縄文を磨消して無文帯にし、縄文との境を微隆起線によって区画している。また微隆起線上には舌状の突起を有し、胴下位はヘラ状工具によって磨いている。縄文原体は $\uparrow > \downarrow$ である。

## 第2号埋設土器(第132図)

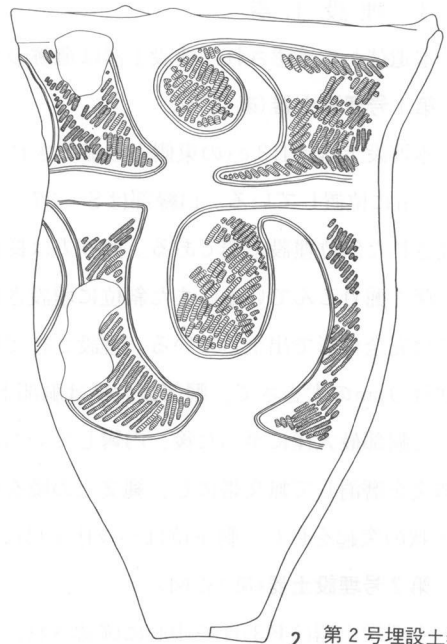
本埋設土器はB3d<sub>4</sub>を中心に確認され、第18号住居跡の東12m、第9号埋設土器の東2mに位置している。口縁部はS-60°-Eの方向へ向き、口縁部を上位に26°の傾斜角で埋設され、また土器下には支えのための石が置かれていた。掘り方は長径93cm・短径59cmの楕円形を呈し、土器下方5cmほど深く掘り込んでいる。埋設されていた土器(第131図-2)はほぼ完全な形で出土し、口径34.5cm・高さ49.5cm・底径86cmほどである。器形は底部より外傾して胴上位まで開いた後、やや内彎してくびれ部に至り、くびれ部より外傾して開く。口唇部には3個の突起を有する。文様は全体にRLの縄文を施した後、微隆起線による区画文様がくびれ部に横位、口縁部と胴部に「C」字文が4単位作られ、縄文と微隆起線との区画を明確にするため、棒状工具によるなぞりが行われている。

## 第3号埋設土器(第132図)

本埋設土器はB3d<sub>4</sub>の北側より確認され、第2号埋設土器の北4m、第4号埋設土器の西2mに位置している。本跡は他の埋設土器と異なり、2個の土器を使用して作られた遺構で、1個は完形の土器を斜位、他の1個は斜位の土器の口縁部を囲むようにして、1個体の土器の破片を縦位に埋設した土器である。斜位に埋設されていた土器の口縁部はN-73.5°-Eの方向へ向き、口縁部を上位に18°の傾斜角で埋設されている。土器内土層は砂粒を含む暗褐色・褐色・明褐色のしまった土が堆積していた。また土器下には非常に硬いブロック状の土(23g)が確認され、沈み防止のために人為的に埋めもどしたと考えられる。斜位埋設土器(第133図-1)は底部より内彎ぎみにやや開いて胴部最大径に至った後、内傾してくびれ部に至り、やや外反して立ちあがり、口辺部で内傾して開く。文様はくびれ部上位に磨消しと沈線によって区画された変形渦巻文3個体、



第1号埋設土器



2 第2号埋設土器

20cm

第131図 第1・2号埋設土器

くびれ部下位に渦巻状の文様が3個体描かれている。正位埋設土器(第133図-2)は第1号埋設土器と同類の土器で、微隆起線によって無文帯と縄文を区画し、微隆起線上に5個の舌状突起が貼り付けられている。無文帯部はヘラ状工具によって磨かれ、また縄文原体はLRである。

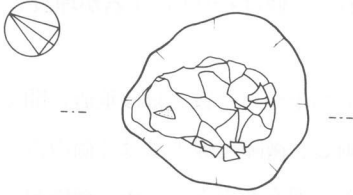
#### 第4号埋設土器(第132図)

本埋設土器はB3 d<sup>5</sup>の北西部より確認され、第3号埋設土器の東2m、第5号埋設土器の南2.2mに位置している。口縁部はN-46°-Wの方向へ向き、口縁部を上位に16.5°の傾斜角で埋設された斜位埋設土器である。掘り方は長径87cm・短径57cmの楕円形を呈し、土器下方1cmほど深く掘り込んでいる。土器内覆土は暗褐色・褐色を主体にした土で、口縁部覆土中よりくみの炭化材を検出する。埋設されていた土器(第134図-1)は小さな底部よりやや内彎ぎみに外上方へ立ち上った後、口縁部で内傾して開く。文様は土器全体にLRによる施文がなされ、口辺部は同一原体による羽状文様が施されている。

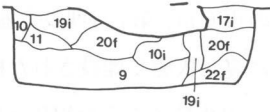
#### 第5号埋設土器(第132図)

本埋設土器はB3 c<sup>5</sup>より確認され、第4号埋設土器の北2.2m、第12号埋設土器の南1.8mに位置している。本埋設土器は他の埋設土器と異なり、大きさの違う2個の土器を利用し、二重に正位埋設したものである。内側には波状口縁を呈する土器(第134図-3)、外側には微隆起線による渦巻文が描かれた土器が正位埋設されていた。また土器内覆土は暗褐色・褐色を呈し、上層部

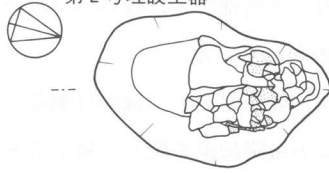
第1号埋設土器



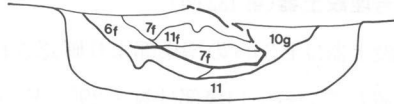
--- 33.2 m ---



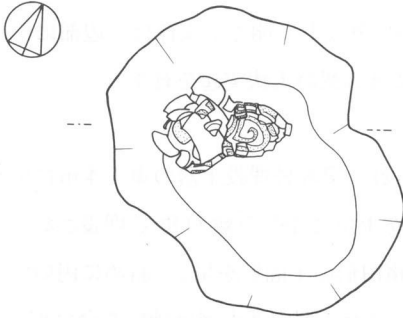
第2号埋設土器



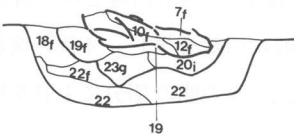
--- 33.2 m ---



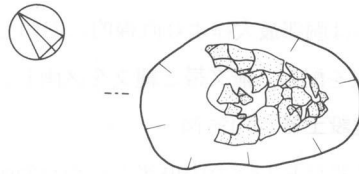
第3号埋設土器



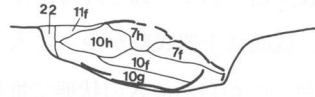
--- 33.2 m ---



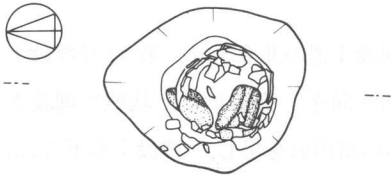
第4号埋設土器



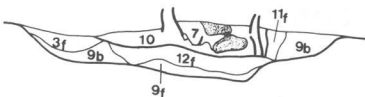
--- 33.2 m ---



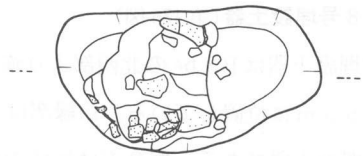
第5号埋設土器



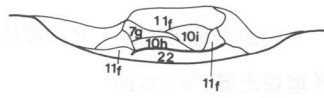
--- 33.2 m ---



第6号埋設土器



--- 33.2 m ---



第132図 第1~6号埋設土器実測図

には灰白色の凝灰岩，下層部からは砂岩の2個の石が検出され，1個は石の上に土器が埋設され，もう1個は内部に置かれている。

内側の土器は波状口縁を呈し，口縁部は胴部より外反して立ち上がった後，ほぼ垂直に開く。文様は口辺部に横位の微隆起線を配し，無文帯と縄文部を区画し，微隆起線上には4個の舌状突起を有する。外側の土器は胴部上位のもので，文様はLRによる縄文を施文した後，微隆起線による渦巻文が4個体描かれている。

#### 第6号埋設土器(第132図)

本埋設土器はB3c6の南東部より確認され，第5号埋設土器の東6m，第7号埋設土器の西1.4mに位置している。口縁部はN-29°-Eの方向へ向き，真横に寝た状態で埋設された横位埋設土器である。底部付近は攪乱を受けて欠損し，内部土層は砂粒・炭化粒子を含む褐色・暗褐色の土である。掘り方は長径105cm・短径56cmの楕円形を呈している。埋設されていた土器(第134図-4)は胴部最大径より直線的に内傾した後，口辺部で外反して開く。文様は口辺部に横位の微隆起線を配し，無文帯と縄文を区画し，微隆起線上には3個の舌状突起を有する。

#### 第7号埋設土器(第135図)

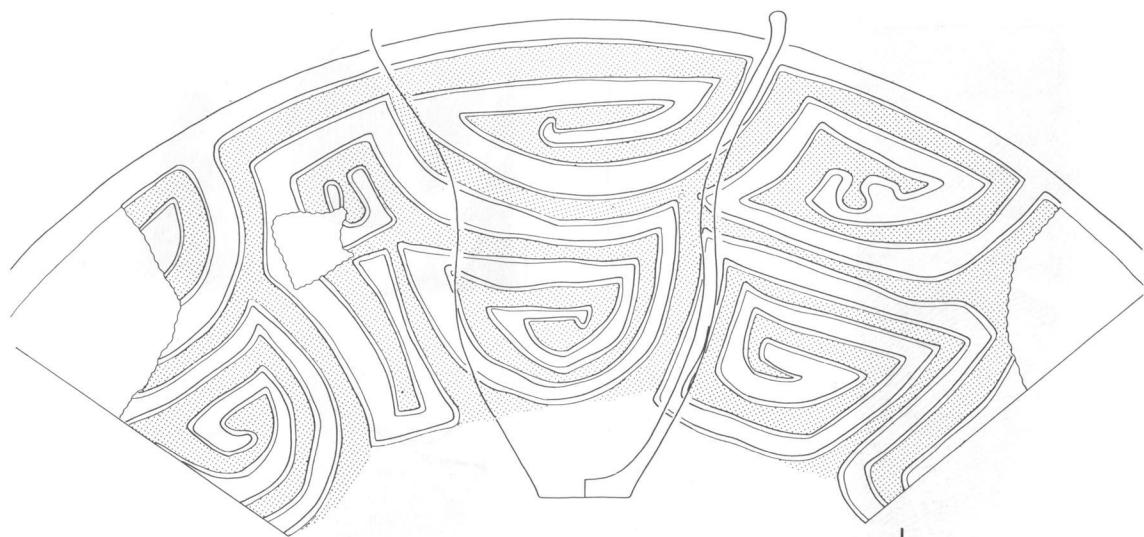
本埋設土器はB3c7の中央部よりやや南西部より確認され，第6号埋設土器の東1.4mに位置している。口縁部はS-81.5°-Wの方向へ向き，口縁部を上位に45°の傾斜角で埋設された斜位埋設土器である。掘り方は長径111cm・短径70cmの楕円形の平面形を呈し，斜めに円筒状に掘り，底面は土器底部がやっと入る程度に掘りこんでいる。また土器内部土層は砂粒を含む褐色・暗褐色の土が自然流入の状態では堆積している。埋設されていた土器(第134図-5)は完形品で出土し，器高63.2cm・口径48.7cm・底径12.3cmの大きさで，底部よりやや内彎ぎみに外傾して立ちあがり，中位でくびれた後，やや外反して開く。口縁部は波状口縁を呈し，4個の突起を有する。文様は微隆起線の区画によって4個体の「H」文を構成し，その他の部分にLRを原体とする縄文の文様を充填している。

#### 第8号埋設土器(第135図)

本埋設土器はB3b6の北西部より確認され，第6号埋設土器の北6.5m，第12号埋設土器の北東5.5mに位置している。口縁部はS-62°-Wの方向を向き，真横に寝た状態で埋設された横位埋設土器である。掘り方は長径100cm・短径76cmの楕円形を呈し，埋設土器下5cmほど深く掘りこんでいる。埋設されていた土器(第136図-1)は上面が完全に破壊され，下面の胴上半分のみ出土，口縁部は波状口縁を呈し，文様は微隆起線の区画によって，4個体の「H」文が構成され，その他の部分にはLRの原体による縄文を充填している。

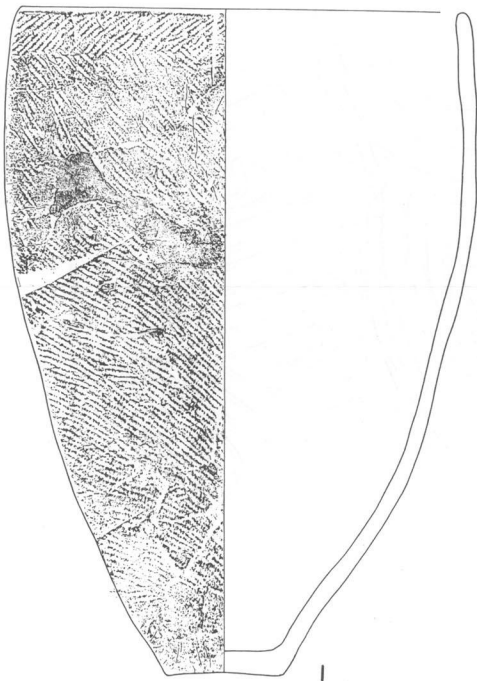
#### 第9号埋設土器(第135図)

本埋設土器はB3e4の北西部より確認され，第1号埋設土器の北東1.3m，第2号埋設土器の

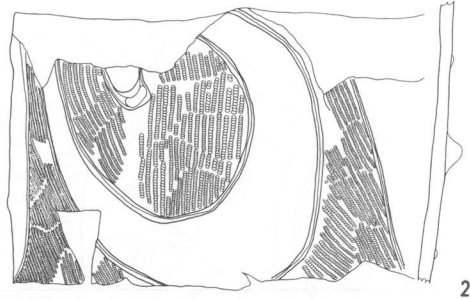


20 cm

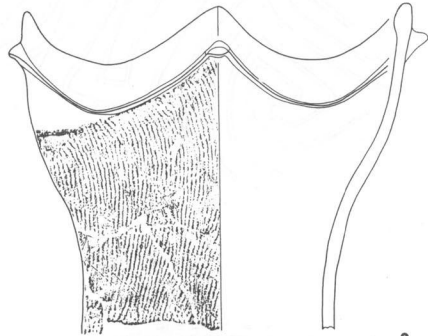
第133図 第3号埋設土器



第4号埋設土器

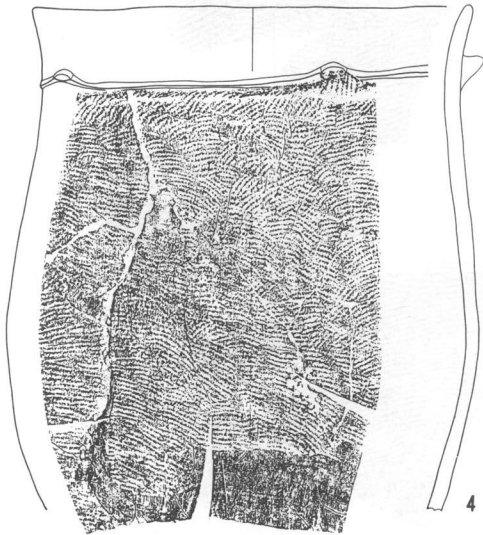


2



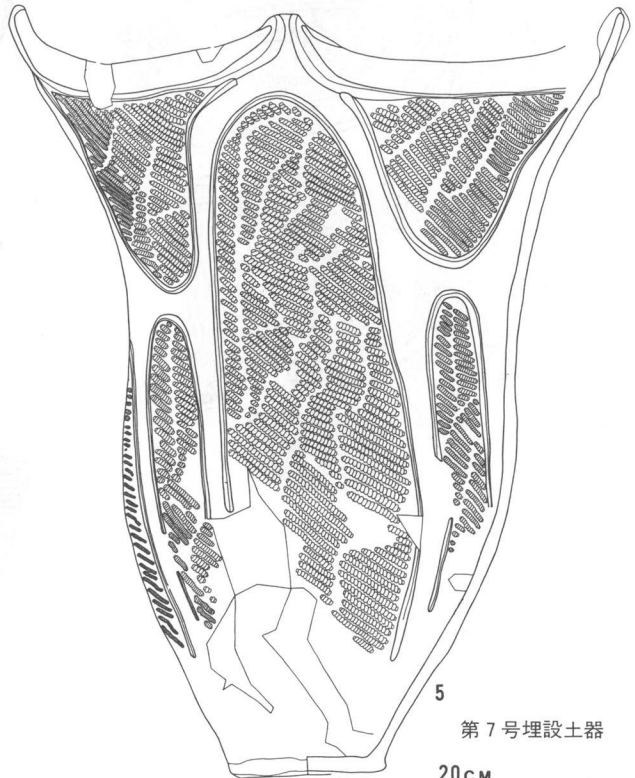
3

第5号埋設土器



4

第6号埋設土器



5

第7号埋設土器

20 CM

第134図 第4~7号埋設土器

西 1.8 m に位置している。口縁部は N-32°-E の方向を向き、口縁部を上位に 38° の傾斜角で埋設された斜位埋設土器である。また埋設されていた土器(第 136 図-2)は胴下位から底部にかけての土器で、上半分が完全に欠損しているため、埋設土器と決定するためにはやや疑問な点もあるが、他の埋設土器と隣接している点などを考慮して埋設土器と考えたい。埋設されていた土器(第 136 図-2)は底部よりやや内彎ぎみに外上方へ立ちあがり、内面は非常に焼成が悪い。文様は多方向からの RL を原体とする縄文の文様が施文されている。

#### 第 10 号埋設土器(第 135 図)

本埋設土器は B3 a<sub>3</sub> の南東部より確認され、第 11 号埋設土器の南西 3 m、第 13 号埋設土器の南西 5.8 m に位置している。口縁部は S-11°-E の方向を向き、口縁部を上位に 15° の傾斜角で埋設された斜位埋設土器である。掘り方は長径 73 cm・短径 47 cm の楕円形を呈し、土器下 4 cm ほど深く掘り込んで埋設している。また埋設されていた土器(第 136 図-4)は胴部上半が欠損し、底径 6.5 cm を測り、器形は底部よりやや内彎ぎみに外傾して胴部最大径に至った後、やや内傾する。文様は微隆起線の区画によって「H」文が構成され、その他の部分には LR を原体とする縄文の文様が施されている。

#### 第 11 号埋設土器(第 135 図)

本埋設土器は B3 a<sub>4</sub> の中央部に確認され、第 10 号埋設土器の北東 3 m、第 13 号埋設土器の南西 2.8 m に位置している。口縁部は S-12°-E の方向を向き、口縁部を上位に 25° の傾斜角で埋設された斜位埋設土器である。掘り方は長径 71 cm・短径 62 cm の楕円形を呈し、土器下 5 cm ほど深く掘り込んで埋設している。埋設されていた土器(第 136 図-5)は上面が欠損し、下面のみ出土し、胴部から底部にかけての土器である。器形は底部より内彎ぎみに胴部最大径まで立ちあがった後、やや内傾し、文様は微隆起線の区画によって「H」文が構成され、その他の部分は LR を原体とする縄文の文様が施されている。

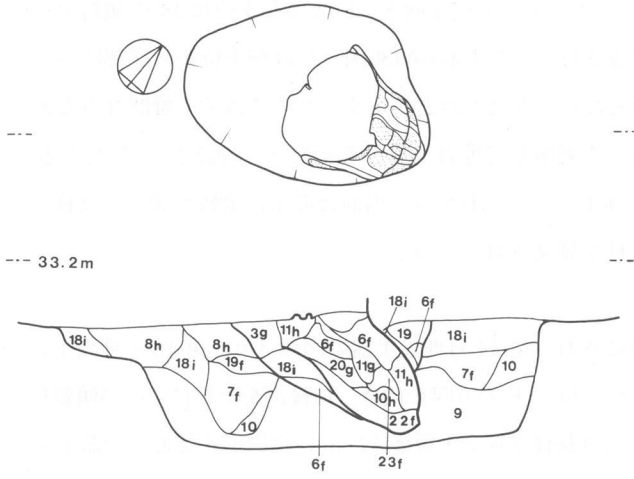
#### 第 12 号埋設土器(第 135 図)

本埋設土器は B3 c<sub>5</sub> の北西部より確認され、第 5 号埋設土器の北 1.8 m、第 4 号埋設土器の北 4 m に位置している。口縁部は S-27.5°-E の方向を向き、口縁部を上位に 76° の傾斜角で埋設された斜位埋設土器である。埋設されていた土器(第 136 図-3)は底部のみの出土であったため、掘り方の平面形は不明であるが、底部より 3 cm ほど深く掘り込んで埋設している。また内部土層は砂粒を含む黒褐色の土が堆積していた。土器の器形は底部より直線的に外傾して立ちあがり、文様は微隆起線の区画によって構成されている。

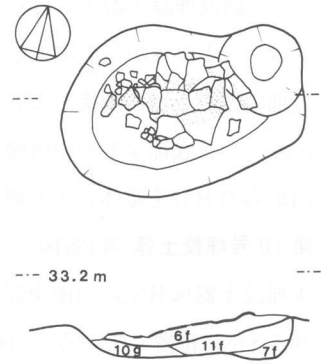
#### 第 13 号埋設土器

本埋設土器は B3 i<sub>3</sub> の南東部より確認され、第 11 号埋設土器の北東 3 m に位置し、遺構精査前の試掘の時に出土したものである。埋設方法は口縁部を北側へ向けた斜位埋設土器であり、その

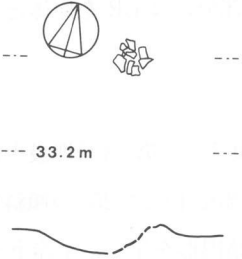
第7号埋設土器



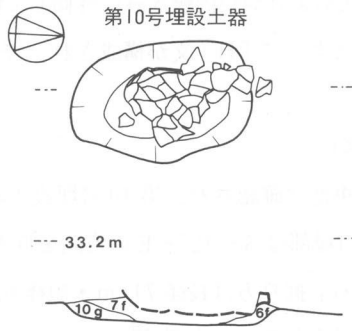
第8号埋設土器



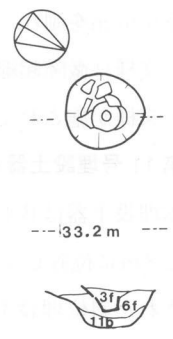
第9号埋設土器



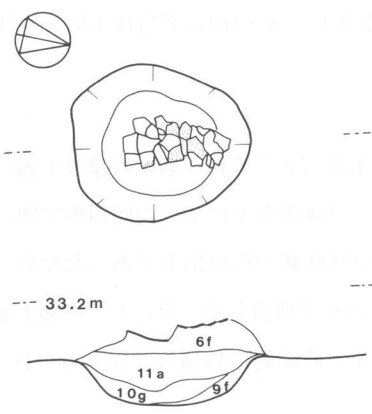
第10号埋設土器



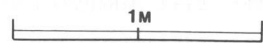
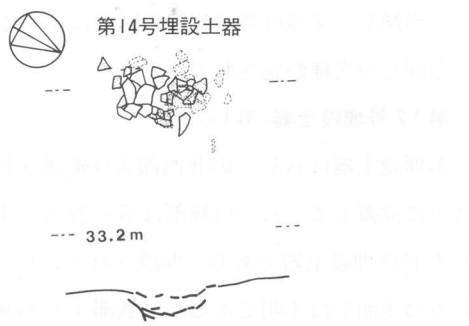
第12号埋設土器



第11号埋設土器

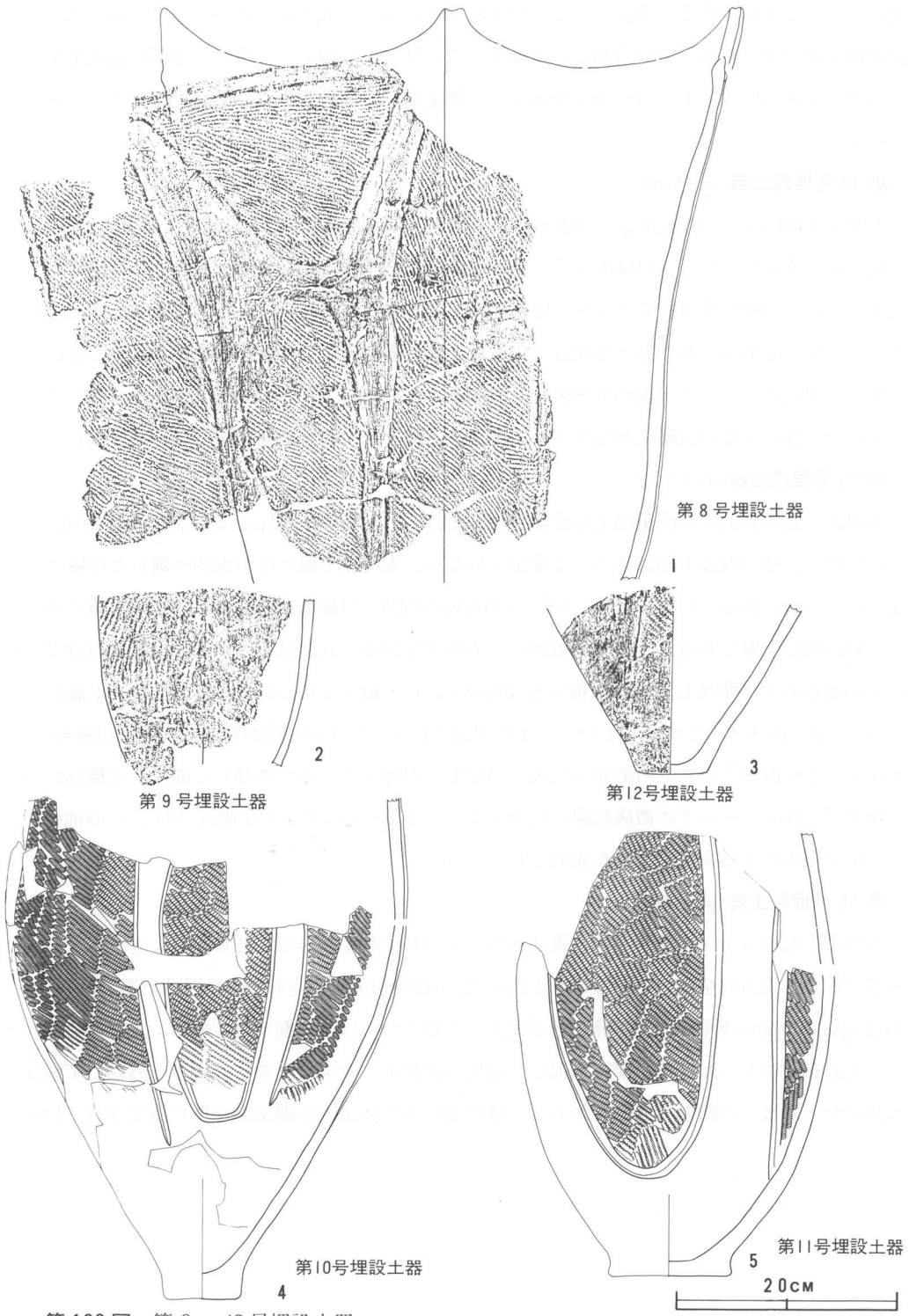


第14号埋設土器



第135图 第7~12・14号埋設土器実測图





第136图 第8~12号埋設土器

他については不明である。埋設されていた土器(第159図-2)は底部よりやや内彎ぎみに外傾して胴部最大径に至った後、やや内傾し、口縁部でやや外反して開く。文様は口辺部に無文帯を作りその下にLRの原体による斜位縄文を施文し、無文帯部と縄文との境は微隆起線によって区画を明確にしている。

#### 第14号埋設土器(第135図)

本埋設土器はA3i4の南西部より確認され、第13号埋設土器の北西5.5m、第11号埋設土器の北7mに位置している。口縁部はS-33°-Eの方向を向き、口縁部を上位に16°の傾斜角で埋設されていた斜位埋設土器であるが、他の埋設土器と異なり遺存状態が非常に悪く砕けた状態で出土したものである。掘り方は本埋設土器下に土壌が重複していたために掘りすぎてしまい不明である。埋設されていた土器(第138図-1)は胴部上位のもので、口縁部に無文帯を作り、その下にRLの原体による斜位縄文が施文され、無文帯と縄文との境を微隆起線によって区別している。

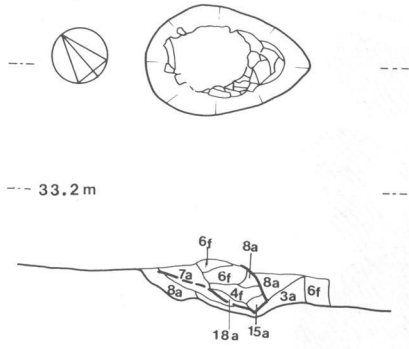
#### 第15号埋設土器(第137図)

本埋設土器はB3d0の南東部より確認され、第212号土壌の南0.2m、第228号土壌の北西0.3mに位置し、他の埋設土器は集中して検出されたが、本埋設土器だけが東側へ離れた位置より確認されたものである。口縁部はN-45°-Eの方向を向き、口縁部を上位に41°の傾斜角で埋設された斜位埋設土器である。土器内土層はローム粒子を含み、底面付近は黒色、口縁部付近は黒褐色・暗褐色の土が堆積している。掘り方は長径65cm・短径44cmの楕円形を呈し、土器より3cmほど深く掘り込んで埋設している。また埋設されていた土器(第139図-2)は波状口縁を呈し、底部よりやや内彎ぎみに立ちあがった後、口縁部で内彎ぎみにやや外傾して開く。文様は口辺部に無文帯を作り、その下に微隆起線の区画によって4単位の「H」文が構成され、その他の部分はLRの原体による縄文の文様が充填されている。

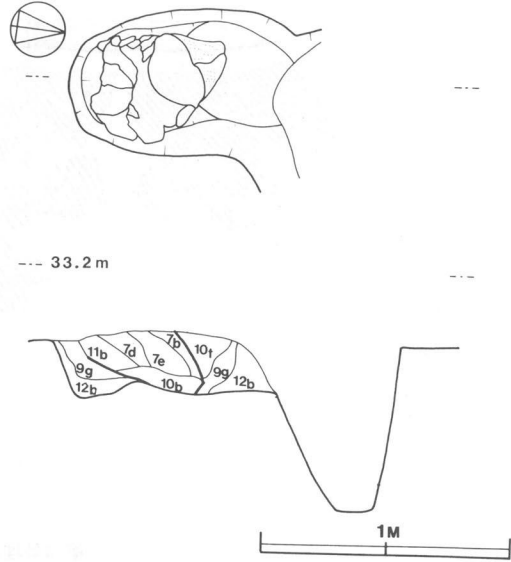
#### 第16号埋設土器(第137図)

本埋設土器はA3h6の南西部より確認され、第14号埋設土器の北東8.5mに位置し、口縁部をS-35°-Eの方向を向き、口縁部を上位に32°の傾斜角で埋設された斜位埋設土器である。掘り方は長径100cm・短径60cmの楕円形を呈し、土器下いっばいに掘られている。また埋設されていた土器(第139図-1)は口縁部を欠損し、器形は底部よりやや外反ぎみに大きく外傾して胴部最大径に至った後、内傾して立ちあがる。文様はRLの原体による縄文が全体に施文されている。

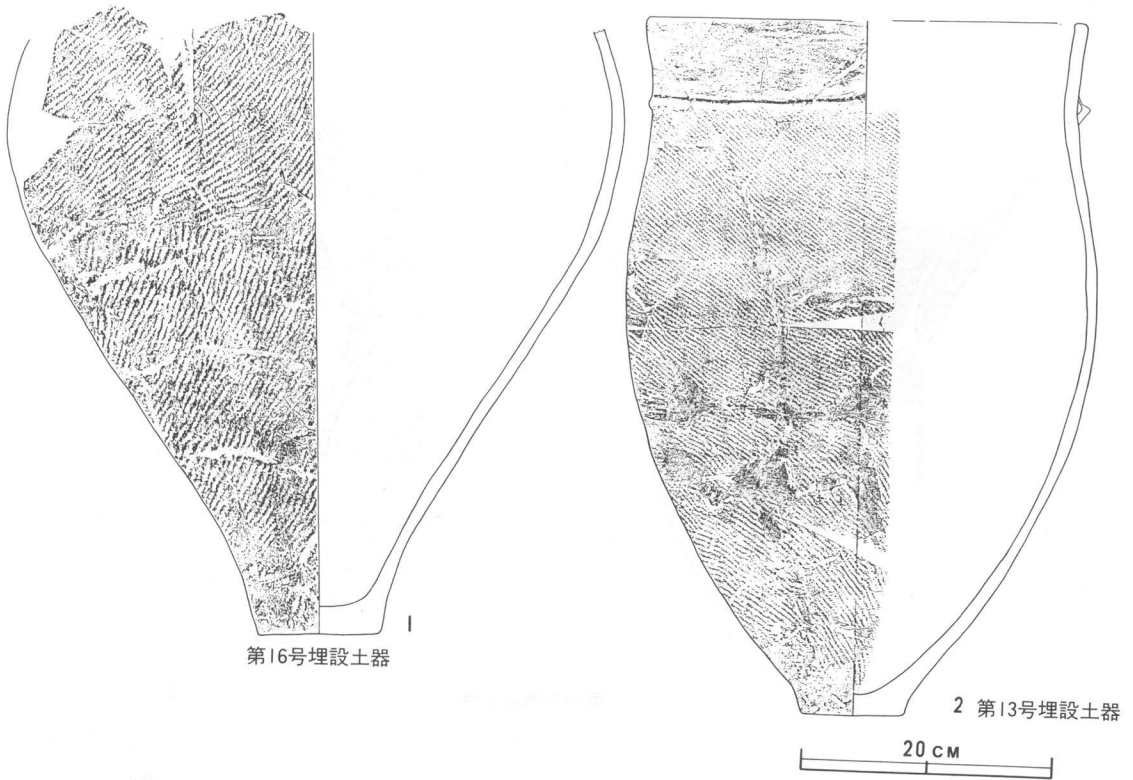
第15号埋設土器



第16号埋設土器



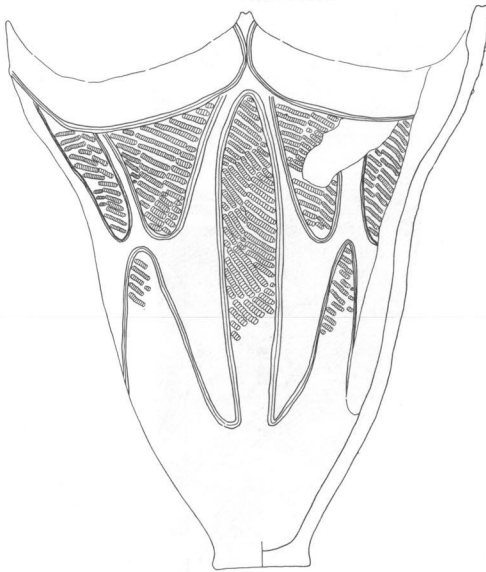
第137図 第15・16号埋設土器実測図



第138図 第13・16号埋設土器



第14号埋設土器

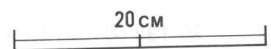


第15号埋設土器



2

第139图 第14・15号埋設土器



石製品一覽表(第140～143図)

図番号	種別	出土地	長cm	幅cm	厚cm	重g	石材	備考	図番号	種別	出土地	長cm	幅cm	厚cm	重g	石材	備考
140 1	磨製石斧	SI 14	5.8	3.7	1.5	61	砂岩		141 14	石錘	SK132	5.2	2.0	1.0	5	瑪瑙	
" 2	"	SI 14	7.2	5.2	2.9	205	角閃石		142 1	磨石	SI 14	14.1	11.4	8.4	1,450	砂岩	
" 3	"	SI 30	5.8	4.8	2.4	128	硬質砂岩		" 2	石皿	SI 25	22.1	11.8	3.7	1,250	砂岩	
" 4	"	SI 33	7.6	4.8	2.3	165	安山岩		" 3	凹石	SI 42	16.2	8.1	6.7	970	溶岩	
" 5	"	SI 33	5.8	4.0	1.5	46	粘板岩		" 4	磨石	SK160	5.3	7.7	5.9	255	砂岩	
" 6	"	SI 44	2.9	2.4	1.4	14	硬質砂岩		" 5	石皿(凹石)	SI 44	10.5	11.0	6.0	908	流紋岩	
" 7	"	SK163	7.5	4.7	2.0	127	流紋岩		" 6	凹石	SI 33	13.5	9.4	8.3	1,050	溶岩	
" 8	"	SK175	8.9	4.4	2.1	144	砂岩		" 7	磨石	SI 23 24 25	10.9	8.8	5.1	655	溶岩	
" 9	"	SK212	4.4	4.4	2.2	86	砂岩		" 8	凹石	SI 18	12.5	8.5	6.9	970	砂岩	
" 10	石斧	SI 36	8.5	6.3	2.4	141	砂岩		" 9	敲石	SI 24	8.4	9.1	4.3	530	砂岩	
" 11	打製石斧	SI 36	9.4	6.5	2.4	167	砂岩		" 10	"	SI 30	7.1	6.7	3.0	243	砂岩	
" 12	石錘	SK190	6.4	5.1	1.0	96	流紋岩		" 11	"	SI 36	10.4	11.2	6.2	940	花崗岩	
" 13	"	SK 55	8.0	6.8	3.0	275	流紋岩		" 12	"	SI 33	7.0	5.1	2.1	125	流紋岩	
141 1	石核	SI 28	3.6	4.2	4.5	65	チャート		143 1	"	SI 33	11.2	8.8	2.0	474	花崗岩	
" 2	剥片	SI 14	5.5	3.7	1.2	25	瑪瑙		" 2	"	SI 13	11.9	7.7	7.9	1,070	砂岩	
" 3	"	SI 14	3.8	3.1	0.8	14	瑪瑙		" 3	"	SI 33	4.8	4.0	1.5	51	流紋岩	
" 4	"	SI 14	4.6	5.0	1.3	32	瑪瑙		" 4	"	SI 42	14.1	8.0	4.8	795	砂岩	
" 5	"	SI 14	3.3	3.5	0.8	11	瑪瑙		" 5	"	SI 33	12.0	9.6	7.9	1,120	砂岩	
" 6	スクレイパー	SI 14	3.9	2.8	1.1	10	碧玉チャート		" 6	"	SK 45	13.2	8.4	3.1	400	砂岩	
" 7	"	SI 25	3.7	2.9	0.8	10	瑪瑙		" 7	"(磨石)	SK 110	15.0	8.7	4.7	980	閃緑岩	
" 8	石鏃	SI 14	1.9	2.5	0.6	4	瑪瑙		" 8	敲石	SK 110	13.5	8.2	4.5	725	砂岩	
" 9	"	SI 02	1.5	1.6	0.3	0.45	チャート		" 9	"(磨石)	SK 110	14.0	9.4	3.7	865	砂岩	
" 10	"	SI 18	1.9	1.0	0.4	0.5	長石		" 10	"(磨石)	SK 110	11.1	9.1	4.5	738	砂岩	
" 11	"	SI 25	1.5	1.3	0.2	0.5	瑪瑙		" 11	磨石	SK 176	18.3	11.9	4.4	1,280	砂岩	
" 12	"	SK 01	2.5	1.5	0.3	0.5	チャート		" 12	敲石	SK 141	14.3	9.3	5.5	980	砂岩	
" 13	"	SK 168	2.6	1.7	0.4	0.5	チャート		" 13	磨石	SK 173	8.3	4.9	1.8	98	溶岩	

土製品一覽表 有孔円板(第144図)

図番号	出土地	長cm	幅cm	厚cm	重g	図番号	出土地	長cm	幅cm	厚cm	重g	図番号	出土地	長cm	幅cm	厚cm	重g
144 1	SI 23	3.4	3.3	0.6	9	144 4	SK 159	4.0	1.7	0.9	8	144 7	SK 242	3.6	3.5	0.8	15
" 2	SI 23	3.3	3.0	0.5	8	" 5	SK 89	4.6	2.1	0.8	12	" 8	表採	3.7	3.6	1.0	17
" 3	SI 28	3.7	3.6	0.6	11	" 6	SK 159	3.2	2.9	0.5	4						

土製円板(第145・146図)

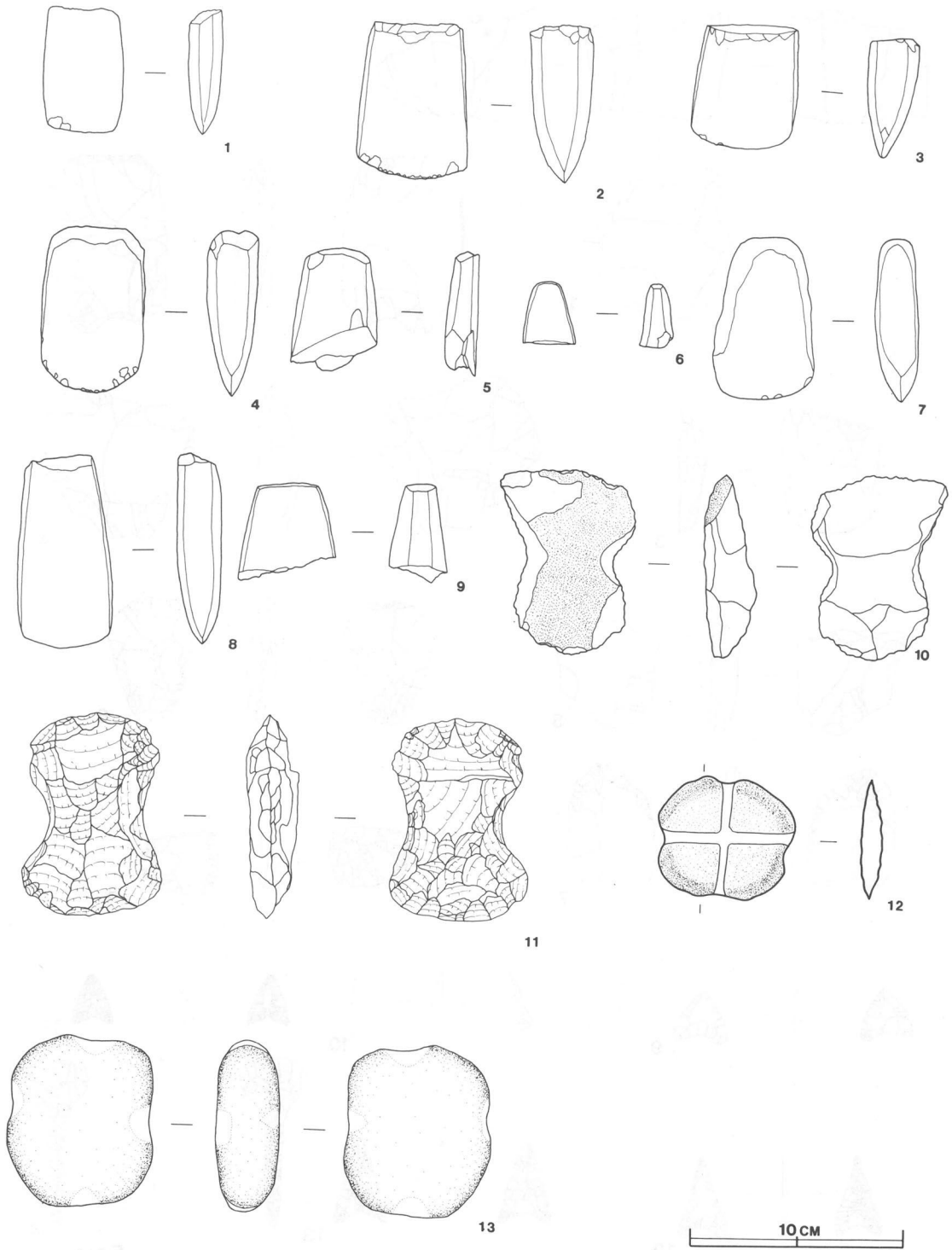
図番号	出土地	長cm	幅cm	厚cm	重g	図番号	出土地	長cm	幅cm	厚cm	重g	図番号	出土地	長cm	幅cm	厚cm	重g
145 1	SI 01	3.5	3.2	0.5	8	145 15	SK 10	4.1	3.7	0.8	18	146 8	SK 206	3.9	3.3	0.8	12
" 2	SI 02	5.0	4.6	1.0	32	" 16	SK 13	3.6	3.3	0.8	14	" 9	SK 206	2.8	2.7	0.6	7
" 3	SI 15	4.7	4.0	1.1	31	" 17	SK 13	3.1	2.9	1.3	15	" 10	SK 229	2.9	2.6	1.1	10
" 4	SI 25	4.6	4.3	0.7	16	" 18	SK 16	4.0	3.4	0.7	15	" 11	SK 229	4.9	4.6	1.1	34
" 5	SI 28	4.1	3.5	0.9	21	" 19	SK 21	2.7	2.1	0.8	7	" 12	SK 235	3.4	3.3	1.0	15
" 6	SI 30	3.3	3.1	0.9	12	" 20	SK 21	3.5	3.1	0.8	9	" 13	SK 242	4.3	4.1	0.9	18
" 7	SI 31	3.15	2.9	0.8	11	" 21	SK 33	4.0	3.4	1.1	22	" 14	表採	2.9	2.7	0.7	8
" 8	SI 31	3.8	3.5	1.1	22	146 1	SK 109	4.6	4.3	1.0	28	" 15	"	3.3	3.0	0.7	8
" 9	SI 33	3.4	3.3	0.8	13	" 2	SK 90	5.0	4.3	0.9	27	" 16	"	3.5	3.0	0.9	11
" 10	SI 37	3.4	3.2	0.8	12	" 3	SK 137	3.0	2.8	0.7	9	" 17	"	5.3	5.0	1.0	36
" 11	SI 40	2.9	1.65	0.4	4	" 4	SK 159	3.2	3.0	1.1	16	" 18	"	3.4	3.3	0.8	13
" 12	SI 40	3.3	3.0	0.7	12	" 5	SK 160	5.5	3.5	0.8	19	" 19	"	3.7	3.4	0.7	14
" 13	SI 41	3.0	2.7	0.4	7	" 6	SK 169	4.3	4.0	0.7	18	" 20	"	4.5	4.3	1.0	27
" 14	SI 44	4.4	3.9	0.8	23	" 7	SK 194	4.1	3.9	0.8	19	" 21	"	3.4	3.2	0.8	13

土器片錘(第144図)

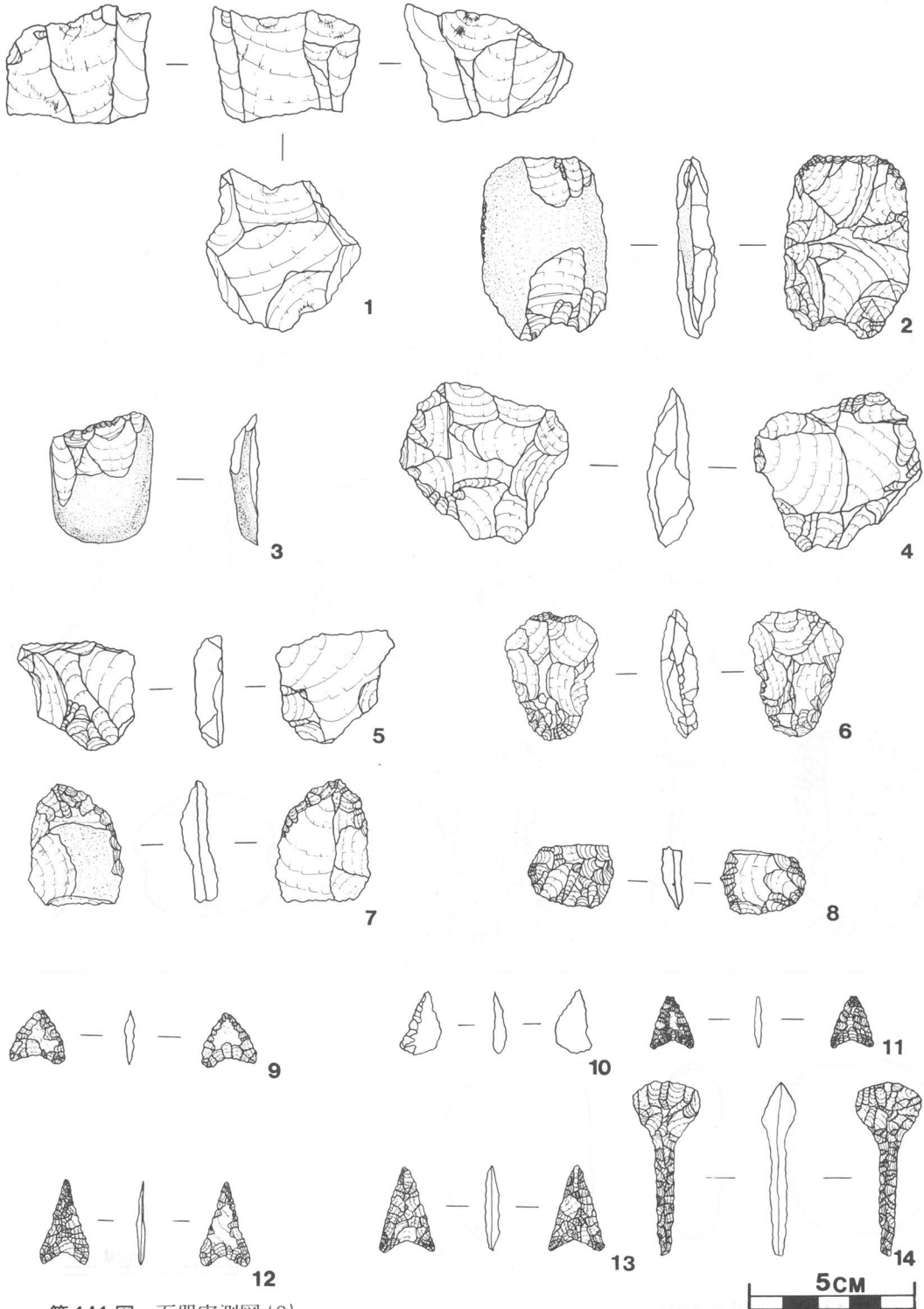
図番号	出土地	長cm	幅cm	厚cm	重g
144 9	SI 37	4.4	3.9	1.0	23
" 10	SK 19	5.0	2.9	0.8	21
" 11	SK 50	3.0	2.8	0.7	11

耳飾(第144図)

図番号	出土地	長cm	幅cm	厚cm	重g
144 13	SK 21	5.0	3.1		25

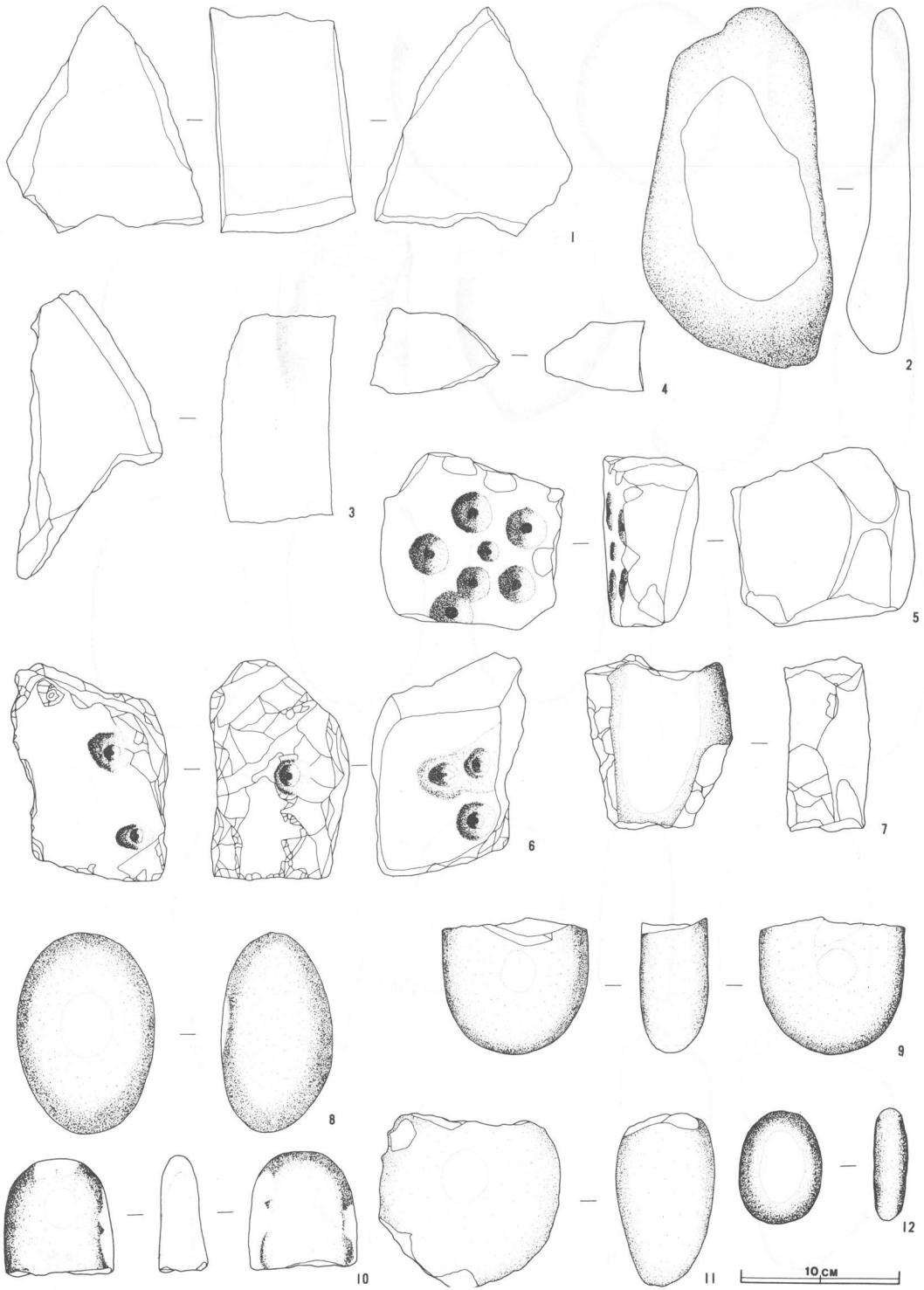


第140图 石器実測图(1)

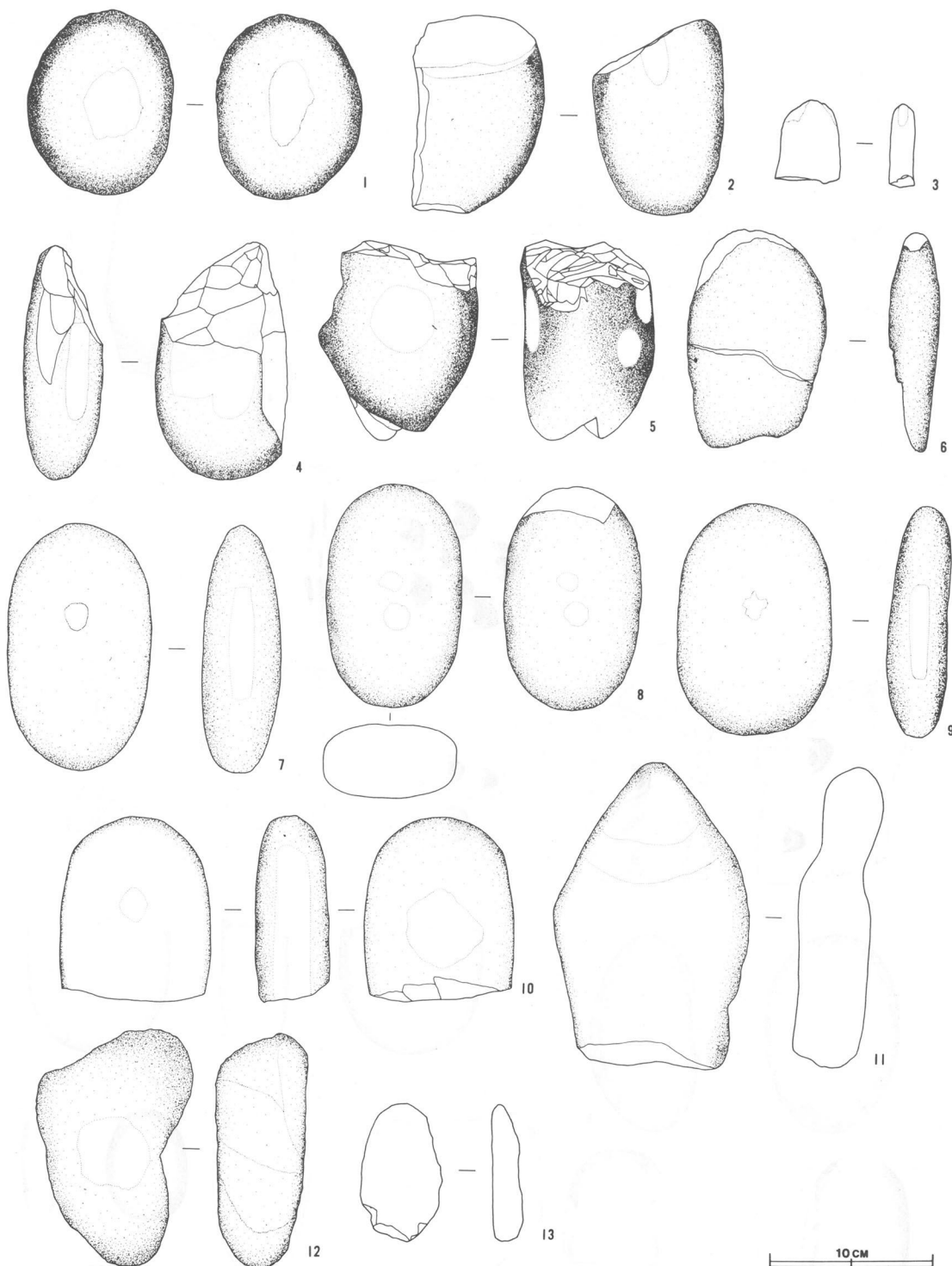


第 141 图 石器实测图 (2)

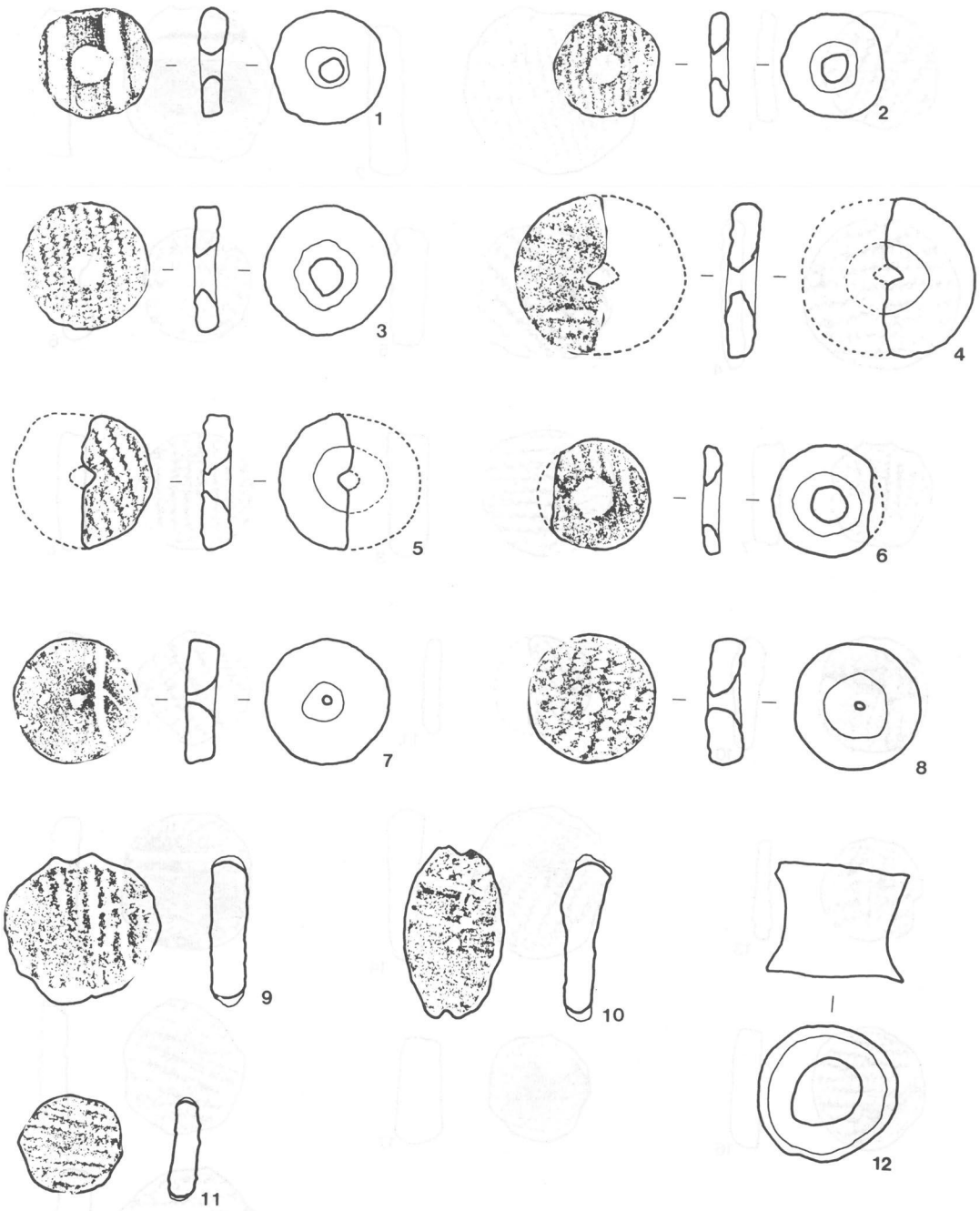




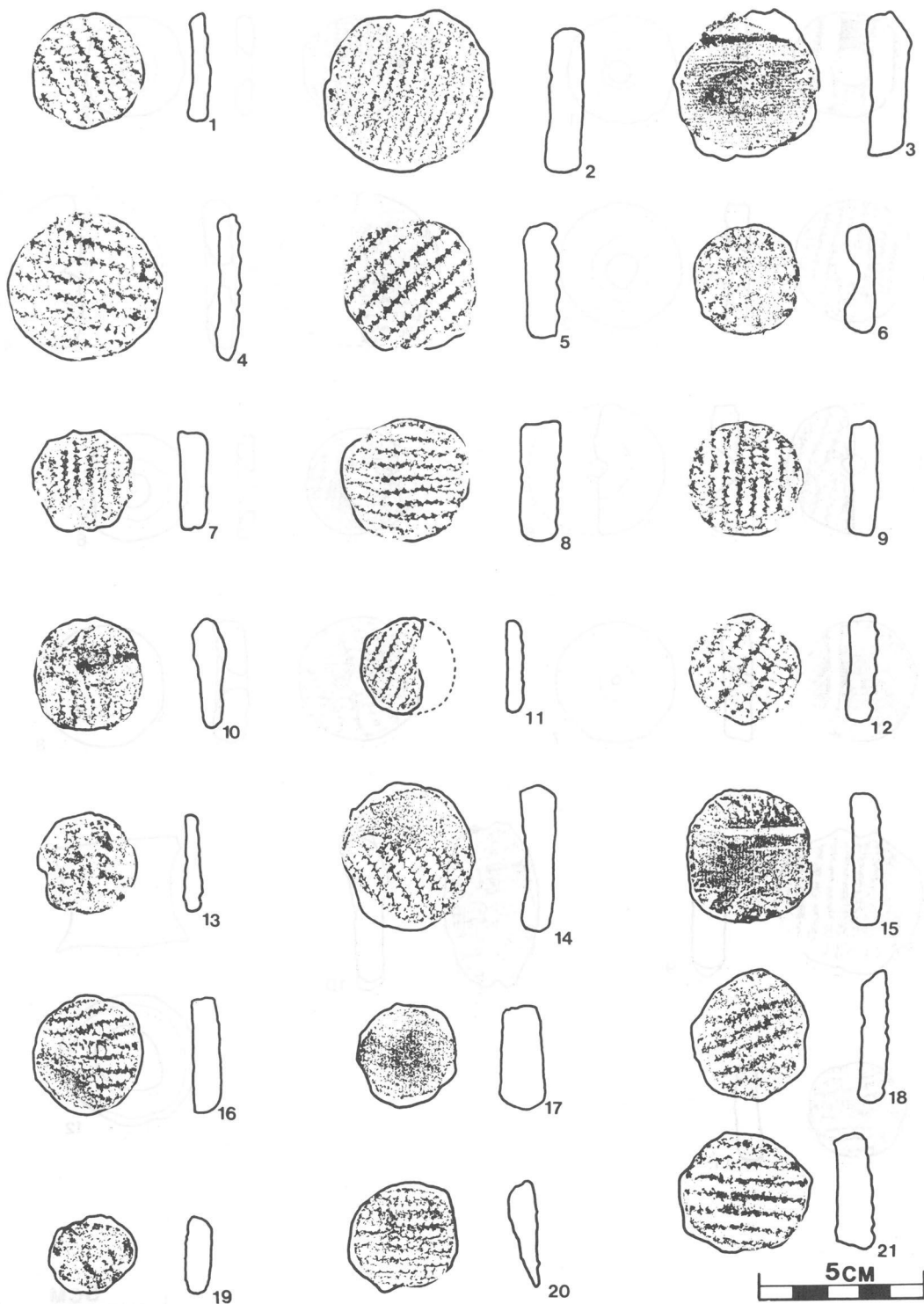
第 142 图 石器实测图 (3)



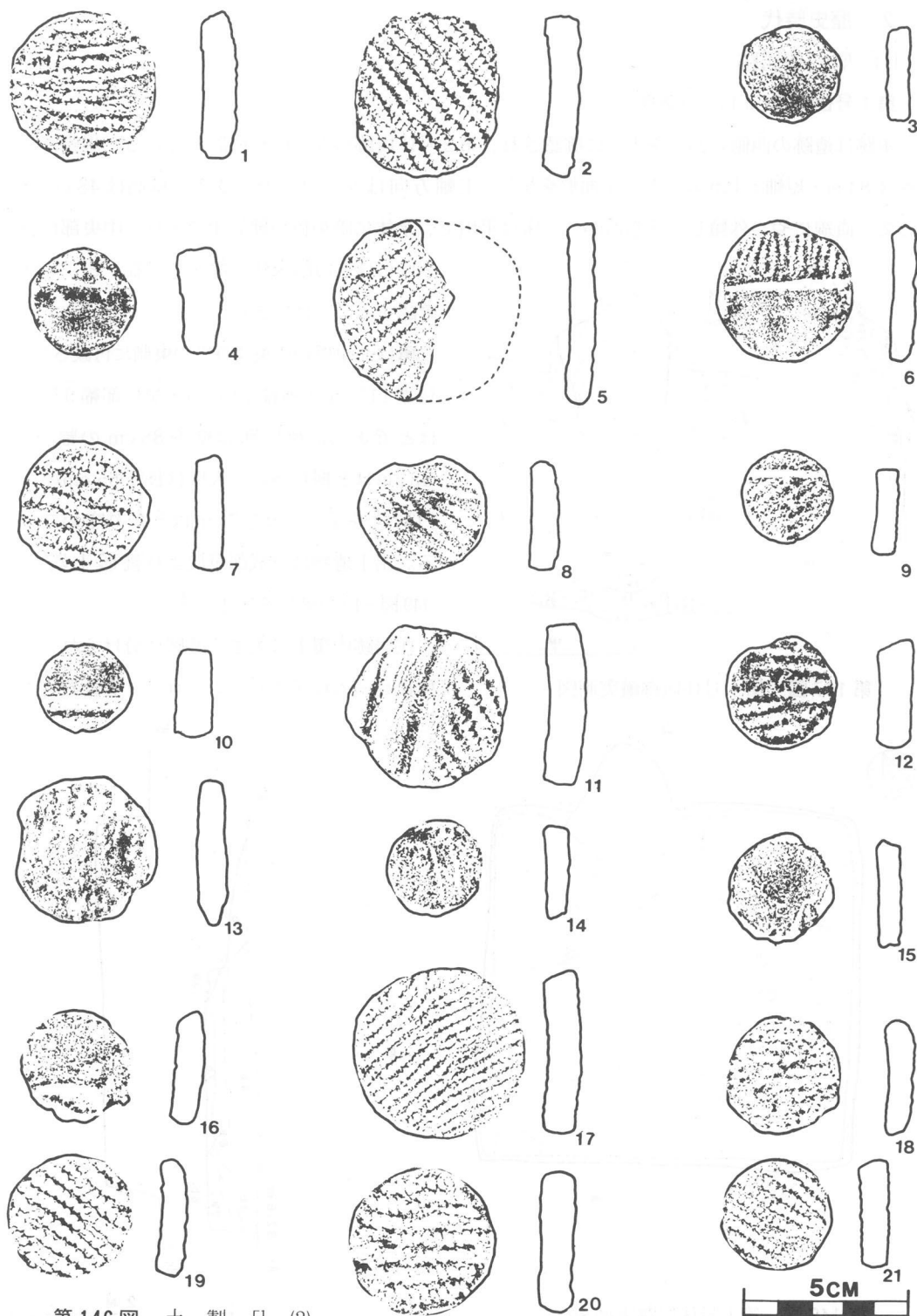
第 143 图 石器实测图 (4)



第144図 土製品(1)



第145图 土製品(2)



第146図 土製品(3)

## 2 歴史時代

### (1) 竪穴住居跡

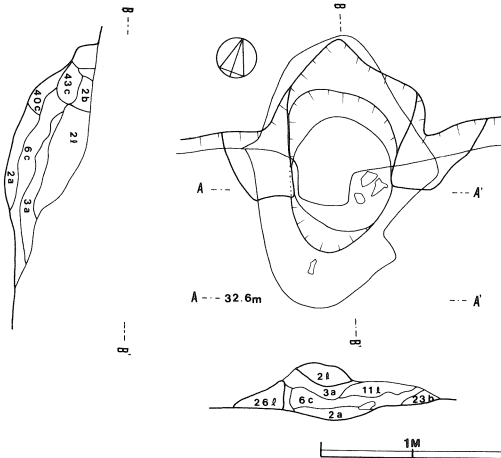
#### 第1号住居跡(第147・148図)

本跡は遺跡の西側C2e9を中心に確認され、第2号住居跡の北4mに位置している。規模は長軸3.84m・短軸3.42mの方形の平面形を呈し、主軸方向はN-24°-Wである。壁高は48cmほどで、直線にやや外傾して立ちあがり、床は平坦で、全体に暗褐色の硬い床であり、中央部は約

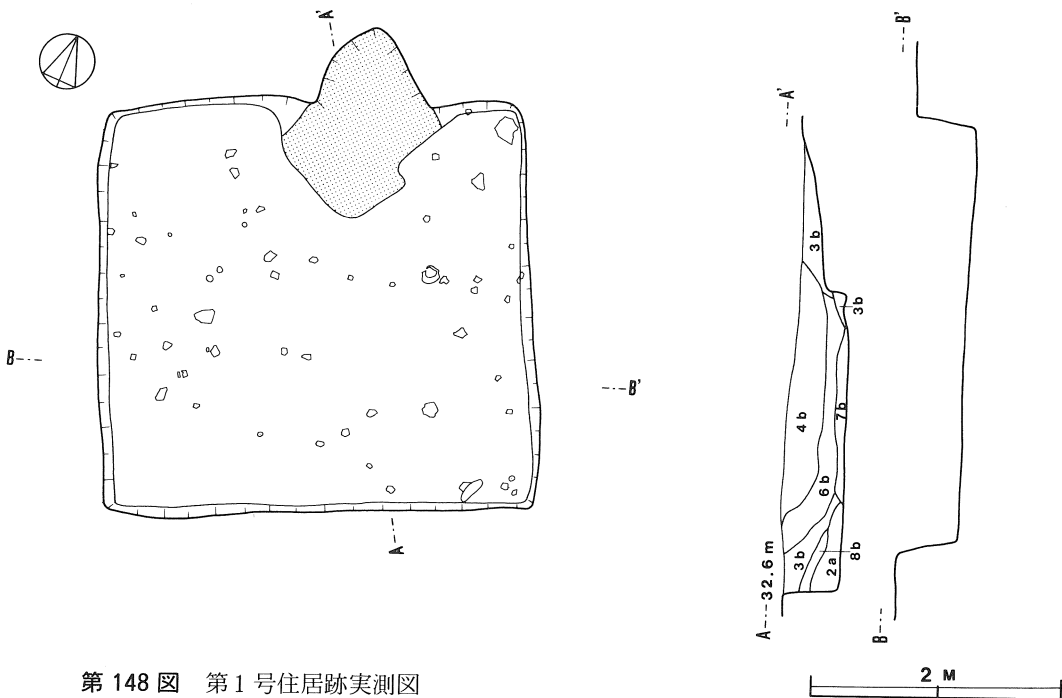
20cmほどの貼床状になっている。ピットは確認することはできなかった。

竈は北東壁の中央よりやや東側に付設され、長さ115cm・袖幅105cm・焚口部幅53cmほどである。焼成部は壁を88cmの幅で、53cmほど掘り込み、火床は長径65cmの楕円形状を呈し、床を5cmほど掘り窪めている。出土遺物は焼成部東側より甕形土器(第149図-1)の破片を出土する。

住居跡内覆土は大きく3層に分けられ、全体にローム粒子やロームブロックを含む黒褐



第147図 第1号住居跡竈実測図



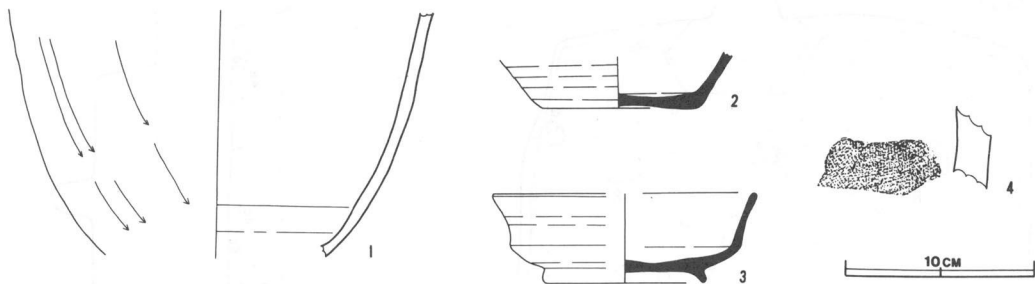
第148図 第1号住居跡実測図

色・暗褐色の柔らかい土がレンズ状に自然堆積している。

出土遺物は土師器・須恵器を少量出土する。西壁床面上より須恵器坏形土器(第149図-2)・高台付坏形土器(第149図-3)が出土している。

遺物解説表(第149図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕形土師器	A B 13.0(現) C	体部の破片で、底部よりやや内彎ぎみに器厚を厚くしながら外上方へ立ちあがる。	外面は上から下へのヘラなどで、内面は横位のなで整形が施されている。	普通 石英・長石 橙 色	
2	坏須恵器	A B 2.7(現) C 8.2	底部はおおむね平坦で、体部は底部より直線的に外上方へ開く。	底部はヘラ切り後、ヘラなどで、外面は水挽き整形、内面はなで調整が施されている。外面には水挽き痕が認められる。	良好 砂粒・長石 青灰色	
3	高台付坏須恵器	A 13.9(復) B 4.7 C 8.6	底面は平坦で、体部は底部より大きく外側へ伸びた後、外反ぎみに上方へ開く。また、底部には高さ0.6cmの高台が貼り付けられている。	底部はヘラなでが行なわれ、その他内外面共になで調整が施されている。	良好 砂粒・長石 灰 色	
4	瓦			布目がみられる。		



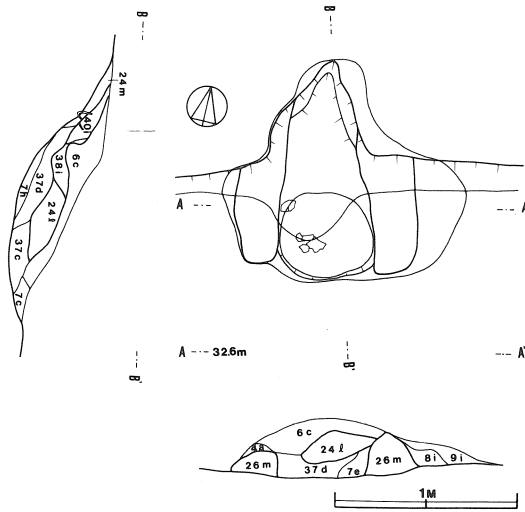
第149図 第1号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡(第150・151図)

本跡は遺跡の西側A2g9を中心に確認され、第1号住居跡の南4mに位置している。規模は長軸4.6m・短軸4.08mの方形の平面形を呈し、主軸方向はN-19°-Wである。壁高は南側で30cm、北側で48cmほどで、直線的に外傾して立ちあがる。床はロームで、硬く平坦であり、第1号住居跡と同じように約10cmほどの貼床である。ピットは5個確認され、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が支柱穴と考えられ、深さは20~35cmを測る。

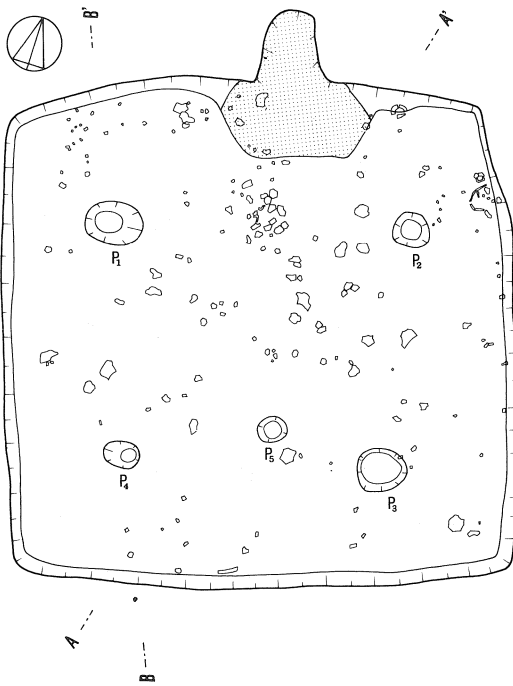
竈は北東壁の中央部よりやや東側に付設され、長さ120cm・袖幅95cm・焚口部幅55cmほどである。焼成部は壁を60cmの幅で、52cmほど掘り込み、火床は直径50cmの円形状を呈し、床を2cmほど掘り窪めている。出土遺物は焼成部西側より甕形土器片を少量出土する。

住居跡内覆土は全体に柔らかく、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を含む黒褐色・暗褐色の土が、レンズ状に自然堆積している。

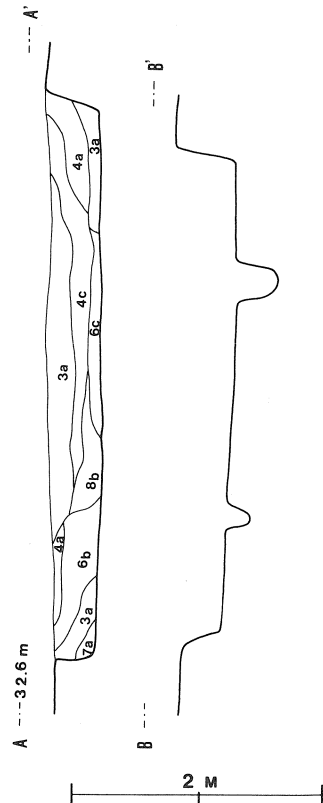


第 150 図 第 2 号住居跡竈実測図

出土遺物は本遺跡の他の住居跡と比較すると、土師器が中心で、出土量も多い。1 は竈前部床面上より出土した甕形土器(第 152 図-1)である。また、竈の西サイド及び、南東コーナー部から須恵器の坏形土器(第 152 図-5・6・7)、西壁覆土中より鎌(第 152 図-8)の完形品が出土している。



第 151 図 第 2 号住居跡実測図





遺物解説表(第152図)

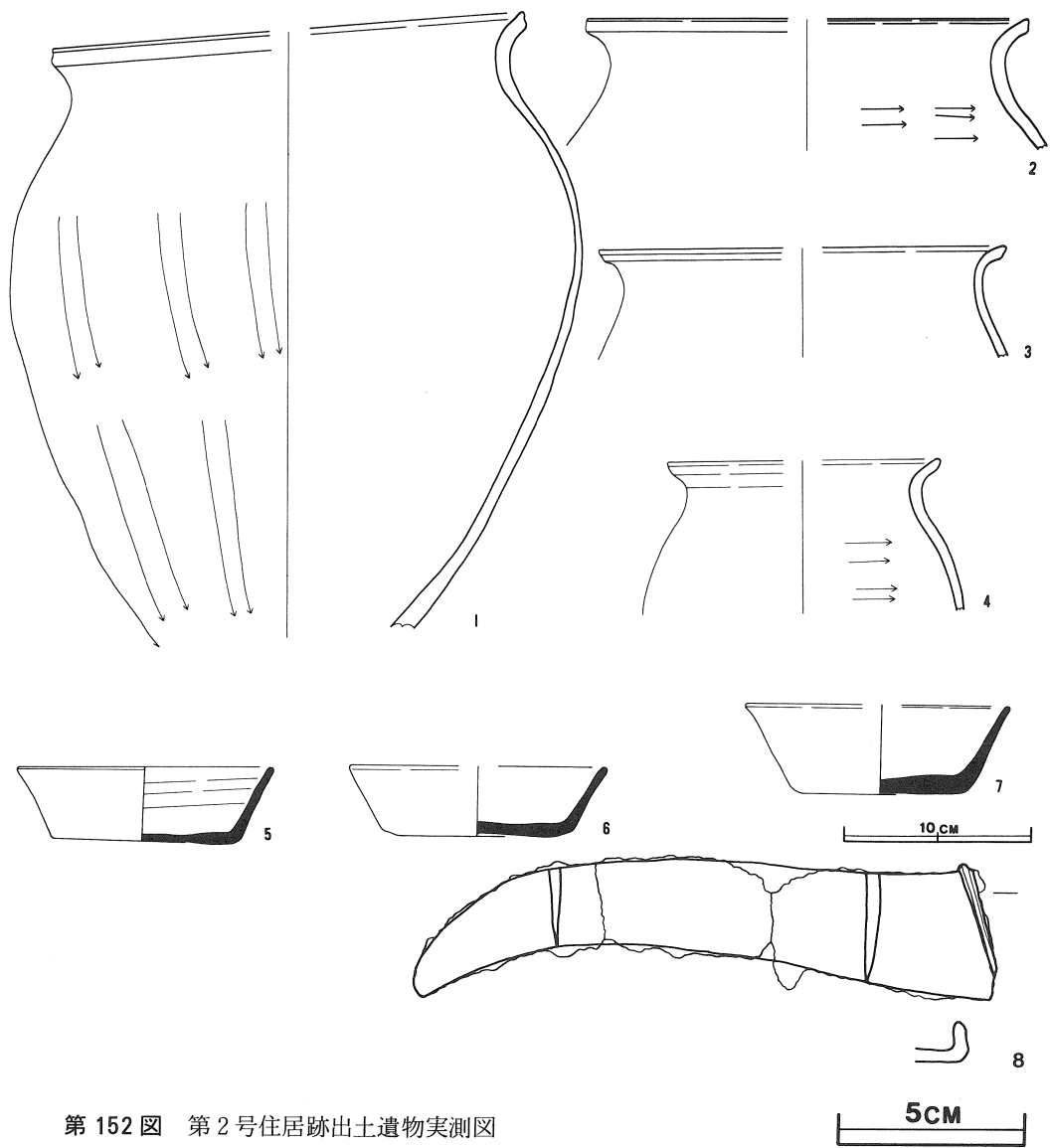
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 24.5(復) B 32.0(現) C	底部欠損、口縁部は頸部より外反して上ち上がる。胴部最大径は中位よりやや上位に有する。胴部は頸部より大きく張り出す。	器外面胴部は縦位のヘラ磨き、内面にて調整が施されている。	普通 砂粒・長石 橙色	
2	甕 土師器	A 23.3(復) B 6.7(現) C	口縁部の破片である。口縁部は頸部より大きく外反して開き、口唇部は垂直になり中央部が凹む。胴部は頸部より大きく外下方へ開く。	口縁部は内外面共ににて調整、内面胴部はヘラにて整形が施されている。	普通 砂粒・石英粒 にぶい橙色	
3	甕 土師器	A 21.6(復) B 5.7(現) C	口縁部の破片である。口縁部は頸部よりやや外反した後、大きく開く。	内外面共ににて調整が施されている。	普通 砂粒 にぶい褐色	
4	甕 土師器	A 14.4(復) B 8.0(現) C	口縁部の破片である。口縁部は頸部より大きく外反して開く。胴部は頸部より器厚を薄くしながら外下方へ開く。	口縁部は内外面共ににて調整、胴部はヘラにて整形が施されている。	良好 砂粒 明褐色	
5	坏 須恵器	A 13.6 B 4.1 C 9.8	底面は平坦で体部は底部より器厚を薄くしながら直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部でやや大きく開く。	底部はヘラにて整形、体部は内外面共に水挽き整形後、にて調整が施されている。	良好 砂粒・長石 褐灰色	
6	坏 須恵器	A 13.4(復) B 3.7 C 8.3(復)	底部はやや上げ底で、体部は底部より直線的に外上方へ開く。	底部はヘラにて、体部内外面共に横にて調整が施されている。外面に水挽き痕が認められる。	不良 砂粒 灰白色	
7	坏 須恵器	A 13.8(復) B 4.7 C 8.5	底部平坦、体部は器厚をやや薄くしながら直線的に外上方へ開き、口縁部で外反する。	底部は回転ヘラにて、その他内外面共に水挽き整形後にて調整が施されている。	不良 砂粒・長石粒 灰白色	
8	鎌	長さ 15.5	完形品の鎌で、取り付け部は上におり返されている。			

## 第3号住居跡(第154図)

本跡はC2h<sub>1</sub>を中心に確認され、新しい土壌によって北東壁が切られ、第4号住居跡の北西0.5mに位置している。規模は長軸2.5m・短軸2.08mほどの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-33°-Wである。壁高は37cmほどで、やや外反して立ちあがり、床面中央部には白色の粘土が厚さ2~5cmほど床にはりついて検出されている。床はロームで、平坦であり、さほど硬いものではない。ピットは北西・南東の壁下より2個確認され、大きさは直径15cmの円形状を呈し、深さは32~35cmを測る。

覆土はローム粒子やロームブロックを含む柔らかい土が帯状に堆積している。出土遺物は非常に少なく、覆土中より須恵器の高台付坏形土器(第153図-1)の破片を出土している。

本跡は竈・炉などは付設されておらず、住居跡とは考えられない。また、同類の堅穴状遺構が東西13m内に8軒検出されており、本跡と同時期、あるいはそれに近い時期の遺構と思われる。



第 152 図 第 2 号住居跡出土遺物実測図

遺物解説表 (第 153 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付 坏 須恵器	A 2.6(現) B 8.8(復)	底部の破片である。体部は底部より内 彎きみに大きく、底部には高台が貼り 付けられている。	内外面共になで調整が施されている。	良好 砂粒 灰色	



第 153 図 第 3 号住居跡出土遺物実測図

**第4号住居跡(第154図)**

本跡はC2h<sub>2</sub>を中心に確認され、第3号住居跡の南東0.5m、第5号住居跡の東2.2mに位置している。規模は長軸2.6m・短軸2.16mほどの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-45°-Wである。壁高は13~18cmほどで、やや外傾して立ちあがり、床は褐色のロームで、非常に硬く踏み固められており、平坦である。ピットは3個確認され、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が支柱穴と考えられる。ピットの大きさは長軸15cmの楕円形状を呈し、深さは30~34cmを測る。

覆土は東側からの自然流入による堆積で、ローム粒子やロームブロックを含む黒褐色・暗褐色の土が堆積している。出土遺物は土師器の破片を覆土中より微量出土している。また本跡も第3・5~8号と類似した遺構と思われる。

**第5号住居跡(第154図)**

本跡はC2h<sub>3</sub>を中心に確認され、第6号住居跡によって北東部が切られ、第3号住居跡の東2m、第4号住居跡の北東2.2mに位置している。規模は長軸2.9m・短軸2.2mほどの長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-28°-Wである。壁高は10~16cmほどで、外傾して立ちあがり、床は全体に平坦で、褐色の硬いパカパカの床面である。ピットは1個南側壁下より検出され、深さは15cmを測り支柱穴と考えられる。

覆土はローム粒子やロームブロックを含む黒色・黒褐色の柔らかい土が堆積している。出土遺物は土師器の細片を微量出土する。

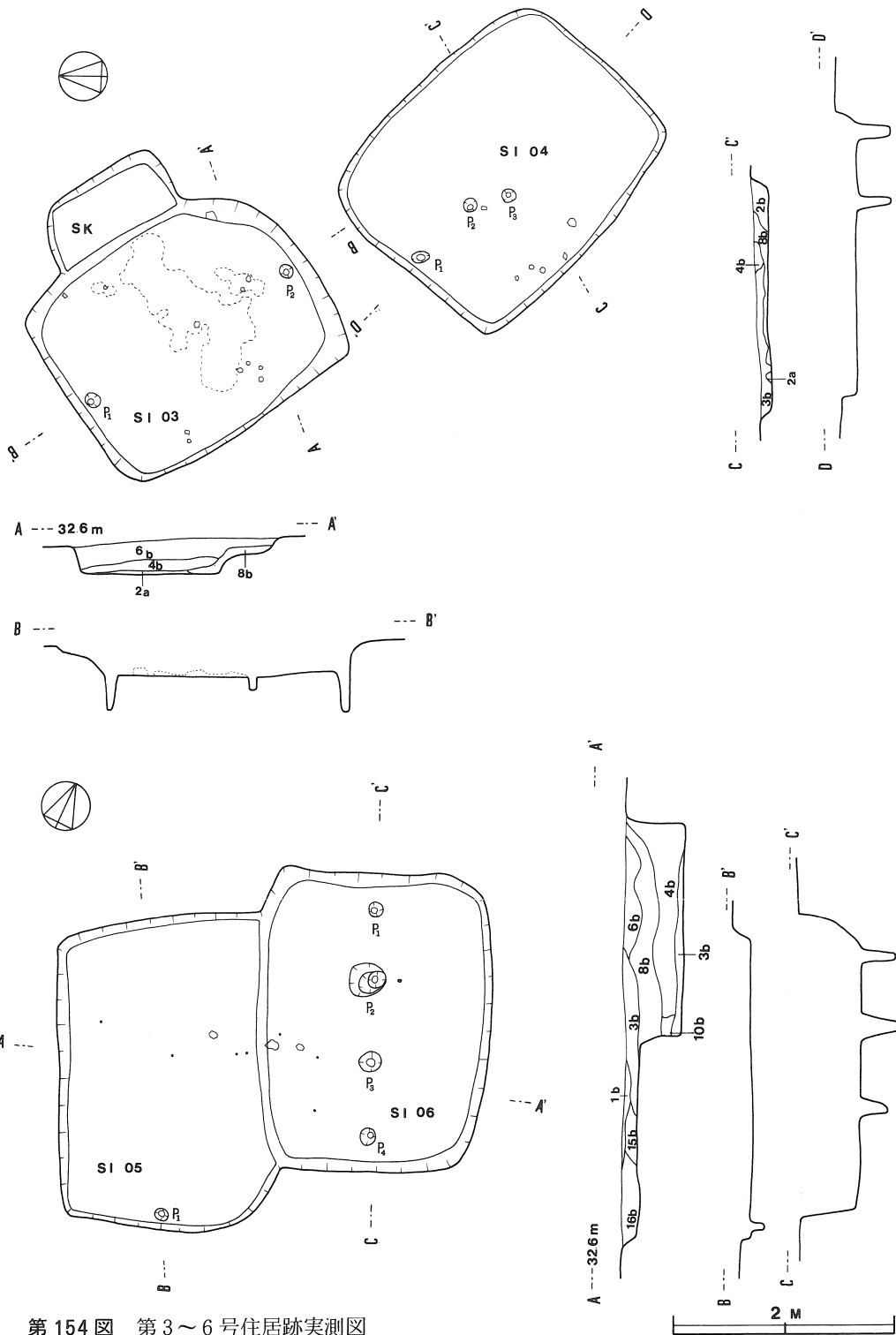
本跡も第3・4・6~8号と類似する竪穴状遺構と考えられる。

**第6号住居跡(第154図)**

本跡はC2g<sub>3</sub>を中心に確認され、第5号住居跡の北東部を切り、第7号住居跡の西0.7mに位置している。規模は長軸2.72m・短軸2.12mほどの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-25°-Wである。壁高は50~58cmほどで垂直ぎみに立ちあがり、床は褐色のロームで、中央部は硬く踏み固められていたが、その他は全体に柔らかく平坦である。また南東コーナー部より炭化材が確認されている。ピットは南北の中心線上に一列に4個配列されており、深さは26~40cmを測る。

覆土は大きく4層に分けられ、ローム粒子やロームブロックを含む暗褐色・黒褐色の土がレンズ状に自然堆積している。出土遺物は覆土より縄文土器片、床面上より土師器の細片を少量出土している。

本跡も第3~5・7・8号と類似する竪穴状遺構と考えられる。



第 154 图 第 3~6 号住居跡实测图

## 第7号住居跡(第155図)

本跡はC2g<sub>3</sub>を中心に確認され、第8号住居跡によって南側が切られ、第6号住居跡の東0.7mに位置している。規模は長軸2.8m・短軸2.48mほどの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-22°-Wである。壁高は28cmほどで、第8号住居跡より18cm浅く、やや外反ぎみに立ちあがり、床は全体に平坦で、他の住居跡と比較するとやや柔らかい床面である。ピットは3個確認され、P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>はいずれも深さを30~40cm測り、支柱穴と考えられる。

覆土は大きく2層に分けられ、全体にローム粒子やロームブロックを含み、上層が極暗褐色、下層が黒褐色の柔らかい土が堆積している。出土遺物なし。

本跡も第3~6・8号と類似した堅穴状遺構と考えられる。

## 第8号住居跡(第155図)

本跡はC2h<sub>4</sub>を中心に確認され、第7号住居跡の南側を切り、第6号住居跡の南東1.4mに位置している。規模は1辺が2.61mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は46cmほどで、垂直ぎみに立ちあがり、床は全体に平坦で、暗褐色を呈し、中央部を中心に硬い床面である。ピットは6個確認され、壁の中央部に配されているP<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>が支柱穴と考えられる。深さは25~32cmを測る。

覆土はレンズ状の自然堆積を示し、全体にローム粒子やロームブロックを含む柔らかい土で、色調は暗褐色や黒褐色の土が堆積している。出土遺物は南側部床面上より砂岩の大きな石を出土している。

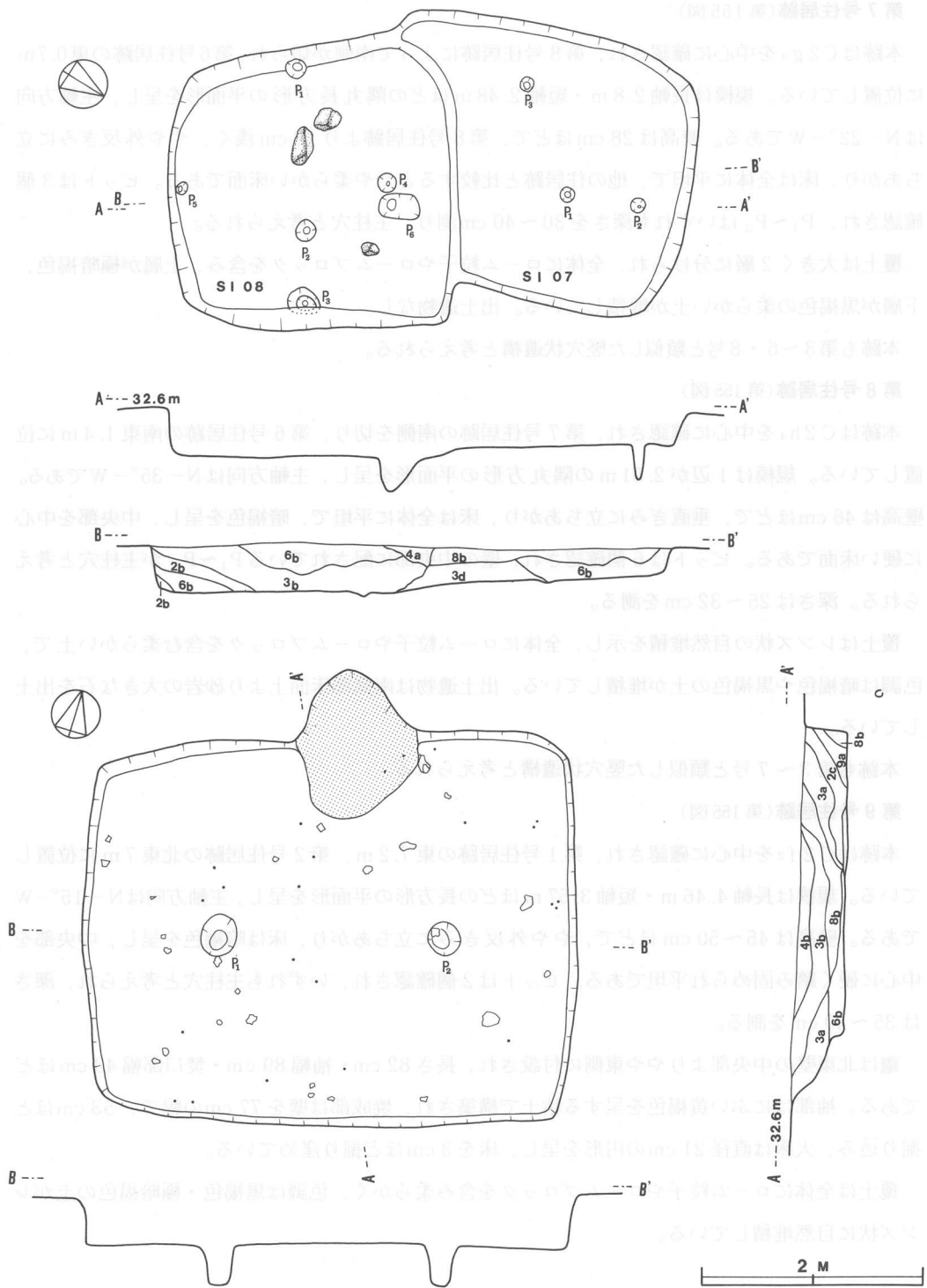
本跡も第3~7号と類似した堅穴状遺構と考えられる。

## 第9号住居跡(第155図)

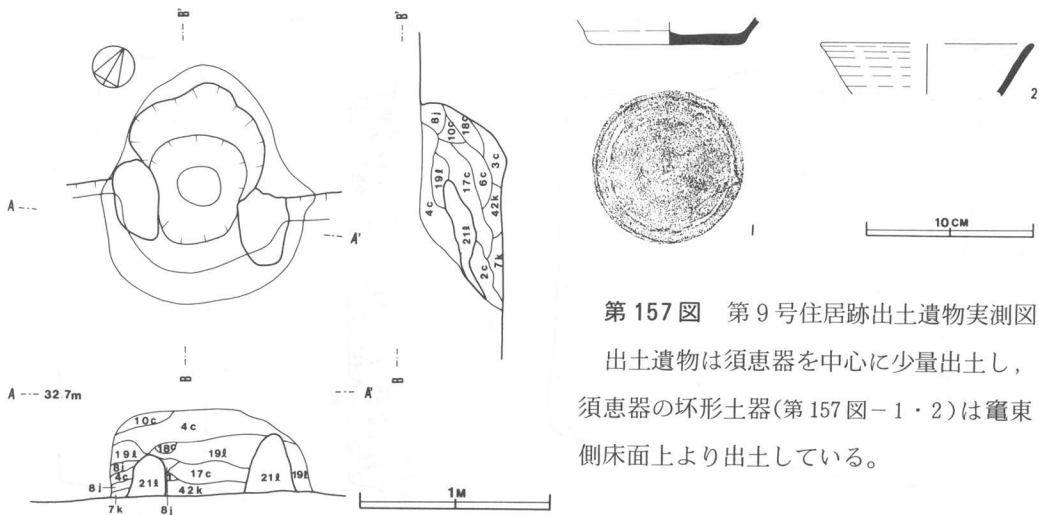
本跡はC2f<sub>2</sub>を中心に確認され、第1号住居跡の東7.2m、第2号住居跡の北東7mに位置している。規模は長軸4.46m・短軸3.57mほどの長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-15°-Wである。壁高は45~50cmほどで、やや外反ぎみに立ちあがり、床は暗褐色を呈し、中央部を中心に硬く踏み固められ平坦である。ピットは2個確認され、いずれも支柱穴と考えられ、深さは35~40cmを測る。

竈は北東壁の中央部よりやや東側に付設され、長さ82cm・袖幅89cm・焚口部幅43cmほどである。袖部はにぶい黄褐色を呈する粘土で構築され、焼成部は壁を77cmの幅で、53cmほど掘り込み、火床は直径21cmの円形を呈し、床を3cmほど掘り窪めている。

覆土は全体にローム粒子やロームブロックを含み柔らかく、色調は黒褐色・極暗褐色の土がレンズ状に自然堆積している。



第 155 図 第 7 ~ 9 号住居跡実測図



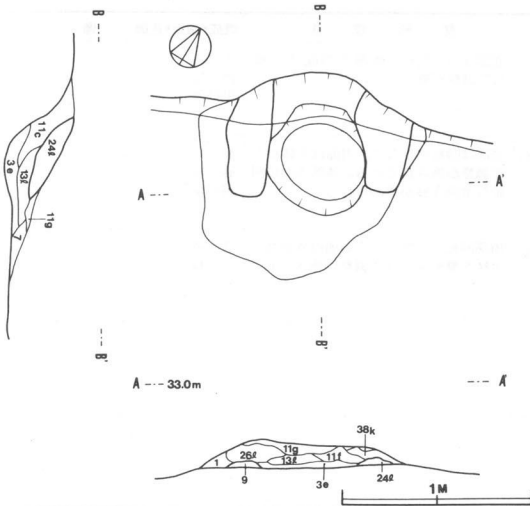
第156図 第9号住居跡竈実測図

遺物解説表(第157図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏須恵器	A B 1.4(現) C 8.7	底部の破片である。底部は平坦で体部は底部より外上方へ立ち上がる。	底部はへら切り砂 回転へら割り、体部は水挽き整形が施されている。	良好 砂粒 灰色	
2	坏須恵器	A 12.7(復) B 13.1(現) C	口縁部の破片である。体部の器厚は0.2~0.3 cmと薄く、直線的に外上方へ開く。	体部内外面共に水挽き整形が施され、外面には水挽き痕が認められる。	良好 砂粒 灰色	

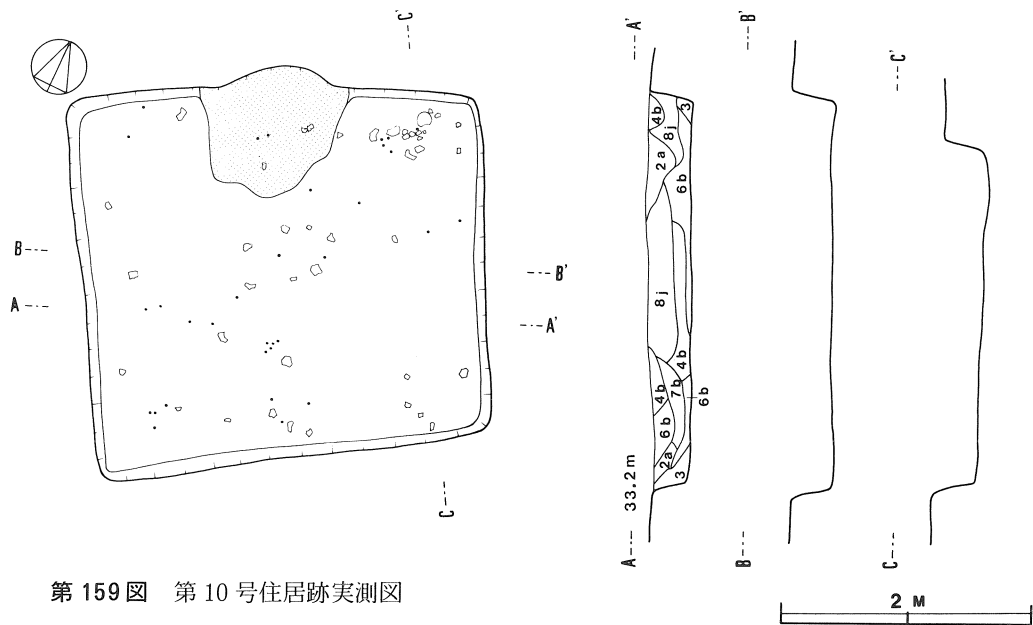
第10号住居跡(第158・159図)

本跡はC2e<sub>9</sub>を中心に確認され、第9号住居跡の東22m、第29号住居跡の南西20mに位置している。規模は長軸3.22m・短軸3.13mで、西側がやや広がるが、おおむね方形の平面形を呈し、主軸方向はN-30°-Wである。壁高は32~35cmほどで、やや外反して立ちあがり、床は全体に平坦で硬く、約10cmほどの貼床である。ピットは確認することができなかった。



第158図 第10号住居跡竈実測図

竈は北東壁中央部に付設され、長さ75cm・袖幅87cm・焚口部幅52cmで、袖部は褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を97cmの幅で、21cmほど掘り込み、火床は長径45cmの楕円形を呈し、床は3cm



第 159 図 第 10 号住居跡実測図

ほど掘り窪めている。

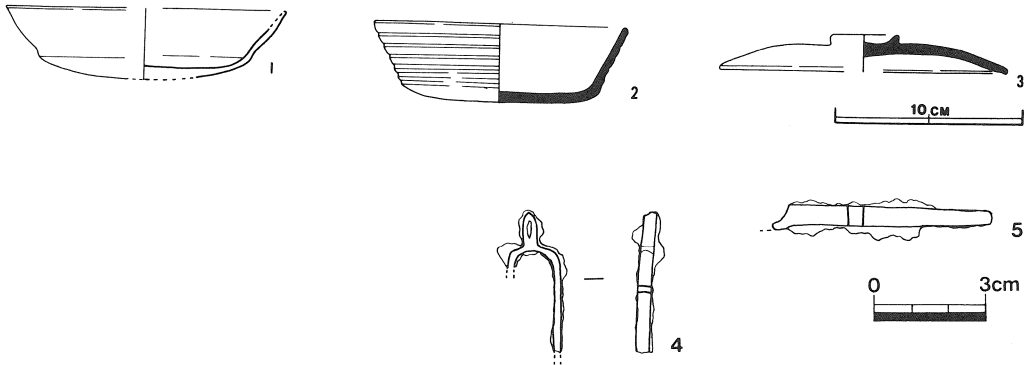
覆土は上層がトレンチャーによる攪乱を受けているが、全体にローム粒子やロームブロック・焼土粒子を含み、柔らかい覆土である。

出土遺物は土師器・須恵器を中心に少量出土する。竈東側床面上より土師器の坏形土器(第160図-1)、須恵器の坏形土器(第160図-2)、蓋形土器(第160図-3)、また竈西側壁下より鞘の足金具(第160図-4)、刀子(第160図-5)などの鉄製品が出土している。

遺物解説表(第160図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏土師器	A 14.7(復) B 3.7 C	底部は丸底状を呈し、体部は底部との境で凹んだ後、やや内彎ぎみに外上方へ開く。	底部はヘラ削り、体部内外面共に横などで調整が施されている。	不良 砂粒 黒褐色	
2	坏須恵器	A 13.3 B 4.3 C 8.5	底部はやや丸みを帯び、体部は直線的に外上方へ開く。	底部は回転ヘラなどで、内面は全体に調整が施されている。体部外面に明瞭な水挽き痕が認められる。	良好 砂粒 暗青灰色	
3	蓋須恵器	A B 1.9 C 15.3	頂部は水平に開いた後、口縁部はゆるやかに外下方へ開く。頂部には血状のつまみが貼り付けられている。	頂部回転ヘラ削り。その他内外面共に水挽き整形後、などで調整が施されている。	普通 砂粒 灰白色	
4	足金具					
5	刀子		茎部である。			

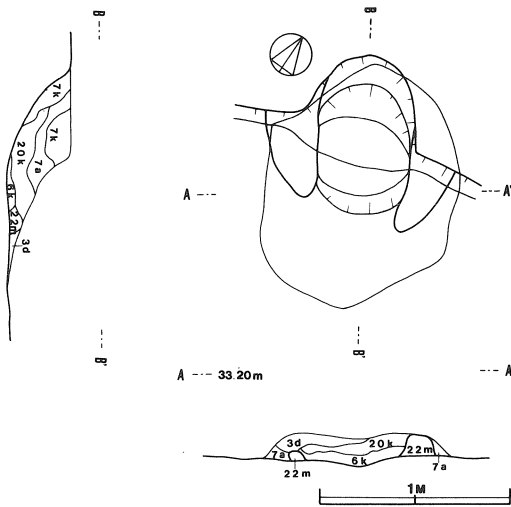




第160図 第10号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡(第161・163図)

本跡はB2e7を中心に確認され、第12号住居跡の西0.9m、第13号住居跡の東1.8mに位置している。規模は長軸3.06m・短軸2.4mの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-19°-Wである。壁高は25~30cmほどで、外傾して立ちあがり、床は暗褐色を呈し、中央部を中心に硬く踏み固められ、やや起伏がみられるがおおむね平坦である。ピットは確認することはできなかった。



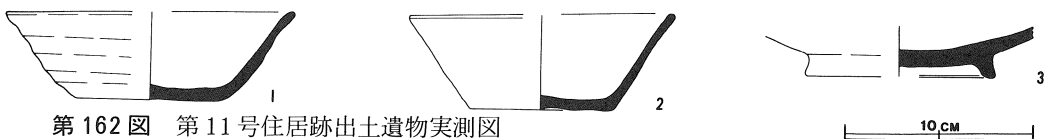
第161図 第11号住居跡竈実測図

竈は北東壁の中央部に付設され、長さ85cm・袖幅73cm・焚口部幅46cmで、袖部は暗褐色の山砂で構築されている。焼成部は壁を65cmの幅で、40cmほど掘り込み、火床は長径50cmの楕円形を呈し、床を5cmほど掘り窪めている。出土遺物なし。

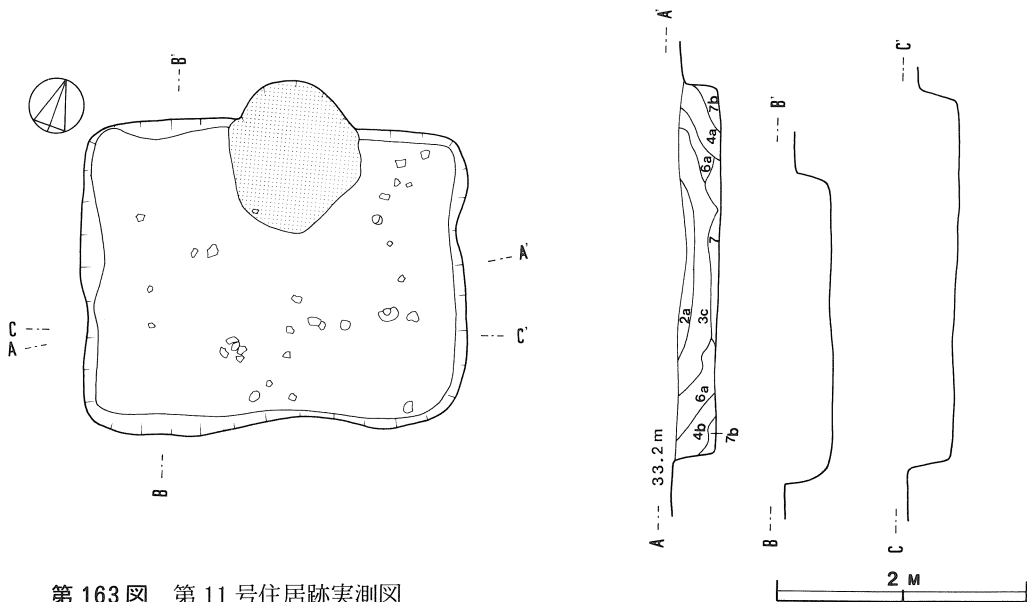
覆土は大きく3層に分けられ、ローム粒子やロームブロック・焼土粒子を含む黒色・黒褐色・暗褐色の色調を示し、レンズ状の自然堆積の状態を示している。

出土遺物は覆土中より土師器、床面直上より須恵器を少量出土する。中央部より須

恵器の坏形土器(第162図-1・2)、南東部より須恵器の高台付坏形土器(第162図-3)が出土している。



第162図 第11号住居跡出土遺物実測図



第 163 図 第 11 号住居跡実測図

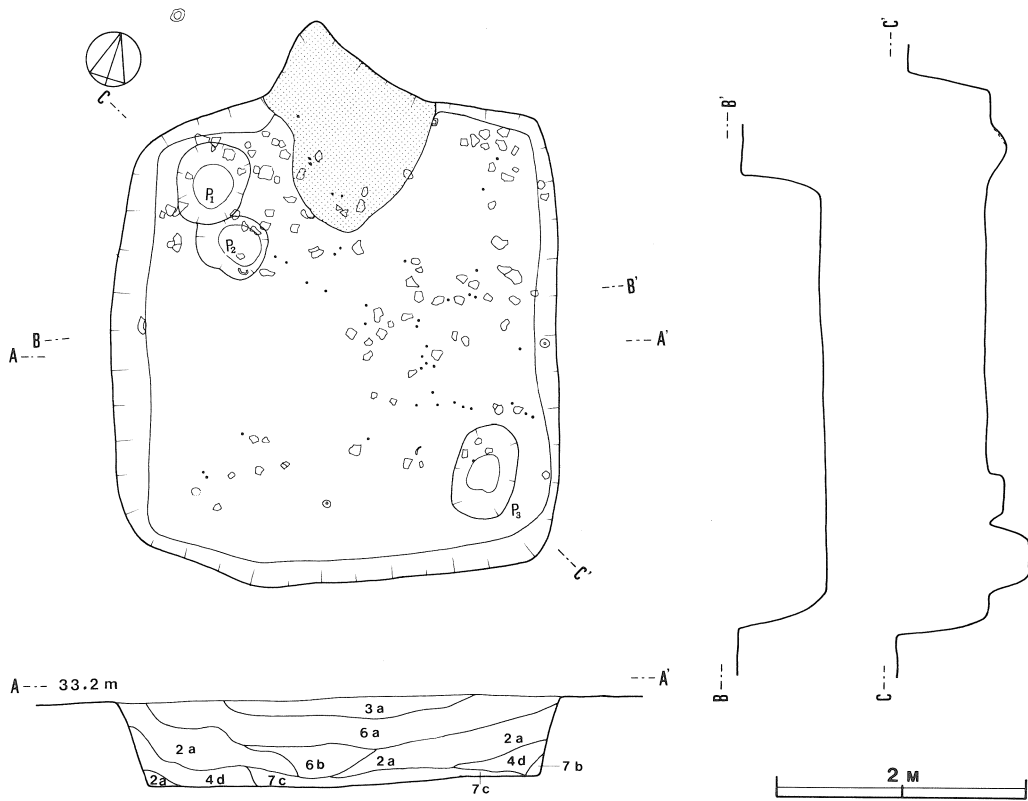
遺物解説表(第 162 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 須恵器	A 15.1 B 4.8 C 7.7	底部平坦，体部は直線的に外上方へ立ち上がり，口縁部でやや外反して開く。	底部回転ヘラ切り，その他内外面共になで調整が施されている。また水挽き痕が明瞭に認められる。	不良 砂粒・長石 灰白色	
2	坏 須恵器	A 7.7 B 4.9 C 7.5	底部はやや上げ底ぎみで，体部は器厚を同じくして，やや外反して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り，体部内外面共に水挽き整形後，なで調整が施されている。	不良 石粒・石英 灰白色	
3	高台付盤 須恵器	A B 2.6(現) C 10.0	底部はやや丸みをもち，体部は底部より連続的にやや水平ぎみに外上方へ立ち上がる。また底部には高台が貼り付けられている。	器内外面共になで調整が施されている。	良好 砂粒・長石粒 青灰色	

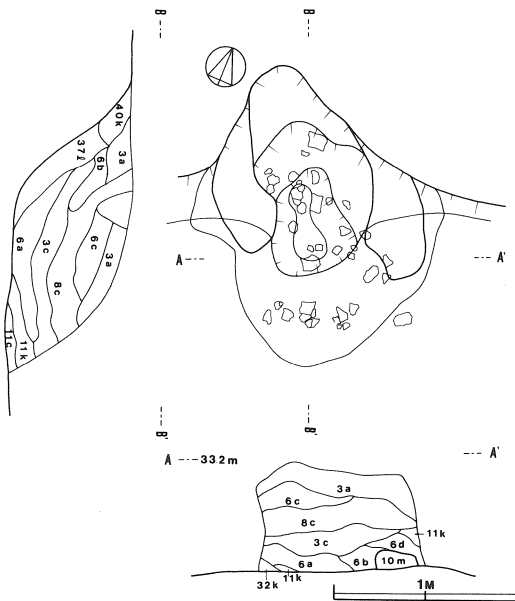
### 第 12 号住居跡(第 164・165 図)

本跡は B2e7 を中心に確認され，第 11 号住居跡の東 0.9 m，第 18 号住居跡の南西 4.6 m に位置している。規模は長軸 3.76 m・短軸 3.56 m の隅丸方形の平面形を呈し，主軸方向は N-19°-W である。壁高は 70~73 cm を測り，本遺跡の同時代の住居跡の中では深い方であり，壁面は外傾して立ちあがる。床は平坦で，中央部は硬く踏み固みられているが，各コーナー部は柔らかい床面である。また，本跡の床は約 20 cm ほどの貼床である。ピットは 3 個確認されたが，本跡に関係のないピットと思われる。

竈は北東壁中央部に付設され，長さ 114 cm・袖幅 112 cm・焚口部幅 50 cm で，袖部は褐色を呈する山砂で構築されている。焼成部は壁を 95 cm の幅で，52 cm ほど掘り込み，火床は長径



第 164 図 第 12 号住居跡実測図

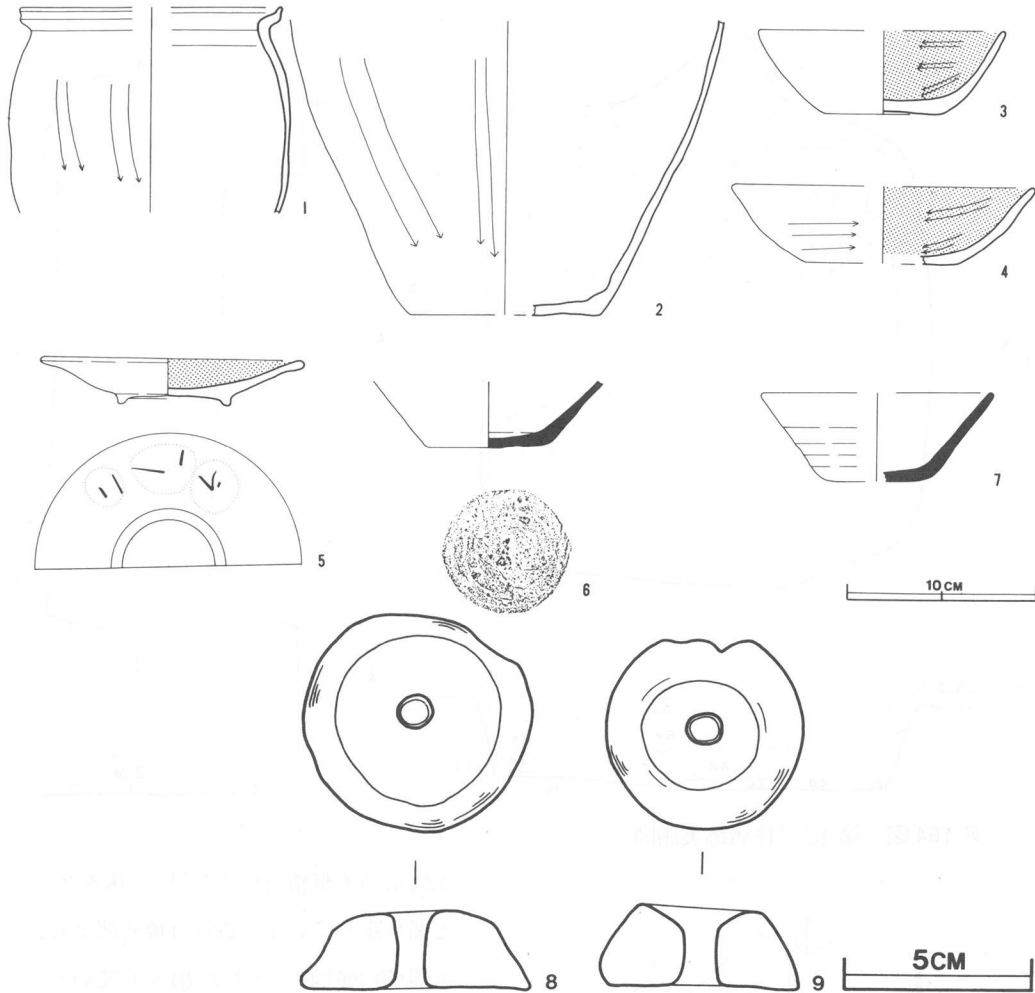


第 165 図 第 12 号住居跡竈実測図

42 cmの不整楕円形状を呈し、床を2cmほど掘り窪めている。遺物は焼成部より甕形土器(第166図-1・2)が出土している。

覆土は大きく4層に分けられ、全体にローム粒子やロームブロック・焼土粒子などを含む黒褐色・暗褐色の色調で、レンズ状の自然堆積の状態を示している。

出土遺物は土師器・須恵器の破片を中心に多く出土し、特に竈西側床面上より環形土器(第166図-3)、東側床面上より高台付盤形土器(第166図-5)、須恵器の環形土器(第166図-6・7)、南東壁下より石製品の紡錘車(第166図-8)、南西部覆土中より紡錘車(第166図-9)が出土している。



第 166 図 第 12 号住居跡出土遺物実測図

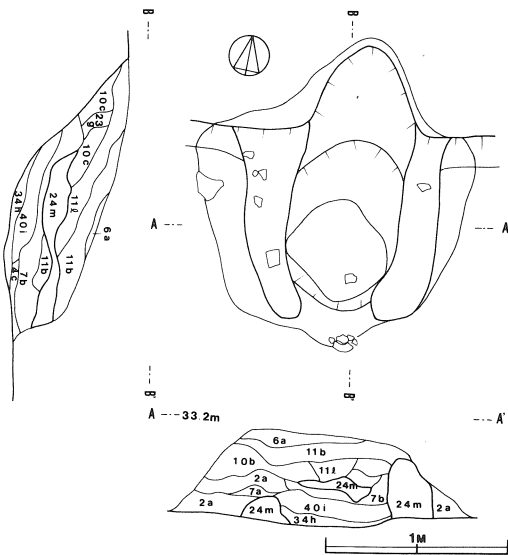
遺物解説表(第 166 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 13.8 B 10.8 (現) C	口縁部は大きく頸部より屈折して開き、口辺部で立ち上がる。胴部は器厚を薄くしながら外下方へ開く。	口縁部内外面共に横なで調整、胴部外面へ縦位のヘラ削り整形が施されている。	普通 砂粒・長石粒にぶい赤褐色	
2	甕 土師器	A B 15.5 C 10.0 (復)	底部はやや凸凹で、胴部は器厚を薄くしながら、直線的に外上方へ開く。	外面は縦位のヘラ削り、内面横なで整形が施されている。	不良 砂粒・長石粒にぶい橙色	
3	坏 土師器	A 12.8 (復) B 4.4 C 6.3	底部は平坦で、体部は内彎きみに外上方へ開く。	底部回転へ削り、体部外面で調整、内面へラ磨き整形が施されている。	良好 砂粒にぶい橙色(外) 黒色(内)	
4	坏 土師器	A 15.7 (復) B 4.1 C 7.8 (復)	底部は平坦で、体部は内彎きみに外上方へ開いた後、口縁部でやや直線的に立ち上がる。	底部から体部下半部にかけて横位のヘラ削り、内面へラ磨きが施されている。	良好 砂粒 橙色	

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	高台付盤 (墨書土器) 土師器	A 13.3 B 2.5 C 6.0	底部は上げ底であり、体部は底部より内彎きみに大きく外上方へ開いた後、口縁部で水平になる。底部には0.3cmの高台が貼り付けられている。	内外面共になで調整が施されている。	普通砂粒にぶい橙色(外)黒色(内)	解読不明の文字有り。
6	坏 須恵器	A B 3.5(現) C 6.7	底部は全体に凸凹であり、体部は直線的に外上方へ開く。	底部回転ヘラ削り、その他内外面共になで調整が施されている。	普通砂粒灰白	底部に(フ)印のヘラ記号有り。
7	坏 須恵器	A 12.4(復) B 4.7 C 5.6(復)	底部は平坦で、体部は器厚をやや薄くし、直線的に外上方へ開く。	内外面共になで調整が施され、外面には水挽き痕が認められる。	良好砂粒・長石粒灰色	
8	紡錘車	厚さ2.0 直径5.9	須恵質の紡錘車である。表面には黒色の色が塗られている。			
9	紡錘車	厚さ2.1 直径5.2	須恵質の紡錘車である。			

第20号住居跡(第167・168図)

本跡はB3j0を中心に確認され、第96号土壌の東側を切り、第25号住居跡の西0.2mに位置している。規模は長軸5.28m・短軸4.84mの方形の平面形を呈し、主軸方向はN-9°-Wである。壁高は52~65cmほどで、やや外傾して立ちあがり、壁下には幅10cm・深さ8cmの壁溝が周回している。床は暗褐色を呈し、全体に平坦で硬く踏み固められ、約20cmほどの貼床である。ピットは9個確認され、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が支柱穴と考えられる。深さは40~70cmを測る。



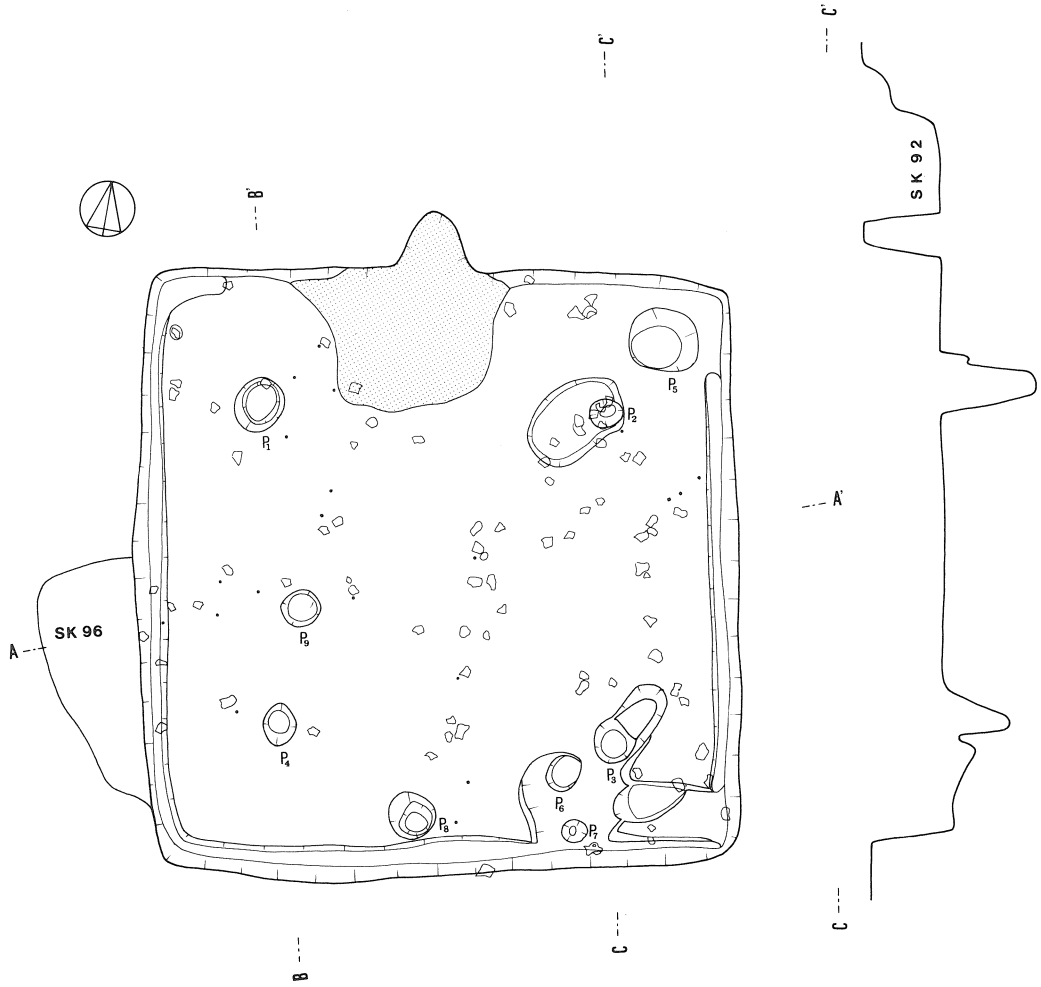
第167図 第20号住居跡竈実測図

竈は北側中央部に付設され、長さ150cm・袖幅95cm・焚口部幅38cmで、袖部はにぶい褐色を呈する山砂で構築されている。焼成部は壁を62cmの幅で、44cmほど掘り込み、火床は長径55cmの不整楕円形を呈し、床を7cmほど掘り窪めている。

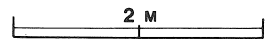
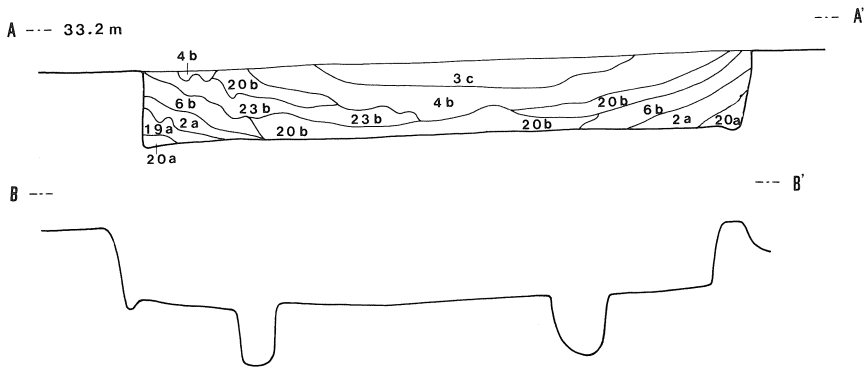
覆土は全体に柔らかく、ローム粒子やロームブロック・焼土粒子などを含む黒褐色・褐色・暗褐色の土がレンズ状に自然堆積している。

出土遺物は土師器・須恵器片をやや多く出土し、P<sub>2</sub>覆土中より須恵器の壺形土器(第169図-2)、甕形土器(第169図-3)、北

西コーナー部床面上より須恵器の坏形土器(第169図-5)が出土している。



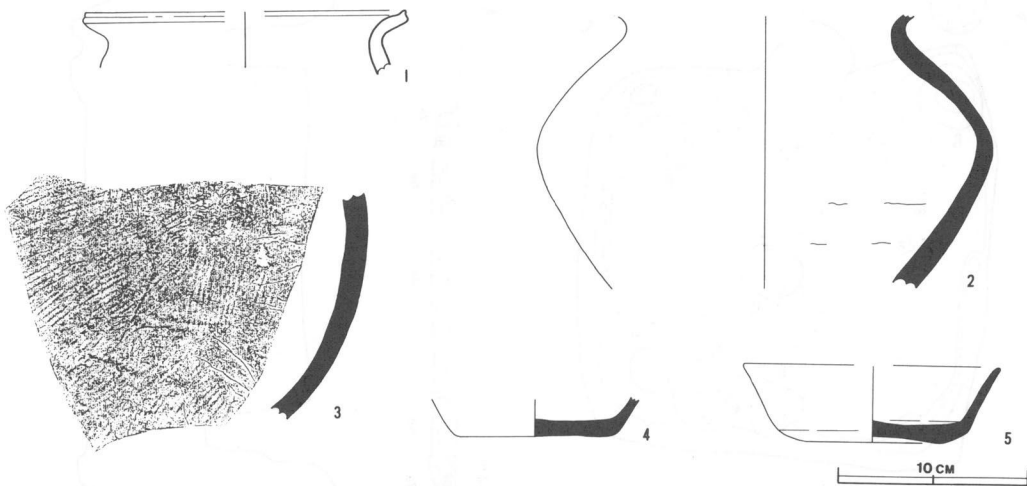
A --- 33.2 m



第 168 图 第 20 号住居跡実測图

遺物解説表(第169図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 16.7(復) B 2.9(現) C	口縁部の破片である。口縁部は「く」の字状に開き口辺部で立ち上がる。	内外面共になで整形がなされている。	不良 砂粒 灰褐色	
2	壺 須恵器	A B 14.3(現) C	胴部は頸部より大きく張り出し、器厚をやや薄くして、最大径に至る。	内外面共に水挽き整形が行われ、胴部上半から頸部にかけて、なで調整が施されている。	良好 砂粒 灰褐色	
3	甕 須恵器	A B 11.1(現) C	胴部の破片である。	胴部外面にはタタキ目痕がみられ、内面はなで整形が施されている。	良好 砂粒 灰褐色	
4	坏 須恵器	A B 2.0(現) C 8.6(復)	底部の破片である。	底部は回転ヘラ削り、体部下位は水挽き整形が施されている。	良好 砂粒 灰褐色	
5	坏 須恵器	A 13.5(復) B 4.05 C 7.4	底部は上げ底であり、体部は直線的に外上方へ立ち上がった後、口縁部でやや外反して開く。	底部は回転ヘラ削り、その他内外面共になで調整が施されている。	良好 砂粒・長石 灰白色	



第169図 第20号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡(第170図)

本跡は第18号住居跡の北西部を切って構築されたもので、第18号住居跡の精査の際、窯底部が検出されただけで、その規模等については不明である。土層より想定し、長軸3.3m・短軸3.25mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-7°-Eである。床は第18号住居跡の上層に存在したと考えられる。

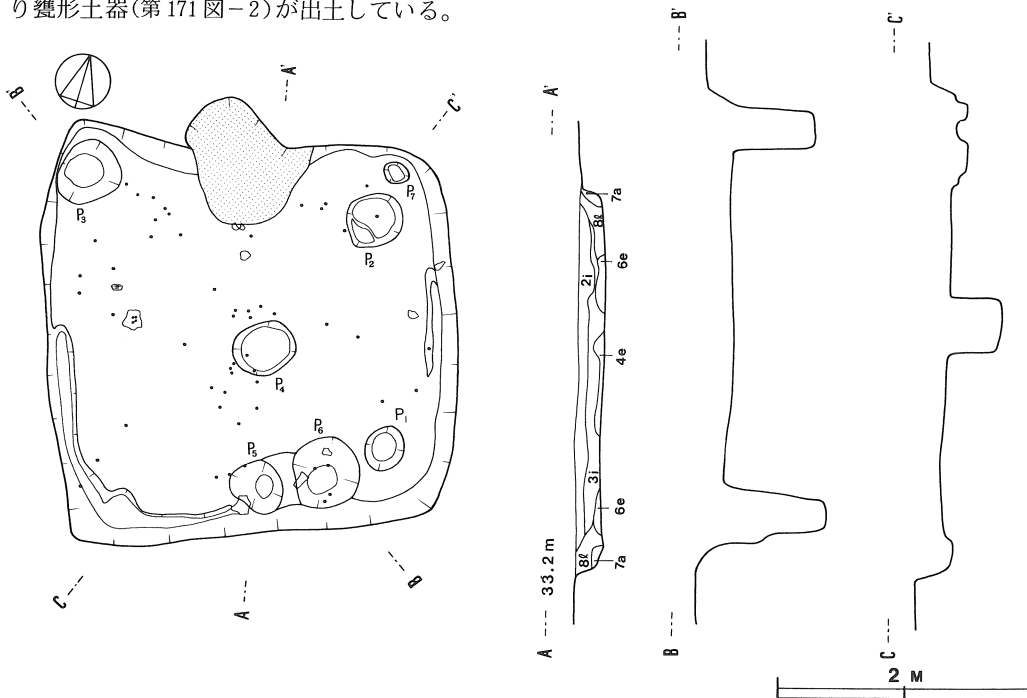
第 26 号住居跡(第 170 図)

本跡は B3a2 を中心に確認され、第 38 号住居跡の北東 6 m に位置している。規模は長軸 3.27 m・短軸 3.2 m ほどで、北西コーナー部に張り出しがみられるが、おおむね隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向は N-19°-W である。壁高は 25 cm ほどで、やや外反して立ちあがり、床は中央部を中心に非常に硬く、平坦な床面である。ピットは 6 個確認したが、P<sub>2</sub>~P<sub>7</sub> はいずれも覆土が褐色で硬く、また P<sub>4</sub>~P<sub>6</sub> 内からは縄文土器の破片が出土しているため、本跡には関係のないピットと考えられる。P<sub>1</sub> が本跡の主柱穴ではないかと思われる。

竈は北東壁の中央部に付設され、保存状態が非常に悪く、袖部などは確認できなかった。焼成部は壁を 50 cm の幅で、15 cm ほど掘り込んで構築されている。

覆土は全体にローム粒子や砂粒・焼土粒子を含む黒色・黒褐色の柔らかい土が、自然流入の状態で堆積している。

出土物は土師器・須恵器を少量出土し、中央部床面上より坏形土器(第 171 図-2)、竈前部より甕形土器(第 171 図-2)が出土している。



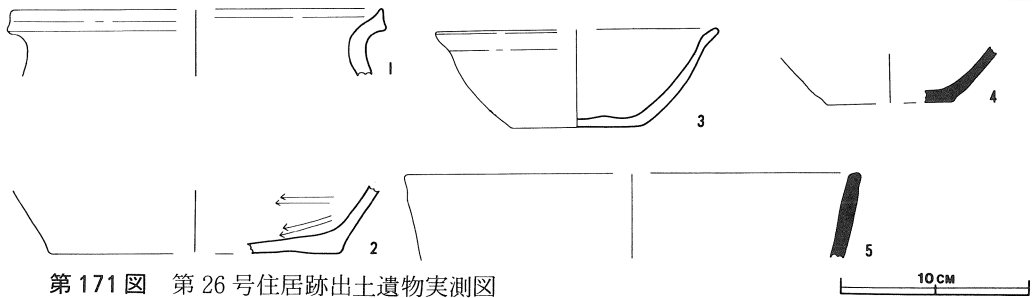
第 170 図 第 26 号住居跡実測図

遺物解説表(第 171 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 土師器	A 19.4 (復) B 3.5 (現) C	口縁部の破片である。口縁部は「く」の字状に大きく外反し、口辺部で立ち上がる。	口縁部内外面共になで調整が施されている。	普通 砂粒 明赤褐色	



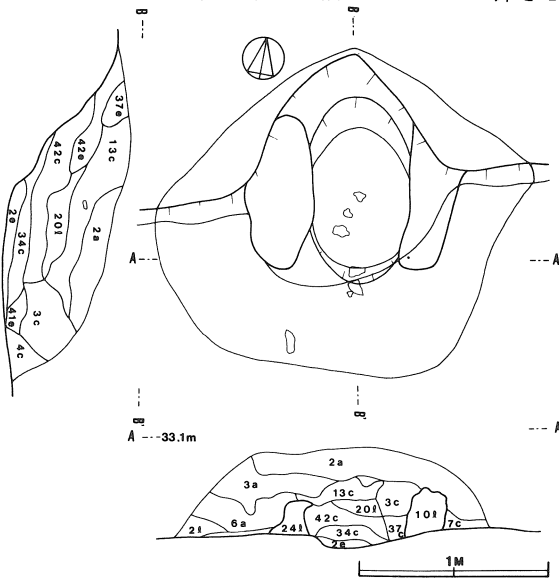
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
2	甕 土師器	A B 3.4(現) C 15.0(復)	底部の破片である。底部は全体に平坦であり、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	外面は全体になで、内面はヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒 浅黄褐色	
3	坏 土師質須恵器	A 15.0(復) B 5.1 C 7.0(復)	底部は平坦、体部はやや内彎して外上方へ立ち上がった後、口縁部は器厚を厚くして大きく外反する。	底部回転ヘラ削り、その他内外面共になで調整が施されている。また外面に水挽き痕が認められる。	普通 砂粒 黒褐色	
4	坏 須恵器	A B 2.6(現) C 6.6(復)	底部の破片である。底部は平坦であり体部はやや内彎きみに外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ削り、その他内外面共になで調整が施されている。	不良 砂粘 灰黄色	
5	甗 須恵器	A 24.0(復) B 4.5(現) C	口縁部の破片である。口縁部は直線的にやや外上方へ立ち上がり、口唇部は平坦である。	器内外面共に横になで調整が施されている。	良好 砂粒・長石・石英 暗灰色	



第 171 図 第 26 号住居跡出土遺物実測図

第 27 号住居跡(第 172・173 図)

本跡は B3f<sub>4</sub> を中心に確認され、第 22 号住居跡の西 5 m に位置している。規模は一辺が 5.5 m の隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向は N-14°-W である。壁高は 48~52 cm ほどで、やや外傾して立ちあがり、壁下には幅 20~25 cm・深さ 10 cm ほどの壁溝がほぼ全周している。床は全体に小さな起伏がみられるが、おおむね平坦で硬い。ピットは 4 個検出され、いずれも支柱穴と考えられ、深さは 33~59 cm を測る。



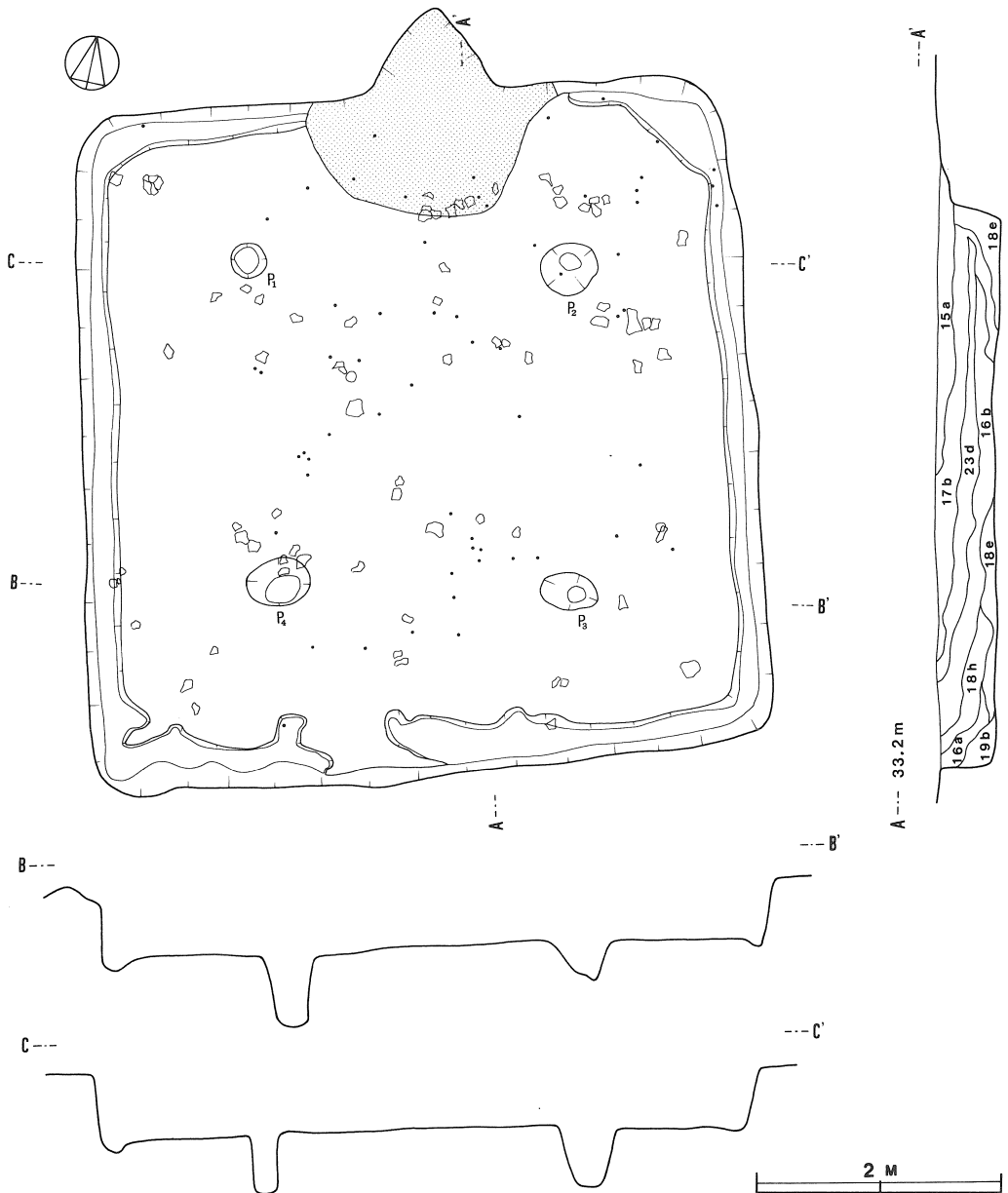
第 172 図 第 27 号住居跡竈実測図

竈は北壁中央部に付設され、長さ 120 cm・袖幅 102 cm・焚口幅 51 cm ほどで、袖部は褐色の粘土によって構築されている。また焼成部は壁を 105 cm の幅で、63 cm ほど掘り込み、火床は長径 73 cm の楕円形を呈し、床を 8 cm ほど掘り窪めている。遺物は焼成部より甕形土器の胴部片を少量出土している。

覆土は上層に黒色土、中層にはロームブ

ロックを多量に含む褐色，下層にはローム粒子を含む暗褐色の土が堆積し，レンズ状の自然堆積の状態を示している。

出土遺物は土師器・須恵器がやや多く，その他石製品・鉄製品などが出土し，P<sub>2</sub>南東部床面上より蓋形土器(第174図-8)，南西部覆土中より紡錘車(第174図-11)，鉄製品の鏃矢(第174図-9)，床面上より刀子の茎部(第174図-10)が出土している。



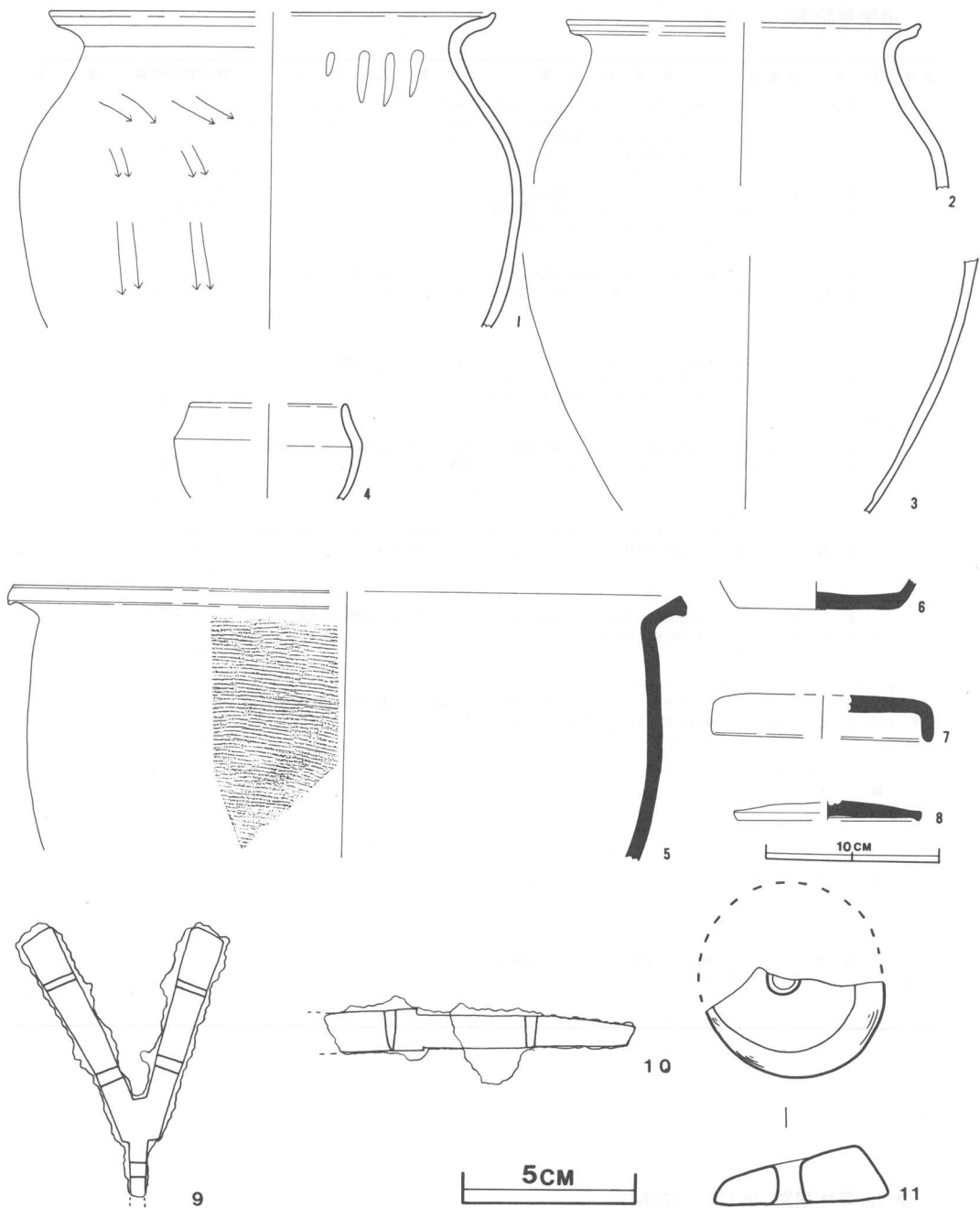
第173図 第27号住居跡実測図

遺物解説表(第174図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 25.4(復) B 18.1(現) C	口縁部は頸部より大きく外反して開き、口辺部でやや立ち上がる。胴部は頸部より大きく張り出して胴部最大径に至る。胴部最大径は上位に有す。	口縁部は内外面共になで整形、外面に斜縦位のヘラ削り、内面頸部に指頭痕がみられる。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色	
2	甕 土師器	A 20.2(復) B 9.4(現) C	口縁部の破片である。口縁部は頸部より大きく外反して開く。胴部は頸部よりゆるやかに外上方へ開いて最大径に至る。	内外面共になで調整が施されている。	普通 砂粒・長石 にぶい赤褐色	
3	甕 土師器	A B 14.7(現) C	胴部の破片である。胴部は器厚をやや厚くしながら内彎ぎみに外上方へ開く。	器外面はヘラ磨き整形、内面なで整形が施されている。	不良 砂粒・石英・長石 明赤褐色	
4	埴 土師器	A 9.0(復) B 5.5(現) C	体部は底部より器厚をやや厚くしながら内彎ぎみに外上方へ立ちあがった後、口縁部は内傾しながらやや外反して開く。	器内外面共になで調整が施されている。	普通 砂粒・石英 にぶい黄褐色	
5	甕 須恵器	A 38.9(復) B 15.2(現) C	口縁部の破片である。口縁部は頸部より「く」の字状に大きく外反して開く。	器外面全体に横位の叩き目、内面なで調整が施されている。	良好 砂粒・石英 黄灰色	
6	坏 須恵器	A B 1.6(現) C 9.0	底部の破片である。底部は平坦で、体部は底部より外上方へ立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り、その他内外面共になで調整が施されている。	良好 砂粒 灰色	
7	蓋 須恵器	A B 2.5 C 12.4(復)	天井部は平坦であり、口縁部は天井部より垂直に屈折する。	内外面共になで調整が施されている。	良好 砂粒 黄灰色	
8	蓋 須恵器	A B 11.0 C 10.4	つまみを欠く。天井部は頂部よりやや傾斜して開く。0.2 cmほどのかえりを有する。	内外面共に回転横なで調整が施されている。	良好 砂粒 白灰色	
9	鏃 矢					
10	刀 子					
11	紡 錘 車	厚さ 1.5 直径 5.5(復)	粘板岩を材料にして作られた紡錘車である。			

第28号住居跡(第175・176図)

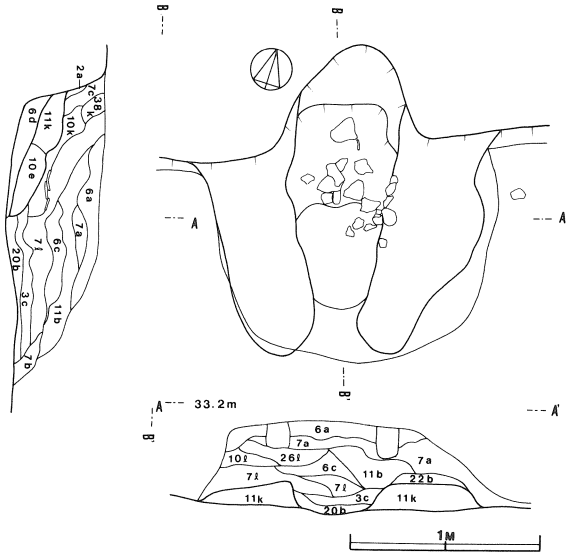
本跡はB3j<sub>6</sub>を中心に確認され、第32号住居跡によって南東部が切られ、第31号住居跡の南2mに位置している。規模は長軸4.1m・短軸3.9mの方形の平面形を呈し、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は32~42cmほどで、垂直に立ちあがり、床は起伏のみられる所もあるが、おおむね平坦で非常に硬く、約15cmほど貼っている床面である。ピットは各コーナー部より4個検



第174図 第27号住居跡出土遺物実測図

出され、いずれも支柱穴と考えられ、深さは72～83cmを測る。

竈は北壁中央部に付設され、長さ165cm・袖幅115cm・焚口部幅23cmで、袖部は凝灰岩を基礎にその上に粘土を積み重ねている。焼成部は壁を85cmの幅で、52cmほど掘り込み、火床

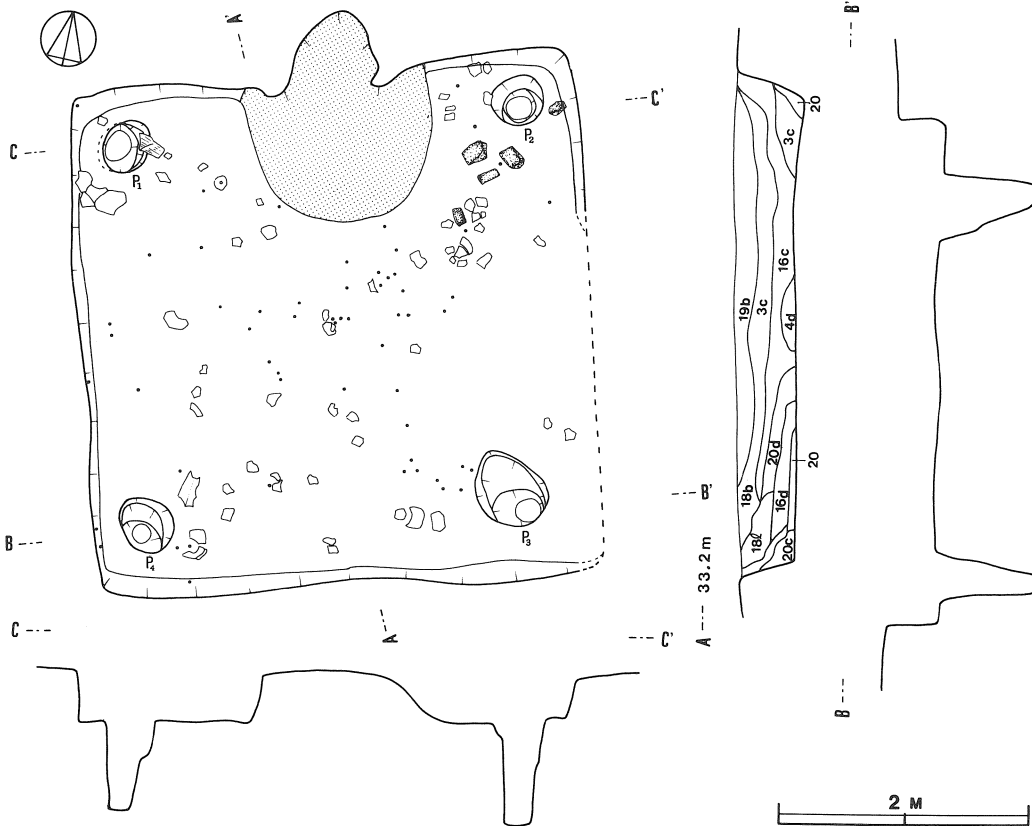


第 175 図 第 28 号住居跡竈実測図

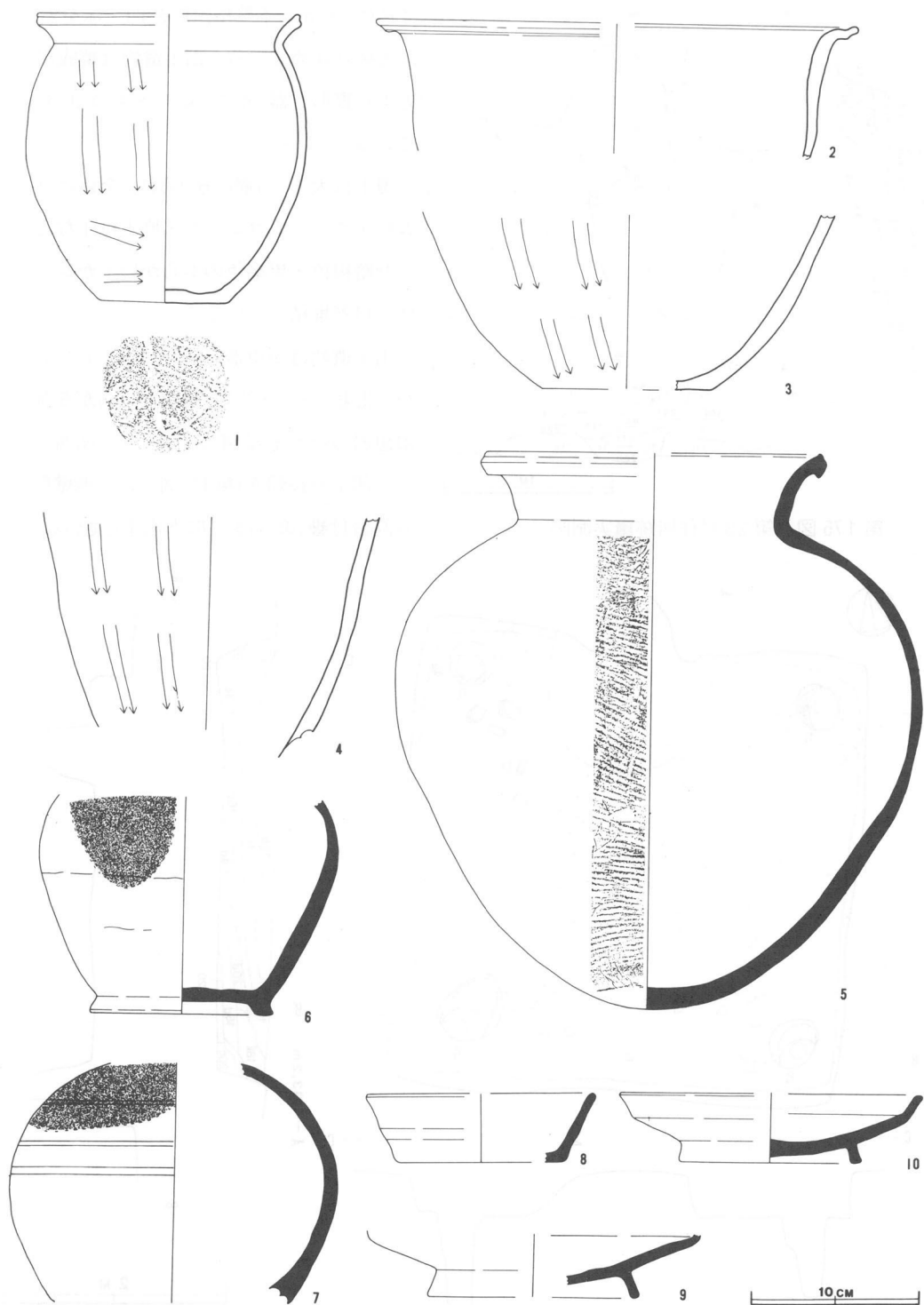
は長径 55 cm の不整楕円形を呈し、床を 2 cm ほど掘り窪めている。出土遺物は焼成部後方より甕形土器(第 177 図-2~4)が出土している。

覆土は大きく 3 層に分けられ、全体にローム粒子やロームブロック・焼土粒子などを含む暗褐色・黒褐色の柔らかい土がレンズ状に自然堆積している。

出土遺物は須恵器を中心に出土しているが、北東コーナー部より凝灰岩の石が 5 個、須恵器の壺形土器(第 177 図-5)、南西コーナー部より長頸壺(第 177 図-7)、西壁側より高台付甕(第 177 図-6)が出土している。



第 176 図 第 28 号住居跡実測図



第 177 图 第 28 号住居跡出土遺物実測図

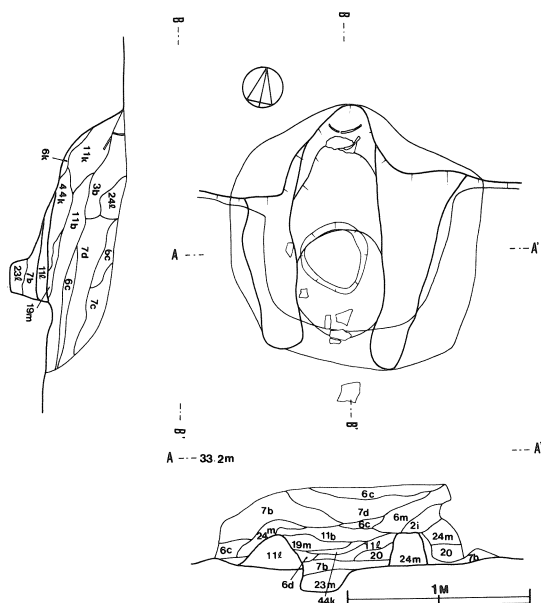
遺物解説表(第177図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 15.5 B 17.1 C 7.6	口縁部は頸部より「く」の字状にやや外反して開き、口唇部に凹みを有する。胴部最大径は中位よりやや上に有する。	器外面胴部は縦・横位のへら削り、口縁部内外面共になで整形がなされている。	普通砂粒・長石にぶい褐色	底部に木炭痕有り。
2	甕 土師器	A 28.4(復) B 7.7(現) C	口縁部は頸部より大きく外反して開き、口辺部に稜を有する。胴部は頸部よりやや外下方へ開く。	器内外面共になで整形が施されている。	不良長石・石英にぶい橙色	
3	甕 土師器	A B 10.4(現) C 10.0(復)	底部の破片である。底部は平坦で、体部は内彎きみに外上方へ開く。	器外面はへら磨き、内面なで整形が施されている。	普通砂粒・長石・石英灰褐色	
4	甕 土師器	A B 12.8(現) C	胴部の破片である。胴部は底部よりやや内彎きみに外上方へ立ち上がる。	器外面は縦位のへら磨き、内面なで整形が施されている。	不良砂粒・長石・石英にぶい褐色	
5	壺 須恵器	A 19.6(復) B 32.8 C	口縁部は頸部より「く」の字状に開き、胴部は頸部より大きく開きながら最大径に至る。底部は丸底である。	器外面に横・斜位の叩き整形が施されている。	良好砂粒灰色	
6	高台付甕 須恵器	A B 12.8(現) C 10.6	底部は平坦であり、0.8 cm程の高台が貼り付けられている。胴部最大径はやや上位に有し、胴部は底部より器厚をやや薄くしながら最大径に至る。	器内外面共になで調整が施されている。	良好砂粒灰色	
7	長頸壺 須恵器	A B 14.1(現) C	胴部の破片である。胴部は球状を呈し、頸部より器厚を徐々に厚くして底部に至る。	器内外面共になで調整が施されている。	良好砂粒灰白色	肩部に自然釉。
8	坏 須恵器	A 13.5(復) B 4.1 C 10.0(復)	底部は平坦である。また体部は直線的に外上方に開いた後、口縁部でやや外反する。	底部回転へら削り、その他全体になで調整が施されている。やや弱い水挽き痕が認められる。	普通砂粒褐色	
9	高台付盤 須恵器	A B 3.9(現) C 12.5(復)	底部は丸味を帯び、体部は底部より連続的に大きく開き、口縁部は垂直に立ち上がる。	底部は回転へら削り、その他なで調整が施されている。	良好砂粒・長石褐色	
10	高台付盤 須恵器	A 18.0(復) B 4.1 C 10.8	底部は丸味を帯び、体部は底部より連続的に内彎きみに大きく開き、口縁部でやや外反して立ち上がる。	底部は回転へら削り、その他内外面共になで調整が施されている。	普通砂粒・長石黄灰色	

第29号住居跡(第178・179図)

本跡はC3a3を中心に確認され、第30号住居跡の南西0.2m、第31号住居跡の西4mに位置している。規模は長軸4.75m・短軸4.65mほどの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-9°-Wである。壁高は40~45cmほどで、垂直ぎみに立ちあがり、床は約20cmほど貼り、その上を踏み固めて硬く、平坦である。ピットは4個検出され、深さは64~80cmを測り、いずれも支柱穴と考えられる。

竈は北壁中央部に付設され、長さ140cm・袖幅80cm・焚口部幅38cmほどで、袖部はにぶい褐色を呈する山砂で構築されている。焼成部は壁を70cmの幅で、21cmほど掘り込み、火床は



長径 59 cmの楕円形を呈し、火床下より深さ 12 cmのピットが検出される。また煙道部には甕形土器の胴部片が埋められていた。

覆土は全体にローム粒子や焼土粒子・炭化材を含む黒褐色・暗褐色の柔らかい土がレンズ状に自然堆積している。

出土遺物は土師器・須恵器を中心に多量出土し、竈東側床面上より甕形土器(第180図-1・2)、石製品の紡錘車(第181図-7)、西側より坏形土器(第180図-9)、南西壁下より鉄製品の鎌(第181図-6)が出土している。

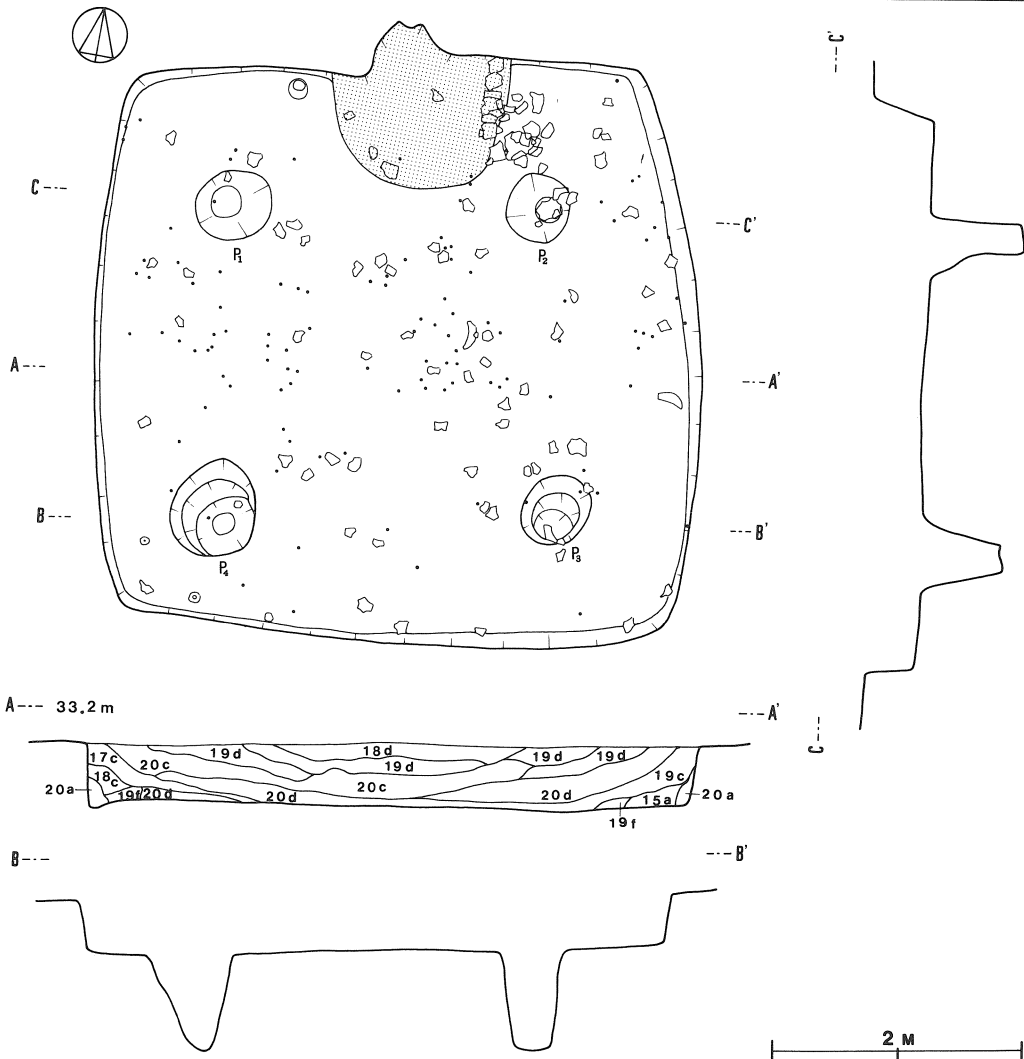
第178図 第29号住居跡竈実測図

遺物解説表(第180・181図)

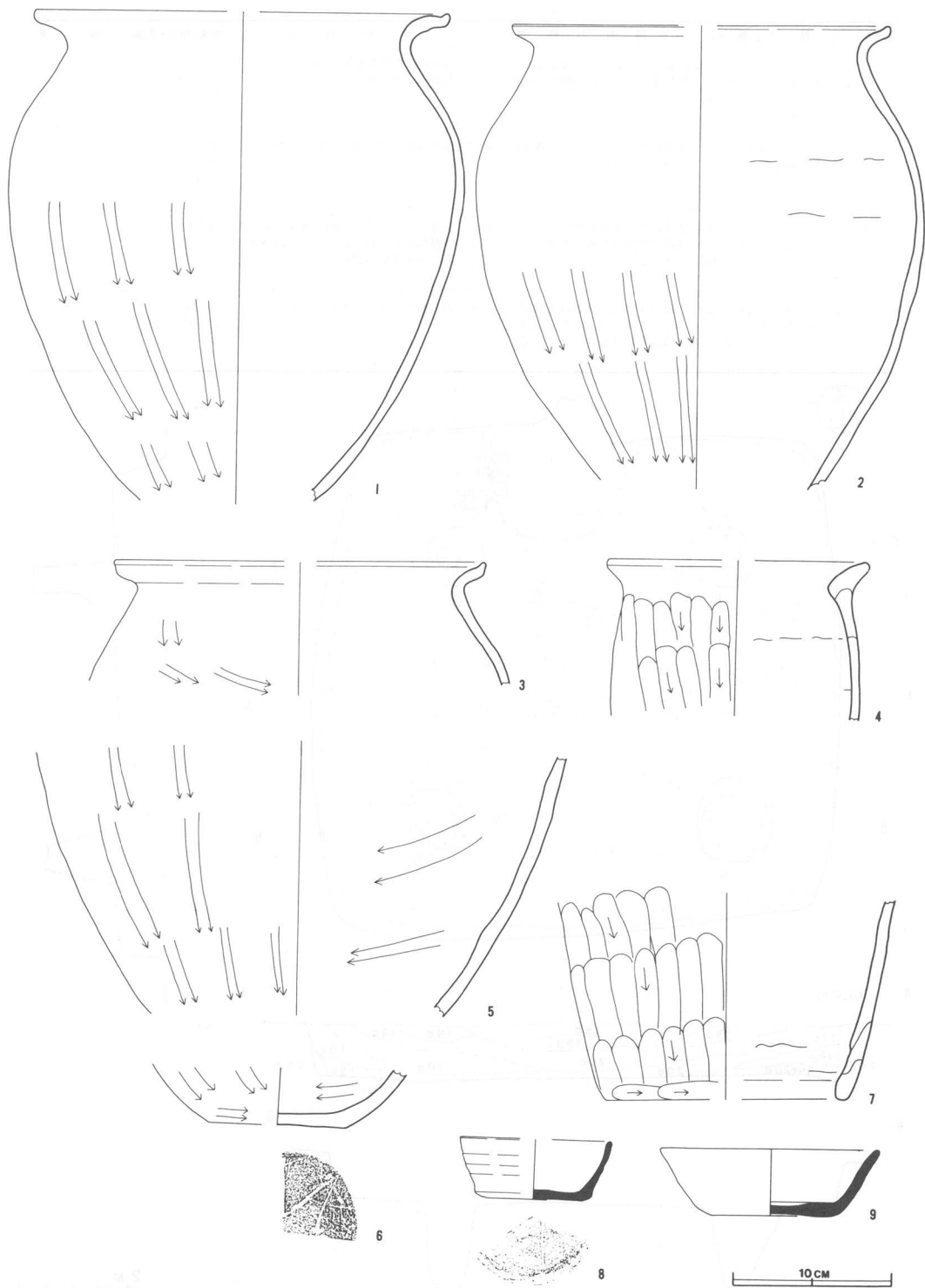
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕形土師器	A 25.8 B 30.7(現) C	底部欠損、口縁部は頸部より大きく外反した後、口辺部ではほぼ水平になる。胴部最大径を中位よりやや上部に有する。	器外面胴下半はへら磨き、その他内外面共になで調整が施されている。	普通砂粒・雲母にぶい橙色	
2	甕形土師器	A 23.8 B 28.5(現) C	底部欠損、口縁部は頸部より大きく外反する。胴部最大径を中位よりやや上部に有する。	器外面胴下半はへら磨き、その他内外面共になで調整が施されている。	普通砂粒・雲母にぶい橙色	
3	甕形土師器	A 19.4(復) B 7.6(現) C	口縁部の破片である。口縁部は頸部よりくゞ字状に大きく外反した後、口辺部で直線的に立ち上がる。胴部は頸部より大きく張り出す。	器外面・胴部はへら削り後、なで調整、口縁部内外面共になで調整が施されている。	普通砂粒・長石明赤褐色	
4	甕形土師器	A 16.0(復) B 9.8(現) C	口縁部は頸部よりやや外反して開く。胴部は頸部よりやや張り出して開く。	口縁部内外面共に横なで、外面胴部縦位のへら削り整形が施されている。	普通砂粒褐色	内面にスス付着。
5	甕形土師器	A B 17.3(現) C	胴部下半の破片である。	器外面は全体に縦位のへら磨き、内面へらなで整形が施されている。	普通砂粒・長石にぶい赤褐色	
6	甕形土師器	A B 3.6(現) C 8.3(復)	底部の破片である。底部は平坦で、胴部は底部より内彎きみに外上方へ立ち上がる。	器外面は斜・横位のへら磨き、内面へらなで整形が施されている。	普通砂粒・石英橙色	底部に木葉痕。
7	甕形土師器	A B 12.5(現) C 15.0(復)	底部の破片である。	胴部外面は縦位のへら削り、内面なで整形が施されている。	不良砂粒・長石橙色	



番号	器種	量重(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
8	坏須恵器	A 9.5 (復) B 3.8 C 6.0 (復)	底面は平坦であり、体部は底部より器厚を薄くしながら内湾ぎみに立ち上がる。	器外面は水挽き整形が施されている。内面へラ削り整形。	良好 砂粒 黄灰色	底部にヘラ記号有り。
9	坏須恵器	A 13.8 B 4.2 C 7.6	底部は上げ底状を呈し、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	器内外面共に水挽き整形が行われている。	不良 砂粒 灰白色	
181図1	坏須恵器	A 13.7 (復) B 4.4 C 8.0 (復)	底部は中央部がやや上げ底ぎみであり、体部は底部より器厚を薄くしながら外上方へ立ち上がる。	底部へラなどで、その他内外面共に水挽き整形がなされている。また内外面体部に水挽き痕が認められる。	良好 砂粒 灰色	
2	高台付坏須恵器	A 11.4 (復) B 5.1 C 7.4	底部は平坦で、体部は直線的にやや外上方へ立ち上がる。また底部は0.9 cmの高台が貼り付けられている。	内外面共に水挽き整形が行われている。	普通 砂粒 灰色	

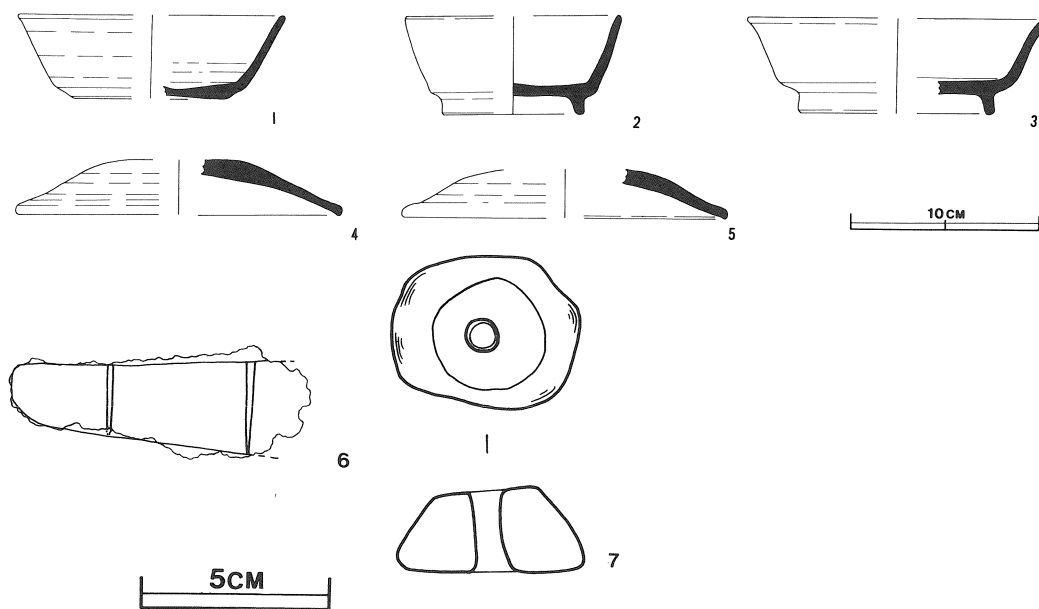


第179図 第29号住居跡実測図



第 180 图 第 29 号住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
181図 3	高台付 須恵器	A 15.5(復) B 5.0 C 10.3(復)	底部は平坦で、体部は底部より大きく開いた後、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部で外反する。	内外面共に水挽き整形が行われている。	良好 砂粒・長石 灰色	
4	蓋 須恵器	A B 2.9(現) C 15.9(復)	頂部は水平に広がり、肩部より器厚を薄くしながら外下方に開く。	肩部回転ヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒・長石 灰色	
5	蓋 須恵器	A B 2.5(現) C 16.8(復)	天井部は肩部より器厚をやや薄くしながら外下方へ開き、口辺部でやや水平になる。	肩部回転ヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒・長石 黄灰色	
6	鎌		鎌の先端部である。			
7	紡錘車	厚さ1.8 直径5.0	花崗岩を材料にして作られた紡錘車である。			

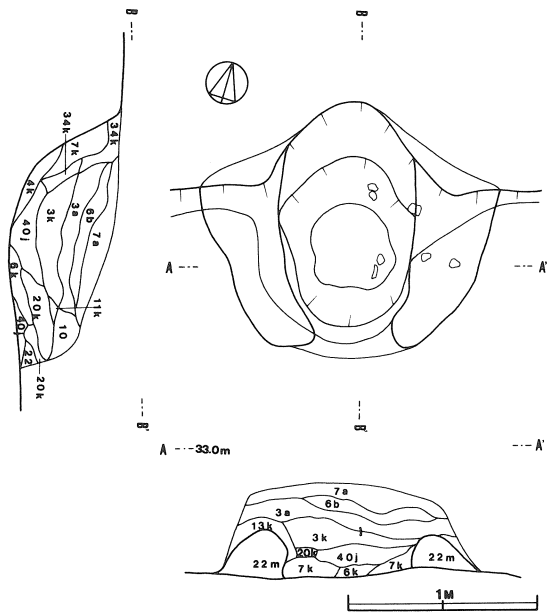


第181図 第29号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡(第182・183図)

本跡はC3b<sub>5</sub>を中心に確認され、第28号住居跡の南2.2m、第29号住居跡の東3.9mに位置している。規模は長軸3.8m・短軸3.55mの方形の平面形を呈し、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は60~67cmほどで、やや外傾して立ちあがり、床は約15cmほどの厚さに貼り、中央部を中心に硬く踏み固められている。また床面は粘性を帯び、平坦である。ピットは確認できなかった。

竈は北東壁中央部に付設され、長さ128cm・袖幅126cm、焚口部幅41cmで、袖部は褐色の

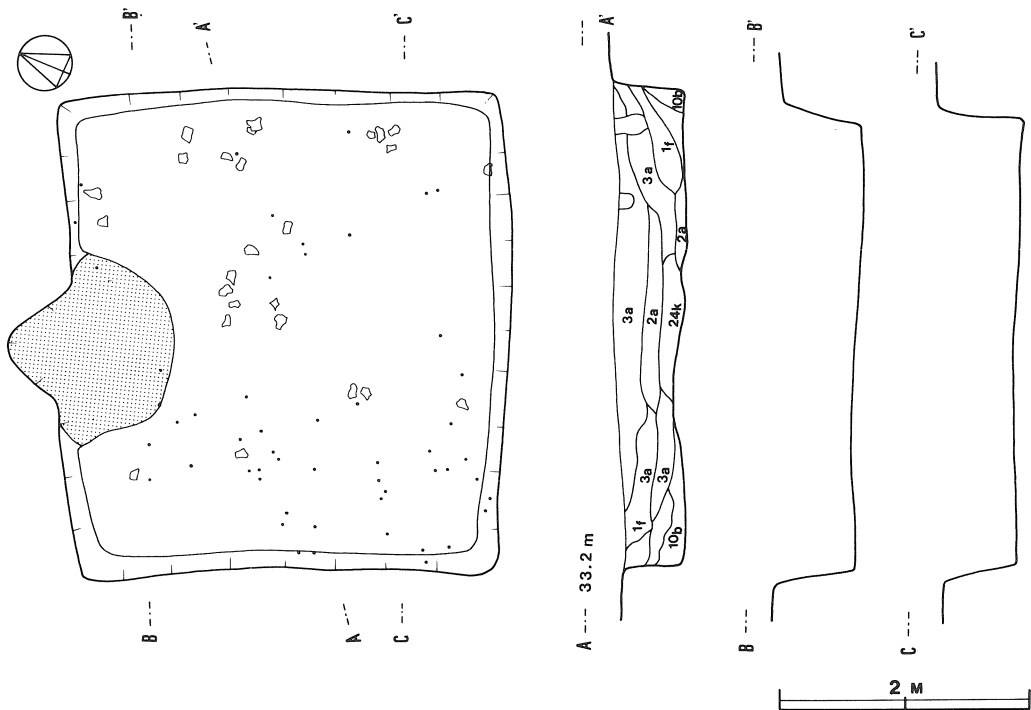


第 182 図 第 31 号住居跡竈実測図

粘土で構築されている。焼成部は壁を101 cmの幅で、46 cmほど掘り込み、火床は長径46 cmの不整楕円形を呈し、床を2 cmほど掘り窪めている。出土遺物は須恵器(第184図-2・3)が出土している。

覆土は大きく3層に分けられ、上層から中層にかけてローム粒子を含む黒褐色・黒色、下層部は焼土ブロックを含むむい褐色の土がレンズ状に自然堆積している。

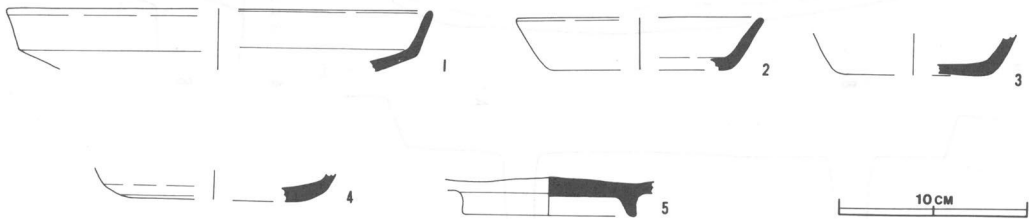
出土遺物は土師器・須恵器の破片を出土し、竈前部床面上より須恵器の盤形土器(第184図-1)が出土している。



第 183 図 第 31 号住居跡実測図

遺物解説表(第184図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	盤 須恵器	A 22.0(復) B 3.2(現) C	口縁部の破片である。体部は大きく開いた後、口縁部はやや外反ぎみに立ち上がる。	器内外面共に水挽き整形がなされている。	良好 砂粒 黄灰色	
2	坏 須恵器	A 12.7(復) B 2.75 C 9.2(復)	口縁部は底部より直線的に外上方へ立ち上がる。	器内外面共に水挽き整形がなされている。	良好 砂粒 黄灰色	
3	坏 須恵器	A B 2.2(現) C 7.8(復)	底部は平坦で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形がなされている。	良好 砂粒・長石 黄灰色	
4	坏 須恵器	A B 1.6(現) C 8.4(復)	体部は底部より大きく開いた後、外上方へ立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形がなされている。	不良 砂粒 灰白色	
5	高台付盤 須恵器	A B 1.8(現) C 8.0(復)	底部の破片である。底部は平坦で、高さ0.9cmの高台が貼り付けられている。	底部回転ヘラ削り、高台部指などで調整がなされている。	良好 砂粒 灰色	

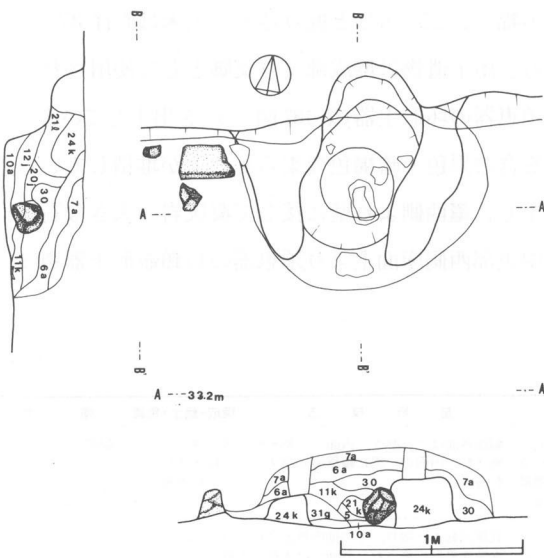


第184図 第31号住居跡出土遺物実測図

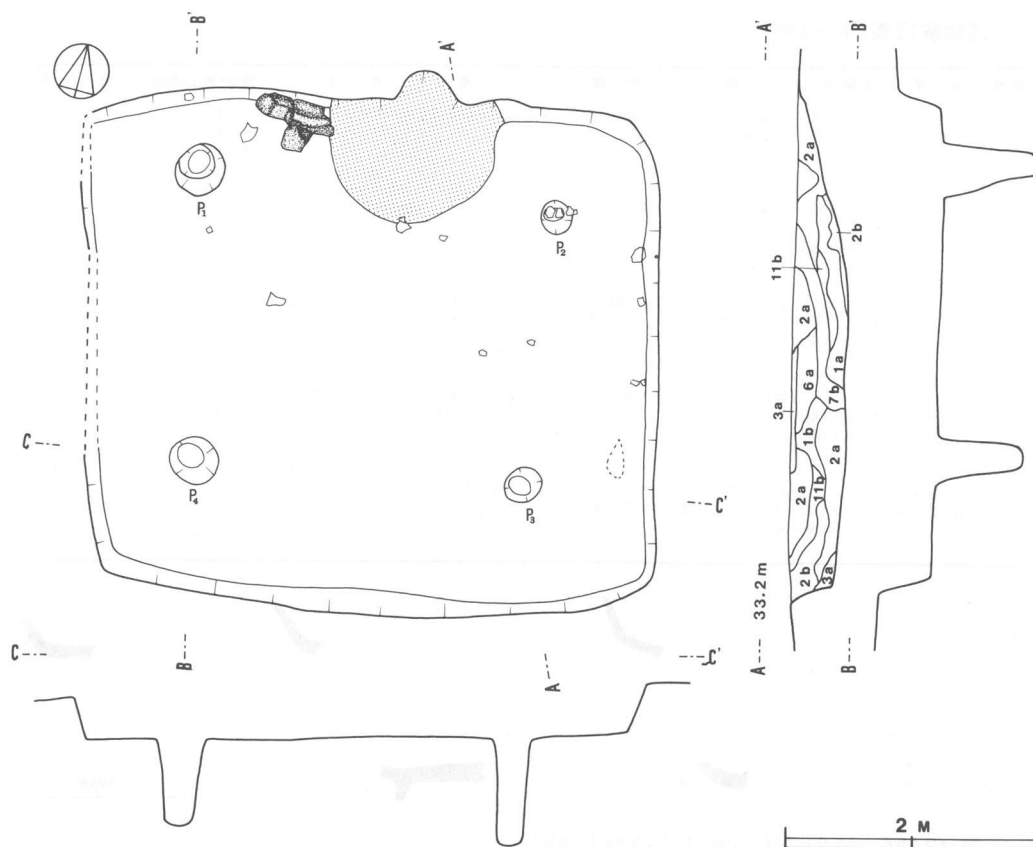
第32号住居跡(第185・186図)

本跡はB3j6を中心に確認され、第28号住居跡の東側を切り、第31号住居跡の北東2.5mに位置している。規模は長軸4.36m・短軸4.15mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-14°-Wである。壁高は35~42cmほどで、外反して立ちあがり、床は平坦で、約10cmほどの厚さに貼り、中央部を中心に硬い床である。ピットは4個確認され、深さは64~83cmを測り、いずれも支柱穴と考えられる。

竈は北東壁中央部よりやや東側に付設され、長さ116cm・袖幅98cm・焚口部幅47cmで、袖部にはぶい褐色の粘土で構築



第185図 第32号住居跡竈実測図



第186図 第32号住居跡実測図

され、内面は焼けている。焼成部は壁55cmの幅で、25cmほど掘り込み、火床は直径37cmの円形状を呈し、床を2cmほど掘り窪めている。出土遺物は焼成部より支脚として使用されたとと思われる凝灰岩の石、または西袖部外側より須恵器の坏形土器(第187図-3)を出土している。

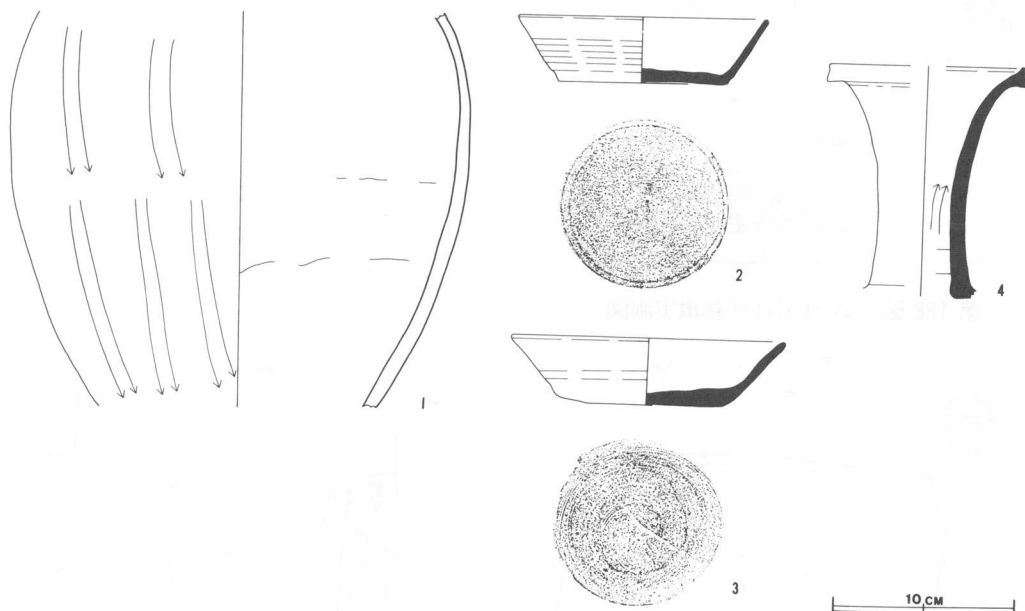
覆土は全体にローム粒子やロームブロックを含む黒色・暗褐色の柔らかい土が堆積している。

出土遺物は土師器・須恵器の破片を少量出土し、竈西側より壁に接して凝灰岩の大きな石、東側壁下より須恵器の坏形土器(第187図-2)、中央部西側床面上より須恵器の長頸壺形土器(第187図-4)が出土している。

遺物解説表(第187図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 土師器	A 20.8(現) C	胴部の破片である。胴部は底部方向より器厚をやや薄くしながら外上方へ立ち上がり、胴部最大径に至る。胴部最大径は、中位よりやや上に位置する。	胴部外面はヘラ磨き、内面ナデ整形が施され、内面の一部に輪積痕が認められる。	普通 砂粒・雲母 にぶい赤褐色	胴部にスス附着。
2	坏 須恵器	A 13.5 B 3.6 C 9.2	底部は平坦で、体部は全体に器厚が0.2~0.3cmと薄く底部より直線的に外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形が施され、外面には水挽き痕が認められる。	良好 砂粒 灰白色	

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	坏 須恵器	A 14.9 B 3.7 C 8.9	全体に器形歪みが認められる。底部は平坦で、体部よりやや外反きみに立ち上がる。	底部回転ヘラ削り、その他内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒・長石・石英 灰色	
4	長頸 須恵器	A 10.7 B 12.6 (復) C	口縁部から頸部の破片である。頸部は体部接合部より口縁部にかけて、やや真上に立ち上がった後、大きく外反する。	内外面共に水挽き整形が行われた後、頸部内面縦方向のナデ調整が施されている。	良好 砂粒 灰白色	



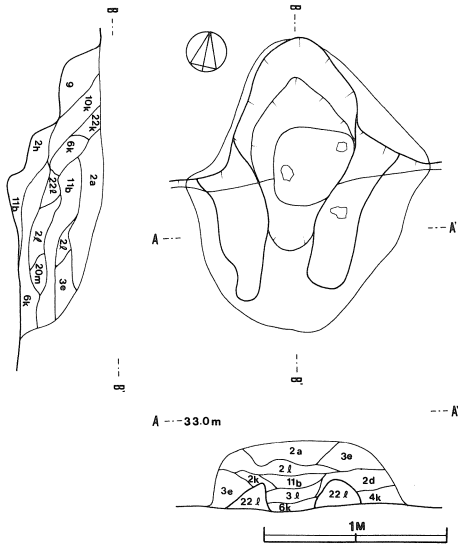
第 187 図 第 32 号住居跡出土遺物実測図

第 34 号住居跡 (第 188・189 図)

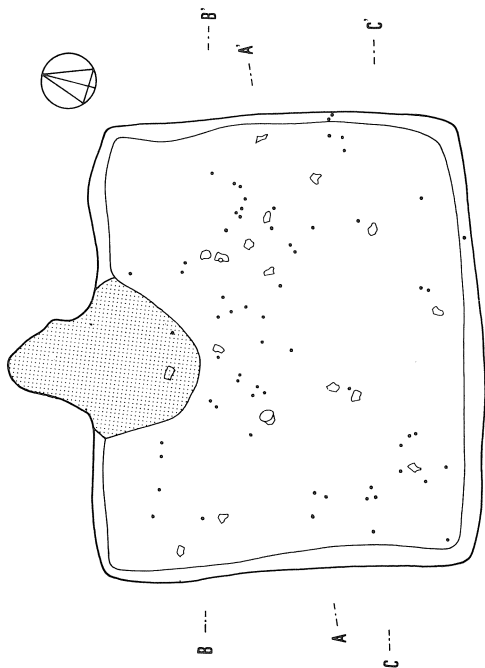
本跡は B3d8 を中心に確認され、第 27 号住居跡の北東 11 m に位置している。規模は長軸 3.61 m・短軸 3.05 m の長方形の平面形を呈し、主軸方向は N-15°-W である。壁高は 38~45 cm ほどで、やや外傾して立ちあがり、床は約 10 cm の厚さに貼られ、中央部がやや高くなるが、おおむね平坦で、硬く踏み固められている。ピットは確認することができなかった。

竈は北壁中央部に付設され、長さ 145 cm・袖幅 75 cm・焚口部幅 25 cm で、袖部は褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を 78 cm の幅で、60 cm ほど掘り込み、火床は長径 51 cm の不整形円形状を呈し、床を 3 cm ほど掘り窪めている。覆土中より須恵器蓋形土器 (図 190 図-6) が出土している。

覆土は大きく 3 層に分けられ、ローム粒子やロームブロック・焼土粒子などを含む極暗褐色・暗褐色の土がレンズ状に自然堆積の状態を示している。

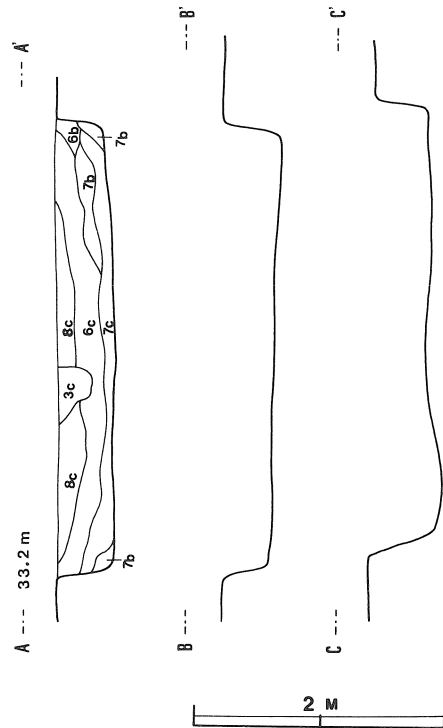


第 188 図 第 34 号住居跡竈実測図



第 189 図 第 34 号住居跡実測図

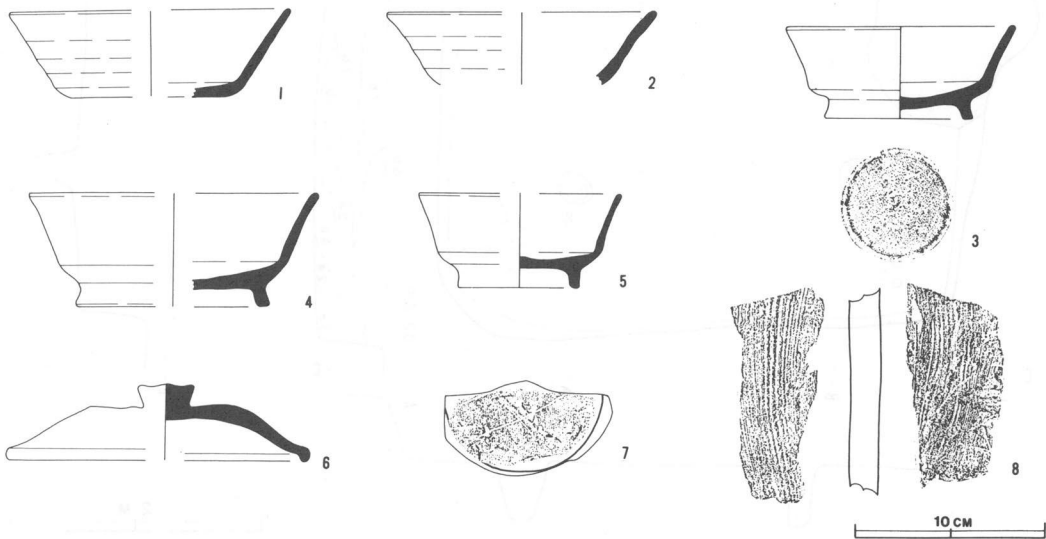
出土遺物は須恵器を中心に出土し，中央部西側覆土中より高台付坏形土器(第190図-3)の完形，竈南東部床面上より高台付坏形土器(第190図-5)，竈前部より平瓦(第190図-8)の破片などが出土している。





遺物解説表(第190図)

番号	器種	量量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏須恵器	A 14.7(復) B 4.5 C 8.3(復)	底部は平坦, 体部は器厚を薄くしながら直線的に外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ削り, その他内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒 灰白色	
2	坏須恵器	A 14.0(復) B 3.8(現) C	体部の破片で, 体部は底部よりやや内彎ぎみに外上方へ立ち上がり, 口縁部でやや外反する。	器内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒・長石 灰色	
3	高台付坏須恵器	A 12.0 B 5.0 C 7.8	底部は丸味を持ち, 体部は底部より連続的に開いた後, やや外反して立ち上がる。また底部には「ハ」の字状の高台が貼り付けられている。	器内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒・長石 灰色	内面に漆付着, 底部にヘラ記号有り。
4	高台付坏須恵器	A 15.0(復) B 6.0 C 9.9(復)	底部は平坦で, 体部は底部より連続的に開いた後, やや外反して立ち上がる。底部には高台が貼り付けられている。	体部内外面共に水挽き整形, 高台部横などで整形が施されている。	良好 砂粒 灰色	
5	高台付坏須恵器	A 10.6(復) B 5.0 C 6.8	底部は平坦で, 体部は直線的に外上方へ立ち上がる。底部には「ハ」の字状の高台が貼り付けられている。	底部回転ヘラ削り, 体部内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒 黄灰色	
6	盖須恵器	A B 4.0 C 15.5	宝珠状のつまみを有し, 頂部は水平に開き肩部より外下方へ開く。口唇部は直立する。	頂部は回転ヘラ削り, その他内外面共に水挽き整形, つまみ部はなで整形が施されている。	良好 砂粒・長石 灰色	
7	坏須恵器		底部の破片である。			「メ」のヘラ記号有り。
8	瓦					



第190図 第34号住居跡出土遺物実測図

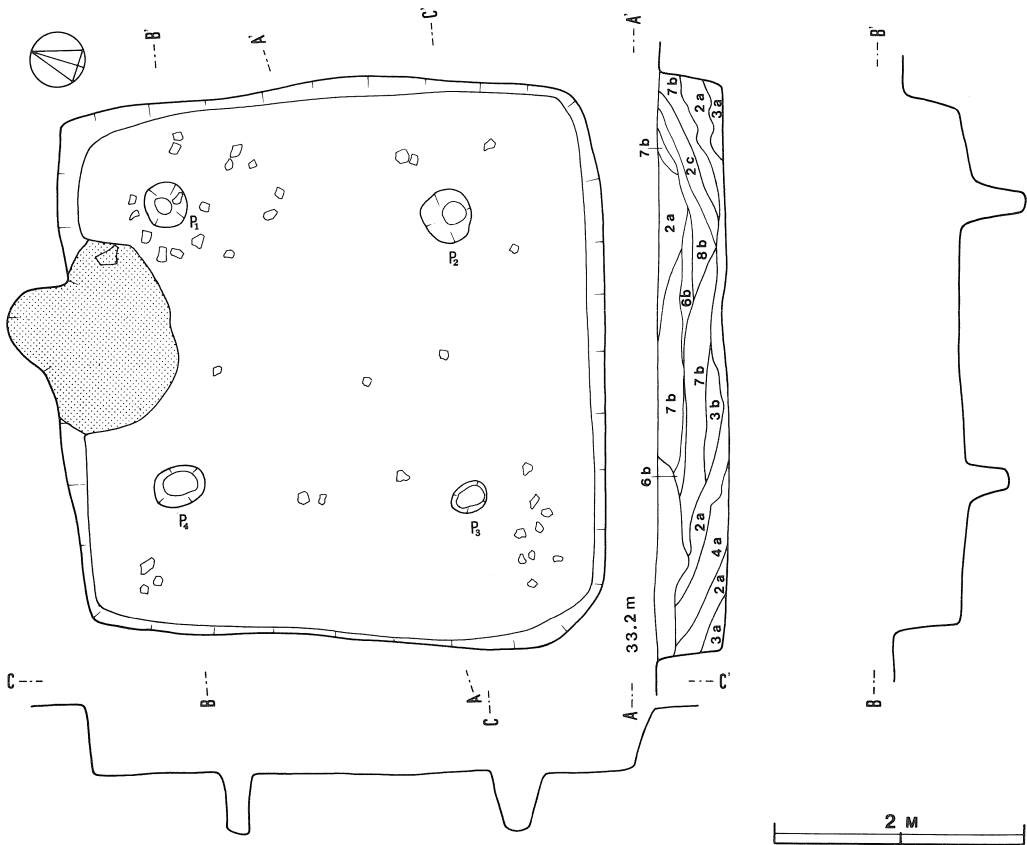
第 35 号住居跡(第 191・192 図)

本跡は A4 j<sub>3</sub> を中心に確認され、第 33 号住居跡の北 2.5 m に位置している。規模は長軸 4.48 m・短軸 4.3 m の隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向は N-14°-W である。壁高は 45~55 cm を測り、やや外傾して立ちあがり、床は約 25 cm ほどの厚さに貼られ、全体がよく踏み固められて硬く平坦である。ピットは 4 個確認され、いずれも主柱穴と考えられ、深さは 33~51 cm を測る。

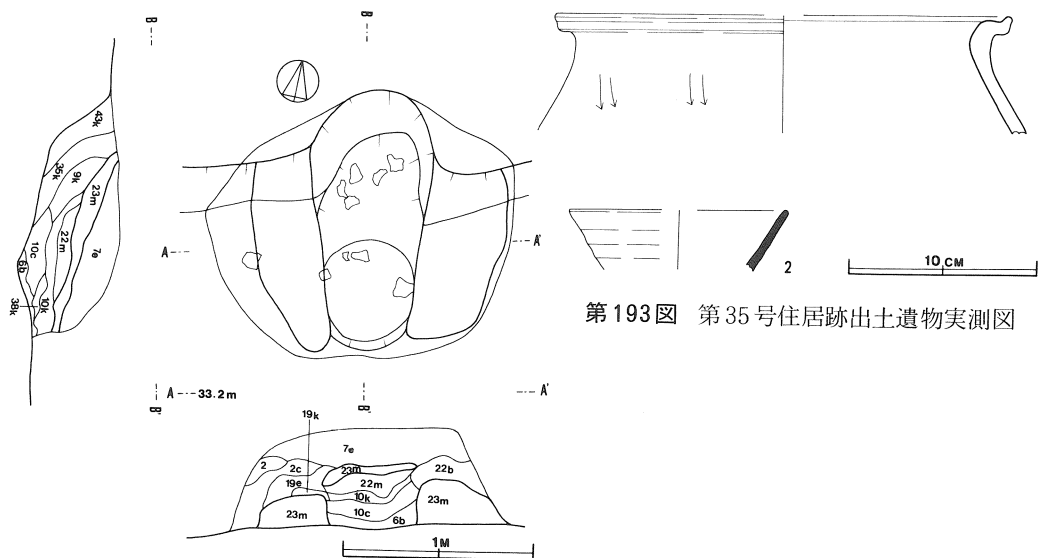
竈は北側壁中央部に付設され、長さ 135 cm・袖幅 130 cm・焚口部幅 44 cm を測り、袖部は山砂を主体とした土で構築されている。焼成部は壁を 65 cm の幅で、30 cm ほど掘り込み、火床は直径 53 cm の円形を呈し、床を 2 cm ほど掘り窪めている。遺物は焼成部より甕形土器の胴部片を少量出土する。

覆土は全体にローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色・黒褐色の土がおおむねレンズ状に堆積している。

出土遺物は非常に少なく、竈東側より甕形土器(第 193 図-1)の口縁部の破片、須恵器の坏形土器(第 193 図-2)が出土している。



第 191 図 第 35 号住居跡実測図

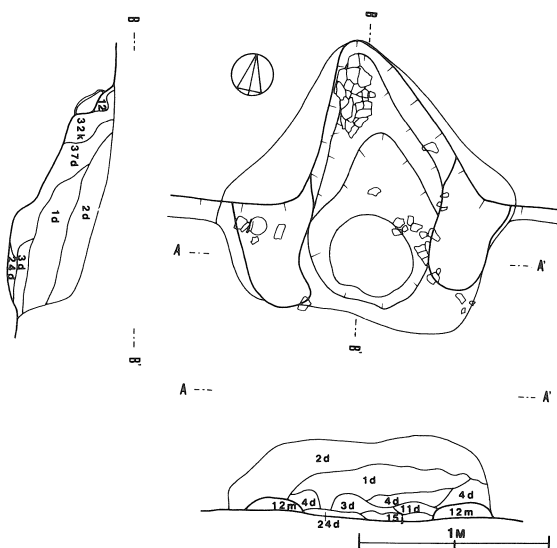


第193図 第35号住居跡出土遺物実測図

第192図 第35号住居跡竈実測図

遺物解説表(第193図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 24.0 (復) B 6.0 (現) C	口縁部の破片である。口縁部は頸部より大きく外反して開いた後、口唇部で垂直きみに立ち上がる。	胴部上位はへら磨き、その他口縁部内外面共に横なで調整が施されている。	不良 砂粒・長石・石英 橙色	
2	坏 須恵器	A 11.4 (復) B 3.2 (現) C	口縁部の破片である。体部は底部より直線的に外上方へ立ち上がる。	器内外面共に水挽き整形が施されている。水挽き痕が外面に認められる。	良好 砂粒 灰色	

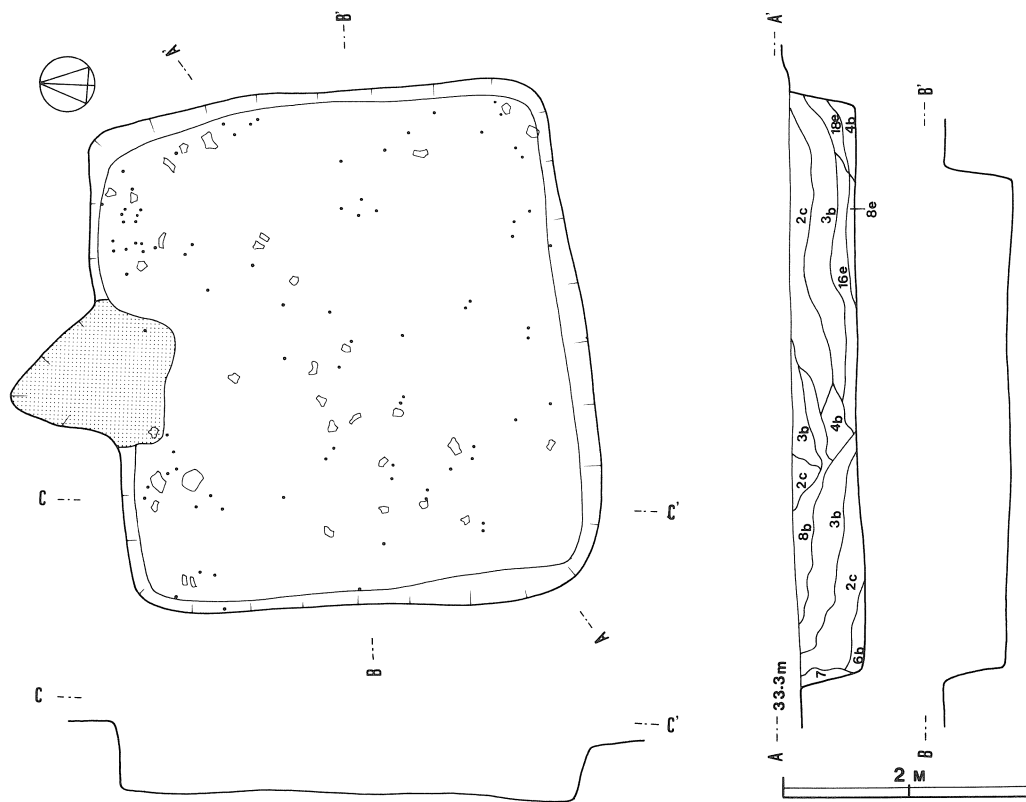


第194図 第37号住居跡竈実測図

第37号住居跡(第194・195図)

本跡はB2a7を中心に確認され、第38号住居跡の北西5.4m、第26号住居跡の西14.2mに位置している。規模は長軸4.15m・短軸3.8mほどの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-18.5°-Wである。壁高は46~52cmほどの深さで、やや外傾して立ちあがり、床は約10cmの厚さの貼り床で、全体に踏み固められて硬く、一部起伏の見られる所もあるがおおむね平坦である。またピットは確認することはできなかった。

竈は北壁中央部に付設され、長さ138cm・



第195図 第37号住居跡実測図

袖幅126 cm・焚口部幅68 cmで、袖部は褐色の山砂で構築され、煙道部には縄文土器(第196図-8)の再利用がなされていた。焼成部は壁を101 cmの幅で、82 cmほど掘り込み、火床は直径44 cmの円形状を呈し、床を2 cmほど掘り窪めている。

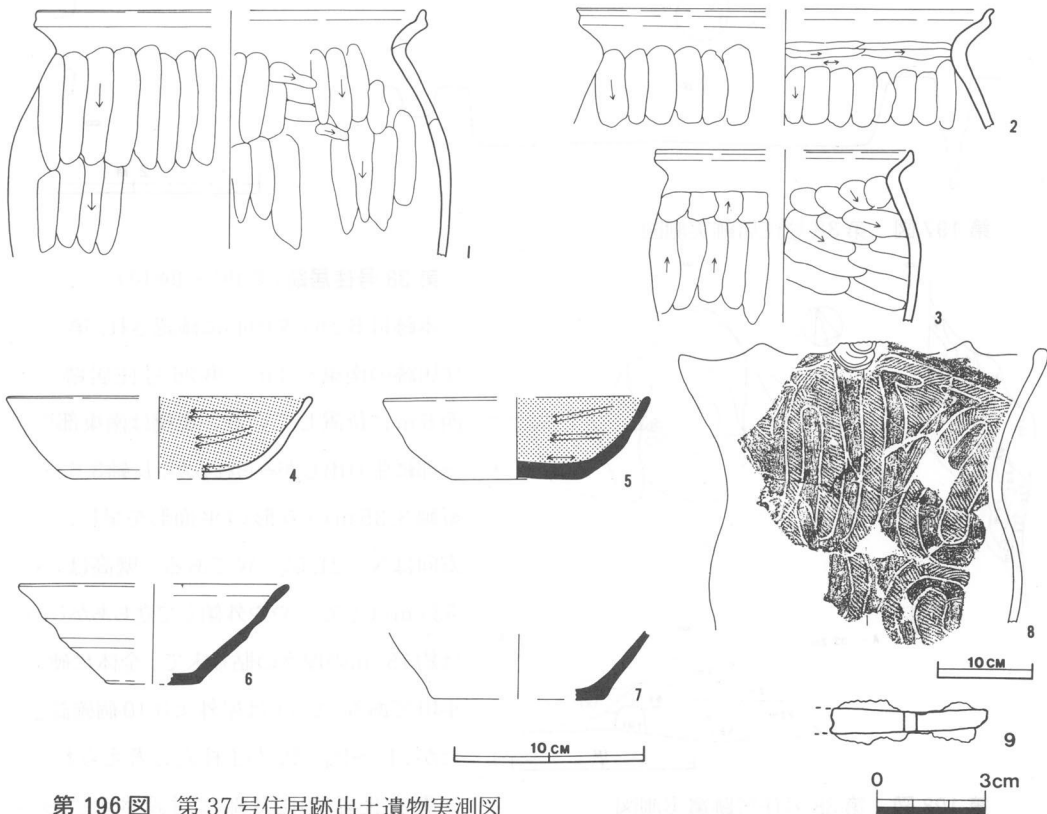
覆土はローム粒子やロームブロック・焼土粒子などを含む黒色・黒褐色の柔らかい覆土であり、自然流入の堆積状態を示している。

出土遺物は全体から土師器・須恵器を中心にやや多く出土し、特に竈両側から甕形土器(第196図-1・2)、土師質須恵器の坏形土器(第196図-5)、また覆土中より刀子(第196図-9)の茎部が出土している。

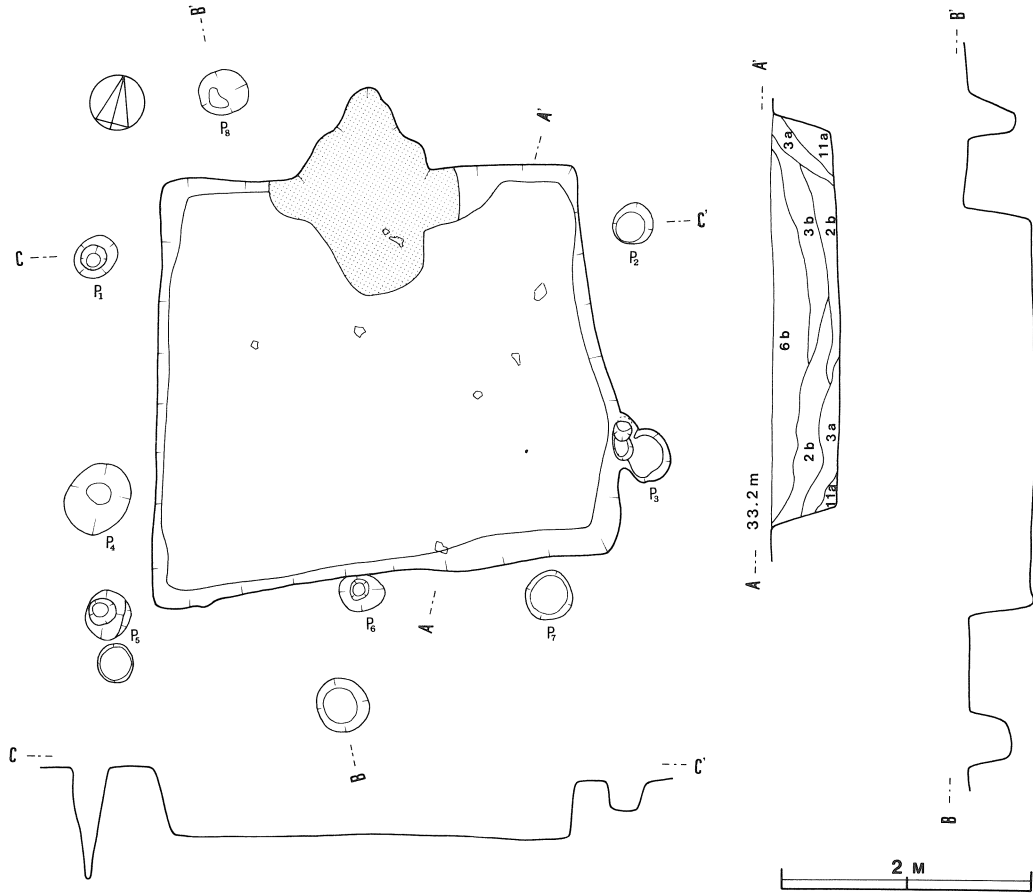
遺物解説表(第196図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕土師器	A 20.2(復) B 10.3(現) C	口縁部は頸部より「く」の字状に外反して開き、口唇部で中央部をやや凹ませて垂直きみに立ち上がる。	口縁部は内外面共に横なで、体部内外面共に縦位のへら削りが施されている。	普通砂粒 橙色	
2	甕土師器	A 22.0(復) B 6.0(現) C	口縁部は頸部より「く」の字状に屈折し、口唇部は中央部で凹みながら外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横なで、頸部内外面共に斜・縦位のへら削りが施されている。	普通砂粒 にぶい褐色	

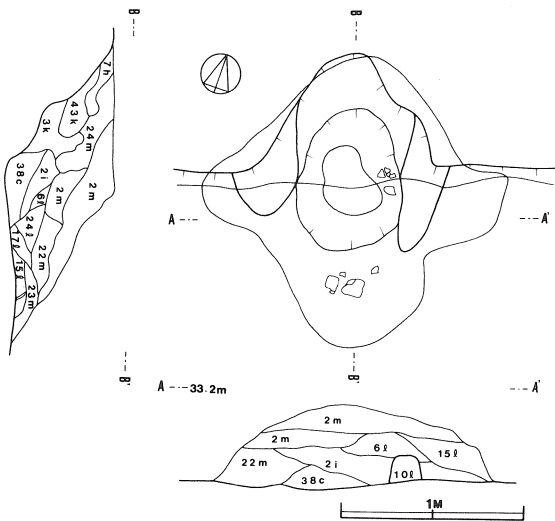
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	甕 土師器	A 13.4 B 9.0(現) C	口縁部は頸部より外反して開き、口唇部で直線的に立ち上がる。	口縁部内外面共に横なで、頸部内外面共に斜・縦位のへら削り整形がなされている。	不良 砂粒・長石・スコリアにふい赤褐色	
4	坏 土師器	A 16.0(復) B 4.3 C 9.1(復)	底部は平坦で、体部は内彎きみに外上方へ立ち上がる。	器内面はへら磨き、底部はへら削り、体部水挽き整形がなされている。	良好 砂粒にふい橙色(外) 黒色(内)	
5	坏 土師質須恵器	A 14.0(復) B 4.3 C 6.9(復)	底部はおおむね平坦で、体部は内彎して外上方へ立ち上がる。	内面は横位のへら磨き、底部へら削り、体部は水挽き整形が施されている。	不良 砂粒 浅黄褐色	
6	坏 土師質須恵器	A 14.1(復) B 5.3 C 5.1(復)	底部は平坦で、体部は直線的に大きく外上方へ開く。	体部内外面共に水挽き整形がなされ、外面には水挽き痕が明瞭に認められる。	普通 砂粒 灰黄色	
7	坏 須恵器	A B 3.4(現) C 8.8(復)	底部は平坦で、体部は器厚を薄くしながら直線的に外上方へ開く。	体部内外面共に水挽き整形がなされている。	良好 砂粒・長石 灰色	
8	縄文土器		煙道部に使用されていたもの。			
9	刀子		茎部である。			



第196図 第37号住居跡出土遺物実測図



第 197 図 第 38 号住居跡実測図



第 198 図 第 38 号住居跡竈実測図

第 38 号住居跡(第 197・198 図)

本跡は B2b<sub>9</sub> を中心に確認され、第 37 号住居跡の南東 5.4 m、第 26 号住居跡の南西 6 m に位置している。規模は南東部壁の一部に張り出しがみられるが、長軸 3.63 m・短軸 3.35 m の方形の平面形を呈し、主軸方向は N-21.5°-W である。壁高は 48~53 cm ほどで、やや外傾して立ちあがり、床は約 15 cm の厚さの貼り床で、全体に硬く、平坦である。ピットは屋外より 10 個確認されたが、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub> が支柱穴と考えられる。

竈は北東壁中央部に付設され、長さ

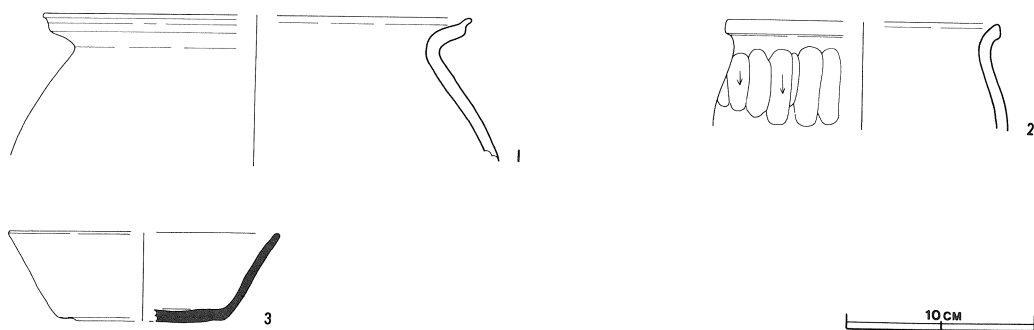
107cm・袖幅106cm・焚口部幅68cmで、袖部は褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を97cmの幅で、61cmほど掘り込み、火床は長径39cmの不整楕円形を呈し、床を4cmほど掘り窪めている。

覆土は大きく3層に分けられ、ローム粒子やロームブロックを含む暗褐色・黒褐色の土がレンズ状に堆積している。

出土遺物は土師器・須恵器を少量出土する。

遺物解説表(第199図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 22.2(復) B 7.6(現) C	口縁部の破片である。口縁部は頸部より大きく「く」の字状に外反した後、口唇部の中央部でやや凹んで立ち上がる。胴部は頸部より大きく張り出す。	口縁部は横なで調整が施されている。	不良 砂粒・石英・長石 橙 色	
2	甕 土師器	A 14.2(復) B 5.7(現) C	口縁部の破片である。口縁部は頸部より外反して開き、口唇部は垂直ぎみに立ち上がる。	口縁部は横なで調整、胴部外面はヘラ削り整形が施されている。	不良 砂粒・長石・石英 明赤褐色	
3	坏 須恵器	A 14.0(復) B 4.7 C 8.8(復)	底部は平坦で、体部はやや外反ぎみに外上方へ立ち上がる。	底部はヘラ切り、体部内外面共に水挽き整形がなされている。	良好 砂粒・長石 灰 色	

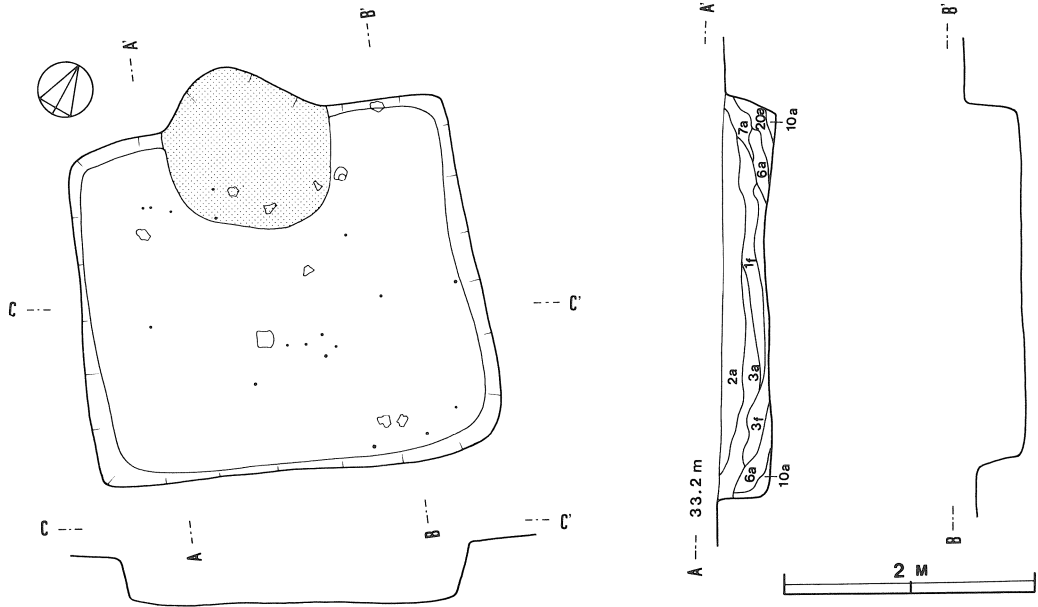


第199図 第38号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡(第200・201図)

本跡は遺跡の東側A3h<sub>9</sub>を中心に確認され、第40号住居跡の北東1.7m、第35号住居跡の南東11.5mに位置している。規模は長軸3.17m・短軸2.85mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-37°-Wである。壁高は35~42cmほどで、外傾して立ちあがり、床はロームで、約10cmの厚さの貼り床で、中央部を中心に硬く踏み固められ、平坦である。ピットは確認できなかった。

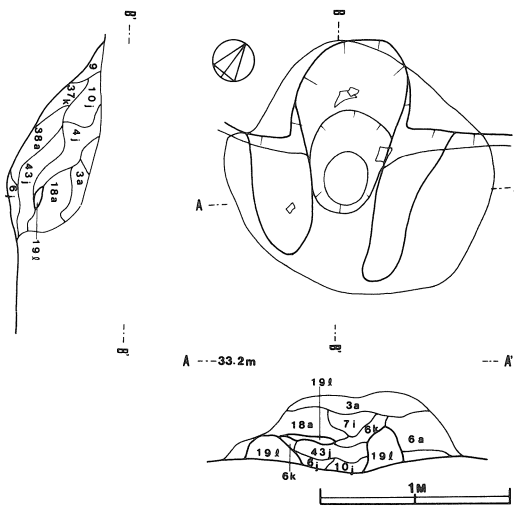
竈は北西壁中央部に付設され、長さ122cm・袖幅73cm・焚口部幅34cmで、袖部は粘土で構築されている。焼成部は壁を62cmの幅で、48cmほど掘り込み、火床は直径28cmの円形を呈し、床を5cmほど掘り窪めている。遺物は焼成部内より甕形土器(第202図-1)が出土している。



第200図 第39号住居跡実測図

覆土は大きく3層に分けられ、ローム粒子・砂粒等を含む黒色・黒褐色の柔らかい土が自然流入の状態で堆積している。

出土遺物は中央部を中心に少量出土し、竈東側より須恵器の環形土器(第202図-2)、中央部より須恵器の高台付環形土器(第202図-5)などが出土している。



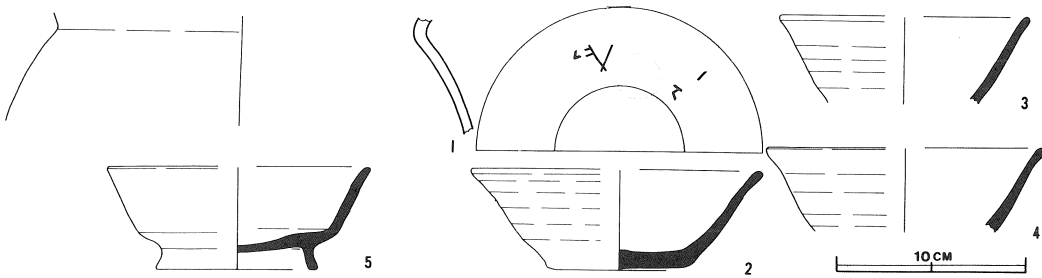
第201図 第39号住居跡実測図

遺物解説表(第202図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A B 5.8(現) C	胴部は頸部より器厚を同じくし外下方へ張り出す。	器内外面共に横なで調整が施されている。	不良 砂粒・長石 黒褐色	
2	坏 (墨書土器) 須恵器	A 15.0(復) B 5.3 C 7.7	底部は平坦で、体部は器厚をやや薄くしながら直線的に外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ切り、体部内外面共に水挽き整形が施されている。	普通 砂粒・石英 黄灰色	内面に解読不明の文字有り。



番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	坏 須恵器	A 13.0(復) B 4.6(現) C	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部でやや外反して開く。	体部は内外面共に水挽き整形が行われ、外面には水挽き痕が認められる。	良好 砂粒 にぶい橙色	
4	坏 須恵器	A 14.6(復) B 4.4(現) C	体部は直線的に器厚を薄くしながら外上方へ開き、口縁部でやや厚く、やや外反する。	体部内外面は水挽き整形が行われ、水挽き痕がやや弱く認められる。	良好 砂粒・長石 黄灰色	
5	高台付坏 須恵器	A 13.4(復) B 5.4 C 8.4(復)	底部は平坦で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。底部には「ハ」の字状の高台が貼り付けられている。	底部はへら削り、体部内外面共に水挽き整形が施されている。	良好 砂粒 褐灰色	



第202図 第39号住居跡出土遺物実測図

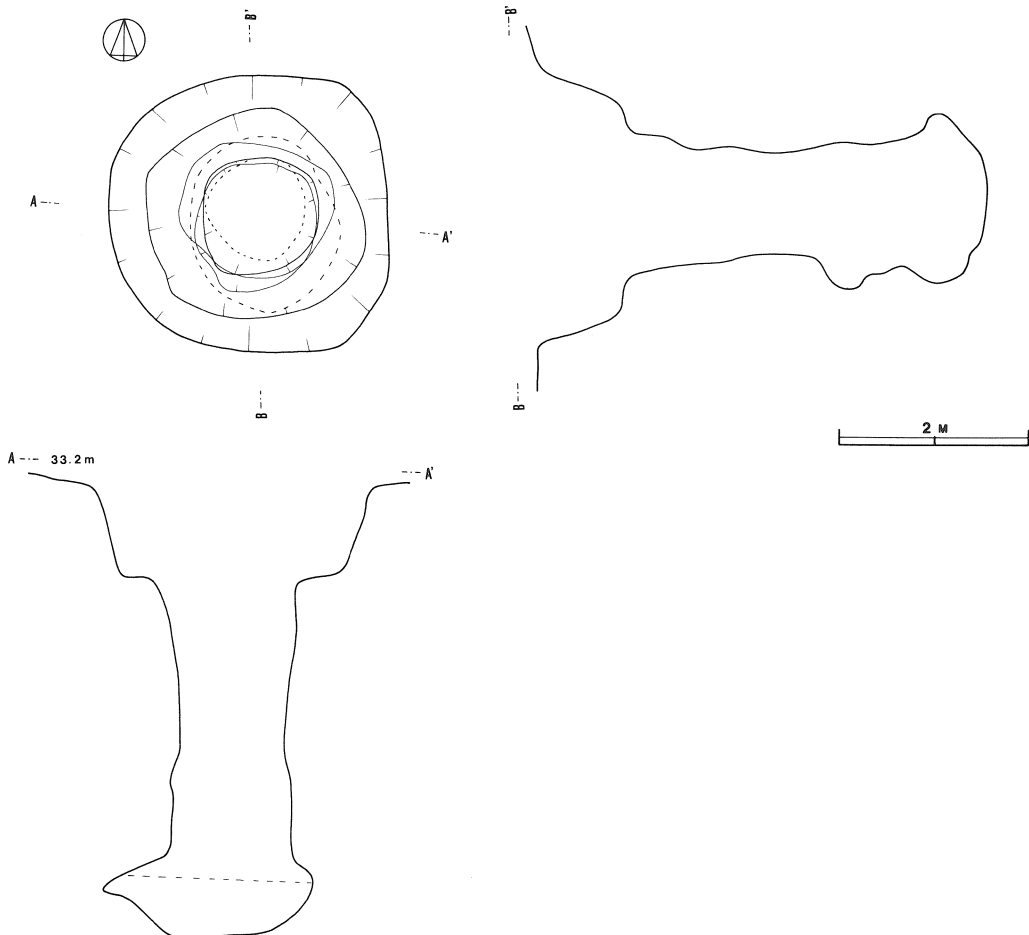
歴史時代の竪穴住居跡一覧表

番号	長軸方向	平面形	規模(長径×短径) (m)	壁高 (cm)	壁溝	壁柱穴	炉及び竈	柱穴	備考
1	N-24°-W	方形	3.84 × 3.42	48	無	無	有	無	
2	N-19°-W	方形	4.6 × 4.08	30~48	〃	〃	有	有	
3	N-33°-W	隅丸長方形	2.5 × 2.08	37	〃	〃	無	有	
4	N-45°-W	隅丸長方形	2.6 × 2.16	13~18	〃	〃	無	有	
5	N-28°-W	長方形	2.9 × 2.2	10~16	〃	〃	無	有	
6	N-25°-W	隅丸長方形	2.72 × 2.12	50~58	〃	〃	無	有	
7	N-22°-W	隅丸長方形	2.8 × 2.48	28	〃	〃	無	有	
8	N-35°-W	隅丸方形	2.61 × 2.61	46	〃	〃	無	有	
9	N-15°-W	長方形	4.46 × 3.57	45~50	〃	〃	有	有	
10	N-30°-W	方形	3.22 × 3.13	32~35	〃	〃	有	無	
11	N-19°-W	隅丸長方形	3.06 × 2.4	25~30	〃	〃	有	無	
12	N-19°-W	隅丸方形	3.76 × 3.56	70~73	〃	〃	有	無	
20	N-9°-W	方形	5.28 × 4.84	52~65	有	〃	有	有	
21	N-7°-E	隅丸方形	3.3 × 3.25		不明		有		
26	N-19°-W	隅丸方形	3.27 × 3.2	25	無	無	有	有	
27	N-14°-W	隅丸方形	5.5 × 5.5	48~52	有	〃	有	有	
28	N-17°-W	方形	4.1 × 3.9	32~42	無	〃	有	有	
29	N-9°-W	隅丸方形	4.75 × 4.65	40~45	〃	〃	有	有	
31	N-17°-W	方形	3.8 × 3.55	60~67	〃	〃	有	無	
32	N-14°-W	隅丸方形	4.36 × 4.15	35~42	〃	〃	有	有	
34	N-15°-W	長方形	3.61 × 3.05	38~45	〃	〃	有	無	
35	N-14°-W	隅丸方形	4.48 × 4.3	45~55	〃	〃	有	有	
37	N-18.5°-W	隅丸方形	4.15 × 3.8	46~52	〃	〃	有	無	
38	N-21.5°-W	方形	3.63 × 3.35	48~53	〃	〃	有	有	
39	N-37°-W	隅丸方形	3.17 × 2.85	35~42	無	無	有	無	

(2) 井戸状遺構

第1号井戸(第203図)

本井戸状遺構は遺跡の北東A3dsを中心に確認され、第39号住居跡の北西20m、第26号住居跡の北北東26mに位置している。掘り方は2段掘り込がなされ、上段は直径3.15mの円形状の平面形を呈し、深さは0.96mほど掘り込み、壁面は外傾して立ちあがる。また上段底面壁側ぞいを30~50cm幅のベルト状に残し、さらに下段に掘り込みが行われている。下段の掘り方は直径1.5mの円形状に3.8mほど掘り込み、断面形は底面付近が水の影響でやや崩れているが、おおむね円筒状を呈している。現在でも底面周辺の礫層より水が湧き、つねに60cm程の深さで水が溜っている。覆土には全体に礫・ロームブロック等を含み、しまりを帯びた黒色・黒褐色の土が上層でレンズ状に自然堆積している。なお、確認面から1mほど掘り込んだところ、中央部が大きく空洞状に陥没していたため、中・下層部の土層を観察することはできなかった。



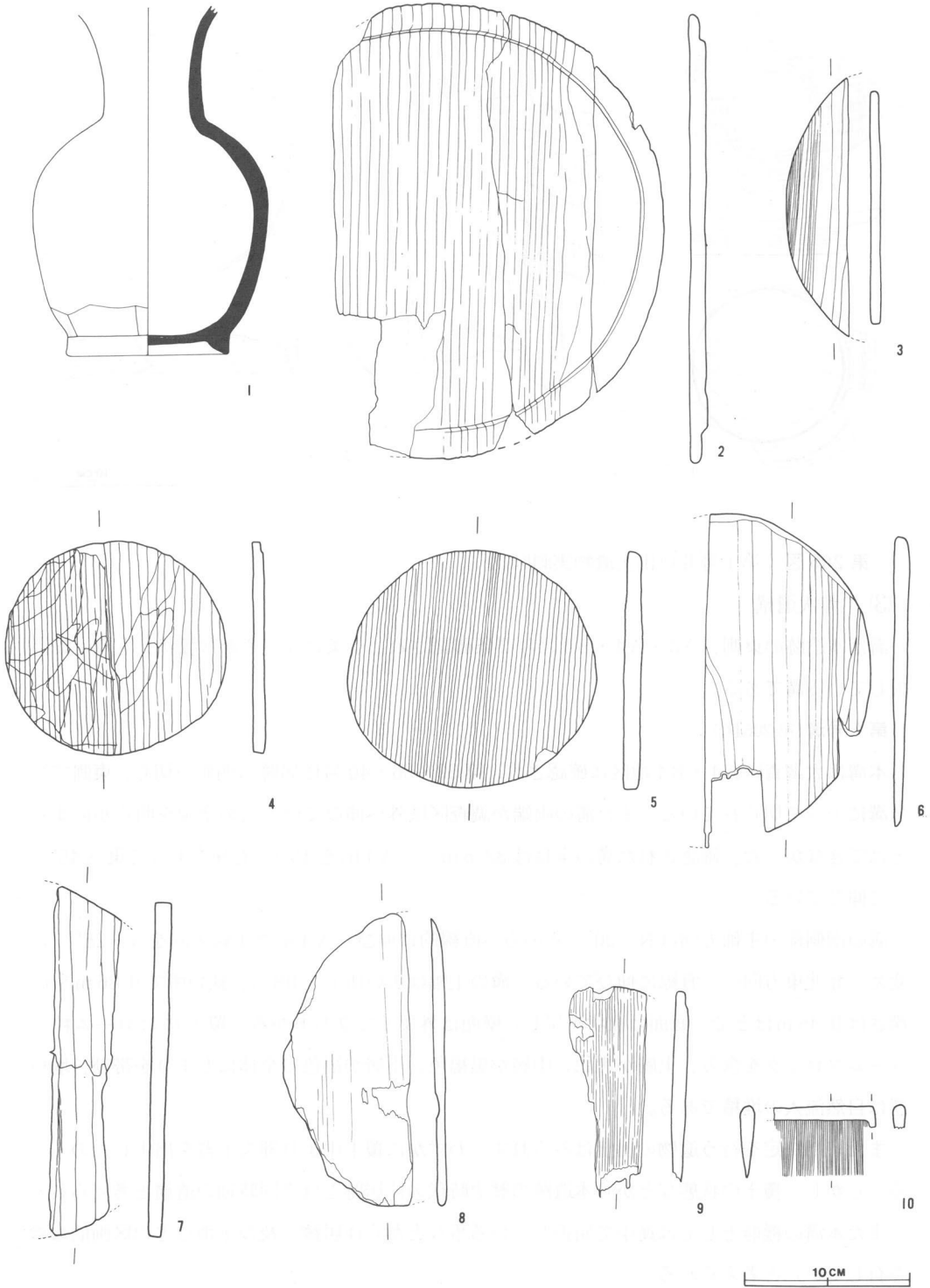
第203図 第1号井戸実測図

遺物は底面より 50 cm 上位より須恵器の長頸壺形土器(第 204 図-1), 底面より木製品の曲物・櫛・高台付盤が出土している。

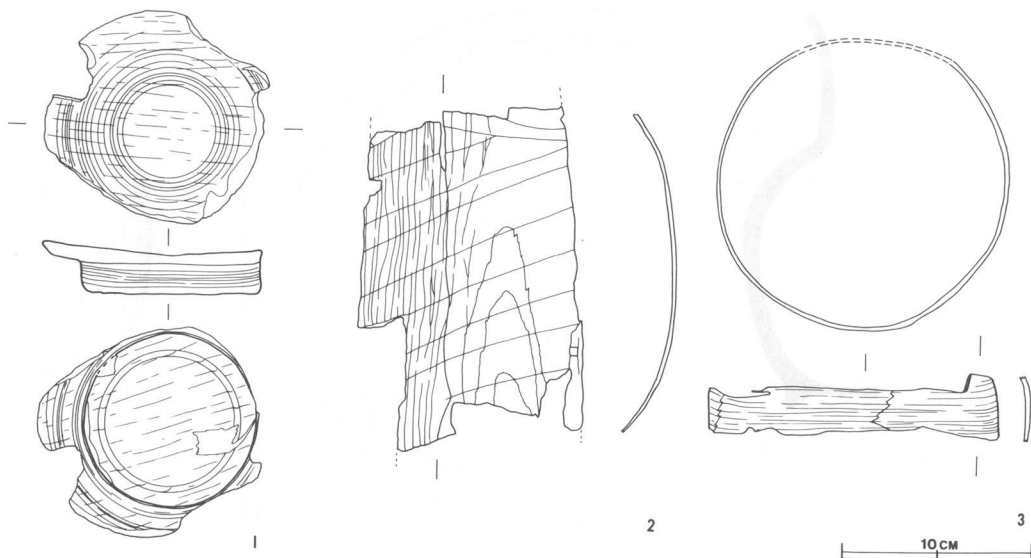
井戸の使用時期は, 遺物等から当遺跡の歴史時代の住居跡に住んでいた人々が使用したものと考えられる。また同類の形状を示す井戸が, 常磐自動車道のルート内(水戸市大塚町)の大塚新地遺跡より 2 基検出されている。

遺物解説表(第 204・205 図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	長頸壺器	A 20.7 B 20.7 C 9.8	底部は平坦で, 体部は底部よりやや内彎きみに外上方へ開いた後, 胴部最大径より大きく頸部へ内彎する。口縁部は外反して開く。底部には低い台が貼り付けられている。	内外面共にろくろ整形が施され, 底部付近の外面にはへら整形がなされている。	良好 砂粒 灰色	
2	曲物	長 27.0 幅(19.8) 厚 0.9	柾目の板材を用いて作られた曲物底である。縁端から幅 1.6 cm 厚さ 0.4 cm ほど周縁を薄くしている。	表面は鉋で平滑に仕上げられた後, 同類の刃物で周縁を削っている。	褐色	
3	曲物	長 15.5 幅(3.7) 厚 0.6	柾目の板材を用いて作られた曲物蓋である。	表裏面共に鉋で平滑に仕上げられている。	暗褐色	
4	曲物	長 12.7 幅 厚 0.6	柾目の板材を用いて作られた曲物蓋である。	表裏面共に鉋で削られ一部削痕が認められる。	黒褐色	
5	曲物	長 14.2 幅 厚 1.0	柾目の板材を用いて作られた曲物蓋である。	表裏面共に鉋で平滑に削られている。	暗褐色	
6	曲物	長 19.9 幅(9.8) 厚 0.8	柾目の板材を用いて作られた曲物蓋である。	表裏面共に鉋で丁寧に削られている。	黒褐色	
7	曲物	長(21.0) 幅( 3.5) 厚 0.9	柾目の板材を用いて作られた曲物蓋と思われる。	鉋で平滑に削られている。	黒褐色	
8	曲物	長(17.5) 幅( 7.6) 厚 0.6	普通の板材を用いて作られた曲物蓋である。	表裏面共に鉋で丁寧に削られている。	暗褐色	
9	曲物	長(12.5) 幅( 4.7) 厚 0.8	柾目の板材を用いて作られた曲物蓋の破片である。	表裏面共に鉋で丁寧に削られている。	暗褐色	
10	櫛	長 4.3 幅(6.0) 厚	つげを素材にして作られた梳櫛である。断面形は細みの「V」字状を呈し, 歯の間隔は 0.5 mm ほどである。	不明	黒褐色	
205図 1	高台付盤器 木	A B 5.2 C 18.8	底部は平坦で, 盤は底面でやや凹んで広がる。	回転台を使用して作られ, 内外面共に螺旋状に成形痕が認められる。	黒褐色	
2	曲物	長(17.0) 幅 11.0 厚 0.2	板材を薄く削って作られた曲物の側板である。	内面には曲げやすく刻みが入れている。	暗褐色	
3	曲物	長 15.3 幅(3.3) 厚 0.2	薄い板材を用いて作られた曲物の側板である。	不明	暗褐色	



第204図 第1号井戸出土遺物実測図(1)



第 205 図 第 1 号井戸出土遺物実測図(2)

### (3) 溝状遺構

溝は本遺跡の東側，A3・A4・B4より2条確認され，1条はゆるやかな弧状，もう一条は屈折している溝である。

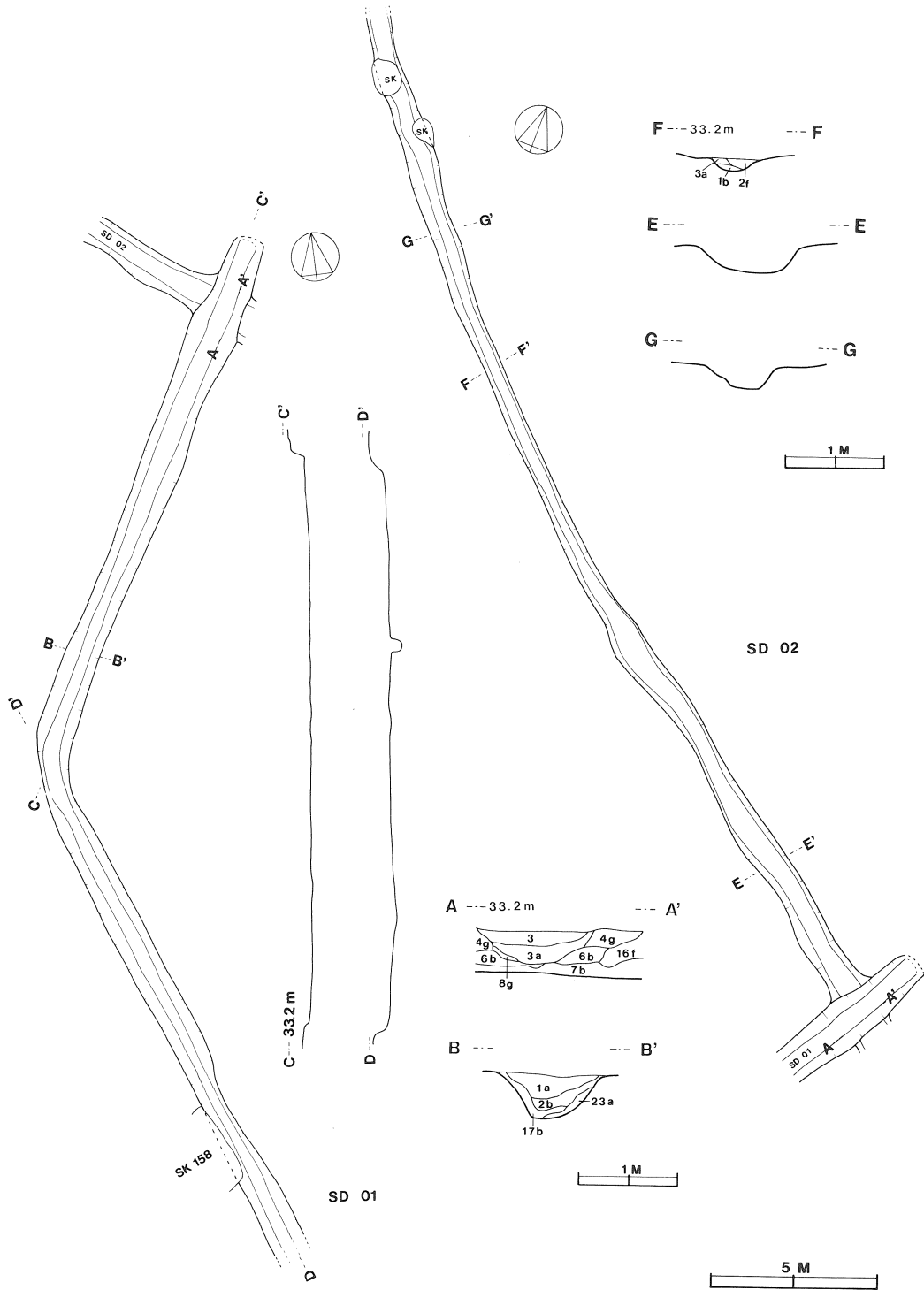
#### 第 1 号溝(第 206 図)

本溝は大調査区A4・B4地区に確認され，第33・36・40号住居跡の西側を切り，東側で第2号溝によって切られている。また溝の両端が調査区域外へ伸びているため全貌を明らかにすることはできなかった。確認された溝の全長は33.5mで，A4h1を中心に丸味をもって東へ45°屈折して伸びている。

溝の南側部の主軸方向はN-20°-Wの方へ直線的に伸び，A4h1で主軸方向をN-25°-Eに変え，北北東方向へ一直線に伸びている。溝の上幅は広い所で1.08m，狭い所で0.86mを測り，深さは0.45mほどで，底面は皿状を呈し，壁面は外反して立ちあがる。覆土にはローム粒子・ロームブロックを含み，上層が黒色，中層が黒褐色，下層が褐色で全体にしまりを帯び，堆積状態は自然流入の堆積である。

また時期決定を行う遺物の出土はみられず，わずかに覆土中より縄文土器を出土したのみである。しかし，覆土の状態などから本遺跡の歴史時代の住居跡とほぼ同時期の遺構と考えられる。

また本溝の機能としては途中で屈折している事などから住居跡，及び土地などの区画的な機能を有していたと考えられる。



第 206 図 第 1・2 号溝実測図

## 第2号溝(第206図)

本溝は大調査区A3・A4に確認され、第42号住居跡のほぼ中央部を南北に切り、第1号溝とA4f<sub>3</sub>でほぼ直交して南北に走っている。本溝も第1号溝と同様に両端が調査区域外へ伸びているため全貌を明らかにすることはできなかった。また確認された溝の全長は34.6mで、主軸方向は第1号溝と直交する所で、N-38°-Eで、北側18~20mほどのA3c<sub>9</sub>においてはN-40°-E、さらに北東部のA3a<sub>8</sub>においてはN-50°-Eの主軸を示し、溝はゆるやかな弧状をなして伸びている。溝の上幅は広い所で1.02m、狭い所で0.6mを測り、深さは第1号溝との交点の地点で0.32m、本溝の北側部で0.25mほどで、壁面はゆるやかに外傾して立ちあがる。底面はロームであり、浅い皿状を呈し、北側と南側とのレベル差は最大差で12cmほどである。覆土は全体に黒色のブロックを含み、色調は黒褐色で、全体にさらさらしている。

また遺物は覆土中より微量の縄文土器を出土しているが、時期決定の資料としての遺物はみられず、時期不明の溝である。溝の機能としては排水溝、及び根切溝が考えられるが、それぞれの機能を有しているため、決定することはできない。



## 第2節 ま と め

砂川遺跡を約7ヶ月発掘調査を実施した結果、確認された遺構、遺物は前述したように、縄文時代の竪穴住居跡19軒・土壇261基・埋設土器16基、歴史時代(国分期)の竪穴住居跡19軒・竪穴状遺構6軒・井戸1基・溝2条である。

出土遺物は縄文時代の遺物として加曽利EVI式土器を主体とし、若干の称名寺式土器を含む土器および磨製石斧・敲石・凹石等の石器類・土製円板・有孔円板等の土製品である。歴史時代(国分期)の遺物は土師器・須恵器などの土器を中心に、紡錘車など石製品・刀子・鎌などの鉄製品などである。

調査の概要および遺構・遺物等について前章において記述しているので、ここでは調査によって明らかになった事実と問題点についてまとめ、今後の研究の参考にしたい。

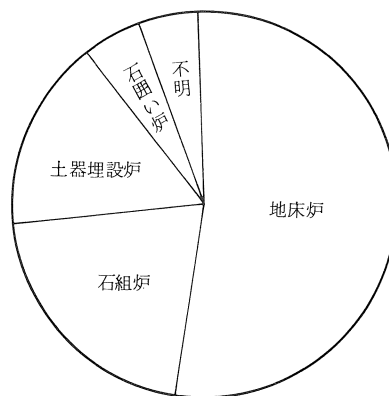
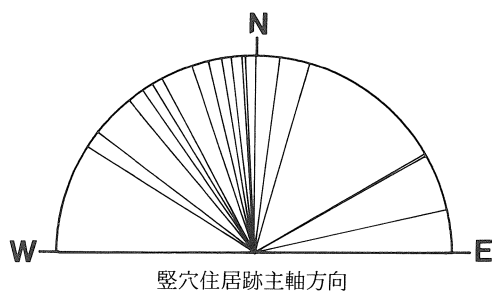
### 1 縄文時代

#### (1) 竪穴住居跡

縄文時代の竪穴住居跡は、遺跡の中央より東側の標高33.5～34mのほぼ平坦な台地上に立地し、調査区内では直径38mにわたってほぼ環状に分布しているが、住居跡が調査区外へ延びている可能性が考えられるので、分布状態から埋設土器を含む西群と東群の二つに、分けることができると思われる。調査区内において西群は第13～19・22・25・30号住居跡の12軒から成り、長径40m・短径20mの長楕円形の集落形態を呈する。東群は第33・36・40～44号住居跡の7軒によって構成され、幅14mの円弧状の集落形態を示している。しかし各群内において住居跡の構造および炉の種類等に相違点が認められるため、集落形態を分布状態から考えることは疑問である。

また住居跡の平面形をみると、円形・楕円形・隅丸方形・隅丸長方形を呈するものがあり、円形の住居跡は第14・15・25・33・41・42号住居跡の6軒。楕円形の住居跡は第13・16・24・30・40号住居跡の5軒。隅丸方形の住居跡は第17～19・23・36・44号住居跡の6軒。隅丸長方形を呈する住居跡は第22号住居跡の1軒である。なお第43号住居跡については石囲い炉を確認したのみで、規模については不明である。以上で明らかのように、円形・楕円形・隅丸方形の平面形を呈する住居跡が全体の95%を占めている。

規模についてみると、最大の規模をもつ住居跡は楕円形の平面形を呈する第13号住居跡で、長径6.12m・短径5.28m。小規模な住居跡は隅丸方形を呈する第17号住居跡であるが、第17号住居跡については前述したように炉を有していないため、住居跡としては捉えにくい遺構である。その他の住居跡17軒は一辺が4～5m内外の規模を有する住居跡である。また確認面から床面までの深さは第13・33号住居跡が33cmを測り最も深く、10～20cmを測る住居跡が全体の84%を占めている。しかし本遺跡は他の遺跡と異なり、黒色・黒褐色の層が70～80cmの厚



炉跡種類別割合

さで堆積しているのと同時に、遺構確認をルーム上面で行ったことを考えると、実際の深さはもっと深い住居跡であったと思われる。

主柱穴については4本を有するものが多いが、第25・36号住居跡は3本の主柱穴で構築され、第25号住居跡においては壁へ斜めに掘り込んだ補柱穴が掘られていた。

炉については形態から4種類に分類することができる。1類は床面に皿状に掘り窪めて作られた地床跡。2類は凝灰岩・粘板岩を利用して組まれた石組炉。3類は深鉢形土器の胴上半分を埋めて作られた土器埋設炉。4類は河原の石で直径40cm内外の円形状に囲んだ石囲い炉である。1類の炉をもつ住居跡は第13～15・19・23・25・33・41・42号住居跡で、いずれも住居跡のほぼ中央部に作られている。第41・42号住居跡の炉は方形状に掘り込み、1つの壁際には砂岩および花崗岩の石が置かれていた。2類の炉をもつ住居跡は第16・18・22・24号住居跡で、いずれも住居跡の中央部に作られ、第16号住居跡は粘板岩、第18・22号住居跡は凝灰岩、第24号住居跡は砂岩でほぼ正方形に組んで作られた炉である。3類の炉をもつ住居跡は第30・40・44号住居跡である。第40号住居跡は中央部よりやや西側寄り、第30・40号住居跡はほぼ中央部に炉を有し、利用されていた土器は大形の深鉢形土器の胴上半分を切断した土器で、床を20～25cmほど掘り込んで埋設している。土器の文様を見ると、第30・40号住居跡に利用されていた土器は微隆起線によって「渦巻」・「H」文が描かれ、第44号住居跡の土器は全体に縄文が施文されている。土器を見るかぎり、3軒の住居跡はほぼ同時期のものと考えられる。4類の炉をもつ住居跡は第43号住居跡ただ1軒で、河原などにある直径15cm内外の石で円形状に囲んで作られた炉である。

また重複する住居跡を比較した時、第24・25号住居跡は炉を異にした住居跡で、土層の切り合いより第24号住居跡が古い住居跡であることが確認され、よって本遺跡の縄文時代の住居跡においては、地床炉を有する住居跡より石組炉を有する住居跡の方が古い時期の住居跡と考えられ

る。しかし土器の文様等を比較すると、ほぼ同一時期の文様を有しており、時間差は余り感じられない。

埋設土器を有する住居跡は第41号住居跡のただ1軒であり、本遺跡の縄文時代の住居跡としては異質のものであり、住居跡相互間に何らかの違いが生じていたのだろうか。

また出土遺物は縄文土器を主体に石器・土製品などが少量出土している。特に多量の土器を出土した住居跡は第13・18・25・30・33号住居跡であるが、多くは土器の破片である。完形の土器は第18号住居跡より器台形土器を出土したのみである。また遺物の出土状態はいずれも覆土上層から下層にかけて出土しているため、一部は廃棄による遺物と考えられる。縄文土器の文様は微隆起線による区画文様を有するもの、沈線による区画文様を有するもの、櫛歯状の文様を有する土器であり、これらの文様を有する土器のうち微隆起線による区画文様を有する土器が全体の約80%以上を占めている。石器の出土量は少なく、磨製石斧を出土した住居跡は第14・30・33・36・44号住居跡の5軒で、総計7個出土。石鏃を出土した住居跡は第14・18・25号住居跡の3軒で、総計3個出土。また第13号住居跡からは瑪瑙を原石とする石鏃・搔器・剝片を1カ所よりまとまって出土している。土製円板は7軒より出土しているが、土器片錘は出土していない。以上遺物について述べたが、狩猟および漁撈に必要な道具類の出土が少なかった点などを考えると、当遺跡の縄文時代の人々はどのような生活および食生活を送っていたのだろうか。

以上のような調査結果から、縄文時代の住居跡は中期末、すなわち加曾利EIV期のものと思われる。

## (2) 土 壙

本遺跡で確認された土壙は261基にのぼり、分布は遺跡の中央部より東側のほぼ全域に広がっている。これらの土壙を形状によって分類すると、

〔平面形〕

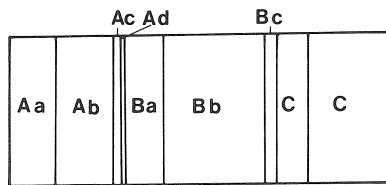
- A 円形状を呈するもの
- B 楕円形状を呈するもの
- C 不整円形、不整楕円形を呈するもの

〔断面状〕

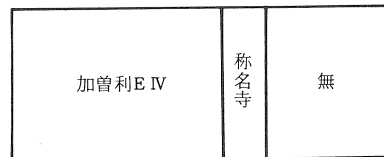
- a 円筒状を呈するもの
- b 「∪」字状を呈するもの
- c 袋状を呈するもの
- d 「V」字状を呈するもの

以上のように大別することができる。

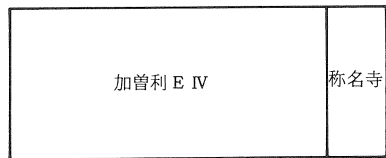
Aa類として捉えられるものは31基数えられ、平面形の規模は大小様々であるが、最大のものは直径172cm、最小のものは直径70cmの大きさであり、全体的に直径130cm前後のものが全体の70%を占め、深さは40～59cmを測るものが多い。遺物はほぼ全体から出土し、主に上層から中層にかけて少量の土器片を出土している。特に第163号土壙からは無文の皿状の完形土器、及び磨製石斧1個を出土している。



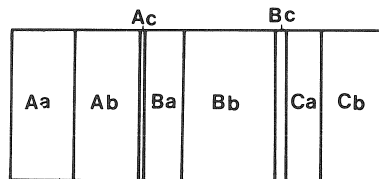
土壇形態別割合



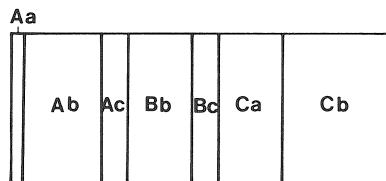
土壇内出土土器状況



土壇内出土土器形式割合



加曾利 E IV 式土器, 出土形態別割合

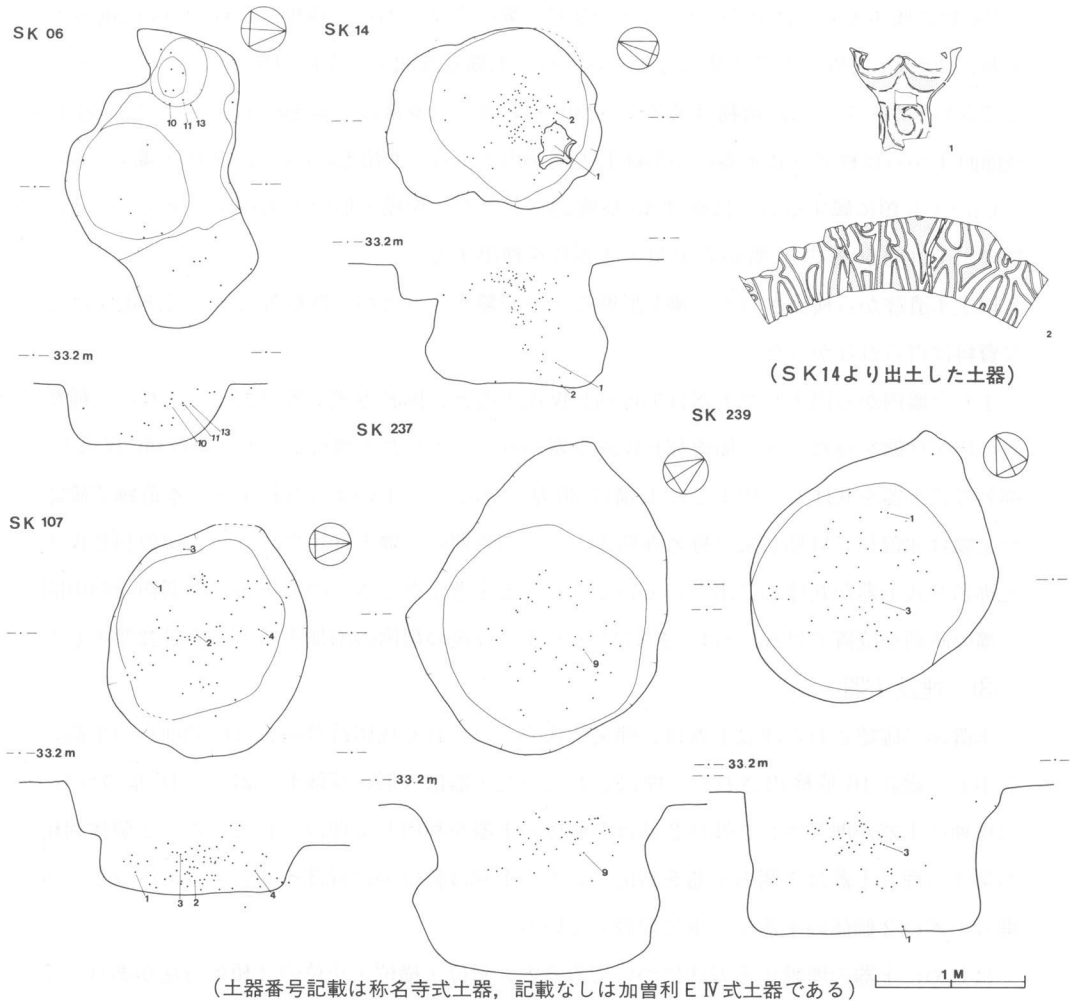


称名寺式土器, 出土形態別割合

A b類に属するものは38基数えられ、規模は直径100～150 cm前後の大きさのものが多く、深さは最深の土壇で72 cmを測るものが2基ほどあるが、その他の土壇は40～50 cm内外の深さである。また出土遺物は4基を除く全土壇より縄文土器片を出土し、特に第60・89・110・147・186・198・235号土壇からは大形の土器片を出土する。また第132号土壇からは瑪瑙の石錐1個を出土している。しかし大部分の遺物は覆土上層から中層にかけて出土したものである。

A c類はいわゆる「袋状土壇」で本遺跡の中では数少ないもので、5基ほど確認された。規模は長径150～180 cmのもの3基、100～120 cmのもの2基で、深さは140 cm前後のもの2基、75 cm内外のもの3基である。またオーバーハングの状態をみると、第1・14・15・20 B号土壇は底面より上方へ約30 cmほどのところまで、10～15 cmほどオーバーハング。第105号土壇底面より上方へ約100 cmのところまで、20～30 cmほどオーバーハングして立ちあがる。遺物は他類の土壇より全土壇とも多量の土器を出土し、特に第14号土壇においては底面直上より深鉢形土器2個を検出し、しかも2個の土器は加曾利E VI式土器と、称名寺式土器であり、同一レベル上から出土している点などを考えたとき、非常に興味深いことである。

A d類に属するものは2基のみ検出され、断面形は「V」字状を呈し、本遺跡の中では異質の土壇であると同時に、平面形状は違うにせよ一般に言われているTピットに類似したものか。また



第 207 図 土壌内出土土器垂直分布  
 (土器番号記載は称名寺式土器, 記載なしは加曾利 E IV 式土器である)

同形態と類似した土壌は水戸市大塚町の大塚新地遺跡より 4 基確認されている。

Ba 類に属する土壌は 25 基数えられ, 規模は長径 100~130 cm を測るものが大部分であり, 最大のものは第 160 号土壌で, 長径 215 cm・短径 195 cm である。また多くの土壌は 50~60 cm の深さを有している。遺物は大部分の土壌から出土し, 特に 191・203・229 号土壌からは大形の土器片を出土している。

Bb 類に属するものは 72 基確認され, 本遺跡の土壌の中では一番多い形態である。平面形の規模は Ba 類と全体的にはほぼ同じであり, 深さは約 10 cm ほど本類の方が浅くなる傾向にある。遺物は第 53・107・159 号土壌から大形の土器片が多量検出され, 特に第 107・159 号土壌からは完形の小形鉢形土器が出土している。また覆土の堆積状態は大部分の土壌が自然堆積であるが, 第 107 号土壌は中層に焼土の層がみられ, 火を燃やした形跡が窺える。

Bc類に属するものは第191・237・239号土壇の3基であり、規模は長径100cm前後のもの1基、200cm内外のもの2基である。いずれの土壇も底面より10～15cmほどオーバーハングして立ちあがっている。遺物は第237・239号土壇より多量の土器を出土し、特に237号土壇の底面直上からは称名寺式土器の小形鉢形土器が出土する。本類もいわゆる「袋状土壇」である。

Ca・Cb類に属するものは総計80基確認されたが、規模・形状ともバラエティーに富み、遺物の出土は約50%の土壇から少量の土器片を検出する。

以上本遺跡から検出された土壇を形態ごとに分類してみたが、性格等について決定づけるような資料は得られなかった。

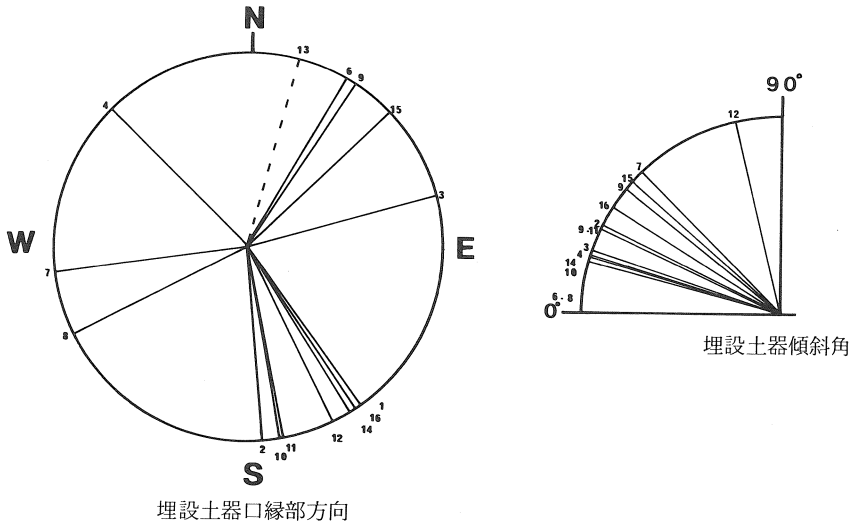
また土壇内から出土した土器は加曾利EⅣ式土器と、称名寺式土器である。これら二種類の土器の出土状態を見たとき、加曾利EⅣ式土器のみを出土した土壇は137基、加曾利EⅣ式土器と、称名寺式土器を共伴して出土した土壇は26基である。以上のような結果から本遺跡で確認された土壇は加曾利EⅥ期および称名寺期の、2つの時期の土壇と推定されるが、加曾利EⅣ式土器と称名寺式土器が共伴して出土していることなどを考えたとき、中期末から後期初頭の間中期に土壇の時期を位置づけることはできないだろうか。今後の類例の増加を待ち、検討課題としたい。

### (3) 埋設土器

本遺跡で確認された埋設土器は、縄文時代の二分される住居跡群のほぼ中間地点の小高い地区を中心に総計16基検出された。埋設されていた土器は大形の深鉢形土器で、16基のうち14基は単独で土器が埋設され、残り2基は2個体の土器を利用して埋設されていた。2個体利用のうち第3号埋設土器は1個の土器を斜位に、もう1個は斜位の口縁部を囲むように埋設し、第5号埋設土器は2個体の土器を二重に埋設している。

はじめに土器の埋設する方法についてみると、斜位・横位・正位の3類の方法があり、1類は斜位方向の埋設土器で、属するものは第1～4・7・9～11・14～16号埋設土器である。土器は口縁部を上位に斜めに埋設し、傾斜角に統一はみられないが、ほぼ15°～45°の角度に集中して埋設されている。また本類の中で、第3号埋設土器は前記した通り異質の埋設土器であり、第2号埋設土器下には小さな石が置かれていた。2類は横位の埋設土器で、属するものは第6・8号埋設土器である。2基とも真横に寝かせた状態で埋設されていたが、土器の保存状態は悪く、第6号埋設土器は胴下半欠損、第8号埋設土器は上面が完全に破壊されていた。3類は第5号埋設土器の正位埋設で、本遺跡の屋外埋設土器では前記したように異質の方法で土器が埋設され、また土器下からは砂岩の石、内部からは凝灰岩の柔らかい石が検出されるなど、他の埋設土器と比較すると大きな相違点をもつ埋設土器である。

次に斜位および横位に埋設されていた土器の口縁部の方向をみると、次の3類に分類することができる。1類はN-29°～75°-Eの方向、すなわち北東方向。2類はN-142°～174°-Eの方



向、すなわち南南西方向。3類はN-41°~118°-Wの方向、すなわち北西および南西方向である。1類に属するものは第3・6・9・13・15号埋設の5基、2類に属するものは第1・2・10~12・14・16号埋設の7基、3類に属するものは第4・7・8号埋設の3基で、第4・7号埋設とも土器の保存状態は良好であった。

また埋設に使用されていた土器の文様を見ると、大きく4類に分類することができる。1類は器面全体に縄文原体のRL・LRの縄文を施文するもので、属するものは第4・9・16号埋設である。2類は口縁部の縄文に磨消しを加えて無文帯を作り、横位の微隆起線によって縄文の文様と区画を行うもの、属するものは第1・3・5・6・13・14号埋設である。3類は微隆起線によって、「H」文・渦巻文・「C」字文が描かれたもの、すなわち「H」文を有する土器は第7・8・10・11・12・15号埋設。渦巻文を有する土器は第5号埋設。「C」字文を有する土器は第2号埋設である。4類は細い沈線によって区画された複雑な文様の中に変形渦巻文を有するもので、第3号埋設である。また土器の器形と文様を合わせて見たとき、第2号埋設の「C」字文を有する土器と、第3号埋設の細い沈線によって区画された複雑な文様を有する土器は後期初頭の称名寺式土器に比定される土器と考えられる。

以上3項目について分析した結果、それぞれがバラエティーに富んでいるため、一定の規則性を見出すことはできなく、また埋設土器のもつ性格についても一般的に、幼児埋葬施設など様々な説が唱えられているが、本遺跡で調査した埋設土器内部から決定づけることのできる資料及び遺物は何も得られなかった。しかし本遺跡の埋設土器が縄文時代の二分される住居跡群のほぼ中間地点に15基が、長径26m・短径18mの楕円形の区域内から群をなして検出されたことは、すでに何らかの目的を持って一定区域内に土器を埋設するという習慣が生じていたと考えられる。またこの区域が住居跡のほぼ中間地点、及び土壌の少ない区域であるということは、この区域が

住居跡を2分する区域か、あるいは広場的な役割をもった区域と考えられる。住居跡との関係については結びつける遺物等がなかったため不明である。

また土器を埋設した時期については、土器文様などから加曾利E IV期、及び称名寺期と考えられるが、土壌の遺物の出土状態を見たとき、加曾利E IV式土器と称名寺式土器が共伴して出土していることなどから、本埋設土器も土壌とほぼ同時期、すなわち中期末から後期初頭の間中期に位置づけることはできないだろうか。今後の類例の増加を待ち、検討課題としたい。

## 2. 歴史時代

### (1) 竪穴住居跡

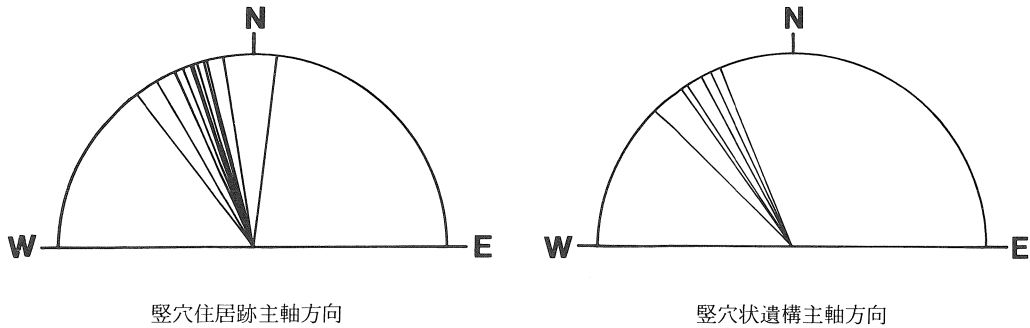
本遺跡で確認された歴史時代の遺構は、竪穴住居跡19軒、竈を付設しない竪穴状遺構6軒・井戸1基・溝2条である。井戸・溝については遺構編で簡単にまとめたため、ここでは住居跡および竪穴状遺構について記したい。

竪穴住居跡は標高33.5m前後のほぼ平坦な台地上に立地し、調査区内での住居跡の分布はほぼ3グループ、すなわち東群・中央群・西群に分けることができる。東群は第35・39号住居跡の2軒によって構成される。中央群は第10・12・20・21・26・29・31・32・34・37・38号住居跡の14軒によって構成され、分類した群の中では集中して分布がみられるが、東西両群が2～3軒によって住居跡の単位構成がなされていることを考えたとき、本群も住居跡の配置より2～4軒を単位に構成されていたと思われ、明確に分けられるのは第11・12・21号住居跡のグループ、第26・37・38号住居跡のグループ、第28・29・31・32号住居跡のグループである。西群は第1・2・9号住居跡の3軒から成り、東側3～4mには竈を付設しない竪穴状遺構が近隣している点など他群と異った群であるが、竪穴状遺構からの遺物はいずれも覆土中から土師器の土器片を微量出土したのみのため、同一時期のものか不明である。

また住居跡の平面形は方形・長方形・隅丸方形・隅丸長方形を呈し、多くの住居跡は方形および隅丸方形の平面形を呈している。規模は長軸が3～4mのものが10軒、4～5mのもの7軒、5m以上のもの2軒である。最大の規模を有する住居跡は1辺の長さが5.5mの方形を呈する第27号住居跡である。深さは、本遺跡の住居跡は全体に深いものが多く、最深の深さを有する住居跡は第12号住居跡で、73cmを測る。他の住居跡はほぼ40～50cmの深さを有している。また縄文時代の住居跡のところでも述べたように、黒色・黒褐色の層が厚く、遺構確認をローム上面で行ったことを考えると、住居跡の深さは非常に深く掘り込んで構築したと思われる。床は大部分の住居跡が15～20cmの厚さの貼り床状を呈し、構築は4本の支柱穴によってなされている。また竈はすべて北西壁のほぼ中央部に付設され、壁を50cm前後掘り込んで作られ、第37号住居跡の煙導部には縄文土器が利用されていた。

主軸方向は第21号住居跡を除くすべての住居跡がN-9°～37°-Wの方向を向き、ほぼ一定





方向を有している。

出土遺物は大部分の住居跡から土師器・須恵器を共伴して出土し、土師器の器種は甕形土器、須恵器は環形土器が多い。また第2・10・27・29・37号住居跡より鉄製品の鎌・刀子・足金具・鎬矢、第12・27・29号住居跡より紡錘車4個を出土している。第12号住居跡の覆土中より出土した土師器の高台付盤形土器の体部側面には解読不明の墨書が認められている。

以上のような調査結果から竪穴住居跡の時期は、遺物等より本遺跡の場合、歴史時代(国分期)を2期に分けることができる。古い住居跡は第1・2・28・29・32号住居跡、新しい住居跡は第9・10～12・20・21・26・27・31・34・37～39号住居跡である。

また竈を付設しない竪穴状遺構が遺跡の西側より6軒ほどまとまって検出され、平面形は隅丸長方形・隅丸方形を呈し、規模は2.5～2.9mを測る小形の竪穴状遺構である。ピットは長軸の中央部に2～3個が一行に掘られ、床面は全体に硬く踏み固められている。また第3号竪穴状遺構の床面より白色粘土が中央部を中心に広く分布していたことなどから、本竪穴状遺構は土器製作などを行う作業場か、倉庫的な役目を果たす建家ではないかと考えられる。時期を決定すべき遺物の出土はみられなかったが、竪穴住居跡とほぼ同一時期か、またはそれに近い時期のものと考えられる。



第208図 砂川遺跡遺構配置図